

公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書 (39)

東九州自動車道建設（志布志 I C～鹿屋串良 J C T間）に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

こ まき 小 牧 遺 跡 2

(鹿屋市串良町)

旧石器時代～縄文時代早期編

2021年3月

鹿児島県教育委員会
公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター









序 文

この報告書は、東九州自動車道（志布志 I C～鹿屋串良 J C T）建設に伴って、平成27年度から平成29年度にかけて実施した鹿屋市串良町に所在する小牧遺跡の発掘調査の記録です。

小牧遺跡は、旧石器時代、縄文時代早期～晩期、弥生時代中期、古墳時代、古代、中世、近世の遺構や遺物が発見され、各時代の集落や人々の活動の場であったことがわかりました。

本報告書では、旧石器時代、縄文時代早期の調査成果を報告しています。旧石器時代のナイフ形石器文化期、三稜尖頭器文化期、細石器文化期の石器や石器製作跡、縄文時代早期前葉では、竪穴建物跡、土坑、連穴土坑、集石などの遺構と共に出土した多くの土器や石器の発見は、当時、串良川流域で生活していた人々の暮らしの様相を知る貴重な資料となりました。

本報告書が、県民の皆様をはじめとする多くの方々に活用され、埋蔵文化財に対する関心と御理解をいただくとともに、文化財保護の普及・啓発や研究の一助となれば幸いです。

最後に、本県の埋蔵文化財保護のために御協力いただきました国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所、鹿児島県教育庁文化財課、鹿児島県立埋蔵文化財センター、鹿屋市教育委員会等の関係各機関並びに御指導をいただきました先生方、発掘作業、整理作業に従事された方々、遺跡の所在する鹿屋市串良町細山田集落の皆様には厚く御礼を申し上げます。

令和3年3月

公益財団法人 鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター長 中原一成

報 告 書 抄 録

ふりがな	こまきいせき 2							
書名	小牧遺跡2 (旧石器時代～縄文時代早期編)							
副書名	東九州自動車道建設 (志布志IC～鹿屋申良JCT間) に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	39							
編著者名	西園勝彦・肥後弘章・田中時太郎・大保秀樹・北園和代・堂込秀人・福永修一							
編集機関	公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号 TEL 0995-70-0574 FAX 0995-70-0576							
発行年月	西暦2021年3月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査起因
		市町村	遺跡番号					
こまきいせき 小牧遺跡2	かごしまけん 鹿児島県 かのやし 鹿屋市 くしらちょう 申良町 ほそやまだ 細山田	46203	203-350 (旧2-350)	31° 26' 45"	130° 56' 43"	分布調査 2000.2月～ 2002.4月～ 試掘調査 2012.10月～ 確認調査 2013.8.1 ～2013.10.28 2015.7.4 ～2015.7.28 本調査 ①2015.7.13 ～2016.1.27 ②2016.5.9 ～2017.1.27 ③直営2017.5.8 ～2018.2.23 民活2017.5.9 ～2018.1.26	19,200	東九州自動車道 (志布志IC～ 鹿屋申良JCT 間) 建設に伴 う記録保存調 査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
小牧遺跡2	散布地	旧石器	ブロック3ヶ所		ナイフ形石器, 三稜尖頭器, 尖頭器, 細石刃, チップ, フ レーク, 石核			
	集落跡	縄文時代 早期	竪穴建物跡38基, 土坑21基, 連穴土坑7基, 集石51基, 石器集積4基		岩本式, 前平式, 加栗山式, 小牧3A, 札ノ元Ⅶ類, 吉田式, 石坂式, 下剥峯式, 桑ノ丸式, 中原式, 押型文, 手向山式, 平椀式, 塞ノ神式, 苦浜式 石鏃, 石匙, 打製石斧, 磨製 石斧, 磨敲石, 石皿, 石錘, 軽石製品, 石製品 (垂飾)			
遺跡の概要	<p>小牧遺跡は、大隅半島中央部を東流する申良川の左岸、笠野原台地の東南端に位置する独立丘陵状の台地上に立地する。本遺跡は、旧石器時代、縄文時代早期～晩期、弥生時代中期、古墳時代、古代、中世、近世の遺構や遺物が発見され、各時代の集落や人々の活動の場として、使われてきた遺跡である。本報告書は、そのうち旧石器時代から縄文時代早期の遺物・遺構について報告する。</p> <p>注目されるのが、縄文時代早期の遺構群である。38基の竪穴建物跡と21基の土坑、7基の連穴土坑、51基の集石、4基の石器集積である。出土した遺物は、岩本式、前平式、加栗山式、小牧3A、札ノ元Ⅶ類、吉田式、石坂式、下剥峯式、桑ノ丸式、中原式、押型文、手向山式、平椀式、塞ノ神式、苦浜式の土器とともに、石鏃、石匙、打製石斧、磨製石斧、磨敲石、石皿、石錘、軽石製品、石製品 (垂飾) が出土した。遺構と遺物の対比が可能であるため、当時の地域及びその周辺の歴史を紐解く上で貴重な資料である。</p>							




遺跡位置図 (1 : 25,000)

例 言

- 1 本書は、東九州自動車道（志布志IC～鹿屋申良JCT）建設に伴う小牧遺跡の発掘調査報告書（旧石器時代～縄文時代早期編）である。
- 2 小牧遺跡は、鹿児島県鹿屋市申良町細山田に所在する。
- 3 発掘調査は、国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所から鹿児島県教育委員会（以下「県教委」という）が受託し、公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター（以下、「埋文調査センター」という）へ調査委託し、埋文調査センターが平成27～29年度の3年間にわたり実施した。
- 4 平成27～29年度の発掘調査を行うに当たっては、埋文調査センター担当者の管理のもと、発掘調査支援業務ならびに基礎整理業務を新和技術コンサルタント株式会社へ委託した。また平成29年度は、埋文調査センターと支援業務委託の2班体制で調査を行った。
- 5 整理・報告書作成事業（旧石器時代～縄文時代早期編）は、平成31年度～令和2年に埋文調査センターが第2整理作業所で実施した。
- 6 掲載遺物番号は、土器・石器別の通し番号であり、本文・挿図・表及び図版の番号は一致する。掲載遺構番号は、遺構の種類ごとに番号を付し、本文・挿図・表及び図版の遺構番号は一致する。
- 7 遺物注記等で用いた遺跡記号は、「コマキ（カタカナ表記）」である。
- 8 本書で用いたレベル数値は、海拔絶対高度である。
- 9 本書で使用した方位は、全て磁北であり測量座標は国土座標系第Ⅱ系を基準としている。
- 10 発掘調査における実測図作成及び写真撮影は、主として調査担当者が行った。また空中写真の撮影は、ふじた航空写真に委託した。
- 11 本編に係る遺構実測図・出土遺物の実測、トレース図の作成は、埋文調査センター職員の指揮・監督のもと行い、石器実測の一部を株式会社九州文化財研究所及び国際文化財株式会社に委託した。
- 12 出土遺物の写真撮影は、埋文センターの写場にて埋文調査センターの福永修一、西園勝彦が行った。
- 13 本報告に係る自然科学分析を、パリノ・サーヴェイ株式会社へ委託した。また、鹿児島県立埋蔵文化財センターで顔料分析・圧痕分析を行い、そのうち圧痕分析の電子顕微写真は鹿児島大学研究推進機構研究支援センターに依頼した。
- 14 執筆担当は、以下のとおりである。
第Ⅰ章・・・・・・・・・・・・・・・・福永
第Ⅱ章・・・・・・・・・・・・・・・・北園

- 第Ⅲ章・・・・・・・・・・・・・・・・福永
- 第Ⅳ章第1節・・・・・・・・・・堂込・西園
- 第Ⅳ章第2節・・・・・・・・・・大保・北園
- 第Ⅴ章・・・・・・・・・・パリノ・サーヴェイ 株式会社
鹿児島県立埋蔵文化財センター
埋文調査センター 真邊 彩
- 第Ⅵ章・・・・・・・・・・堂込・西園・大保・北園
写真図版・・・・・・・・・・福永
- 15 使用した土色は、『新版 標準土色帖』（1970 農林水産省技術会議事務局監修）に基づく。
- 16 遺構種別ごとに略記号を付して調査を行った。遺構の略記号を以下に示す。
SH：竪穴建物跡 SK：土坑 REN：連穴土坑
SS：集石 SU：石器集積
- 17 遺構の縮尺は、次を基本とした。
竪穴建物跡：1/40
連穴土坑：1/20 土坑：1/20
集石：1/20 石器集積：1/20
- 18 遺物の縮尺は、次のとおりである。
土器1/3, 石器1/1, 1/2, 1/3, 1/4
遺物についてはこの限りではなく、各図中にスケールを示してある。
- 19 本報告書に係る出土遺物及び実測図・写真等の記録は、埋文センターで保管し、展示・活用を図る予定である。

凡例

- 石の稜線… ————
- すり面… —————
- タール付着部分… 

※赤色顔料付着部分は赤の網掛けで示す

本文目次

表紙	
巻頭図版（カラー）	
序文	
報告書抄録	
遺跡位置図	
例言	
目次	
第Ⅰ章 発掘調査の経過	1
第1節 調査に至るまでの経緯	1
第2節 整理・報告書作成	1
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	5
第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	5
第3節 志布志 I C～鹿屋串良 J C T間の遺跡	9

第Ⅲ章 調査の方法と層序	15
第1節 調査の方法	15
第2節 層序	16
第Ⅳ章 調査の成果	21
第1節 旧石器時代の調査	21
第2節 縄文時代早期の調査	43
第Ⅴ章 自然科学分析	241
第1節 小牧遺跡の出土資料の自然科学分析	241
第2節 赤色顔料分析	243
第3節 土器圧痕分析	244
第Ⅵ章 総括	245
第1節 旧石器時代	245
第2節 縄文時代早期	246

挿図目次

第1図 グリッド配置図及び調査範囲図及び確認調査 トレンチ配置図	3
第2図 年度別調査範囲図	4
第3図 周辺遺跡位置図	8
第4図 東九州自動車道関連（志布志 I C～鹿屋串良 J C T間）遺跡位置図	14
第5図 基本層序	16
第6図 土層断面図（1）	17
第7図 土層断面図（2）	18
第8図 土層断面図（3）	19
第9図 土層断面図（4）	20
第10図 旧石器出土状況図（1）	22
第11図 旧石器出土状況図（2）	23
第12図 第Ⅰ文化層の石器（1）	25
第13図 第Ⅰ文化層の石器（2）	26
第14図 第Ⅰ文化層の石器（3）	27
第15図 第Ⅰ文化層の石器（4）	28
第16図 石器の摩滅痕跡等（1）	29
第17図 石器の摩滅痕跡等（2）	30
第18図 摩滅痕跡等写真（1）	31
第19図 摩滅痕跡等写真（2）	32
第20図 摩滅痕跡等写真（3）	33
第21図 第Ⅱ文化層の石器（1）	34
第22図 第Ⅱ文化層の石器（2）	35
第23図 第Ⅱ文化層の石器（3）	36
第24図 第Ⅲ文化層の石器（1）	39

第25図 第Ⅲ文化層の石器（2）	40
第26図 旧石器時代その他の石器（1）	41
第27図 旧石器時代その他の石器（2）	42
第28図 VII層遺構配置図	45
第29図 VII層遺物出土状況図（1）	46
第30図 VII層遺物出土状況図（2）	47
第31図 VII層遺物出土状況図（3）	48
第32図 VII層遺物出土状況図（4）	49
第33図 VII層遺物出土状況図（5）	50
第34図 VII層遺物出土状況図（6）	51
第35図 VII層遺物出土状況図（7）	52
第36図 VII層遺物出土状況図（8）	53
第37図 竪穴建物跡1号・竪穴建物跡2号	55
第38図 竪穴建物跡3号・出土遺物	56
第39図 竪穴建物跡4号・竪穴建物跡5号・出土遺物	57
第40図 竪穴建物跡6号・出土遺物	58
第41図 竪穴建物跡7号・出土遺物	59
第42図 竪穴建物跡8号・出土遺物	60
第43図 竪穴建物跡9号・出土遺物	61
第44図 竪穴建物跡10号・出土遺物	62
第45図 竪穴建物跡11号	63
第46図 竪穴建物跡12号	64
第47図 竪穴建物跡12号出土遺物	65
第48図 竪穴建物跡13号・出土遺物	66
第49図 竪穴建物跡14号	67
第50図 竪穴建物跡15号・出土遺物	68

第51図	竪穴建物跡16号・出土遺物	69	第99図	集石18号・出土遺物	124
第52図	竪穴建物跡17号・出土遺物	70	第100図	集石19号	125
第53図	竪穴建物跡18号・出土遺物	71	第101図	集石20号・出土遺物	126
第54図	竪穴建物跡19号・出土遺物・竪穴建物跡20号	73	第102図	集石21号	127
第55図	竪穴建物跡21号・22号	74	第103図	集石22号・出土遺物・集石23号・出土遺物	128
第56図	竪穴建物跡21号・22号出土遺物	75	第104図	集石24号・集石25号・出土遺物	129
第57図	竪穴建物跡23号・24号・出土遺物	76	第105図	集石26号	130
第58図	竪穴建物跡25号・出土遺物	77	第106図	集石27号・出土遺物	131
第59図	竪穴建物跡26号・出土遺物	78	第107図	集石28号・出土遺物・集石29号・集石30号	132
第60図	竪穴建物跡27号・28号	80	第108図	集石31号・集石32号	133
第61図	竪穴建物跡27号・28号出土遺物	81	第109図	石器集積1号・出土遺物	136
第62図	竪穴建物跡29号・出土遺物	82	第110図	石器集積2号・出土遺物	137
第63図	竪穴建物跡30号・出土遺物	83	第111図	I・II類土器分布図	138
第64図	竪穴建物跡31号・出土遺物	84	第112図	I類土器	139
第65図	竪穴建物跡32号・竪穴建物跡33号	86	第113図	II類土器	140
第66図	竪穴建物跡34号・竪穴建物跡35号	87	第114図	III・IV類土器分布図	141
第67図	竪穴建物跡36号・出土遺物	88	第115図	V類土器分布図	141
第68図	竪穴建物跡37号	89	第116図	IIIa類土器	142
第69図	竪穴建物跡38号・出土遺物	90	第117図	IIIb類土器(1)	143
第70図	連穴土坑1号	94	第118図	IIIb類土器(2)	144
第71図	連穴土坑2号	95	第119図	IIIc類土器(1)	145
第72図	連穴土坑3号・連穴土坑4号	96	第120図	IIIc類土器(2)	146
第73図	連穴土坑5号・連穴土坑6号	97	第121図	IIId類土器(1)	147
第74図	連穴土坑7号	98	第122図	IIId類土器(2)	148
第75図	土坑1号	100	第123図	IV類土器(1)	149
第76図	土坑2号～4号	101	第124図	IV類土器(2)	150
第77図	土坑5号・土坑6号・出土遺物	102	第125図	V類土器(1)	152
第78図	土坑7号・土坑8号	103	第126図	V類土器(2)	153
第79図	土坑9号・土坑10号	104	第127図	V類土器(3)	154
第80図	土坑11号・土坑12号	105	第128図	VI類土器分布図	156
第81図	土坑13号・土坑14号	106	第129図	VIa類土器(1)	157
第82図	土坑15号～17号	107	第130図	VIa類土器(2)	158
第83図	土坑18号・土坑19号	108	第131図	VIa類土器(3)	159
第84図	土坑20号・土坑21号	109	第132図	VIb類土器(1)	160
第85図	VII層集石分布図	111	第133図	VIb類土器(2)	161
第86図	集石1号・出土遺物	112	第134図	VIb類土器(3)	162
第87図	集石2号・集石3号	113	第135図	VIc類土器	162
第88図	集石4号・出土遺物	114	第136図	VId類土器	163
第89図	集石5号・出土遺物	115	第137図	VIe類土器	163
第90図	集石6号・集石7号	116	第138図	VII・VIII類土器分布図	164
第91図	集石8号・集石9号	117	第139図	VIIa類土器	165
第92図	集石9号出土遺物	118	第140図	VIIb類土器	166
第93図	集石10号・出土遺物	118	第141図	VIII類土器	166
第94図	集石11号	119	第142図	IX類土器分布図	167
第95図	集石12号・出土遺物	120	第143図	IXa類・IXb類土器	168
第96図	集石13号・出土遺物	121	第144図	VII層石器出土状況図	174
第97図	集石14号・集石15号	122	第145図	VII層出土石器(1)	175
第98図	集石16号・集石17号	123	第146図	VII層出土石器(2)	176

第147図	Ⅶ層出土石器 (3)……………	177	第177図	集石46号出土遺物 (2)……………	207
第148図	Ⅶ層出土石器 (4)……………	178	第178図	集石47号・集石48号……………	208
第149図	Ⅶ層出土石器 (5)……………	179	第179図	集石49号・出土遺物 (1)……………	209
第150図	Ⅶ層出土石器 (6)……………	180	第180図	集石49号出土遺物 (2)……………	210
第151図	Ⅶ層出土石器 (7)……………	181	第181図	集石50号・出土遺物……………	211
第152図	Ⅶ層出土石器 (8)……………	182	第182図	集石51号……………	212
第153図	Ⅶ層出土石器 (9)……………	183	第183図	石器集積3号・出土遺物……………	214
第154図	Ⅶ層出土石器 (10)……………	184	第184図	石器集積4号……………	215
第155図	Ⅶ層出土石器 (11)……………	185	第185図	石器集積4号出土遺物……………	216
第156図	Ⅶ層出土石器 (12)……………	186	第186図	X～Ⅷ類土器分布図……………	217
第157図	Ⅵ層遺構配置図及び土器出土状況図……………	189	第187図	X～Ⅷ類土器……………	218
第158図	Ⅵ層集石分布図……………	190	第188図	Ⅷ類土器……………	219
第159図	集石33号……………	191	第189図	Ⅷ類土器……………	220
第160図	集石34号・出土遺物……………	192	第190図	Ⅵ層石器出土状況図 (1)……………	221
第161図	集石35号・出土遺物……………	193	第191図	Ⅵ層石器出土状況図 (2)……………	222
第162図	集石36号・出土遺物 (1)……………	194	第192図	Ⅵ層石器出土状況図……………	224
第163図	集石36号出土遺物 (2)……………	195	第193図	Ⅵ層出土石器 (1)……………	225
第164図	集石37号……………	195	第194図	Ⅵ層出土石器 (2)……………	226
第165図	集石38号・出土遺物……………	196	第195図	Ⅵ層出土石器 (3)……………	227
第166図	集石39号……………	197	第196図	Ⅵ層出土石器 (4)……………	228
第167図	集石39号出土遺物……………	198	第197図	Ⅵ層出土石器 (5)……………	229
第168図	集石40号……………	198	第198図	Ⅵ層出土石器 (6)……………	230
第169図	集石41号・出土遺物……………	199	第199図	Ⅵ層出土石器 (7)……………	231
第170図	集石42号・出土遺物 (1)……………	200	第200図	Ⅵ層出土石器 (8)……………	232
第171図	集石42号出土遺物 (2)……………	201	第201図	Ⅵ層出土石器 (9)……………	233
第172図	集石43号・出土遺物・集石44号・出土遺物……………	202	第202図	Ⅵ層出土石器 (10)……………	234
第173図	集石45号……………	203	第203図	Ⅵ層出土石器 (11)……………	235
第174図	集石45号出土遺物……………	204	第204図	Ⅵ層出土石器 (12)……………	236
第175図	集石46号……………	205	第205図	Ⅵ層出土石器 (13)……………	237
第176図	集石46号出土遺物 (1)……………	206			

表 目 次

第1表	周辺遺跡一覧表……………	7	第15表	集石 (Ⅶ層) 一覧表 (1)……………	134
第2表	志布志 I C～鹿屋申良 J C T間の遺跡……………	9	第16表	集石 (Ⅶ層) 一覧表 (2)……………	135
第3表	石器観察表 (第Ⅰ文化層出土)……………	34	第17表	土器観察表 (集石Ⅶ層出土)……………	135
第4表	石器観察表 (第Ⅱ文化層出土)……………	37	第18表	石器観察表 (集石Ⅶ層出土)……………	135
第5表	石器観察表 (第Ⅲ文化層出土)……………	38	第19表	石器観察表 (石器集積Ⅶ層出土)……………	137
第6表	石器観察表 (旧石器時代その他の石器)……………	42	第20表	土器観察表 (Ⅰ類)……………	139
第7表	竪穴建物跡一覧表 (1)……………	89	第21表	土器観察表 (Ⅱ類)……………	142
第8表	竪穴建物跡一覧表 (2)……………	91	第22表	土器観察表 (Ⅲa類)……………	148
第9表	土器観察表 (竪穴建物跡出土)……………	91	第23表	土器観察表 (Ⅲb類)……………	150
第10表	石器観察表 (竪穴建物跡出土)……………	92	第24表	土器観察表 (Ⅲc～Ⅳ類)……………	151
第11表	連穴土坑一覧表……………	98	第25表	土器観察表 (Ⅴ類)……………	155
第12表	土器観察表 (連穴土坑出土)……………	98	第26表	土器観察表 (Ⅵa～Ⅵb類)……………	169
第13表	土坑一覧表……………	110	第27表	土器観察表 (Ⅵb～Ⅵd類)……………	170
第14表	石器観察表 (土坑出土)……………	110	第28表	土器観察表 (Ⅵe～Ⅵb類)……………	171

第29表	小牧遺跡石材分類表	172
第30表	石器観察表 (Ⅶ層出土) (1)	187
第31表	石器観察表 (Ⅶ層出土) (2)	188
第32表	石器組成表 (Ⅶ層)	188
第33表	土器観察表 (集石Ⅶ層出土)	210
第34表	集石 (Ⅶ層) 一覧表	212
第35表	石器観察表 (集石Ⅶ層出土)	213

第36表	石器観察表 (石器集積Ⅶ層出土)	216
第37表	土器観察表 (Ⅹ～Ⅺ類)	220
第38表	石器観察表 (Ⅶ層出土) (1)	238
第39表	石器観察表 (Ⅶ層出土) (2)	239
第40表	石器組成表 (Ⅶ層)	239
第41表	遺構番号新旧対応表	240

図 版 目 次

巻頭図版 1		
巻頭図版 2		
巻頭図版 3		
巻頭図版 4		
写真 1	第Ⅲ文化層の非掲載遺物	40
写真 2	No.29土器外面	76
写真 3	No.S194出土状況	183
写真 4	集石46号北側から	205
写真 5	No.S391石器正面	237
写真 6	No.S391石器赤色顔料付着部分拡大	237
写真 7	No.93土器 表面	243
写真 8	No.93土器 裏面	243
写真 9	No.100土器 裏面	243
写真10	No.S286石器正面	244
写真11	No.S286石器下面～右側面	244
写真12	No.S396石器 裏面	244
写真13	No.S396石器赤色顔料付着部分拡大	244
写真14	圧痕レプリカSEM画像	244
写真15	集石46号東側より	251
図版 1	小牧遺跡遠景 断面ほか	253
図版 2	Ⅺ層～Ⅻ層遺物出土状況ほか	254
図版 3	Ⅸb～Ⅹ層遺物出土状況ほか	255
図版 4	Ⅸ層遺物出土状況ほか	256
図版 5	竪穴建物跡 1号・3号ほか	257
図版 6	竪穴建物跡 2号・4号ほか	258
図版 7	竪穴建物跡 5号・8号ほか	259
図版 8	竪穴建物跡 6号・7号ほか	260
図版 9	竪穴建物跡 7号・9号ほか	261
図版10	竪穴建物跡10号ほか	262
図版11	竪穴建物跡12号ほか	263
図版12	竪穴建物跡11号・13号ほか	264
図版13	竪穴建物跡14号・15号, 16号ほか	265
図版14	竪穴建物跡17号・18号ほか	266
図版15	竪穴建物跡19号・20号ほか	267
図版16	竪穴建物跡21号・22号ほか	268
図版17	竪穴建物跡25号・26号ほか	269
図版18	竪穴建物跡23号・24号・27号・28号ほか	270
図版19	竪穴建物跡30号・31号ほか	271
図版20	竪穴建物跡29号・32号・34号ほか	272
図版21	竪穴建物跡33号・34号・37号ほか	273
図版22	竪穴建物跡35号・36号ほか	274
図版23	竪穴建物跡33号～38号ほか	275
図版24	連穴土坑 1号～4号ほか	276
図版25	連穴土坑 5号～7号ほか	277
図版26	土坑 2号～6号ほか	278
図版27	土坑 7号～9号ほか	279
図版28	土坑12号～16号ほか	280

図版29	土坑17号～21号ほか	281
図版30	集石 1号・2号・4号～8号・10号ほか	282
図版31	集石11号～18号ほか	283
図版32	集石19号～26号ほか	284
図版33	集石27号～32号, 石器集積 1号・2号ほか	285
図版34	集石33号～39号ほか	286
図版35	集石40号～47号ほか	287
図版36	集石48号～51号, 石器集積 3号・4号ほか	288
図版37	旧石器時代第Ⅰ文化層出土石器 (1)	289
図版38	旧石器時代第Ⅰ文化層出土石器 (2)	290
図版39	旧石器時代第Ⅰ文化層出土石器 (3) 及び剥片集中 1 出土状況	291
図版40	旧石器時代第Ⅱ文化層出土石器 (1)	292
図版41	旧石器時代第Ⅱ文化層出土石器 (2)	293
図版42	旧石器時代第Ⅲ文化層出土石器 及びブロック外出土石器	294
図版43	Ⅶ層遺構内出土遺物 (1)	295
図版44	Ⅶ層遺構内出土遺物 (2)	296
図版45	Ⅶ層遺構内出土遺物 (3)	297
図版46	Ⅶ層遺構内出土遺物 (4)	298
図版47	Ⅶ層遺構内出土遺物 (5) Ⅶ層遺構内出土遺物 (1)	299
図版48	Ⅶ層遺構内出土遺物 (2)	300
図版49	Ⅰ類・Ⅱ類土器	301
図版50	Ⅲa類・Ⅲb類土器	302
図版51	Ⅲc類土器	303
図版52	Ⅲd類土器	304
図版53	Ⅳ類土器	305
図版54	Ⅴ類土器	306
図版55	Ⅵa類土器 (1)	307
図版56	Ⅵa類土器 (2)	308
図版57	Ⅵb類土器	309
図版58	Ⅵb類～Ⅵe類土器	310
図版59	Ⅶa類・Ⅶb類土器	311
図版60	Ⅶ類～Ⅸb類土器	312
図版61	Ⅹ類～ⅩⅣ類土器	313
図版62	Ⅶ層出土石器 (1)	314
図版63	Ⅶ層出土石器 (2)	315
図版64	Ⅶ層出土石器 (3)	316
図版65	Ⅶ層出土石器 (4)	317
図版66	Ⅶ層出土石器 (5)	318
図版67	Ⅶ層出土石器 (1)	319
図版68	Ⅶ層出土石器 (2)	320
図版69	Ⅶ層出土石器 (3)	321
図版70	Ⅶ層出土石器 (4)	322
図版71	Ⅶ層出土石器 (5)	323
図版72	赤色顔料付着遺物	324

第 I 章 発掘調査の経過

第 1 節 調査に至るまでの経緯

鹿児島県教育委員会は、文化財の保護・活用を図るため、各開発関係機関との間で、事業区内における文化財の有無及びその取り扱いについて協議し、諸開発との調整を図ってきた。この事前協議制に基づき、日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所は、東九州自動車道の建設を計画し、志布志 I C～末吉財部 I C 区間の事業地内における埋蔵文化財の有無について、鹿児島県教育庁文化財課（以下、文化財課）に照会した。

この計画に伴い文化財課は、平成11年1月に鹿屋申良 J C T～末吉財部 I C 間を、平成12年2月に志布志 I C～鹿屋申良 J C T 間の埋蔵文化財の分布調査を実施し、50ヶ所の遺跡が存在することが明らかとなった。

この結果をもとに、事業区間内の埋蔵文化財の取扱いについて、日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所、鹿児島県土木部道路建設課高速道対策室、文化財課、県立埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）の4者で協議を重ね対応を検討してきた。

その後、日本道路公団民営化の政府方針が提起され、事業の見直しと建設コストの削減を検討することとなった。このような社会情勢の変化に伴い、遺跡の緻密な把握が要求されることとなり、埋蔵文化財の詳細分布調査、試掘調査、確認調査が実施されることとなった。

平成14年4月には、志布志 I C～鹿屋申良 J C T 間の遺跡について再度分布調査を実施した結果、遺跡の調査対象範囲が678,700㎡となった。

その後、日本道路公団民営化の閣議決定と新直轄方式に基づく道路建設が確定、平成15年11月に暫定2車線施行に伴う議事確認書締結、同年12月に大隅 I C（平成21年4月28日「曾於弥五郎 I C」へ名称変更）から末吉財部 I C 間の発掘調査協定書締結、平成16年3月に国土交通省九州地方整備局長、日本道路公団九州支社長、鹿児島県知事の間で新直轄方式施工に伴う確認書が締結された。工事は、日本道路公団が国土交通省から受託し、発掘調査は日本道路公団が鹿児島県に委託することとなり、これまでの確認書、協定書はそのまま継続されることとなった。また、日本道路公団からの委託は曾於弥五郎 I C までで終了し、曾於弥五郎 I C からの先線部分は国土交通省からの受託事業となった。

その後、平成23年度からは試掘・確認調査は文化庁の国庫補助事業を導入し、県内遺跡事前調査事業として埋文センターが実施することとなった。

県内遺跡事前調査事業の確認調査は、平成23年度は荒園遺跡の他2遺跡、平成24年度は町田堀遺跡の他3遺跡、平成25年度は小牧遺跡他2遺跡、平成27年度は小牧遺跡

を実施した。

東九州自動車道建設等の事業促進に伴い、埋蔵文化財調査の事業量の増大が見込まれ、従前の調査体制では対応が困難な状況となりつつあったため、平成25年4月に、公益財団法人鹿児島県文化振興財団に埋蔵文化財調査センター（以下、「調査センター」という。）を設立し、国関係の事業に係る発掘調査等をより円滑かつ効率的に実施することにした。

小牧遺跡の調査経過は、以下のとおりである。

発掘調査

- 1 分布調査：平成12年2月、平成14年4月
- 2 試掘調査：平成24年10月
- 3 確認調査：平成25年10月、平成27年7月
- 4 本調査：平成27年6月～平成30年2月

事前調査（試掘調査・確認調査）、本調査の詳細及びその調査体制については、令和元年度に刊行した「小牧遺跡1 古代～近世編」を参照していただきたい。

第 2 節 整理・報告書作成

報告書刊行に伴う整理・報告書作成作業は、平成30年度から旧福山中学校跡地に新設した第2整理作業所で実施した。

平成30年度は、古代～近世編の整理・報告書作成作業と縄文時代後期～古墳時代の基礎整理作業を民間支援業務の整理・報告書作成作業として（株）九州文化財研究所に委託して行い、令和元年度に、「小牧遺跡1 古代～近世編」の刊行を行った。作業体制や作業内容は、「小牧遺跡1」を参照していただきたい。

本報告書の刊行に係る整理・報告書作成作業については、令和元年度から「小牧遺跡1」の報告書刊行と平行して実施してきた。本報告書では、平成30年度からの作業内容・作業体制について記述する。

本年度は、旧石器時代～縄文時代早期編を「小牧遺跡2」として刊行することとなった。

1 作業内容

遺構については、発掘調査時に作成した実測図と台帳との照合や遺構・時代ごとに実測図の仕分けを行った。その後遺構配置図の作成、各遺構図のトレース・レイアウトを行い、報告書掲載用の写真を選別した。併せて遺構計測表と遺構内出土遺物の観察表を作成した。

土器については遺物台帳との照合・接合・実測・トレース・拓本等の各作業のあとに挿図作成、報告書掲載用の

写真撮影及び図版作成を行った。併せて、分類ごとの土器観察表を作成した。

石器については仕分け・分類を行った後に実測・トレース・観察表作成を行い、報告書に掲載する挿図を作成した。また、報告書掲載用の写真撮影及び図版作成を行った。原稿執筆については、遺構・遺物の整理作業と併行して随時行った。なお、石器実測の一部を（株）九州文化財研究所（平成30年度、令和2年度）と国際文化財（株）（令和元年度）に委託した。

2 作業体制

令和元年度以降の体制は、以下のとおりである。

令和元年度

事業主体	国土交通省九州地方整備局 大隅河川国道事務所
作成主体	鹿児島県教育委員会
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課
作成総括	公益財団法人鹿児島県文化振興財団 埋蔵文化財調査センター センター長
作成企画	〃総務課長兼係長 〃調査課長 〃調査第二係長
作成担当	〃文化財専門員 〃 〃
事務担当	主査

令和2年度

事業主体	国土交通省九州地方整備局 大隅河川国道事務所
作成主体	鹿児島県教育委員会
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課
作成総括	公益財団法人鹿児島県文化振興財団 埋蔵文化財調査センター センター長
作成企画	〃総務課長兼係長 〃調査課長 〃調査第一係長
作成担当	〃文化財専門員 〃 文化財調査員
事務担当	主査

報告書作成指導委員会

11月5日

報告書作成検討委員会

調査課長ほか7名

11月19日

センター長ほか5名

3 整理作業の経過

整理作業の経過は、以下の通りである。

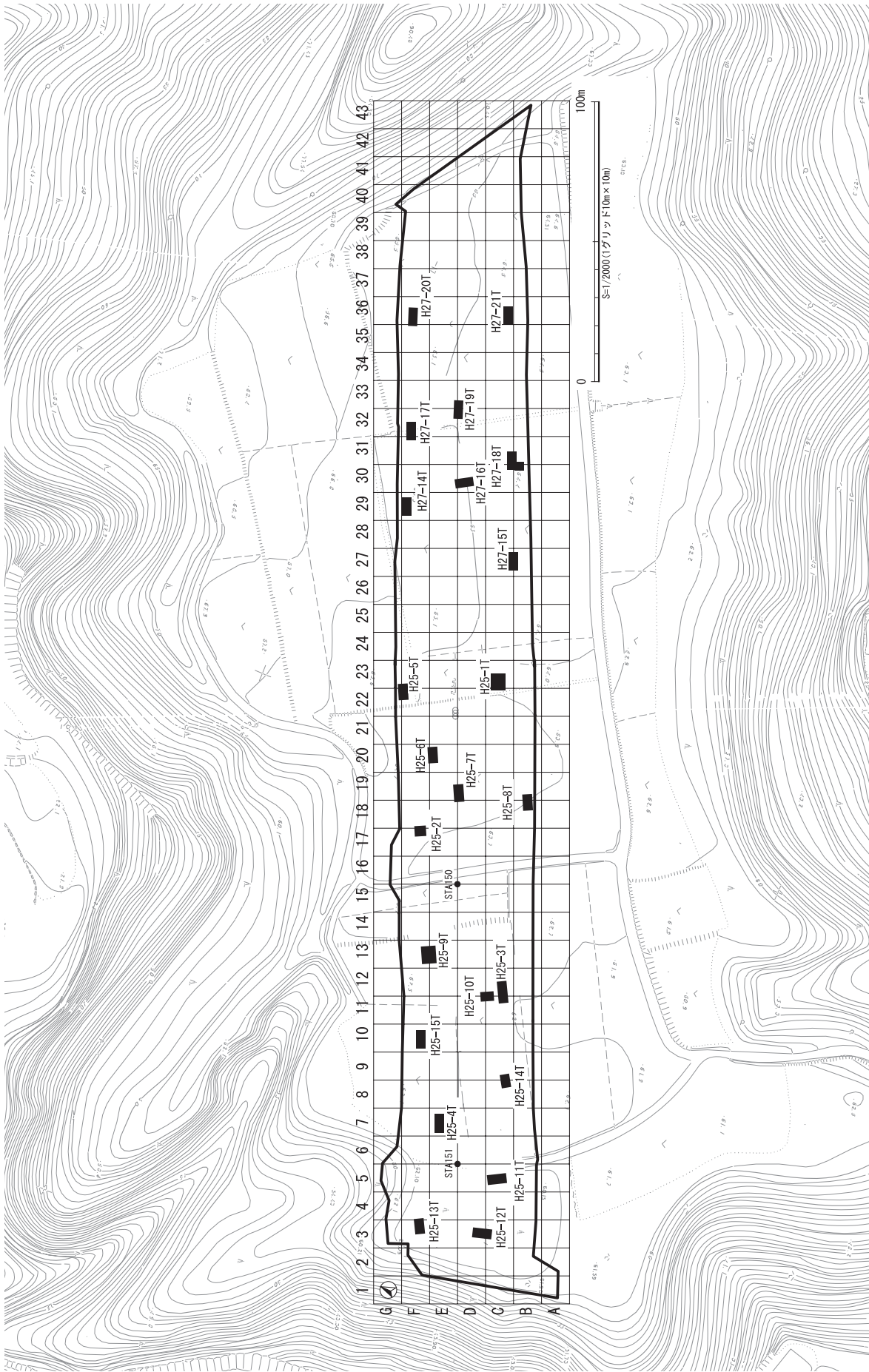
令和元年度

「小牧遺跡1 古代～近世以降編」の刊行と旧石器・縄文時代早期の報告書作成業務及び縄文時代後期の整理作業を行ったため、本報告書の業務経過のみを掲載する。

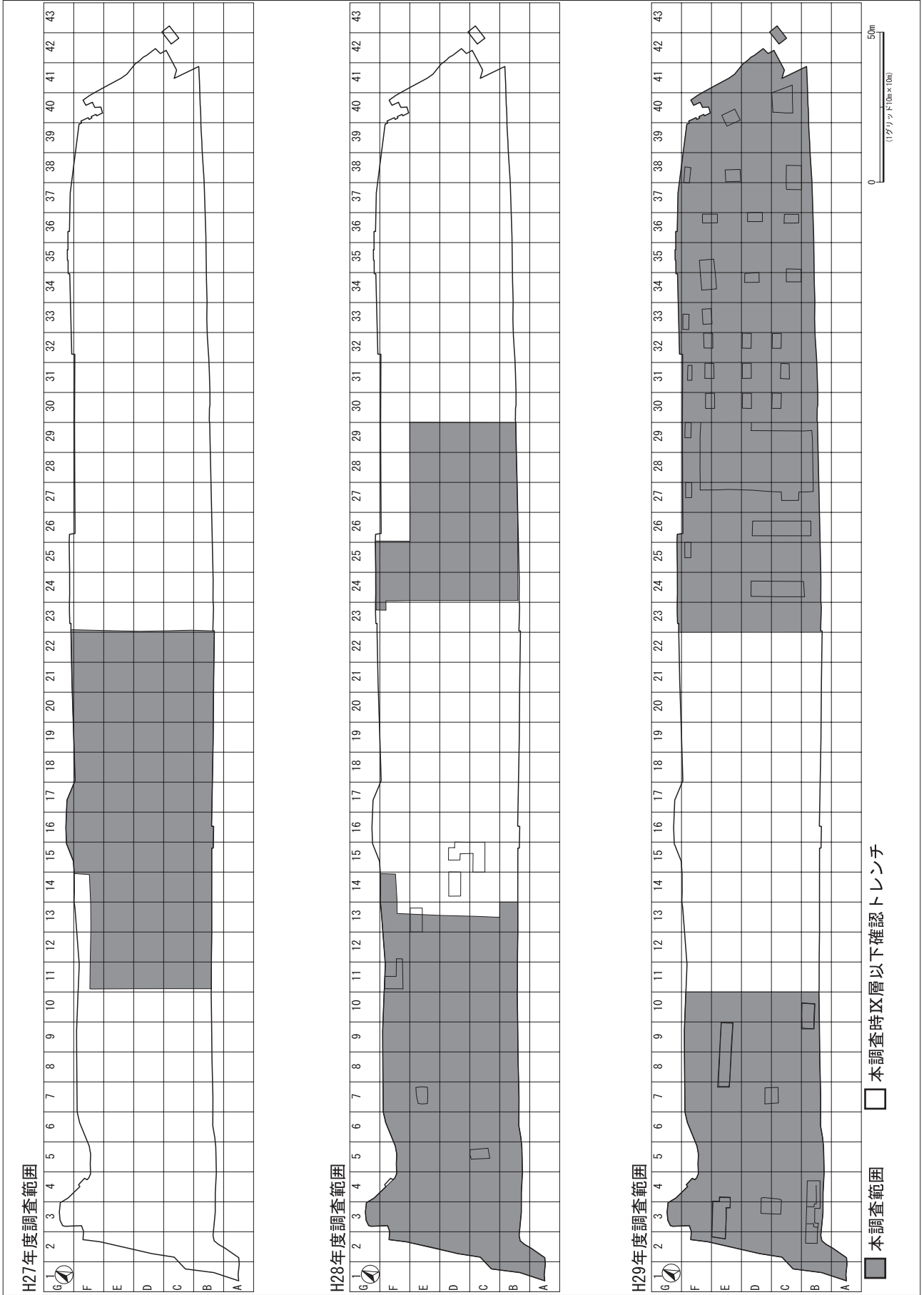
4月	整理作業準備，遺物分類，土器接合
5月	遺物分類，土器接合，原稿執筆
6月	遺物分類，土器接合，原稿執筆
7月	遺物分類，土器接合，原稿執筆
8月	土器実測，遺物トレース，原稿執筆
9月	土器実測，遺物トレース，原稿執筆
10月	土器実測，遺物トレース，原稿執筆
11月	土器実測，遺物・遺構トレース，原稿執筆
12月	土器実測，遺物・遺構トレース，原稿執筆
1月	レイアウト，原稿執筆
2月	レイアウト，原稿執筆
3月	原稿執筆

令和2年度

4月	整理作業準備，遺構トレース
5月	遺構トレース，石器実測，写真選別
6月	遺構レイアウト，石器実測，写真選別，編集
7月	土器レイアウト，石器トレース，原稿執筆
8月	各レイアウト，観察表作成，原稿執筆
9月	遺物写真撮影，レイアウト確認，原稿執筆
10月	遺物写真撮影，レイアウト確認，原稿執筆
11月	レイアウト確認，原稿執筆
12月	印刷・製本入札
1月	校正
2月	校正
3月	納品



第1図 グリッド配置図及び調査範囲図及び確認調査トレンチ配置図



第2図 年度別調査範囲図

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

鹿屋市串良町は、大隅半島東南部のほぼ中央に位置し、東には東串良町、南には肝属川を隔てて肝付町、西には鹿屋市東原町、旭原町、笠之原町、北東は立小野台地を隔てて曾於郡大崎町と接している。平成18年1月1日に旧鹿屋市と合併するまでは、広大な笠野原台地を旧鹿屋市と二分していた。

串良町が位置する大隅半島は、九州山地の延長をなす東西の山地、その間の丘陵、台地及び低地等の低地帯から構成されている。

東側の山地は、志布志湾北部から宮崎県に突出した形で北から南へ延びている鰐塚山地である。主峰は宮崎県内の鰐塚山(1,119m)で、中生代層の地質からなっている。

西側の山地は北部の霧島火山の分脈から湾奥に形成された始良カルデラのカルデラ壁を含み、南部の高隈連山へと連なっている。高隈山地は、大笠柄岳(1,236m)を主峰に横岳・御岳等1,000m級の山から成る山地で、山容は急峻で深い森に覆われている。

東西の山地は、ともに九州山地の延長をなし、それらの間は低地帯となり丘陵や台地及び低地となっている。これらの山地間を埋めるような形で、洪積世の火山活動である南西部の鹿児島湾口に形成された阿多カルデラの火砕流や、鹿児島湾奥に形成された始良カルデラの入戸火砕流が堆積している。また、これらの火砕流をはじめとする噴出物が、堆積後から現在に至るまで大小多くの河川で開析され、断片的な台地を残すだけの丘陵状地形や、ほとんど浸食されず残った広大な台地となっている。これらの地形の地質は大部分がシラス、ボラ等の火山灰土壌となっている。

一方、低地は、高隈山地や荒磯岳等を水源とする本城川や肝属川、菱田川などの大小の河川が走り、鹿児島湾、志布志湾等に注いでいる。この河川は、上・中流域で谷底平野を形成し、また下流域では、河岸段丘の形成も認められる。

この大隅半島に位置する串良町の地形は、東西に6.5km、南北に13kmの狭長で北部の山地中央部の台地、南部の低地に大別されるが、大部分において山地は少なく、笠野原台地と呼ばれる平坦なシラス台地から成っている。台地は「クロボク」と呼ばれる黒色火山灰土壌に覆われており、広大な畑地帯が形成されている。南部及び東部は肝属川とその支流の串良川が流れ、それによる沖積地が広がり、約560haの水田地帯を形成している(平成16年度旧町統計)。また、北部には低い丘陵状地形の山地が存在するが、町域に占める割合は少ない。

小牧遺跡は、串良町の北東部、串良川東岸の新調堀台地の南端に位置している。周囲を串良川やその支流の浸食を受けることで地形面が開析され、標高約65mの独立丘陵状の地形となっている。

周囲の環境としては、調査開始まで台地全面に、サツマイモ畑が広がっていた。また、台地南側の沖積平野には、稲田が広がっている。遺跡が所在する下中集落は、串良川兩岸の台地の裾野に家屋を建て、稲作と畑作などの農業並びに畜産業が盛んである。

第2節 歴史的環境

小牧遺跡に関連、もしくは特筆すべき成果を時代別に紹介する。

(1) 旧石器時代

小牧遺跡では旧石器時代の剥片が出土している。串良川を挟んだ対岸に位置する川久保遺跡では三稜尖頭器・細石刃等の旧石器時代の遺物や集石が確認されている。

(2) 縄文時代

縄文時代草創期の遺跡としては、天神段遺跡・川久保遺跡で無文土器や貼り付け等が施された土器片の出土が確認されている。

早期の遺跡としては、本遺跡と同じ台地上に位置する益畑遺跡・細山田段遺跡他、周辺には川久保・十三塚・石縊・牧山・田原迫之上遺跡等が挙げられる。益畑遺跡では堅穴住居跡・連穴土坑・集石が確認され、早期の各形式の土器が幅広く出土している。磨製石鎌、石匙・磨敲石・石皿などの石器も多数出土し、本格的な縄文時代早期の集落跡の発見となった。堅穴住居埋土に桜島起源の軽石(P13)がレンズ状に堆積し、その下位から前平式土器が出土している。

細山田段遺跡では、下剥峯・桑ノ丸・押型文土器を中心とした早期後葉の土器の出土が主体であり、塞ノ神式の壺型土器と、横位の山形押型文土器の二カ所の埋設土器が検出されていることが注目される。集石が18基検出されており、殆どが掘り込みをもたない散礫状の形態であったことが報告されている。

小牧遺跡では、早期全期に渡り多様な土器が出土しているが、各型式ごとの個体数は少ない。石器の器種構成は、磨敲石・石皿が多く、石鎌などの剥片石器が一定量みられ、石斧に伐採斧がみられないことから、狩猟しながらのキャンプ地や、堅果類の採集・加工場所であった可能性が想定されている。

前期・中期の遺跡としては、細山田段遺跡で170基を

超える縄文中期の土坑が検出され、在地系の深浦式土器が多く出土するなかで、近畿地方の大歳山式・鷹島式土器、瀬戸内地方の船元式土器が出土し、広範囲での交流を知ることができる。

後期の遺跡としては、牧山・立小野A及びB・田原迫ノ上・立小野・ホンドンガマ遺跡で指宿式・市来式土器が出土している。

牧山遺跡からは、建物跡を構成した可能性のある300～400個の柱穴群が環状に発見され、複数の埋設土器と、石冠が1点出土している。

細山田段遺跡では丸尾式・北久根山式・西平式・御領式土器が出土している。町田堀遺跡では、中岳Ⅱ式土器が数多く出土し埋設土器としての例も見られ、堅穴住居跡から榎原文を施す完形の石刀が出土した。

晩期の遺跡としては、川久保遺跡で入佐式古段階～黒川式古段階に相当する精製の浅鉢や、突帯文土器が出土している。

永吉天神段遺跡では突帯文土器の伴う堅穴住居跡や鉢、壺、打製石斧、石鏃、石匙、石皿などが発見された。

(3) 弥生時代

田原迫ノ上遺跡では山之口式・中溝式土器、土製勾玉・鉄器・磨製石鏃などが出土し、ベッド状遺構を伴う方形や円形の大型堅穴住居跡、掘立柱建物跡、円形・方形の周溝などが検出されており中期の遺構と比定される。

十三塚遺跡では、花卉形・方形・円形の堅穴住居跡が発見された。山之口式土器、土製勾玉、打製・磨製石鏃、棒状敲具などの遺物とともに無茎の鉄鏃が出土した。

牧山遺跡では中期の堅穴住居跡から銅鏃が出土した。

永吉天神段遺跡では中期の円形周溝墓と土坑墓群から国内最古級となる鉄鏃（十三塚出土品と類似）が出土した。ほかにも入来式・山ノ口式・黒髪式土器が多数出土しており、弥生時代の長期に渡り集落が存在したことが窺える。

(4) 古墳時代

志布志湾沿岸部には唐仁古墳群、塚崎古墳群、横瀬古墳などの多くの高塚古墳が存在する。また、南九州特有の墓制である地下式横穴墓も多く分布する地域である。

小牧遺跡近隣の上小原古墳群には前方後円墳1基・円墳20基および地下式横穴墓が存在する。岡崎古墳群には18基の高塚古墳と地下式横穴が存在し、長方板葺短甲・頸冑・肩冑の出土が知られる。

立小野堀遺跡では、地下式横穴墓が190基発見されており、鉄鏃や鉄剣等の鉄器、青銅製鈴等の副葬品と人骨が多数検出された。成川式のうち辻堂原期の特徴を持つ壺・高坏類が多く出土し、折損・欠損行為・穿孔行為を受け、祭祀的に遺棄されたと想定される。

川久保遺跡では古墳時代の堅穴住居跡が多数検出されている。韃の羽口・鉄滓・鍛造剥片などの鍛冶関連遺物が複数の住居跡から検出され、成川式のなかでも笹貫式の新段階の出土が主体だが、東原式の甕や高坏も多く出土している。

益畑遺跡では東原～笹貫新段階期の成川式土器が出土した。5号堅穴住居跡からは、初期須恵器に比定される蓋杯や鉄製のU字型鍬先が発見されている。小牧遺跡の近隣では古墳時代の長期に渡って集落が存在していたことが窺える。

(5) 古代

古代の串良は大隅国串良郷に属していたと思われるがその国境・郡境については定かではなく、串良川流域においては、古代の遺物・遺構が発見されている遺跡が少ないこともあり、今後の文献・考古資料によるさらなる検証が待たれる。『小牧遺跡1』の中で本遺跡で掘立柱建物跡などの遺構と共に土師器・須恵器・墨書土器などの遺物が発見されたことは既に報告している。

旧輝北町（現：鹿屋市）の新田遺跡で古代の掘立柱建物跡が5軒検出されており、古代の土師器の坏・皿・椀・墨書土器・須恵器などが出土している。

川久保遺跡でも掘立柱建物跡や古道跡が検出され、須恵器や土師器などの古代の遺物が出土している。

(6) 中世以降

小牧遺跡の周辺には、北東に細山田城跡と北原城跡、南に霧島城跡が知られている。中世初期の串良は肝付氏の領土であり、串良町郷土史によると肝付氏初代兼俊の3男兼幸が北原氏を名乗り、細山田に開いたのが北原城である。近年の発掘調査では村落跡も各地で発見されている。

川久保遺跡B地点では、3軒の掘立柱建物跡の検出が報告される。

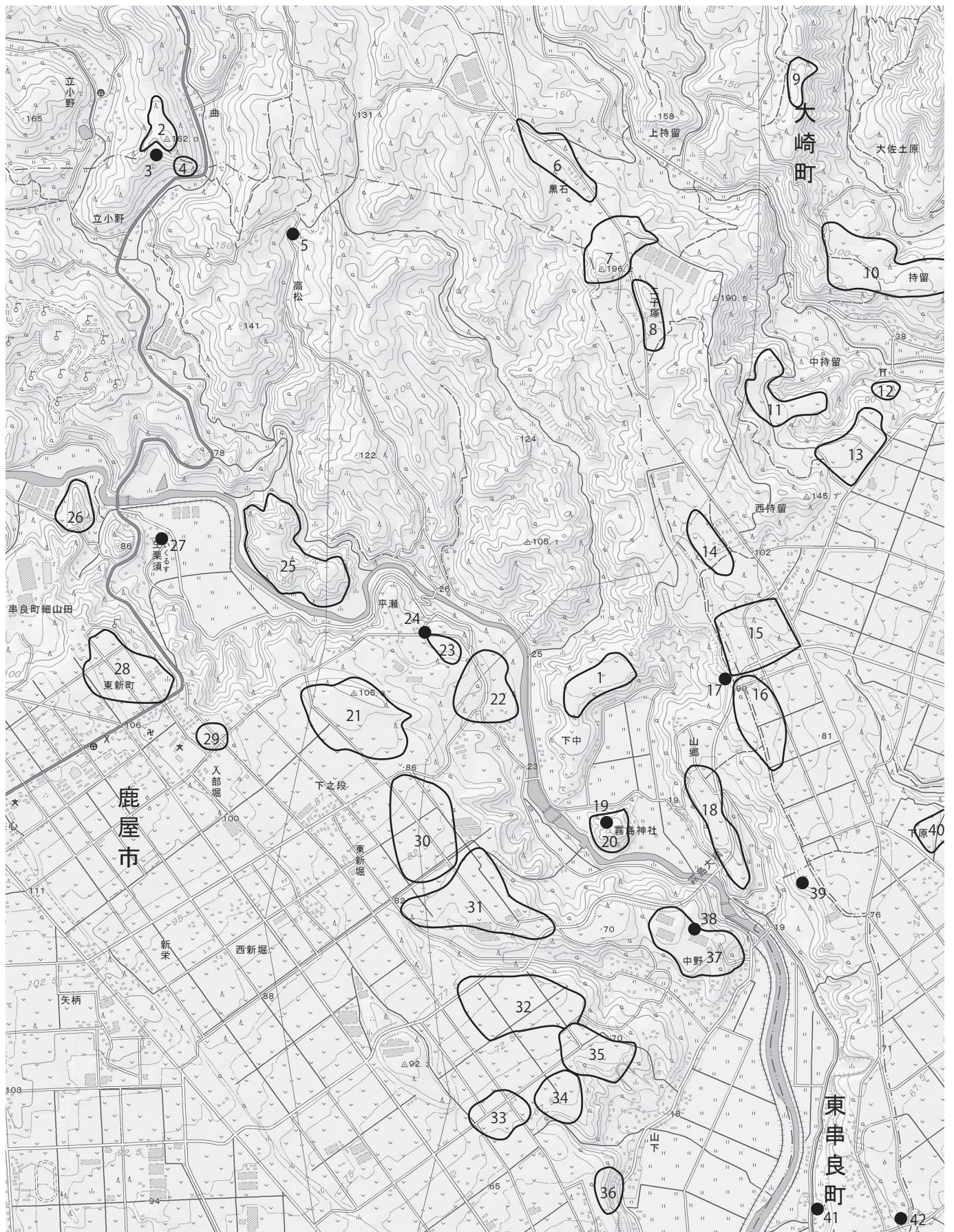
永吉天神段遺跡では糸切り底の土師器の坏・皿や瓦器・瓦質土器、東播系須恵器、白磁・青磁・染付などの中世の遺物が多数出土している。

(7) 近世以降

近世以降の大隅地方については、今後の発掘資料の増加が待たれる状況である。小牧遺跡の周辺においては、天神段遺跡で、畠畝状遺構や薩摩焼などが発見されている。永吉天神段遺跡では、薩摩焼や肥前系染付などが出土し道跡や寛永通宝を副葬した墓坑5基が検出されている。細山田段遺跡でも、近代まで続く溝状遺構や古道が検出されている。

第1表 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	備考
1	小牧遺跡	鹿屋市串良町細山田小牧	台地	旧石器, 縄文, 弥生, 古墳, 古代, 中世	本報告書
2	遠見ヶ丘遺跡	曾於郡大崎町野方立小野	台地	中世	
3	立小野A・B遺跡	鹿屋市串良町細山田立小野	台地	縄文	
4	立小野遺跡	鹿屋市串良町細山田立小野	台地	縄文(後), 弥生	
5	高松遺跡	鹿屋市串良町細山田高松	台地	弥生	
6	二子塚A遺跡	曾於郡大崎町野方二子塚	台地	旧石器, 縄文(早・晩), 弥生, 古墳	平成11年度本調査
7	二子塚B遺跡	曾於郡大崎町持留二子塚	台地	縄文, 弥生	
8	二子塚C遺跡	曾於郡大崎町持留二子塚	台地	弥生(中・後)	
9	大佐土原遺跡	曾於郡大崎町野方大佐土原	山復緩斜面	弥生(中)	
10	佐土原遺跡	曾於郡大崎町野方4715-2	台地	縄文, 古墳	
11	栢山城跡	曾於郡大崎町持留	台地	弥生, 古墳, 中世	別称「山ノ城」, 推定
12	川上神社遺跡	曾於郡大崎町持留中持留	扇状地	縄文(後)	
13	持留牧遺跡	曾於郡大崎町持留牧・東尾ノ鼻	台地	縄文, 古墳	平成9年度農政分布調査
14	茶ノ木遺跡	曾於郡大崎町持留1406-2	台地	古墳	
15	細山田段遺跡 (旧京の塚遺跡)	曾於郡大崎町持留細山田段	台地	縄文(早～晩)	平成25～27年度本調査
16	細山田段遺跡	曾於郡大崎町持留下原 鹿屋市串良町細山田下中京の塚	台地	縄文(後・晩), 弥生(前), 古墳	平成8年度農政分布, 平成11年度農政分布で拡大
17	京の塚古墳	鹿屋市串良町細山田下中京の塚	台地	古墳	平成14～15年年度本調査
18	益畑遺跡	鹿屋市串良町細山田益畑	台地	縄文, 弥生	
19	霧島城跡	鹿屋市串良町細山田下中	丘陵	中世	
20	ホンドンガマ遺跡	鹿屋市串良町細山田下中	洞窟	縄文	シラス洞窟で崩壊しつつある
21	町田堀遺跡	鹿屋市串良町細山田アタゴ山	台地	弥生, 古墳	平成25～28年度本調査
22	川久保遺跡	鹿屋市串良町細山田川久保	河岸段丘	旧石器, 縄文, 弥生, 古墳古代, 中世, 近世	平成26～30年度本調査
23	北原古墳群	鹿屋市串良町細山田北原	台地	古墳	
24	北原墓地逆修古石塔群	鹿屋市串良町細山田北原	台地	中世(鎌倉末)	
25	北原城跡	鹿屋市串良町細山田生栗須	丘陵	中世(南北朝)	
26	細山田城跡	鹿屋市串良町細山田生栗須	丘陵	中世	
27	生栗巣遺跡	鹿屋市串良町細山田生栗須	台地	弥生	
28	牧山遺跡	鹿屋市串良町細山田牧山	台地	弥生, 古墳	平成25～29年度本調査
29	入部堀遺跡	鹿屋市串良町細山田入部堀	台地	弥生, 古墳	
30	新堀遺跡	鹿屋市串良町細山田新堀	台地	縄文	
31	是ヶ迫遺跡	鹿屋市串良町細山田是ヶ迫	台地	縄文, 弥生	
32	瓜々良蒨遺跡	鹿屋市串良町有里瓜々良蒨	台地	弥生	平成12年度本調査
33	熊ヶ鼻遺跡	鹿屋市串良町有里熊ヶ鼻	台地	縄文, 弥生	
34	戸場遺跡	鹿屋市串良町有里戸場	台地	弥生	
35	永田堀遺跡	鹿屋市串良町有里永田堀	台地	弥生, 古墳	
36	宮留古墳群	鹿屋市串良町有里	台地	古墳	
37	石塚遺跡	鹿屋市串良町有里石塚	台地	弥生	
38	石塚古墳	鹿屋市串良町有里石塚2169	台地	古墳	
39	牧内古墳	肝属郡東串良町岩弘	台地	古墳	
40	下原遺跡	曾於郡大崎町持留	台地	縄文(後), 弥生, 古墳	
41	岩弘上古石塔	肝属郡東串良町岩弘上共同墓地	台地	中世	
42	上市ノ園古墳群	肝属郡東串良町岩弘	台地	古墳	



第3図 周辺遺跡位置図

第3節 志布志 I C～鹿屋串良 J C T間の遺跡

東九州自動車道の志布志 I C～鹿屋串良 J C T間には、表2に示すとおり26か所の遺跡が存在する。ここでは調査済み及び調査中の遺跡の概要を記載する。詳細については、各報告書等を参照していただきたい。

第2表 志布志 I C～鹿屋串良 J C T間の遺跡

番号	遺跡名	所在地・立地	発掘調査	整理・報告書 作成作業	遺跡の概要		
					時代・時期	主な遺構	主な遺物
1	見婦	志布志市 志布志町 志布志 台地上 標高約70m	H28年度 終了 H25・30年度に 埋文センター調査 (隣接地)	H30年度 刊行 R2年度 隣接地刊行予定	旧石器	—	ナイフ形石器、細石刃、使用痕剥片、磨石、叩石、敲石
					縄文早期	土坑	石坂式、押型文、下剥峯式、石鏃、磨石、石皿
					縄文前・中期	落とし穴、土坑	—
					縄文後・晩期	—	磨消縄文、丸尾式、西平式、中岳Ⅱ式、磨石、敲石
縄文時代を中心とした遺跡である。旧石器時代はナイフ形石器文化期及び細石刃文化期に比定される。縄文時代早期は、土器に比して石器の出土が極めて少ない。前～中期の落とし穴が2基検出されている。溝状遺構1号は時期不詳であるが縄文時代後期の可能性がある。							
2	宮ノ上	志布志市 志布志町 安楽 台地上 標高約45m	文化財課の試掘調査により、本路線には遺構・遺物がないことが確認されたため、本調査を実施せず。				
3	安良	志布志市 志布志町 安楽 台地上 標高約30m	H28年度 H29年度 終了	H30年度 R元年度 刊行	縄文早・後期	土坑、集石	小牧3A、西平式、丸尾式
					弥生中期	竪穴建物跡	山ノ口式
					古墳時代	竪穴建物跡、地下式横穴墓、溝状遺構	篋貫式、鉄鏃、鉄鐮、須恵器
					古代～中世	帯状硬化面、掘立柱建物跡、竪穴建物跡、土坑、土坑墓、柱穴他	土師器、須恵器、青磁、白磁、滑石製石鍋、炭化米塊
近世	土坑、柱穴	—					
古墳時代後半期と中世を中心とした遺跡である。中世前半の炭化米塊は県内最古の事例として注目される。							
4	水神松	志布志市 志布志町 安楽 安楽川左岸 標高約3m	文化財課の試掘調査により、本路線には遺構・遺物がないことが確認されたため、本調査を実施せず。				
5	安楽小牧B	志布志市 志布志町 安楽 台地上 標高約50m	H27年度 H28年度 終了	H30年度 R元年度 刊行	旧石器	—	ナイフ形石器、細石刃核、細石刃
					縄文草創期	集石	土器片、黒曜石剥片、磨石、敲石、石皿
					縄文早期	集石	吉田式、妙見・天道ヶ尾式、塞ノ神A式、塞ノ神B式、苦浜式、耳栓、石鏃、磨石、異形石器
					弥生	—	弥生土器、石包丁
起伏のある地形に立地し、縄文時代早期を中心に旧石器時代、縄文時代草創期も出土した複合遺跡である。縄文時代早期の集石は検出層によって構成層の大きさに差が認められる。また、塞ノ神式土器の壺形土器や、耳栓、異形石器、円盤状石器等が出土している。古墳群として遺跡登録されているが、これまでの調査では痕跡を含め古墳は確認されていない。※遺跡GISの変更に伴い、遺跡名を「小牧古墳群」から「安楽小牧B」に変更。							
6	次五	志布志市 有明町 野井倉 台地縁辺部 標高約50m	H26年度 H27年度 終了 ※志布志市教育委員会調査	H29年度 刊行 ※志布志市教育委員会刊行	旧石器	—	畦原型細石刃核、細石刃、剥片
					縄文早期	落とし穴、連穴土坑、土坑、集石、磨石集積	前平式、加栗山式、吉田式、札ノ元Ⅶ類、石坂式、中原Ⅴ式、下剥峯式、桑ノ丸式、押型文、手向山式、塞ノ神B式、打製・磨製石鏃、石錘、局部磨製石斧
旧石器時代から縄文時代早期を中心とする遺跡である。旧石器時代は、細石刃文化期の遺物が出土している。縄文時代早期前葉に該当する遺構や遺物が多く確認された。特に注目されるのは被熱破砕層が多量に出土した点である。							
7	大代	志布志市 有明町 野井倉 台地縁辺部 標高約40m	文化財課の試掘調査により、本路線には遺構・遺物がないことが確認されたため、本調査を実施せず。				
8	木森	志布志市 有明町 野井倉 河岸段丘 標高約30m	H26年度 H30年度 終了		縄文早期	竪穴建物跡、集石、土器集中、連穴土坑、土坑	前平式、加栗山式、吉田式、石坂式、下剥峯式、押型文、石鏃、石匙、磨石、敲石
					縄文中・後期	—	春日式、凹線文系土器
					古墳～古代	—	須恵器
					中世	掘立柱建物跡、杭列状遺構	須恵器、土師器、青磁、白磁、滑石製石鍋片、鉄製品、鉄滓
縄文時代早期と中世を中心とする遺跡である。遺構では縄文時代早期の竪穴建物跡、連穴土坑、集石、中世の掘立柱建物跡等が発見され、遺物では縄文時代早期の土器、石器、石匙、磨石・敲石の他、中・後期の土器、古墳～古代の須恵器、土師器、中世の青磁、白磁、滑石製石鍋片、鉄製品等が出土している。鬼界カルデラ噴火による液状化現象（噴砂跡）が確認されている。							
9	田尾下	志布志市 有明町 野井倉 藪田川右岸 標高約5m	文化財課の試掘調査により、本路線には遺構・遺物がないことが確認されたため、本調査を実施せず。				

番号	遺跡名	所在地・立地	発掘調査	整理・報告書 作成作業	遺跡の概要		
					時代・時期	主な遺構	主な遺物
10	春日堀	志布志市 有明町 逢原 河岸段丘 標高約30m	H26年度 H27年度 H28年度 H29年度 H30年度 終了	H30年度 R元年度 R2年度 作業中	縄文早期	竪穴建物跡、連穴土坑、集石、土坑、土器集中、炭化物集中、落とし穴	前平式、加栗山式、石坂式、下剥峯式、桑ノ丸式、押型文、手向山式、塞ノ神式、打製石鏃、打製・環状石斧、トトロ石器、磨石、台石、石皿、砥石、穿孔円礫
					弥生	竪穴建物跡	山ノ口式
					古墳～飛鳥	竪穴建物跡、掘立柱建物跡、溝状遺構、土坑、棒状礫集積遺構	甕（東原式、笹貫式）、壺、埴、高坏、須恵器高坏、棒状礫、磨製石鏃片
					古代～中世	竪穴建物跡、掘立柱建物跡、土坑墓、杭列跡、焼土跡	土師器
					近世	土坑、溝状遺構、古道、遺物集中	陶器、磁器
縄文早期から中世を中心とする遺跡である。遺構は縄文時代早期の竪穴建物跡、連穴土坑、集石、落とし穴、弥生時代の竪穴建物跡、古墳・飛鳥時代の竪穴建物跡（焼失住居跡含む）、掘立柱建物跡、溝状遺構、中世の掘立柱建物跡、堀跡が検出された。遺物は縄文時代早期の土器、打製石斧、環状石斧、トトロ石器等をはじめ、弥生時代から中近世の遺物が出土している。また鬼界カルデラ噴火に伴う液状化現象（噴砂跡）の痕跡も確認されている。							
11	牧ノ上B	志布志市 有明町 野井倉 台地上 標高約47m	文化財課の試掘調査により、本路線には遺構・遺物がないことが確認されたため、本調査を実施せず。				
12	稲荷堀	曾於郡 大崎町 菱田 台地上 標高約50m	文化財課の試掘調査により、本路線には遺構・遺物がないことが確認されたため、本調査を実施せず。				
13	平良上C	曾於郡 大崎町 井俣 台地上 標高約40m	H26年度 H27年度 終了	H28年度 刊行	縄文早期	竪穴建物跡、連穴土坑、集石、埋設土器、チップ集中	吉田式、石坂式、下剥峯式、押型文、平楕式、石鏃、石匙、打製・磨製石斧、扁平打製石斧、磨石、石皿、礫石器、石核
					縄文時代早期を中心とする遺跡である。遺構は竪穴建物跡、連穴土坑、集石、土坑が検出されている。遺物は、縄文時代早期の土器、石鏃、石匙、打製石斧、磨製石斧等が出土している。また、鬼界カルデラ噴火に伴う液状化現象（噴砂跡）も確認されている。		
14	宮脇	曾於郡 大崎町 井俣 台地上 標高約40m	H27年度 H28年度 終了	H30年度 R元年度 刊行	旧石器	礫群	ナイフ形石器、三稜尖頭器、台形石器、細石器、石核、スクレイパー、掻器、使用痕剥片、磨石、叩石
					縄文早期	集石、土坑、土器集中	加栗山式、小牧3A、下剥峯式、桑ノ丸式、押型文、平楕式、塞ノ神式、打製石鏃、磨石
					近世	—	薩摩焼、寛永通宝
旧石器時代・縄文時代早期を中心とする遺跡である。旧石器時代では、石器製作に関連すると考えられる石核、フレーク、チップ等が出土している。縄文時代早期では、集石、土坑、土器集中、ヒットと土器、石器等が出土している。鬼界カルデラ噴火に伴う液状化現象の噴砂跡も確認されている。							
15	堂園堀	曾於郡 大崎町 井俣 台地上 標高約45m	文化財課の試掘調査及び埋文センターの確認調査により、本路線には遺構・遺物がないことが確認されたため、本調査を実施せず。				
16	荒園	曾於郡 大崎町 仮宿 台地縁辺部 標高約50m	H24年度 H25年度 H26年度 H27年度 H28年度 終了 ※H24年度は 埋文センター調査	H28年度 (第1地点) 刊行 H30年度 R元年度 R2年度 (第2地点) (第3地点) 作業中	旧石器	—	畦原型細石核・細石刃、敲石
					縄文早期	集石、土坑、剥片・チップ集中	前平式、吉田式、加栗山式、下剥峯式、押型文、手向山式、平楕式、塞ノ神式、苦浜式、条痕文、壺形土器、石鏃、スクレイパー、石匙、耳栓、打製・磨製石斧、磨石、石皿
					弥生中期	竪穴建物跡、土坑	吉ヶ崎式、山ノ口式、磨製石鏃未製品、砥石
					古墳	竪穴建物跡	成川式、須恵器、砥石
					古代以前	片礫研掘溝状遺構	—
					中世	掘立柱建物跡、土坑、溝状遺構、帯状硬化面	土師器、東播系須恵器、備前焼、陶器、青磁、華南三彩
					近世以降	帯状硬化面	薩摩焼
縄文時代早期から古墳時代を中心とする遺跡である。遺構は、縄文時代早期の集石、弥生時代・古墳時代の竪穴建物跡、古代以前の片礫研掘溝状遺構、中世の掘立柱建物跡等が検出され、遺物は縄文時代早期の土器、石器、弥生時代・古墳時代の土器、土師器、陶器、磁器等が出土している。また、鬼界カルデラ噴火に伴う液状化現象（噴砂跡）も確認されている。							

番号	遺跡名	所在地・立地	発掘調査	整理・報告書 作成作業	遺跡の概要		
					時代・時期	主な遺構	主な遺物
17	永吉天神段	曾於郡 大崎町 永吉 台地縁辺及び 河岸段丘 標高30～50m	H24年度 H25年度 H26年度 H27年度 終了 ※H24年度は 埋文センター調査	H27年度 (第1地点) 刊行 H28年度 (第2地点1) 刊行 H29年度 (第2地点2) 刊行 H30年度 (第3地点) 刊行 H31年度 (第2地点3) 刊行	旧石器	礫群、ブロック	尖頭器、ナイフ形石器、台形石器、剥片
					縄文早期	集石、土器埋設遺構	前平式、加栗山式、吉田式、手向山式、下剥峯式、押型文、平裕式、塞ノ神式、吉浜式、条痕文、石鏃、石匙、石斧、磨石、敲石、石皿
					縄文前期	—	曾畑式
					縄文後期	—	岩崎上層式、北久根山式、中岳Ⅱ式
					縄文晩期	竪穴建物跡、落とし穴、土坑	入佐式、黒川式、刻目突帯文、管玉、打製石斧
					弥生	竪穴建物跡、掘立柱建物跡、円形周溝墓、土坑墓群、土坑	入来式、山ノ口式、黒髪式、鉄鏃、磨製石鏃、管玉
					古墳	竪穴建物跡、土坑	成川式、須恵器
					古代	掘立柱建物跡、土坑	須恵器、土師器
					中世	掘立柱建物跡、土坑墓、地下式坑、火葬土坑、土坑	白磁、青磁、土師器、瓦質土器、東播系須恵器、備前焼、常滑焼、湖洲六花鏡、砥石、石塔、古銭
					近世	近世墓	薩摩焼、染付、寛永通宝、石臼
					時期不明	掘立柱建物跡	—
旧石器時代から近世までの遺跡である。弥生時代中期の円形周溝墓を頂点とする土坑墓群から、国内では最古級となる鉄鏃が出土した。中世では白磁、青磁、瓦質土器、東播系須恵器等が多量に出土した。また、地下式坑と呼ばれる中～近世の大型土坑も発見された。							
18	細山田段	曾於郡 大崎町 西持留 台地上 標高約95m	H25年度 H26年度 H27年度 終了	H26年度 H28年度 H30年度 R元年度 (1)刊行 R2年度 刊行	縄文早期	集石、埋設土器	吉田式、石坂式、下剥峯式、桑ノ丸式、中原式、押型文、平裕式、塞ノ神式、吉浜式、石京西式、打製石鏃、石匙、磨・敲石、石核
					縄文前期～ 中期初頭	土坑、土器集中	曾畑式、深浦式、大蔵山式、鷹島式、船元式、打製石鏃、石匙、石鏃、スクレイパー、二次加工剥片、磨石、敲石、石皿、石核
					縄文後期	土坑	辛川式、丸尾式、西平式、中岳Ⅱ式、打製石鏃、石匙、石鏃、スクレイパー、磨・敲石、打製石斧、磨製石斧、石皿
					縄文晩期	—	入佐式、黒川式
					弥生前期	—	高橋式
					古墳	—	成川式
近世以降	溝状遺構・古道	—					
縄文時代前期から中期初頭を中心に、縄文時代早期から近世までを含む遺跡である。縄文中期では170基を超える土坑が検出されたほか、在地系土器の深浦式土器、近畿地方の大蔵山式土器や鷹島式土器、瀬戸内地方の船元式土器などが出土し、当時の遠隔地交流の一端が明らかとなった。							
19	小牧	鹿屋市 串良町 細山田 台地上 標高約60m	H27年度 H28年度 H29年度 終了	H30年度 R元年度 (1)刊行 R2年度 作業中	旧石器	—	細石刃
					縄文早期	竪穴建物跡、連穴土坑、土坑、集石	前平式、吉田式、石坂式、下剥峯式、平裕式、条痕文、石匙、磨石、石皿
					縄文前期	—	曾畑式、深浦式、磨石
					縄文後期	竪穴建物跡、石皿立石遺構、伏甕、石斧集積遺構、集石、土坑	阿高式系、岩崎上層式、指宿式、市来式、石鏃、横刃型石器、打製石斧、磨石、石皿、大珠
					縄文晩期	—	入佐式、黒川式、刻目突帯文
					弥生中期	—	入来式、山ノ口式、砥石
					古墳	竪穴建物跡、礫集積、土器溜、土坑	東原式、辻堂原式、布留系土器、須恵器、鉄鏃、鉄製品、敲石、勾玉、軽石加工品
					古代	掘立柱建物跡、焼土跡、溝状遺構、土坑	土師器、須恵器、墨書土器、鉄器、土錘、焼塩土器、土製紡錘車
中世以降	掘立柱建物跡、土坑、石組遺構、溝状遺構、杭列	土師器、東播系須恵器、白磁、青磁、墨書土器、石鍋、合子、鞆羽口、刀子、鉄製紡錘車、焙烙、古銭、薩摩焼					
旧石器時代から近世までの遺跡である。縄文時代早期前半から中葉の集落、後期の石皿遺構を伴う環状構造の集落とこれらに伴う遺物が特筆される。この他、古墳時代の花弁形住居跡を伴う集落や古代・中世の掘立柱建物跡群も発見されている。周辺の遺跡を含めて串良川沿岸における人間活動の変遷を追うことができる遺跡である。							

番号	遺跡名	所在地・立地	発掘調査	整理・報告書 作成作業	遺跡の概要		
					時代・時期	主な遺構	主な遺物
20	川久保	鹿屋市 串良町 細山田 河岸段丘 標高30～50m	H26年度 H27年度 H28年度 H29年度 H30年度 終了	H27年度 H29年度 H30年度 (C地点) 刊行 R元年度 R2年度 (A,B,D地点) (1)(2)刊行 作業中	旧石器	礫群	剥片尖頭器, ナイフ形石器, 畝原型細石核
					縄文早期	堅穴建物跡, 集石, 土坑	岩本式, 前平式, 志風頭式, 加栗山式, 吉田式, 倉園B式, 石坂式, 下剥峯式, 押型文, 塞ノ神式, 苦浜式, 轟A式, 石鏃, 打製石斧, 石皿
					縄文前期	集石	曾畑式, 磨製石斧
					縄文後期	—	中岳式
					縄文晩期	集石	入佐式, 黒川式, 刻目突帯文
					弥生前期	—	高橋式
					弥生中期	堅穴建物跡	下城式, 山ノ口式
					古墳	堅穴建物跡, 鍛冶関連建物跡, 堅穴状遺構, 溝状遺構, 道跡	成川式, 輪羽口, 高坏脚転用輪羽口, 鉄鏃, 鉄滓, 勾玉, 管玉
					古代	掘立柱建物跡	須恵器, 土師器
中世	掘立柱建物跡, 溝状遺構, 道跡	青磁, 白磁, 瓦器椀					
旧石器時代から中世までの遺跡である。特に古墳時代では、集落を構成する多数の堅穴建物跡や鍛冶関連遺物を伴う遺構が発見されているほか、専用の輪の羽口も出土している。古墳時代の鉄製品の生産過程を明らかにする良好な資料である。							
21	町田堀	鹿屋市 串良町 細山田 台地縁辺部 標高約90m	H25年度 H26年度 H27年度 H28年度 終了	H27年度 (1)刊行 H29年度 (2)刊行	縄文早期	集石	下剥峯式, 平橋式
					縄文後期	堅穴建物跡, 埋設土器, 落とし穴, 土坑, 石斧集積遺構	中岳Ⅱ式, 石刀, 石鏃, 打製・磨製石斧, ヒスイ製垂飾, 小玉, 勾玉, 管玉
					縄文晩期	—	黒川式, 刻目突帯文
					弥生中期	堅穴建物跡	入佐式, 山ノ口式, 土製勾玉
					古墳	堅穴建物跡, 地下式横穴墓, 円形周溝墓, 溝状遺構	成川式土器, 人骨, 鉄剣, 鉄鏃, 刀子, ヤリ鉋, 異形石器
					古代	焼土跡, 道跡	土師器, 須恵器
縄文時代早期から古代までの遺跡である。古墳時代の地下式横穴墓が92基発見され、円形周溝を伴う例も初めて確認されている。立小野堀遺跡や下堀遺跡等と類似性が想定され、高塚墳と共存する志布志湾沿岸部の地下式横穴墓との比較が可能になり、大隅半島の古墳時代像解明に必須の遺跡である。このほか、縄文時代後期の堅穴建物跡から、榎原文を施す完全な石刀が出土している。							
22	牧山	鹿屋市 串良町 細山田 台地縁辺部 標高約110m	H25年度 H26年度 H27年度 H28年度 H29年度 終了	H28年度 (A地点1) 刊行 H30年度 R元年度 R2年度 (A地点2, B,C,D地点) 作業中	旧石器	—	剥片
					縄文早期	堅穴建物跡, 連穴土坑, 土坑, 集石, 石器製作跡	吉田式, 石坂式, 下剥峯式, 辻タイプ, 桑ノ丸式, 押型文, 石鏃, 石匙, スクレイバー, 磨石
					縄文前期	埋設土器(轟式)	轟式, 条痕文
					縄文後期	土坑, 落とし穴状遺構, 埋設土器, 石器集中部	市来式, 丸尾式, 西平式, 太郎迫式, 三万田式, 中岳Ⅱ式, 打製・磨製石斧, 磨石, 剥片, 石核, 台石, 石冠
					縄文晩期	土坑	入佐式, 刻目突帯文
					弥生中期	堅穴建物跡, 掘立柱建物跡, 土坑	山ノ口式, 打製・磨製石鏃, 打製・磨製石斧, 磨石, 敲石, 石皿, 青銅鑿
					中・近世	古道跡	青磁, 白磁, 薩摩焼
旧石器時代から中世にかけての遺跡である。特に、縄文時代後期の建物跡を構成していた可能性のある柱穴群が環状に発見されており注目される。また、同時期のものと考えられる複数の埋設土器と石冠が1点出土している。弥生時代中期の青銅製鑿の出土も特筆される。							
23	田原迫ノ上	鹿屋市 串良町 細山田 台地縁辺部 標高約120m	H22年度 H23年度 H24年度 H25年度 H26年度 H28年度 H30年度 終了 ※H22～24は 埋文センター調査	H26年度 (1)刊行 H27年度 H28年度 (2)刊行 R元年度 (3)作業中 ※H23～24は 埋文センター調査	縄文早期	堅穴建物跡, 連穴土坑, 集石, 落とし穴, 土坑, 石器製作跡	前平式, 吉田式, 倉園B式, 石坂式, 下剥峯式, 辻タイプ, 桑ノ丸式, 中原式, 押型文, 手向山式, 平橋式, 塞ノ神式, 石棺, 石鏃, 石匙, 磨石, 敲石, 石皿, 打製石斧
					縄文後期	落とし穴, 礫集積	指宿式, 市来式, 石鏃, 磨石
					縄文晩期	—	黒川式
					弥生中期	堅穴建物跡, 大型建物跡, 掘立柱建物跡, 円形・方形周溝	山ノ口式・中溝式, 擬凹線文系壺, 土製勾玉, 鉄器, 磨製石鏃, 石匙, 砥石, 敲石, 台石
					古墳時代以降	溝状遺構, 畝状遺構	土師器碗, 薩摩焼
縄文時代早期から弥生時代中期を中心とした遺跡である。弥生時代中期では、ベッド状遺構を伴う方形・円形の大型堅穴建物跡, 棟持柱をもつ掘立柱建物跡2棟を含む建物跡群, 柱穴列や円形・方形の周溝などが検出されており、大隅半島中央部における当該期の集落の様相を知る上で貴重な遺跡である。このほか、縄文時代早期の堅穴建物跡, 連穴土坑などの遺構が多数発見されていることも注目される。							

番号	遺跡名	所在地・立地	発掘調査	整理・報告書 作成作業	遺跡の概要		
					時代・時期	主な遺構	主な遺物
24	立小野堀	鹿屋市 串良町 細山田 台地縁辺部 標高約125m	H22年度 H23年度 H24年度 H26年度 H27年度 H28年度 H30年度 終了 ※H22～24は 埋文センター調査	H24年度 H25年度 H26年度 H27年度 H28年度 (1) 刊行 R3年度以降 (2) 作業 ※H24は埋文 埋文センター作業	縄文前・中期	—	深浦式
					縄文後期	—	指宿式、市来式、西平式
					弥生中期	—	山ノ口式
					古墳	地下式横穴墓、土坑墓、 溝状遺構	成川式、須恵器、鉄器（刀・剣・槍・鉾・ 刀子・鏃等）、青銅鈴、人骨
					時期不詳	溝状遺構	—
縄文時代前期から古墳時代までの遺跡である。特筆すべきは、古墳時代の地下式横穴墓が約200基発見されたことである。玄室内には鉄鏃や鉄剣等の鉄器、青銅製鈴等の副葬品と人骨が多数残っていたほか、墓周辺から多量の土器や須恵器が出土した。青銅製鈴をはじめ、多種多様な副葬品を伴った地下式横穴墓群の発見は、南九州の古墳時代墓制の様相全体を解明していく上で貴重な資料である。							
25	十三塚	鹿屋市 串良町 細山田 台地上 標高約140m	H20年度 H21年度 終了 ※埋文センター調査	H22年度 刊行 ※埋文センター作業	縄文早期	—	石坂式
					縄文後期	—	凹線文、市来式、三万田式
					縄文晩期	—	黒川式
					弥生中期	堅穴建物跡、掘立柱建物跡、 土坑	山ノ口式、土製勾玉、打製・磨製石鏃、棒 状敲具、鉄鏃
					古墳	—	成川式
					中世～近世	道路状遺構	洪武通寶（加治木銭）
弥生時代中期を中心とする遺跡である。花卉形・方形・円形を呈する堅穴建物跡が発見された。出土遺物等から、王子遺跡や前畑遺跡等と同時期の集落跡と考えられる。また、集石が堅穴建物跡内から発見されている。7号住居跡の埋土内から、松木園遺跡や永吉天神段遺跡から出土した鉄鏃と類似する無茎の鉄鏃が出土した。							
26	石籓	鹿屋市 串良町 細山田 台地上 標高約140m	H20年度 H21年度 終了 ※埋文センター調査	H22年度 刊行 ※埋文センター作業	縄文早期	集石、土坑	岩本式、前平式、志風頭式、石坂式、平椀式、 貝殻糸痕文、鎌石橋式、轟A式、打製石鏃、 磨石、敲石
					弥生中期	—	山ノ口式、須玖式
					縄文時代早期前半から早期末を中心とする遺跡である。鎌石橋式土器1個体と轟A式土器が2個体出土し、両型式が同時期に存在した可能性を示唆する遺跡である。		



第4図 東九州自動車道関連 (志布志IC～鹿屋串良JCT間) 遺跡位置図

第Ⅲ章 調査の方法と層序

第1節 調査の方法

本節では、発掘調査の方法、遺構の認定と検出方法等、整理・報告書作成作業の方法について簡潔に述べる。

1 発掘調査の方法

小牧遺跡の発掘調査は、平成25年度と平成27年度に確認調査、平成27～29年度に本調査を実施した。調査対象表面積は19,200㎡、調査対象延面積は54,820㎡である。

調査区割り（グリッド）は、工事用基準杭「S T A 150（X = -172321.776, Y = -5261.309）」と「S T A 151（X = -172360.837, Y = -5353.362）」の延長線を中心に、10m間隔で西から東に向かって1・2・3…、南から北に向かってA・B・C…と設定した。このグリッドを基にして、A-1区の左下を原点（0, 0）、縦軸をX、横軸をYとし、遺構・遺物の測量作業を行うこととした。また、トータルステーションで測量作業を行う場合、公共座標に基づき基準点を設定した。

発掘調査は、重機で表土を除去した後、確認調査の結果に基づき、遺物包含層については人力で掘り下げを行った。無遺物層、火山灰の一次堆積層は、一部重機を用いて慎重に掘り下げた。

遺構は、移植ごて等の遺構調査に適した道具を用いて慎重に調査し、実測、写真撮影等を行った。

出土した遺物については、必要に応じて出土状況の写真撮影を行った後、トータルステーションを使用して取り上げを行った。遺構やまとまった遺物は、遺構の規模等に応じて縮尺1/10～1/20で手測り実測で行った。本編に関わる地形測量は、Ⅷ層（サツマ火山灰層）上面で精査を行い実施した。

また、X層上面の地形測量を24区～41区で行った。

2 遺構の認定と検出方法

検出された遺構の認定と検出方法については、以下のとおりである。

(1) 遺構の認定

検出面、埋土状況、規模等を総合的に調査し、調査担当者間で検討したうえで認定した。本編掲載の主な遺構の認定は以下のとおりである。

竪穴建物跡・土坑・連穴土坑については、埋土や形状、遺物の出土など発掘調査担当で総合的に判断し、分類・認定・時期判断を行った。ただし、遺構の中には、検出面が該当期の地層よりもかなり下位で検出されたものもあるが、埋土の堆積状況や色調・遺構内（埋土中のも含む）遺物等から総合的に検討し、時期判断を行った。

集石については、時期を問わず概ね5個以上のものを集石と判断した。時期については、検出面や集石内外の出土遺物の種類等で総合的に検討し、判断した。各遺構は、検出された順に竪穴建物跡はSH、連穴土坑はREN、土坑はSK、集石はSS、石器集積はSUの略記号と番号を付した。

(2) 遺構の検出方法

遺構の検出及び調査に際しては、可能な限り当時の生活面を把握することを目指した。しかしながら、小牧遺跡は、V層（アカホヤ火山灰層）やIV層が浸食により流出し堆積が不安定な箇所もあったため、遺構検出・遺構の切り合いや時期認定等に苦慮した。対策として、ミニトレンチの設定、攪乱部分の埋土除去等、遺構の個々の状況に応じた調査方法を検討し、可能な限り残存部の記録保存と時代特定を行った。

3 整理作業・報告書作成作業の方法及び内容

平成27～29年度は、本発掘調査と併せて（株）新和技術コンサルタントに業務を委託し、遺物の水洗・注記等の基礎整理作業と、接合作業を行った。

平成30年度は、基礎整理作業を（株）九州文化財研究所に委託し、本編掲載の一部石器について分類・選別・実測・トレースの作業を行った。

令和元年度は、「小牧遺跡1」の刊行作業を行いながら、発掘調査成果品の整理から行った。図面整理は、遺構実測図、遺物出土状況図、土層断面図等に分け、台帳と遺物の照合を行った。

遺物の分類・接合は、遺構内遺物と包含層遺物に分けた後、包含層出土土器については、土器の胎土や文様等で分類し、グリッドごと及びエリアを広げ接合する方法をとった。石器は、剥片石器と礫石器に分け、器種及び石材別に分類し一部を国際文化財（株）へ石器実測委託を行った。

令和2年度は、報告書刊行に向けて作業を行った。土器は、文様・胎土・器形等を基準に編年分類を行った。石器は、時期別・機種別に分類し、一部を（株）九州文化財研究所に実測委託を行った。遺物はこれら作業の後、文章・観察表・図版により特徴を記録した。遺構は、認定・分類したものを実測図や写真等を用い検出面・埋土の状況から再度検討しトレースを行い、調査図面の所見を参考に時期ごとに文章・観察表・図版にまとめて特徴を記録した。

第2節 層序

小牧遺跡は、串良町の北東部、串良川左岸の新調堀台地の南端に位置し、周囲を串良川やその支流の浸食を受けることで地形面が開析され、標高約65mの独立丘陵状となっている。調査区は東西に約400mあり、東側から西側へ緩やかに傾斜している。串良川に近い西側の地形は、雨水等による浸食を多く受けており、アカホヤ火山

灰層やIV層の一部が流されて堆積が不安定な箇所もあった。そのため、縄文時代から古墳時代までの遺構・遺物が同じ包含層で検出されている。標準土層については、平成29年度の調査時に調査区中央から東側でIVc層とIVd層を設定できたことから、調査区の西側（1区～29区）と東側（30区～42区）で層位及び色調及び土壌の特徴が異なる。

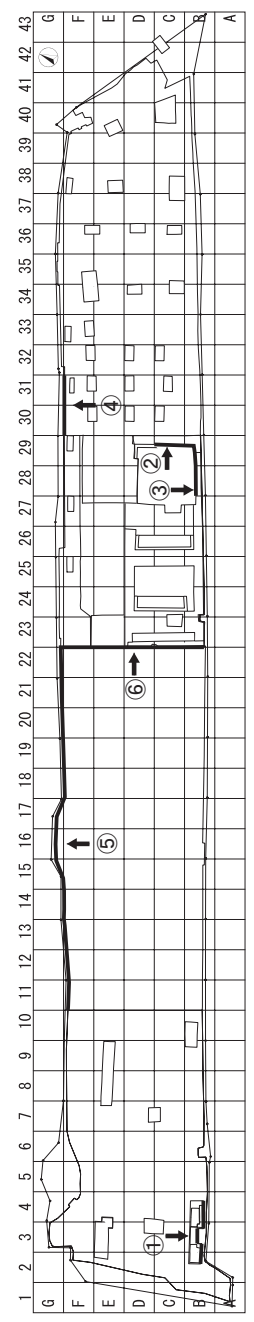
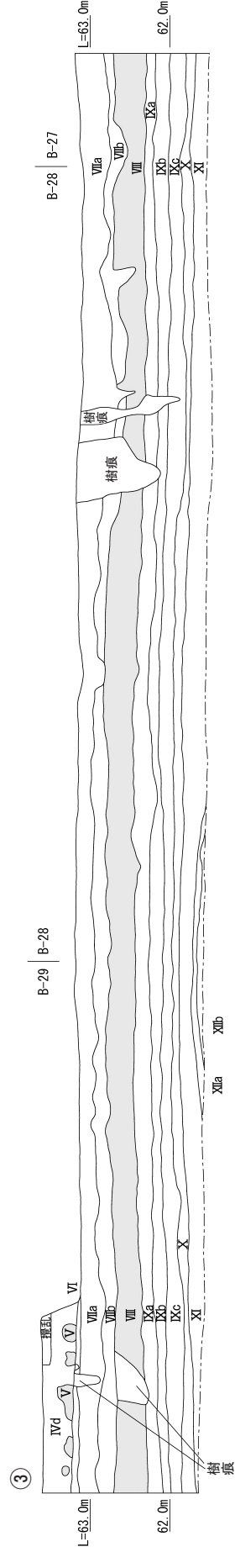
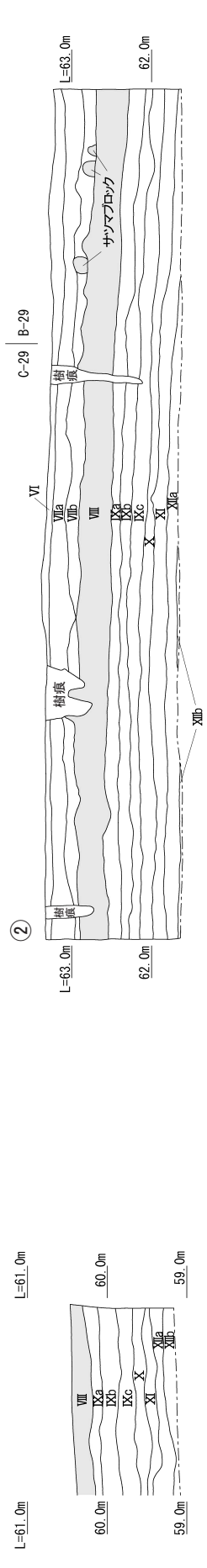
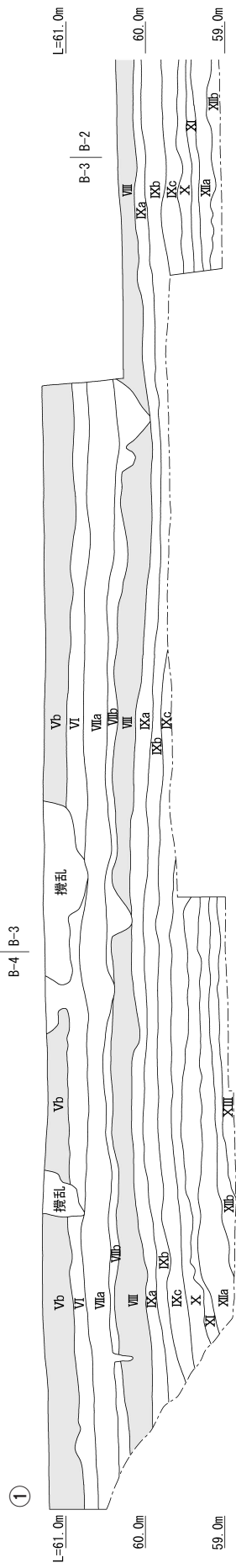
1区～29区

層位	色調等	特徴等	時代
I層	表土	II層との層界にP1火山灰層が堆積している。	
II層	黒色土	細かい白色軽石を含む。耕作のためにほとんど残っていない。	
III層	黒色土	部分的に残存する。1区～13区は古代から中世、14区以降は古代の包含層である。III層を埋土とする遺構を古代II期としている。	古代～中世
IVa層	暗褐色土	縄文中期から古墳時代までの遺構・遺物を包含する。30区～42区では、上部に古代（9世紀）遺物を包含する。遺構埋土にわずかにIVa層より暗い埋土を持つ遺構を古代I期としている。縄文晩期～弥生時代については、堆積が薄く、層位的な上下関係の把握は困難である。	縄文前期～古墳
IVb層	暗褐色土	池田降下軽石をまばらに含む。1区～13区までは、縄文時代後期から古墳時代までの遺物を包含するが、14区より東側は、縄文時代中期から後期の遺物を包含する。	
Va層	黄褐色土	池田火山灰の軽石やアカホヤ軽石の両方を含む。堆積の不安定な西側では、この上面まで遺物を含む。30区～42区では、IVdとして設定	
Vb層	アカホヤ火山灰	アカホヤ火山灰。4区～10区かけて堆積が薄い。20区～42区では、V層として設定。	
VI層	暗茶褐色土	塞ノ神式土器等を含む。縄文時代早期後葉の遺物包含層である。アカホヤの軽石、炭化物を含む。	縄文早期
VIIa層	黒褐色土	加栗山式土器等を含む。縄文時代早期前葉の遺物包含層である。層全体に、P13、黒色ブロック土をわずかに含む。	
VIIb層	青灰色土	薩摩火山灰が多く混在する。黒色ブロック土を含む。	
VIII層	サツマ火山灰	一次堆積層が上下に浮遊している。	
IXa層	濃茶褐色強粘質土	旧石器時代（細石刃）の包含層である。	旧石器時代（細石刃）
IXb層	濃暗茶褐色強粘質土	粘性が強い。	
IXc層	濃茶褐色強粘質土	IXb層よりも暗い色調。旧石器時代の遺物を含むが、X層の遺物が混入した可能性がある。	旧石器時代
X層	茶褐色粘質土	層の上部に濁った層があり、そこから旧石器時代の遺物（三稜尖頭器）が出土する包含層である。	
XI層	黄色褐色粘質土	黒ずんでいて堅い。旧石器の包含層である。P17と思われる火山灰を少量含む。黒いハードローム層である。	
XIIa層	黄褐色粘質土	明るいソフトローム層で、P17と考えられる火山灰を所々に含む。	
XIIb層	黄褐色粘質土	旧石器の包含層黒いハードローム層で、黒ずんでいて堅い。P17の降下層。XI層やXIIa層に見られる赤色バミスは、P17が混入した可能性がある。	
XIII層	二次シラス		

30区～42区

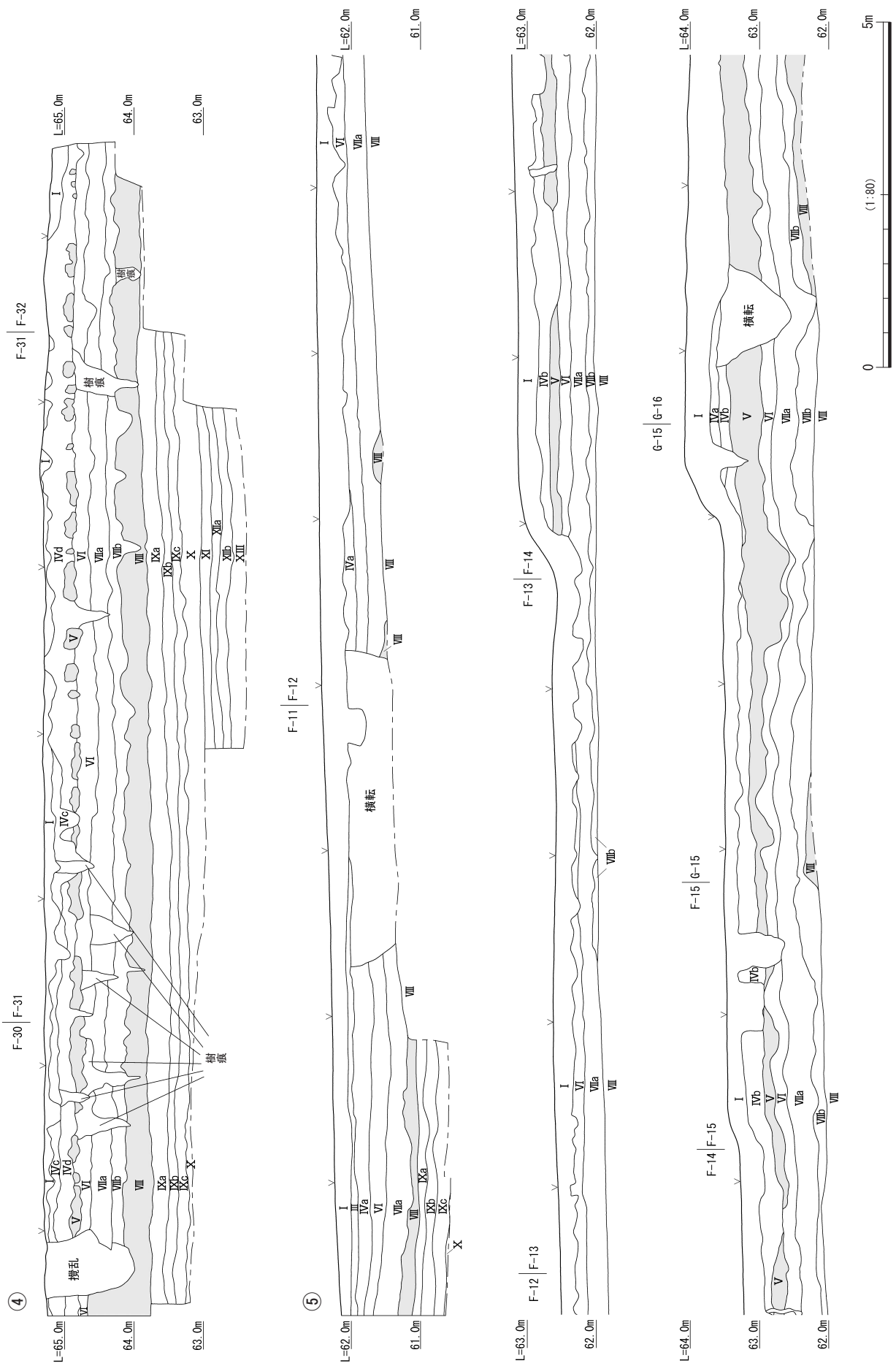
層位	色調等	特徴等	時代
I層	表土		
II層	黒色土		
III層	黒色土	部分的に残存、下部に遺物を包含	古代（9世紀）以降
IVa層	褐色土	上部に古代（9世紀）遺物を包含。縄文晩期～弥生時代については、堆積が薄く、層位的な上下関係の把握は困難である。	縄文後期～古代
IVb層	暗褐色土		縄文中期～後期
IVc層	黄褐色砂質土	池田火山灰・降下軽石がブロック状に堆積	縄文前期～中期
IVd層	暗褐色土	弱い粘性有り	
V層	アカホヤ火山灰		
VI層	黒褐色粘質土		縄文早期
VIIa層	灰褐色粘質土	P13含む	
VIIa'層	にぶい黄褐色砂質土	23～41区の南側斜面に堆積	
VIIb層	灰黄褐色粘質土	薩摩火山灰混じり	
VIII層	サツマ火山灰		
IXa層	灰黄褐色粘質土	細石刃	
IXb層	褐灰色粘質土		
IXc層	灰黄褐色粘質土	三稜尖頭器	旧石器時代
X層	明黄褐色粘質土		
XI層	褐灰色粘質土	槍先形尖頭器	
XIIa層	明黄褐色粘質土		
XIIb層	褐灰色粘質土		
XIII層	二次シラス		

第5図 基本層序



— : 当該土層実測箇所位置

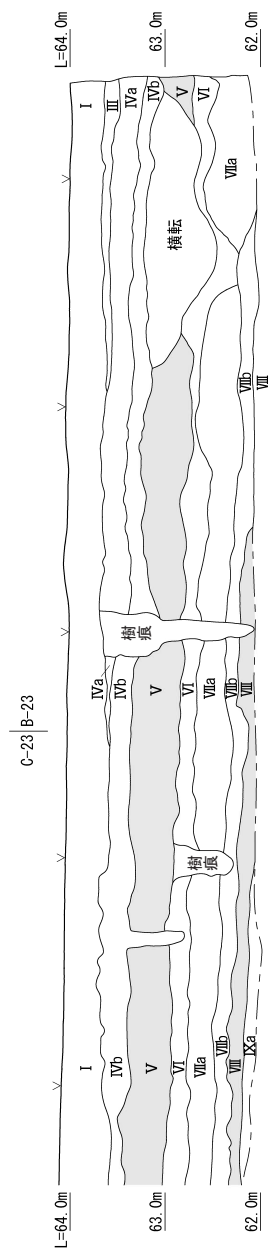
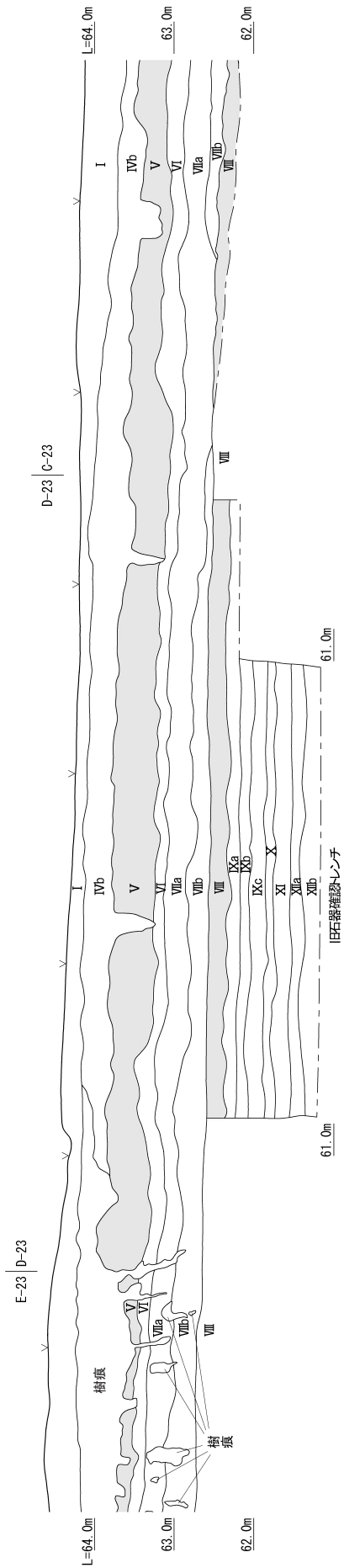
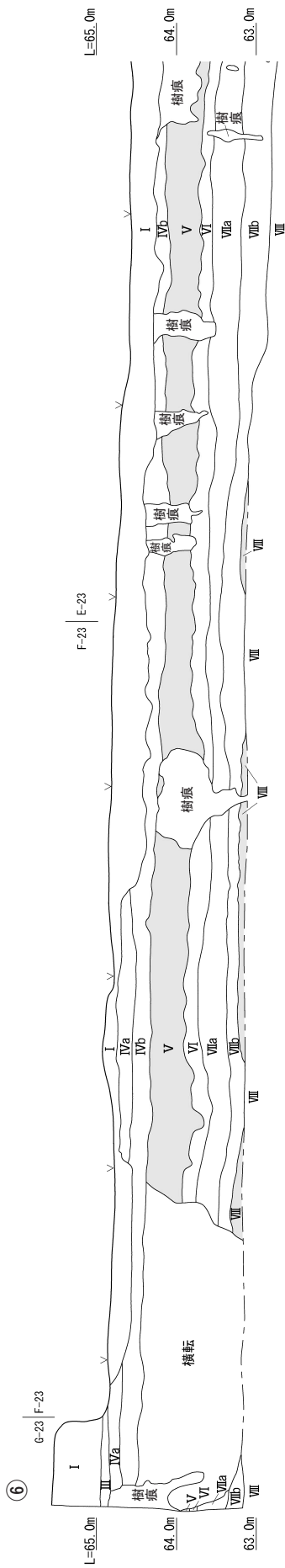
第6図 土層断面図 (1)



第7図 土層断面図 (2)



第8図 土層断面図 (3)



第9図 土層断面図 (4)

第IV章 調査の成果

第1節 旧石器時代の調査

1 調査の方法

旧石器時代の調査は、平成25年度・27年度の確認調査で若干の遺物が出土したが、旧石器時代の層に到達するまで現地表面から2m以上あり、旧石器時代全体の層厚も約2mあったため調査が困難をきたし、旧石器時代の遺物の出土する範囲を特定できていなかった。また、串良川を隔てて所在する川久保遺跡で旧石器時代の遺物等の出土があることから、平成27年度以降の本発掘調査時に再度追加の下層確認調査を行い遺構・遺物の出土があった範囲について本調査を実施することとした。

調査は、Ⅷ層（薩摩火山灰層）までの調査を終了した後、地形等を考慮して38個のトレンチを設定して遺物の出土の有無を調べ、遺構・遺物の出土のあった箇所を必要に応じて拡張して本発掘調査を行った。

その結果、27区から31区にかけて3ヶ所のブロックを検出した以外遺構は検出されず、遺物の出土も少なかった。

検出したブロックは、Ⅻ～Ⅹ層にかけて槍先形尖頭器を主体とするもの、Ⅹ層～Ⅸ層でナイフ形石器・三稜尖頭器を主体とするもの、Ⅸ層で細石器を主体とするものである。第10・11図に出土の状況を示した。

この三つのブロックを下層から第Ⅰ文化層(Ⅻ～Ⅹ層)、第Ⅱ文化層(Ⅹ～Ⅸ層)、第Ⅲ文化層(Ⅸ層)と呼称して報告し、発掘調査時は調査の進捗に伴い検出した順番で番号を付したため、層順となっていないことから本報告では下層から順番に番号を付け直して報告する。新旧の対応は以下のとおりである。

新ブロック1（第Ⅰ文化層）→旧ブロック3

新ブロック2（第Ⅱ文化層）→旧ブロック1

新ブロック3（第Ⅲ文化層）→旧ブロック2

2 第Ⅰ文化層

(1) 遺構

槍先形尖頭器を主体とするブロック1を検出したほか遺構等は検出されなかった。また、ブロック1内で4点の石器・剥片をまとめて置いたと考えられる剥片集中箇所1も出土した。

ブロック1（第11図）

B・C-27～29区で礫群を構成していたと考える安山岩の礫が数点とナイフ形石器、石器未成品、石器欠損品、剥片、微細剥片、ハンマー等石器製作にかかわる遺物が南北約10m×東西約17mの範囲で出土した。南側の調査区端まで遺物が出土していることから、ブロック1は、調査区外にも広がりを持つと考える。

この箇所の遺物の出土層位がⅫb～Ⅹ層の三つの層にわたっているが、ブロック1以外での周辺の遺物の出土が希薄であるため、ブロック1の遺物が上層に浮いたものと考え、さらにS003、S012～S014の石器の出土がⅫ層であることからブロック1の帰属する層はⅫ層と考える。

剥片集中箇所1（第10・11図）

掘込み等があることを考え慎重に調査したが確認できなかった。すべてがほぼ平坦な状態で、下位からの遺物の出土もなかったため、地面に直接置かれたものと考えられる。

4点の石器は、S003・S012が石器の天地が反して若干重なる形で検出し、S013・S014がこの2点より少し離れて不揃いな形で検出した。S003とS013が正面が上を向き、S012とS014が裏面が上を向いて検出した（図版2）。

(2) 遺物（第12～17図 S001～S034）

ブロック1

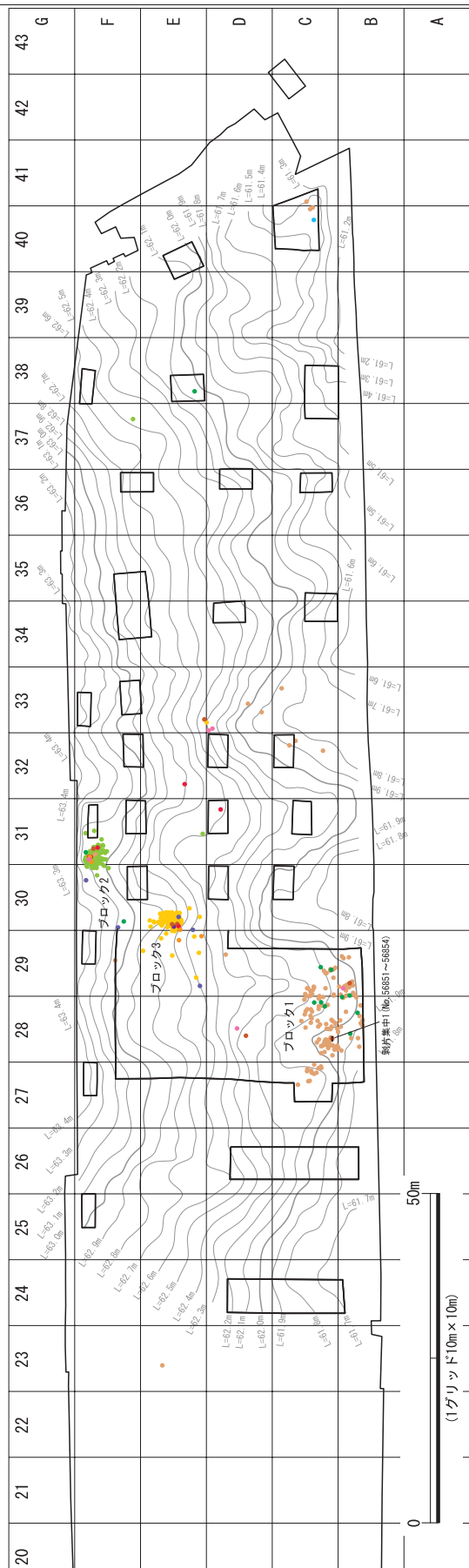
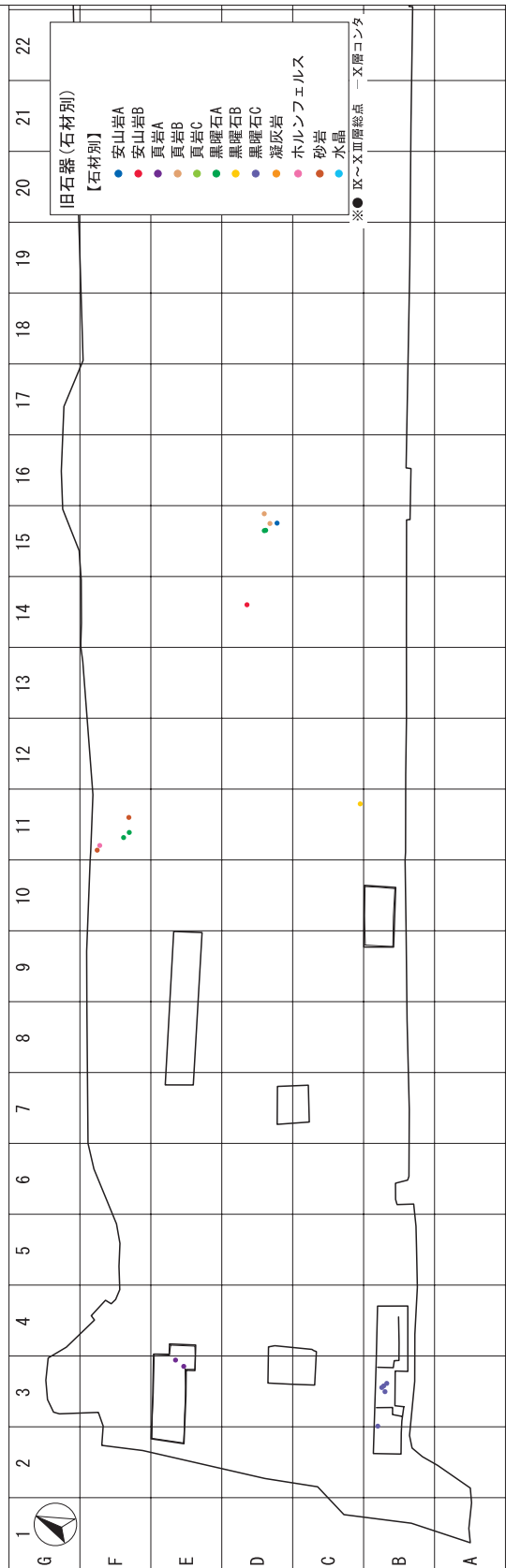
剥片集中箇所1からは、槍先形尖頭器を主体とする石器と素材剥片・微細剥片等が出土した。

石器の基質は黒色で青灰色の風化色で節理の多い頁岩を石材とする石器・剥片類を中心に出土しており、一連の剥離過程と製作工程を考察することが可能である。やや軟質な石材であり、いままで他の石器の石材としては適していないとされてきたが、共通の石材での剥片を利用する石器が存在することは、限られた資源の活用と労力の省力化として、ある意味で必然である。以下では槍先形尖頭器、ナイフ形石器・楔形石器・削器として説明するが、定型的な石器として成立するかどうかはさらに検討が必要である。石材は、S001・S032がホルンフェルス、S022・S024が三船産黒曜石、S034が砂岩である。他は当初に説明した頁岩である。

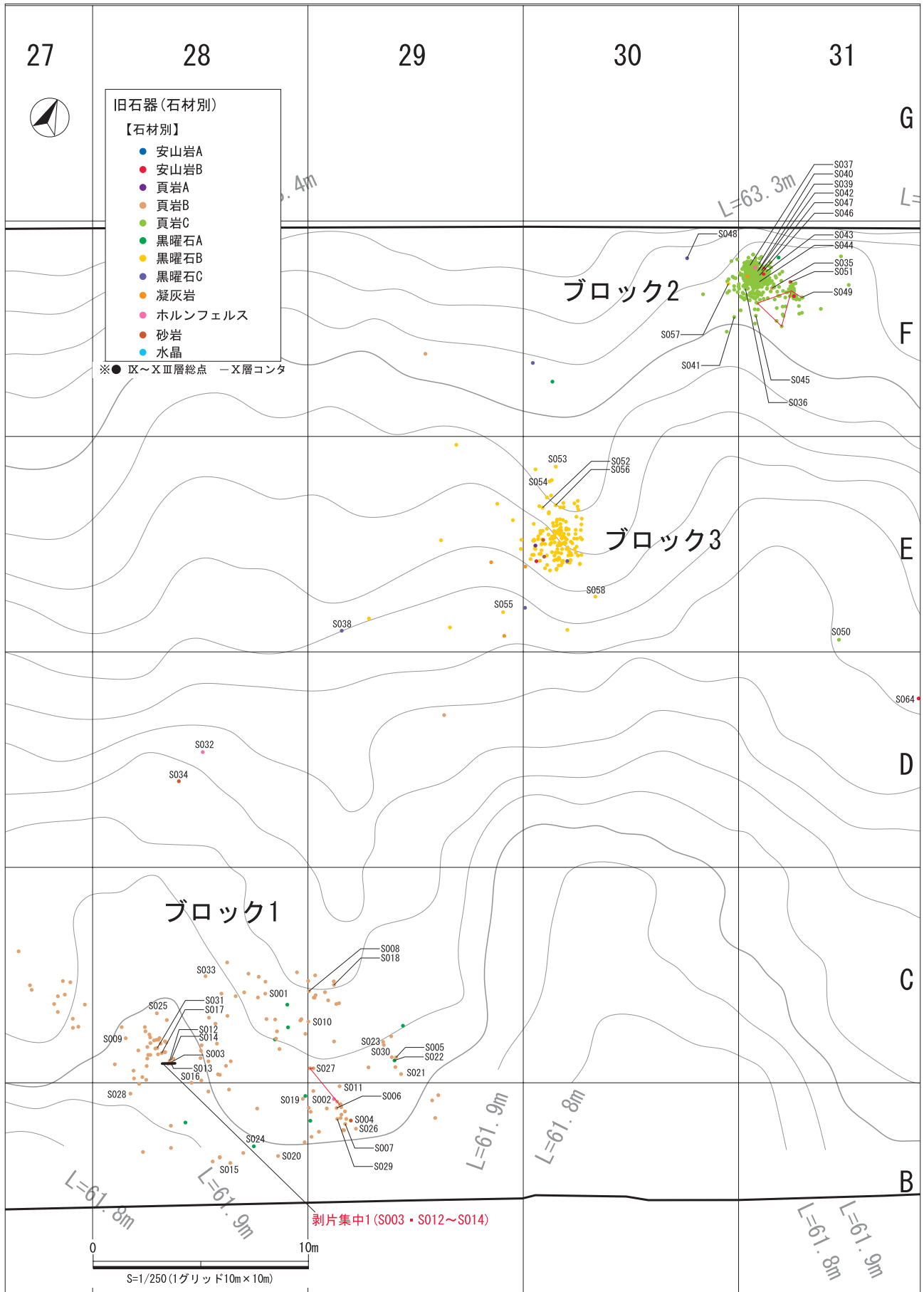
S001は剥片尖頭器で、基質が黒色で風化色が黄白色の節理の多いホルンフェルスを石材とする。縦長剥片を利用して、左側縁をブランディングして、基部に抉り状の整形剥離を行う。打点・打瘤は留置されている。取り上げ時に節理で三分した。基部の稜線が摩滅しているのが観察され、主要剥離面側には打瘤部と腹面に広く摩滅・輝斑^{註1}がみられる。

S002～S006は槍先形尖頭器^{註2}である。S002は縦長剥片を素材とし、右側は剥片形状を生かしながら側縁は平坦剥離を行う。左側は背面側から急角度の剥離を入れ、打面側も厚さを減じるために、打面・打点を飛ばして整形剥離している。先端に刺突痕がある。基部側の稜線に摩滅痕がみられる。第18図にあるように左側縁側の基部と中位に円錐状の抉りと線状の抉りがみられる。中位の

※石材については、第29表『小牧遺跡石材分類表 (P172)』を参照。



第10図 旧石器出土状況図 (1)



第11図 旧石器出土状況図 (2)

挟り部分の逆方向には剥離と顕著な摩滅痕跡が観察され、紐状のもので結索痕跡の可能性を提起したい。以下いくつか同様の痕跡が観察される（→で第16図・第17図に呈示）。S003は、横長剥片を素材として、左側縁を急角度に整形剥離している。打面・打点は除かれている。背面側の稜部と腹面側の左側縁辺の下部と中位に摩滅痕が観察できる。第18図の写真に中位の円錐状の挟りがあり、同様の痕跡が3ヶ所にみられ、その反対側腹面には摩滅面が形成されている。S004は横長剥片を素材として、打面と打点を除去し、左側縁全体に急角度の整形剥離がなされる。基部は両側共に浅く挟られる。基部の両面の稜部と背面の稜の一部に摩滅痕がみられる。写真にあるように背面左側下位に円錐状の痕跡と右側に溝状の白くみえる痕跡があり、結索痕跡の可能性もある。さらに上位にもいくつか確認できる。S005は横長剥片を素材とし、右側を直線状に打面・打点除去しながら整形し、片側基部に挟り整形が見られる。先端を欠損した槍先形尖頭器と考えられる。中央稜部の中央と、主要剥離面側の打点側の厚いところと基部の一部に摩滅痕跡がみられる。S006は厚みのない剥片であるが、二側縁が整形剥離され、鋭い縁辺部をそのまま残すが先端が欠損する。基部の片側の挟りから尖頭器の可能性もある。主要剥離面側の身の厚い部分の稜部が摩滅して、左右縁辺に2ヶ所ずつ結索痕跡がみられる。

S007はやや横剥ぎの剥片であるが、打点・打瘤を除去して、一側縁に背面側からブランディングを施しており、先端部が折れたナイフ形石器である。腹面側の打瘤除去剥離の稜部に摩滅がみられる。

S008は先端部を使用した石器として、先端部を下位にしている。右側縁を急角度で整形して、鋭い先端部としている。

S009は縦長の素材縁辺をそのままに、基部にわずかに調整が行われる。右側縁に5ヶ所の鋸歯状のくり込み（円錐状の挟り）があり、基部の両側縁と背面の稜線に摩滅痕が見られる。折れているのは先端部と考えられる。結索痕とすれば片方が着柄部に埋入していることも考えられ、片刃の石器の可能性も考えられる。

S010は横長剥片を素材とし、打面と打点を除去して、そのところに挟りを作り、片側挟りの先端部欠損の槍先形尖頭器である。両側縁の整形は顕著ではない。基部側の稜線と腹面にわずかに摩滅痕がみられる。

S011は槍先形尖頭器の先端部とも考えられ、横長剥片を素材として、左側縁に整形剥離の痕跡がうかがわれる。腹面の稜に摩滅痕がみられる。

S012は、横長の目的剥片で、打面と打点を飛ばし、厚みを取った段階の剥片であろう。両面の稜部に摩滅痕がみられる。

S013も同様に横長剥片の腹面側の打面・打点を剥離

している。両面の稜線や下位に摩滅痕がみられる。

S014は横長の素材剥片である。両面の稜部に摩滅痕がみられる。S012・S014からは、同一打面で同一方向から横長剥片を連続剥離したことが窺われる。また、S003に伴ってS012～S014の剥片が出土しており、柳葉形石槍の目的剥片であることは明らかである。

S015は横長の剥片で、二次加工も顕著ではないことから素材剥片としたが、腹面の稜部に第19図の写真の線状痕を伴う摩滅痕跡があり、右側縁の鋭いエッジ部分が摩耗して面をなしている。また右側縁のエッジ部分には、微小剥離後に摩滅した痕跡がみられる。

S016は三角形の剥片であるが、背面の最も厚い部分の稜部と、腹面の広い光沢面があり、摩滅痕と考えられる。また、右側側縁のエッジも微小剥離後に摩耗により潰れている。S015は削器で、S016は槍先の可能性もある。

S017は横長剥片で折断面で、下位の両側縁が浅く挟られるように整形されている。槍先形尖頭器の基部の可能性もある。

S018は両側縁が整形されて、柳葉形の石槍の基部と考えられる。両面の稜部にわずかに摩滅痕がみられる。

S019は横剥ぎ剥片の底面側の節理面に、急角度で刃部と使用痕がある。その反対側のエッジはブランディングされており、削器とする。

S020は横長剥片で、背面左辺（剥片からすると折断面）に使用痕がみられる。反対側のエッジはブランディングされており、削器の可能性もある。稜部に摩滅痕が見られる。

S021は横長の剥片で、背面左側の側縁節理面の上にブランディングが入り、上辺に使用痕らしき剥離が見られる。削器であろう。

S022は気泡が多い三船産の黒曜石の剥片で、剥片形状のまま鋭いエッジに微細な剥離が見られる。使用痕剥片である。

S023は剥片の上下辺に複数回の剥離がみられ、楔形石器の可能性もある。

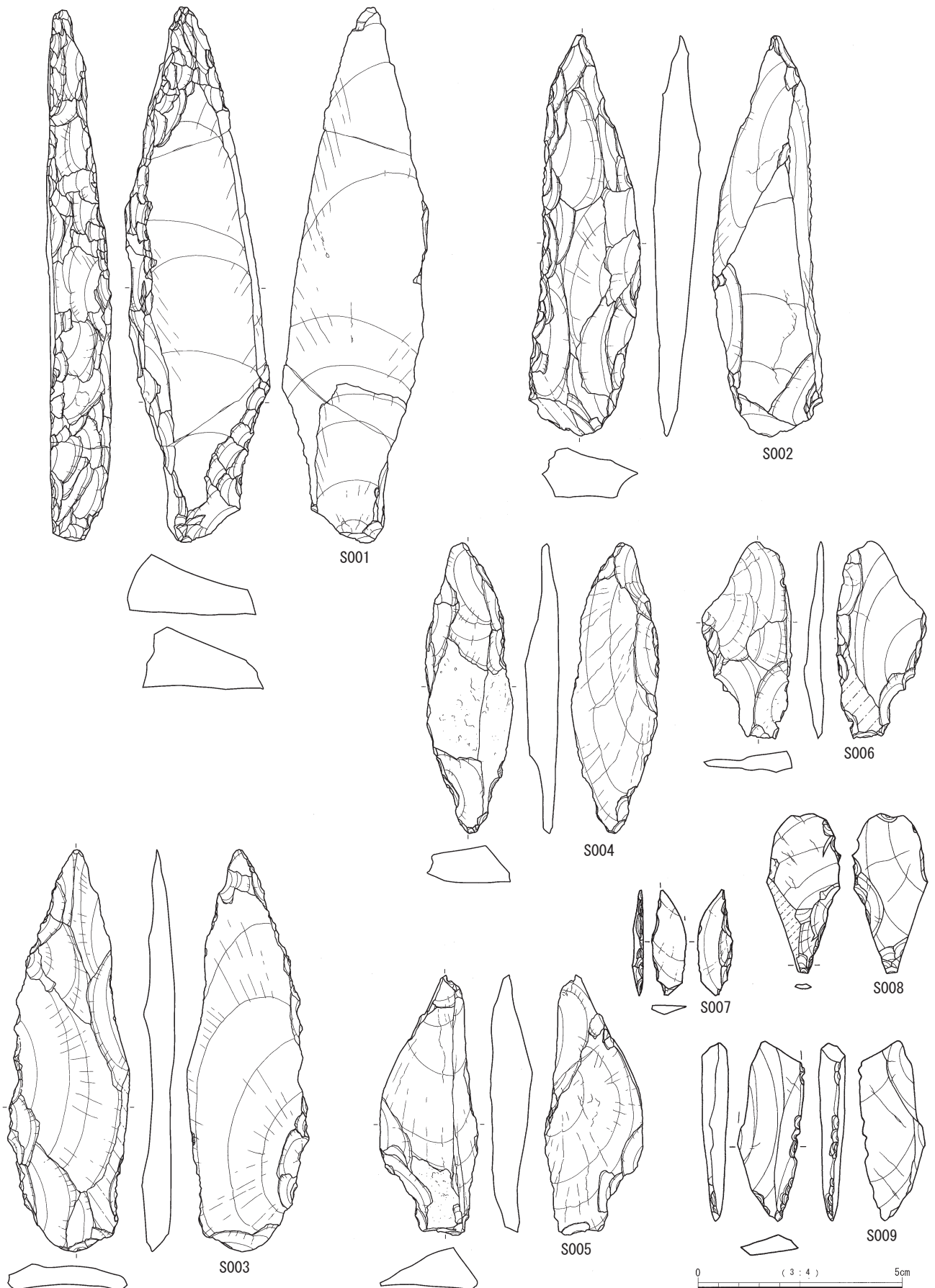
S024は三船産の黒曜石を剥片を素材として、下縁に急角度の刃部がつくられ、搔器である。

S025は横長剥片であるが、剥片形状のまま、背面の稜部と腹面の打瘤部と鋭い側縁に摩滅痕が見られる。下辺のエッジが摩滅により面をなしている。

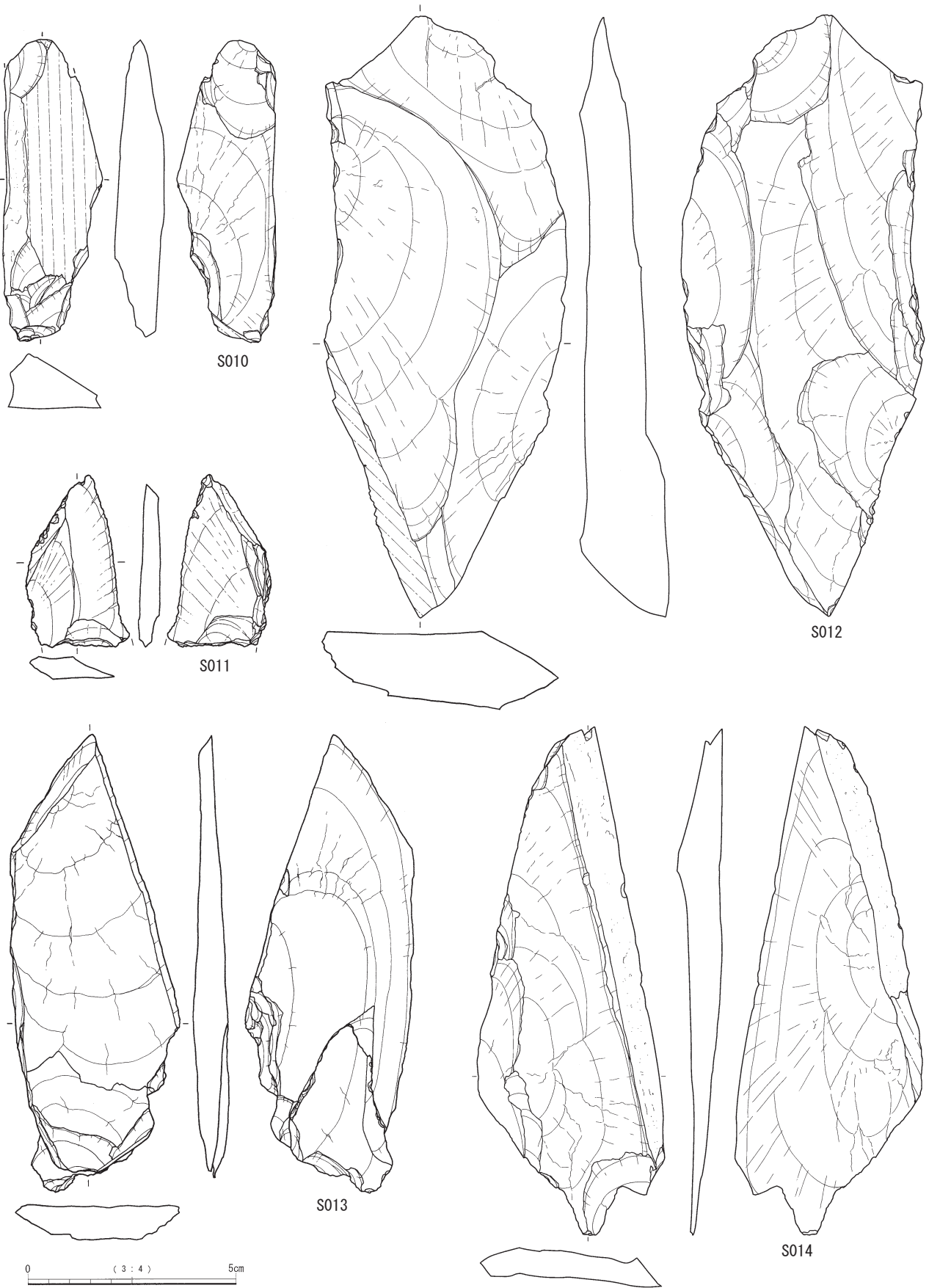
S026は横長剥片で腹面稜部と右側縁の刃部が摩耗で潰れている。削器の可能性もある。

S027は扁平な剥片であるが、腹面側の稜部と先端部と腹面側右側縁に摩滅痕がある。背部右側縁は、一部剥離がやや急角度であるが、平坦剥離で刃部として整形したものと判断した。削器と考えられる。

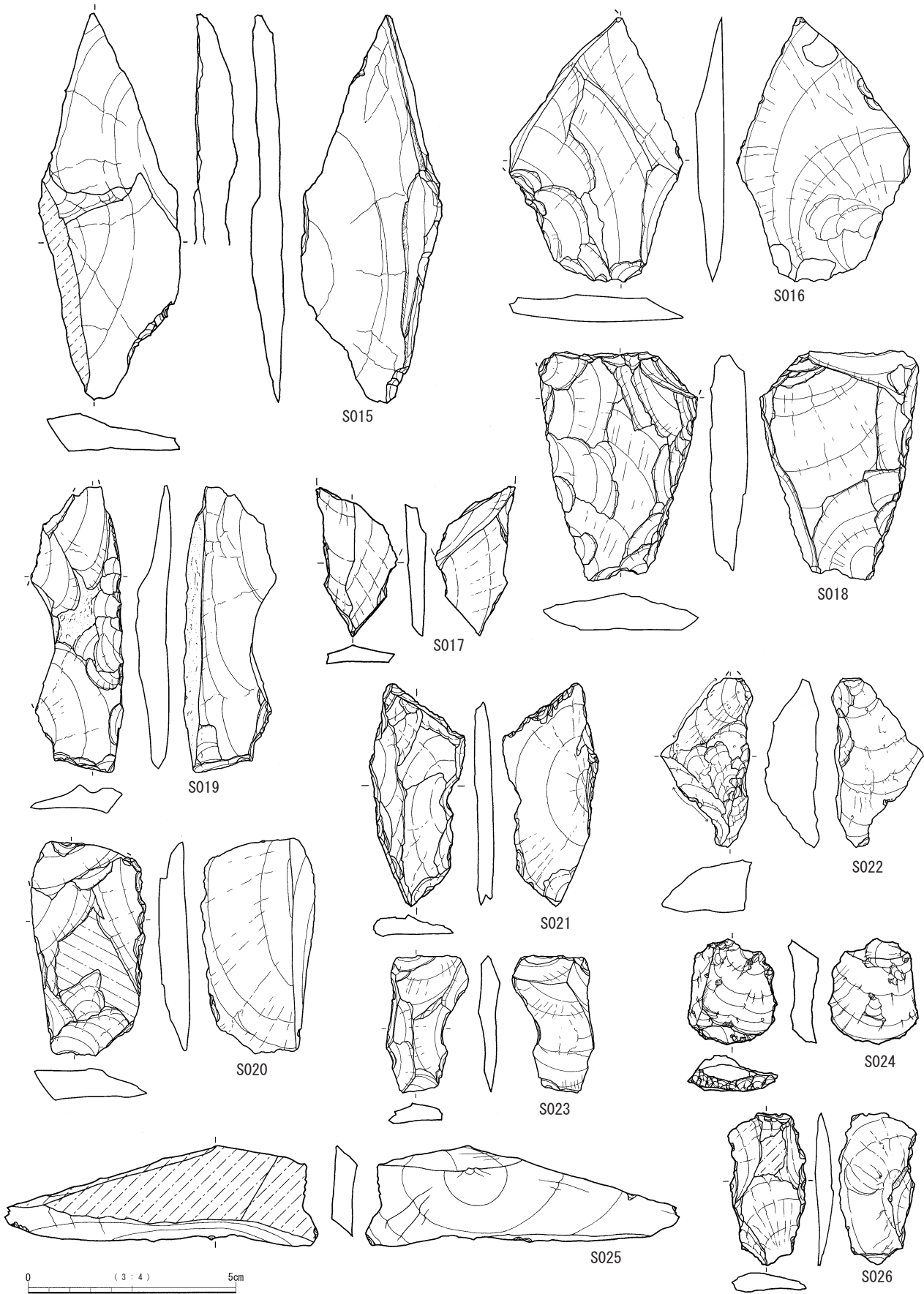
S028は横剥ぎの剥片、S029も横剥ぎの剥片であるが、左側縁に使用痕が見られる使用痕剥片である。



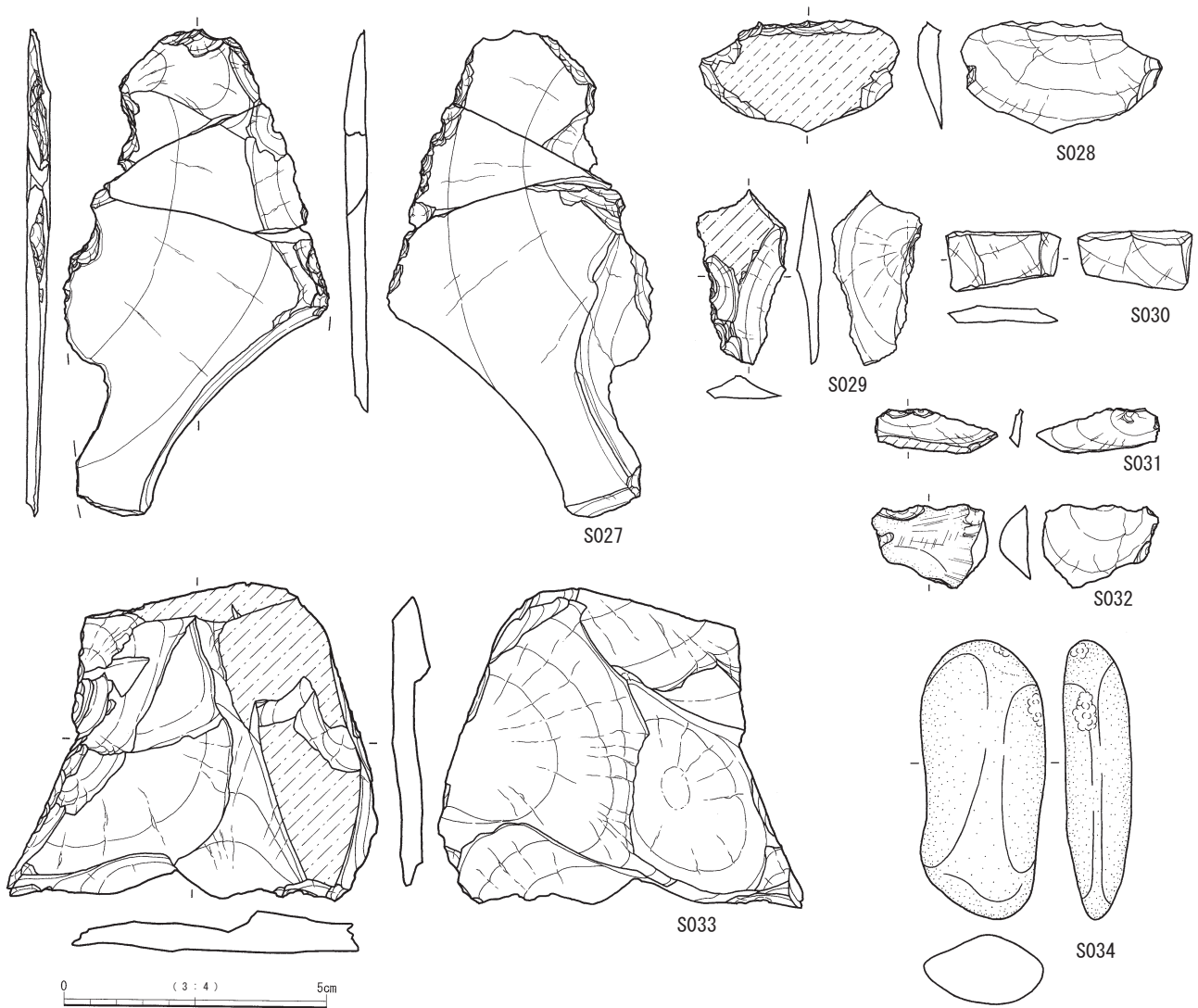
第12図 第I文化層の石器(1)



第13図 第I文化層の石器(2)



第14図 第I文化層の石器(3)



第15図 第I文化層の石器(4)

S030は剥片が折断されたものである。S031は横剥ぎの小剥片である。S032は礫面に擦痕がある。

S033は大きめの剥片であるが、節理に大きく影響されながら、剥離が行われている状況がうかがわれる。

S034は砂岩の円礫で、先端と側面に打痕があり、ハンマーストーンと考えられる。

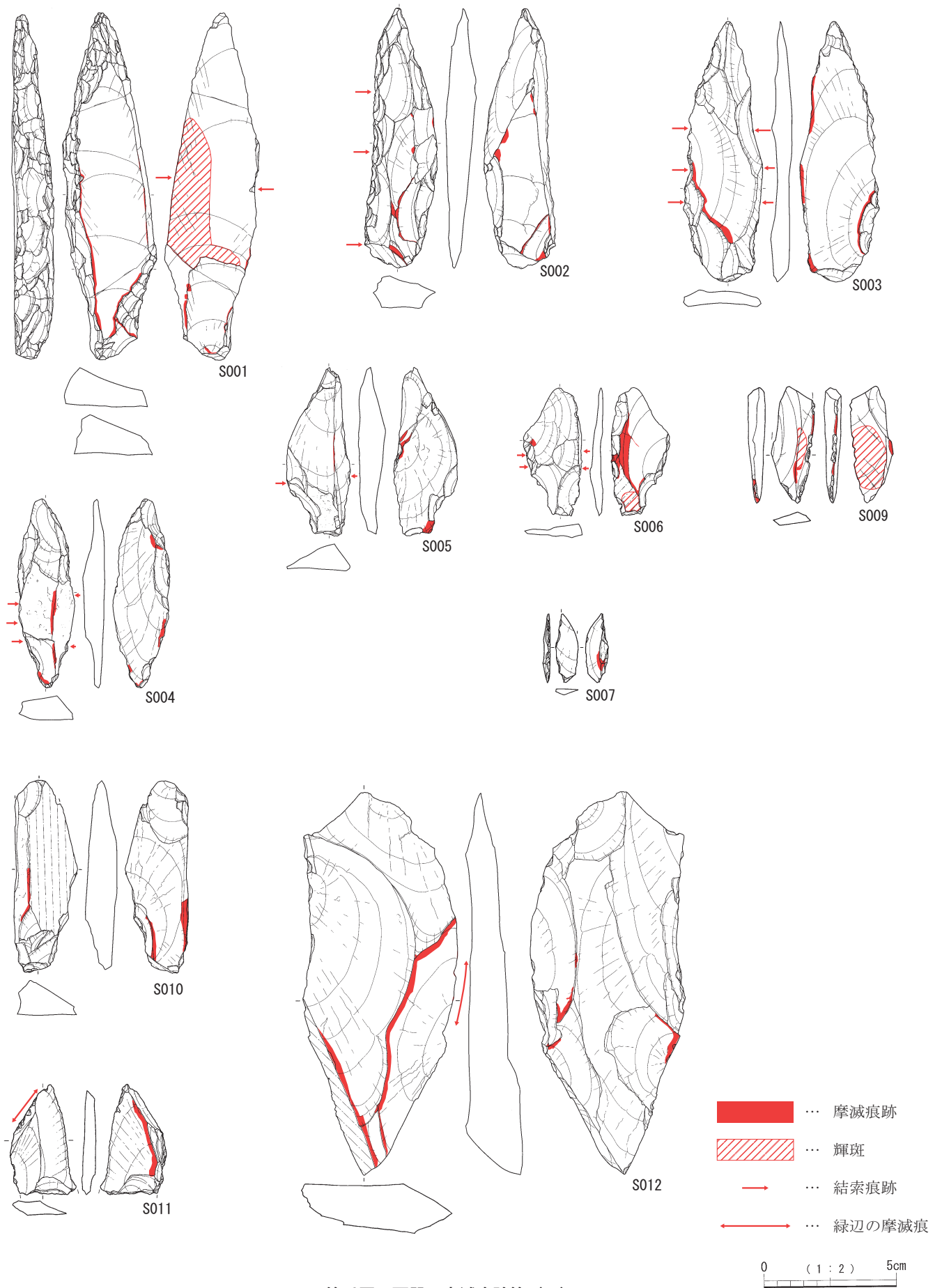
S003・S012～S014はまとめて出土しており、槍先形尖頭器の製作を目的に横剥ぎの剥片を剥出し、整形剥離を施していく。この過程で生じた剥片を利用して、槍先形尖頭器以外の側縁利用の石器や先端利用の石器を製作しているものと考えられる。

また、槍先形尖頭器は基部と判断される場所の稜部分に摩耗痕がみられ、削器としたものについては刃部と考えられる側縁と、稜部に摩耗が見られる。S015・S016・S026・S028のいずれも刃部と反対側の稜部に摩耗痕があり、また結索痕の可能性のある剥離(抉り)部分の存在から、これらは着柄の可能性を示す。S015・S016・S026は刃部も鈍ったように潰れているので、これらは

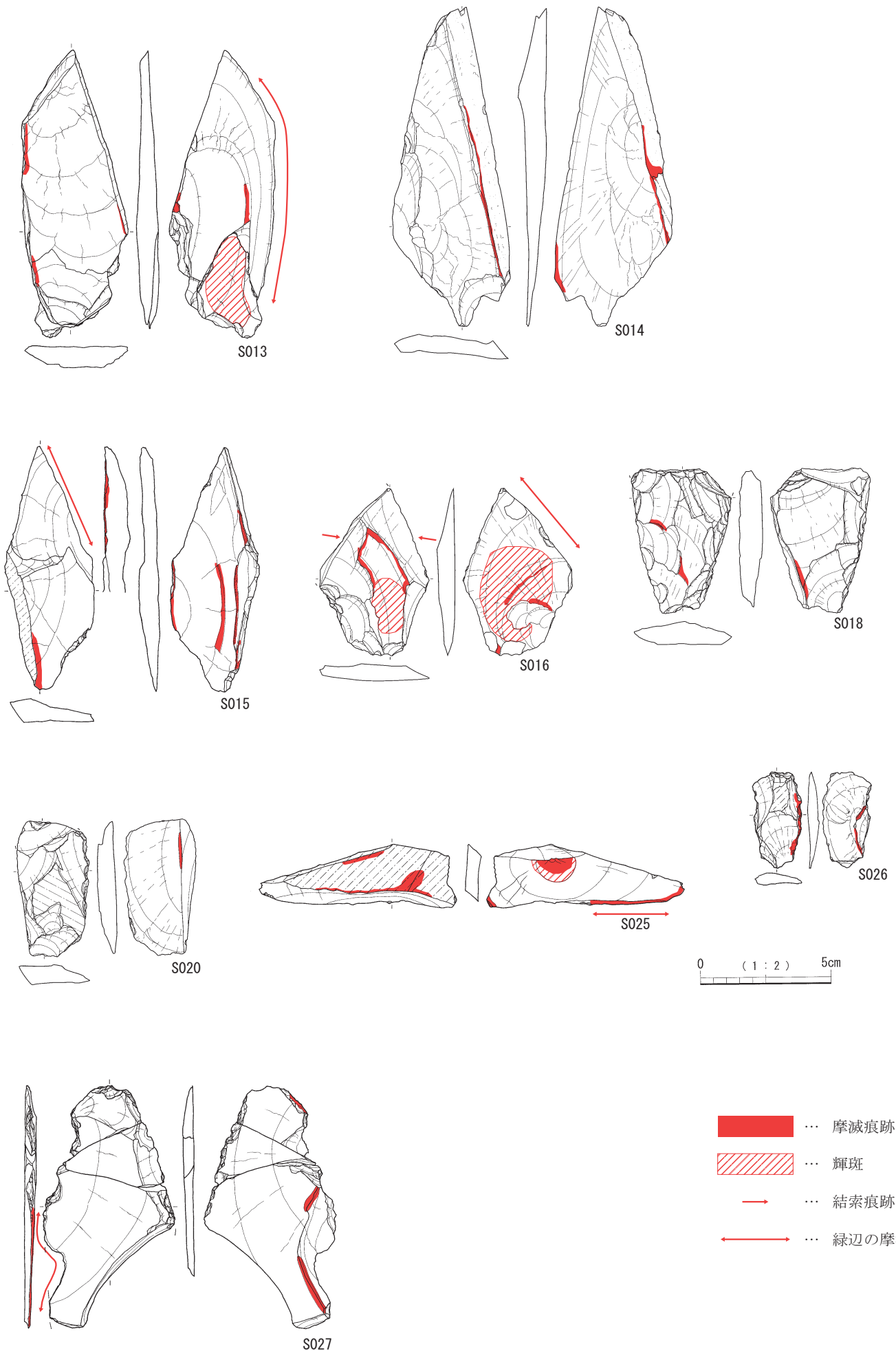
使用によるものと考えられないだろうか。例えば大型獣の解体に際し、解体しやすいように長い柄を着装し、骨・軟骨等を解体し、刃部が鈍ってしまったと推測できないであろうか。

註1 着柄について御堂島氏らの研究により、着柄痕跡が形成された部位は、左右の側縁、基端縁、背・腹面の稜線やバルブ等の凸部、基端面であり、着柄によって輝斑が生じることや、併せて微小剥離痕跡・微小光沢面・線状痕跡等について実験結果が述べられている(御堂島2016)。このため用語はこれに準じたい。

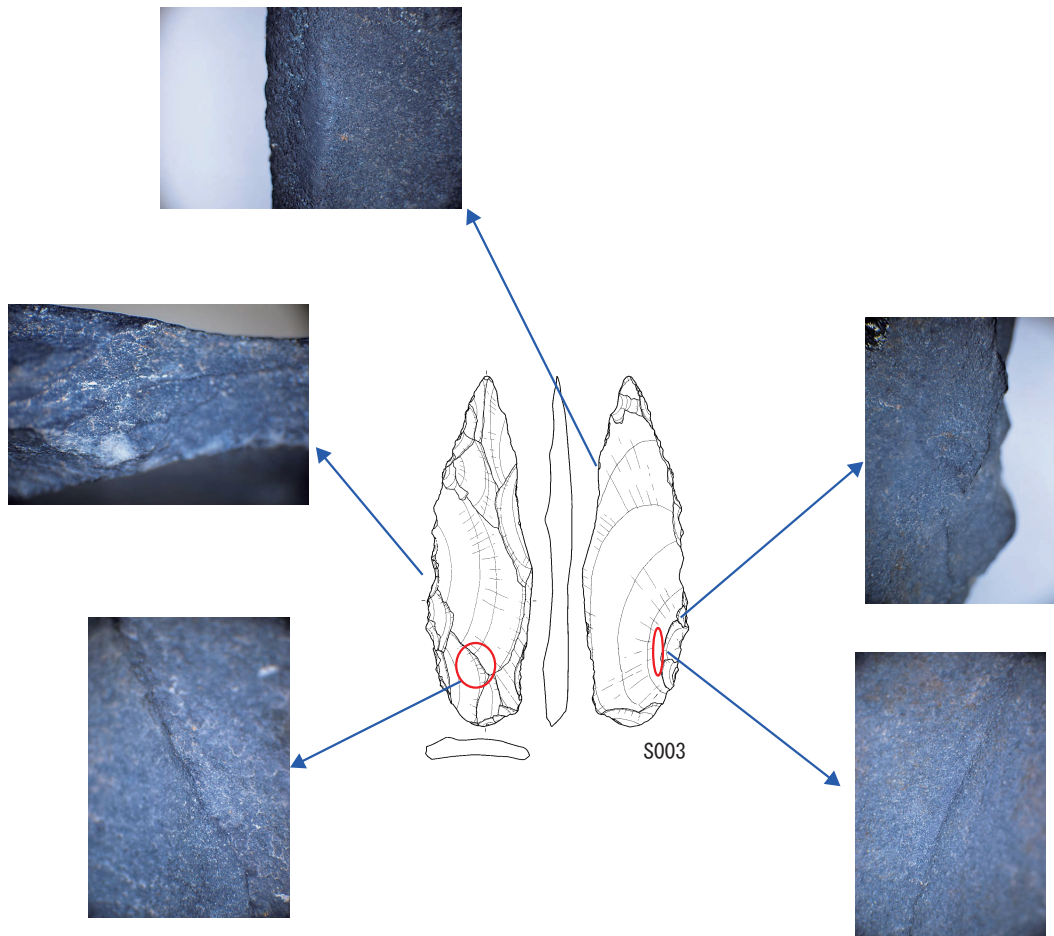
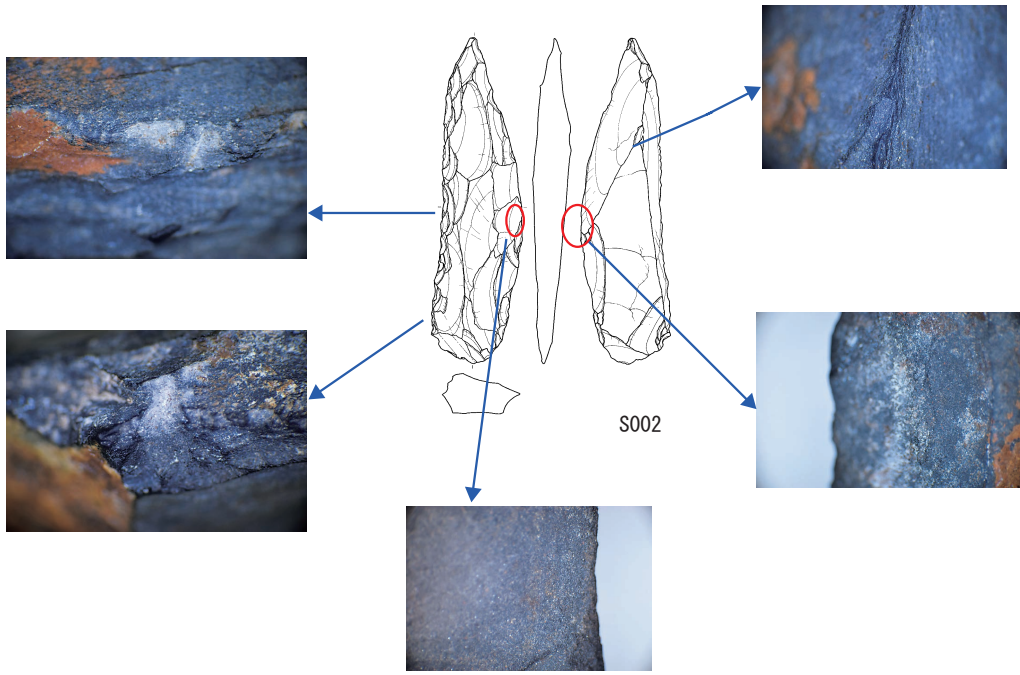
註2 槍先形尖頭器は両面加工を基本としており、平面形が木の葉形を呈している。ここでは、長野氏の定義(長野2003)により、ナイフ形石器ではなく、「小牧3A型石槍」とし槍先形尖頭器とした。



第16図 石器の摩滅痕跡等 (1)

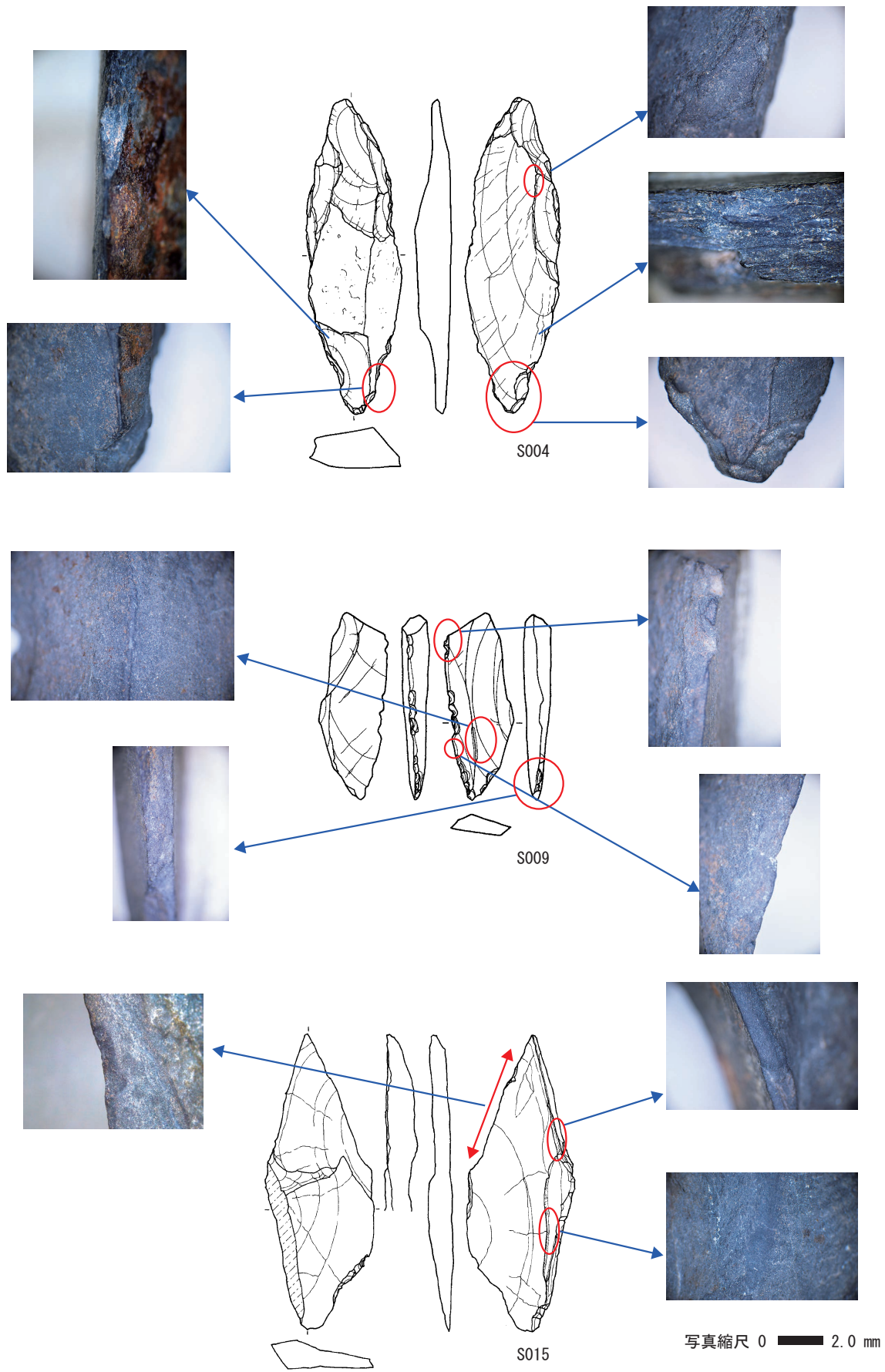


第17図 石器の摩滅痕跡等 (2)

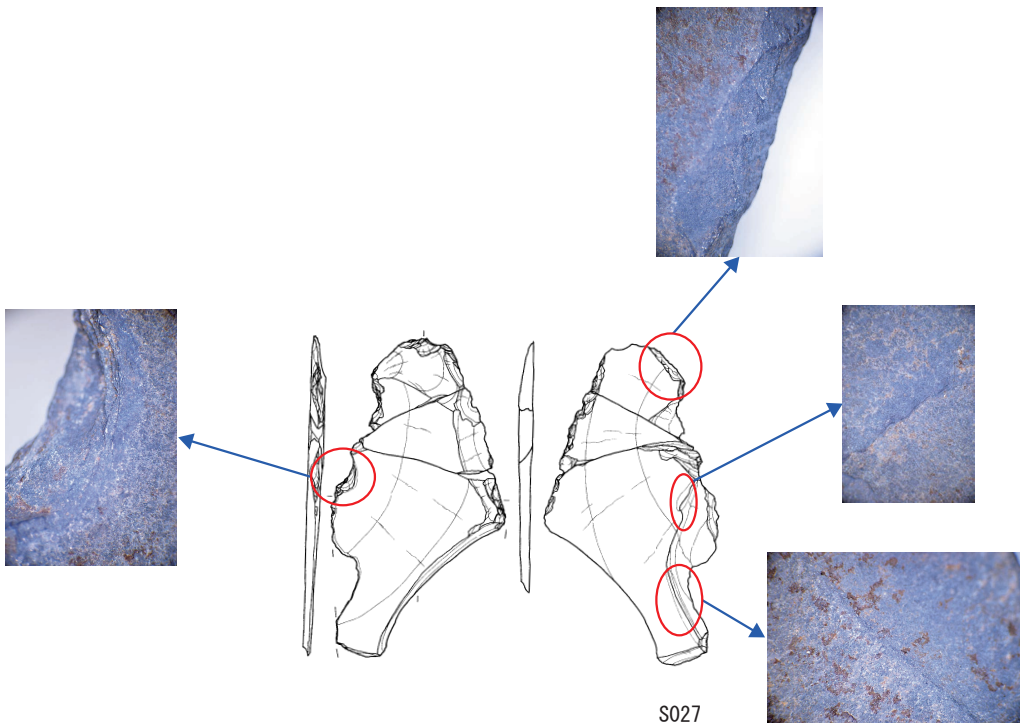
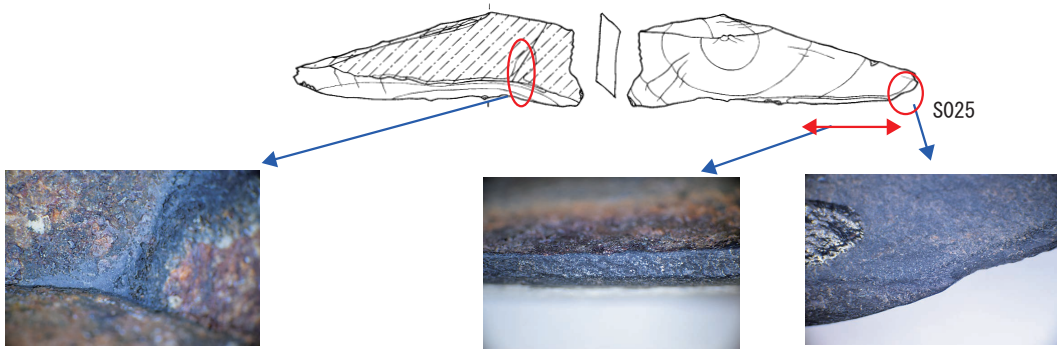
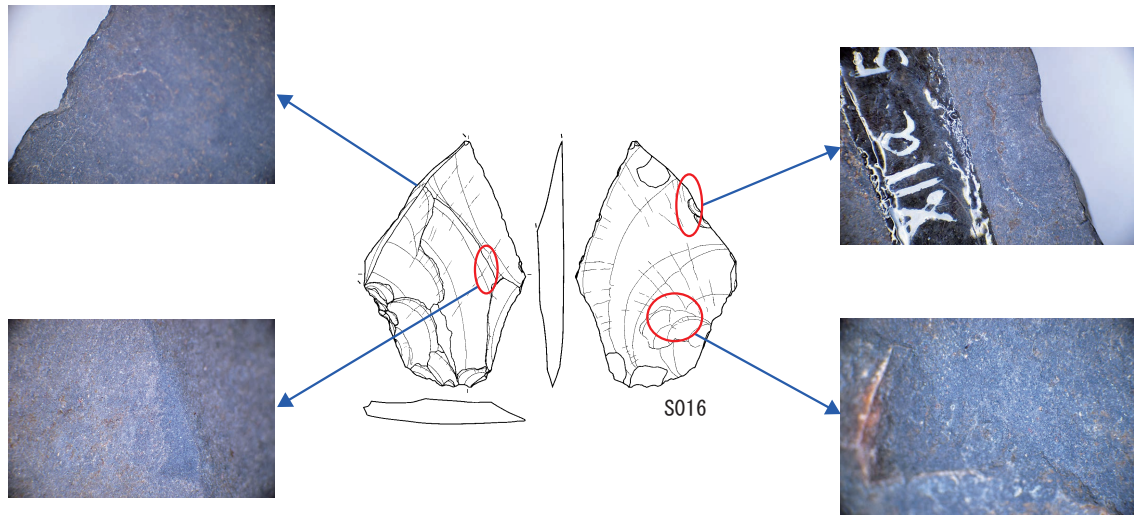


写真縮尺 0  2.0 mm

第18図 摩滅痕跡等写真（1）



第19図 摩滅痕跡等写真（2）



写真縮尺 0  2.0 mm

第20図 摩滅痕跡等写真 (3)

第3表 石器観察表 (第I文化層出土)

挿図番号	掲載番号	取上番号	出土区	層	ブロック名	器種	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	石材	石材分類	備考
12	S001	56708	C28	XIa	ブロック1	剥片尖頭器	131.70	36.00	14.80	65.02	ホルンフェルス	-	
	S002	56535	B29	XIIa	ブロック1	槍先形尖頭器	98.20	27.00	12.50	28.78	頁岩	頁岩B	鉄分付着
	S003	56853	C28	XIIb	ブロック1	槍先形尖頭器	99.00	30.00	6.50	19.78	頁岩	頁岩B	
	S004	56520	B29	XI	ブロック1	槍先形尖頭器	71.50	21.50	9.00	12.32	頁岩	頁岩B	鉄分付着
	S005	56630	C29	XI	ブロック1	槍先形尖頭器	64.00	24.00	10.50	13.29	頁岩	頁岩B	鉄分付着
	S006	56531	B29	XI	ブロック1	槍先形尖頭器	48.20	22.00	5.00	4.45	頁岩	頁岩B	鉄分付着
	S007	56523	B29	XI	ブロック1	ナイフ型石器	25.50	8.20	2.70	0.46	頁岩	頁岩B	
	S008	56662	C28	XI	ブロック1	先端使用石器	39.00	18.00	1.50	2.54	頁岩	頁岩B	
	S009	56794	C28	XIIa	ブロック1	先端使用石器	43.50	16.00	5.50	3.44	頁岩	頁岩B	
13	S010	56715	C28	XIa	ブロック1	槍先形尖頭器	73.00	24.00	13.00	22.00	頁岩	頁岩B	基部
	S011	56956	B29	XIIa	ブロック1	槍先形尖頭器	41.50	24.40	6.50	5.35	頁岩	頁岩B	先端
	S012	56852	C28	XIIb	ブロック1	素材剥片	144.50	57.60	19.00	144.90	頁岩	頁岩B	鉄分付着 S003と共に出土
	S013	-	-	-	ブロック1	接合資料	110.00	40.50	8.50	33.06			
		56851	C28	XIIb	ブロック1	素材剥片	-	-	-	30.61	頁岩	頁岩B	鉄分付着 柳葉形石槍の目的剥片か 接合 レイアウトNo.S013
56850		C28	XIIb	ブロック1	素材剥片	-	-	-	2.45				
S014	56854	C28	XIIb	ブロック1	素材剥片	122.00	45.00	9.50	46.59	頁岩	頁岩B	鉄分付着	
14	S015	56973	B28	XIIa	ブロック1	削器	93.00	34.00	9.00	19.72	頁岩	頁岩B	
	S016	56596	B28	XIIa	ブロック1	槍先形尖頭器	64.00	41.90	7.00	14.78	頁岩	頁岩B	鉄分付着
	S017	56860	C28	IXb	ブロック1	槍先形尖頭器	36.00	19.00	4.40	3.71	頁岩	頁岩B	基部
	S018	56657	C29	XI	ブロック1	槍先形尖頭器	55.50	38.50	9.00	19.93	頁岩	頁岩B	基部 柳葉形
	S019	56553	B28	XI	ブロック1	削器	69.00	22.50	6.70	11.49	頁岩	頁岩B	鉄分付着
	S020	56561	B28	XI	ブロック1	削器	52.00	27.70	7.80	11.88	頁岩	頁岩B	鉄分付着
	S021	56627	C29	XI	ブロック1	削器	54.20	23.00	5.00	5.32	頁岩	頁岩B	
	S022	56629	C29	XI	ブロック1	二次加工剥片	41.00	22.20	12.70	7.61	黒曜石	黒曜石A	
	S023	56634	C29	XI	ブロック1	楔形石器	33.20	19.70	4.70	3.29	頁岩	頁岩B	
	S024	56568	B28	XI	ブロック1	搔器	26.00	21.50	9.00	3.34	黒曜石	黒曜石A	
	S025	56790	C28	XIIa	ブロック1	削器	24.00	75.00	6.00	12.11	頁岩	頁岩B	
15	S027	-	-	-	ブロック1	削器	37.00	18.40	4.60	3.05	頁岩	頁岩B	
		-	-	-	ブロック1	接合資料	92.50	50.50	4.80	17.50	頁岩	頁岩B	
		56530	B29	XIIa	ブロック1	削器	-	-	-	10.99	頁岩	頁岩B	
		56622	C29	XI	ブロック1	削器	-	-	-	2.81	頁岩	頁岩B	接合 レイアウトNo.S027
	56623	C29	XI	ブロック1	削器	-	-	-	3.70	頁岩	頁岩B		
	S028	56583	B28	XI	ブロック1	剥片	21.00	38.50	0.45	3.35	頁岩	頁岩B	
	S029	56525	B29	XI	ブロック1	使用痕剥片	33.50	17.10	4.30	1.78	頁岩	頁岩B	
	S030	56633	C29	XI	ブロック1	剥片	11.00	22.00	3.00	0.89	頁岩	頁岩B	
S031	56858	C28	XIIa	ブロック1	剥片	8.50	23.50	2.50	0.46	頁岩	頁岩B		
S032	56989	D28	X	ブロック1	研磨礫片	16.00	22.00	6.00	2.07	ホルンフェルス	-		
S033	56671	C28	XIIa	ブロック1	剥片	60.00	70.60	8.20	31.21	頁岩	頁岩B		
S034	56987	D28	XIII	ブロック1	ハンマーストーン	50.85	24.00	13.50	22.70	砂岩	-		

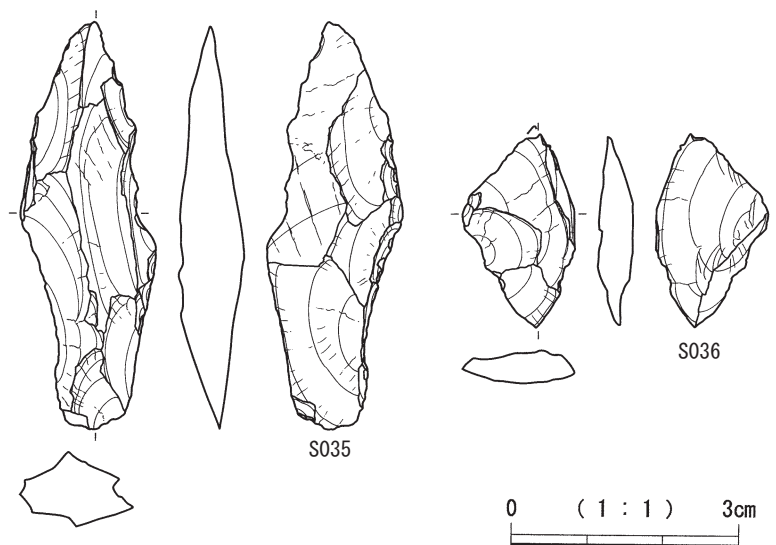
3 第II文化層

第II文化層の調査では、ブロック1ヶ所を検出したほか、調査区全体の数ヶ所のトレンチから少量の遺物の出土がみられた。

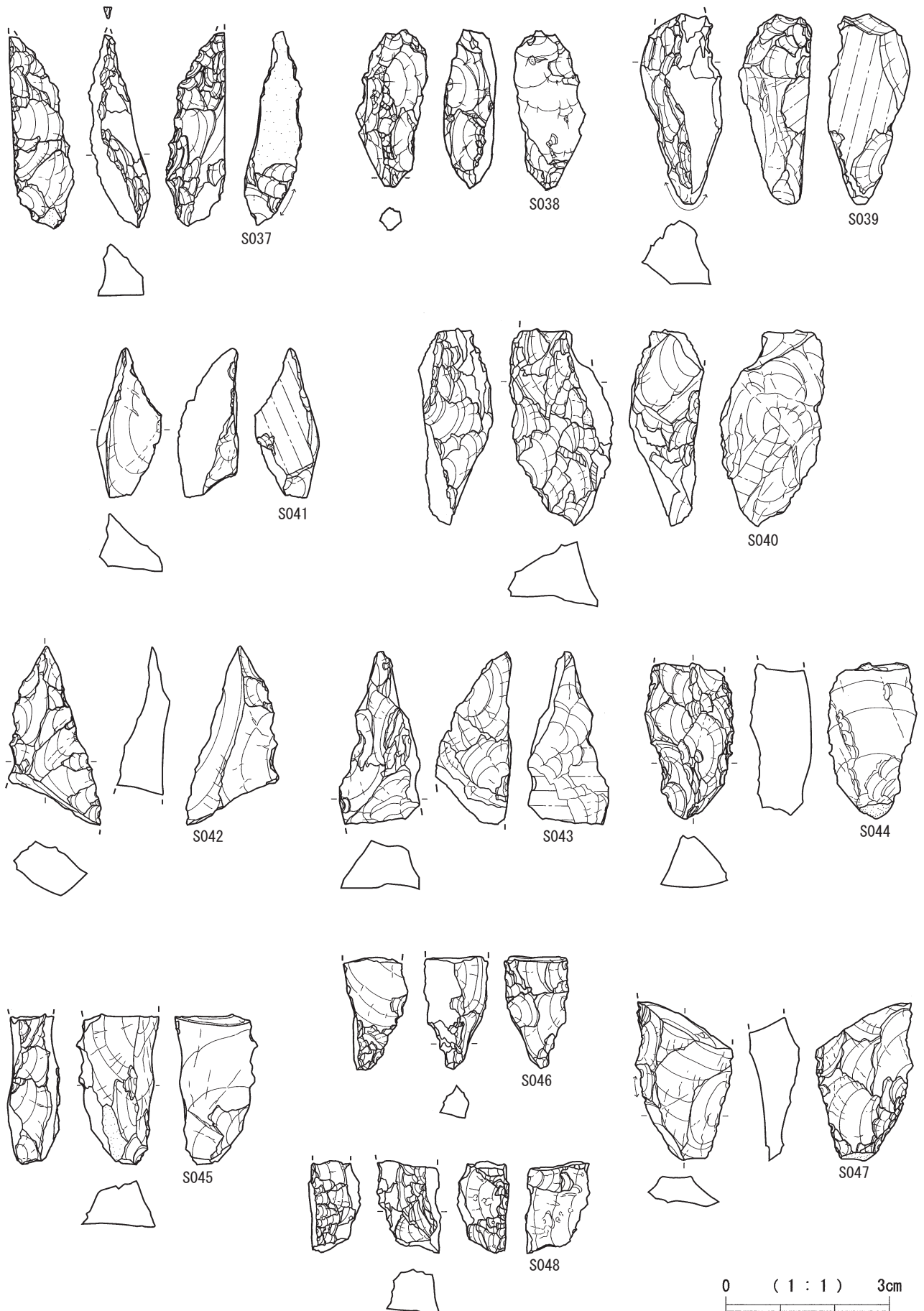
(1) 遺構 (第10・11図)

ブロック2

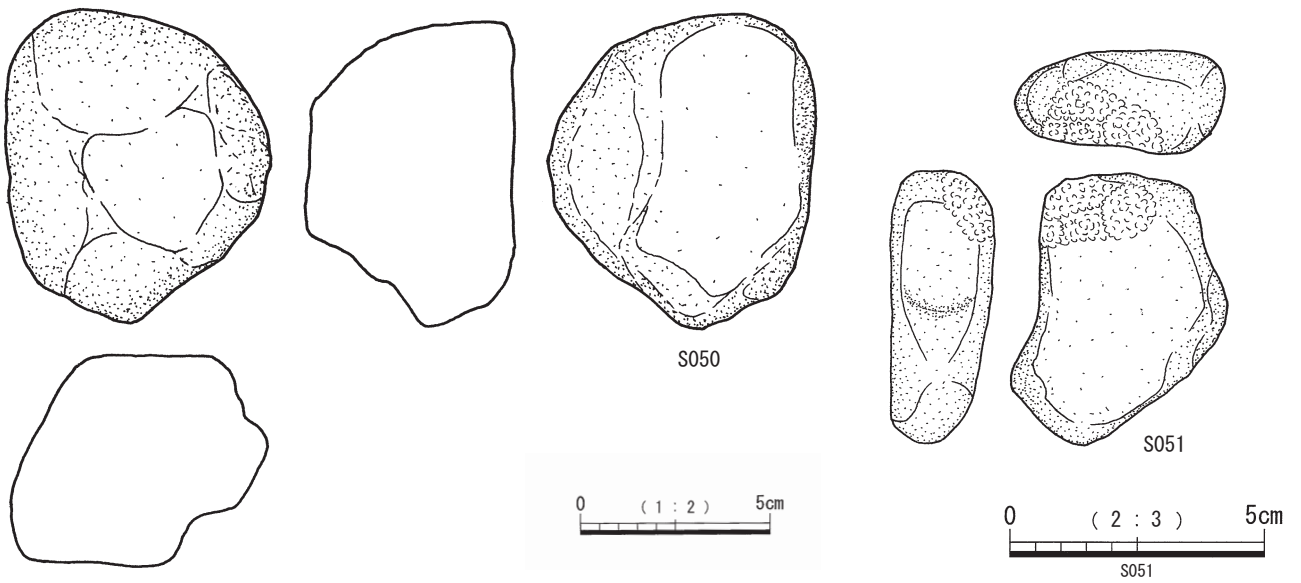
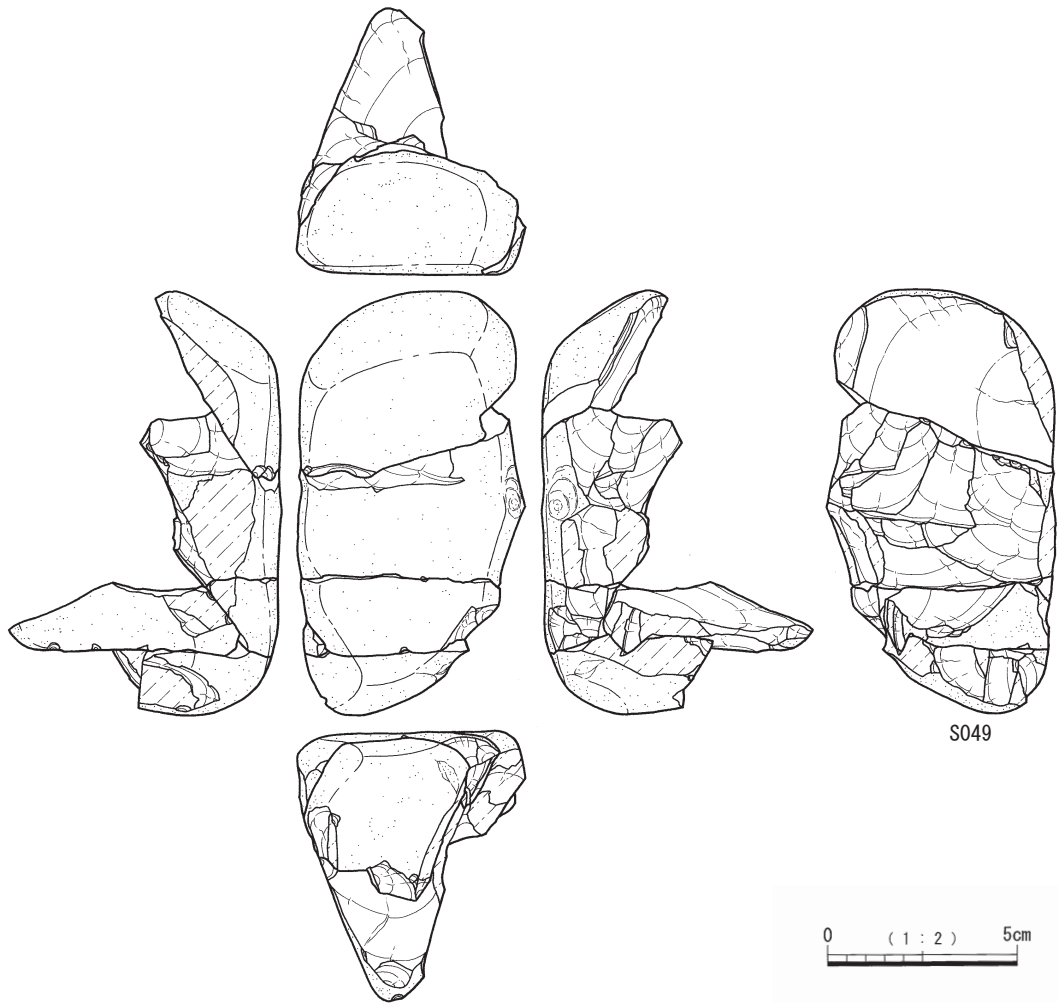
F-30・31区のX～IXb層で三稜尖頭器・ナイフ形石器を伴うブロック2を検出した。石器、石器未成品、石器欠損品、剥片、微細剥片、石核、ハンマー等石器製作にかかわる遺物が東西方向に約5m、南北方向に約4mにわたって出土した。礫群を構成していたと考えられる。礫の出土はなかった。遺物の出土層位がX～IXb層の複数の層にわたっているが、ブロック2の遺物が現位置をとどめていないものと考え、遺物の出土が多いX層がブロック2の帰属する層と考える。



第21図 第II文化層の石器 (1)



第22図 第II文化層の石器(2)



第23図 第Ⅱ文化層の石器(3)

(2) 遺物 (第21～23図 S035～S051)

ブロック2からは、ナイフ形石器、三稜尖頭器、ハンマーと共に打面調整・石器製作のための剥片、石器製作時の微細剥片・石核・原石などが出土している。

これらの素材となった岩石は、頁岩C類がほとんどである。その他は気泡の多い黒曜石である。剥片類についても同様に、黒曜石が数点ある以外は全て頁岩C類であり、ブロック2は頁岩C類の単一石材のブロックに近い。石器や剥片等に頁岩C類の中でも若干の違いがみられることから、用いた原石・石核は数個であったと考える。

S035は、頁岩B類の縦長剥片を素材とするナイフ形石器である。素材剥離時の打点は、残されていない。左側に側縁加工が施され、微細な基部加工は施されていない。S037以降の石器との剥離の違いから、ナイフ形石器とした。

S036は、頁岩C類を素材とするナイフ形石器である。明瞭な側縁加工は施されず、少量の基部加工を施すのみの小型のナイフ形石器である。

S037～S048は三稜尖頭器である。全て縦長の剥片で、主に頁岩C類を素材としているが、S038、S048は気泡の多い黒曜石C類を素材としている。これらは、断面形状が三角形を呈するものばかりでなく、四角形状を呈するものも多いが、S037・S038・S040・S044が製作意図の基本形状であり、使用している石材が微細な節理が多いものであるため石材の特性により四角形状を呈していると考え三稜尖頭器と判断した。

S037は、ほぼ完全形で先端部をわずかに欠いている。背面に自然面が大きく残り、断面は四角形状をしており、基部・側縁に細かい加工が施される。ブロック2の三稜尖頭器では形状の良いものである。

S038～S040は、先端部のみで下半部を欠くものである。

S039は背面に節理面をよく残し、S040は背面に剥離面をよく残している。

S040は節理面を若干残すものである。

S041～S043は先端部のみのものである。

S041・S043が背面に節理面を残し、S042は背面にも大きな加工が施されている。

S044～S048は下半部のみのものである。

S044・S045・S047は背面に節理面・剥離面をよく残し、S046・S047は背面に大きな剥離が入るものである。

また、S042・S047は背面の剥離からS035のようなナイフ形石器の可能性もある。

S049は、ブロック2内の剥片が接合した資料である。第23図で正面とした礫上部から剥離を行い、縦長の剥片を剥離していった工程が分かる資料である。

ブロック2からは、多くの調整剥片や微細剥片が出土し、全点について接合を試みたが、接合するものはS049の1点のみであった。

S050は、ブロック2の周辺で出土した。頁岩C類の原石で縦約8.2cm×横約7.5cm×高さ約5.5cmを測る。S049に比べると丸みを帯びている。持ち込んだものの石質が悪いため破棄された可能性がある。

第4表 石器観察表 (第Ⅱ文化層出土)

挿図番号	掲載番号	取上番号	出土区	層	ブロック名	器種	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	石材	石材分類	備考	
21	S035	102273	F31	X上	ブロック2	ナイフ形石器	53.50	17.70	10.00	5.93	頁岩	頁岩B		
	S036	102189	F31	IXc	ブロック2	ナイフ形石器	25.50	14.70	4.50	1.56	頁岩	頁岩C		
22	S037	102404	F31	X上	ブロック2	三稜尖頭器	35.20	11.00	11.00	3.16	頁岩	頁岩C		
	S038	56477	E29	IX	ブロック2	三稜尖頭器	28.00	13.50	10.00	2.79	黒曜石	黒曜石C		
	S039	102689	F31	X上	ブロック2	三稜尖頭器	35.00	15.00	13.50	5.52	頁岩	頁岩C		
	S040	102262	F31	X上	ブロック2	三稜尖頭器	36.00	19.00	14.00	8.45	頁岩	頁岩C		
	S041	102159	F30	IXb	ブロック2	三稜尖頭器	27.20	11.70	10.50	2.57	頁岩	頁岩C		
	S042	102602	F30	X上	ブロック2	三稜尖頭器	32.50	17.00	9.70	3.21	頁岩	頁岩C		
	S043	102265	F31	X上	ブロック2	三稜尖頭器	31.50	14.70	14.00	4.98	頁岩	頁岩C		
	S044	102232	F31	IXc	ブロック2	三稜尖頭器	28.50	16.20	11.50	5.30	頁岩	頁岩C		
	S045	102246	F31	IXc	ブロック2	三稜尖頭器	27.50	15.00	10.00	4.53	頁岩	頁岩C		
	S046	102456	F32	X	ブロック2	三稜尖頭器	20.50	11.50	10.09	2.19	頁岩	頁岩C		
	S047	102228	F31	IXc	ブロック2	三稜尖頭器	29.00	17.50	9.50	4.09	頁岩	頁岩C		
	S048	102171	F30	IXc	ブロック2	三稜尖頭器	17.00	12.00	10.00	1.93	黒曜石	黒曜石C		
	S049	102242												
		102279												
		102287	F11	IXc	ブロック2	石核	112.20	60.00	71.60	290.70	頁岩	頁岩C	5点接合資料	
		102391												
		102435												
S050	105243	E31	IXb	ブロック2	原石	82.00	75.00	55.00	406.00	頁岩	頁岩C			
S051	102432	F31	X	ブロック2	ハンマー	55.00	42.50	20.00	68.42	砂岩	砂岩			

S051は、砂岩製のハンマーである。上位左側に敲打痕が良く残る。S051以外にはハンマーは出土していない。

その他、図化しなかった遺物の一部を図版41下段に示した。自然面や節理面が多く残る剥片が多かった。うち左下のものは三稜尖頭器の加工途中に破損したものである可能性がある。

これらの遺物の観察から、ブロック2は数個の原石を持ち込み、素材を剥離し、微細加工を施して三稜尖頭器を主に製作したものであり、石器製作時に破損したものや石器製作に不向きであった剥片はブロック2に残っていたものであると考えられる。

4 第Ⅲ文化層

第Ⅲ文化層の調査では、ブロック1ヶ所を検出したほか、調査区全体の数ヶ所のトレンチから少量の遺物の出土がみられた。

(1) 遺構 (第10・11図)

ブロック3

E-30区IX層で細石刃核を伴うブロック3を検出した。

細石刃核4点、搔器1点、ブランク1点と共に細石器を剥離した後の剥片、剥離後細石器を作出しなかった剥片、打面調整剥片、石器製作時の微細剥片・石核が出土している。(P40写真1, 図版42)

これらの石器の素材となった岩石は、黒曜石B類がほとんどである。

(2) 遺物 (第24図・25図 S052～S058)

ブロック3からは、S052～S055の4点の細石刃核が出土した。S052～S054は表面の光沢が鈍く不純物が少ない黒曜石B類であり、S055は風化により表面が褐色を帯びる黒曜石B類である。S052・S053には側面に自然面・節理面が残るが、S054・S055はいずれも自然面や節理面を残していない。4点全てが上面から見て略四角形を呈するように加工を施して成形した後、細石器を剥離している。

S052とS053は細石器の剥離が多く、正面形が四角形状・側面形が三角形を呈している。

また、S052の下部は節理面で割れており、S053は厚みのある剥片素材の上面に後方と横方向からの剥離によ

る打面成形が行われている。

S054とS055は、比較的細石器の剥離が少なく、側面形状が略四角形状を呈している。

S054は打面調整等は施されず、細石器の剥離面は丸みを帯びた逆正三角形を呈している。

S055は厚みのある剥片素材に打面を正面側からの剥離により作出し、打面端部への再調整を加え、下縁調整を施している。

S056は、下部を使用している可能性がある剥片である。黒曜石B類を素材としている。

S057は、搔器の可能性がある剥片である。黒曜石B類を素材としている。

S058はブランクである。黒曜石B類を素材としており、上面形が略四角形を呈するように剥離が施されている。正面は自然面を残し、楔形に近い形状で上面には横方向からの剥離が加えられ、下部に下縁調整が施されている。

P40写真1にその他の剥片類や細石器を割り採った後の残片と考えられる剥片類を示している。

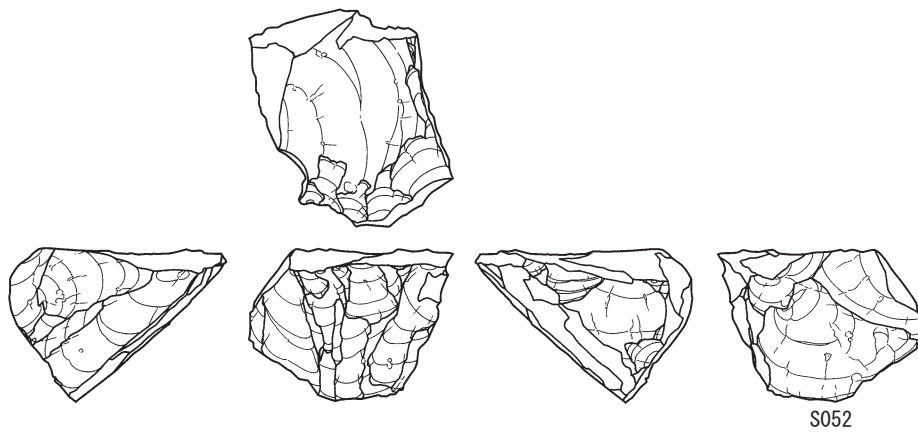
剥片や石核には自然面が残るものが多くみられた。

これらの遺物の観察から、ブロック3は数個の原石または石核を持ち込み、細石刃核を作成し、細石器を主に製作したものであり、石器製作時に破損したものや石器製作に不向きであった剥片はブロック3に残っていたものであると考えられる。しかし、S054・S055はまだ細石器の剥離が可能であると考えられ、S056・S057はまだ十分使用可能なものである。

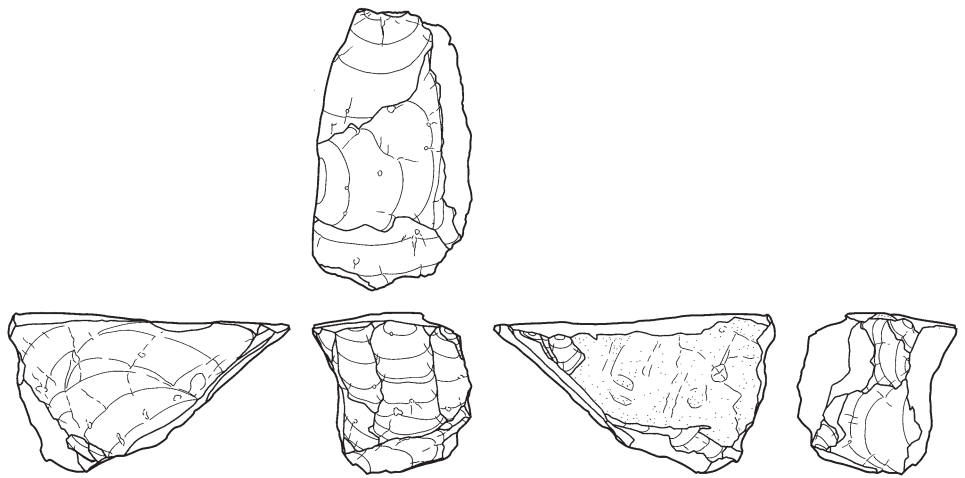
小牧遺跡と申良川を挟んで対岸に所在する川久保遺跡の細石器文化期の細石刃核の形状を比較すると、小牧遺跡は一つのブロックから出土した4点と後述する1点の接合資料の合計5点のみで上記したものがあるが、川久保遺跡では畦原型の細石刃核が出土していることから、小牧遺跡と川久保遺跡で川を挟んで異なる細石刃核が出土している。

第5表 石器観察表 (第Ⅲ文化層出土)

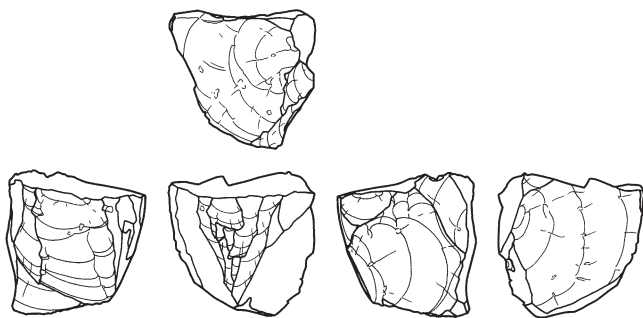
挿図番号	掲載番号	取上番号	出土区	層	ブロック名	器種	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	石材	石材分類	備考
24	S052	105367	E30	IXa	ブロック3	細石刃核	20.00	27.00	29.00	12.08	黒曜石	黒曜石B	
	S053	105343	E30	IXa	ブロック3	細石刃核	21.00	21.00	37.50	15.30	黒曜石	黒曜石B	
	S054	105341	E30	IXa	ブロック3	細石刃核	19.00	19.00	18.00	6.67	黒曜石	黒曜石B	打面再生を行う
	S055	56473	E29	IX	ブロック3	細石刃核	28.00	24.00	37.50	24.32	黒曜石	黒曜石B	
25	S056	105337	E30	IXa	ブロック3	剥片	29.00	26.00	11.00	7.02	黒曜石	黒曜石B	
	S057	102158	F30	IXb	ブロック3	搔器	32.00	22.00	12.00	7.25	黒曜石	黒曜石B	
	S058	105240	E32	IXb	ブロック3	ブランク	37.00	18.00	50.00	32.04	黒曜石	黒曜石B	



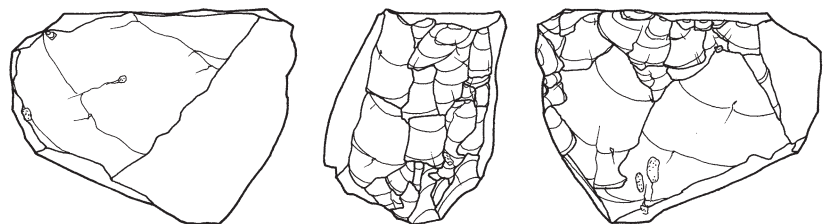
S052



S053



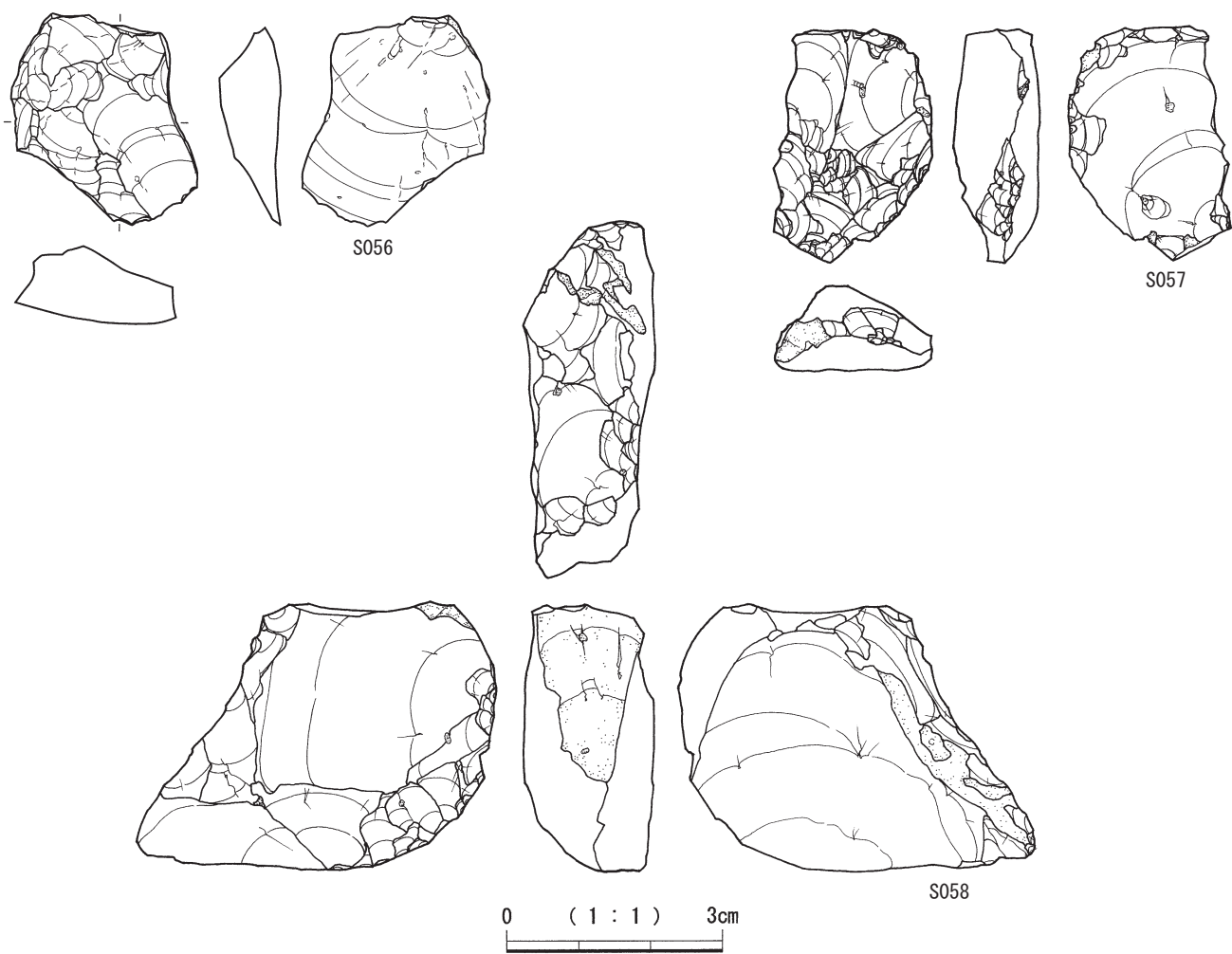
S054



S055

0 (1:1) 3cm

第24図 第Ⅲ文化層の石器(1)



第25図 第Ⅲ文化層の石器 (2)

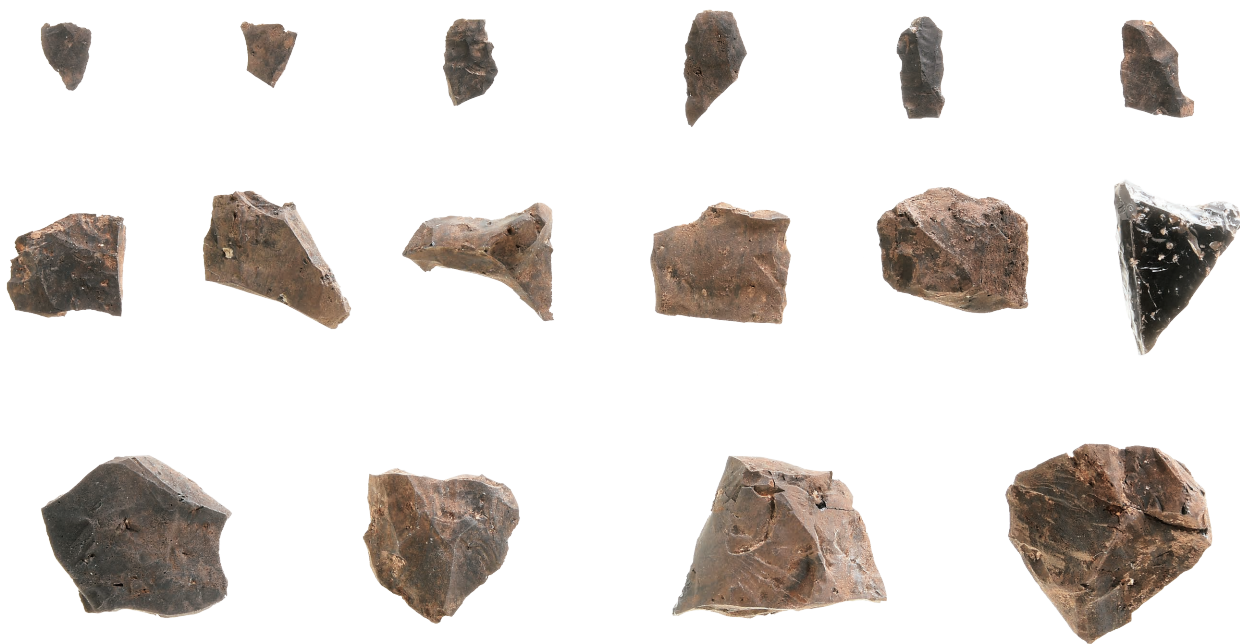
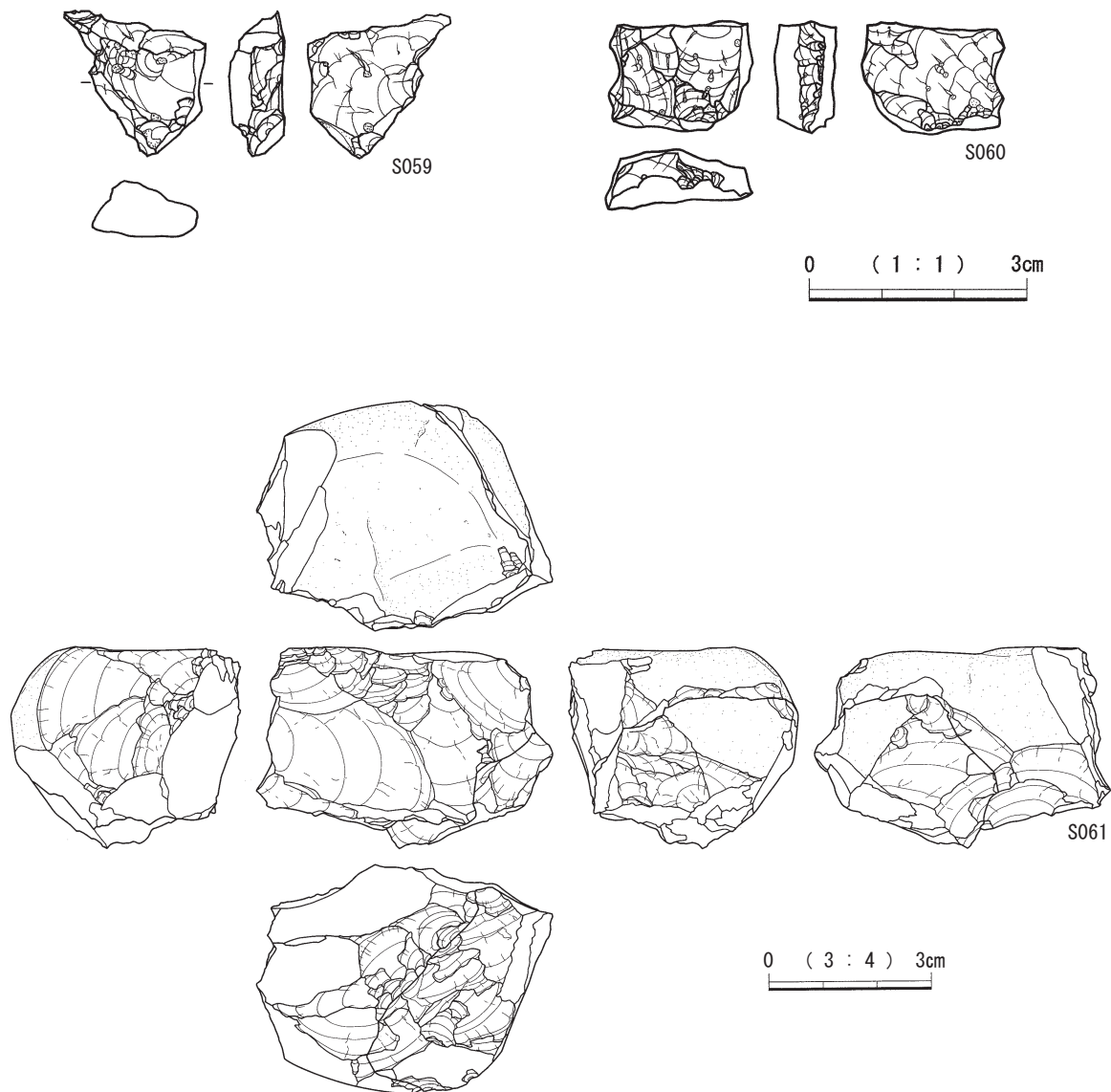


写真1 第Ⅲ文化層の非掲載遺物



第26図 旧石器時代その他の石器（1）

5 その他の遺物（第26・27図 S059～S064）

1の調査の方法でも記したが、旧石器時代の調査はⅧ層（薩摩火山灰層）までの調査を終了した後、地形等を考慮してトレンチを設定して遺物の出土の有無を調べ、遺構・遺物の出土のあった箇所を必要に応じて拡張して本発掘調査を行った。その結果、ブロック1～3以外にもいくつかのトレンチから旧石器時代の遺物の出土があった。

S059はB-3区のⅨa層で出土した黒曜石C類を素材とするナイフ型石器である。基部と側縁に背面から加工を施している。

S060は、D-33区のトレンチで出土した黒曜石B類を素材とする搔器の可能性もある。四角形に整える加工が施されている。

S061は、E-2・3区のトレンチで出土したオリーブ色を呈する頁岩A類の接合資料である。すぐ近くに同一石材の剥片も出土したが接合しなかった。S061もS052

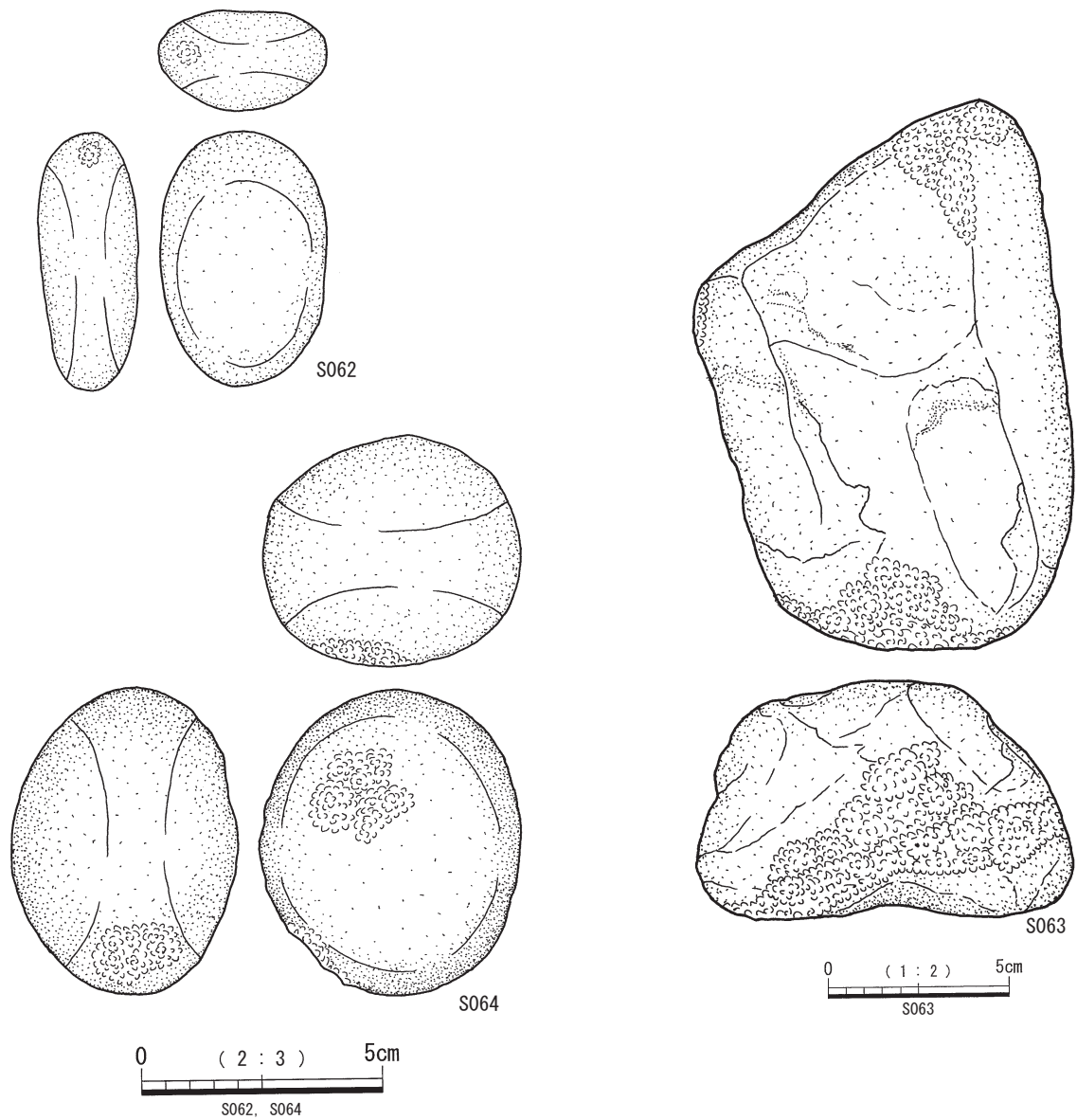
～S055と同様の形状の細石刃核の作成を目的としたと考えるが、細石器の剥離は行われておらず、製作に失敗し放棄したものである可能性がある。

S062は、E-32区のトレンチで出土した安山岩を素材とするハンマーである。扁平な形状の自然石を未加工で利用しており、上部に僅かに敲打の痕跡が観察できる。

S063は、E-33区のトレンチで出土した砂岩を素材とする敲石である。大型で不定形な自然石を未加工で利用しており、この石材の中で細い箇所である下面や側面をよく敲打している。

S064は、D-31区のトレンチで出土した安山岩を素材とする敲石もしくはハンマーと考えられるものである。球形に近い形状の自然石を未加工で利用しており、正面上部と側面下部に強い敲打痕が観察できる。

これらのほか、時期不詳の黒曜石や頁岩等の剥片が出土しているが、図化しなかった。



第27図 旧石器時代その他の石器（2）

第6表 石器観察表（旧石器時代のその他の石器）

挿図 番号	掲載番号	取上 番号	出土区	層	ブロック名	器種	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	石材	石材 分類	備考
26	S059	52929	B3	IXa	-	ナイフ形石器	20.00	20.00	8.00	2.13	黒曜石	黒曜石C	
	S060	105245	D33	IXb	-	二次加工剥片	15.50	20.00	9.00	2.66	黒曜石	黒曜石B	搔器の可能性あり
	S061	53492 53494	E2-3	IXc	-	石核	37.00	55.00	42.30	93.80	頁岩	頁岩A	2点接合資料
27	S062	105241	E32	IXb	-	ハンマー	53.50	34.50	19.50	50.30	安山岩	安山岩B	
	S063	105246	E33	IXc	-	敲石	152.00	105.00	66.00	1304.00	砂岩	-	
	S064	105235	D31	IXb	-	敲石	65.00	54.50	47.50	230.00	安山岩	安山岩B	

第2節 縄文時代早期の調査

1 調査の方法

縄文時代早期の遺構・遺物はⅥ層とⅦ層から出土する。Ⅵ層は、アカホヤ火山灰直下の層で、Ⅶ層は薩摩火山灰直上の層である。Ⅵ層とⅦ層の分層は、土層堆積が良好でない調査地点もあり、難しい判断を強いられた。遺構の帰属時期については、検出面を基本としながらも、遺構埋土のパミス混入状況や色調等でも決定し、遺物は出土層を基本としながら型式も考慮し、帰属時期の決定を行った。また、整理作業・報告書作成作業時に、発掘調査の所見や写真、周囲の遺物出土状況からも吟味し、総合的に判断を行った遺構・遺物もある。

本報告書では、Ⅶ層が早期前葉段階の遺物を包含する文化層で、Ⅵ層が早期中葉～後葉の遺物を包含する文化層である。そのため、Ⅶ層とⅥ層の成果を分けて報告する。

遺構の実測については、個々の検出状況の写真撮影後、各遺構を手実測した。実測の方法は、長軸を設定し、長軸に対して直交する短軸を設定後、長軸方向のベルトを残しながら行った。

出土遺物は、グリッド毎にトータルステーションで取り上げ、出土地点の記録を行った。

2 Ⅶ層の遺構

遺構検出面は、土色が明瞭に変化する薩摩火山灰上面での検出がほとんどであり、本来の生活面での検出はほとんどできなかった。

Ⅶ層の遺構については、総合的に判断して最終的には、竪穴建物跡38基、連穴土坑7基、土坑21基、集石32基、石器集積2基を検出した。

これらの遺構は、Ⅰ類土器からⅨ類土器の時期の遺構と考えられる。

(1) 竪穴建物跡 (第37～69図)

Ⅶ層の竪穴建物跡は、遺構が単独に検出されたものや、他の遺構と重複するが全形を想定できるものを含め38基であった。尚、竪穴建物跡は記号SHで表記し、1から38番まで番号を振ってある。

遺構の記載順番は、西側のグリッド番号が小さい方から、また南から北側への順で記載している。

本報告書では、下記に示すように竪穴建物跡の各部分に名称を付し、遺構の詳細を報告した。

長 軸：検出面で、竪穴建物跡のほぼ中央を通り、長さが一番長い部分。

短 軸：長軸の中心を通り直交する部分。

深 さ：長軸ないし短軸でその竪穴建物跡の一番深い部分。

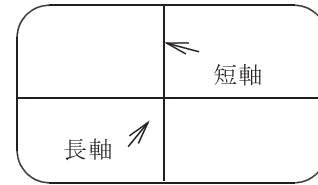


図1 竪穴建物跡の各部名称

検出状況

単独で検出された竪穴建物跡は32基であった。その他、SH21とSH22、SH23とSH24、SH27とSH28は切り合って検出された。SH21・22は連穴土坑の可能性のある土坑18と切り合っている。SH 9は集石1が重なり合っているが、層位差が約20cmあり、同じⅦ層検出でも時間的な差があるものと思われる。

表1 竪穴建物跡の検出層と基数

検出層	基数
Ⅶ層	6
Ⅷ層	32

竪穴建物跡の多くがⅧ層（薩摩火山灰）上面で検出されており、そのため掘り込みの深さが非常に浅い竪穴建物跡もある。

形 状

竪穴建物跡の形状を把握するため、長軸と短軸から長短比を算出し、下記のように平面の形状を類型化した。

長 短 比：短軸÷長軸

隅 丸 方 形：長短比が0.7から1で数値が1に近いほど方形に近い。

隅 丸 長 方 形：長短比が0.7未満で、数値が小さいほど横長に広がる。

楕 円 形：長短比が0.7から1で、形状が円形に近い。

不 定 形：平面形状が隅丸方形や隅丸長方形、楕円形に属さないが全体の形状が分かる遺構

表2 竪穴建物跡の形状

形 状	基 数
隅丸方形	17
隅丸長方形	11
楕 円	4
不定形	4
不 明	2

検出面の形状は表2からも分かるとおり、隅丸長方形と隅丸方形が28基、楕円形4基、不定形4基、不明2基

であった。しかし、どの竪穴建物跡も床面に柱穴痕と思われるピット及び炉跡は検出されておらず、竪穴建物跡の全体的な構造の解明には至らなかった。

規 模

小牧遺跡Ⅶ層・Ⅷ層検出の早期前葉の竪穴建物跡規模について、下記に示す。

表3 竪穴建物跡の長軸と短軸の最大・最小・平均値

	長軸 (cm)	短軸 (cm)
平均値	252.6	197.6
最大値	431.0	322.0
最小値	162.0	161.0

尚、面積については、検出面での平面プランであり、形状により面積算出方法を下記のように変えた。

隅丸長方形・隅丸方形：長軸×短軸

楕円形：楕円形の面積を求める公式を適用して
(長軸/2×短軸/2×π)で算出

表4 竪穴建物跡の検出面の最大・最小・平均値

	面積 (㎡)
平均値	4.88
最大値	11.62
最小値	2.59

平均面積が約5㎡に対して、11.6㎡のSH12は小牧遺跡の竪穴建物跡の中では大型の竪穴建物跡といえよう。13区から19区にかけて、隅丸長方形の比較的大きな竪穴建物跡が見られる。

形状については、ほとんどが隅丸方形ないし隅丸長方形であるが、SH 1, SH11, SH17, SH25は楕円形を呈するⅦ層検出遺構である。この形状の違いについては、類別の土器分布状況から考察しても判明できなかった。Ⅵ類とⅢ類との関係が推察されるが、明確な評価は得られなかった。ただ、Ⅵ類の分布域と重なるSH15は、¹⁴C測定で8830±30の値が出ている。

分 布

東西方向に約400m広がる小牧遺跡では、Ⅶ層検出の竪穴建物跡が38基検出されたが、3基以上接近して検出された箇所が5ヶ所ある。東側からA～C-1・2区、C～F-2～4区、E・F-8・9区、E・F-13・14区、E・F-16・17区である。西側の串良川側左岸に近い箇所には約半数の竪穴建物跡が集中している。縄文早期の集落としては大規模集落であるが、土器型式からも分かるように、時期的な差があったものと考えられる。20区のSH38だけがぼつんと離れており、それより東側では竪穴建物跡は検出されなかった。

本遺跡で検出された竪穴建物跡を、西側のグリッド番号の若い順さらに南側からアルファベット順に報告する。

竪穴建物跡1号 (第37図)

検出状況

SH 1は、A-1区の串良川左岸沿いの台地縁辺部において検出された。検出面は、Ⅶ層であった。

形状と規模

平面プランは、楕円形で、長軸は2.90m、短軸が2.16mを測る。長短比は0.74、深さ約22cm、遺構の推定面積は4.91㎡であった。中規模の浅い遺構である。遺跡内で一番標高の高い平坦面に立地し、樹痕も多く、遺構南東の西側は一部樹痕に切られている。

埋土

埋土は、ほぼ1枚で、基本層Ⅶ層に若干のP13黄色パミスが混ざる。東西方向の壁際にⅦ層類似の埋土が若干堆積する。

出土遺物

遺物は出土していない。

竪穴建物跡2号 (第37図)

検出状況

SH 2は、C-1・2区の串良川左岸沿いの台地縁辺部において検出された。検出面は、Ⅶb層下部であった。遺構の段掘等の有無を確認したが、検出できなかった。

形状と規模

平面プランは、隅丸方形で、長軸は1.97m、短軸が1.96mを測る。長短比は0.99、深さ約13cm、遺構の推定面積は3.86㎡であった。

深さが余りにも浅く、Ⅶb層での検出のため上部からの掘り込みがあったと推定される。床は、薩摩火山灰層上面で止まっている。

埋土

埋土は、Ⅶ層のにぶい黄褐色土を基本とした1枚のみである。埋土中に炭化物がわずかに検出された。

出土遺物

遺物は出土していない。

竪穴建物跡3号 (第38図)

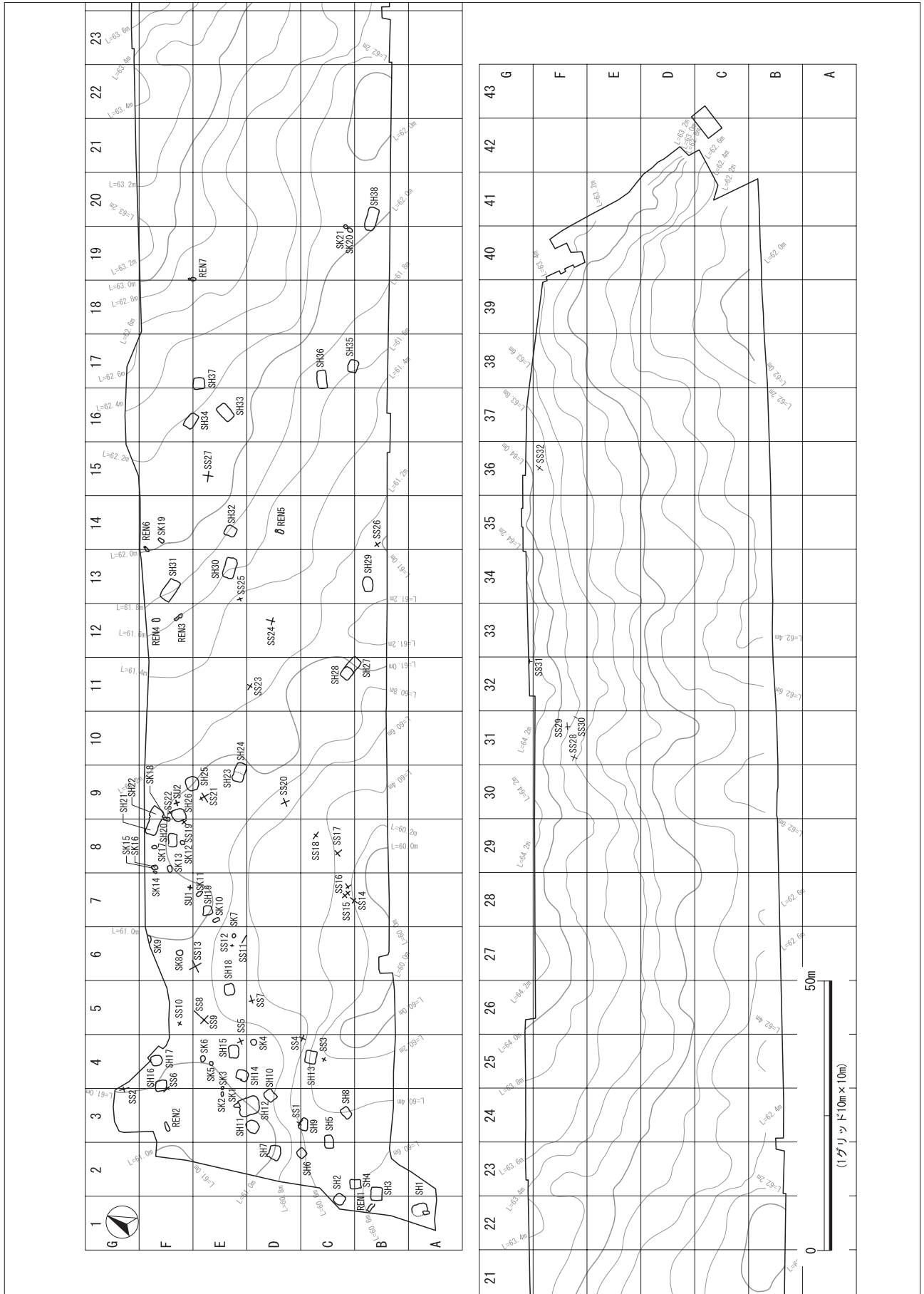
検出状況

SH 3は、調査区西端微高地から南西へごく緩く傾斜するB-1・2区において検出された。検出面は、Ⅶ層上面であった。

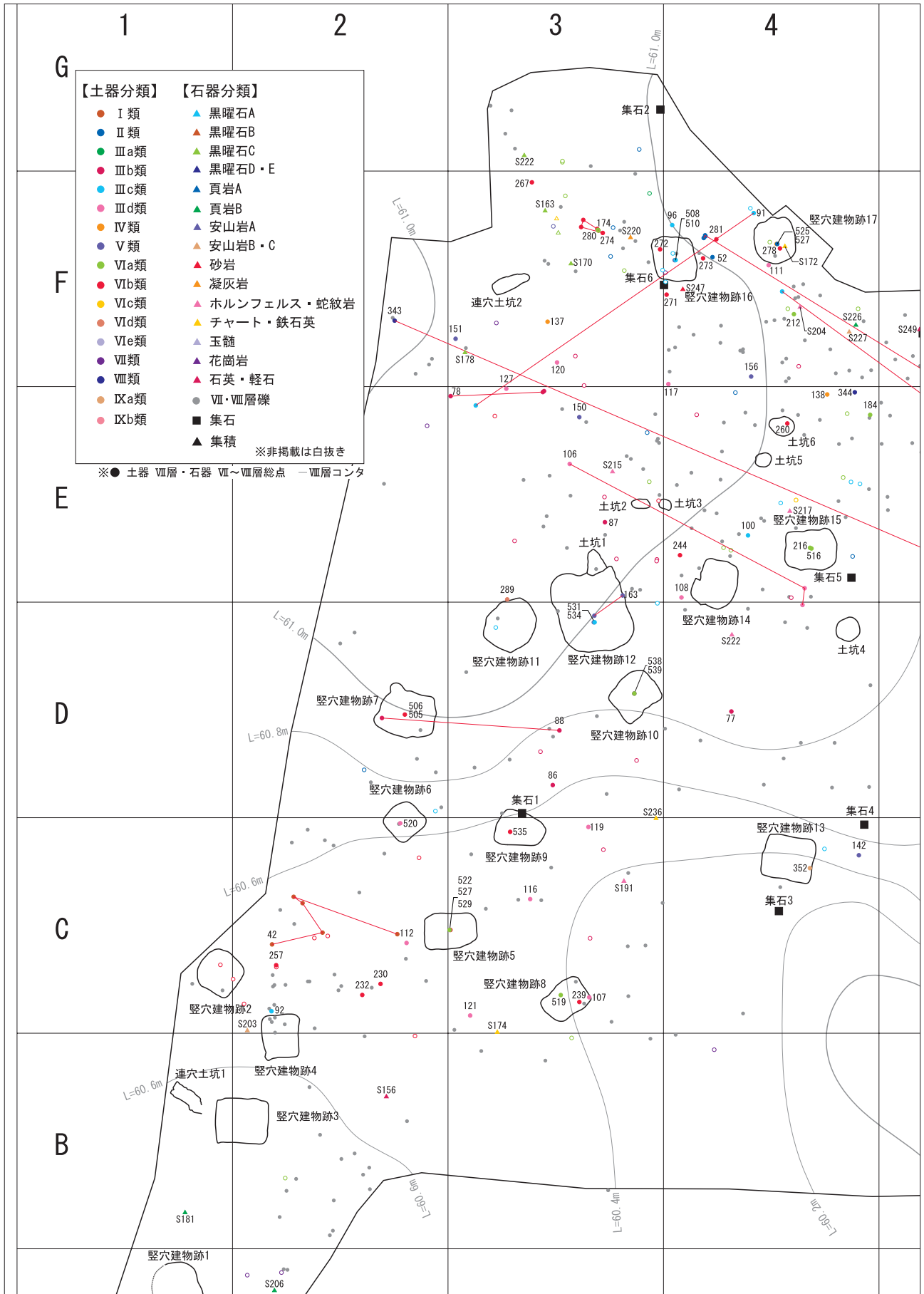
形状と規模

平面プランは、隅丸方形で、長軸は2.42m、短軸が2.04mを測る。長短比は0.84、深さ約27cm、遺構の推定面積は4.94㎡であった。

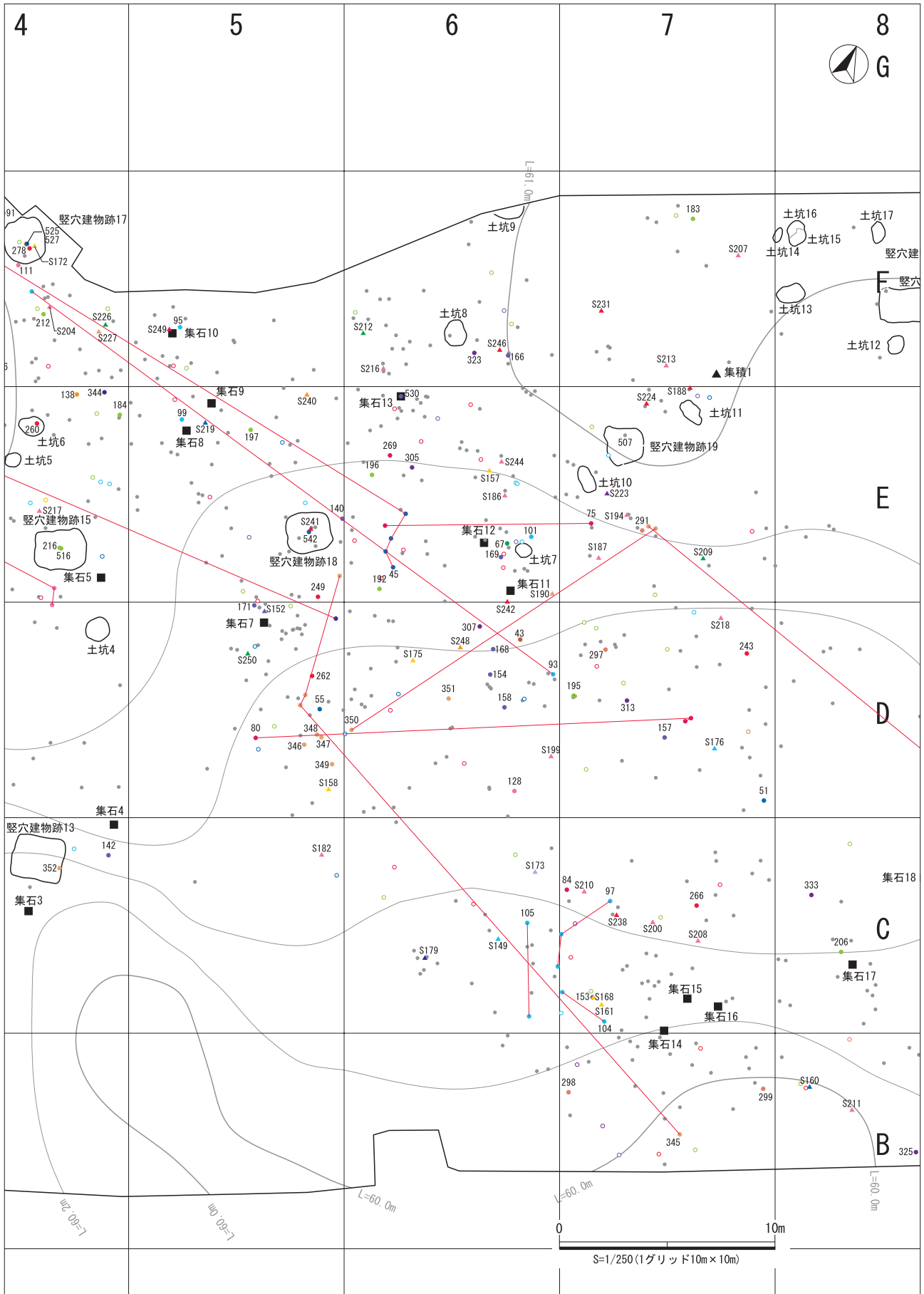
床面約半分程の範囲で粗密はあるが、硬化面を確認し



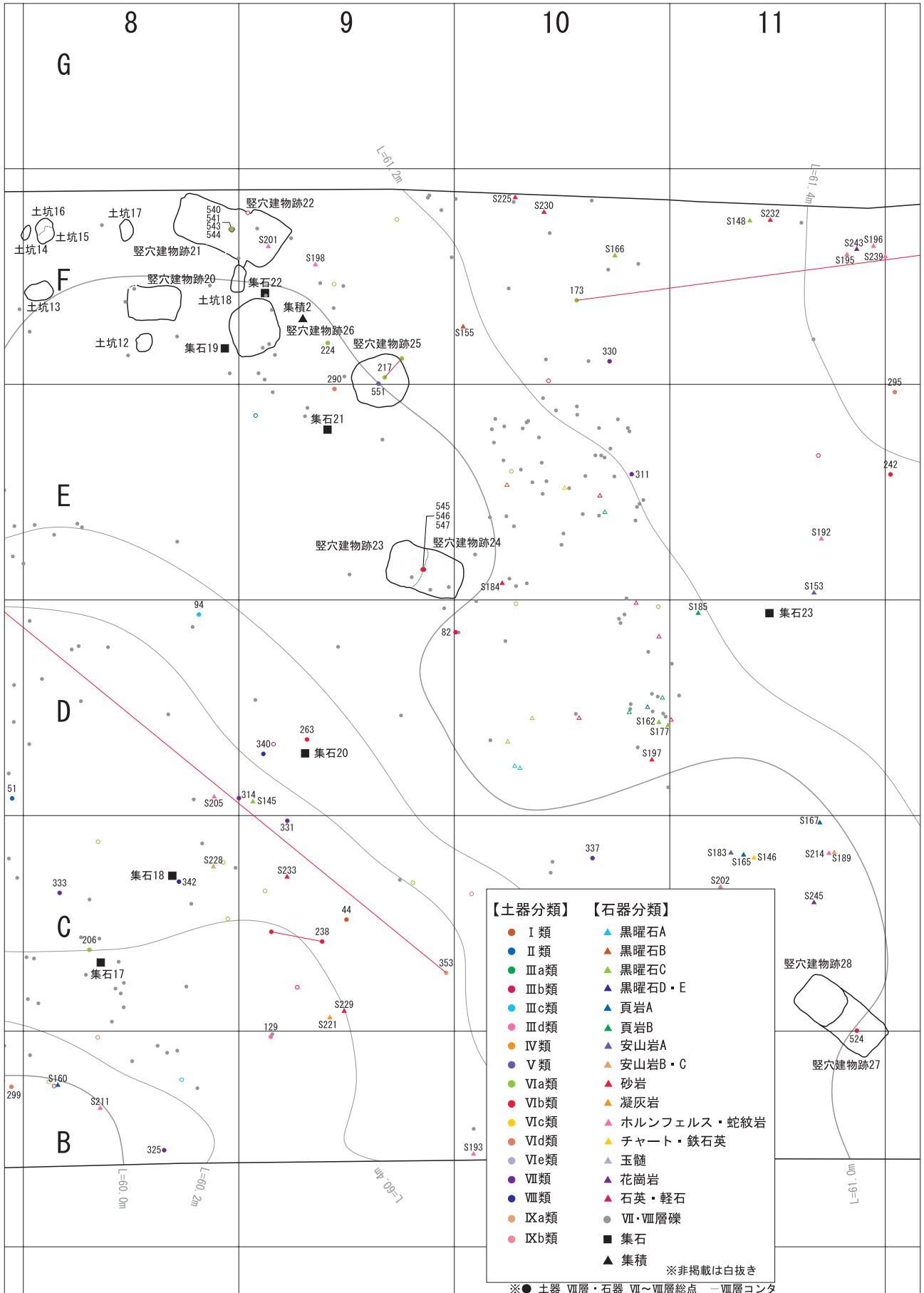
第28図 Ⅷ層遺構配置図



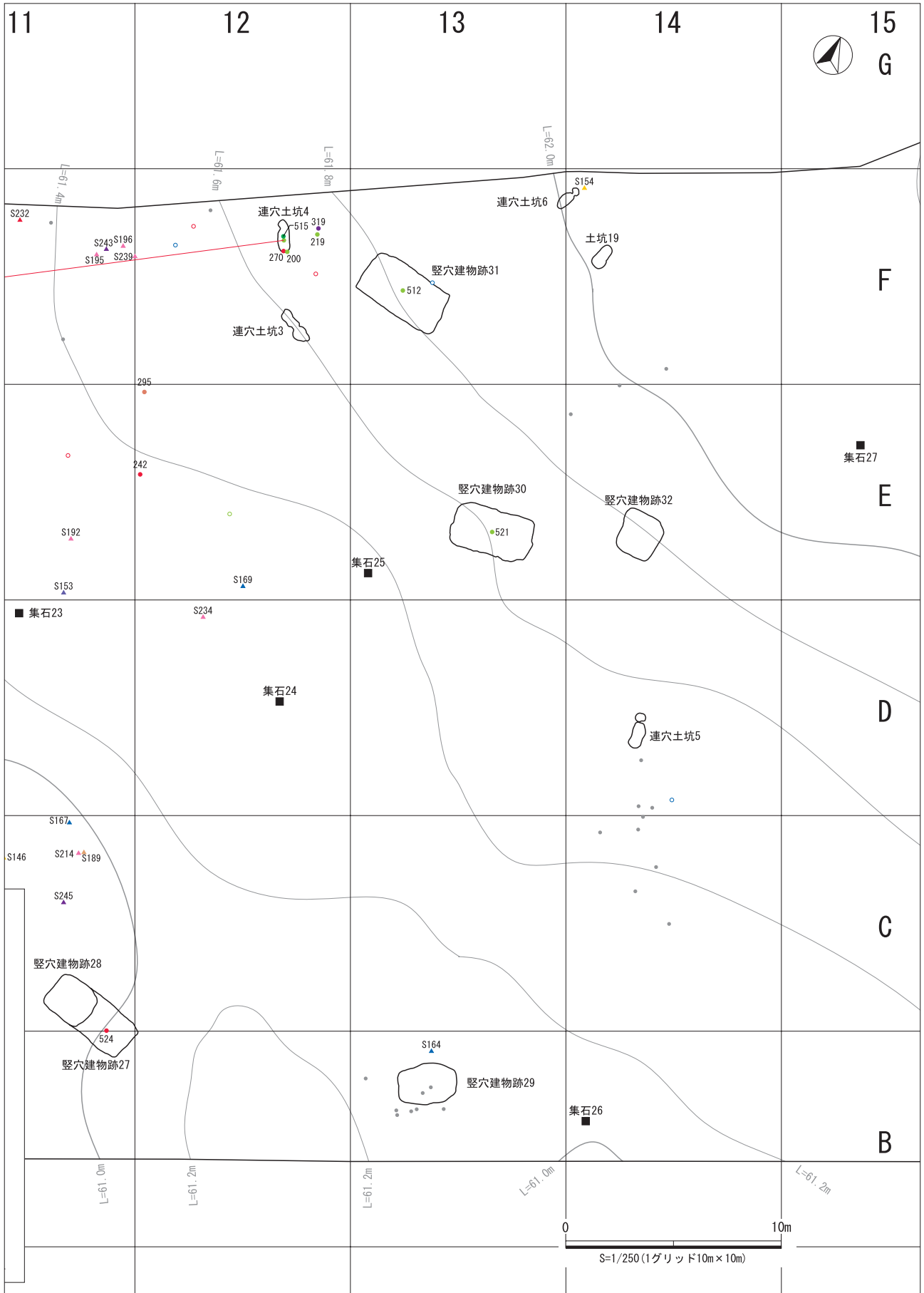
第29図 VII層遺物出土状況図(1)



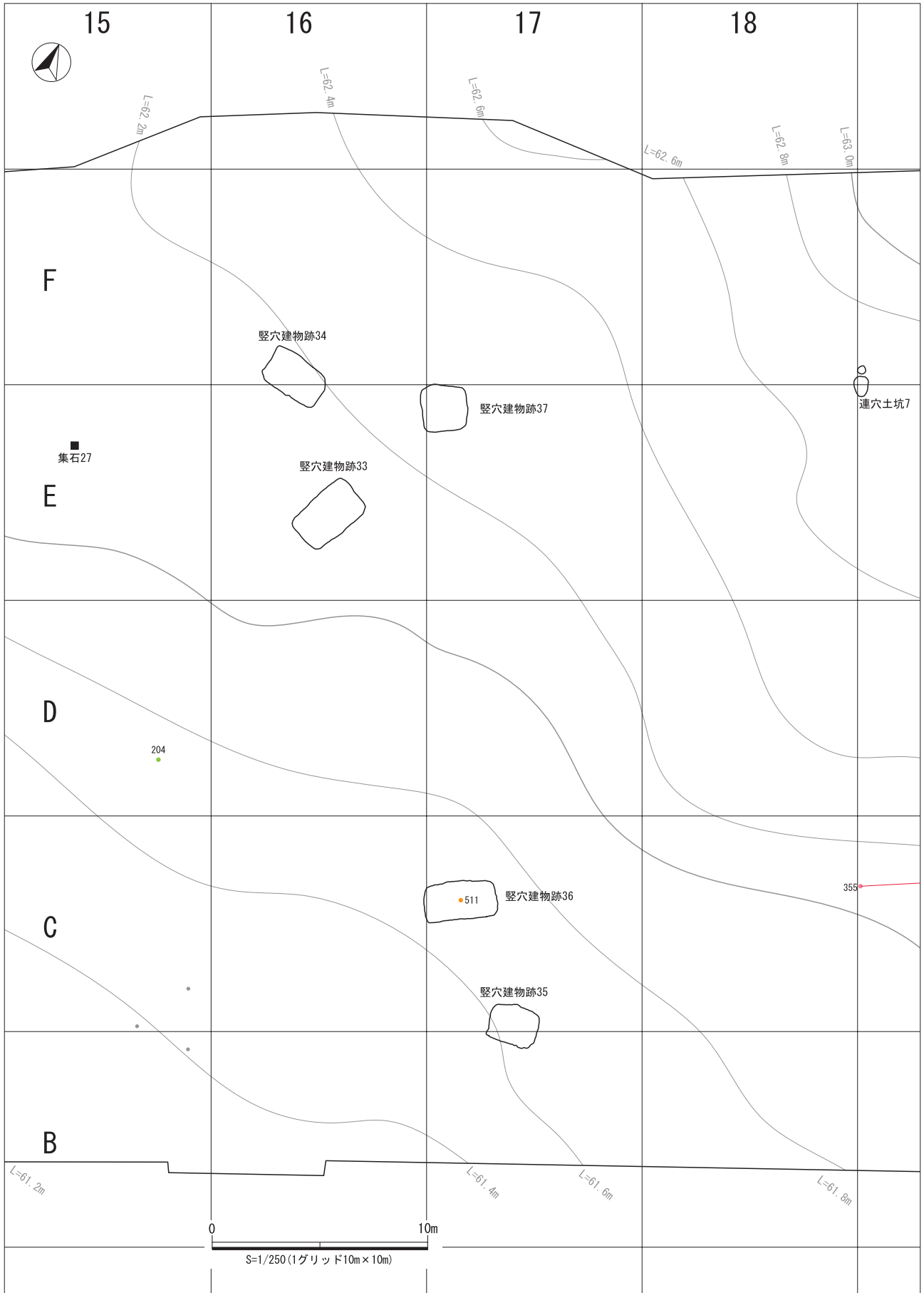
第30図 VII層遺物出土状況図(2)



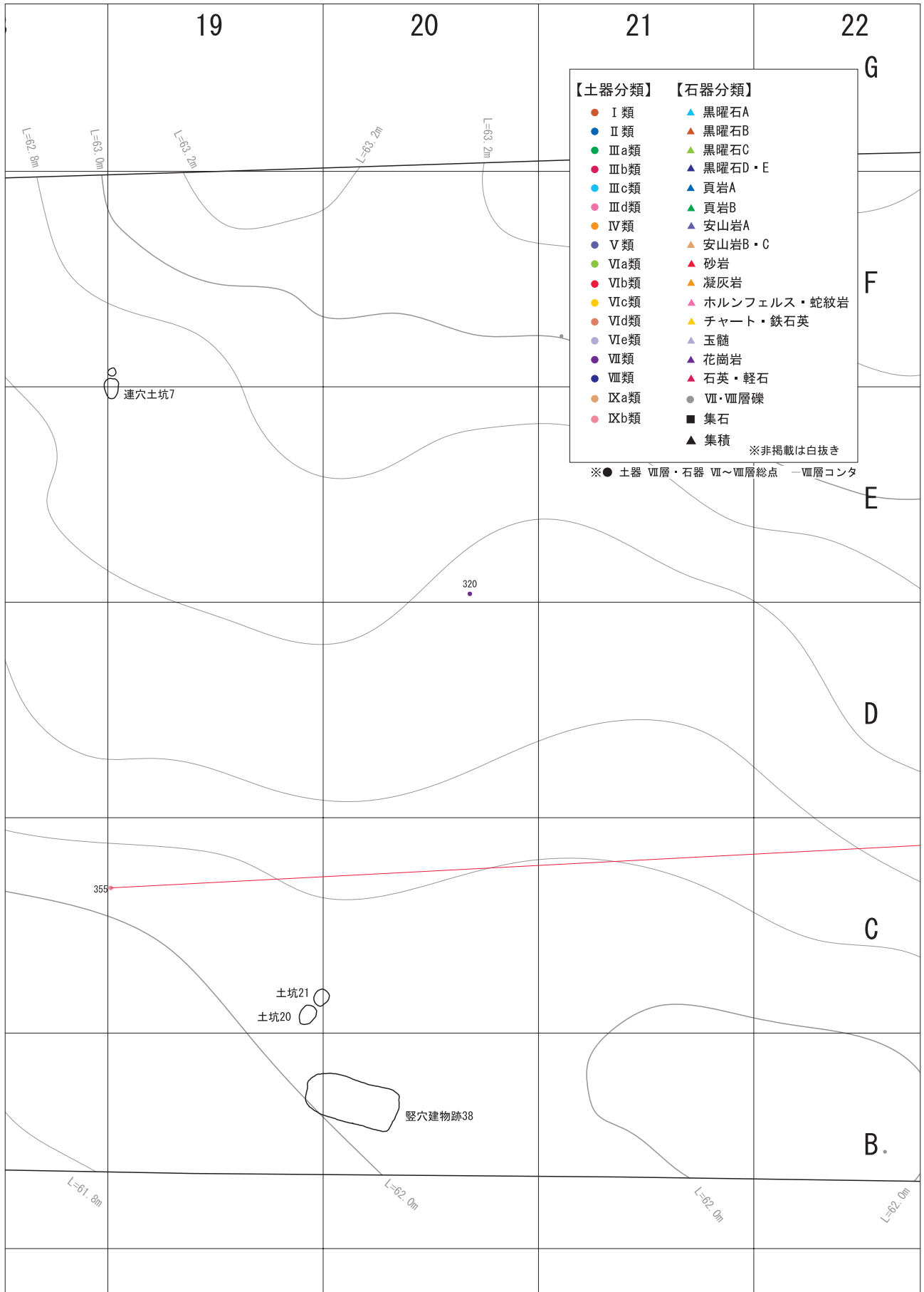
第31図 VII層遺物出土状況図(3)



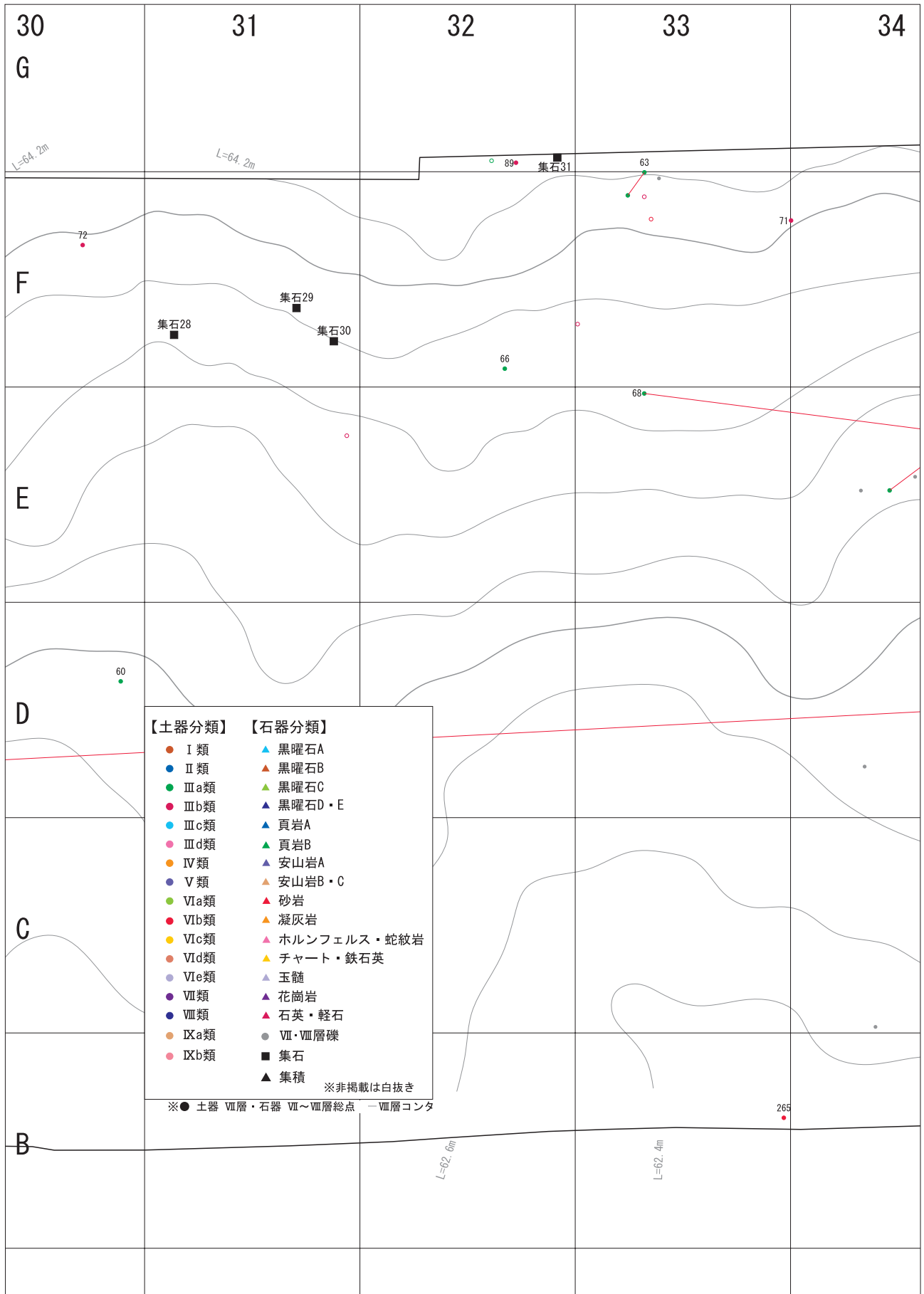
第32図 VII層遺物出土状況図(4)



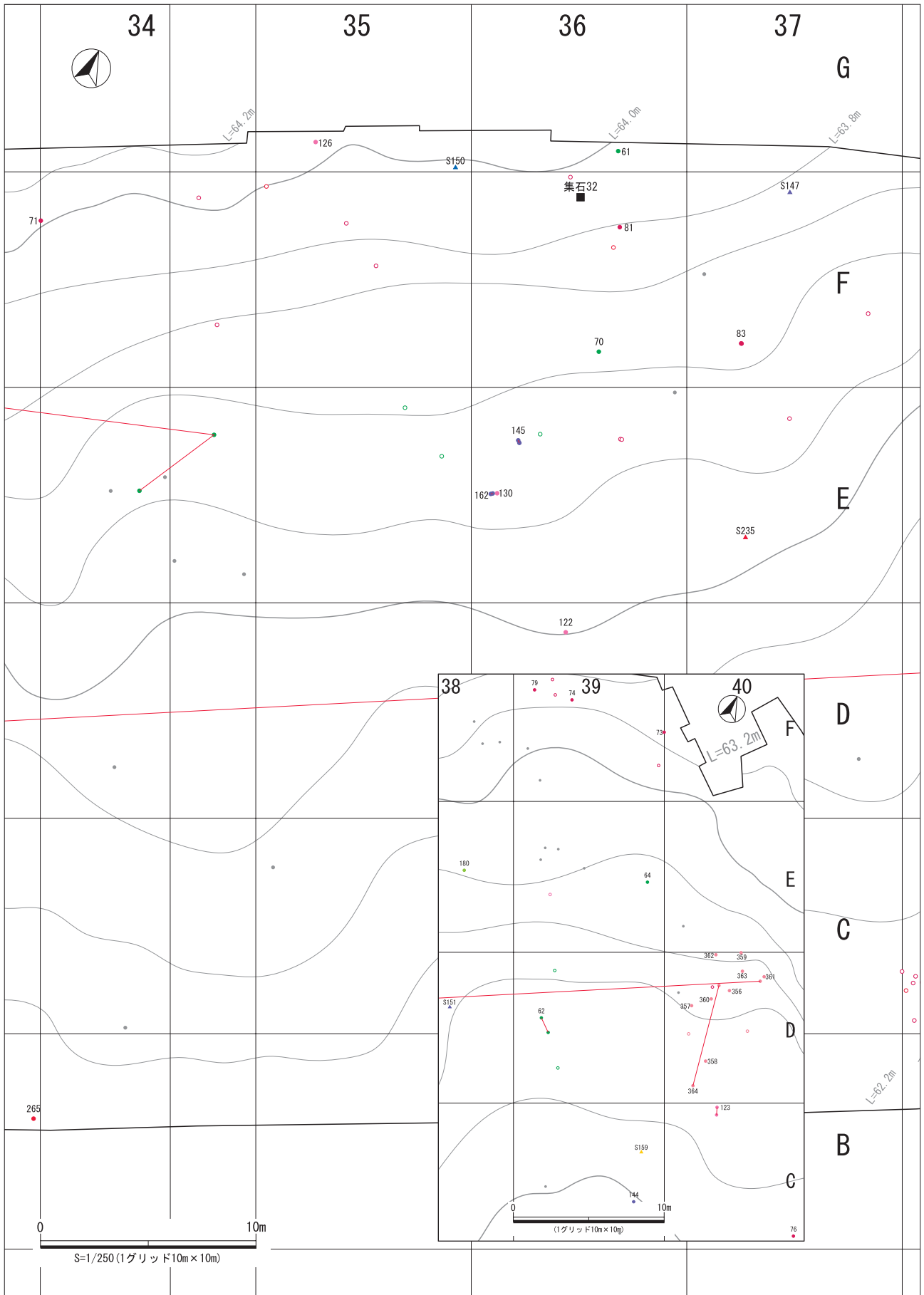
第33図 VII層遺物出土状況図(5)



第34図 VII層遺物出土状況図(6)



第35図 VII層遺物出土状況図(7)



第36図 VII層遺物出土状況図(8)

た。炉跡については確認できなかった。全体的な形状は、H27・28年度発見の早期竪穴建物跡と類似。遺物をほとんど伴わない点も類似する。

埋土

埋土は、3枚から成り、P13の黄色パミスを若干含んだⅦ層が主体である。床上面にやや軟質のP13を極わずか含む埋土が堆積する。硬化面は埋土②が踏みつけられてできたように粗密に広がる。

出土遺物

検出面より上で磨敲石の破片3点が出土している。竪穴建物跡が検出面より上から掘り込まれていたと考えられる。竪穴建物跡に関連した遺物と推察される。その他、床面付近より磨敲石2点が出土した。S066～S067は安山岩製の磨敲石である。S065は球形であり、弱い敲打の痕と明瞭な磨面が部分的に確認できる。使用頻度は少なく、被熱の痕跡はみられない。S066は被熱破片である。裏面は残存部の中心が強い磨りにより窪み、破碎後に使用している可能性がある。S067は床直上から出たもので、円盤状である。縁辺部を特に使用しており、かすかに被熱の痕跡が窺える。

竪穴建物跡4号（第39図）

検出状況

SH 4は、B・C-2区において検出された。SH2とSH3に隣接する。検出面は、Ⅷ層上面であった。

形状と規模

平面プランは、隅丸方形で、長軸は1.97m、短軸が1.68mを測る。長短比は0.85、深さ約42cm、遺構の推定面積は3.31㎡であった。小規模ではあるが、深さのある遺構である。

埋土

埋土の主体は、黒色土に5mm以下の黄色パミスと2mm以下の白色石粒を多く含む。

出土遺物

遺物は出土していない。

竪穴建物跡5号（第39図）

検出状況

SH 5は、C-2・3区において検出された。検出面は、Ⅶb層下部からⅧ層上面であった。

形状と規模

平面プランは、隅丸長方形で、長軸は2.41m、短軸が1.63mを測る。長短比は0.68、深さ40cm、遺構の推定面積は3.93㎡であった。

埋土

埋土は、3枚で黒色土に5mm以下の黄色パミス、1mm以下の白色石粒を含む。下部に薩摩火山灰ブロック混じる。

出土遺物

検出面から土器3点と石器1点が出土した。1は、縦位ないし斜位に貝殻刺突文が施される。Ⅵb類に分類される。2は、斜位の貝殻刺突文が施される。Ⅵa類と思われる。3は、底部近くの胴部で縦位の短沈線が深く施される。胎土に金雲母が確認できる。型式不明である。

石器は、1点が出土した。S068は被熱破碎した砂岩製の磨石片である。

竪穴建物跡6号（第40図）

検出状況

SH 6は、C・D-2区において検出された。検出面は、Ⅷ層であった。

形状と規模

平面プランは、隅丸方形で、長軸は1.62m、短軸が1.60mを測る。長短比は0.99、深さ40cm、遺構の推定面積は2.59㎡であった。規模は小さいながら、深さのある竪穴建物跡である。

埋土

埋土は1枚で、硬質で粘質のある黒色土を基本とし、5mm以下の黄色のパミスと1mm以下の白色石粒が多く混じる。

出土遺物

埋土中から土器口縁部1点が出土した。4は、口唇部にキザミを施し、口縁部外面に横位貝殻刺突文を2条巡らす。その下に楔形貼付突帯を貼り付け、両側は縦位の貝殻刺突文が施される。Ⅲd類の119・120と類似する。

竪穴建物跡7号（第41図）

検出状況

SH 7は、D-2区において検出された。検出面は、Ⅷ層であった。

形状と規模

平面プランは、隅丸方形と考えられる。長軸は2.58m、短軸が2.14mを測る。長短比は0.83、深さ32cm、遺構の推定面積は5.52㎡であった。南西側及び北西側には段堀を施し、テラス状のエリアを設けている。北西側のテラスはピットも1基検出された。南西側にはテラスに接してピットが1基検出されている。

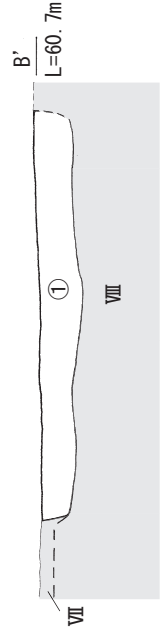
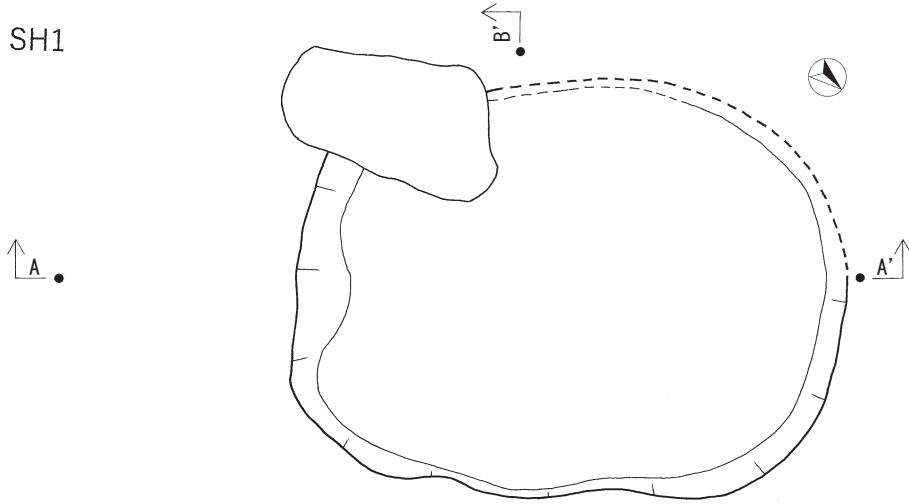
埋土

埋土は1枚で、硬質で粘質のある黒色土を基本とし、5mm以下の黄色のパミスと1mm以下の白色石粒が多く混じる。

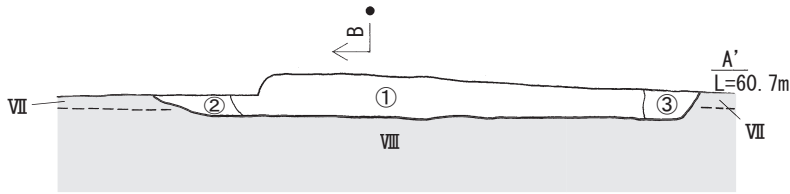
出土遺物

埋土中から土器2点と石器2点が出土した。その他図化しなかったが、土器底部小片とOBチップ各1点が出土した。5は、外面は縦「V」字状に貝殻刺突文が施され、内面は丁寧なナデ調整されている。竪穴建物跡内の

SH1

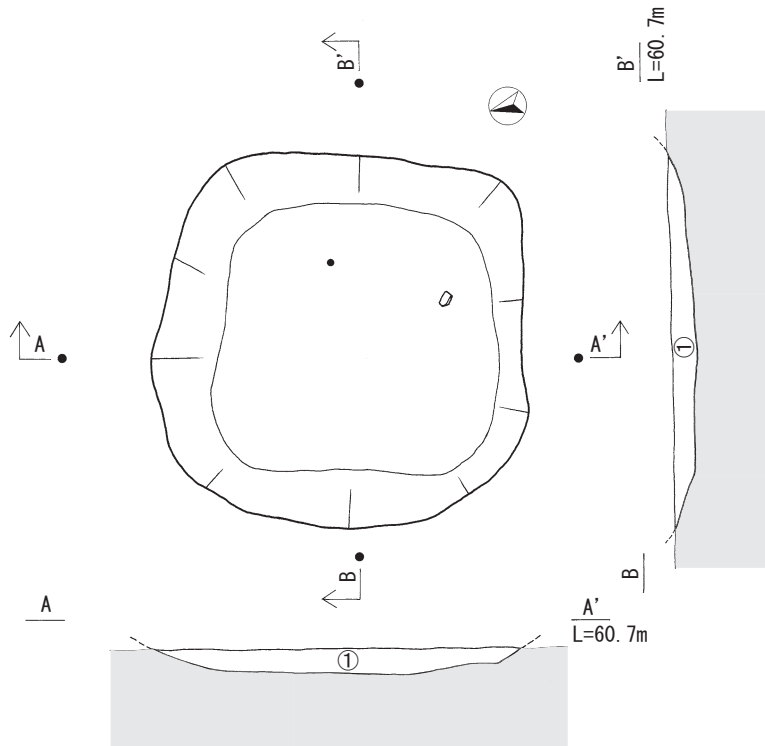


A

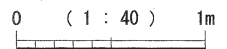


- 埋土
- ① 黒色土 (10YR2/1)
黄色パミス混ざる・樹痕多い
 - ② 黒色土 (10YR2/1)
黄色パミスごく少量混ざる
 - ③ 黒色土 (10YR2/1)
黄色パミスごく少量混ざる

SH2

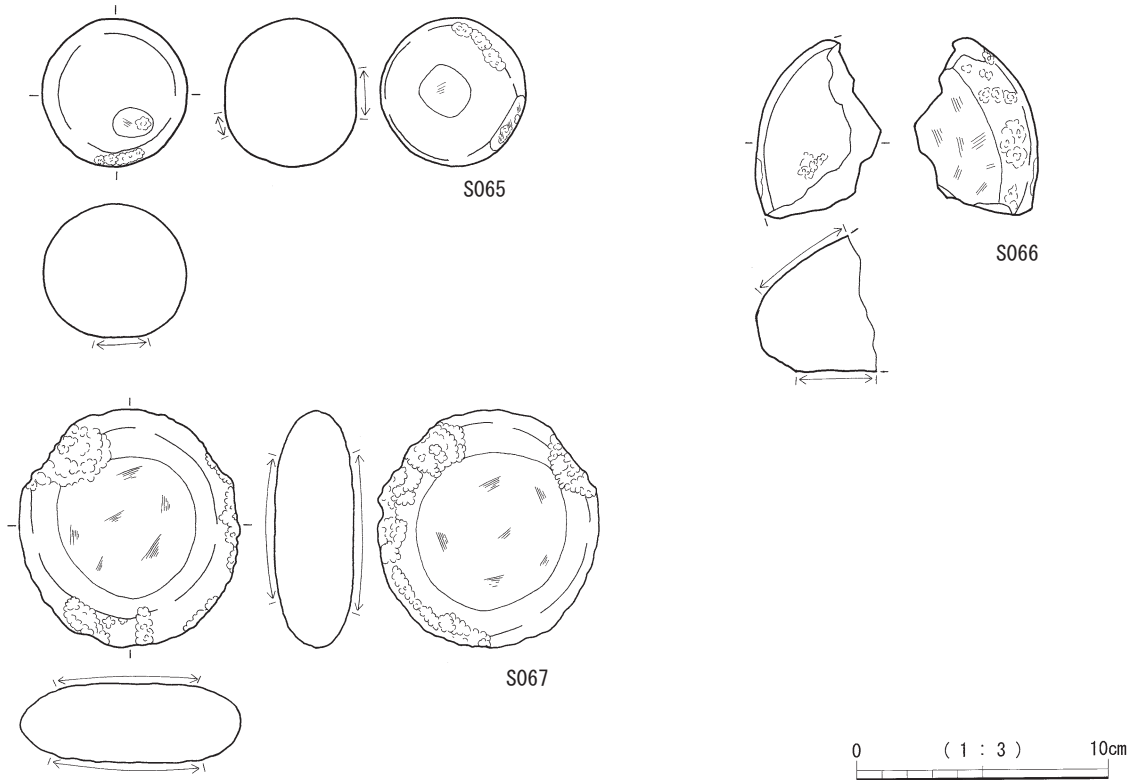
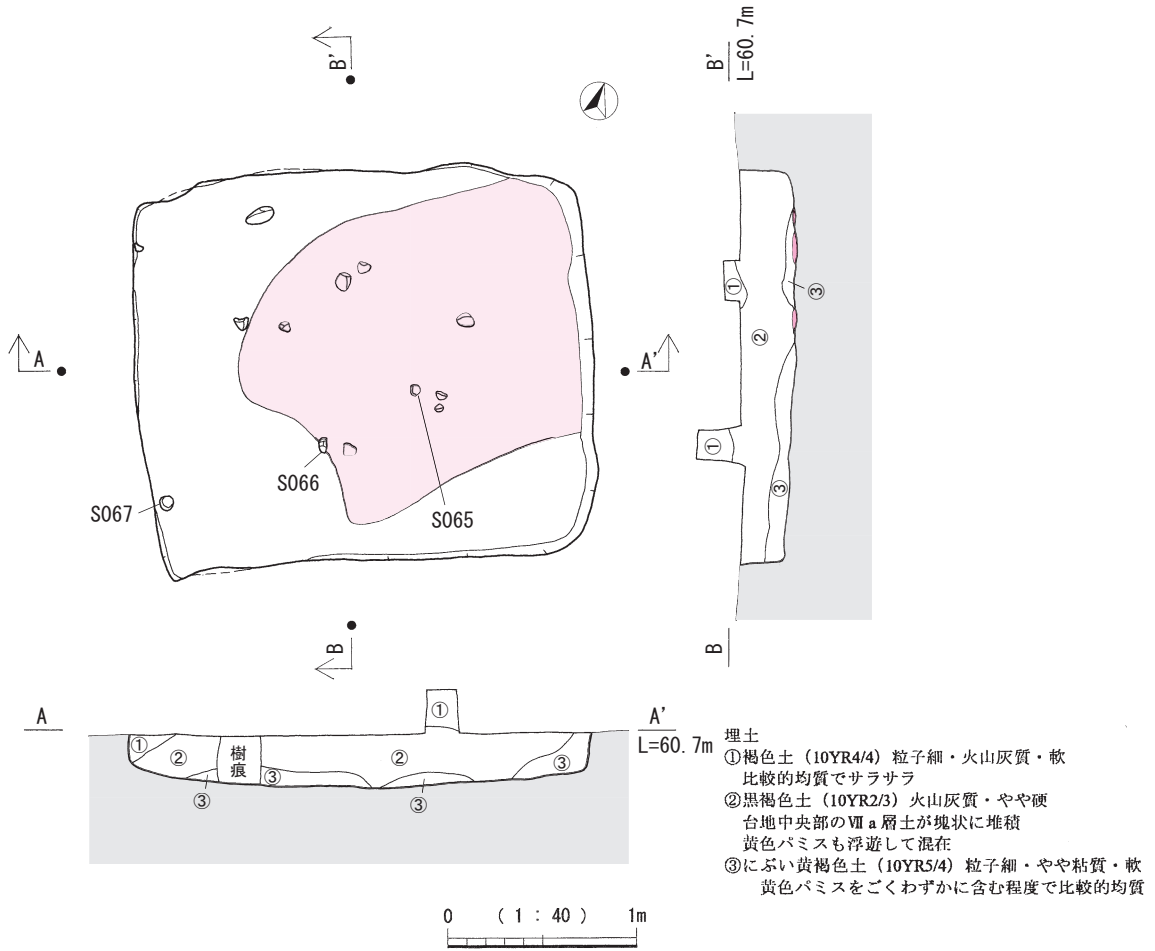


- 埋土
- ① にぶい黄褐色土 (10YR5/4)
5mm以下の黄色パミス含む
1mm以下の白色石粒含む



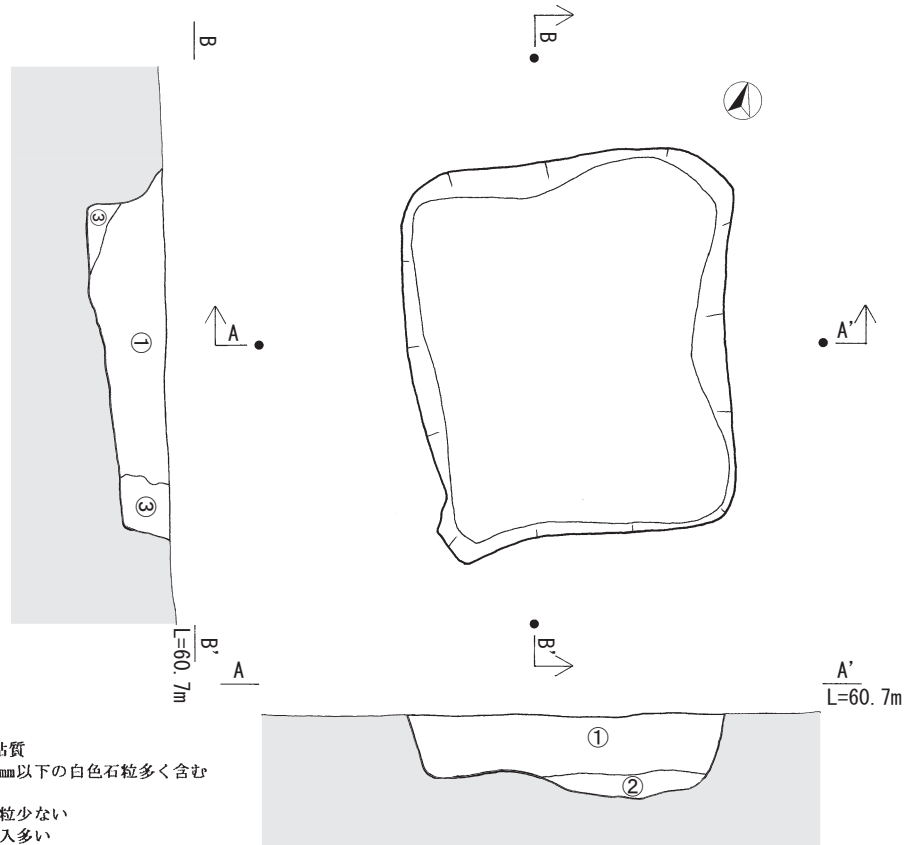
第37図 竖穴建物跡1号・竖穴建物跡2号

SH3



第38図 竪穴建物跡3号・出土遺物

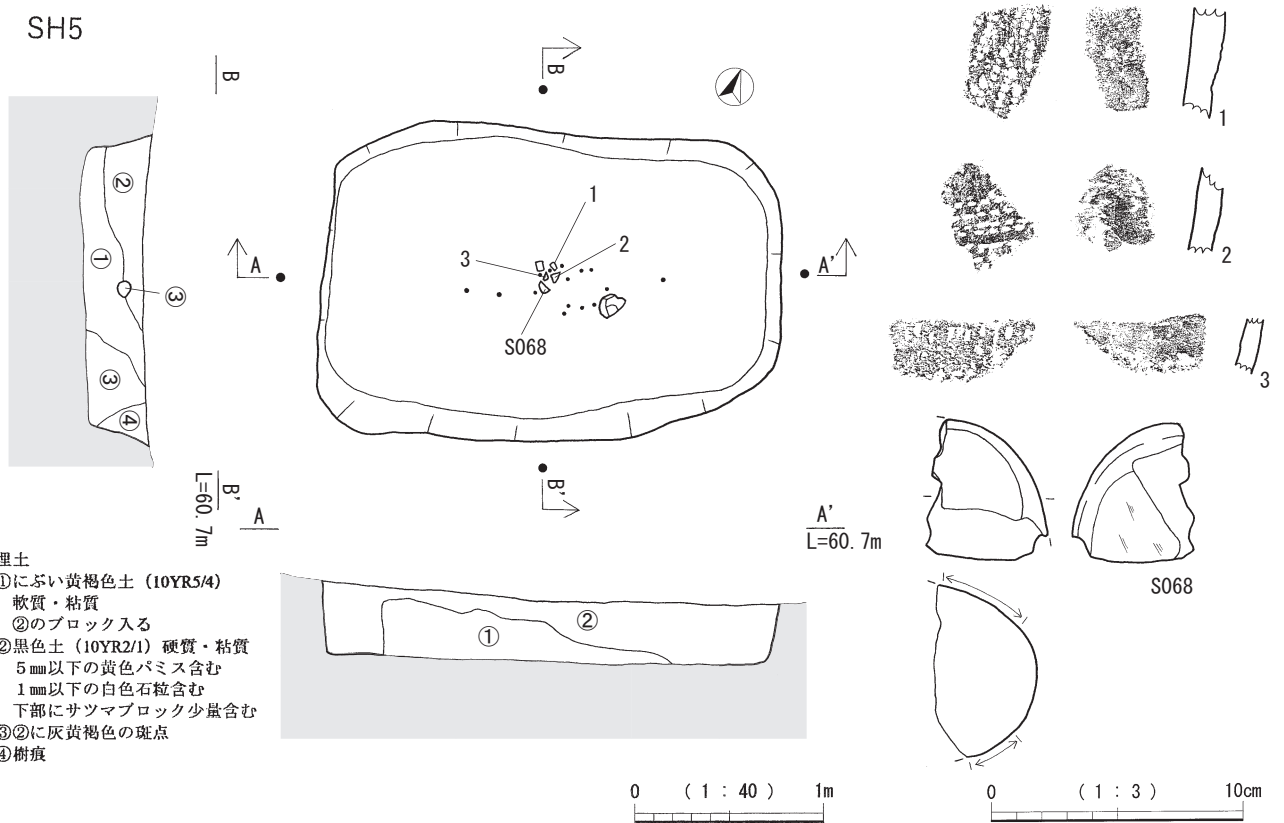
SH4



埋土

- ①黒色土 (10YR2/1) 硬質・粘質
5mm以下の黄色パミス・2mm以下の白色石粒多く含む
にぶい黄褐色土の混入多い
- ②①より黄色パミス・白色石粒少ない
- ③①よりにぶい黄褐色土の混入多い

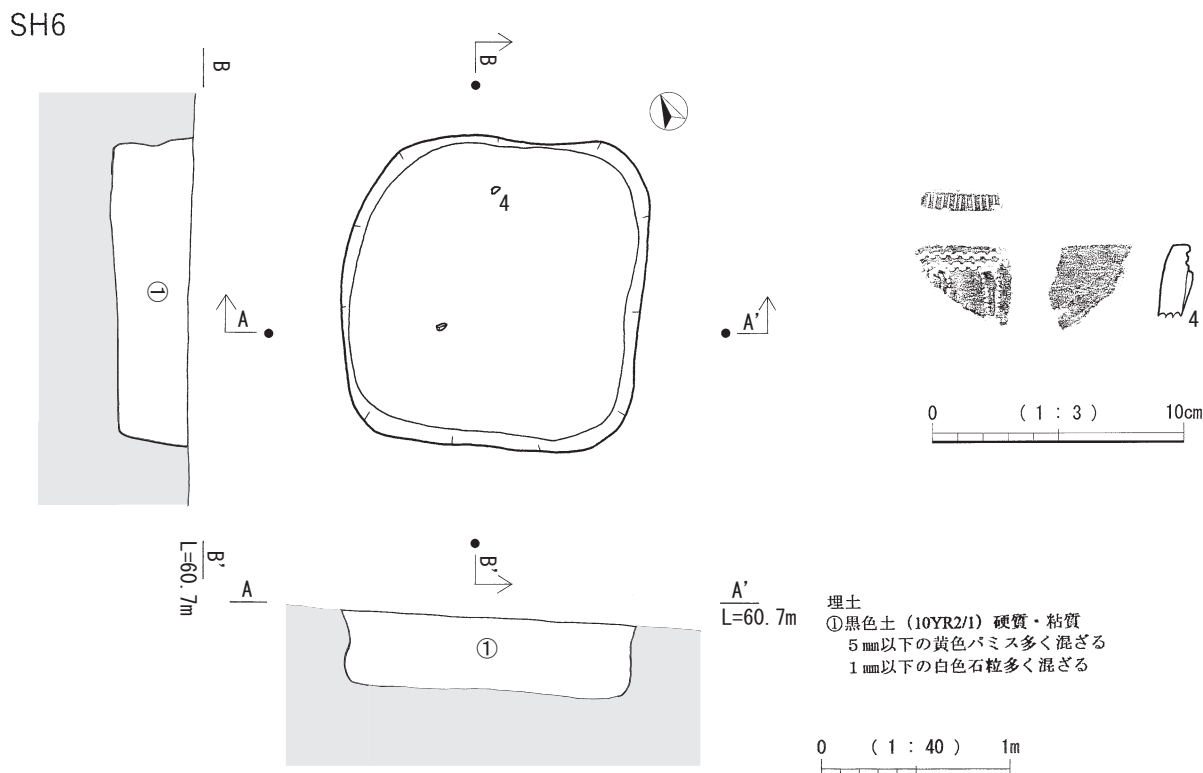
SH5



埋土

- ①にぶい黄褐色土 (10YR5/4)
軟質・粘質
②のブロック入る
- ②黒色土 (10YR2/1) 硬質・粘質
5mm以下の黄色パミス含む
1mm以下の白色石粒含む
下部にサツマブロック少量含む
- ③②に灰黄褐色の斑点
- ④樹痕

第39図 竪穴建物跡4号・竪穴建物跡5号・出土遺物



第40図 竪穴建物跡6号・出土遺物

土器と隣接のD-1区包含層土器が接合した資料である。VI b類に分類される。6は型式不明の底部で、丁寧にナデ調整されている。

石器は、2点出土した。S069は安山岩製の磨敲石である。歪な楕円状の礫を使用している。裏面はよく磨られており、タールが付着している。S070は砂岩製の石錘である。磨石としても使用される。

竪穴建物跡8号 (第42図)

検出状況

SH 8は、C-3区において検出された。検出面は、VIII層上面であった。

形状と規模

平面プランは、不定形で、長軸は2.12m、短軸が2.06mを測る。長短比は0.97、深さ38cm、遺構の推定面積は4.37㎡であった。北西側は段掘を施し、テラス状のエリアを設けている。

埋土

埋土の主体は、黒色土に5mm以下の黄色パミスや1mm以下の白色石粒を多く含む。

出土遺物

埋土中から土器1点が出土した。7は、斜位の貝殻刺突文を施す。VIa類に分類される。

竪穴建物跡9号 (第43図)

検出状況

SH 9は、C・D-3区において検出された。検出面は、VIII層であった。

形状と規模

平面プランは、隅丸方形で、長軸は2.25m、短軸が1.68mを測る。長短比は0.75、深さ42cm、遺構の推定面積は3.78㎡であった。H25年の12トレンチで、南東側が切られている。IX層上面まで掘られており、IX層が出土したため掘り止めた感じがある。

埋土

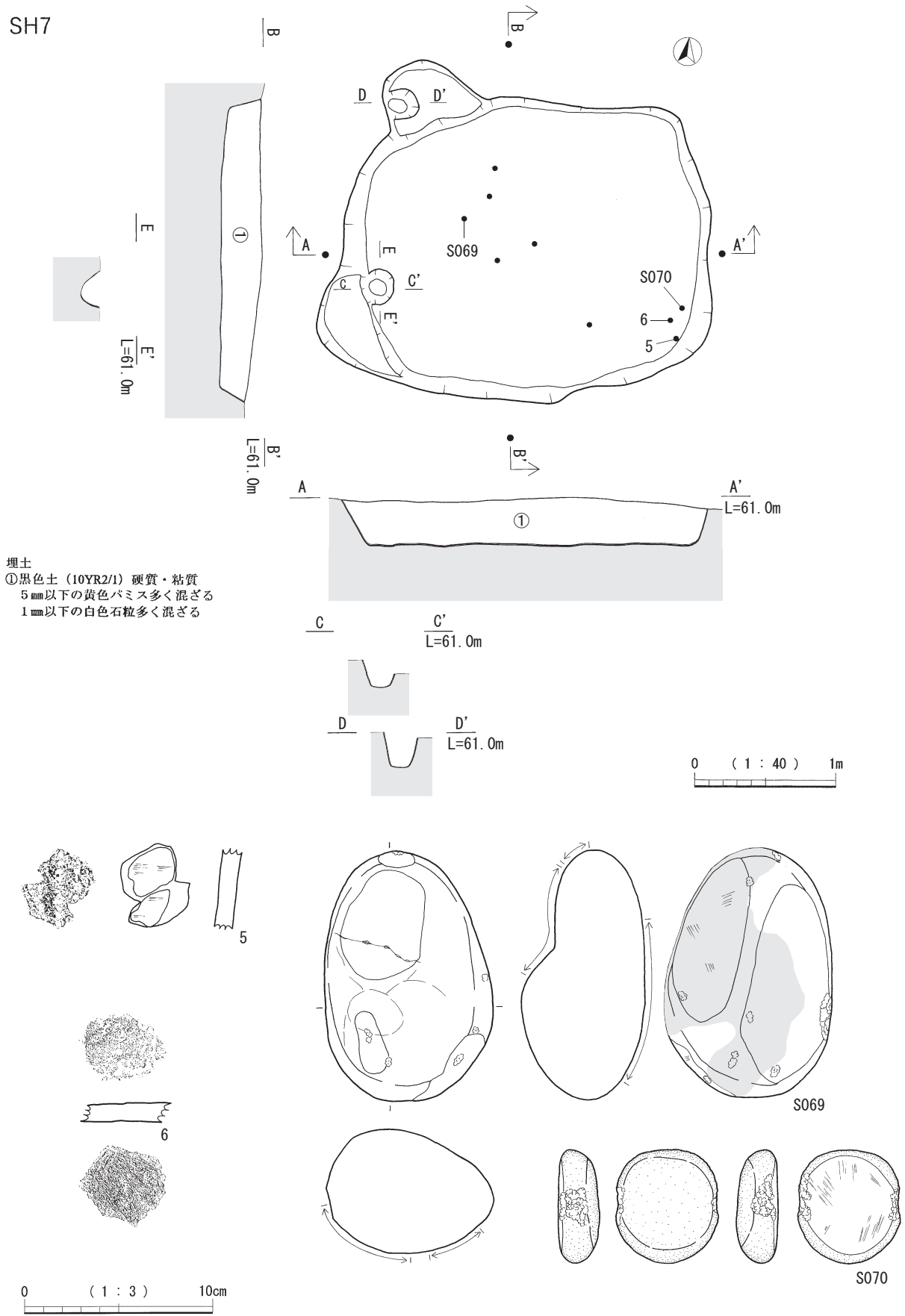
埋土の主体は、黒褐色土で1cm以下の黄色パミスと2mm以下の白色石粒多く混じる。

出土遺物

埋土中から土器2点と石器2点が出土した。土器1点は胴部小片のため図化しなかった。8は、底部からほぼ真っ直ぐに立ち上がり、底部は平底を呈する。胴部下位に縦位の貝殻条痕を施し、その上部には縦位の貝殻刺突文を密に施す。胎土に金雲母が確認できる。VI b類に分類される。

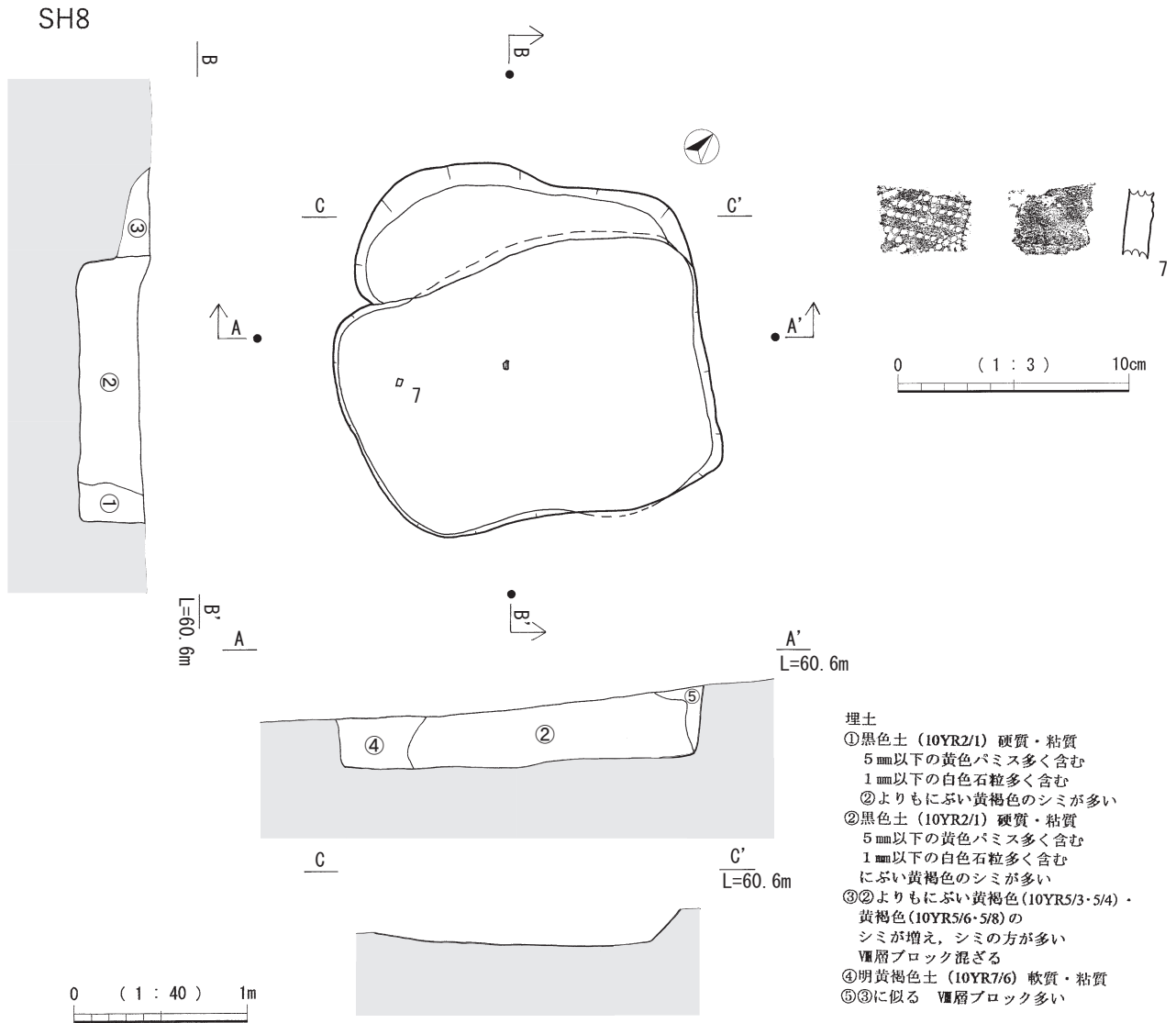
石器は3点出土したが、チャート製の剥片1点は図化しなかった。S071は多孔質の安山岩製の磨敲石で、円盤状である。比較的小型であり、よく使用されている。

SH7



埋土
 ①黒色土 (10YR2/1) 硬質・粘質
 5mm以下の黄色バミス多く混ざる
 1mm以下の白色石粒多く混ざる

第41図 竪穴建物跡7号・出土遺物



第42図 竪穴建物跡8号・出土遺物

被熱の痕跡はみられない。S072はホルンフェルス製の被熱破砕した磨石片である。

竪穴建物跡10号 (第44図)

検出状況

SH10は、D-3区において検出された。検出面は、Ⅷ層上面であった。

形状と規模

平面プランは、隅丸方形で、長軸は2.11m、短軸が1.76mを測る。長短比は0.83、深さ40cm、遺構の推定面積は3.71㎡であった。

埋土

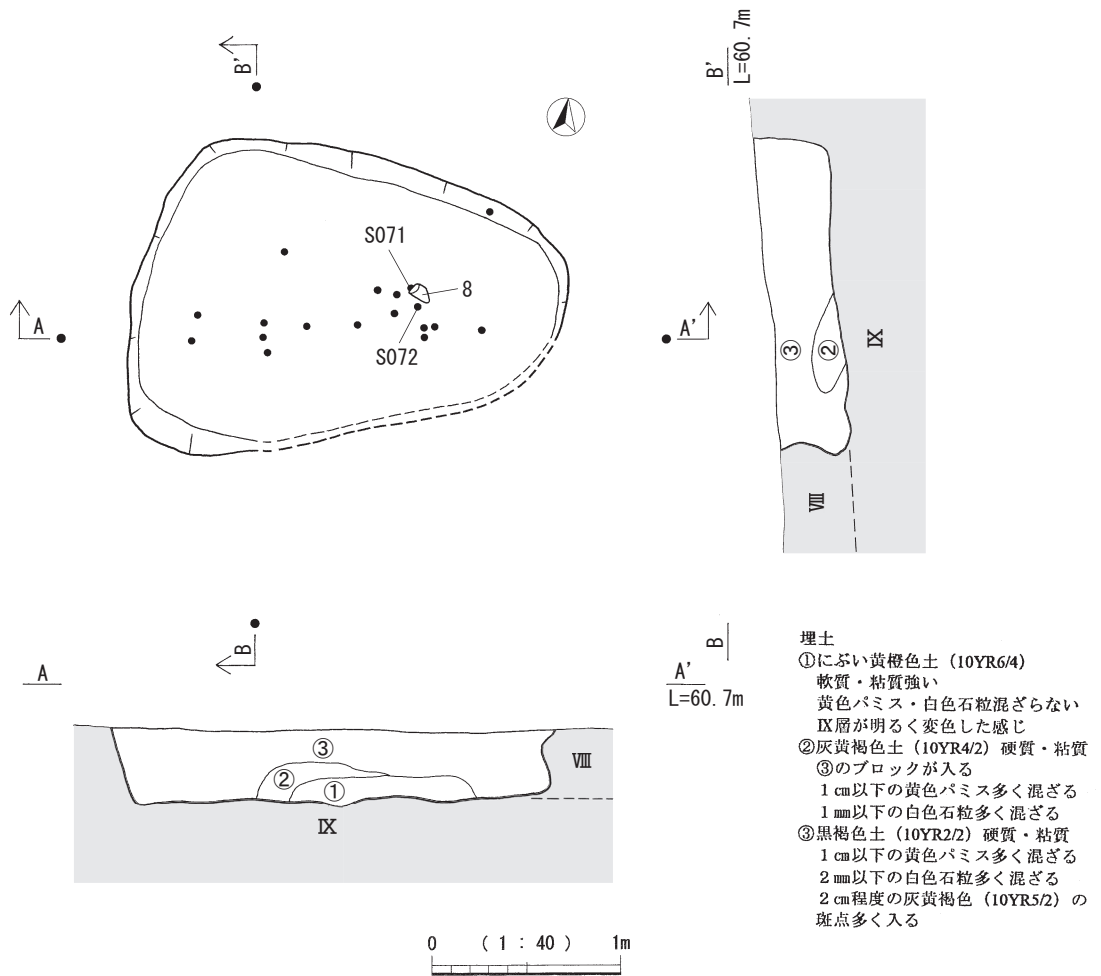
埋土の主体は、黒色土で5mm以下の黄色パミスと1mm以下の白色石粒を多く含む。

出土遺物

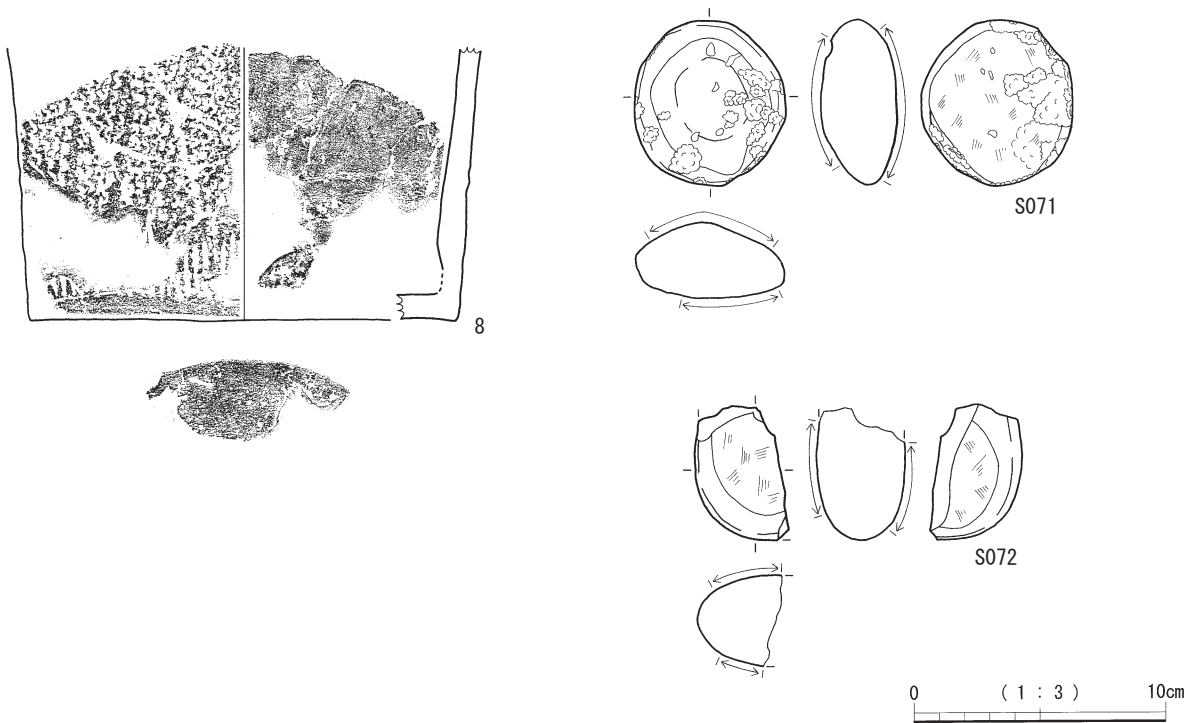
埋土中から土器3点と石器3点が出土した。9は、口縁部をやや肥厚させ、ゆるやかに内湾する土器である。口唇部は丸みを帯び、口唇直下に2条の貝殻刺突文を巡らす。口縁部には横位の瘤状突起を貼り付け、その上から「Z」字状の貝殻刺突文を密に施す。Ⅵa類に分類される。10は、内外面ともに丁寧にナデ調整されている。胎土に角閃石が目立つ無紋の胴部である。11は遺構内で接合した資料の胴部で、貝殻腹縁部による短い条痕文を鋸歯状に施す。器壁はやや厚めである。Ⅶa類に分類される。

石器は3点出土した。S073～S075は磨石である。S073は、砂岩製の小形の楕円状のもので、断面形は扁平である。下面と左側面に敲打痕がみられ、裏面は全面

SH9

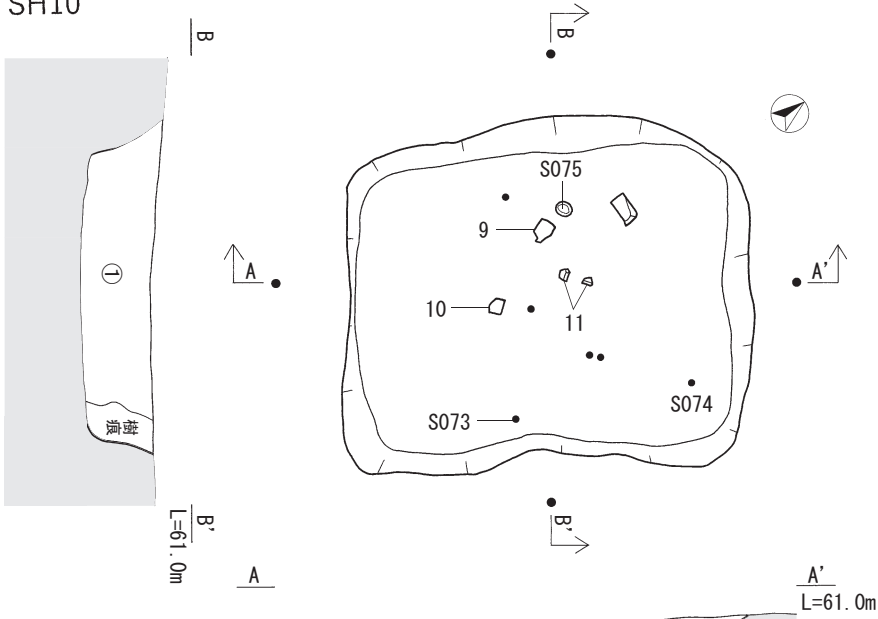


- 埋土
- ①にぶい黄橙色土 (10YR6/4)
軟質・粘質強い
黄色パミス・白色石粒混ざらない
IX層が明るく変色した感じ
 - ②灰黄褐色土 (10YR4/2) 硬質・粘質
③のブロックが入る
1 cm以下の黄色パミス多く混ざる
1 mm以下の白色石粒多く混ざる
 - ③黒褐色土 (10YR2/2) 硬質・粘質
1 cm以下の黄色パミス多く混ざる
2 mm以下の白色石粒多く混ざる
2 cm程度の灰黄褐色 (10YR5/2) の
斑点多く入る

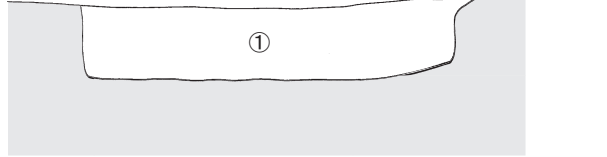


第43図 竪穴建物跡9号・出土遺物

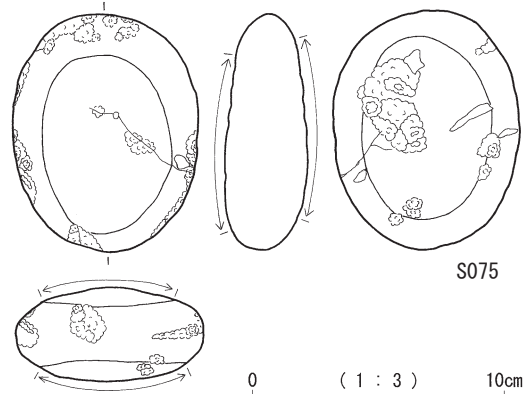
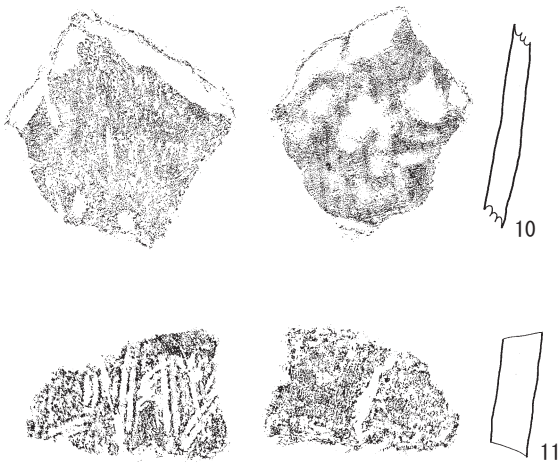
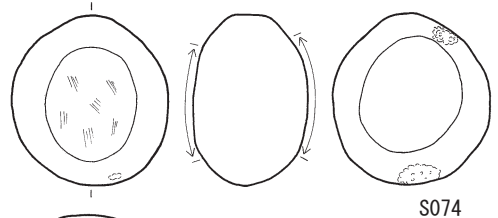
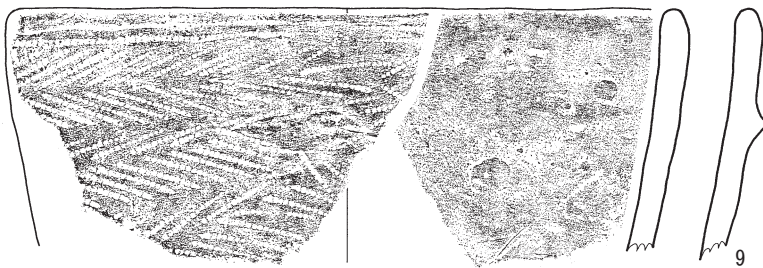
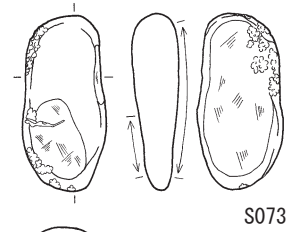
SH10



埋土
 ①黒色土 (10YR2/1) 硬質・粘質
 5mm以下の黄色パミス多く含む
 1mm以下の白色石粒多く含む



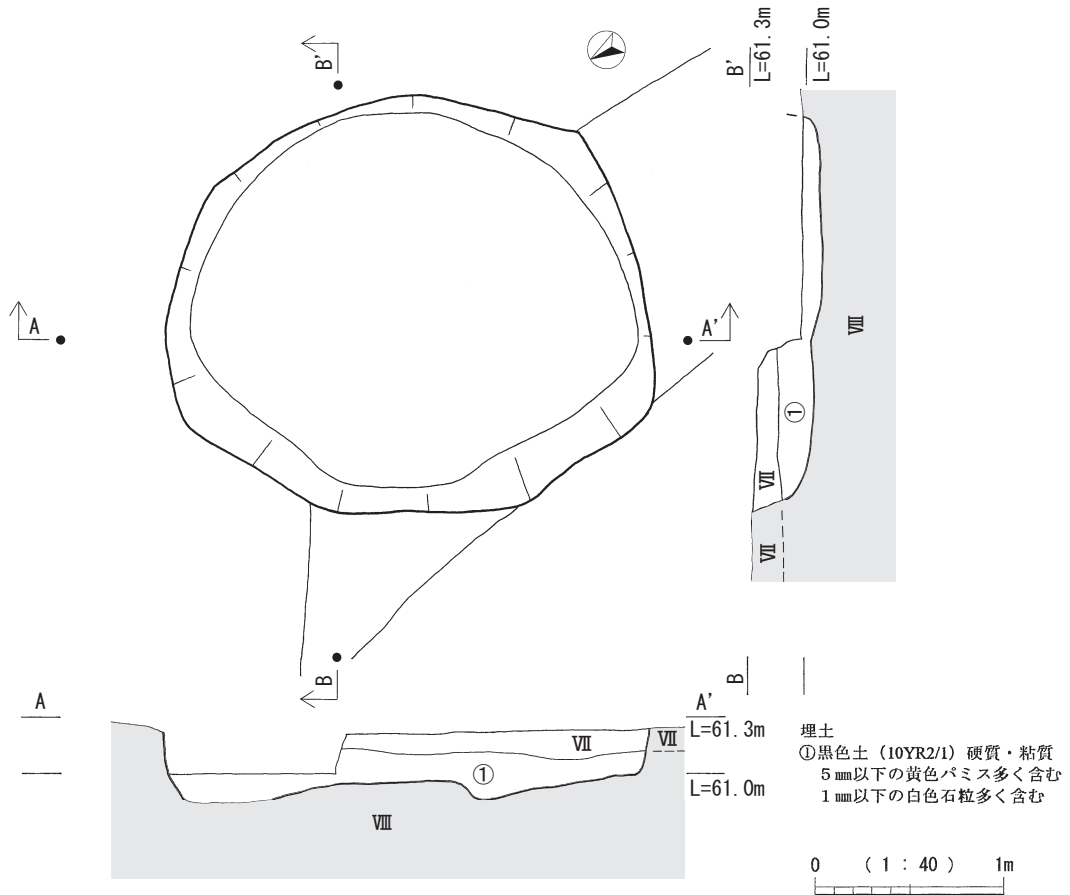
0 (1:40) 1m



0 (1:3) 10cm

第44図 竪穴建物跡10号・出土遺物

SH11



第45図 竪穴建物跡11号

がよく磨られている。S074は安山岩製の小形の円形で所々に深い敲打痕がみられる。正面の磨面は明瞭である。S075は、多孔質の安山岩製の楕円状のもので、断面形は扁平である。全面的に敲打痕が多く残り、正面・背面は弱く磨られている。3点共に被熱の痕跡はない。

竪穴建物跡11号（第45図）

検出状況

SH11は、D・E-3区において検出された。検出面は、VIII層であった。

形状と規模

平面プランは、楕円形で、長軸は2.53m、短軸が2.07mを測る。長短比は0.82、深さ36cm、遺構の推定面積は4.11㎡であった。

埋土

埋土の主体は、黒色土で5mm以下の黄色のパミスと1mm以下の白色石粒を多く含む。

出土遺物

埋土中からOBチップ1点が出土したが図化しなかった。

竪穴建物跡12号（第46・47図）

検出状況

SH12は、D・E-3区において検出された。検出面は、VIII層であった。

形状と規模

平面プランは、不定形で、長軸は3.61m、短軸が3.22mを測る。長短比は0.89、深さ40cm、遺構の推定面積は11.62㎡であった。不定形で大規模な遺構である。竪穴建物跡の北側をSK1が切っている。検出状況から、SH12に伴う土坑ではないと推測される。また、埋土状況より2基の遺構は時間的な差は余りないものと思われる。

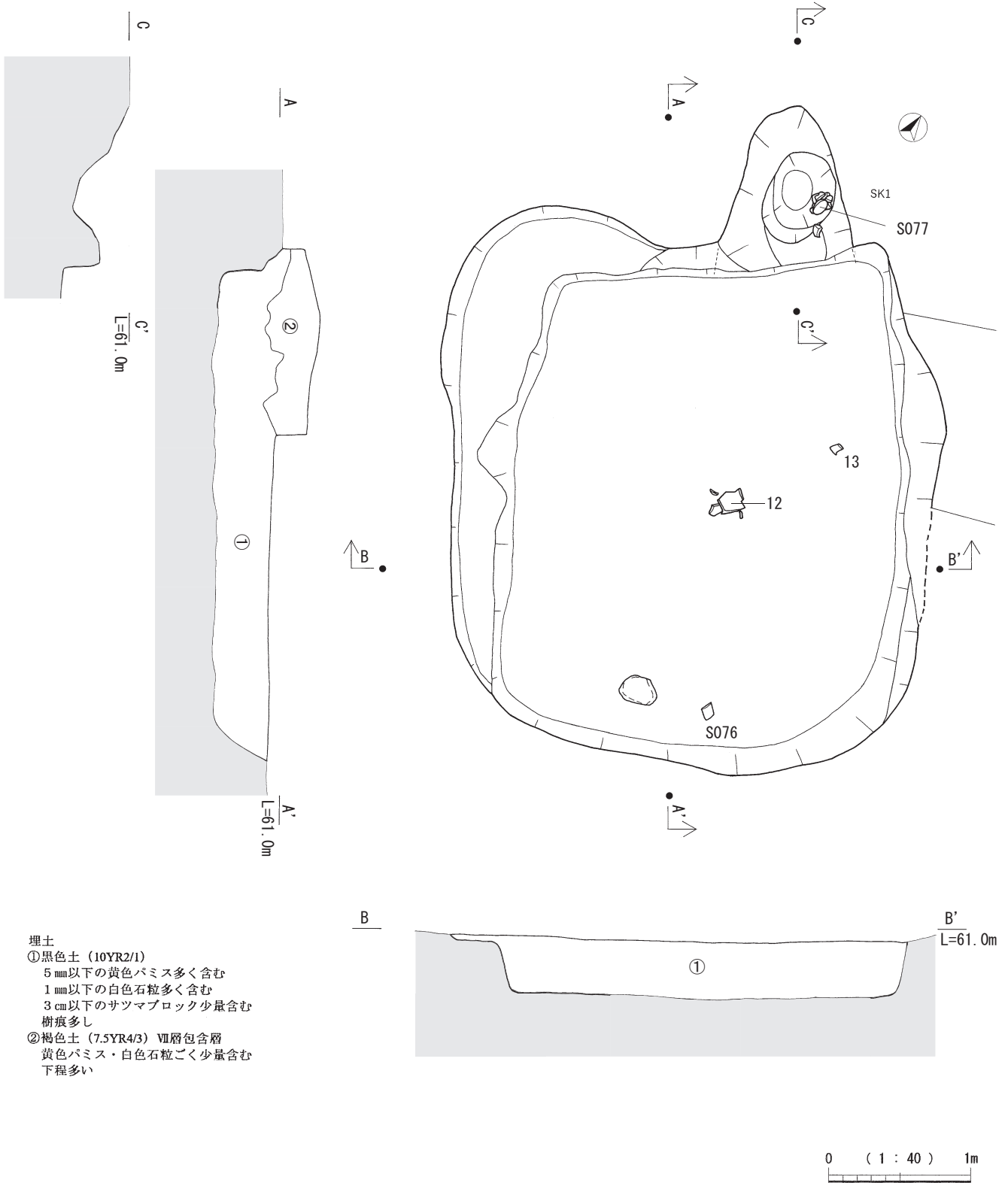
埋土

埋土の主体は、黒色土で2cm以下の薩摩火山灰ブロック少量を含む。樹痕が多い

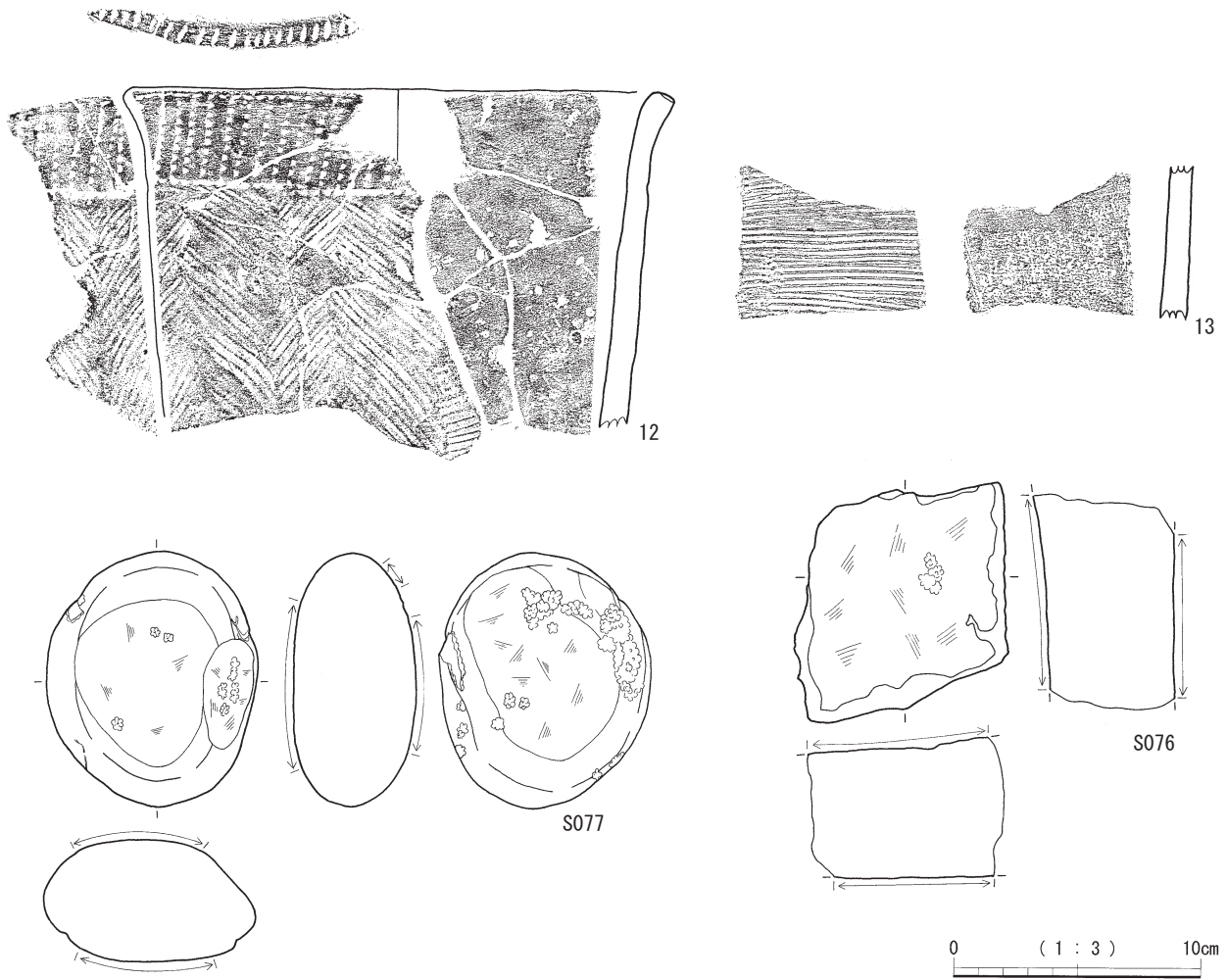
出土遺物

埋土中から土器2点と石器2点が出土した。12は口唇部を平坦整形し、ヘラ状工具によりキザミを施す。口唇直下と胴部文様帯の境に横位の貝殻刺突文を1条ずつ巡らせ、その間を斜位の貝殻刺突文で埋めて口縁部文様帯を構成する。胴部は綾杉状に貝殻条痕文が施されている。

SH12



第46図 竪穴建物跡12号



第47図 竪穴建物跡12号出土遺物

V類に分類される。13は胴部で、丁寧なナデ調整された後に横位の貝殻条痕文が密に施されている。Ⅲc類に分類される。

石器は2点出土した。S076は凝灰岩製の被熱破碎した石皿片である。両面共によく使用されている。S077は安山岩製の磨敲石であり、楕円状である。縁辺部には数カ所深いワレがみられ、風化しているものの敲打によるものと考えられる。被熱の痕跡はない。

竪穴建物跡13号 (第48図)

検出状況

SH13は、C-4区において検出された。検出面は、Ⅶ層であった。

形状と規模

平面プランは、隅丸方形で、長軸は2.36m、短軸が1.98mを測る。長短比は0.84、深さ34cm、遺構の推定面積は4.67㎡であった。Ⅸ層上面で掘り止めている。

埋土

埋土の主体は、黒色土で黄色パミスと白色石粒が多く混じる。3mm以下の薩摩火山灰も少量含む。

出土遺物

大型の石器1点が出土した。S078は安山岩製の石皿の完形品で床着に近い状態で出土した。表面が使用面であり、中央部から下位が特に大きく窪み、黒く変色している。下面には搔き出し口が形成されている。正面の上部の側面近くには敲打痕が多く残る。赤化やヒビ割れが確認できるため、熱を受けている可能性がある。

竪穴建物跡14号 (第49図)

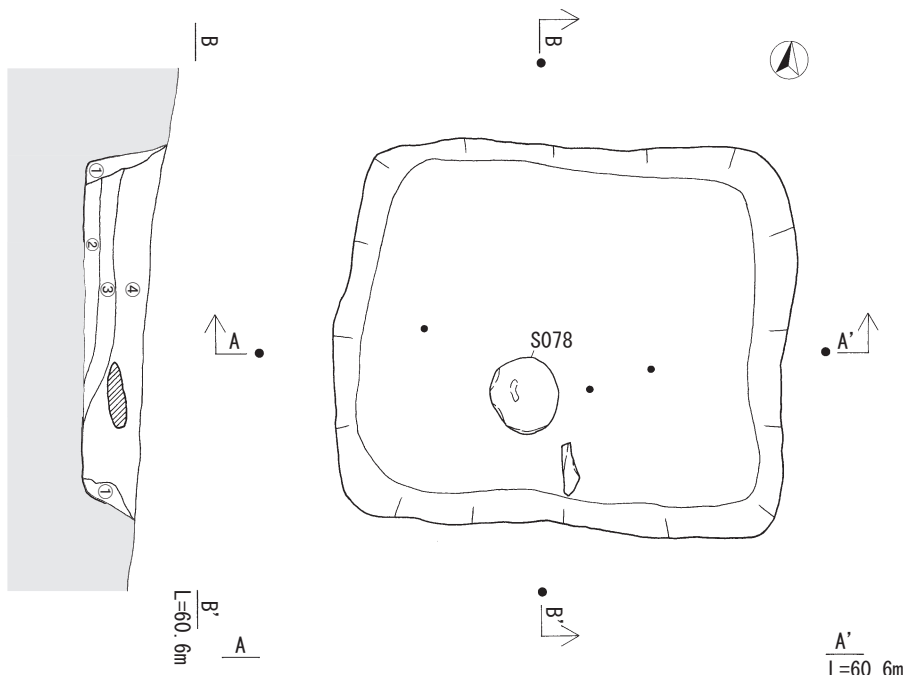
検出状況

SH14は、D・E-4区において検出された。検出面は、Ⅷ層であった。

形状と規模

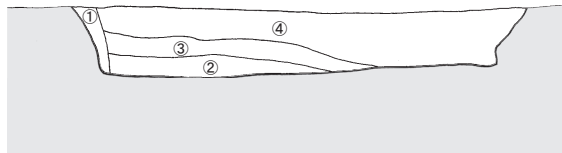
平面プランは、不定形で、長軸は2.18m、短軸が1.94

SH13

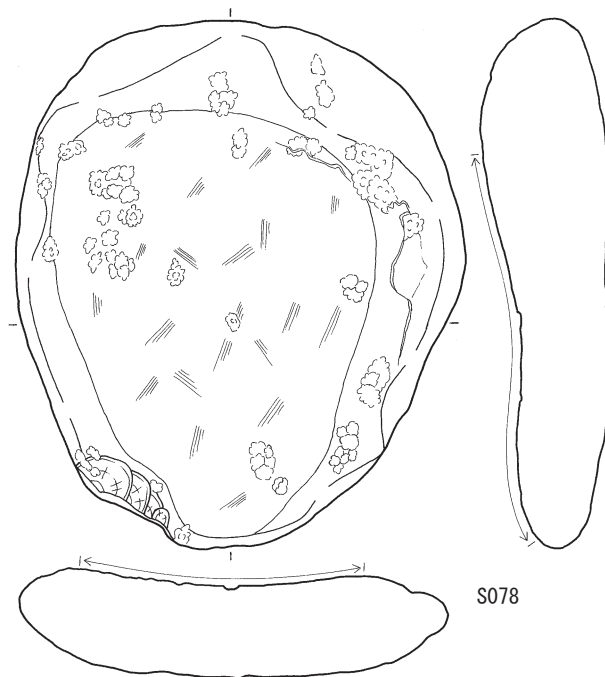


埋土

- ①にぶい黄褐色土 (10YR5/3) 硬質・粘質
Ⅷ層に②③④が混ざった感じ
- ②黒褐色土 (10YR3/2) 硬質・粘質
黄色パミス・白色石粒を少量含む
- ③④に、にぶい黄褐色の斑点入る (2 cm)
- ④黒色土 (10YR2/1) 硬質・粘質
黄色パミス・白色石粒多い
3 cm以下のサツマブロック少量含む

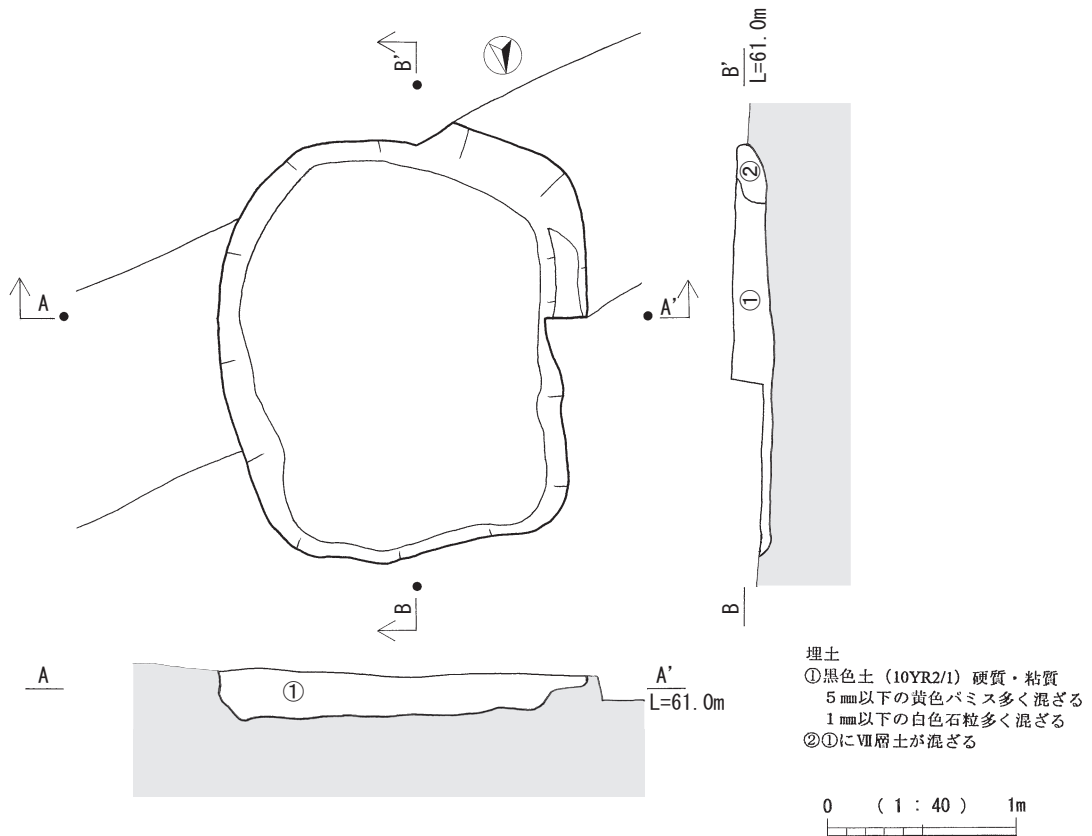


0 (1 : 40) 1m



第48図 竪穴建物跡13号・出土遺物

SH14



第49図 竪穴建物跡14号

mを測る。長短比は0.89, 深さ24cm, 遺構の推定面積は4.23㎡であった。不定形の小規模の浅い竪穴建物跡である。土層ベルトを残して調査した。ベルトに半分ほどかかったが、段掘の有無は、確認できなかった。Ⅷ層中で掘り止めている。

埋土

埋土の主体は、黒色土に黄色パミスと白色石粒が混ざる。周辺のⅧ層よりも多い。

出土遺物

遺物は出土していない。

竪穴建物跡15号 (第50図)

検出状況

SH15は、E-4区において検出された。検出面はⅧ層であった。

形状と規模

平面プランは、隅丸方形で、長軸は2.37m, 短軸が1.82mを測る。長短比は0.77, 深さ30cm, 遺構の推定面積は4.31㎡であった。隅丸方形の小規模な竪穴建物跡である。

埋土

埋土の主体は、黄色パミスと白色石粒を多く含んだ黒色土である。

出土遺物

埋土中から土器1点と石器3点が出土した。14は口縁

部で、わずかに内湾する。口唇部は平坦にナデ調整される。口縁部には縦の瘤状突起が貼り付けられた後、横位の貝殻刺突文が施される。Ⅵa類と思われる。

S079・S080は安山岩製の磨敲石の破片である。S080は埋土の下位から出土した。ともに敲打の痕跡はあるもののその頻度は少ないと考えられる。人為的に半裁した可能性もある。S081は安山岩製の磨敲石であり、歪な楕円状である。正面中央部の敲打は深く擦れており、凹石としての使用も考えられる。裏面はよく磨られる。3点共に被熱の痕跡はない。図化しなかったが、型式不明土器小片3点、磨石と思われる破片1点が出土した。

竪穴建物跡16号 (第51図)

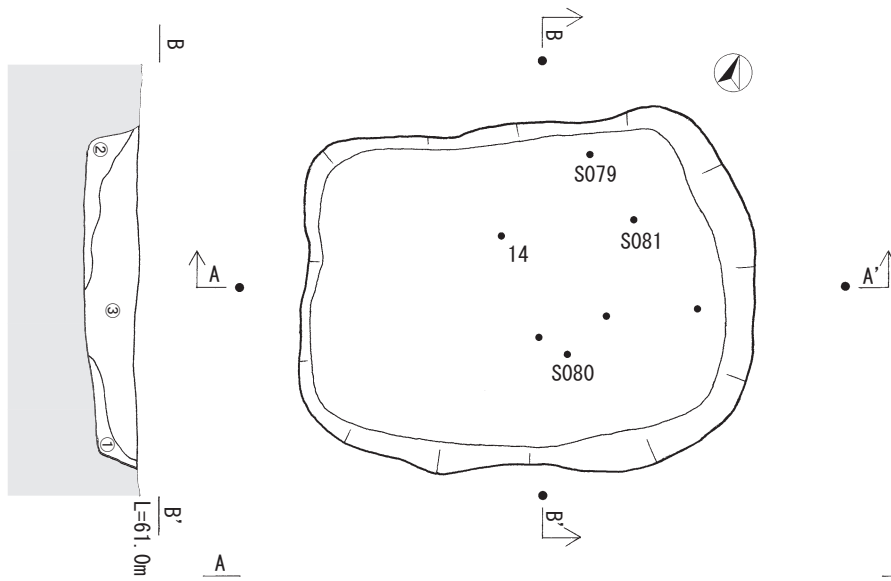
検出状況

SH16は、F-3・4区において検出された。検出面は、ⅦbからⅧ層上面であった。

形状と規模

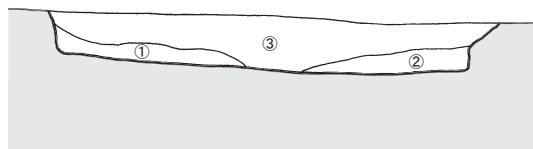
平面プランは、菱形に近い隅丸方形で、長軸は2.09m, 短軸が1.91mを測る。長短比は0.91, 深さ34cm, 遺構の推定面積は3.99㎡で、小規模の遺構である。Ⅷ層土を壁面とし、底面をⅨ層上面とする。底面は、全体的に東側に傾斜し、焼土や施設等は見られなかった。また、検出面周辺にピットは発見されなかった。

SH15



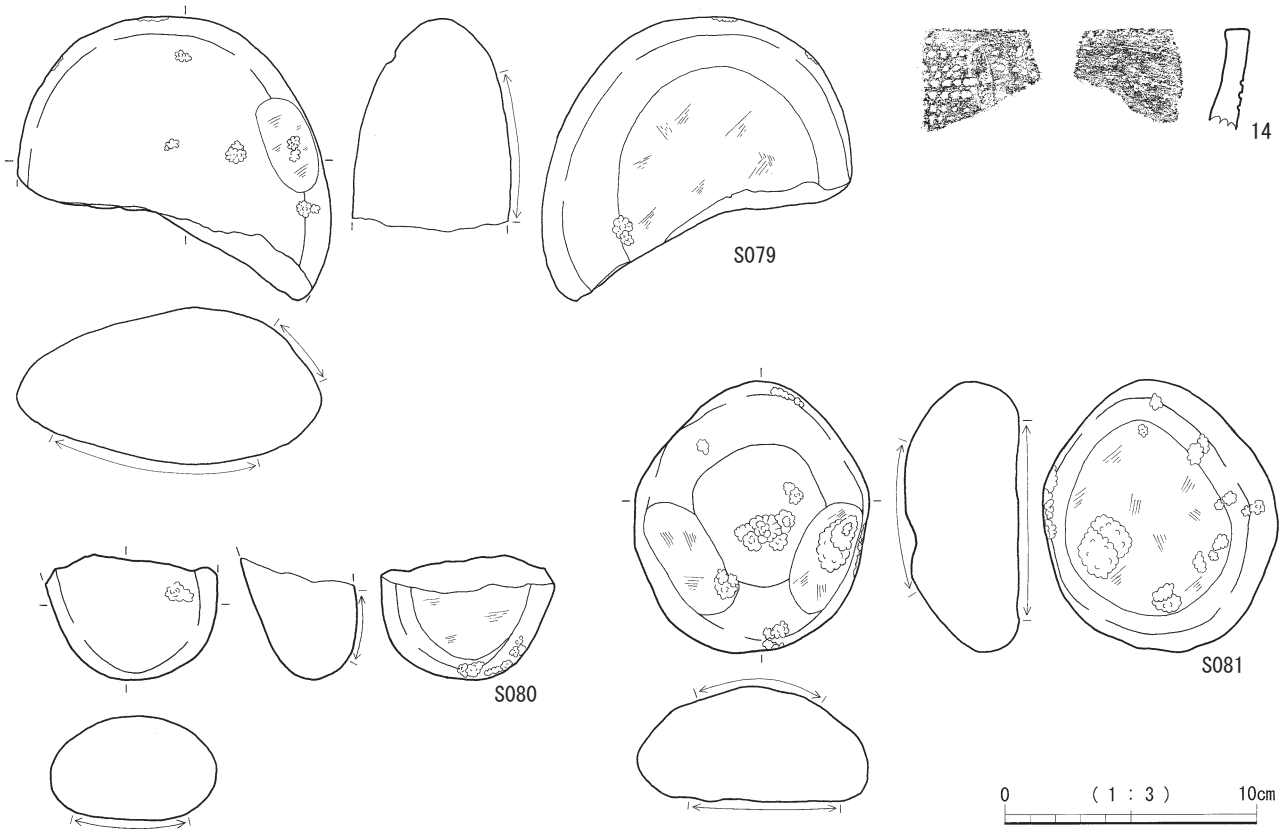
埋土

- ① 黒褐色土 (10YR2/2) 硬質・粘質
- ② 黒褐色土 (10YR2/2) 硬質・粘質
5mm以下の黄色バミス混ざる
2cm以下のⅧ層サツマ火山灰ブロック混ざる
1mm以下の白色石粒混ざる
樹痕と考えられる箇所あり
- ③ 黒色土 (10YR2/1) 硬質・粘質
5mm以下の黄色バミス混ざる
2cm以下のⅧ層サツマ火山灰ブロック混ざる
1mm以下の白色石粒混ざる
樹痕と考えられる箇所あり

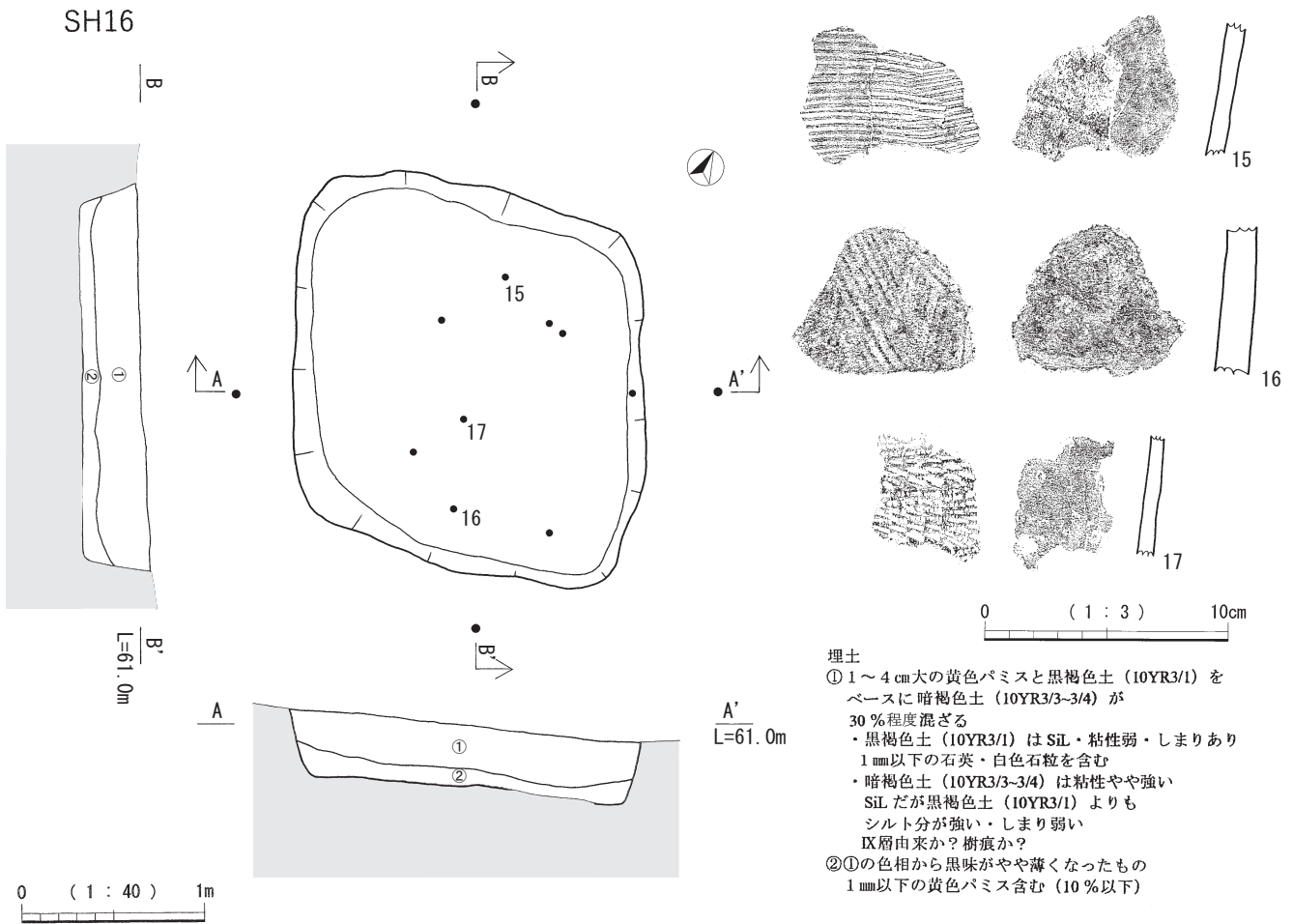


A'
L=61.0m

0 (1:40) 1m



第50図 竪穴建物跡15号・出土遺物



第51図 竪穴建物跡16号・出土遺物

埋土

埋土の主体は、黒褐色土で黄色パミスと白色石粒を若干含む。

出土遺物

土中から土器3点が出土した。15はSH17出土の土器と接合した資料である。胴部は丁寧にナデ調整された後に横位の貝殻条痕文が密に施される。内面もナデ調整されている。Ⅲc類に分類される。16は、胴部に綾杉状の貝殻条痕文が施される。内面はナデ調整され、煤が付着している。やや厚みのある土器である。Ⅴ類に分類される。17は、貝殻腹縁部を押圧ぎみに羽状に施す。内面は丁寧にナデ調整されている。一見短沈線のように見えてⅥeタイプのようなのであるが、ここでは分類をⅥaとした。

竪穴建物跡17号 (第52図)

検出状況

SH17は、F-4区において検出された。検出面は、Ⅷ層上面であった。

形状と規模

平面プランは、楕円形で、長軸は2.17m、短軸が2.16

mを測る。長短比は0.99、深さ30cm、遺構の推定面積は3.68㎡であった。楕円形で小規模の竪穴建物跡である。

埋土

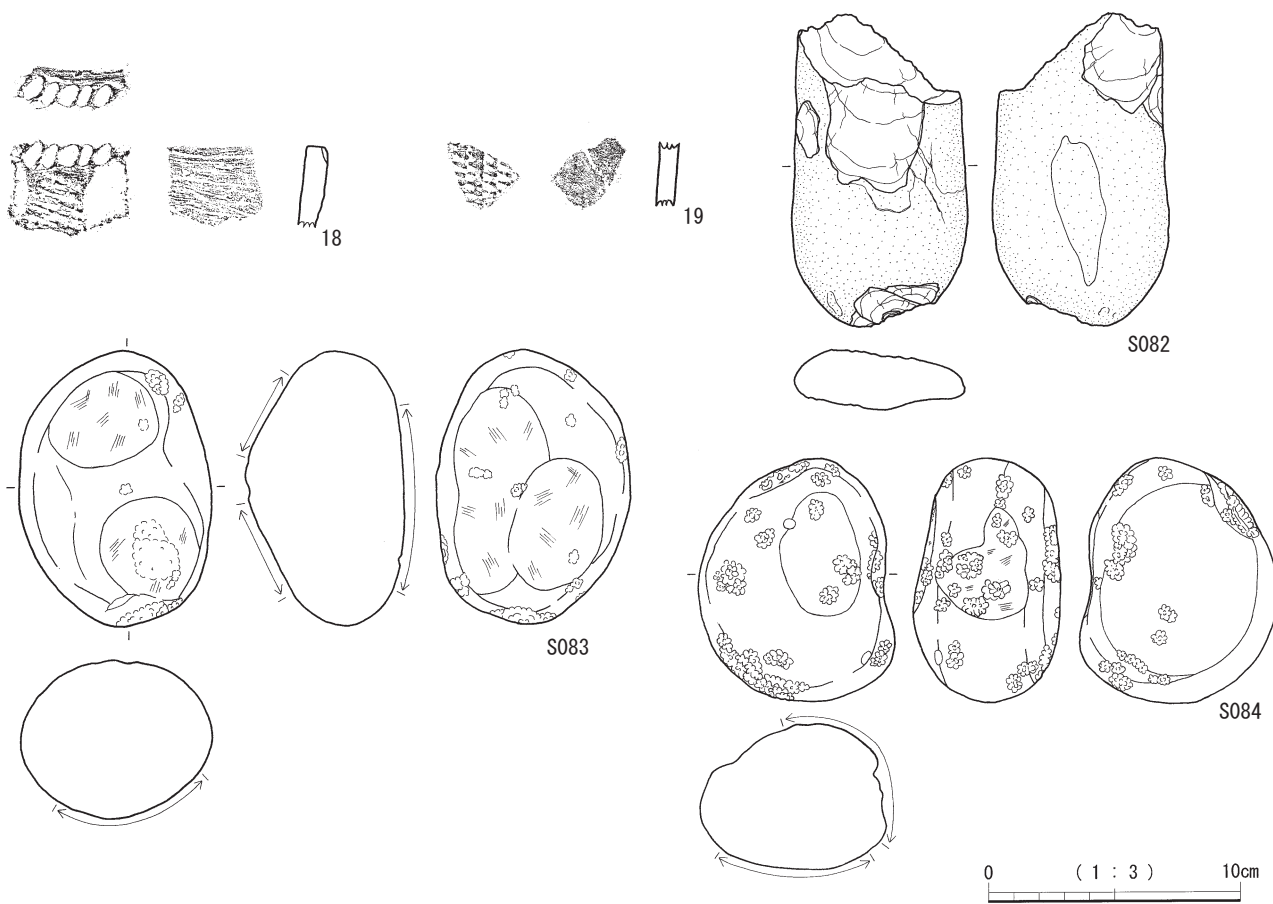
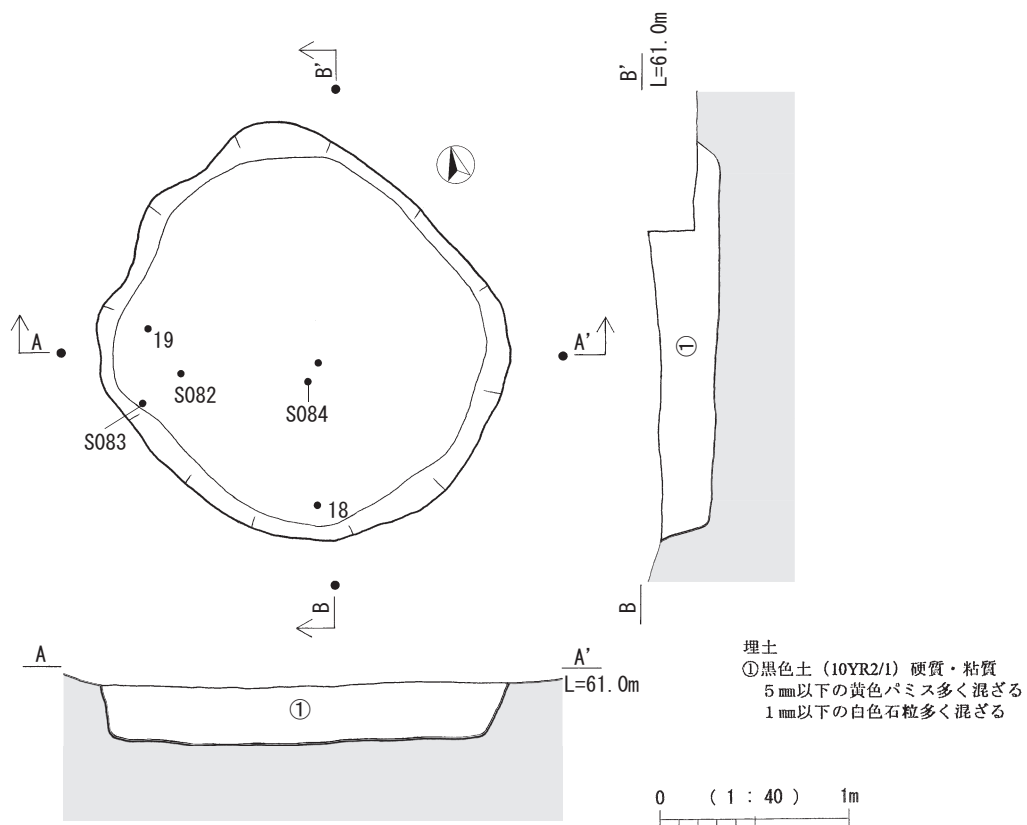
埋土は、硬質で粘質のある黒色土を基本とし、5mm以下の黄色のパミスと1mm以下の白色石粒が多く混じる。炭化物は確認できなかった。

出土遺物

埋土中から2点の土器と3点の石器が出土した。18は口縁部で、平坦にナデ調整された口唇部外面にキザミが施され、その下位に貝殻条痕文が斜位に施される。内面はケズリの調整が認められる。Ⅱ類に分類される。19は胴部小片で、貝殻腹縁部による押引文が施されている。Ⅳ類に分類される。

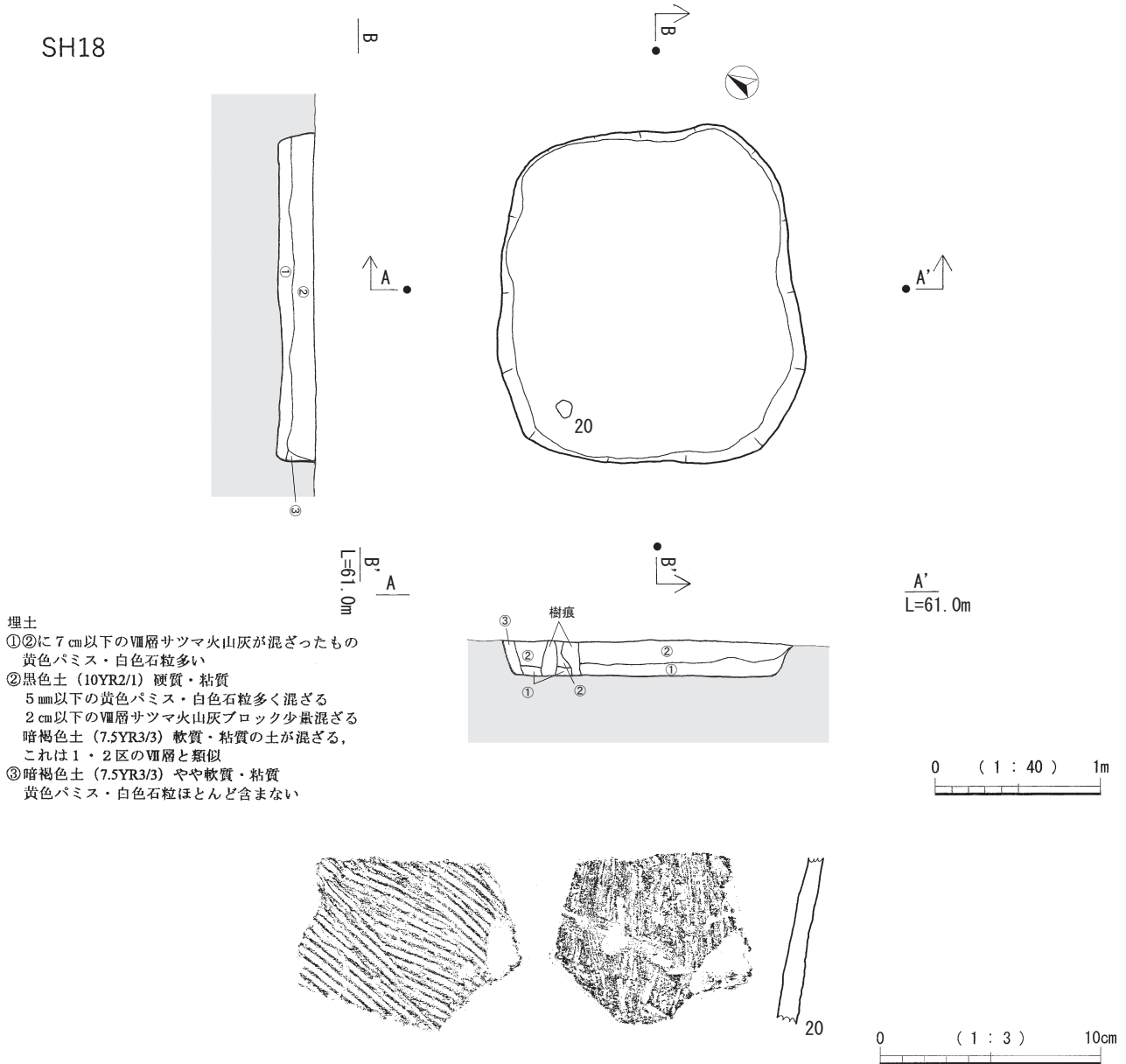
石器は3点出土した。S082は、ホルンフェルス製の石斧である。表面の風化が著しい。S083・S084は歪な楕円形の安山岩製の磨敲石である。正面は特によく使用されている。S084は多孔質の石材であり、側面の敲打痕は深い。ともに被熱の痕跡はない。

SH17



第52図 竪穴建物跡17号・出土遺物

SH18



- 埋土
- ①②に7cm以下のⅧ層サツマ火山灰が混ざったもの
黄色パミス・白色石粒多い
 - ②黒色土(10YR2/1)硬質・粘質
5mm以下の黄色パミス・白色石粒多く混ざる
2cm以下のⅧ層サツマ火山灰ブロック少量混ざる
暗褐色土(7.5YR3/3)軟質・粘質の土が混ざる、
これは1・2区のⅧ層と類似
 - ③暗褐色土(7.5YR3/3)やや軟質・粘質
黄色パミス・白色石粒ほとんど含まない

第53図 竪穴建物跡18号・出土遺物

竪穴建物跡18号 (第53図)

検出状況

SH18は、E-5区において検出された。検出面は、Ⅷ層上面であった。

形状と規模

平面プランは、隅丸方形で、長軸は2.02m、短軸が1.80mを測る。長短比は0.89、深さ22cm、遺構の推定面積は3.64㎡であった。Ⅸ層上面またはⅧ層最下部で掘り止めている。隅丸方形で小規模の深さの浅い竪穴建物跡である。

埋土

埋土は北西側が樹痕で層が乱れているため、基本的には黄色パミスと白色石粒が多く混ざる黒色土と薩摩火山灰が混ざった黒色土から成る。

出土遺物

埋土中から1点の土器が出土した。20は胴部で、斜位の貝殻条痕文が施され、内面はケズリの調整が認められる。Ⅱ類土器に分類される。

竪穴建物跡19号 (第54図)

検出状況

SH19は、E-7区において検出された。検出面は、Ⅷ層であった。

形状と規模

平面プランは、不定形で、長軸は1.72m、短軸が1.67mを測る。長短比は0.97、深さ20cm、遺構の推定面積は2.87㎡であった。遺構の東側は試掘トレンチで切られている。

不定形で小規模の浅い竪穴建物跡である。

埋土

埋土の主体は、黒色土で5mm以下の黄色のパミスと1mm以下の白色石粒を多く含む。

出土遺物

埋土中から土器1点が出土した。21は、小口状工具と思われる施文具で条痕文を施している。器壁はやや薄めで、内面は丁寧にナデ調整されている。後・晩期の土器と思われる。型式は不明である。

竪穴建物跡20号（第54図）

検出状況

SH20は、F-8区において検出された。検出面は、Ⅷ層であった。

形状と規模

平面プランは、隅丸長方形で、長軸は2.48m、短軸が1.61mを測る。長短比は0.65、深さ30cm、遺構の推定面積は3.99㎡であった。隅丸長方形で中規模の竪穴建物跡である。Ⅸ層上部で掘り止めている。

埋土

埋土の主体は、黒色土で黄色のパミスと白色石粒が多く包まれる。1～6区の竪穴建物跡と比較した場合でも、粒が大きく、量も多く含む。

出土遺物

遺物は出土しなかった。

竪穴建物跡21号・22号（第55・56図）

検出状況

SH21・22は、F-8・9区において検出された。検出面は、Ⅷ層であった。

形状と規模

平面プランは、複数の遺構が切り合っており不明である。検出面からの深さは42cmである。SH21・22は切り合っているが、形状や断面の土層からさらに2ないし3基の竪穴建物跡が重複していた可能性もある。ここでは、とりあえず平面形状から2基として報告する。また南西側には竪穴建物跡の壁面を利用した連穴土坑と思われるようなSK18が竪穴建物跡を切っている。南側には古墳時代のSK231もSH21を一部切っており、遺構が複雑に絡み合った竪穴建物跡である。

SK18については、土坑編で再掲し、SK231については、報告書「小牧遺跡4 古墳時代編」で掲載することにする。

埋土

埋土は断面観察から竪穴建物跡が複数からんだ状況が窺える。主体は暗褐色土である。

出土遺物

SH21・22の埋土中から土器4点が出土した。22は口

縁部近くの胴部で、縦に瘤状突起を貼り付けた後、縦位の貝殻刺突文を施し、その下位には横位の貝殻刺突文を密に施す。包含層出土の181と同一個体と思われる。Ⅵaに分類される。23は、3条の横位貝殻刺突文を挟んで、「Z」字状に貝殻刺突文を密に施す。Ⅵaに分類される。24は、口縁部がやや肥厚し内湾する土器で、波状口縁を呈する。口唇は丁寧にナデられ、口縁部には横位の貝殻刺突文を3条施し、その下位には鋸歯状の沈線文が施される。Ⅶa類に分類される。25は、横位の貝殻条痕文を施す胴部小片で、色調が淡黄色を呈する。胎土に角閃石を多く含む。Ⅷ類に分類され、包含層出土の土器と同一個体と思われる。

石器は5点出土した。S085・S086は床直上で検出された遺物である。ともに安山岩製である。S085は、磨敲石片であり、裏面は非常によく磨られる。被熱破砕したものと思われ、割れ口も薄く赤化していることから、破砕後も熱を受けた可能性がある。S086は非常によく使用された磨敲石で、被熱破砕後した後も割れ口を敲いて繰り返し使用した状況が窺える。

S087～S089はすべて床直上で検出された遺物であり、S087・S088は被熱破砕した安山岩製の磨敲石片である。S088は上面先端部が特に使用されており、ハンマーとして使用したことも考えられる。S089は、舟形の軽石加工品である。わずかに赤色顔料が付着することから着色されていた可能性がある。

竪穴建物跡23号・24号（第57図）

検出状況

SH23・24は、E-9・10区において検出された。検出面は、Ⅷ層であった。

形状と規模

全体の平面プランからは一つの竪穴建物跡に見えるが、東西方向の断面観察から、④⑤の埋土を②③が切っている状況が分かる。この断面形状から、2基の竪穴建物跡が重複していると判断した。東側の竪穴建物跡をSH23、西側の竪穴建物跡をSH24とする。SH23の平面プランは隅丸長方形で、長軸は1.88 + a m、短軸が2.06mを測る。深さ40cmであった。SH24の平面プランは隅丸方形で、長軸は2.00m、短軸が1.66mを測る。長短比は0.83、深さ36cm、遺構の推定面積は3.32㎡であった。

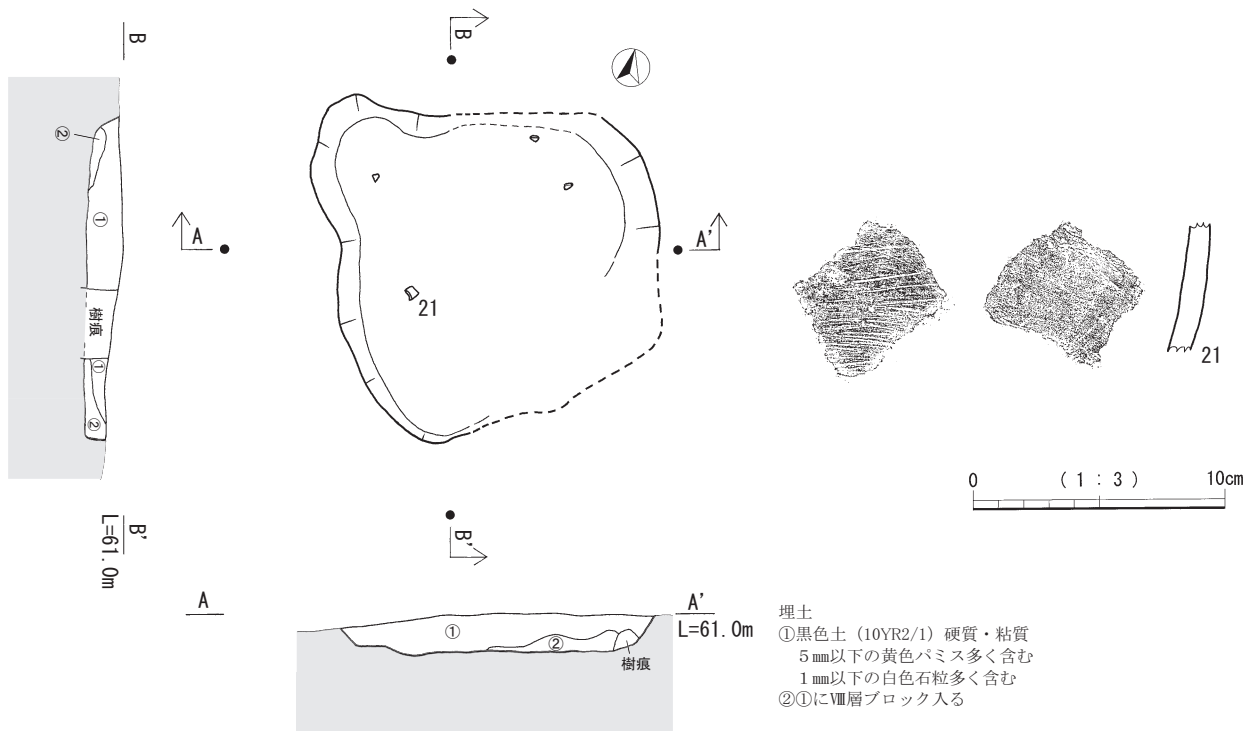
埋土

埋土の主体は、黒色土で、遺構埋土の違いは、黄色パミスや白色石粒の混入状況及び色調で区分した。

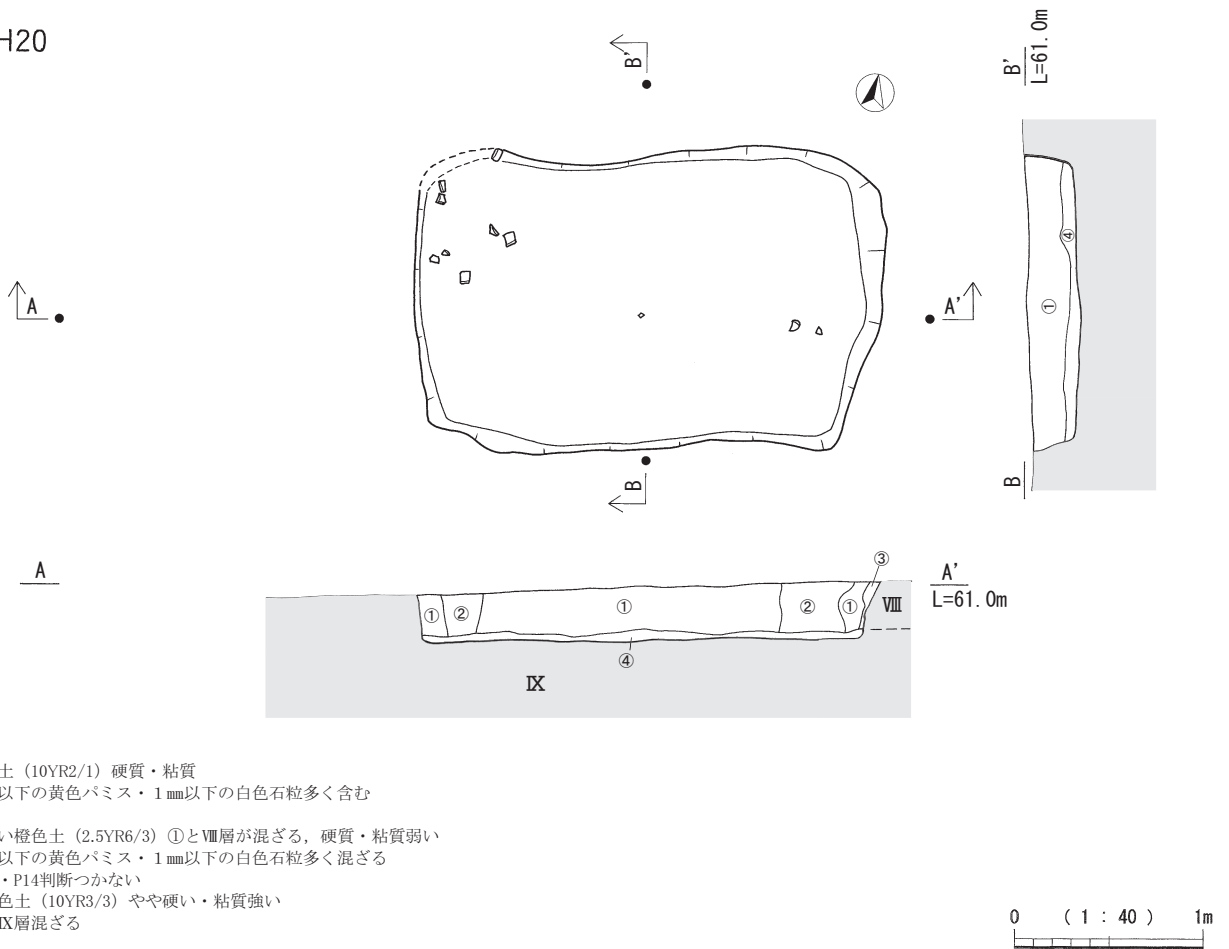
出土遺物

埋土中からは、土器6点が出土した。26は、包含層出土の土器と接合した資料である。貝殻腹縁部による鋸歯状の条痕文を施す。器壁はやや厚い。Ⅶa類に分類される。27・28は、縦位の貝殻刺突文が施される胴部片で、器壁

SH19

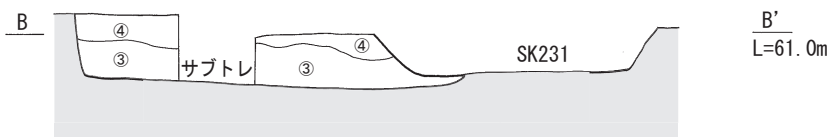
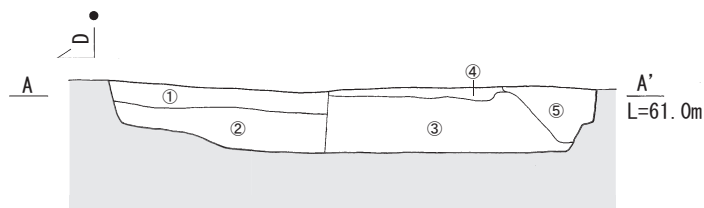
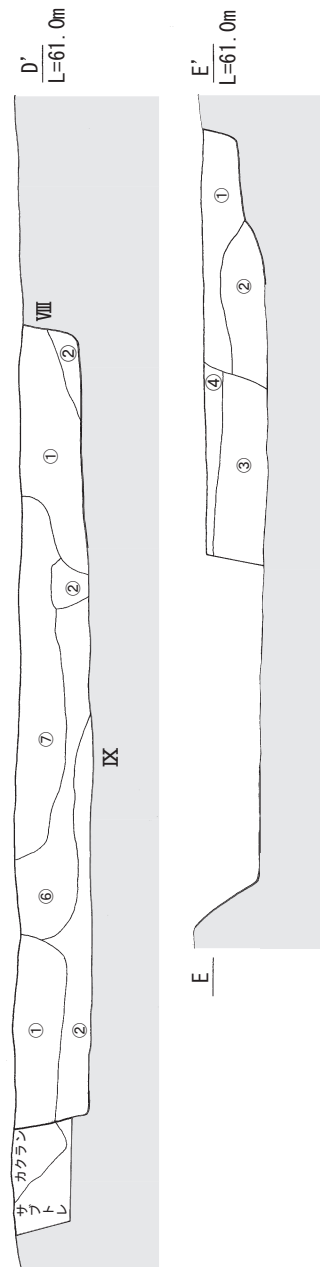
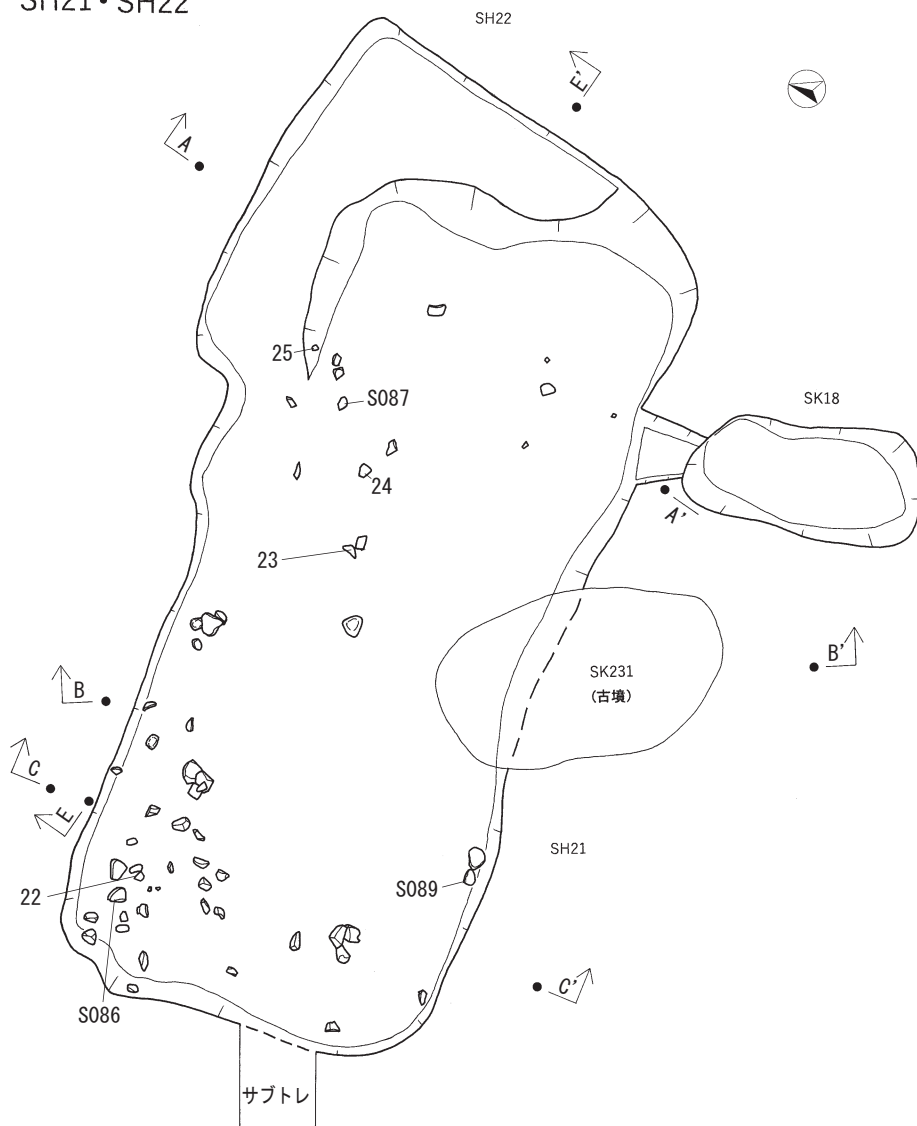


SH20



第54図 竪穴建物跡19号・出土遺物・竪穴建物跡20号

SH21・SH22



埋土

- ① 黒色土 (10YR2/1) 硬質・粘質
- ② が少量混ざる
5mm以下の黄色パミス多く含む
1mm以下の白色石粒多く含む
- ③ 暗褐色土 (10YR3/3) 硬質・粘質,
暗赤褐色土 (5YR)・IX層に類似
①が少量混ざる
- ④ 褐色土 (7.5YR4/4) 硬質・粘質
②より明るい
1cm以下の黄色パミス P14 (VIII層) P13 含む
1mm以下白色石粒 P14 (VIII層) P13 含む
1cm大の①のブロック少量含む
5cm以下のVIII層ブロック含む
- ⑤ 黒褐色土 (10YR3/1) 硬質・粘質
③より少し濃い ①より明るい
③より黄色パミス・白色石粒少ない
- ⑥ ⑤に類似
- ⑦ 黒褐色土 (10YR2/2) やや軟質・やや粘質
⑦より少ない
- ⑧ 暗褐色土 (10YR3/4) やや硬質・やや粘質
5mm以下の黄色火山灰 ごく少量含む
1mm以下の白色石粒 ごく少量含む

0 (1:40) 1m

第55図 竪穴建物跡21号・22号

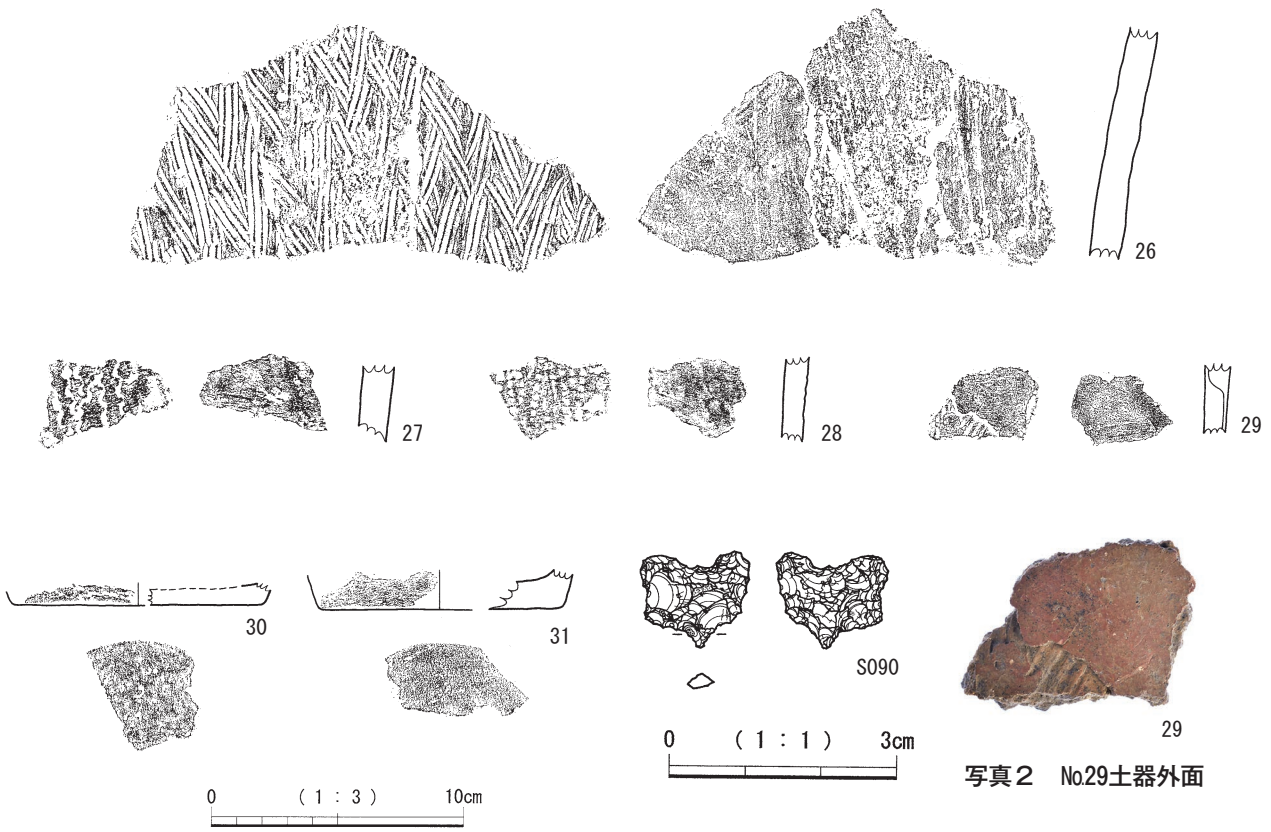
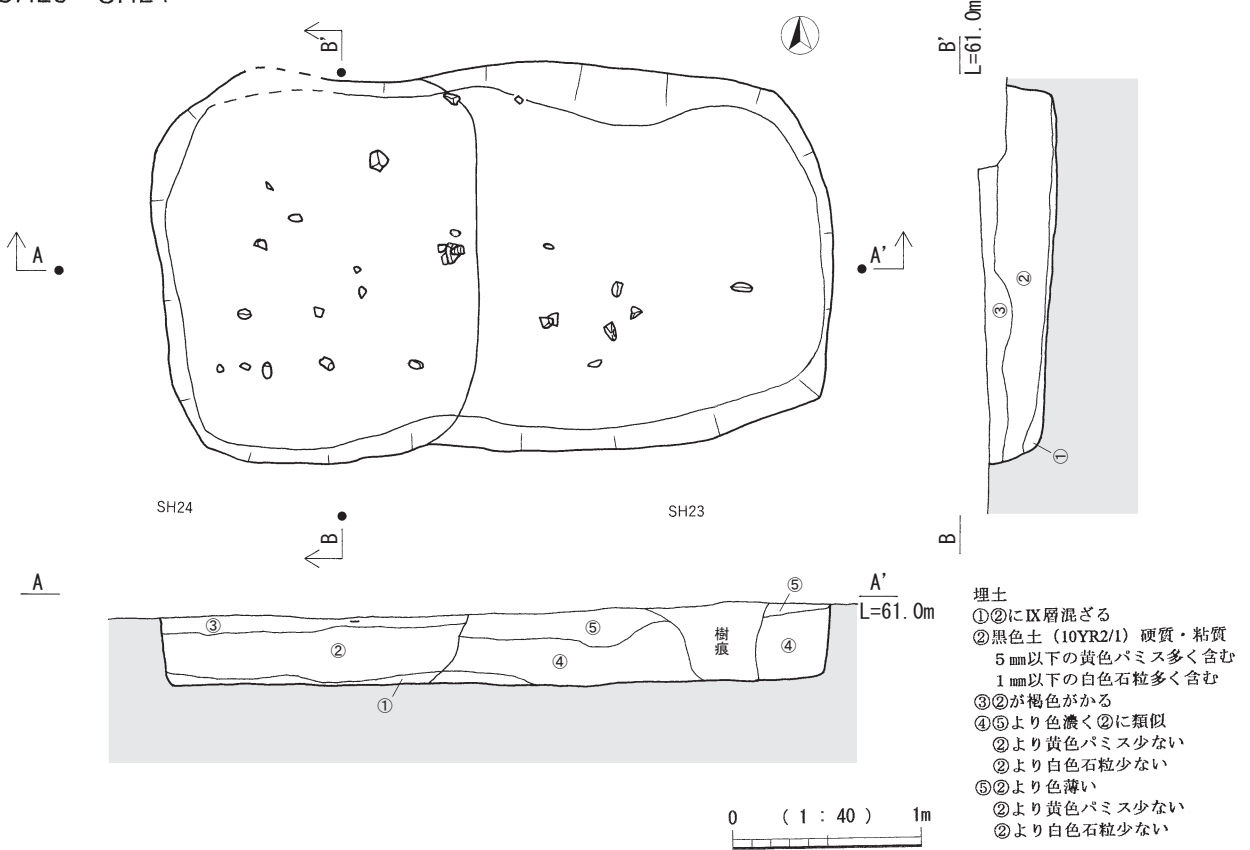


第56図 竪穴建物跡21号・22号出土遺物

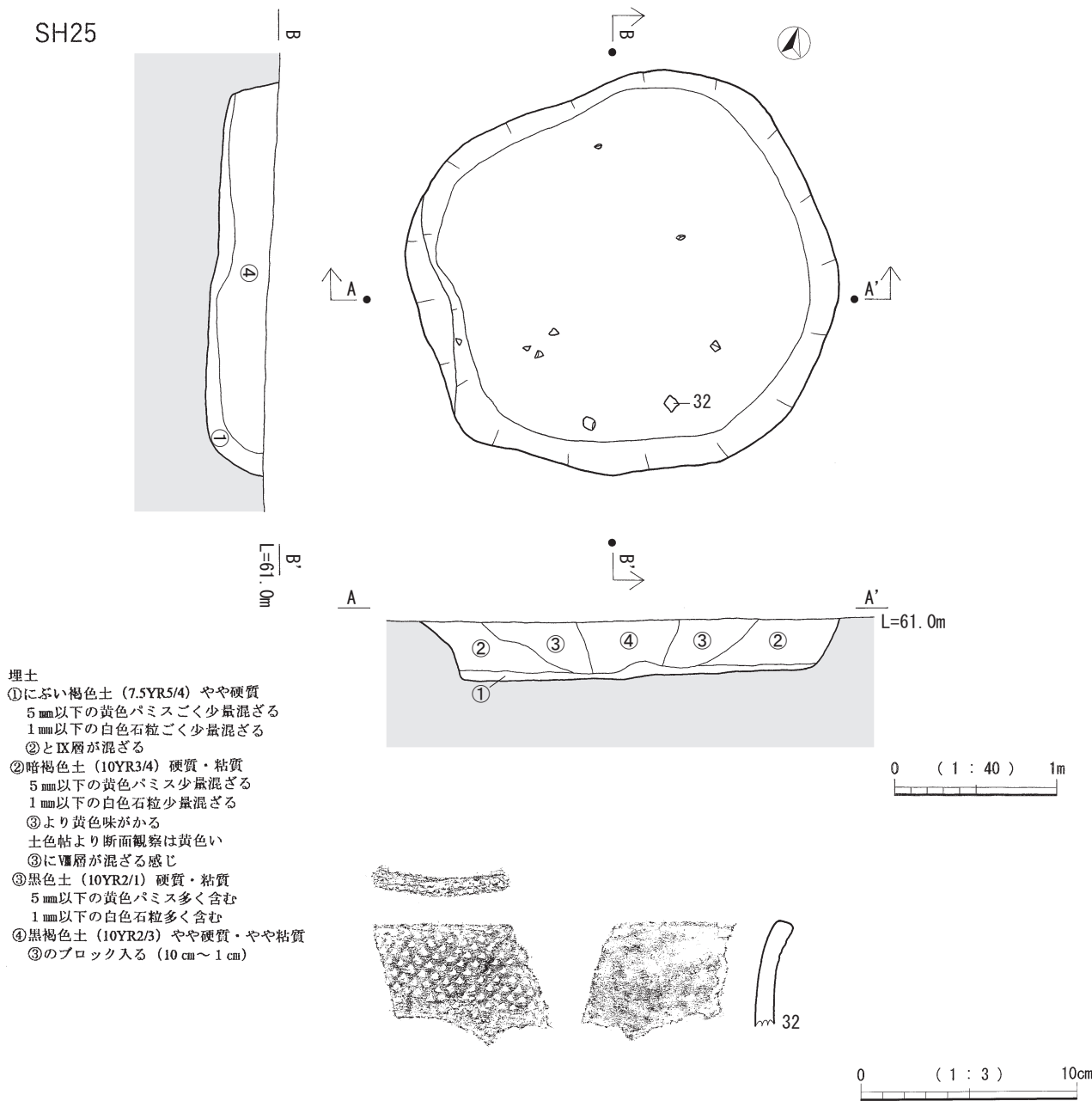
はやや厚い。VI b類に分類される。29は、土器制作中に施文を施してからひび割等のトラブルがあり、化粧土を上から施し、補強したような様相を呈する。丁寧にナデ調整された化粧土の下から、VII類に似た斜位の条痕が確認される。30・31は、型式不明の底部である。丁寧にナデで調整されている。

石器は、1点出土した。S090は、黒曜石C類の石鏃の欠損品を再加工したものである。先端の折断部分に両側から調整剥離を施し、尖端部を作り石鏃に加工しようとした可能性がある。

SH23・SH24



第57図 竪穴建物跡23号・24号・出土遺物



- 埋土
- ①にぶい褐色土 (7.5YR5/4) やや硬質
5mm以下の黄色バミスごく少量混ざる
1mm以下の白色石粒ごく少量混ざる
②とIX層が混ざる
 - ②暗褐色土 (10YR3/4) 硬質・粘質
5mm以下の黄色バミス少量混ざる
1mm以下の白色石粒少量混ざる
 - ③より黄色味がかる
土色粘より断面観察は黄色い
③にVIII層が混ざる感じ
 - ③黒色土 (10YR2/1) 硬質・粘質
5mm以下の黄色バミス多く含む
1mm以下の白色石粒多く含む
 - ④黒褐色土 (10YR2/3) やや硬質・やや粘質
③のブロック入る (10cm～1cm)

第58図 竪穴建物跡25号・出土遺物

竪穴建物跡25号 (第58図)

検出状況

SH25は、E・F-9区において検出された。検出面は、VIII層上面であった。

形状と規模

平面プランは、楕円形で、長軸は2.60m、短軸が2.40mを測る。長短比は0.92、深さ34cm、遺構の推定面積は4.90㎡であった。

埋土

埋土の主体は、黒褐色土で黄色バミスや白色石粒の混

入状況、色調等でさらに分層した。

出土遺物

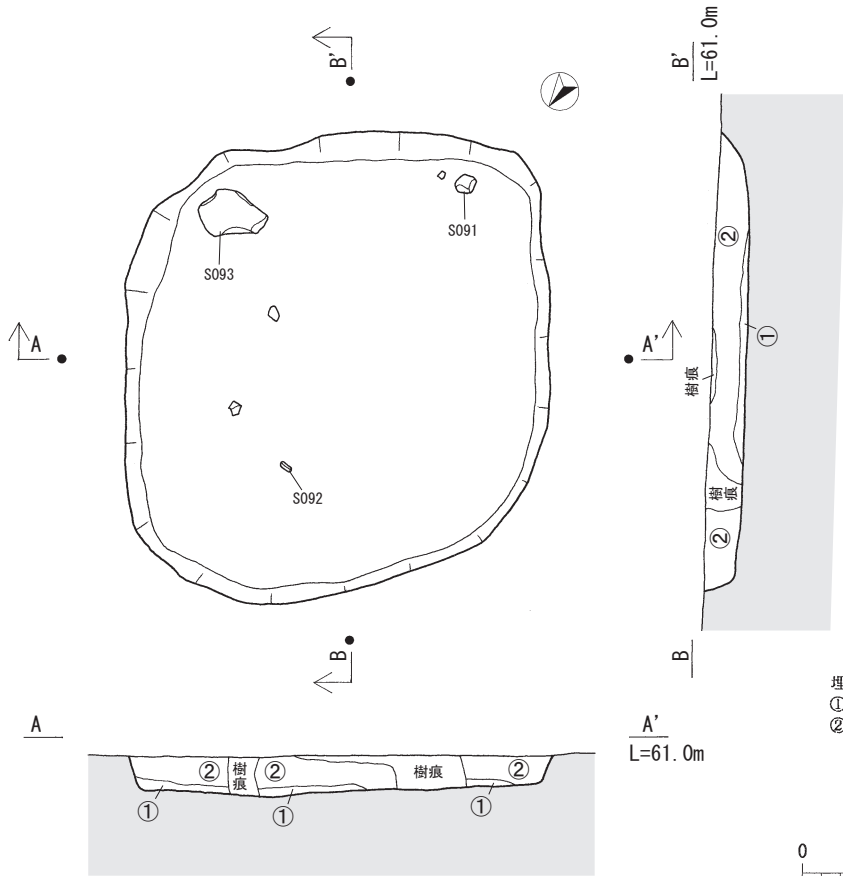
床面から土器1点が出土した。32は口縁部で、口縁部はやや外反し、丸みを帯びた口唇部には貝殻刺突文が施される。口縁部には斜位の貝殻刺突文が施される。V類に分類される。

竪穴建物跡26号 (第59図)

検出状況

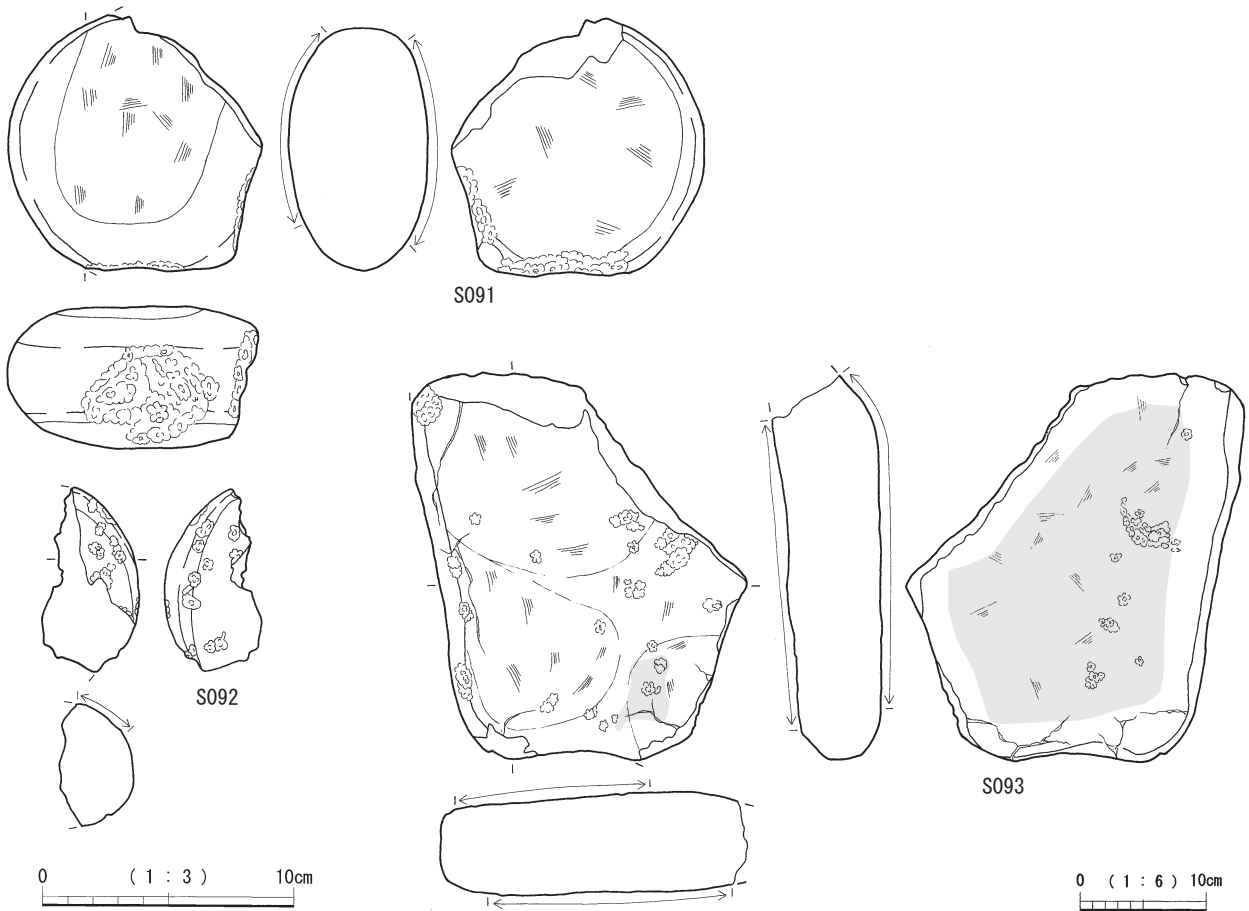
SH26は、F-8・9区において検出された。検出面は、

SH26



埋土
 ①②にⅧ層ブロック混ざる
 ②黒色土 (10YR2/1) 硬質・粘質
 5 mm以下の黄色バミス多く含む
 1 mm以下の白色石粒多く含む

0 (1 : 40) 1m



第59図 竪穴建物跡26号・出土遺物

Ⅷ層であった。

形状と規模

平面プランは、隅丸方形で、長軸は2.44m、短軸が2.24mを測る。長短比は0.92、深さ20cm、遺構の推定面積は5.47㎡であった。

埋土

埋土の主体は、樹痕が入り乱れてはいるが、黄色パミス、白色石粒混入の黒色土である。

出土遺物

埋土中から4点の遺物が出土し、うち石器3点を図化した。

S091は安山岩製の円形の磨敲石であり、下面の敲打は深く、正面・背面はよく磨られている。S092は、凝灰岩製の被熱破砕した磨敲石片である。S093は安山岩製の石皿片であり、正面・背面共に使用されており正面の方がその頻度が高いと思われる。裏面は変色しており、被熱の痕跡が残る。

竪穴建物跡27号・28号（第60・61図）

検出状況

SH27・28は、B・C-11区において検出された。検出面は、Ⅷ層であった。Ⅷ層上面精査中に発見された。

形状と規模

全体の平面プランからは一つの竪穴建物跡に見えるが、東西方向の断面観察から、④⑧の埋土を㊸・㊹が切っている状況が分かる。また、床面も中央付近で段差があり、竪穴建物跡を拡張したのではなく、2基の竪穴建物跡が重複していると判断した。

東側のSH27は、隅丸長方形で、長軸は、 $2.20m + a$ 、短軸が1.94mを測る。深さは48cmである。

西側のSH28は、隅丸方形で、長軸は2.25m、短軸が1.90mを測る。長短比は0.84、深さ50cm、遺構の推定面積は4.28㎡であった。SH28は床面直上に炭化物細粒が散在していた。2基の竪穴建物跡では、柱穴・炉等は発見できなかった。

埋土

SH28は、埋土は中央部に土坑と樹痕が入り込んでいるため、堆積状況に乱れがある。南北方向の断面で見ると限りでは4枚の埋土が確認できる。

SH27は東西方向の断面からは4枚の埋土がレンズ状堆積している様子が窺える。

出土遺物

重複した2基の竪穴建物跡から土器1点と石器4点が出土した。33は、外面に貝殻刺突文を「V」字状に施し、内面は丁寧なナデ調整がなされている。Ⅵb類に分類される。

SH28では、サブトレンチ北側床面直上でチップ等が集中して発見された。S094はチャート製の石鏃未製品

である。側縁部には表裏から調整剥離を施しているものの、製作途中で大きく剥がれ落ちたことにより製品化を断念したと思われる。S095は、ホルンフェルス製の打製石斧（Ⅲ類）の基部である。S096・S097は、安山岩製の磨敲石である。S096は円形で側面を一周弱く敲打している。正面・裏面は強く磨られており、薄く煤が付着する。S097は楕円形でよく使用されている。薄く赤化しており、熱を受けた可能性がある。

竪穴建物跡29号（第62図）

検出状況

SH29は、B-13区において検出された。Ⅷ層上面精査中に発見され、検出面は、Ⅷ層上面であった。

形状と規模

平面プランは、隅丸長方形で、長軸は2.64m、短軸が1.86mを測る。長短比は0.70、深さ41cm、遺構の推定面積は4.91㎡であった。中央部に深さ5cm程度の浅い掘り込みも確認されたが、焼土や炭化物は検出できなかった。

SH29は、他の早期遺構よりも標高の低い位置に所在し、小牧遺跡では大型で深さの深いタイプとなる。南西に下る緩傾斜面に形成されていた。床面は、Ⅸ層であった。

埋土

埋土は樹痕で乱れているが、火山灰質で硬質の黒褐色土を基本とし、黄色パミス粒をわずかに含む。

出土遺物

遺構検出面上部から2点の石器が出土した。15cm程の磨敲石2点で、竪穴建物跡廃棄時に埋納された可能性もある。S098・S099はともに楕円形の安山岩製の磨敲石であり、ともに側面全周を弱く叩いている。S098の正面・裏面は強く磨られており、稜を形成している。裏面には薄く煤が付着し、左側面にわずかに赤色顔料が付着する。S099は楕円状ではあるが、意図的に四角く角をつけている可能性がある。

竪穴建物跡30号（第63図）

検出状況

SH30は、E-13区において検出された。検出面は、Ⅶ層掘り下げ後、Ⅷ層上面精査中に発見された。

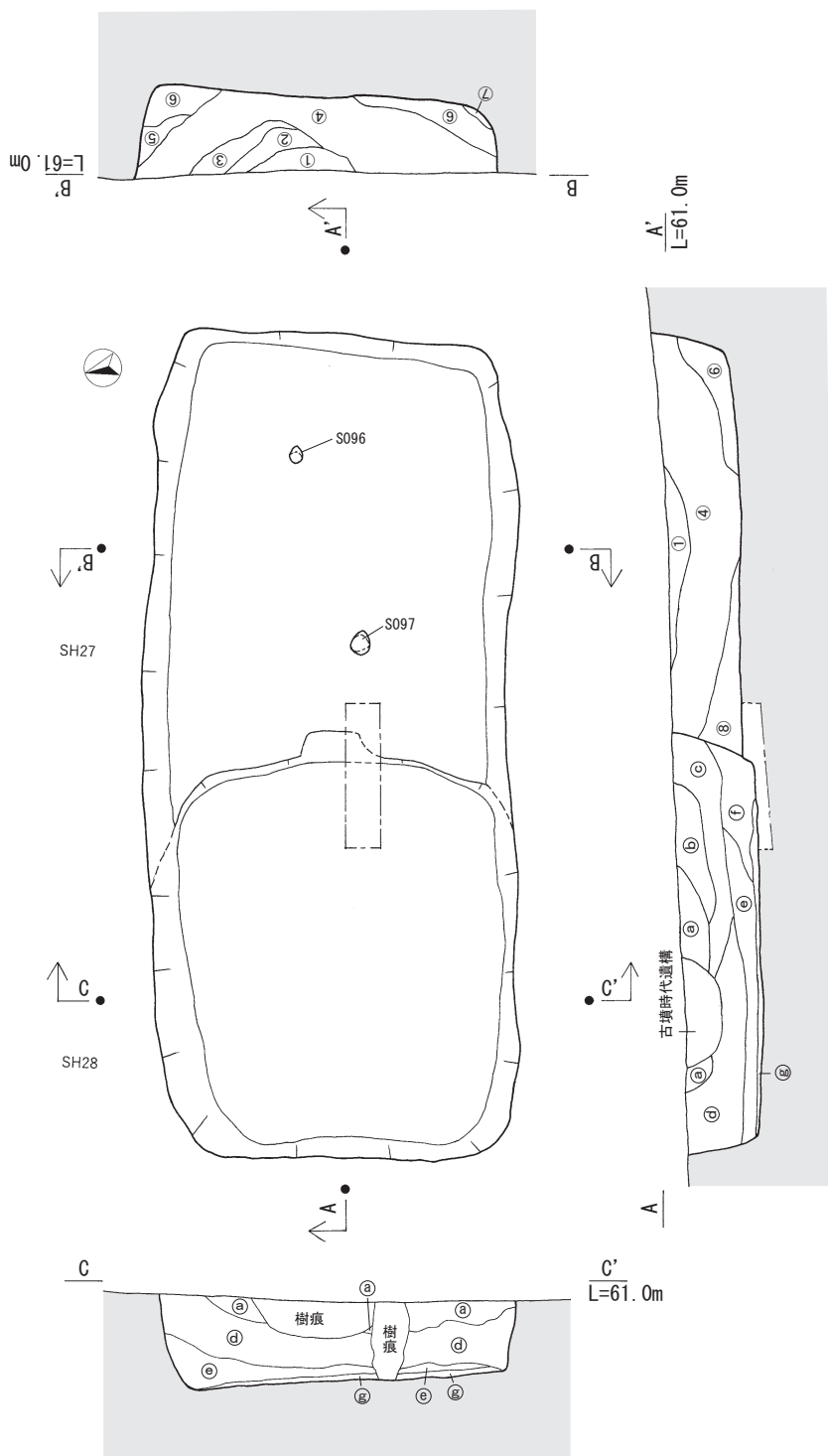
形状と規模

平面プランは、隅丸長方形で、長軸は3.75m、短軸が2.05mを測る。長短比は0.55、深さ45cm、遺構の推定面積は7.69㎡であった。隅丸長方形の竪穴建物跡では、規模の大きい深さのある遺構である。

遺構内には、炉、柱穴、炭化物等確認できなかった。床面は、Ⅸ層上面である。

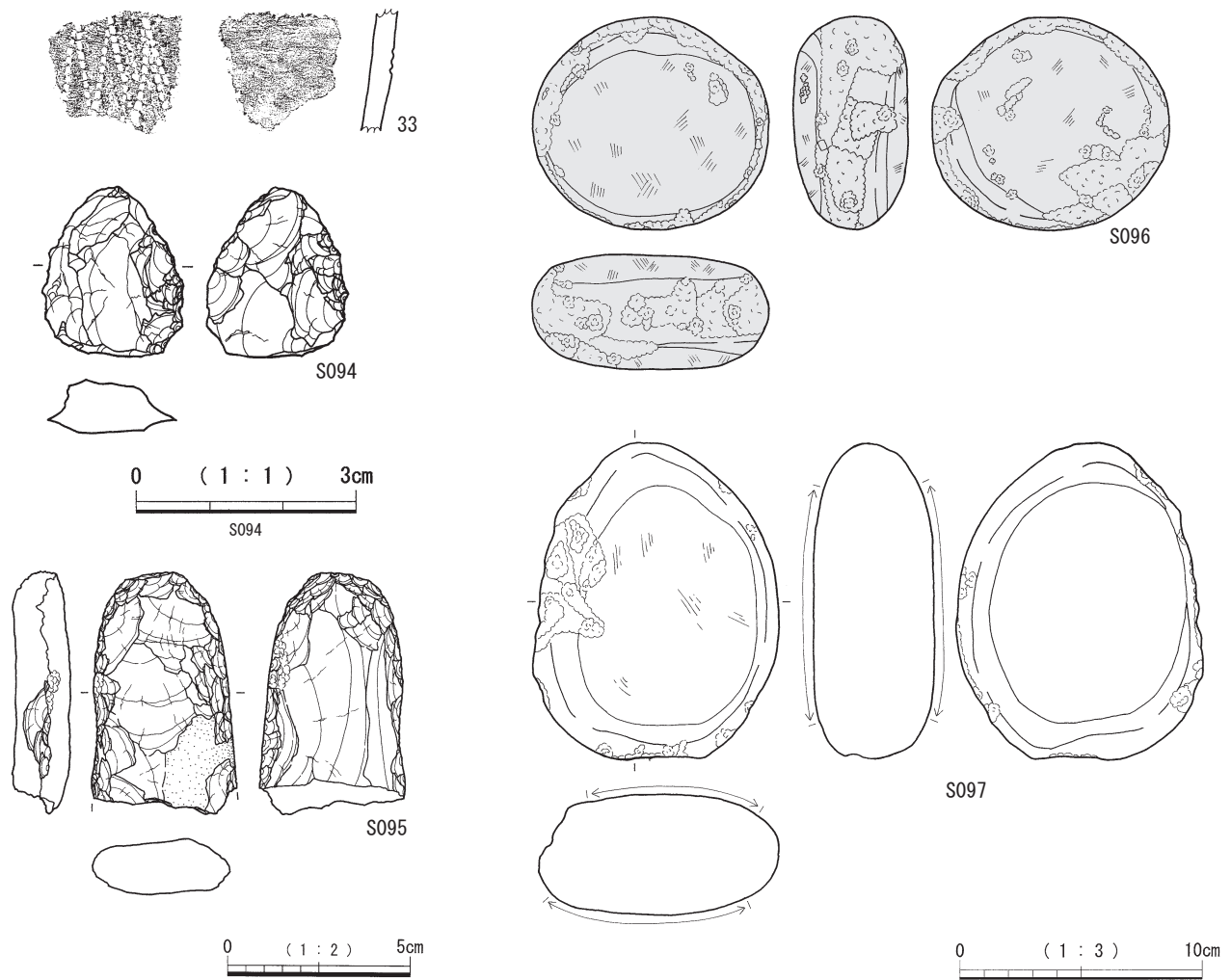
埋土

埋土の主体は、Ⅶa層の質感に類似した黒褐色土を基本とする。



- 埋土
- ①暗褐色土 (10YR3/3)
やや粘性あり・火山灰質
白色パミス微粒含む
黄色パミス微粒ごくわずかに含む
炭化物微粒ごくわずかに含む
VI層に類似する
 - ②暗褐色土 (10YR3/3)
やや粘性あり・火山灰質
VII a層小土塊がパッチ状に入る
 - ③暗褐色土 (10YR3/3)
やや粘性あり・火山灰質
白色パミス微粒含む
黄色パミス細粒わずかに含む
炭化物微粒ごくわずかに含む
 - ④黒褐色土 (10YR2/2)
やや粘性あり・火山灰質
VII a層土塊含む
VII層硬化層の
小土塊ごくわずかに含む
 - ⑤黒褐色土 (10YR2/2)
やや粘性あり・火山灰質
白色パミス微粒含む
黄色パミス細粒わずかに含む
 - ⑥黒褐色土 (10YR2/2)
やや硬くしまる・火山灰質
VII a層土塊に④の土塊が混ざる
 - ⑦にぶい黄褐色土 (10YR4/3)
強粘質
パミス等含まず
 - ⑧④に似る
④よりVII a層土塊の量が少ない
 - ⑧黒褐色土 (10YR2/2)
VII a層に似る
VII a層よりややほぐれている
黄色パミス微粒含む
白色パミス微粒含む
黄色パミス粒わずかに含む
白色パミス粒わずかに含む
 - ⑨黒褐色土 (10YR2/2)
特徴は①に似る
①よりもパミスが濃集して
パッチ状になっている
 - ⑩暗褐色土 (10YR2/3)
粒子粗・火山灰質・しまる
白色パミス微粒多く含む
黄色パミス微粒含む
黄色パミス粒含む
炭化物微粒ごくわずかに含む
VII層硬化層の小土塊
ごくわずかに含む
 - ⑪暗褐色土 (10YR2/2)
VII a層よりややほぐれる
パミス等の入りは⑩に類似
パミス等全体に量が少ない
黄色パミス粒をわずかに含む
 - ⑫黒褐色土 (10YR2/2)
粒子粗・火山灰質・やや軟質
白色パミス微粒多く含む
黄色パミス粒わずかに含む
 - ⑬褐色土 (10YR4/6)
粒子粗・火山灰質・やや軟質
白色パミス微粒多く含む
黄色パミス細粒ごくわずかに含む
炭化物微粒粒わずかに含む
 - ⑭にぶい黄褐色土 (10YR5/4)
粒子粗・火山灰質・やや軟質
白色パミス微粒多く含む
VII a層小土塊パッチ状に入るが
レンズ状にややつぶれている

第60図 竪穴建物跡27号・28号



第61図 竪穴建物跡27号・28号出土遺物

出土遺物

埋土中から土器2点が出土した。34は口縁部でやや肥厚して内湾し、口縁部外面に斜位の貝殻刺突文を施す。VIa類土器と思われる。35は型式不明の底部で、丁寧にナデ調整されている。

石器は3点出土した。S100は砂岩製の磨敲石である。S100は、破片ではあるが、現状の形に破碎した後も、右側面上部の割れ口を敲打に使用している。S101・S102は被熱破碎した磨石片であり、ともに薄く煤が付着する。SH30から出土した石器にはすべて被熱の痕跡がみられる。

竪穴建物跡31号（第64図）

検出状況

SH31は、F-13区において検出された。平成27年度下層確認トレンチ調査にて発見された。検出面は、Ⅷ層であった。

形状と規模

平面プランは、隅丸長方形で、長軸は4.11m、短軸が

2.23mを測る。長短比は0.54、深さ35cm、遺構の推定面積は9.17㎡であった。隅丸長方形の竪穴建物跡では、規模の大きい遺構である。

遺構内にピット、炉跡等の関連遺構は発見できなかった。

埋土

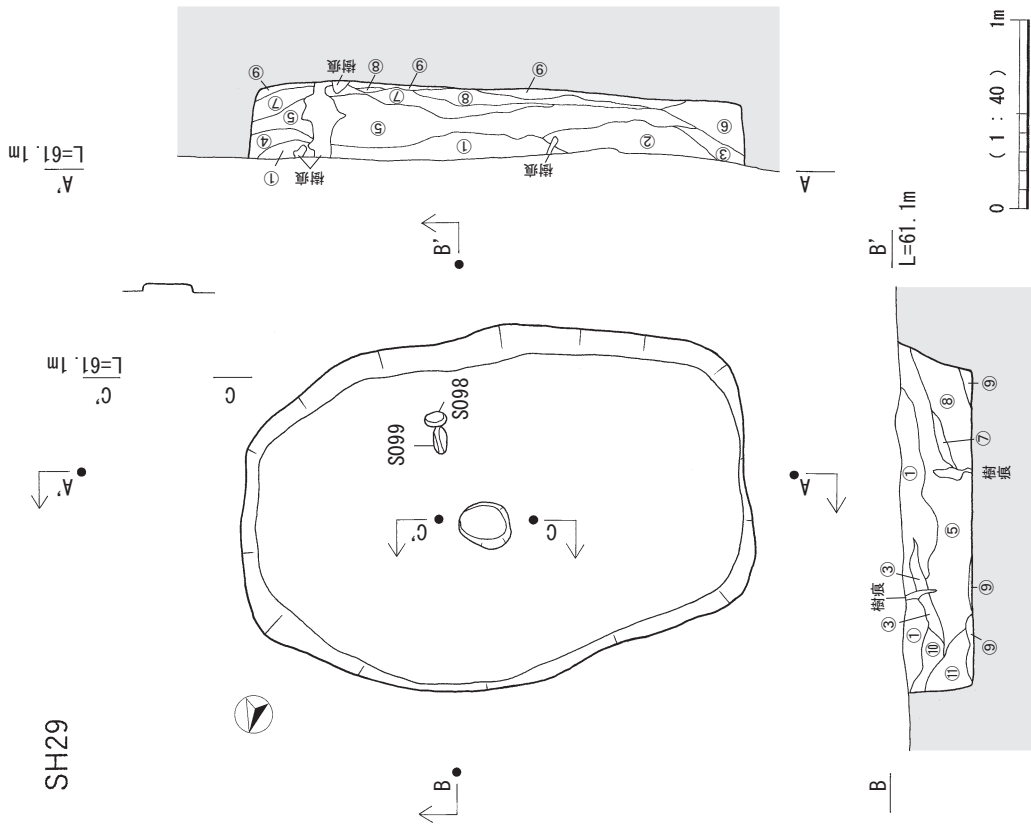
埋土の主体は、粒子が粗く火山灰質のしまった黒褐色土で、白色パミスや黄色パミスの微粒を多く含む。炭化物細粒もわずかに含む。

出土遺物

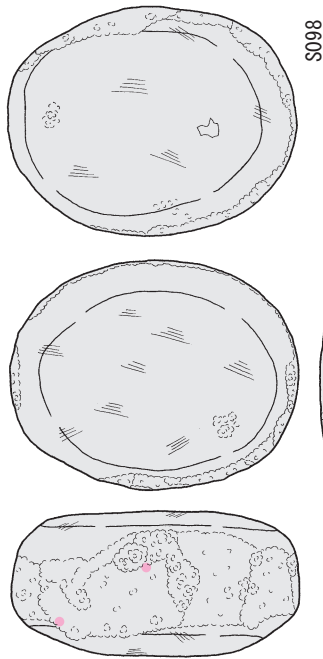
埋土中から、土器1点が出土した。36は、斜位に貝殻刺突文が施されており、「Z」字状に貝殻刺突文を施すVIa類の土器と思われる。

石器は5点出土した。S103は凝灰岩製の小型の円形の磨敲石である。S104・S105・S106は安山岩製の磨敲石であり、S106は多孔質な石材である。S104は四角の形状の自然礫を使用したもので、使用頻度は少ない。S105・S106は、特に敲石としてよく使用されている。S107は、砂岩製の石錘である。板状の形状で、角は丸

SH29

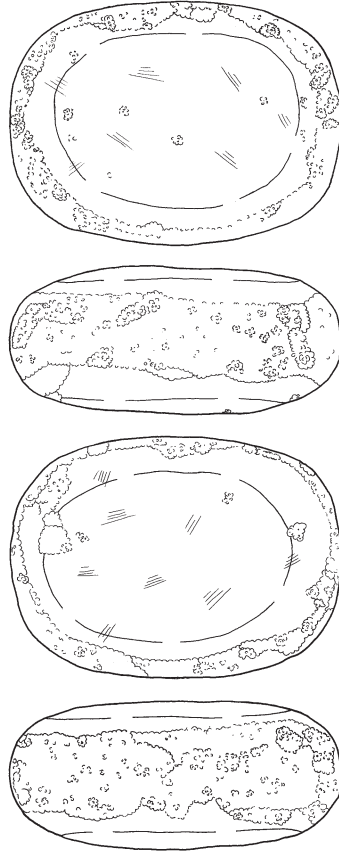
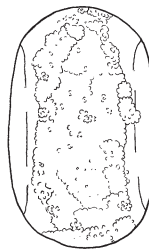
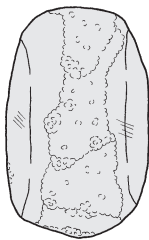


- 埋土
- ① 黒褐色土 (7.5YR3/2) 火山灰質・硬質
 - ② 褐色土 (10YR4/4) 火山灰質・やや硬質
 - ③ 黄色バミミス粒含む
 - ④ 暗褐色土 (7.5YR3/4) ①に似る
 - ⑤ 黒褐色土 (10YR2/3) ①に似る
 - ⑥ 黄色・白色バミミス微粒多く含む
 - ⑦ 暗褐色土 (7.5YR3/4)
 - ⑧ 黒褐色土 (10YR2/2) 硬質
 - ⑨ 火山灰質と砂質の互層構造
 - ⑩ 白色バミミス微粒多く含む
 - ⑪ 黄色バミミス・白色バミミスの微粒含む
 - ⑫ 黒褐色土 (10YR2/3) 火山灰質・硬質
 - ⑬ 白色バミミス微粒多く含む
 - ⑭ 黄色バミミス細粒ごくわずかに含む
 - ⑮ 黒褐色土 (10YR2/3) ⑩に似る
 - ⑯ ⑰より黄色バミミス粒多く含む



S098

赤色顔料・タール付着

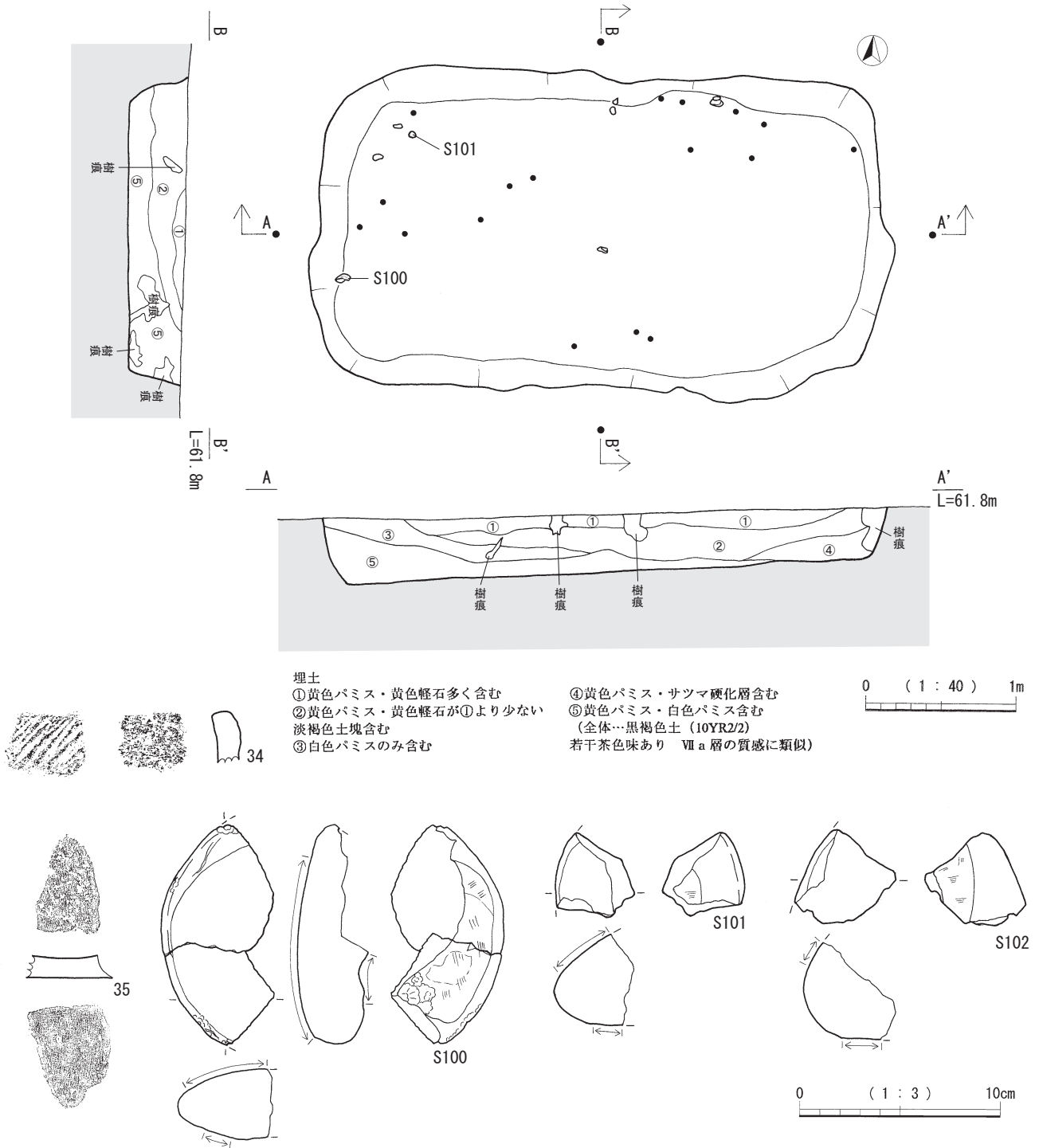


S099

0 (1:3) 10cm

第62図 竪穴建物跡29号・出土遺物

SH30



第63図 竪穴建物跡30号・出土遺物

みを帯びる。短径部を打ち搔いて制作している。表面が特に滑らかであることから、正面の上半分は磨られている可能性があるものの擦痕は不明瞭である。左側面には敲打のあとも確認できる。S106にのみ被熱の痕跡が確認できる。

竪穴建物跡32号 (第65図)

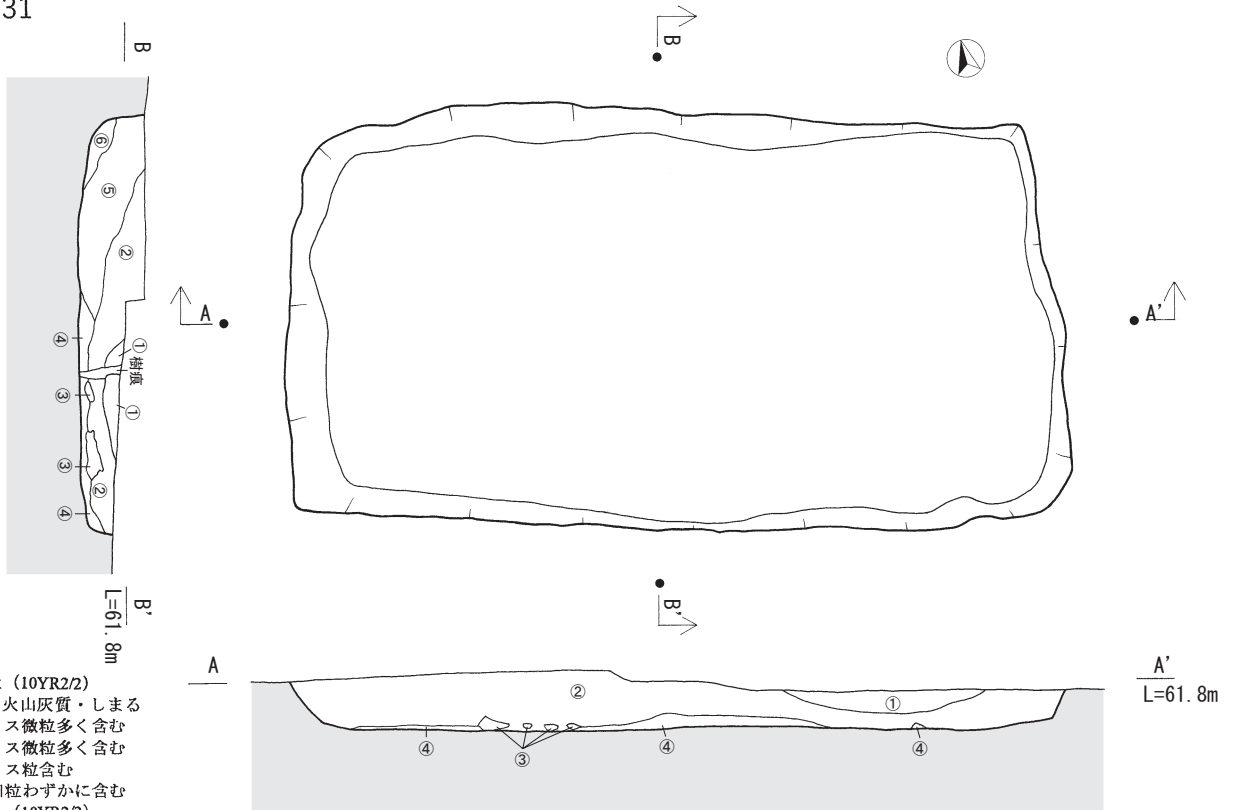
検出状況

SH32は、E-14区において検出された。検出面は、VII層下面で発見され、VIIa層が落ち込んでいた。

形状と規模

平面プランは、隅丸方形で、長軸は2.02m、短軸が1.84

SH31



埋土

① 黒褐色土 (10YR2/2)

粒子粗・火山灰質・しまる
黄色バミス微粒多く含む
白色バミス微粒多く含む
黄色バミス粒含む
炭化物細粒わずかに含む

② 黒褐色土 (10YR2/2)

粒子粗・火山灰質・しまる
黄色バミス大粒・並粒わずかに含む
白色バミス微粒濃集してパッチ状に含まれる
炭化物微粒ごくわずかに含む

③ VII a 層を展開したような土塊・硬質

④ 黒褐色土 (10YR2/2) 粒子粗・火山灰質・しまる

白色バミス微粒多く含む
黄色バミス微粒ごくわずかに含む
炭化物微粒ごくわずかに含む

⑤ 暗褐色土 (7.5YR3/3) やや粘性あり
白色バミス微粒含む

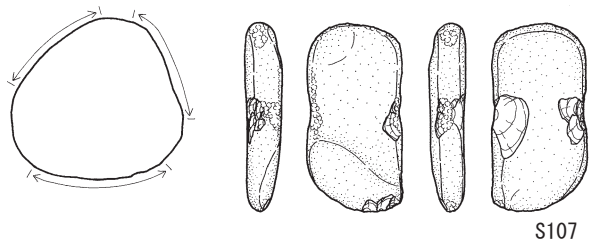
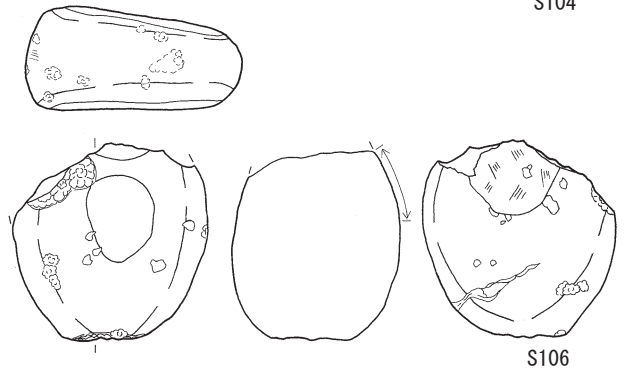
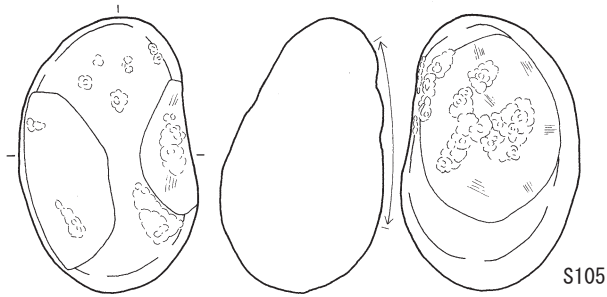
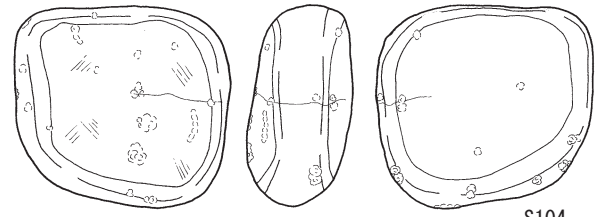
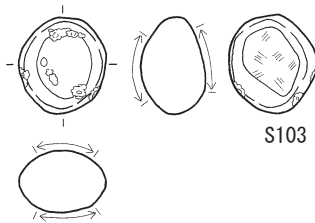
⑤ 黒褐色土 (10YR2/2) 粒子粗・火山灰質・しまる

黄色バミス微粒多く含む
白色バミス微粒とても多く含む
黄色バミス粒含む
炭化物微粒わずかに含む

⑥ 黒褐色土 (10YR2/3)

特徴は⑤と同じ

0 (1:40) 1m



0 (1:3) 10cm

第64図 竪穴建物跡31号・出土遺物

mを測る。長短比は0.91、深さ37cm、遺構の推定面積は3.72㎡であった。

竪穴建物跡内にピット、炉跡等の関連遺構は発見できなかった。床面は、Ⅸ層上面であった。

埋土

埋土の主体は、黒褐色土を基本とし、白色パミスや黄色パミス細粒を多く含む。

出土遺物

埋土中から遺物は出土していない。

竪穴建物跡33号（第65図）

検出状況

SH33は、E-16区において検出された。検出面は、Ⅷ層であった。

形状と規模

平面プランは、隅丸長方形で、長軸は3.22m、短軸が2.05mを測る。長短比は0.64、深さ40cm、遺構の推定面積は6.60㎡であった。

遺構内にピット、炉跡等の関連遺構は発見できなかった。床は、Ⅸ層上面であった。

埋土

埋土の主体は、粒子が粗くしまった黒褐色土を基本とし、黄色軽石をわずかに含む。

出土遺物

埋土中から遺物は出土していない。

竪穴建物跡34号（第66図）

検出状況

SH34は、E・F-16区において検出された。Ⅶ層掘り下げ後、Ⅷ層上面精査中に発見され、検出面は、Ⅷ層であった。

形状と規模

平面プランは、隅丸長方形で、長軸は2.87m、短軸1.80mを測る。長短比は0.63、深さ46cm、遺構の推定面積は5.17㎡であった。

周辺にはピット状のしみはあったが、形状が不安定で、竪穴建物跡に伴うと思われるものを特定できなかった。遺構内にピット、炉跡等は発見できなかった。

埋土

埋土の主体は、黒褐色土でⅦa層の特徴をもつ。黄色パミス、白色パミスの細粒を部分的に多く含む。

出土遺物

埋土中から土器胴部片が出土したが、小片のため掲載していない。

竪穴建物跡35号（第66図）

検出状況

SH35は、B・C-17区において検出された。検出面は、

Ⅷ層上面であった。

形状と規模

平面プランは、隅丸長方形で、長軸は2.28m、短軸が1.77mを測る。長短比は0.78、深さ32cm、遺構の推定面積は4.04㎡であった。

竪穴建物跡内にピット、炉跡等の関連遺構は発見できなかった。床面は、Ⅸ層上面であった。

埋土

埋土の主体は、全体的にはⅦa層の特徴に類似した黒褐色土を基本とし、黄色軽石や黄色パミス、白色パミスをわずかに含む。

出土遺物

埋土中から出土した遺物は、小片につき、時期特定にいたらなかった。

竪穴建物跡36号（第67図）

検出状況

SH36は、C-17区において検出された。検出面は、Ⅷ層上面であった。

形状と規模

平面プランは、隅丸長方形で長軸は3.39m、短軸が1.75mを測る。長短比は0.52、深さ72cm、遺構の推定面積は5.93㎡であった。

壁は垂直に近く、底はⅨ層下部に達する。壁はやや抉れており、掘り具の跡なのか縦筋も少し残っていた。早期竪穴建物跡の中では検出面からの深さが一番深い。平均深度の2倍程度もある。

埋土

埋土は、自然堆積状を呈する。硬質の黒褐色土を基本とし、黄色パミスや白色石粒を含む。

出土遺物

埋土中から土器1点が出土した。37は、レモン形を呈する土器である。横位に貝殻条痕が施され、一部押引文も確認される。屈曲が強く角筒土器の様相を呈するが、包含層から同一個体と思われるレモン形土器が出土していることからⅣ類に分類した。掲載資料は包含層の土器と接合した資料である。

竪穴建物跡37号（第68図）

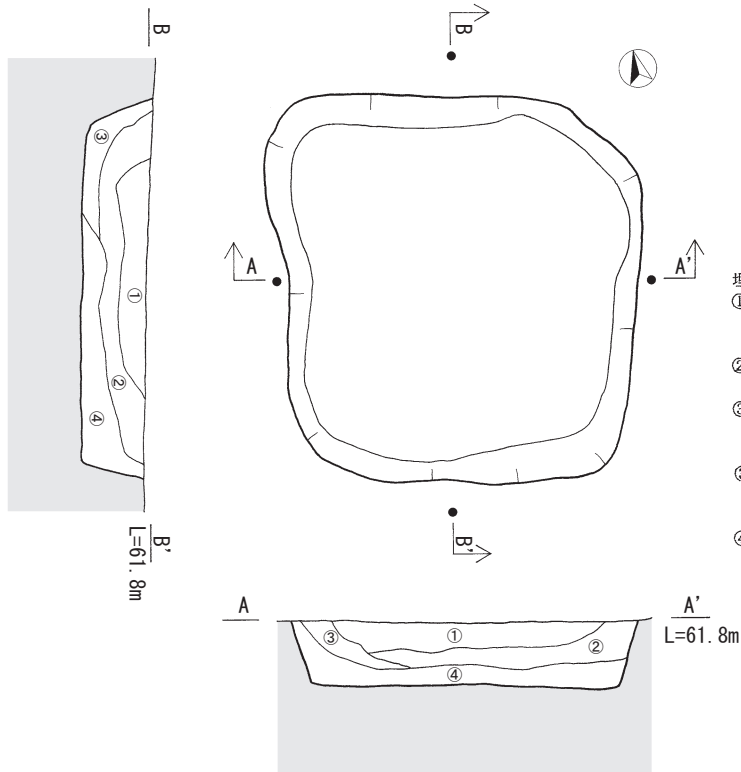
検出状況

SH37は、E-17区において検出された。検出面は、Ⅷ層上面であった。床面は、Ⅸ層上面であった。

形状と規模

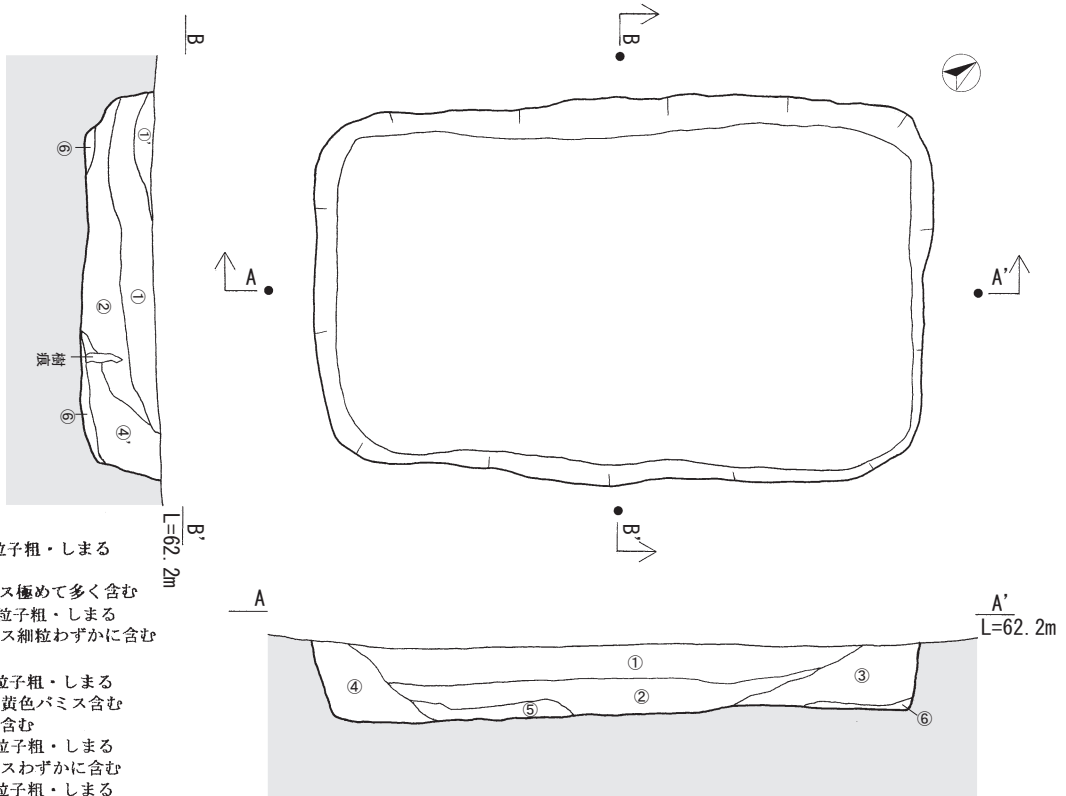
平面プランは、隅丸長方形で、長軸は2.11m、短軸が2.10mを測る。長短比は0.99、深さ30cm、遺構の推定面積は4.43㎡であった。南側は段掘りされ、何らかの構造があった可能性もある。遺構内には、ピット・炉跡等は検出されなかった。

SH32

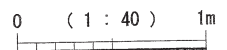


- 埋土
- ① 黒褐色土 (10YR2/2)
黄色パミス・白色パミス細粒多く含む
黄色パミス粒含む
 - ② 黒褐色土 (10YR2/3)
①より白色パミス細粒少ない
 - ③ 黒褐色土 (10YR2/3)
①②より黄色パミス・白色パミス細粒少ない
サツマ硬化層ブロックわずかに含む
 - ④ 暗褐色土 (10YR3/4) やや粘性あり
黄色パミス粒・黄色パミス細粒含む
サツマ硬化層ブロックわずかに含む
 - ④ サツマ硬化層ブロック含む
一次軽石の土塊わずかに含む

SH33

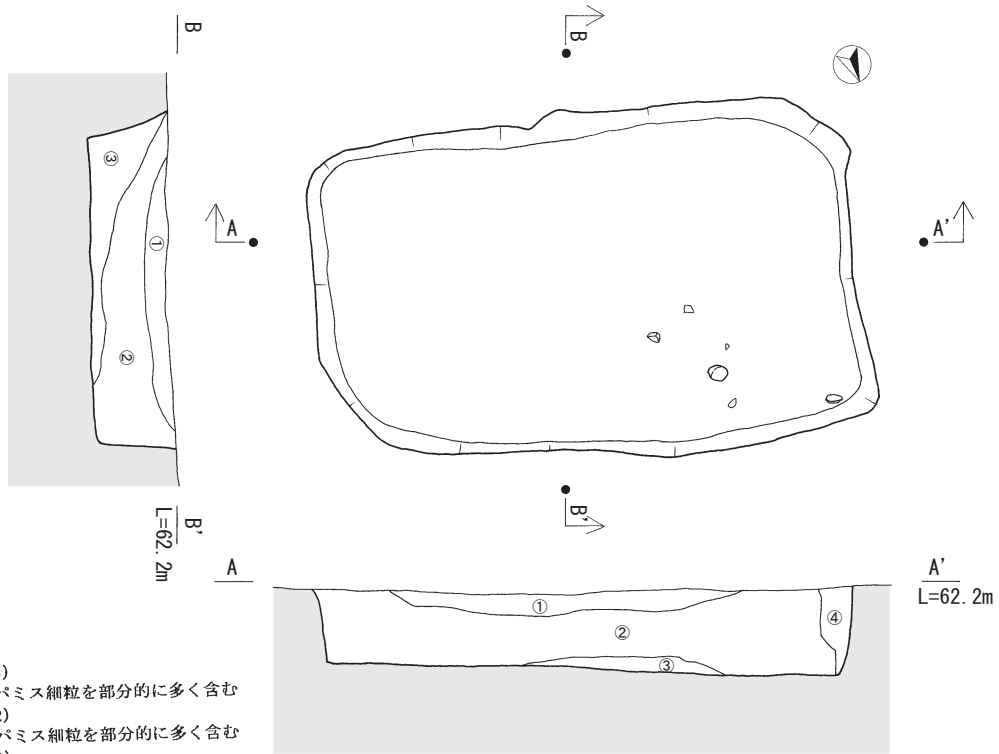


- 埋土
- ① 黒褐色土 (10YR2/2) 粒子粗・しまる
黄色軽石わずかに含む
黄色パミス・白色パミス極めて多く含む
 - ② 黒褐色土 (10YR2/3) 粒子粗・しまる
黄色パミス・白色パミス細粒わずかに含む
黄色軽石含まず
 - ③ 黒褐色土 (10YR2/2) 粒子粗・しまる
白色パミス濃集土塊・黄色パミス含む
黄色軽石ごくわずかに含む
 - ④ 黒褐色土 (10YR2/2) 粒子粗・しまる
黄色パミス・白色パミスわずかに含む
 - ⑤ 黒褐色土 (10YR2/2) 粒子粗・しまる
②に似るが黄色軽石少ない
 - ⑥ 黒褐色土 (10YR3/2) 粒子粗・しまる
黄色パミス・白色パミスわずかに含む
サツマ硬化層の小土塊わずかに含む
 - ⑦ 暗赤褐色土 (5YR3/3) 粘性あり
黄色軽石含む
 - ⑧ 暗赤褐色土 (5YR3/3) 粘質土
VII a 層の小土塊を含む



第65図 竪穴建物跡32号・竪穴建物跡33号

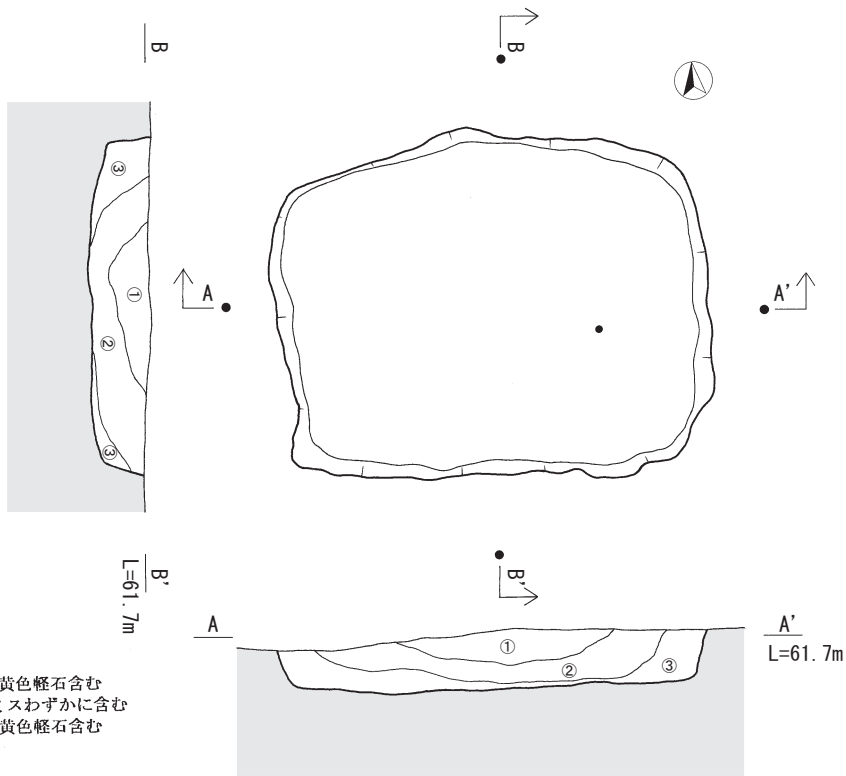
SH34



埋土

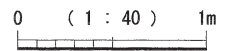
- ① 黒褐色土 (10YR2/3)
黄色パミス・白色パミス細粒を部分的に多く含む
- ② 黒褐色土 (10YR2/2)
黄色パミス・白色パミス細粒を部分的に多く含む
- ③ 黒褐色土 (10YR2/3)
①②よりパミス少ない
サツマ硬化層の小土塊わずかに含む
- ④ サツマ硬化層の流れ込み

SH35



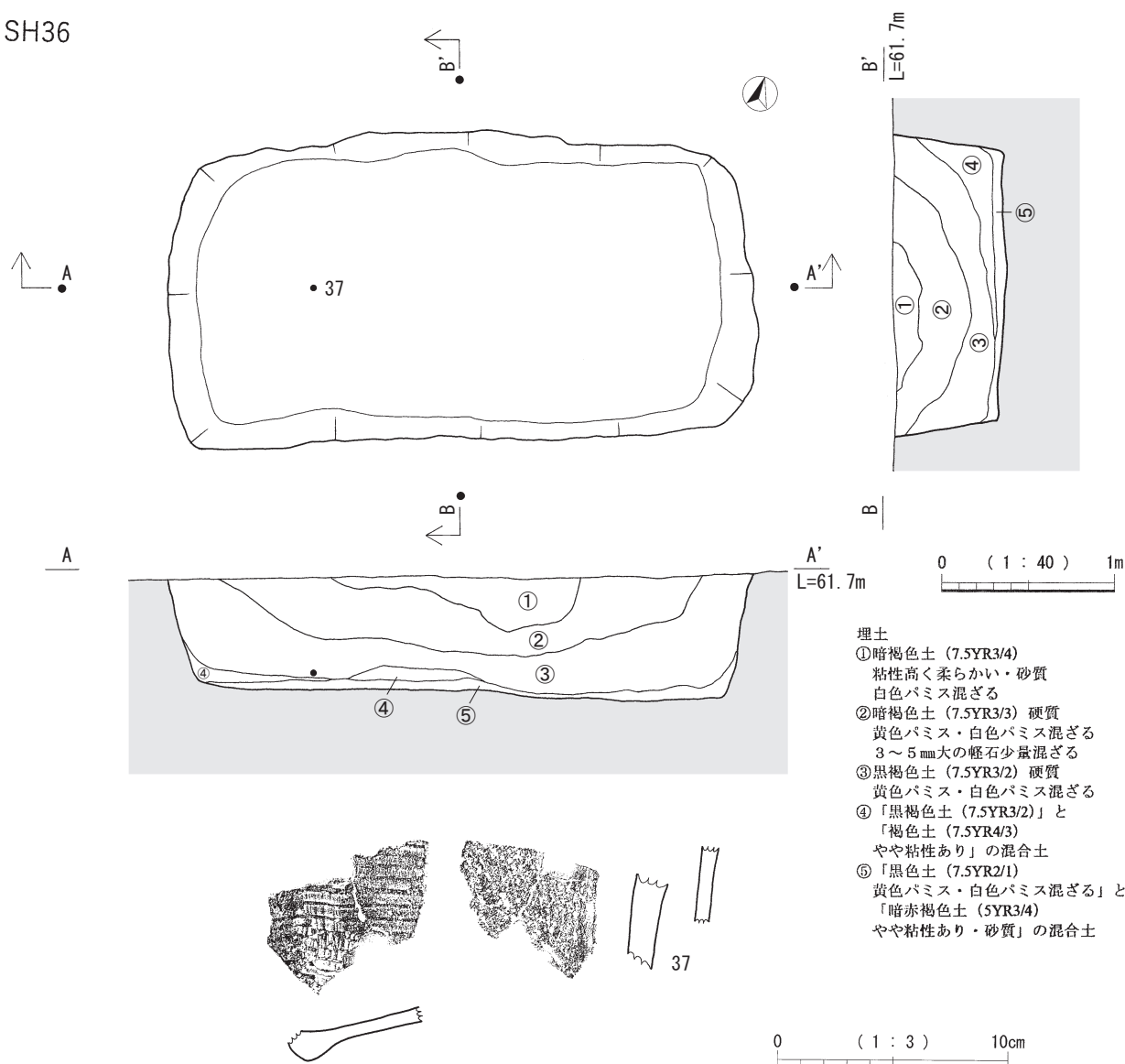
埋土

- ① 黒褐色土 (10YR2/3) 黄色軽石含む
黄色パミス・白色パミスわずかに含む
- ② 黒褐色土 (10YR2/2) 黄色軽石含む
白色パミス多く含む
- ③ 黒褐色土 (10YR2/2)
黄色パミス・白色パミスわずかに含む
黄色軽石なし



第66図 竪穴建物跡34号・竪穴建物跡35号

SH36



第67図 竪穴建物跡36号・出土遺物

埋土

埋土の主体は、硬く砂質の黒褐色土が基本で、黄色パミス、白色パミスを多く含む。ごくわずかに炭化物も散見される。

出土遺物

埋土中から遺物は出土していない。

竪穴建物跡38号 (第69図)

検出状況

SH38は、B-19・20区において検出された。検出面はⅧ層であった。Ⅷ層掘り上げ後、Ⅷ層上面で発見された。

形状と規模

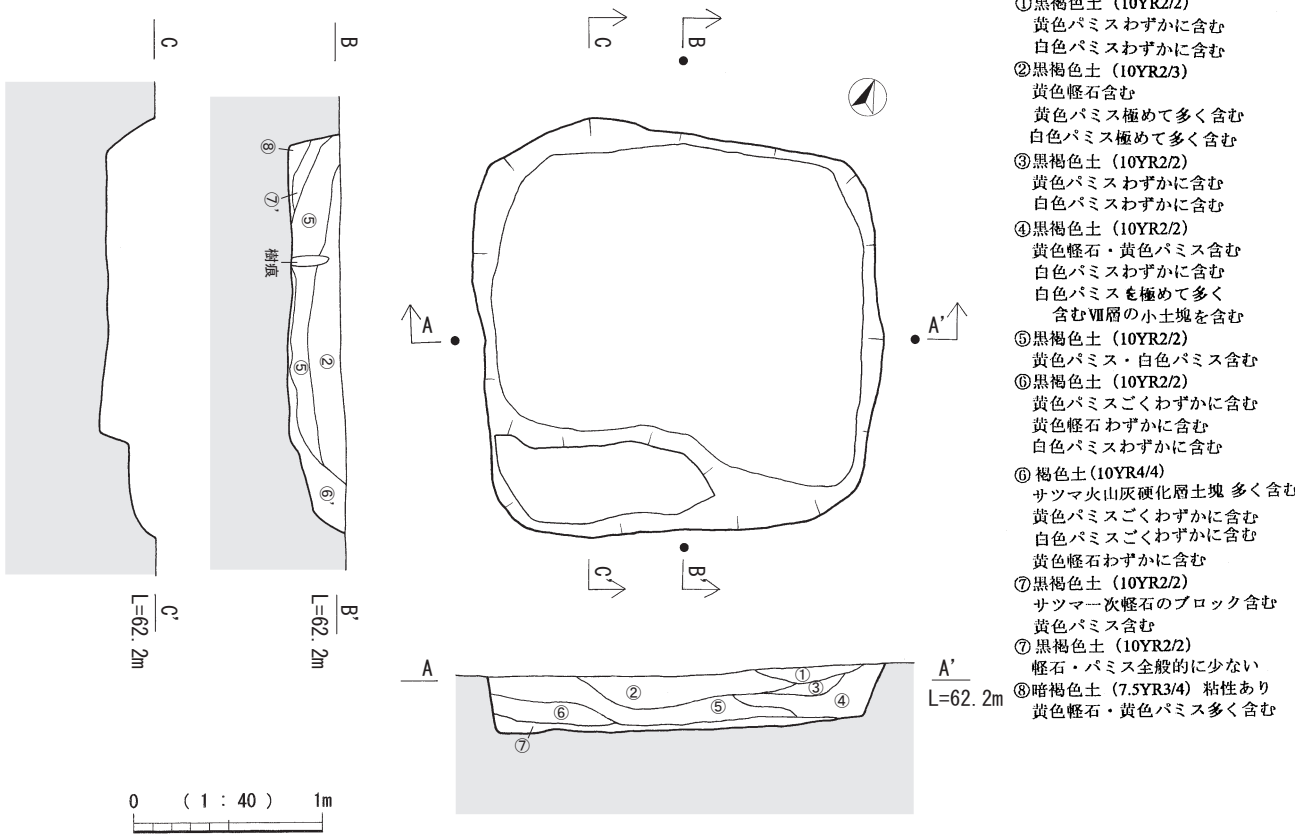
平面プランは、隅丸長方形で、長軸は4.31m、短軸が1.98mを測る。長短比は0.46、深さ50cm、遺構の推定面積は8.53㎡であった。

竪穴建物跡内に、ピット・炉跡等は検出されなかった。周辺にも、竪穴建物跡に伴うと特定できるピットはなかった。

埋土

埋土の主体は、全体的にはⅦa層の特徴に類似した黒褐色土を基本とし、黄色パミスや黄色軽石、白色パミスを多く含む。

SH37



第68図 竪穴建物跡37号

出土遺物

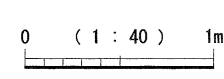
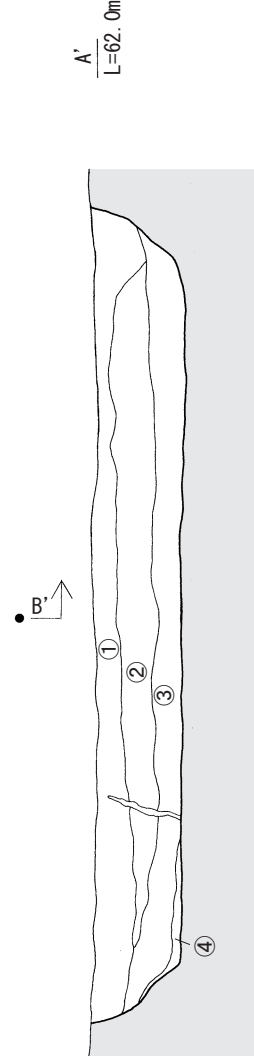
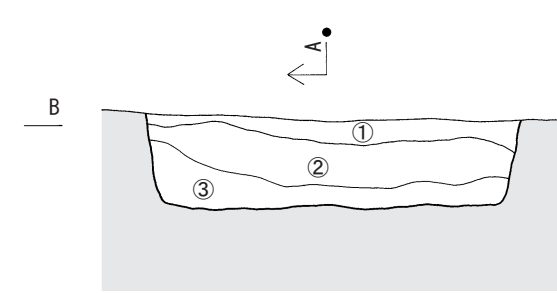
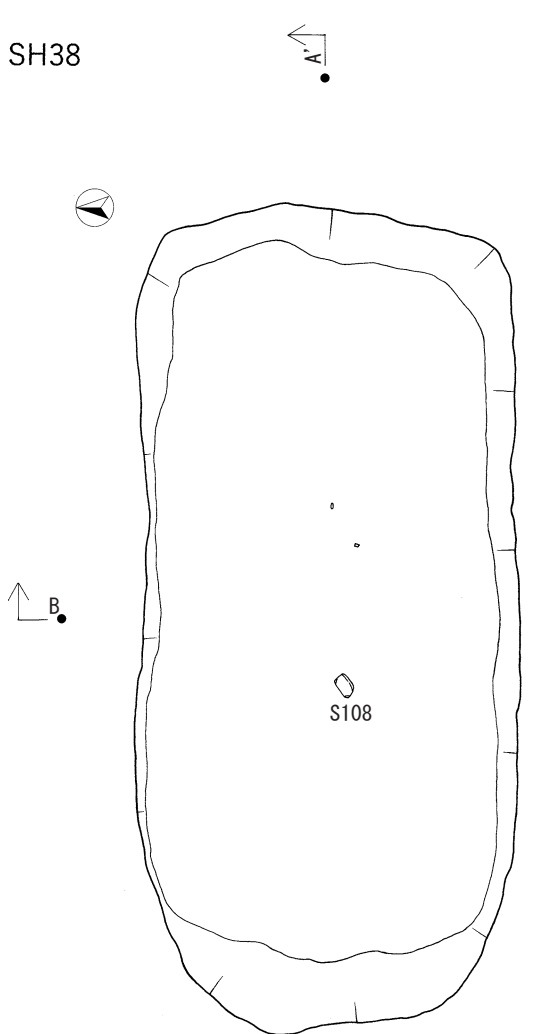
埋土中から出土した遺物は、4点であった。土器は、小片で時期の特定はできなかった。石器は3点出土し、内1点を掲載した。S108は、ホ

ルンフェルス製の磨製石器である。正面は、滑らかで光沢をもつが、擦痕は不明瞭である。裏面はよく磨られる。側面には所々に敲打痕が確認できる。被熱の痕跡はみられない。

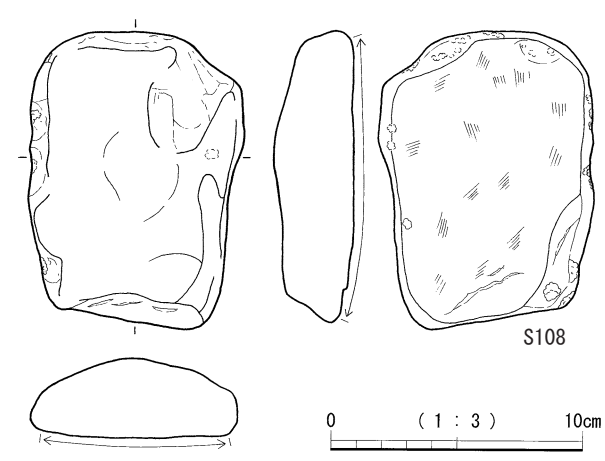
第7表 竪穴建物跡一覧表(1)

挿図番号	遺構名	検出区	検出層	平面プラン	長軸(m)	短軸(m)	深さ(cm)	面積(m ²)	長短比	柱穴	炉跡	遺物	備考
37	SH1	A-1	Ⅶ	楕円形	2.90	2.16	22	4.92	0.74	-	無	無	
	SH2	C-1・2	Ⅶ	隅丸方形	1.97	1.96	13	3.86	0.99	-	無	無	
38	SH3	B-1・2	Ⅷ	隅丸方形	2.42	2.04	27	4.94	0.84	-	無	有	
39	SH4	B・C-2	Ⅷ	隅丸方形	1.97	1.68	42	3.31	0.85	-	無	無	
	SH5	C-2・3	Ⅶ	隅丸長方形	2.41	1.63	40	3.93	0.68	-	無	有	
40	SH6	C・D-2	Ⅷ	隅丸方形	1.62	1.60	40	2.59	0.99	-	無	有	
41	SH7	D-2	Ⅷ	隅丸方形	2.58	2.14	32	5.52	0.83	-	無	有	
42	SH8	C-3	Ⅷ	不定形	2.12	2.06	38	4.37	0.97	-	無	有	
43	SH9	C・D-3	Ⅷ	隅丸方形	2.25	1.68	42	3.78	0.75	-	無	有	
44	SH10	D-3	Ⅷ	隅丸方形	2.11	1.76	40	3.71	0.83	-	無	有	
45	SH11	D・E-3	Ⅷ	楕円形	2.53	2.07	36	4.11	0.82	-	無	有	
46	SH12	D・E-3	Ⅷ	不定形	3.61	3.22	40	11.62	0.89	-	無	有	
48	SH13	C-4	Ⅶ	隅丸方形	2.36	1.98	34	4.67	0.84	-	無	有	
49	SH14	D・E-4	Ⅷ	不定形	2.18	1.94	24	4.23	0.89	-	無	無	
50	SH15	E-4	Ⅷ	隅丸方形	2.37	1.82	30	4.31	0.77	-	無	有	
51	SH16	F-3・4	Ⅶ	隅丸方形	2.09	1.91	34	3.99	0.91	-	無	有	
52	SH17	F-4	Ⅷ	楕円形	2.17	2.16	30	3.68	0.99	-	無	有	
53	SH18	E-5	Ⅷ	隅丸方形	2.02	1.80	22	3.64	0.89	-	無	有	
54	SH19	E-7	Ⅷ	不定形	1.72	1.67	20	2.87	0.97	-	無	有	
	SH20	F-8	Ⅷ	隅丸長方形	2.48	1.61	30	3.99	0.65	-	無	無	

SH38



- 埋土
- ① 黒褐色土 (10YR2/3) 黒色味やや薄い
黄色パミス・白色パミス多く含む
黄色軽石多く含む
 - ② 黒褐色土 (10YR2/3) 黒色味やや薄い
①よりも白色パミスの混ざりが少ない
 - ③ 黒褐色土 (10YR2/2) やや硬質
黄色パミス・白色パミスわずかに含む
黄色軽石含む
 - ④ IX層に類似
VII層のパミスわずかに含む



第69図 竪穴建物跡38号・出土遺物

第10表 石器観察表（竪穴建物跡出土）

挿図 番号	掲載 番号	遺構名	取上 番号	出土区	層	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	器種	分類	石材	石材分類	備考
38	S065	SH-3	SH35-11	B1・2	Ⅶ	60.0	58.0	53.0	254.90	磨敲石	-	安山岩	安山岩B	
	S066	SH-3	SH35-4	B1・2	Ⅶ	70.0	48.0	54.0	195.10	磨敲石	-	安山岩	安山岩B	
	S067	SH-3	SH35-14	B1	床直	93.0	87.0	31.0	339.00	磨敲石	-	安山岩	安山岩B	
39	S068	SH-5	SH45-18	C2・3	埋土	56.0	48.0	68.0	175.50	磨石	-	砂岩	-	
41	S069	SH-7	SH38-7	D2	埋土	132.0	89.0	66.0	1005.50	磨敲石	-	安山岩	安山岩B	
	S070	SH-7	SH38-4	D2	埋土	60.5	54.5	22.0	110.40	石錘	-	安山岩	安山岩B	
43	S071	SH-9	SH49-8	C・D3	埋土	65.0	60.0	30.0	150.20	磨敲石	-	安山岩	安山岩B	
	S072	SH-9	SH49-7	C・D3	埋土	52.0	35.0	35.0	87.00	磨石	-	ホルンフェルス	-	
44	S073	SH-10	SH52-7	D3	埋土①	70.0	33.0	18.0	58.80	磨敲石	-	砂岩	-	
	S074	SH-10	SH52-4	D3	埋土①	67.5	62.0	44.0	271.10	磨敲石	-	安山岩	安山岩B	
	S075	SH-10	SH52-10	D3	埋土①	96.0	74.0	33.0	321.00	磨敲石	-	安山岩	安山岩B	
47	S076	SH-12	SH48-1	D3	埋土下	94.0	86.0	56.0	688.00	石皿	-	凝灰岩	-	
	S077	SH-12	SH48-11	D3	埋土1	102.0	85.0	49.0	593.50	磨敲石	-	安山岩	安山岩B	
48	S078	SH-13	SH42-1	C4	埋土	427.0	362.0	104.0	16000.00	石皿	-	安山岩	安山岩B	完形
50	S079	SH-15	SH43-4	E4	埋土上	112.0	122.0	61.0	934.50	磨敲石	-	安山岩	安山岩B	
	S080	SH-15	SH43-7	E4	埋土下	48.0	66.0	41.0	175.10	磨敲石	-	安山岩	安山岩B	
	S081	SH-15	SH43-3	E4	埋土上	106.0	92.0	46.0	601.00	磨敲石	-	安山岩	安山岩B	
52	S082	SH-17	SH40-2	F4	埋土	123.5	70.0	24.2	271.40	石斧	-	ホルンフェルス	-	
	S083	SH-17	SH40-3	F4	埋土	108.0	76.0	62.0	683.50	磨敲石	-	安山岩	安山岩B	
	S084	SH-17	SH40-5	F4	埋土	95.0	78.0	57.0	548.50	磨敲石	-	安山岩	安山岩B	
56	S085	SH-21	SH65	F8・9	床直	50.0	43.0	38.0	123.00	磨敲石	-	安山岩	安山岩B	
	S086	SH-22	SH64	F8・9	床直	80.0	80.0	69.0	566.50	磨敲石	-	安山岩	安山岩B	
	S087	SH-22	SH64	F8・9	床着	66.0	92.0	56.0	312.00	磨敲石	-	安山岩	安山岩B	
	S088	SH-22	SH64	F8・9	床着	118.0	78.0	51.0	619.50	磨敲石	-	安山岩	安山岩B	
	S089	SH-22	SH64	F8・9	床着	87.0	52.5	47.5	38.80	軽石製品	-	軽石	-	舟形・赤色顔料
57	S090	SH-23・24	SH60	E9・10	Ⅷ	12.5	14.5	2.5	0.50	石鏃	-	黒曜石	黒曜石C	欠損品、石錐へ転用
59	S091	SH-26	SH63	F8・9	埋土	100.0	101.0	56.0	809.00	磨敲石	-	安山岩	安山岩B	
	S092	SH-26	SH63	F8・9	埋土	72.0	39.0	48.0	102.80	磨敲石	-	凝灰岩	-	
	S093	SH-26	SH63	F8・9	埋土	309.0	269.0	87.0	6340.00	石皿	-	安山岩	安山岩B	完形
61	S094	SH-27	SH28	C11	-	23.0	20.0	7.5	3.79	石鏃	-	チャート	-	未製品
	S095	SH-27	SH28	-	-	66.5	40.0	16.5	61.50	打製石斧	Ⅲ	ホルンフェルス	-	基部
	S096	SH-27	25828	B11	-	87.0	97.0	47.0	617.50	磨敲石	-	安山岩	安山岩B	
	S097	SH-27	25827	C11	-	130.0	101.0	50.0	1026.50	磨敲石	-	安山岩	安山岩B	
62	S098	SH-29	21555	B13	-	114.0	90.0	57.0	965.00	磨敲石	-	安山岩	安山岩B	赤色顔料
	S099	SH-29	21556	B13	埋土	131.0	95.0	58.0	1243.00	磨敲石	-	安山岩	安山岩B	
63	S100	SH-30	21014	E13	埋土	108.0	55.0	36.0	228.60	磨敲石	-	砂岩	-	
	S101	SH-30	21012	E13	埋土	45.0	40.0	45.0	60.70	磨石	-	凝灰岩	-	
	S102	SH-30	SH20	E13	埋土	48.0	51.0	47.0	71.40	磨石	-	凝灰岩	-	
64	S103	SH-31	24568	F13	-	39.0	35.0	25.0	34.90	磨敲石	-	凝灰岩	-	
	S104	SH-31	24794	F13	-	81.0	86.0	41.0	407.00	磨敲石	-	安山岩	安山岩B	
	S105	SH-31	24569	F13	-	110.0	69.0	65.0	585.50	磨敲石	-	安山岩	安山岩B	
	S106	SH-31	24571	F13	-	76.0	76.0	66.0	481.50	磨敲石	-	安山岩	安山岩B	
	S107	SH-31	24572	F13	-	74.5	38.0	15.0	65.10	石錘	-	砂岩	-	
69	S108	SH-38	21049	B20	埋土	118.0	86.0	32.0	475.00	磨製石器	-	ホルンフェルス	-	

(2) 連穴土坑 (第70～74図)

本遺跡では、2つの土坑が地中トンネルで繋がっている土坑を連穴土坑として扱った。中には、トンネル部分が崩落するなどして明確に形を成さないものもあるが、形状や検出状況などから連穴土坑と判断した。

VII層検出の連穴土坑は、7基検出された。

SH22を切っているSK18は、竪穴建物跡の壁面を利用した連穴土坑の可能性も推察されるが、土坑として扱ったここでは掲載しない。REN 3は、東側に土坑があり、一連の連穴土坑に見えるが、上から掘り込まれたと思われる時期の違う土坑である。

連穴土坑と他遺構との関係は、竪穴建物跡から1m以内が1基、1m～5m以内が3基、5m以上10m未満が2基、10m以上が1基であった。連穴土坑の向きには規則性は見出せず、小さな土坑部分を地形レベルの高い方にほとんどが設定している。連穴土坑の向きを決める時には、設置場所の地形に左右されるものと思われる。

縄文時代早期前葉の大集落遺跡である上野原遺跡では、竪穴住居跡、連穴土坑、集石といった組み合わせが見られるが、本遺跡では、竪穴建物跡や集石に比べて連穴土坑の数が少ない。

本報告書では、「田原迫ノ上遺跡」報告書を参考に、連穴土坑の各部分の名称を下記のように付けた。

小穴部：連穴土坑の小さい方の土坑で、煙出し部分と考えられる。

主穴部：連穴土坑の大きな方の土坑で、火焚き部分と考えられる。

トンネル：小さな土坑と大きな土坑が地中で繋がっている空間部分のこと。

ブリッジ：トンネル部の上の部分のこと。

全長：ブリッジ部分を含む、主穴部外端から小穴部分の外端までの長さ。

全幅：連穴土坑の最大幅のこと。

深度：連穴土坑の最深部のこと。

推定面積：全長と全幅から楕円形の求積公式を適用して算出した面積のこと。

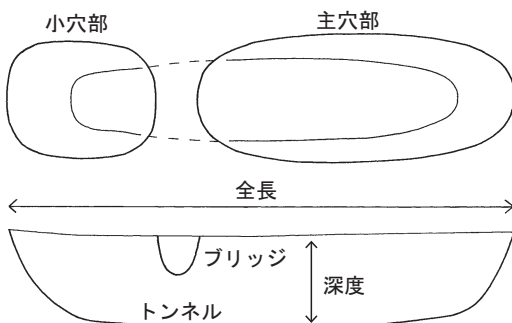


図1 連穴土坑の各部名称

連穴土坑1号 (第70図)

検出状況

REN 1は、B-1区の申良川左岸に面したSH 3の西側で検出された。全長1.63m、全幅0.62m、深度38cm、推定面積0.79㎡を測る。長短比は、0.38であった。連穴部分のブリッジは崩れたと思われる。床面に赤変部等被熱痕跡を確認できなかった。小穴部分は、東側のSH 3方向に向けられ、竪穴建物跡まで約90cmの距離である。

集石は近くにないが、西側にあった可能性もある。

埋土

埋土は、黄色パミスや白色石粒を含む黒褐色土のVII層が基本で、竪穴建物跡の埋土と同じである。薩摩火山灰上面まで掘り込んでいる。

出土遺物

出土していない。

連穴土坑2号 (第71図)

検出状況

REN 2は、土坑と連穴土坑の切り合いでなく、連穴土坑に樹痕が入り、ブリッジ部分が落ちた連穴土坑と判断した。F-2・3区で検出さ、全長1.79m、全幅0.65m、深度32cm、推定面積0.91㎡を測る。長短比は、0.36であった。床面に赤変部等被熱痕跡を確認できなかった。

微高地の一番高い部分に作られ、小穴部分は、北東方向の約5.7m離れたSH16に向けられている。

北側2.5mと西側2mにそれぞれ集石もあり、遺構が多いエリアである。

埋土

埋土は、硬質で粘性のある黒色土を基本に、5mm以下の黄色のパミスと1mm以下の白色石粒が多く含む。

出土遺物

出土していない。

連穴土坑3号 (第72図)

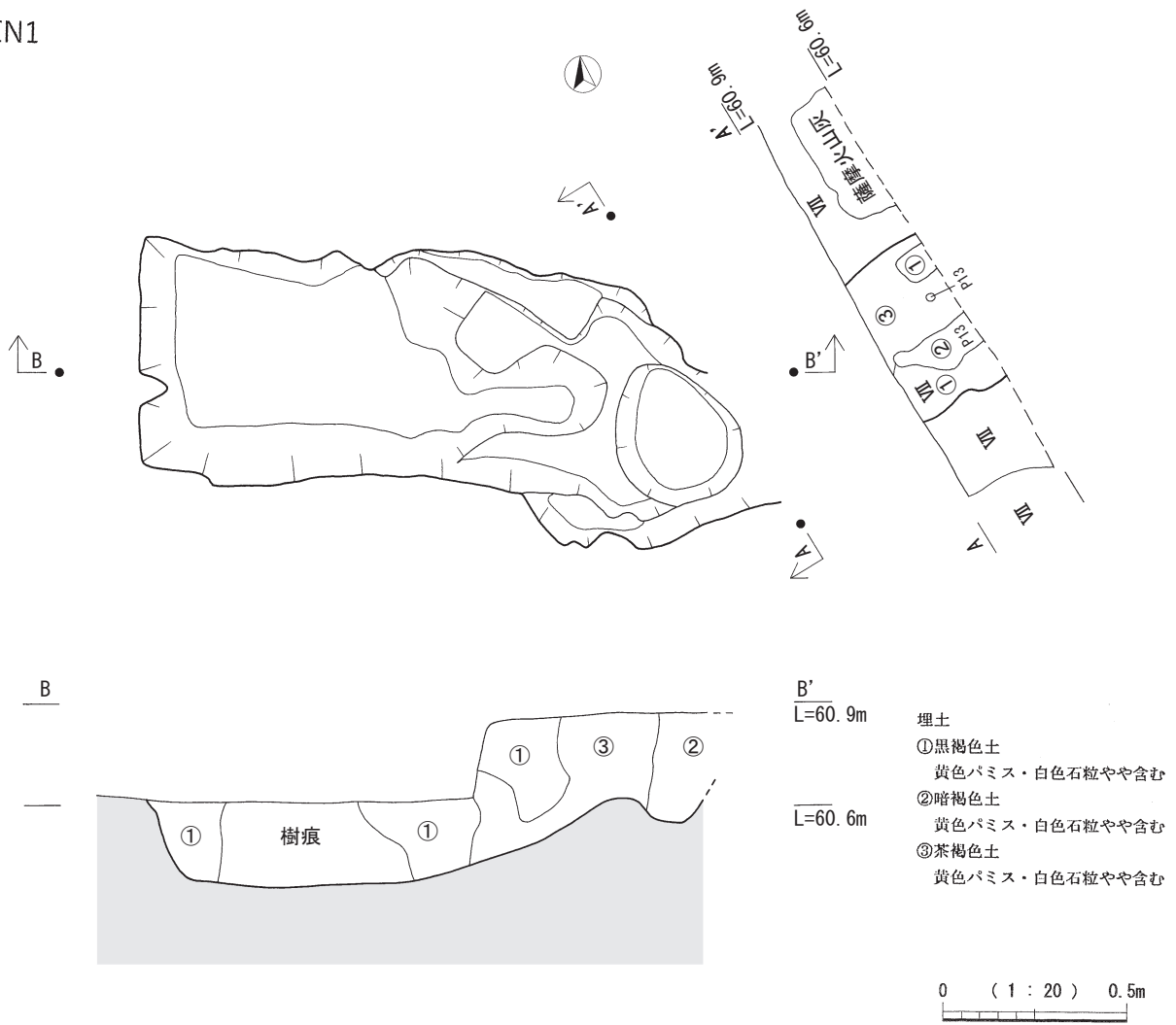
検出状況

REN 3は、F-12区で検出された。全長1.81m、全幅0.64m、深度35cm、推定面積は0.91㎡を測る。長短比は0.35であった。連穴部分のブリッジは崩れたと思われる。床面に赤変部等被熱痕跡を確認できなかった。検出当初、東側にSK81(縄文後期)があり、連穴土坑の一部として調査したが、連穴部がトンネルで繋がっていないことが判明し、大型の花崗岩の石皿があることから、別の土坑と認定した。

小穴部分は、南西方向のSH30に向けられ、竪穴建物跡まで約10.7mの距離である。遺構の北側約3.2mの所にSH30もある。

集石は周辺に検出されなかった。

REN1



第70図 連穴土坑1号

埋土

埋土は、黒褐色土を基本に、黄色パミス、白色石粒を含む。

出土遺物

出土していない。

連穴土坑4号 (第72図)

検出状況

REN 4は、F-12区のⅧ層上面で検出された。全長1.51m、全幅0.55m、深度40cm、推定面積は、0.65㎡を測る。長短比は、0.36であった。連穴部分のブリッジは崩れたと思われる。床面に赤変部等被熱痕跡を確認できなかった。

小穴部分は、北西方向の微高地側に向けられている。東側2.3mの所にSH31、南東側2.5mの所にREN 5があるが、周辺に集石は検出されていない。

埋土

埋土は、黒褐色土を基本に、黄色パミス、白色パミスを含む。炭化物が僅かに散在している。

出土遺物

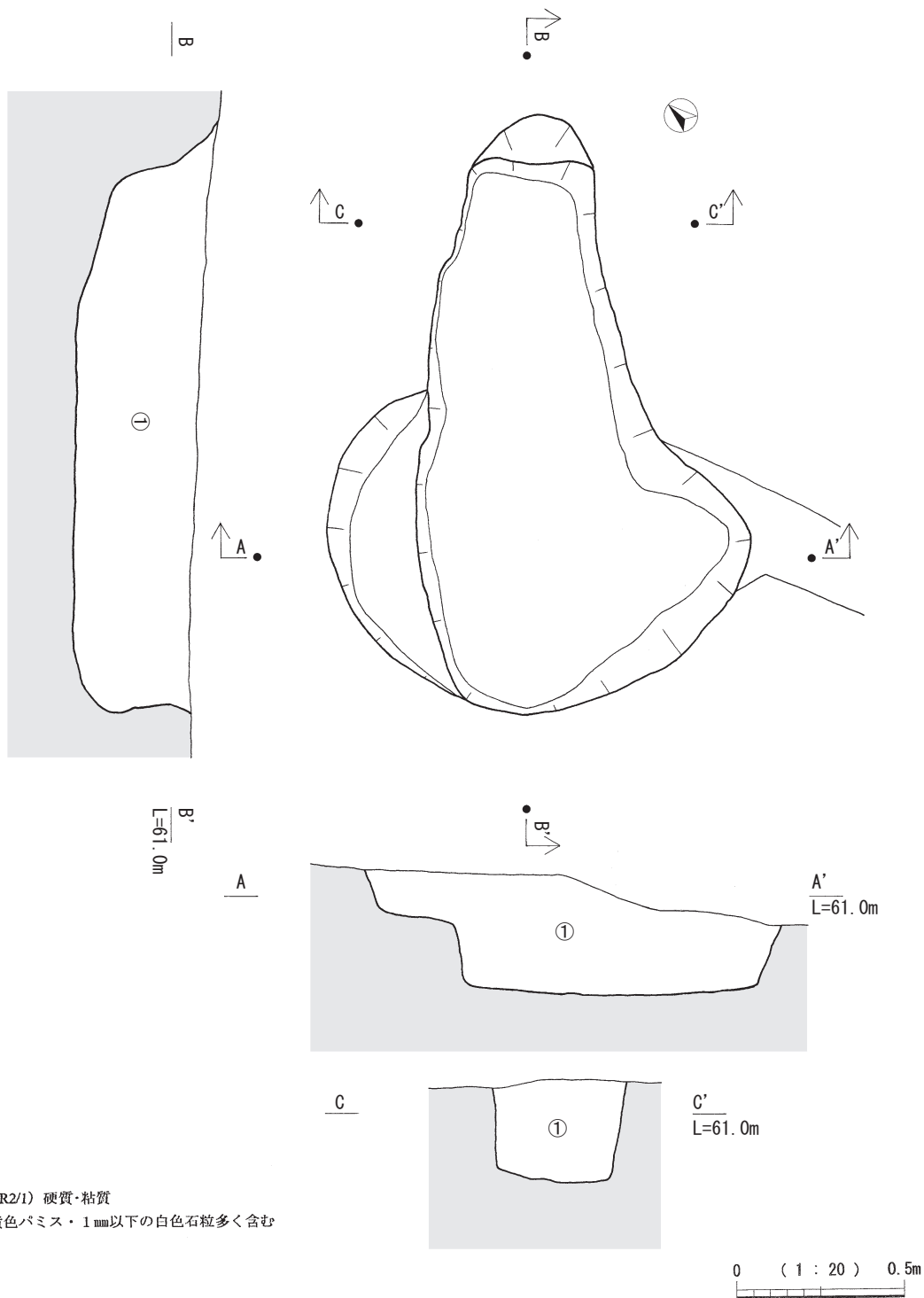
埋土中より土器1点が出土した。38は、斜位の貝殻条痕文の上から縦位の貝殻刺突文を施している。Ⅲa類に分類される。

連穴土坑5号 (第73図)

検出状況

REN 5は、D-14区の旧石器確認トレンチ2の西南隅に薩摩火山灰層(Ⅷ層)を除去した段階で検出された。全長1.64m、全幅0.6m、深度17cm、推定面積は、0.77㎡を測る。長短比は、0.37であった。小穴部側底面の傾斜が顕著であるが、トンネル部及び床面に赤変部等被熱痕跡を確認できなかった。

REN2



第71図 連穴土坑2号

小穴部分を北北西側の微高地に設定している。北東約7.5mの所にSH32, 南西約7.5m及び北東12.5mの所にそれぞれ集石が検出されている。

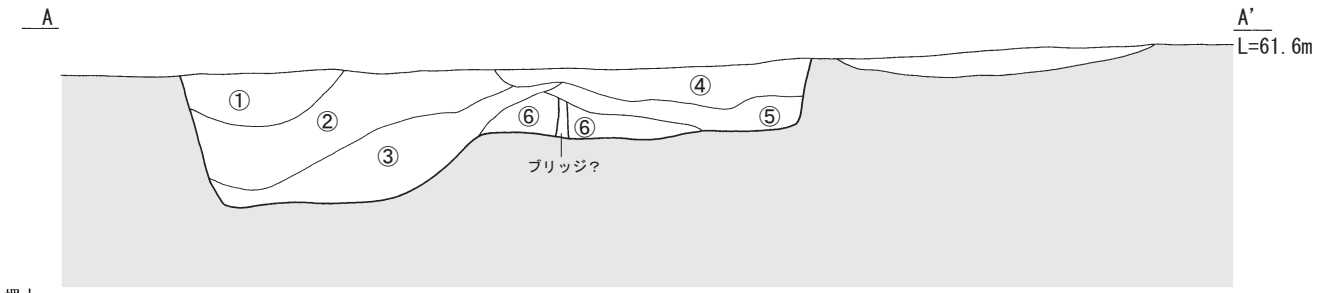
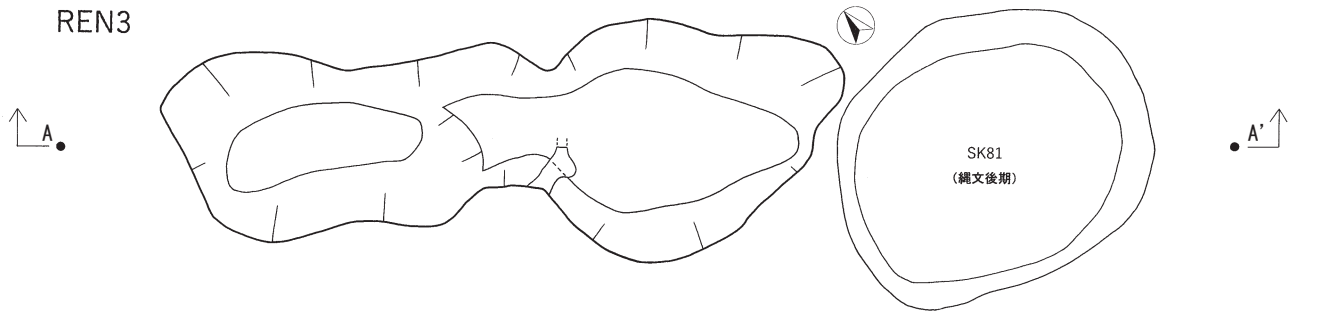
埋土

埋土は、黒褐色土を基本に、黄色パミス、白色パミス

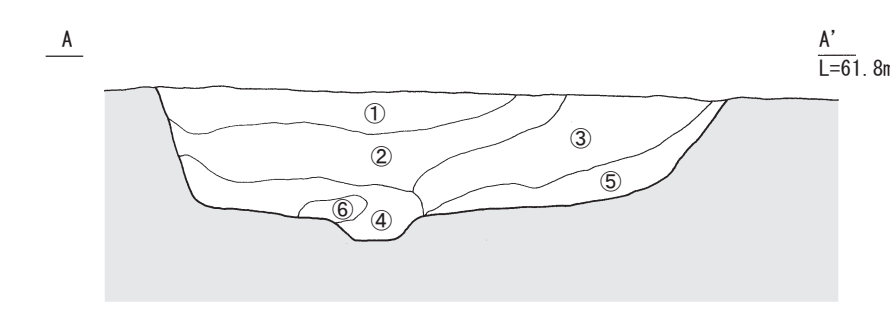
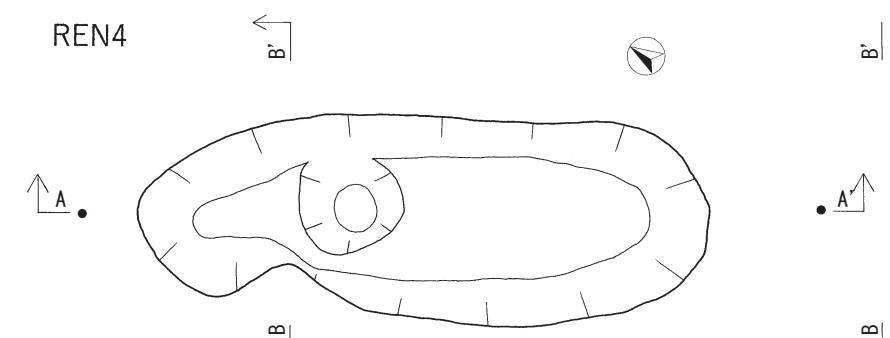
を含む。埋土中には炭化物は検出されなかった。

出土遺物

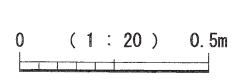
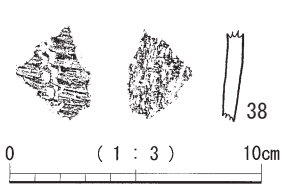
出土していない。



- 埋土
- ① 黒褐色土 (10YR2/3) 粒子粗・火山灰質・しまる
黄色バミス・白色バミス微粒わずかに含む
硬質土塊 (VII a 層的) 含む
 - ② 黒褐色土 (10YR2/2) 粒子粗・火山灰質・しまる
白色バミス微粒わずかに含む
黄色バミス微粒・炭化物微粒ごくわずかに含む
 - ③ 黒褐色土 (7.5YR3/2) やや粘性あり・火山灰質・しまる
白色バミス微粒ごくわずかに含む
強粘質小土塊 (IX 層?) 含む
 - ④ 黒褐色土 (10YR2/2) 粒子粗・火山灰質・しまる
黄色バミス・白色バミス微粒含む
黄色バミス粒わずかに含む
 - ⑤ 黒褐色土 (10YR2/2) 粒子粗・火山灰質・しまる
VII 層降下軽石ブロック含む
 - ⑥ 褐色土 (7.5YR4/4) やや粘性あり・しまる
VII a 層・IX 層土塊含む

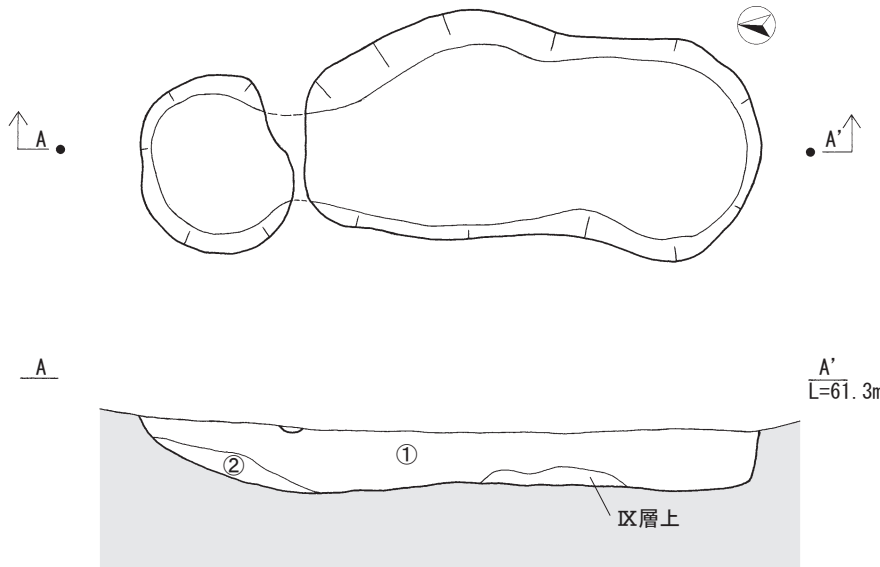


- 埋土
- ① 黒褐色土 (10YR2/2)
粒子やや粗・火山灰質・しまる
黄色バミス・白色バミス微粒多く含む
黄色バミス細粒含む
 - ② 黒褐色土 (10YR2/2)
粒子やや粗・火山灰質・しまる
黄色バミス・白色バミス微粒含む
 - ③ 黒褐色土 (10YR2/3)
粒子やや粗・火山灰質・しまる
黄色バミス・白色バミス微粒わずかに含む
黄色バミス細粒ごくわずかに含む
炭化物微粒わずかに含む
 - ④ 黒褐色土 (10YR2/3)
やや粘性あり・火山灰質・しまる
黄色バミス・白色バミス微粒含む
黄色バミス・白色バミス粒わずかに含む
 - ⑤ 黒褐色土 (10YR2/3)
やや粘性あり・火山灰質・しまる
VII a 層土塊わずかに含む
 - ⑥ VII a 層土塊・ブリッジ崩落?



第72図 連穴土坑3号・連穴土坑4号

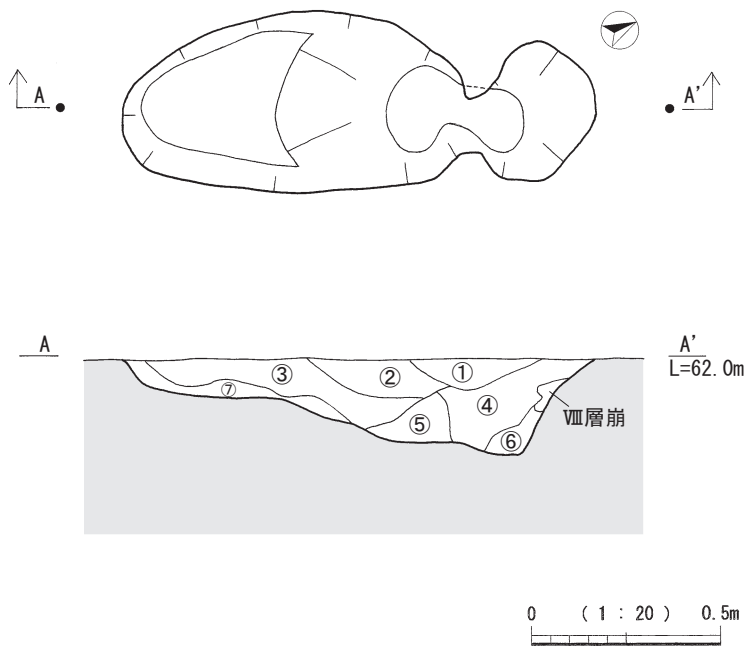
REN5



埋土

- ①黒褐色土 (10YR2/2) 火山灰質
白色パミス微粒極めて多く含む
黄色パミス粒わずかに含む
- ②黒褐色土 (10YR2/3) 火山灰質
①よりも黄色パミス粒少ない

REN6



埋土

- ①にぶい黄褐色土 (10YR4/3)
粒子細・火山灰質・しまる
白色パミス微粒多く含む
黄色パミス微粒含む
ブリッジ崩落?
- ②黒褐色土 (10YR2/2) 粒子粗・火山灰質・しまる
白色パミス微粒極めて多く含む
黄色パミス微粒多く含む
黄色パミス細粒含む
VII a層に類似
- ③黒褐色土 (10YR2/2) 粒子粗・火山灰質・しまる
②に似るが各パミスが濃集してパッチ状に混ざる
- ④暗褐色土 (10YR3/3) 粒子粗・火山灰質・しまる
白色パミス微粒含む
黄色パミス細粒わずかに含む
各パミス濃集してパッチ状に混ざる
- ⑤暗褐色土 (10YR3/4) 粒子粗・火山灰質・しまる
VIII層降下軽石がブロック状に含まれる
ブリッジ崩落?
- ⑥褐色土 (10YR4/4) やや粘性あり・火山灰質
VIII層の崩落? (硬化層ではない)
- ⑦橙色土 (2.5YR6/8) 粒子粗・火山灰質・しまる
VIII層の浸潤

第73図 連穴土坑5号・連穴土坑6号

連穴土坑6号 (第73図)

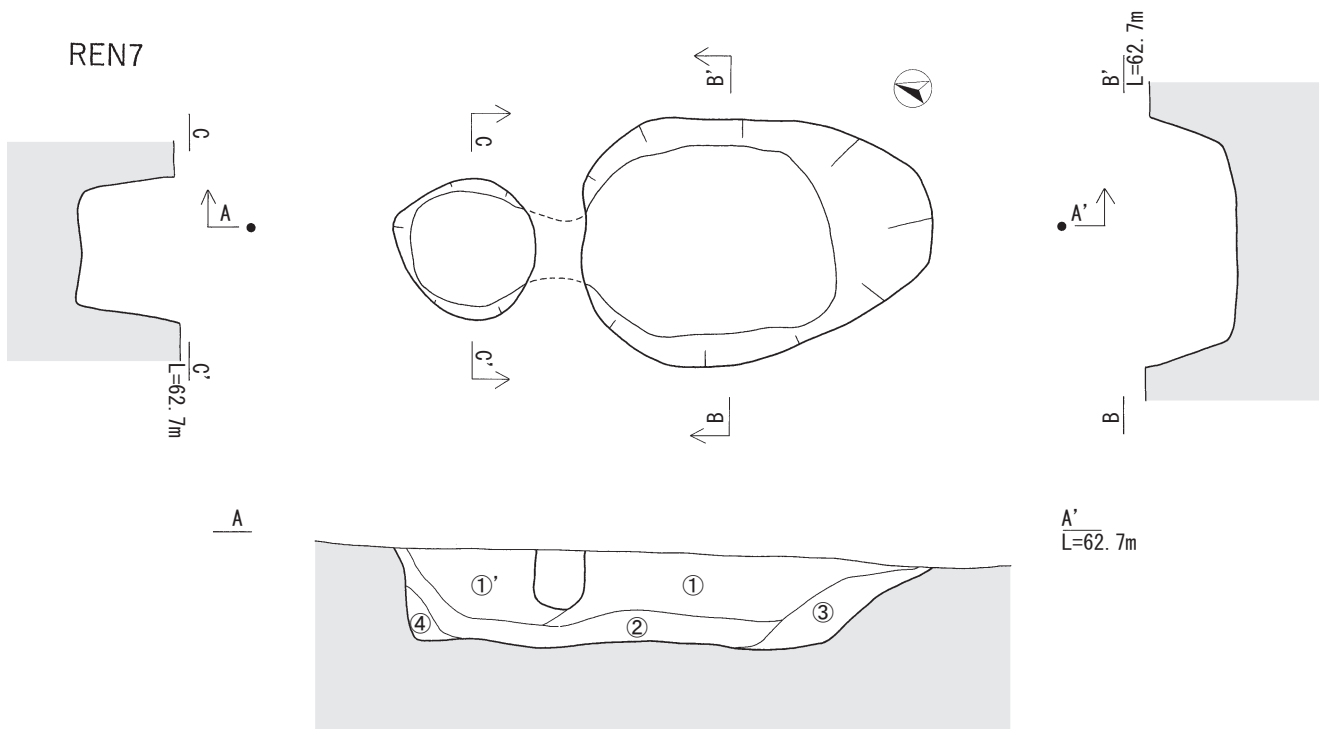
検出状況

REN 6は、F-13, 14区のVIII層上面で検出された。全長1.25m, 全幅0.48m, 深度25cm, 推定面積は、0.47㎡を測る。長短比は、0.38であった。連穴部分のブリッジは崩れたと思われる。床面に赤変部等被熱痕跡を確認できなかった。

小穴部分を北東の微高地方向に設定している。連穴土坑の南西約7mの所にSH31があるが、集石は検出されていない。

埋土

埋土は、黒褐色土を基本に、黄色パミス, 白色パミスを含む。全体的に炭化物の微粒, 細粒をごくわずかに含む。



埋土

(VII a 層の特徴を持つ以下VII a 層と比較)

- ① 黄色パミス・白色パミス粒極めて少ない
- ② ①よりも白色パミス粒少ない
- ③ ①よりもパミス粒少ない
黄色軽石含む (パミスより大きい)

③ IX層のような粘性あり

- ④ サツマ火山灰1次降下軽石の土塊含む
- ④ 白色パミス多く含む
VII a 層土塊・黄色軽石含む

0 (1 : 20) 0.5m

第74図 連穴土坑7号

出土遺物

出土していない。

び床面に赤変部等被熱痕跡を確認できなかった。

小穴部分を北西側の微高地に設定している。近くの竪穴建物跡や集石までは約20m離れており、単独で遺構が存在するような状況である。

連穴土坑7号 (第74図)

検出状況

REN 7は、E・F-18・19区のⅧ層上面で検出された。全長1.43m、全幅0.65m、深度26cm、推定面積は、0.73㎡を測る。長短比は、0.45であった。ブリッジ部分は薩摩火山灰上面の硬化部分を利用している。トンネル部及

埋土

黒褐色土を基本に、黄色パミス、白色パミスを多く含む。

出土遺物

出土していない。

第11表 連穴土坑一覧表

挿図番号	遺構名	検出区	全長(m)	全幅(m)	深度(cm)	面積(㎡)	長短比	炭化物	遺物	備考
70	REN1	B-1	1.63	0.62	38	0.79	0.38	-	-	
71	REN2	F-2・3	1.79	0.65	32	0.91	0.36	-	-	
72	REN3	F-12	1.81	0.64	35	0.91	0.35	-	-	
	REN4	F-12	1.51	0.55	4	0.65	0.36	-	有	
73	REN5	D-14	1.64	0.6	17	0.77	0.37	-	-	
	REN6	F-13・14	1.25	0.48	25	0.47	0.38	△	-	
74	REN7	E・F-18・19	1.43	0.65	26	0.73	0.45	-	-	

第12表 土器観察表 (連穴土坑出土)

挿図番号	掲載番号	器種	部位	分類	出土区	遺構名	文様・器面調整等		色調		胎土				焼成	取上番号	備考
							外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃石	他			
72	38	深鉢	胴	Ⅲa	F-12	REN4	貝殻条痕・貝殻刺突	ケズリ	10YR5/3にぶい黄褐	10YR4/3にぶい黄褐	○	△	△		良好		

(3) 土坑 (第75～84図)

Ⅶ層の土坑は、21基検出された。Ⅵ層段階での土坑は確認できなかった。21基の土坑の内、SK15・16は、埋土状況等から2基の土坑の重複と判断した。SH12・SH22に絡んでいるSK 1・SK18は再度掲載した。

本報告書では、土坑の各部分の名称を下記のように付し、形状や規模を表記した。土坑は楕円形に近い形状が多いため、推定面積は楕円求積の公式を当てはめて算出した。また、平面プランの形状を楕円率より5タイプに分類した。

長 軸：検出面で、土坑のほぼ中心を通り、遺構の一番長い部分の長さ。

短 軸：長軸に直角に交わり、長軸をほぼ2等分する軸の長さ。

深 度：遺構の断面で最も深い部分の長さ。

推定面積：楕円形の面積を求める公式を適用して
(長軸/2 × 短軸/2 × π) で算出

楕円率：(短軸 ÷ 長軸) で算出 (0 < 楕円率 ≤ 1)
楕円率を元に下記のように土坑を分類した。

タイプⅠ：長楕円 (楕円率 < 0.5)

タイプⅡ：楕円 (0.5 ≤ 楕円率 < 0.8)

タイプⅢ：円形 (0.8 ≤ 楕円率)

タイプⅣ：不定形

タイプⅤ：不明

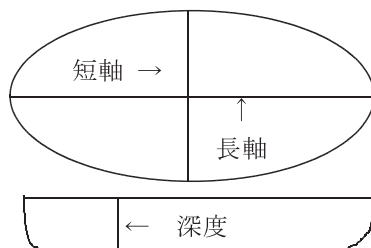


図1 土坑各部の名称

土坑1号 (第75図)

検出状況

SK 1は、E-3区のⅦ層上面で検出された。長軸0.55 + a m、短軸0.46m、深度37cm、推定面積は不明である。SH12の北側を一部切っており、遺構の南側の状況は不明である。平面形状から不定形の土坑とした。SH12との関連については、検出状況等より竪穴建物跡に関連する遺構ではないと判断した。埋土が似ていることより、SH12が廃棄された後に時間をさほど置かずには作られた土坑と思われる。

分類：タイプⅣ

埋土

埋土は、黒褐色土を基本に、黄色パミス、白色石粒をわずかに含む。SH12の埋土と似ている。

出土遺物

遺物は出土していない。

土坑2号 (第76図)

検出状況

SK 2は、E-3区のⅦ層上面で検出された。長軸0.85m、短軸0.42m、深度13cm、推定面積0.28㎡を測る。楕円率0.49の長楕円形である。東側約0.5mの所にSK 3があり、連穴土坑の可能性も視野に入れながら調査を行ったが、地中のトンネル部分がなく、繋がっていないことが判明した。

分類：タイプⅠ

埋土

埋土は、硬質の黒色土を基本に、5mm以下の黄色パミスと1mm以下の白色石粒を多く含む。

出土遺物

遺物は出土していない。

土坑3号 (第76図)

検出状況

SK 3は、E-3・4区のⅦ層上面で検出された。長軸0.61m、短軸0.48m、深度31cm、推定面積0.23㎡を測る。楕円率0.79の楕円である。

土坑南東側約2.8mの所にSH14がある。

分類：タイプⅡ

埋土

埋土は1枚で、黒色土を基本に、5mm以下の黄色パミスと1mm以下の白色石粒を多く含む。

出土遺物

遺物は出土していない。

土坑4号 (第76図)

検出状況

SK 4は、D-4区のⅦ層上面で検出された。長軸1.16m、短軸1.05m、深度19cm、推定面積0.96㎡を測る。楕円率0.91の円形である。

土坑北側2.5m以内にSH15とSS 5がある。

分類：タイプⅢ

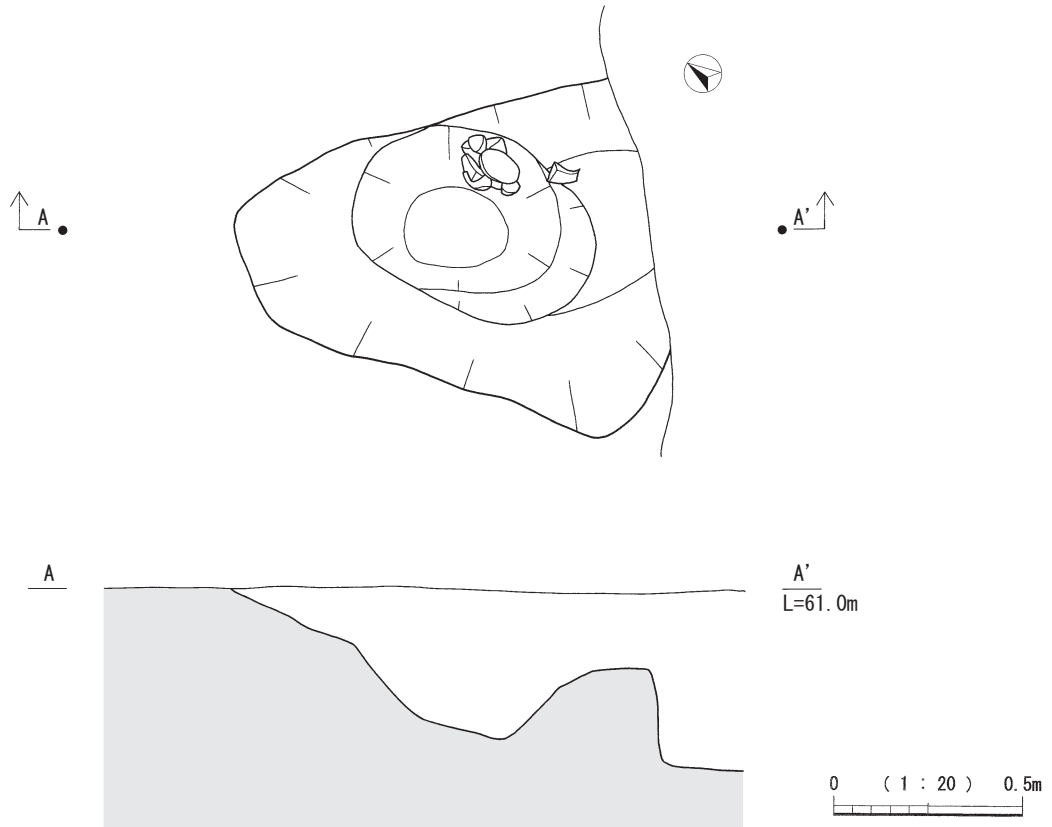
埋土

埋土は1枚で、硬質の黒褐色土を基本に、5mm以下の黄色パミスと1mm以下の白色石粒を多く含む。

出土遺物

遺物は出土していない。

SK1



第75図 土坑1号

土坑5号（第77図）

検出状況

SK 5は、E-4区のⅧ層上面で検出された。長軸0.72m、短軸0.63m、深度16cm、推定面積0.36㎡を測る。楕円率0.88の円形である。

土坑の南東側約3.2mの所にSH14、北側約1.2mの所にSK 6がある。

分類：タイプⅢ

埋土

埋土は1枚で、黒色土を基本に、5mm以下の黄色パミスと1mm以下の白色石粒を多く含む。

出土遺物

遺物は出土していない。

土坑6（第77図）

検出状況

SK 6は、E-4区のⅧ層上面で検出された。長軸1.18m、短軸0.90m、深度40cm、推定面積0.83㎡を測る。楕円率0.76の楕円である。

SK 5と隣接している。

分類：タイプⅡ

埋土

埋土は3枚から成るが、他遺構の埋土状況を鑑みると、②の黒色土を基本とした、5mm以下の黄色パミスと1mm以下の白色石粒を多く含む埋土が基本と思われる。

出土遺物

石器1点が出土した。S109は安山岩製の被熱破碎した磨石片である。正面・裏面ともによく使用されており、裏面の縁辺部は特に強く擦られ、面を形成している。

土坑7号（第78図）

検出状況

SK 7は、E-6区のⅧ層上面で検出された。長軸0.75m、短軸0.65m、深度10cm、推定面積0.38㎡を測る。楕円率0.87の円形であった。

土坑の西側と南側約1.5mの所にSS 5とSS11がある。

分類：タイプⅢ

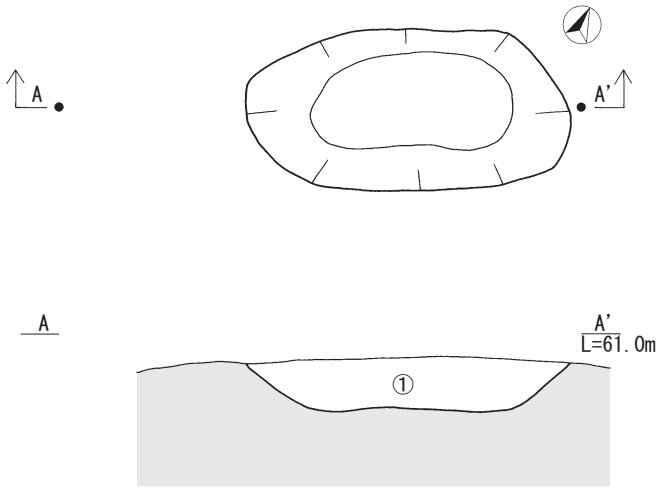
埋土

埋土は黒色土を基本に、5mm以下の黄色パミスと1mm以下の白色石粒を多く含む。一部Ⅷ層のブロックが混じる。

出土遺物

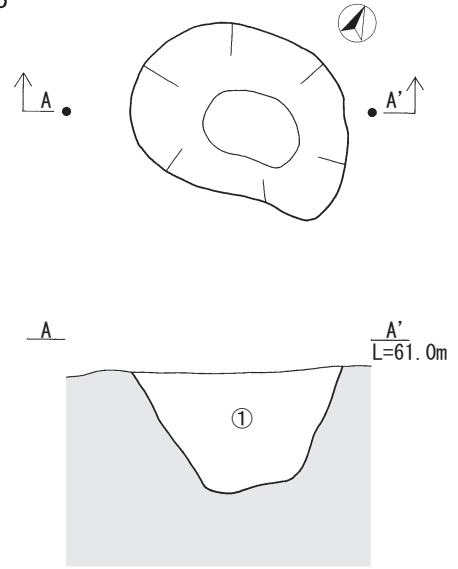
遺物は出土していない。

SK2



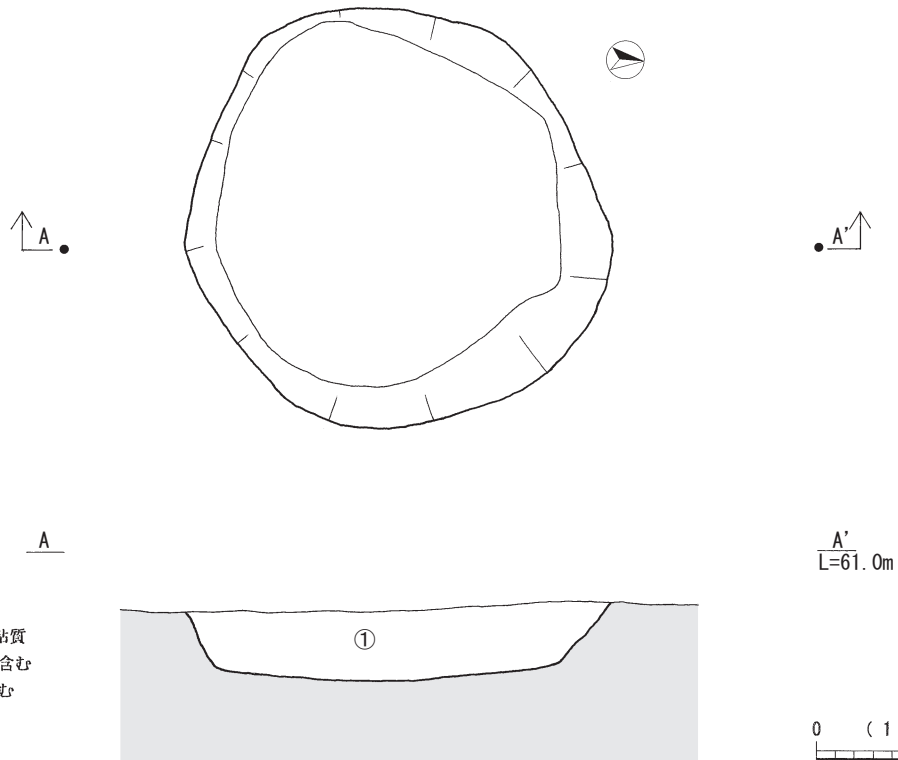
埋土
①黒色土 (10YR2/1) 硬質・粘質
5mm以下の黄色パミス・1mm以下の白色石粒多く含む

SK3



埋土
①黒色土 (10YR2/1) 硬質・粘質
5mm以下の黄色パミス・1mm以下の白色石粒多く含む

SK4



埋土
①黒色土 (10YR2/1) 硬質・粘質
5mm以下の黄色パミス多く含む
1mm以下の白色石粒多く含む

第76図 土坑2号～4号

土坑8号 (第78図)

検出状況

SK 8は、F-6区のⅧ層上面で検出された。長軸1.20m、短軸1.00m、深度15cm、推定面積0.94㎡を測る。楕円率0.83の円形である。

分類：タイプⅢ

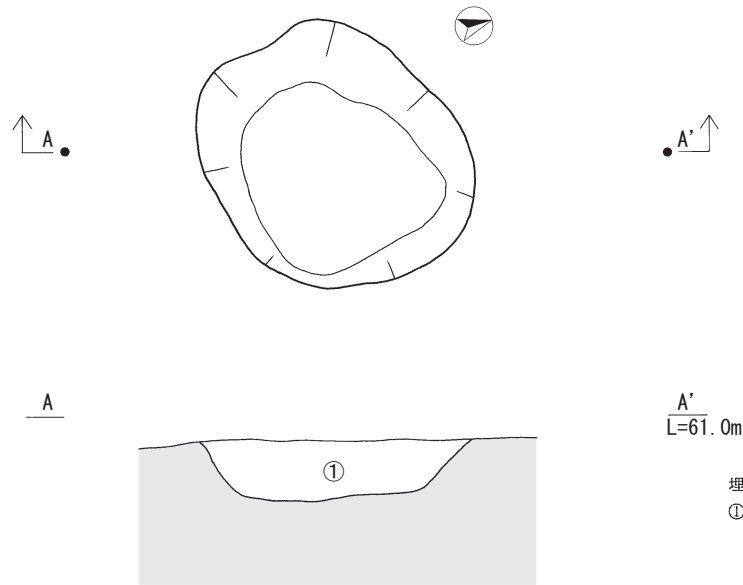
埋土

埋土は2枚からなる。黄色パミスや白色石粒を多く含む。

出土遺物

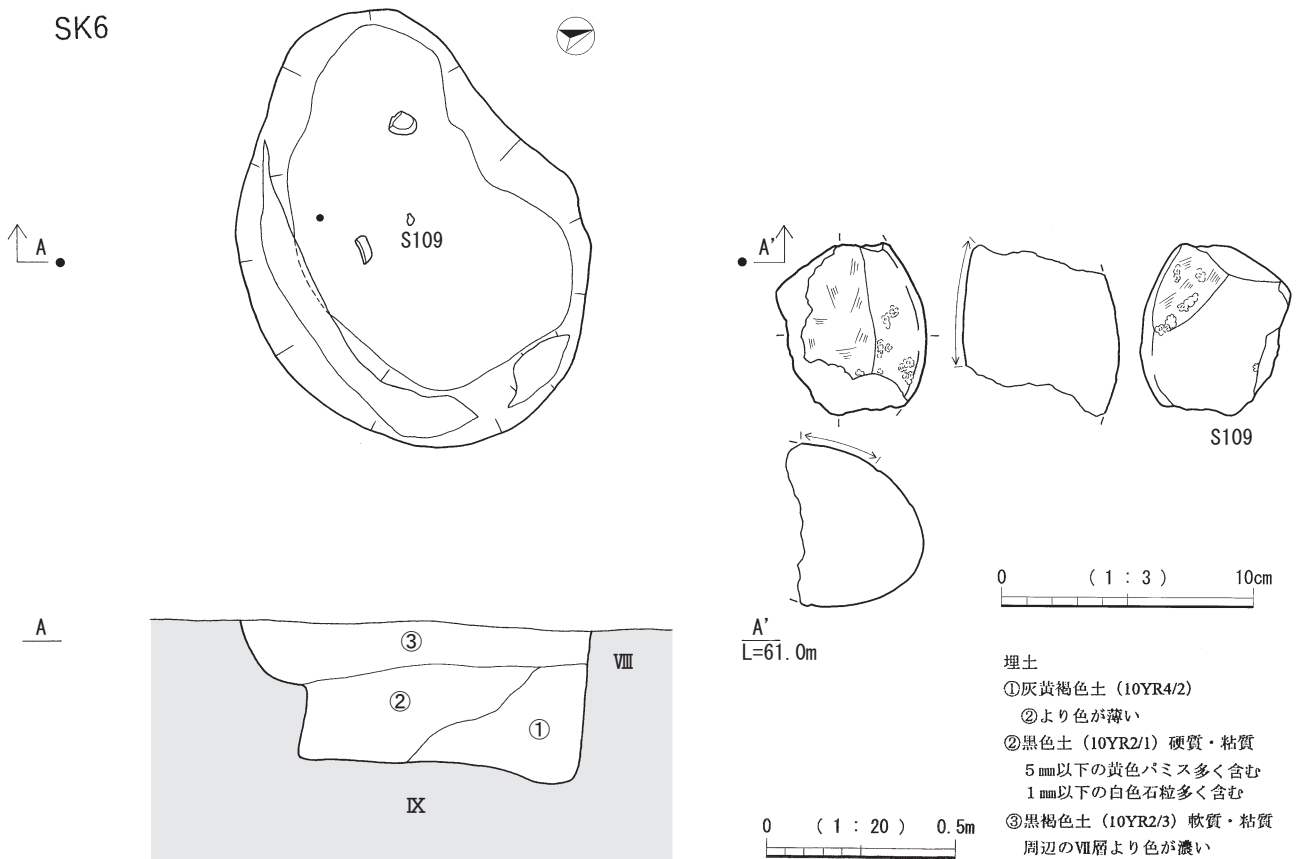
遺物は出土していない。

SK5



埋土
 ①黒色土 (10YR2/1) 硬質・粘質
 5 mm以下の黄色パミス多く含む
 1 mm以下の白色石粒多く含む

SK6



埋土
 ①灰黄褐色土 (10YR4/2)
 ②より色が薄い
 ②黒色土 (10YR2/1) 硬質・粘質
 5 mm以下の黄色パミス多く含む
 1 mm以下の白色石粒多く含む
 ③黒褐色土 (10YR2/3) 軟質・粘質
 周辺のVII層より色が濃い

第77図 土坑5号・土坑6号・出土遺物

土坑9号 (第79図)

検出状況

SK 9は、F-6区のVIII層上面で検出された。半分以上は調査範囲外に遺構が広がるものと推察される。長軸、短軸、推定面積は不明である。楕円率は分からないが、長楕円と思われる。SK 9の断面は、グリッド壁の断面

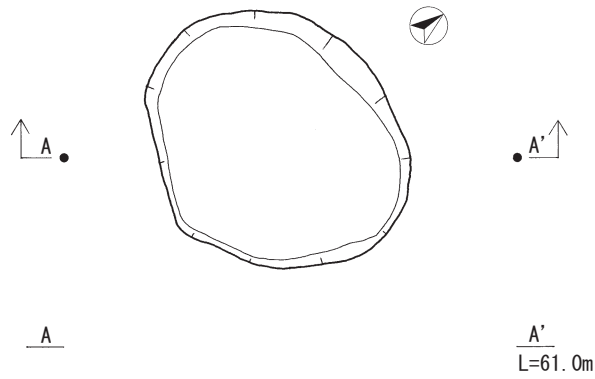
を反映させた。

分類：タイプV

埋土

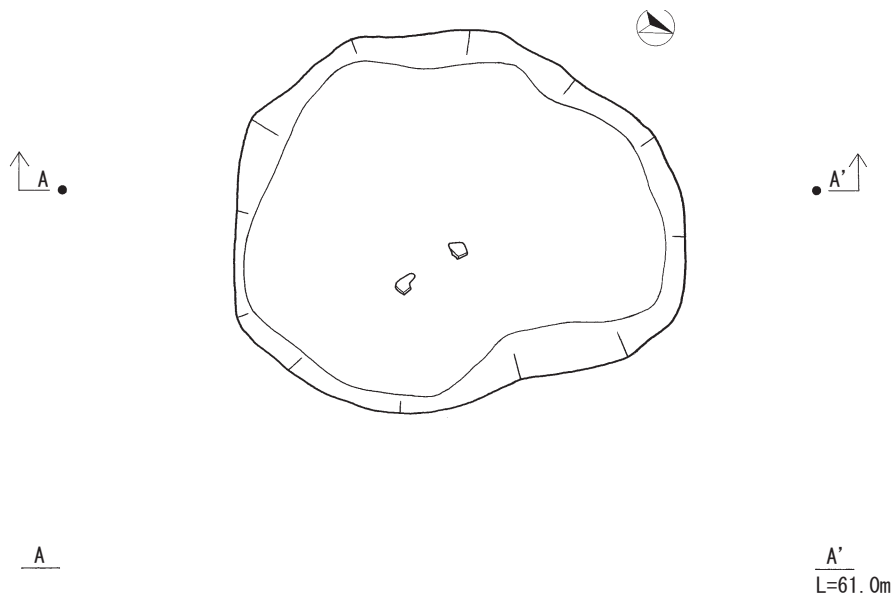
埋土は、5 mm以下の黄色パミスと1 mm以下の白色石粒を多く含む黒色土が基本である。

SK7



埋土
 ①黒色土 (10YR2/1) 硬質・粘質
 5mm以下の黄色パミス多く含む
 1mm以下の白色石粒多く含む
 ②①にⅧ層ブロック混ざる

SK8



埋土
 ①黒褐色土 (10YR2/3) 硬質・やや粘質
 ②のパミス・石粒をほとんど含まない
 ②黒色土 (10YR2/1) 硬質・粘質
 5mm以下の黄色パミス多く含む
 1mm以下の白色石粒多く含む

0 (1:20) 0.5m

第78図 土坑7号・土坑8号

出土遺物

遺物は出土していない。

短軸0.64m, 深度36cm, 推定面積0.64㎡を測る。楕円率0.50の長楕円である。

底面は、土坑北側にさらに掘り込みがあり、靴底型の形状をなす。

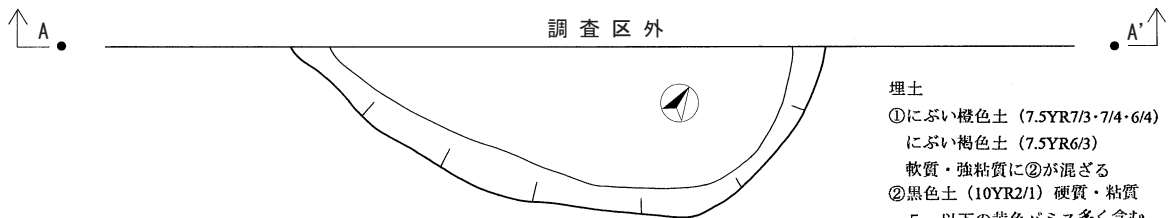
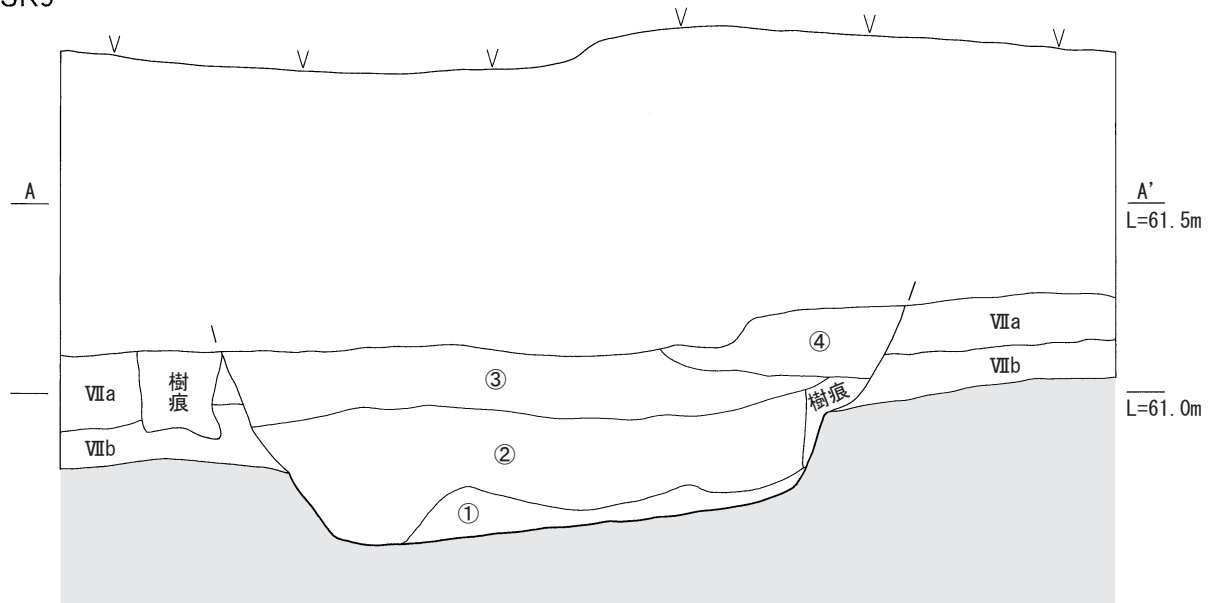
土坑の北東約1.8mの所にSH19がある。

土坑10号 (第79図)

検出状況

SK10は、E-7区のⅧ層上面で検出された。長軸1.27m,

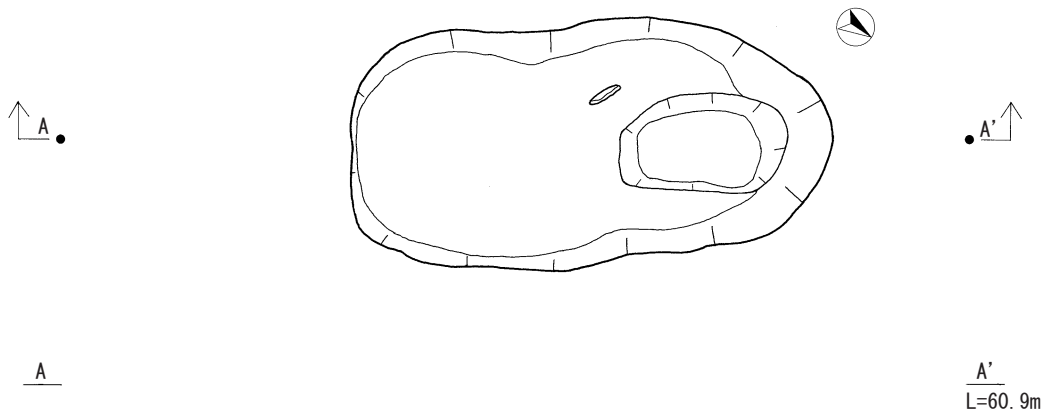
SK9



埋土

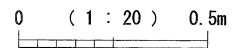
- ①にぶい褐色土 (7.5YR7/3-7/4-6/4) にぶい褐色土 (7.5YR6/3) 軟質・強粘質に②が混ざる
- ②黒色土 (10YR2/1) 硬質・粘質 5mm以下の黄色バミス多く含む 1mm以下の白色石粒多く含む その他のVII層の遺構よりも樹痕により壊されている部分が多い
- ③ほぼVII a層 VII a層よりも少し黒い
- ④褐色土 (10YR4/4-7.5YR4/4) 硬質・弱砂質 VII a層とVII b層が混ざる層

SK10



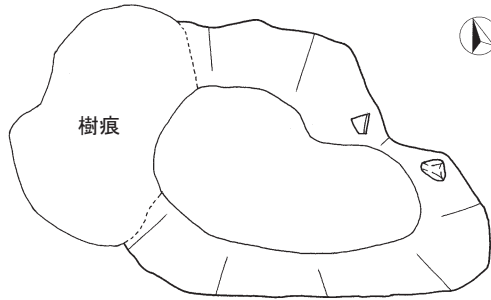
埋土

- ①黒色土 (10YR2/1) 硬質・粘質 5mm以下の黄色バミス多く含む 1mm以下の白色石粒多く含む VII層サツマ火山灰ブロックが入る
- ②黒色土 (10YR2/1) 硬質・粘質 5mm以下の黄色バミス多く含む 1mm以下の白色石粒多く含む

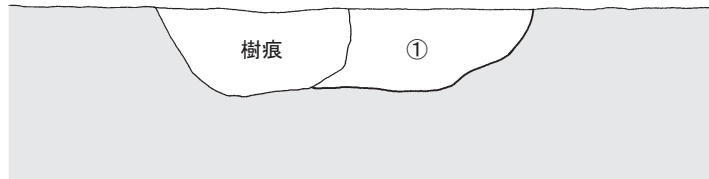


第79図 土坑9号・土坑10号

SK11



A

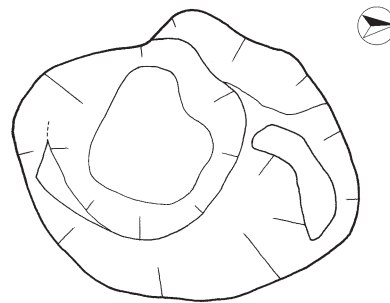


A'
L=61.0m

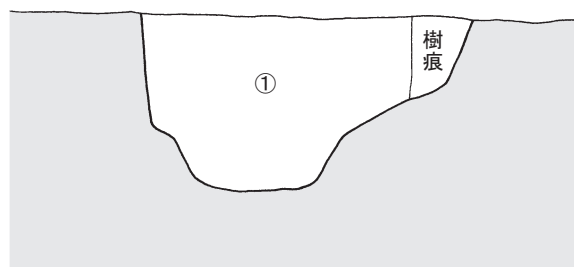
埋土

①黒色土 (10YR2/1) 硬質・粘質
5 mm以下の黄色パミス多く含む
1 mm以下の白色石粒多く含む
樹痕が多く入る

SK12



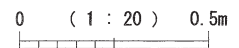
A



A'
L=61.0m

埋土

①黒色土 (10YR2/1) 硬質・粘質
5 mm以下の黄色パミス多く含む
1 mm以下の白色石粒多く含む



第80図 土坑11号・土坑12号

分類：タイプ I

埋土

埋土は2枚からなるが、5 mm以下の黄色パミスと1 mm以下の白色石粒を多く含む黒色土が基本である。

出土遺物

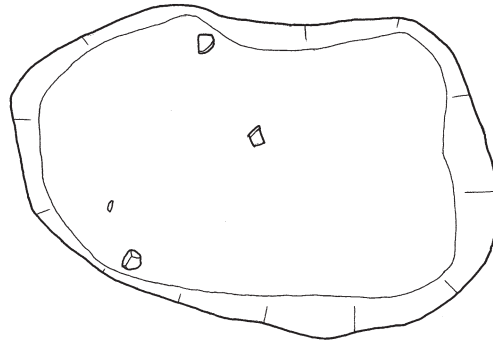
遺物は出土していない。

土坑11号 (第80図)

検出状況

SK11は、E-7区のⅧ層上面で検出された。樹痕が長軸側の一部を切っている。長軸0.92+ a m, 短軸0.78m, 深度22cmを測る。推定面積及び楕円率は不明で、不定形土坑とした。

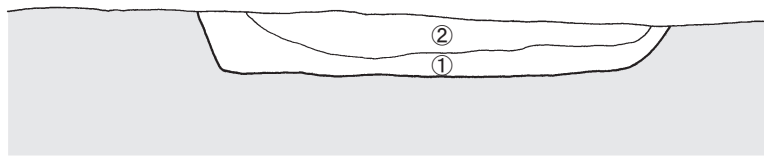
SK13



A

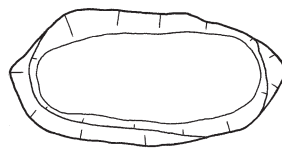
埋土

- ①黒褐色土 (10YR3/2)
5 mm以下の黄色パミスごく少量含む
1 mm以下の白色石粒ごく少量含む
- ②黒色土 (10YR2/1) 硬質・粘質
5 mm以下の黄色パミス少量含む
1 mm以下の白色石粒多く含む



A'
L=61.0m

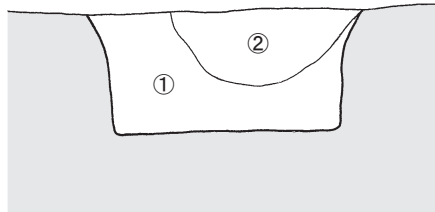
SK14



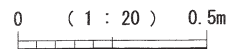
A

埋土

- ①黒褐色土 (10YR3/2) 硬質・粘質
5 mm以下の黄色パミスごく少量含む
1 mm以下の白色石粒ごく少量含む
- ②黒色土 (10YR2/1) 硬質・粘質
5 mm以下の黄色パミス少量含む
1 mm以下の白色石粒多く含む



A'
L=61.0m



第81図 土坑13号・土坑14号

土坑の北側約1.8mの所にSU 1がある。

分類：タイプIV

埋土

樹痕で切られているが、埋土は1枚と思われる。他土坑と同じ5mm以下の黄色パミスと1mm以下の白色石粒を多く含む黒色土が基本である。

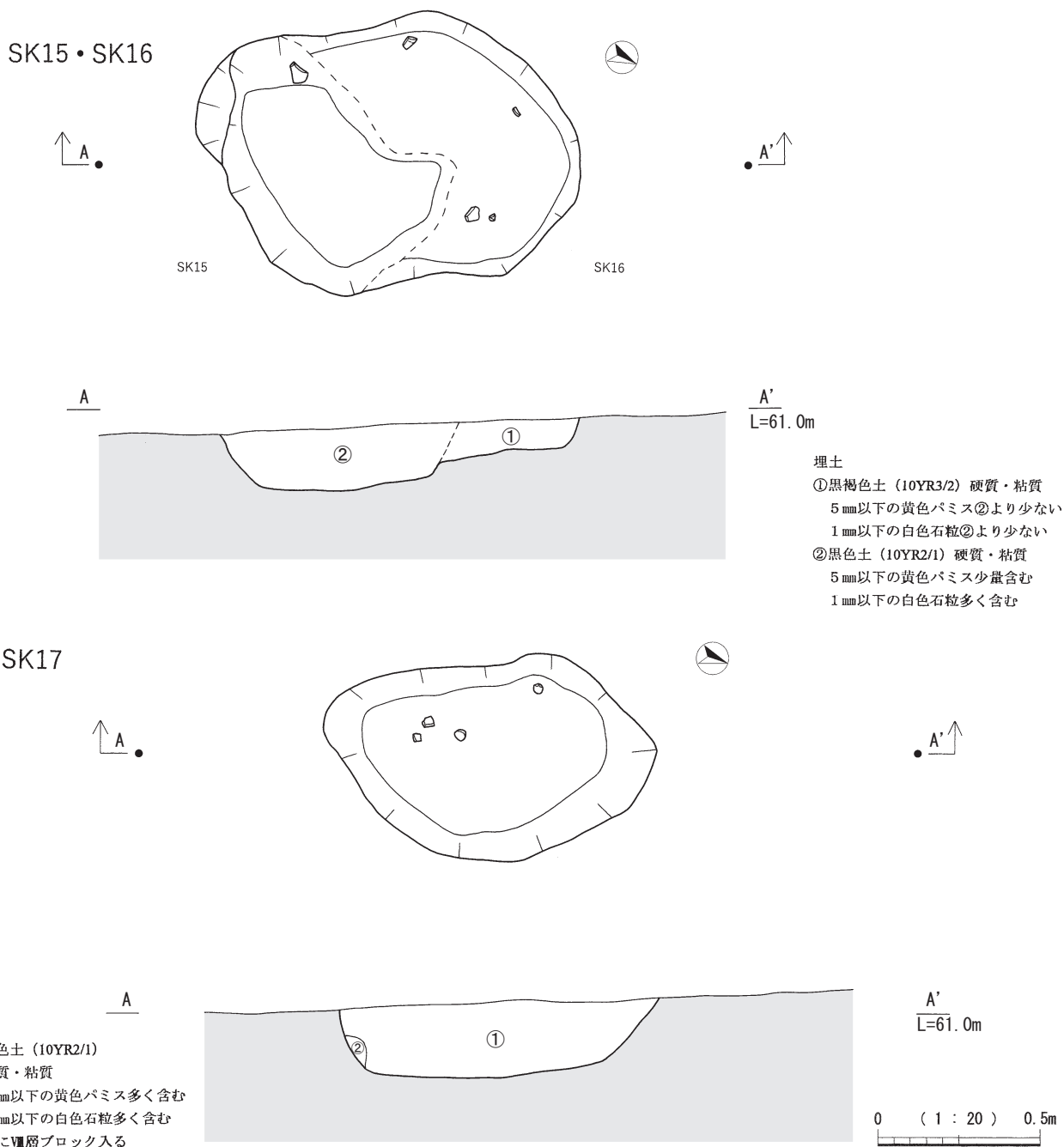
出土遺物

遺物は出土していない。

土坑12号 (第80図)

検出状況

SK12は、F-8区のⅧ層上面で検出された。長軸0.93m、短軸0.72m、深度46cm、推定面積0.53㎡を測る。土坑の南半分は柱穴状の凹みを持つ、楕円率0.77の楕円である。土坑の北側約1.20mの所にSH20がある。



第82図 土坑15号～17号

分類：タイプⅡ

埋土

埋土は1枚で、5mm以下の黄色パミスと1mm以下の白色石粒を多く含む黒色土が基本である。

遺物

遺物は出土していない。

土坑13号 (第81図)

検出状況

SK13は、F-7・8区のⅧ層上面で検出された。長軸

1.32m、短軸0.78m、深度15cm、推定面積0.81㎡を測る。楕円率0.59の楕円である。

分類：タイプⅡ

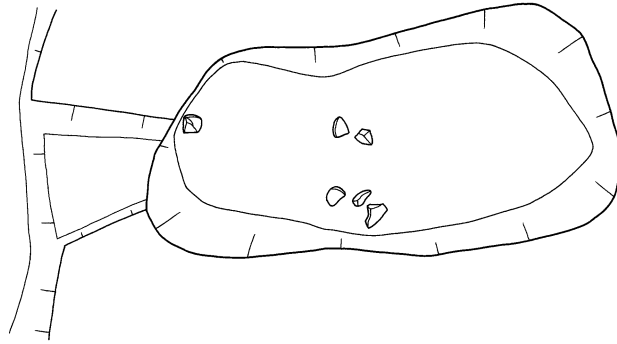
埋土

埋土は2枚で、5mm以下の黄色パミスと1mm以下の白色石粒を多く含む黒色土と、黄色パミス、白色石粒をごく少量含む層からなる。

出土遺物

遺物は出土していない。

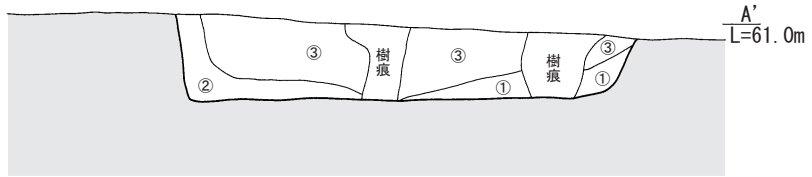
SK18



A

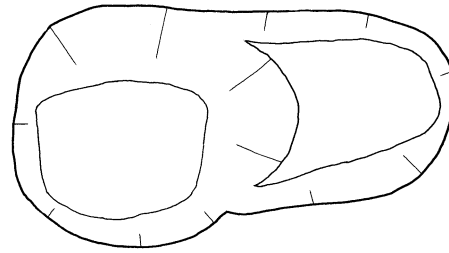
埋土

- ①黒色土 (10YR2/1) 硬質・粘質
5mm以下の黄色パミス多く含む
1mm以下の白色石粒多く含む
IX層混ざる
- ②黒色土 (10YR2/1) 硬質・粘質
5mm以下の黄色パミス多く含む
1mm以下の白色石粒多く含む
VIII層混ざる



- ③黒色土 (10YR2/1) 硬質・粘質
5mm以下の黄色パミス・1mm以下の白色石粒多く含む

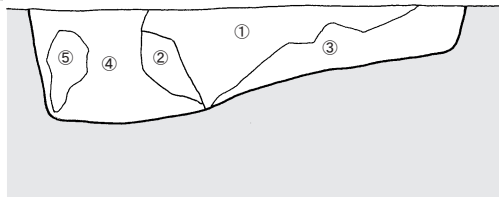
SK19



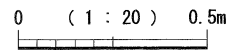
埋土

- ①黒褐色土 (10YR2/2)
粒子粗・火山灰質・しまる
白色パミス微粒含む
黄色パミス微粒わずかに含む
黄色パミス・白色パミス周囲の
包含層よりかなり少ない
- ②黒褐色土 (10YR2/2)
粒子粗・火山灰質・しまる
黄色パミス微粒極めて多く含む
白色パミス微粒極めて多く含む
- ③褐色土 (10YR4/4)
特徴は②に類似
- ④暗褐色土 (10YR3/4)
わずかに粘土質・粒子粗・しまる
白色パミス微粒多く含む
黄色パミス細粒ごくわずかに含む
- ⑤VIII層土塊

A



A'
L=62.1m



第83図 土坑18号・土坑19号

土坑14号 (第81図)

検出状況

SK14は、F-7・8区のVIII層上面で検出された。長軸0.72m、短軸0.35m、深度31cm、推定面積0.20㎡を測る。底面からほぼ垂直に立ち上がる。楕円率0.49の長楕円である。土坑の東側約0.5mの所にSK15・SK16がある。

分類：タイプI

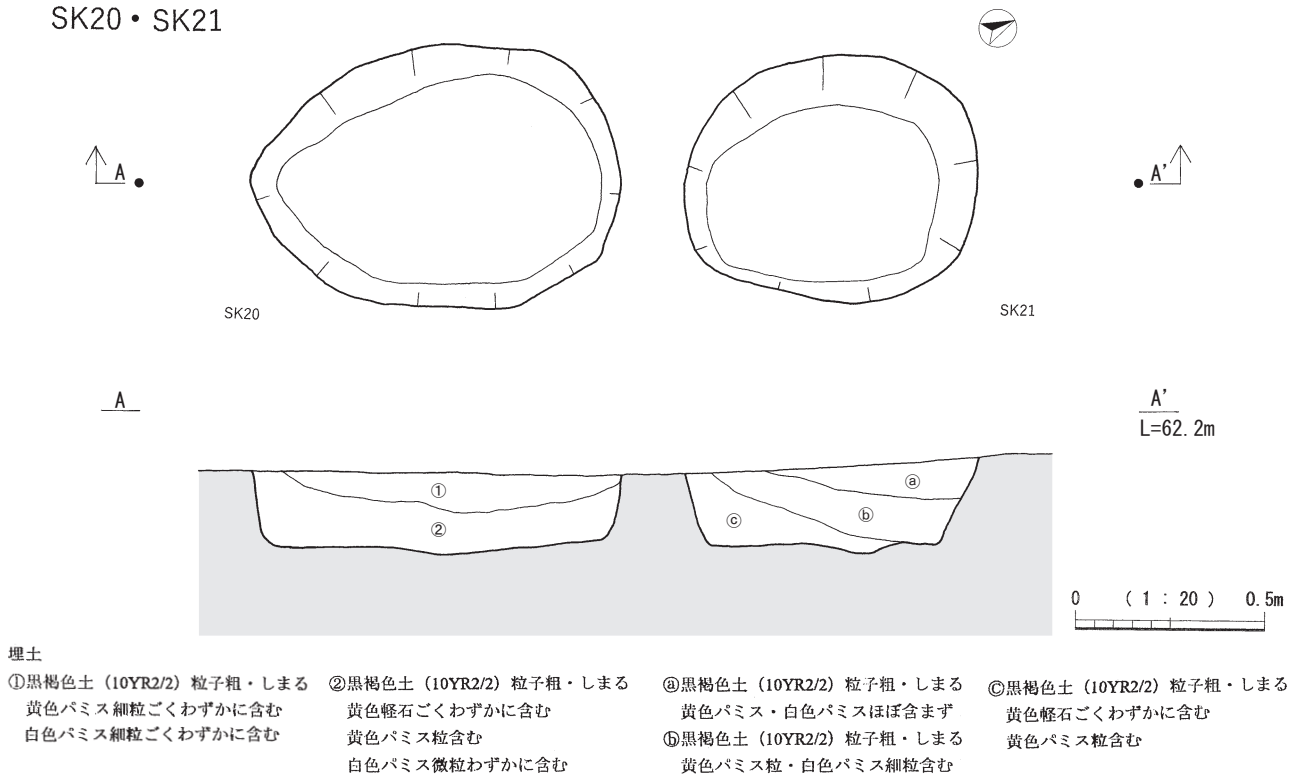
埋土

埋土は2枚で、埋土①は黄色パミス、白色石粒をごく少量含む黒褐色土である。②は5mm以下の黄色パミス少量、1mm以下の白色石粒を多く含む黒色土である。SK13～16の埋土状況に似ている。

出土遺物

遺物は出土していない。

SK20・SK21



第84図 土坑20号・土坑21号

土坑15号・16号 (第82図)

検出状況

SK15・16は、F-8区のⅧ層上面で検出された。当初平面プランから1基の土坑として調査したが、断面形状や完掘状況より、2基の土坑の切り合いと判断した。先後関係については、東側の土坑が西側の土坑を切っている状況が推察される。

東側のSK15は、長軸0.9m、短軸0.48m、深度18cm、推定面積0.34㎡を測る。楕円率0.53の長楕円である。

西側のSK16は、長軸0.40+a m、短軸0.80m、深度12cmで、推定面積及び楕円率は不明である。

分類：タイプⅣ・Ⅴ

埋土

埋土は、どちらも1枚で、東側のSK15は5mm以下の黄色パミス少量、1mm以下の白色石粒を多く含む黒色土である。西側のSK16は、黄色パミス、白色石粒を少量含む黒褐色土である。

出土遺物

遺物は出土していない。

土坑17号 (第82図)

検出状況

SK17は、F-8区のⅧ層上面で検出された。長軸1.02m、短軸0.61m、深度24cm、推定面積は、0.49㎡を測る。楕円率0.60の楕円である。土坑の東側約0.8mの所にSH21がある。

分類：タイプⅡ

埋土

埋土は1枚で、5mm以下の黄色パミスと1mm以下の白色石粒を多く含む黒色土である。樹痕のため一部Ⅷ層が入る。

出土遺物

遺物は出土していない。

土坑18号 (第83図)

検出状況

SK18は、F-8・9区のⅧ層上面で検出された。長軸1.21m、短軸0.6m、深度23cm、推定面積は、0.57㎡を測る。楕円率0.50の長楕円である。床面よりほぼ垂直に立ち上がる。土坑の北側にSH22があり、隣接していたため竪穴建物跡の壁面を利用した連穴土坑の可能性もある。

連穴土坑であれば、近くに集石もあり、集落遺跡での3点セットが揃うことになる。しかし、連穴土坑として検証ができないため、ここでは土坑として扱った。このエリアは竪穴建物跡、集石、連穴土坑が多い場所でもある。

分類：タイプ I

埋土

埋土は3枚で、埋土③の5mm以下の黄色パミス、1mm以下の白色石粒を多く含む黒色土が基本である。樹痕の影響で、Ⅷ層やⅨ層も入り込んでいる。

出土遺物

遺物は出土していない。

土坑19号（第83図）

検出状況

SK19は、F-14区のⅧ層上面で検出された。長軸1.16m、短軸0.53m、深度30cm、推定面積0.48㎡を測る。楕円率0.46の長楕円である。北側壁面は垂直に近い状況で床面へ掘り込まれ、南側へ下方傾斜し、最深部でⅨ層に達する。南側壁面では、垂直に近い状態で立ち上がり、靴底型に近い形状を呈する。そのため、小形ではあるが、連穴土坑を想定して調査を行ったが、床面に被熱痕跡やトンネル部分を見いだせず、土坑として扱った。

分類：タイプ I

埋土

埋土は5枚からなる。全体的に炭化物微粒をごくわずかに含む。

出土遺物

遺物は出土していない。

土坑20号（第84図）

検出状況

SK20は、C-19区のⅧ層上面で検出された。長軸0.98m、短軸0.67m、深度21cm、推定面積0.52㎡を測る。楕円率0.68の楕円である。隣接してSK21があり、連穴土坑の可能性も想定して調査を行ったが、トンネル部分での繋がりがなく、別々の独立した遺構と判断した。ほぼ垂直に近い状態で掘り込まれている。2m以内にSH38がある。

分類：タイプ II

埋土

埋土は2枚で、粒子の粗い黒褐色硬質土層を基本に、黄色パミス・白色パミス細粒をごくわずかに含む。

出土遺物

遺物は出土していない。

土坑21号（第84図）

検出状況

SK21は、C-19・20区のⅧ層上面でSK20とともに検出された。長軸0.77m、短軸0.64m、深度23cm、推定面積0.39㎡を測る。楕円率0.83の円形である。

分類：タイプ III

埋土

埋土は3枚であるが、SK20と同様、粒子の粗い黒褐色硬質土層を基本に、黄色パミス・白色パミス細粒をごくわずかに含む。床面付近には、Ⅸ層のしみこみがある。

出土遺物

遺物は出土していない。

第13表 土坑一覧表

挿図番号	遺構名	検出区	タイプ	長軸(m)	短軸(m)	面積(㎡)	楕円率	深度(cm)	炭化物	遺物	備考
75	SK1	E-3	IV	0.55 + a	0.46	-	-	37	-	-	SH12に掲載
76	SK2	E-3	I	0.85	0.42	0.28	0.49	13	-	-	
	SK3	E-3・4	II	0.61	0.48	0.23	0.79	31	-	-	
	SK4	D-4	III	1.16	1.05	0.96	0.91	19	-	-	
77	SK5	E-4	III	0.72	0.63	0.36	0.88	16	-	-	
	SK6	E-4	II	1.18	0.9	0.83	0.76	40	-	○	
78	SK7	E-6	III	0.75	0.65	0.38	0.87	10	-	-	
	SK8	F-6	III	1.2	1	0.94	0.83	15	-	-	
79	SK9	F-6	V	-	-	-	-	-	-	-	調査区外へ広がり詳細不明
	SK10	E-7	I	1.27	0.64	0.64	0.50	36	-	-	
80	SK11	E-7	IV	0.92 + a	0.78	-	-	22	-	-	樹痕に切られている。
	SK12	F-8	II	0.93	0.72	0.53	0.77	46	-	-	
81	SK13	F-7・8	II	1.32	0.78	0.81	0.59	15	-	-	
	SK14	F-7・8	I	0.72	0.35	0.20	0.49	31	-	-	
82	SK15	F-8	IV	0.9	0.48	0.34	0.53	18	-	-	2基と判断
	SK16	F-8	V	0.4 + a	0.8	-	-	12	-	-	
	SK17	F-8	II	1.02	0.61	0.49	0.60	24	-	-	
83	SK18	F-8・9	I	1.21	0.6	0.57	0.50	23	-	-	SH21・22に掲載
	SK19	F-14	I	1.16	0.53	0.48	0.46	30	○	-	
84	SK20	C-19	II	0.98	0.67	0.52	0.68	21	-	-	
	SK21	C-19・20	III	0.77	0.64	0.39	0.83	23	-	-	

第14表 石器観察表（土坑出土）

挿図番号	掲載番号	遺構番号	取上番号	出土区	層	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	器種	分類	石材	石材分類	備考
77	S109	SK 6	SK201-4	E-4	-	68.00	59.00	64.00	297.30	磨石	-	安山岩	安山岩B	

(4) VII層集石 (第85～108図)

集石は、VII層中で32基が検出された。

本報告書では、集石の詳細を下記のような名称を示して掲載した。

総礫数：個々の集石を構成している石器を含めた礫の総数。

長 軸：集石を構成する礫の端から端までの最大幅の長さのこと。または、掘り込み部の端から端までの長さ。

短 軸：長軸に対して直角に交わり、集石を構成する礫の端から端までの最小幅の長さのこと。または、長軸に直交する掘り込み部の端から端までの長さ。

また、集石を掘り込みの有無、散密の状況で下記のように分類した。

タイプⅠ：構成礫の明確な集中部及び掘り込み部のないもの。(散石状態)

タイプⅡ：構成礫の明確な集中部があり、掘り込み部のないもの。

タイプⅢ：構成礫の明確な集中部があり、掘り込み部を伴うもの。

タイプⅣ：構成礫の明確な集中部は無いが、掘り込み部が若干確認できるもの。

表1 タイプ別基数

タイプ	基数
I	13
II	15
III	2
IV	2

集石1号 (第86図)

分類：タイプⅡ

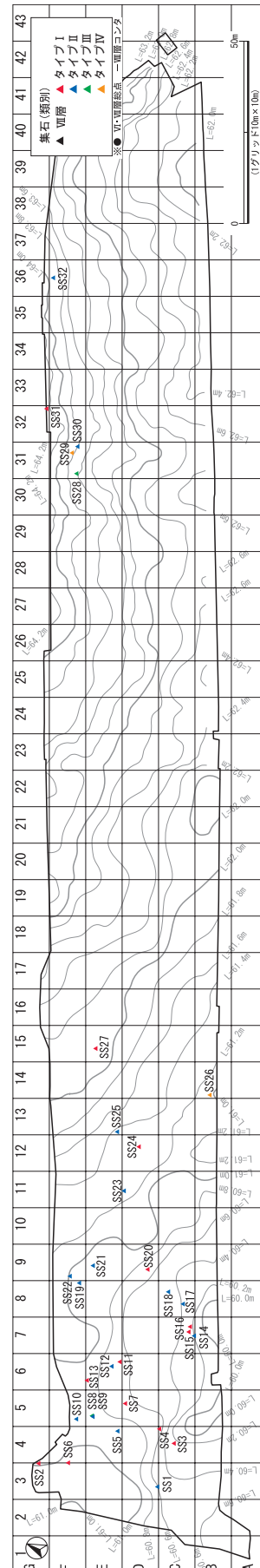
検出状況

SS1は、C・D-3区のVII層で検出された。まとまりがあるが、掘り込みはない。石を組んだような様相も窺える。礫は被熱を受け赤変しているものが多い。一部タールや煤のついた礫もある。焼土や炭化物は確認できなかった。

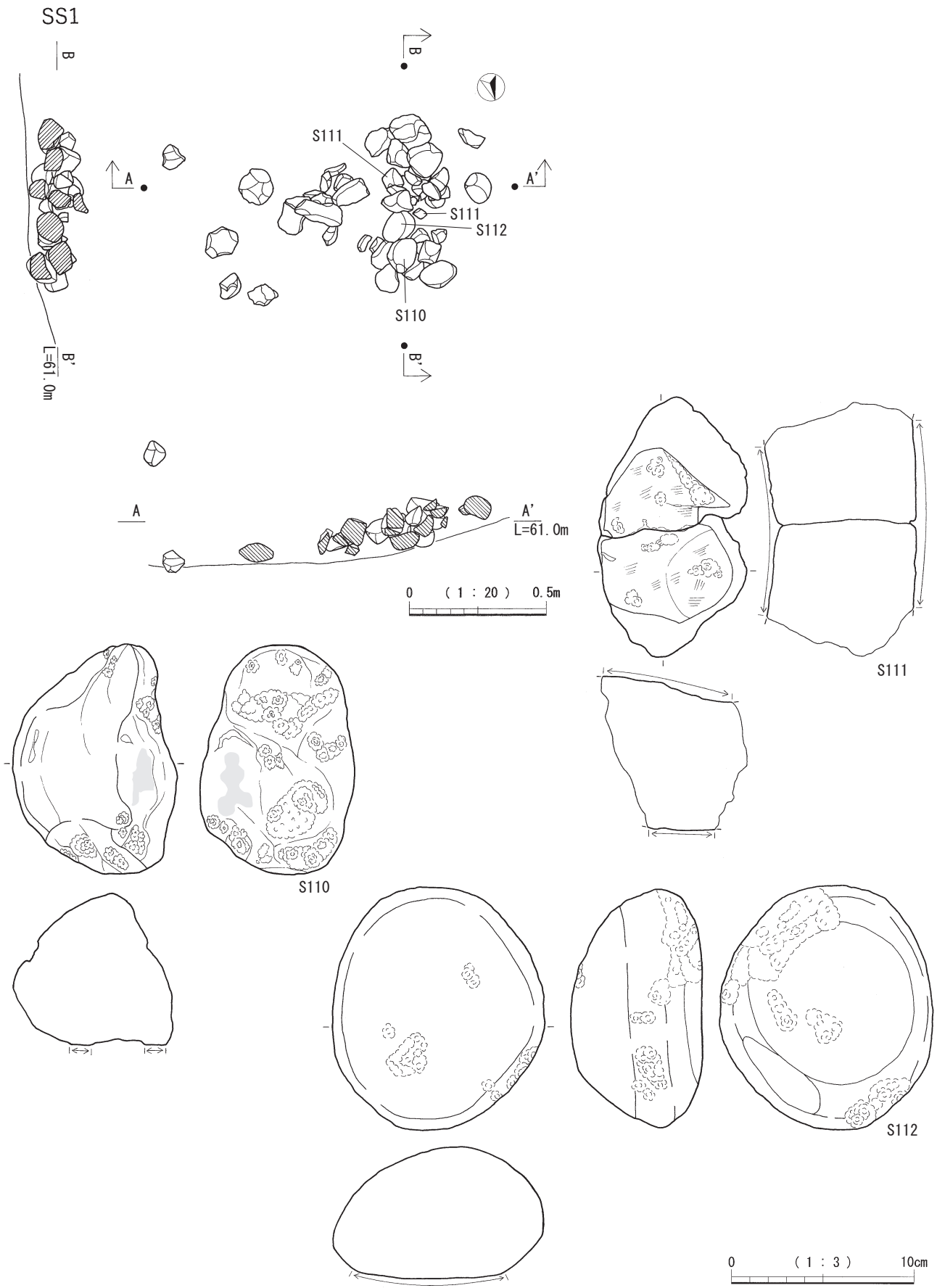
この集石の下約20cmの所から縄文早期のSH9が検出されたが、堅穴建物跡との関連はないと思われる。

規模

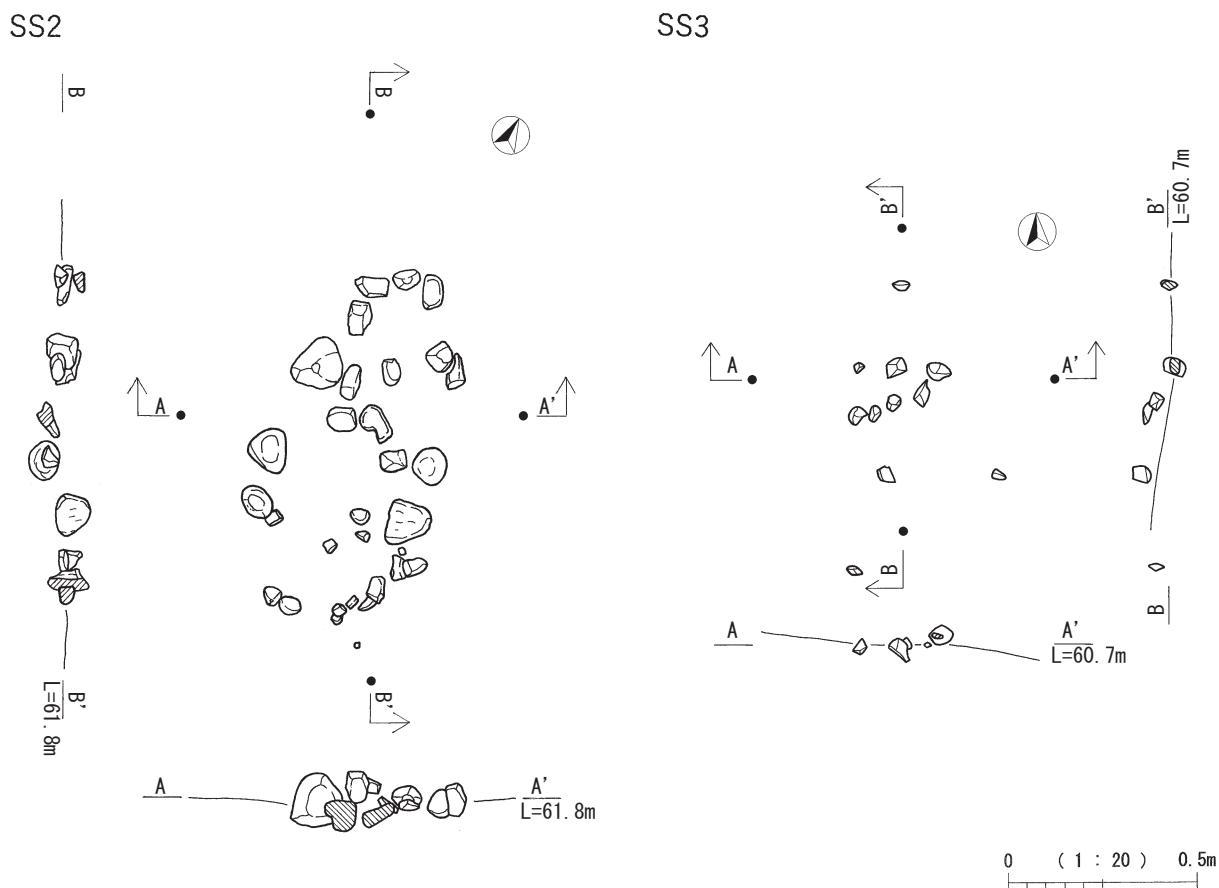
構成礫数は49個で、1個平均の重さが582gであった。10cm以上の礫が多い。礫は、長軸1.28m、短軸1.26mの範囲に広がる。



第85図 VII層集石分布図



第86図 集石1号・出土遺物



第87図 集石2号・集石3号

出土遺物

3点の石器が出土した。S110は凝灰岩製であり、風化が著しいものの敲打痕が確認できる。裏面を上にした状況で出土していて、タールが付着している状況から左側に熱源があったことが想定できる。S111は凝灰岩製の石皿片である。2点の接合資料であり、集石内の離れた位置で出土している。正面・裏面ともに磨面を有する。断面にも赤化が確認できるため、破碎したあとも集石の礫として使用したと推測できる。S112は、多孔質な安山岩製の磨敲石である。薄く赤化しており、被熱の痕跡が窺える。

集石2号 (第87図)

分類：タイプ I

検出状況

SS 2は、G-3・4区のⅧ層上面で検出された。ややまとまり感はあるが、散石とした。焼土は検出されなかった。掘り込みはなし。

規模

構成礫数は25個で、1個平均の重さが476gであった。礫は、長軸1.00m、短軸0.52mの範囲に広がる。拳大の礫が多い。

出土遺物

遺物は出土しなかった。

集石3号 (第87図)

分類：タイプ I

検出状況

SS3は、C-4区で検出された。堆積状況が悪く、Ⅵ層かⅦ層か判断しがたいが、他遺構の状況等からⅦ層段階とした。北側約2.0mの所にSH13がある。破碎した角礫が多い。

規模

構成礫数は11個で、1個平均の重さが91gであった。礫は、長軸0.78m、短軸0.41mの範囲に広がる。

出土遺物

遺物は出土しなかった。

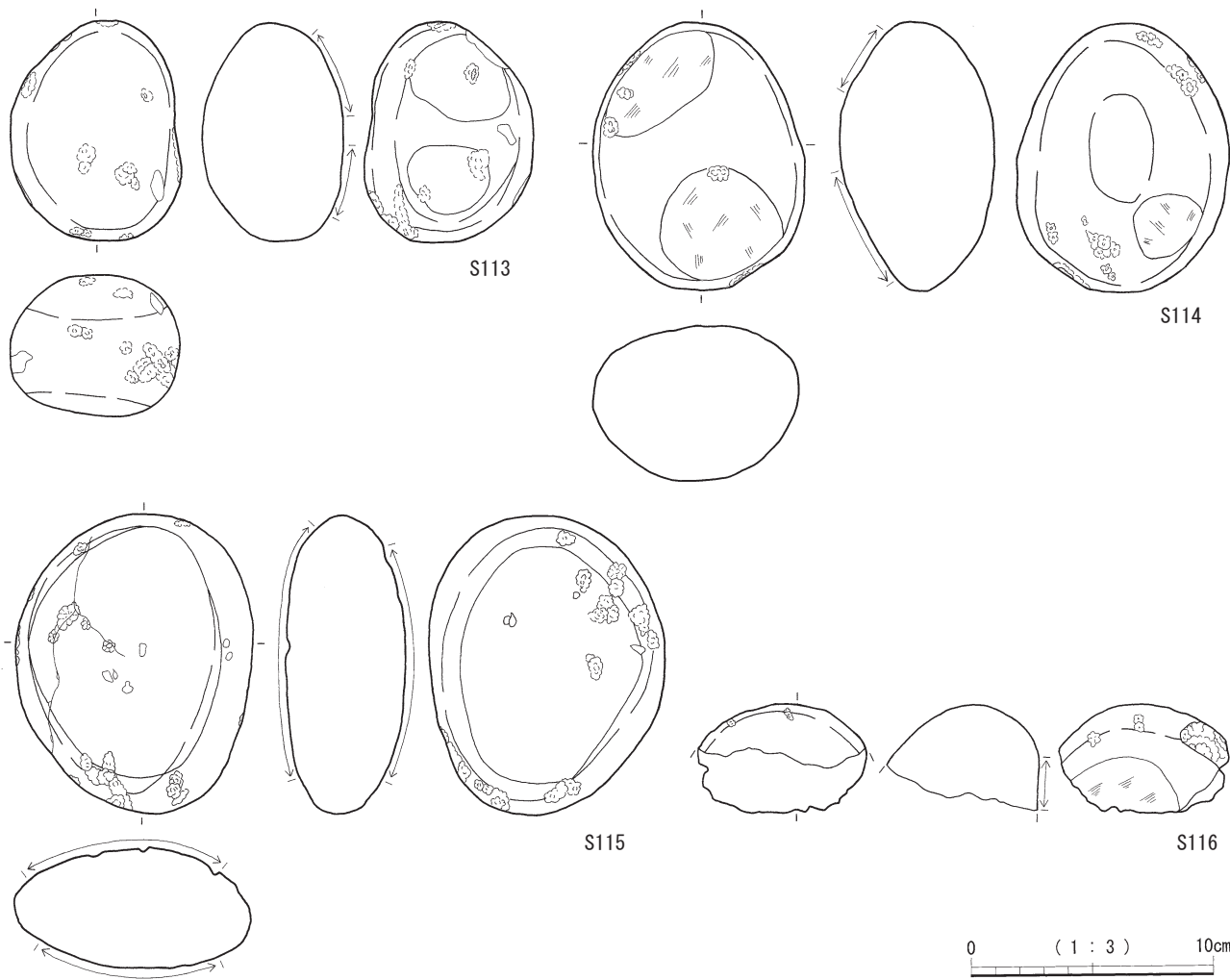
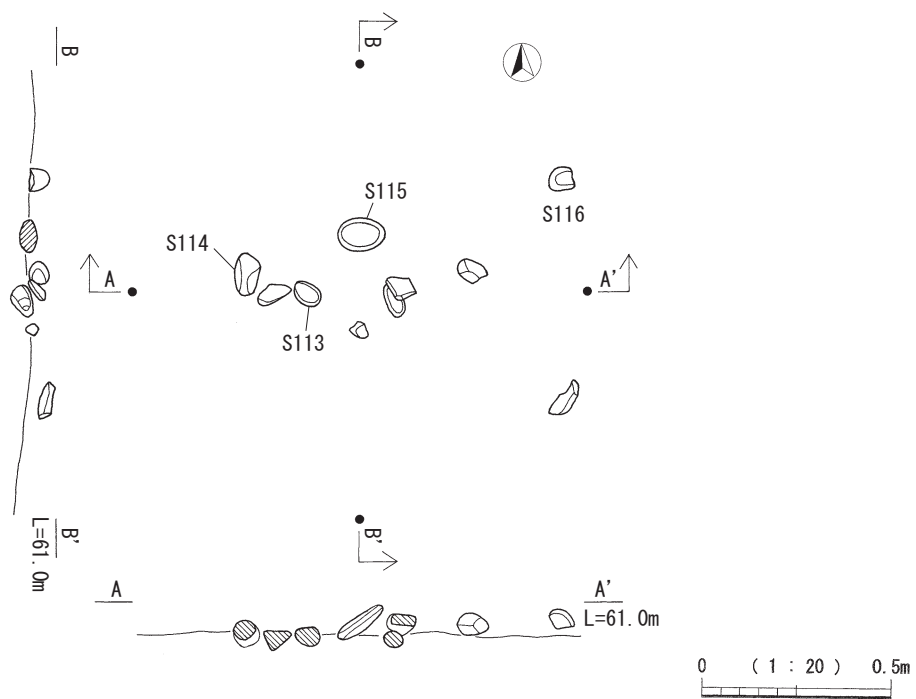
集石4号 (第88図)

分類：タイプ I

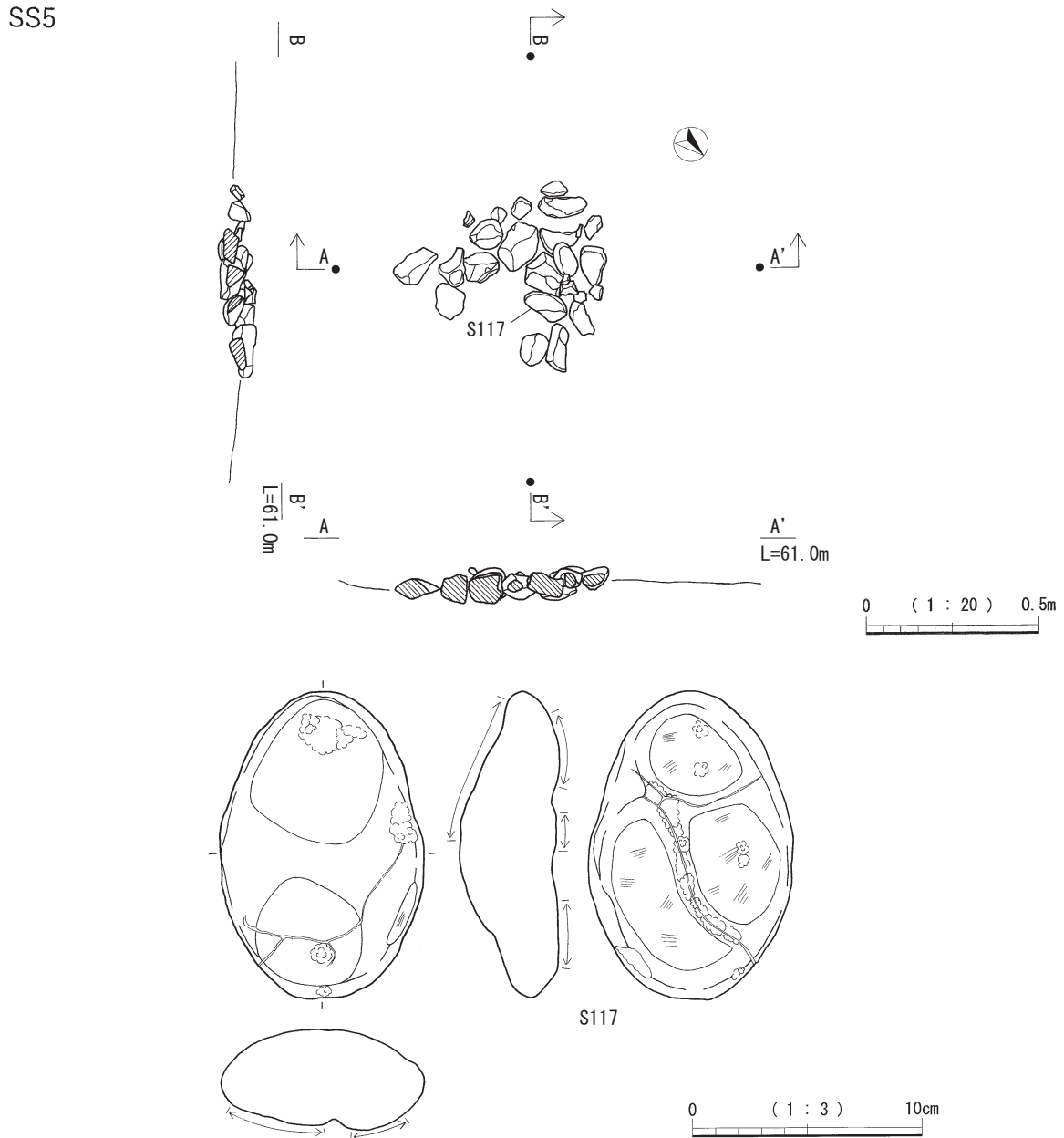
検出状況

SS 4は、C・D-4区で検出された。Ⅵ層かⅦ層か判断しがたいが、土の状況からⅦ層特有の黄色パミスや白色石粒が混入していることからⅦ層検出と判断した。掘

SS4



第88図 集石4号・出土遺物



第89図 集石5号・出土遺物

り込みは検出されなかった。南側約2.5mの所にSH13がある。

規模

構成礫数は10個で、1個平均の重さが338gであった。礫は、長軸0.92m、短軸0.65mの範囲に広がる。

出土遺物

4点の石器が出土した。S113～S116は安山岩製の磨敲石である。S113・S114は楕円形で、部分的に強く磨ることによって不定形な形状となっている。これらに比熱の痕跡は確認できない。S115は被熱により、全体的に赤化やヒビ割れが確認できる。S116は被熱破碎した磨石片である。

集石5号 (第89図)

分類：タイプII

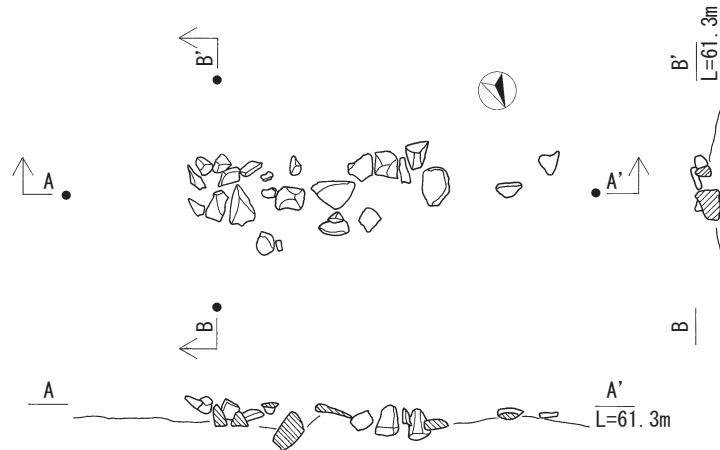
検出状況

SS 5は、E-4区のⅧ層上面で検出された。西側約1.2mの所にSH15がある。ほとんどの礫が被熱し、破碎している。タールや煤付着の礫が多い。炭化物も少量点する。

規模

構成礫数は25個で、1個平均の重さが383gであった。礫は、長軸0.62m、短軸0.56mの範囲に広がる。

SS6



SS7



第90図 集石6号・集石7号

出土遺物

1点の石器が出土した。SH17はホルンフェルス製の磨敲石である。いびつな楕円形である。裏面は良く磨られている。被熱による変色やヒビ割れが確認できる。

集石6号 (第90図)

分類：タイプ I

検出状況

SS 6 は、F-3・4 区の VII 層で検出された。SH16 と重なっているが、垂直レベルでは約 20cm の差が有る。竪穴建物跡との関連は薄いと思われる。ほとんどの礫が被熱し、破碎している。

規模

構成礫数は 23 個で、1 個平均の重さが 189g であった。礫は、長軸 0.99m、短軸 0.30m の範囲に広がる。

出土遺物

遺物は出土しなかった。

集石7号 (第90図)

分類：タイプ I

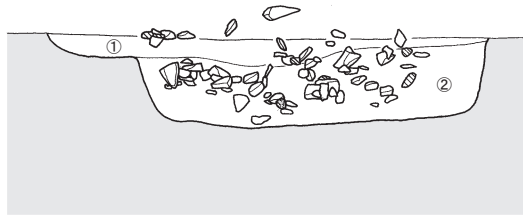
検出状況

SS 7 は、D-5 区の VII 層下面で検出された。掘り込みを検出できず、凹地に礫が流れ込んだような状況である。礫は、ほぼ被熱を受けている。周辺から、炭化物は

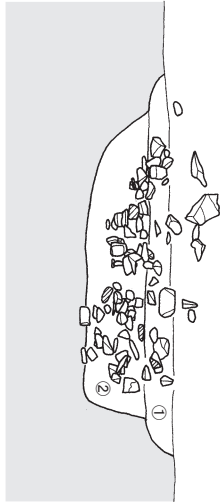
SS8

B

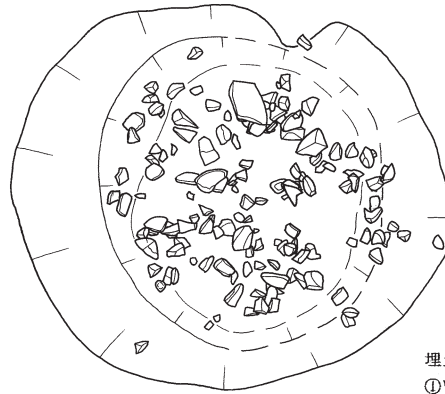
B'
L=60.9m



A
L=61.0m
L=60.9m



B



B'

埋土

① VII層とVIII層が混ざる

② 黒色土 (10YR2/1)

2 cm以下の黄色バミス・白色石粒を多く含む

SS9



C



A'
L=61.0m

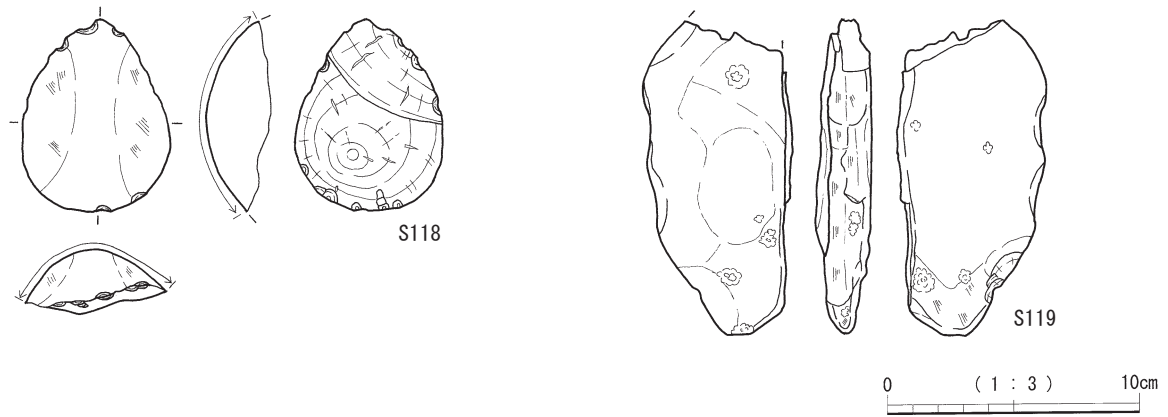
C



C'
L=61.0m

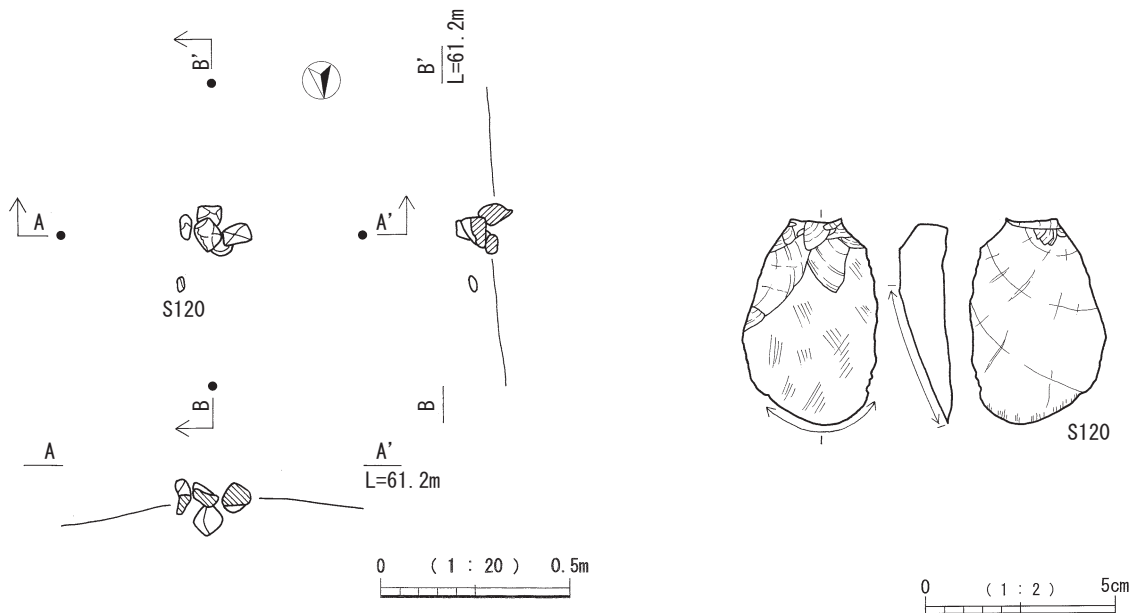
0 (1 : 20) 0.5m

第91図 集石8号・集石9号



第92図 集石9号出土遺物

SS10



第93図 集石10号・出土遺物

検出できなかった。

規模

構成礫数は13個で、1個平均の重さが213gであった。礫は、長軸0.82m、短軸0.40mの範囲に広がる。

出土遺物

遺物は出土しなかった。

集石8号(第91図)

分類：タイプⅢ

検出状況

SS 8は、E-5区のⅧ層で検出された。当初、円形の土坑として調査した。その後、まとまった礫の出土があったため、集石と判断した。SS 9が隣接し、SS 8と

のセット関係であることも考えられ、南北方向軸は一緒に設定した。

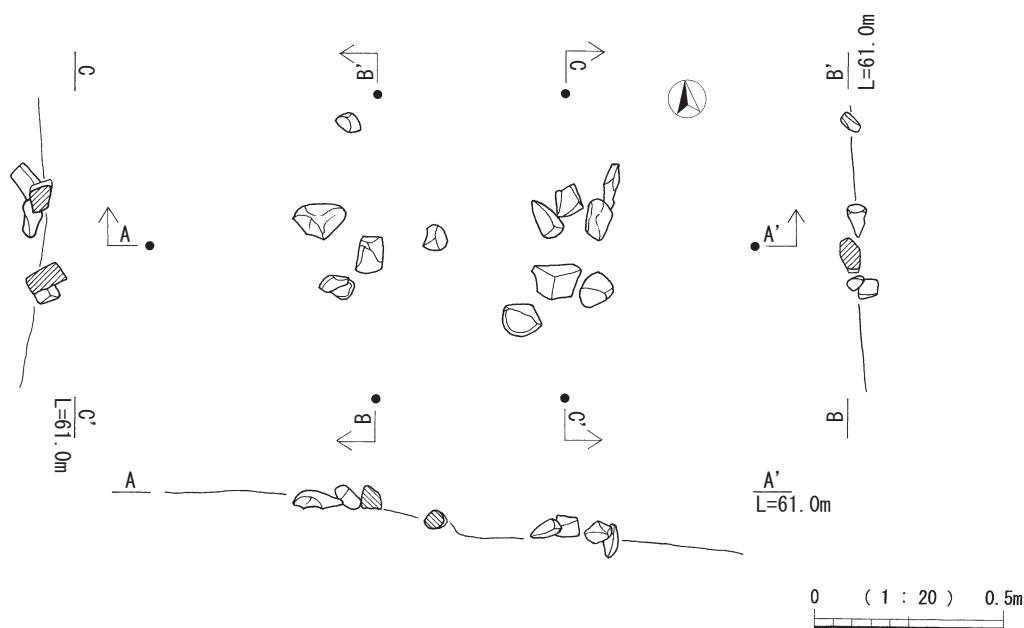
SS 8は礫を熟して使用しており、ここから掻きだされた礫がSS 9を構成した可能性もある。

埋土は、②が黒色土で軟質である。Ⅷ層が、黒色を呈した感じである。②に入る黄色パミスは、径1~2cmのものがあり、堅穴建物跡等の他遺構埋土中のものより大きい。人為的に埋められたものと推測する。土坑として利用された後、集石として再利用された可能性もある。炭化物の年代測定値は、11,170~10,786calBPを示す。

規模

構成礫数は145個で、1個平均の重さが48gであった。礫は、長軸0.89m、短軸0.85mの範囲に広がる。掘り込

SS11



第94図 集石11号

みの深さは24cmである。小さめの角礫が多い。

出土遺物

遺物は出土しなかった。

集石9号 (第91・92図)

分類：タイプII

検出状況

SS 9は、E-5区のⅦ層で検出された。被熱を受け破砕した小さな礫が集中しているが、掘り込みは検出されなかった。隣接してSS 8がある。

規模

構成礫数は56個で、1個平均の重さが56gであった。礫は、長軸1.29m、短軸0.93mの範囲に広がる。

出土遺物

2点の石器が出土した。S118・S119はホルンフェルス製である。S118は使用痕剥片であり、被熱破砕した磨石の転用品であると考えられる。下面と両側面に僅かに調整剥離が施されており、縁辺部が擦れている。S119は異形の磨敲石である。正面・裏面も滑らかに擦られている可能性があるが、擦痕は不明瞭である。右側面は明瞭に擦られている。所々に敲打痕が確認できるが、敲打具としての使用頻度は低いものと推測できる。

集石10号 (第93図)

分類：タイプII

検出状況

SS10は、F-5区のⅦ層で検出された。当初、石器の

集積かと思われたが、石器ではなく個数も少ないことから、集石として扱った。ほとんどが被熱しているが、焼土痕等は検出されなかった。掘り込みはなし。

規模

構成礫数は6個で、1個平均の重さが311gであった。礫は、長軸0.22m、短軸0.20mの範囲に広がっている。

出土遺物

1点の石器が出土した。S120は礫の集中部から僅かに離れた位置で出土した。ホルンフェルス製の使用痕剥片である。下面先端部は特に裏面が擦れており、上面は打ち搔いてあり、意図的に持ち手を形成している可能性もある。

集石11号 (第94図)

分類：タイプI

検出状況

SS11は、E-6区のⅦ層で検出された。礫は10cm程度の物がほとんどで、被熱している。焼土痕等は検出されなかった。掘り込みはなし。北側約1.5mの所にSK 7がある。

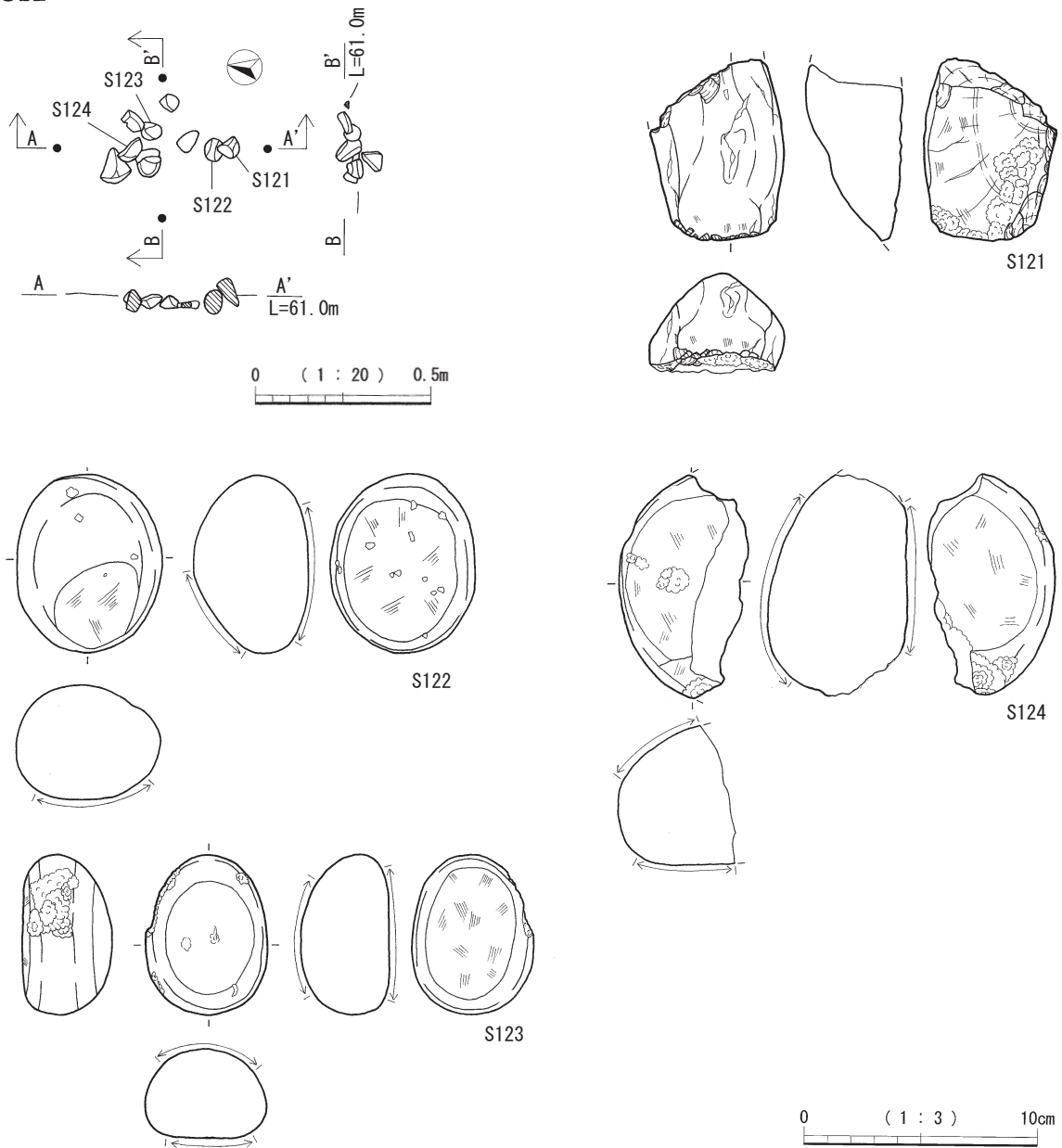
規模

構成礫数は13個で、1個平均の重さが417gであった。礫は、長軸0.87m、短軸0.58mの範囲にまとまっている。

出土遺物

遺物は出土しなかった。

SS12



第95図 集石12号・出土遺物

集石12号 (第95図)

分類：タイプⅡ

検出状況

SS12は、E-6区のⅦ層で検出された。5cm程度の円礫が多く、被熱している。ほとんどが安山岩であるが、花崗岩も1個使われている。掘り込みはなし。東側約1.5mの所にSK 7がある。

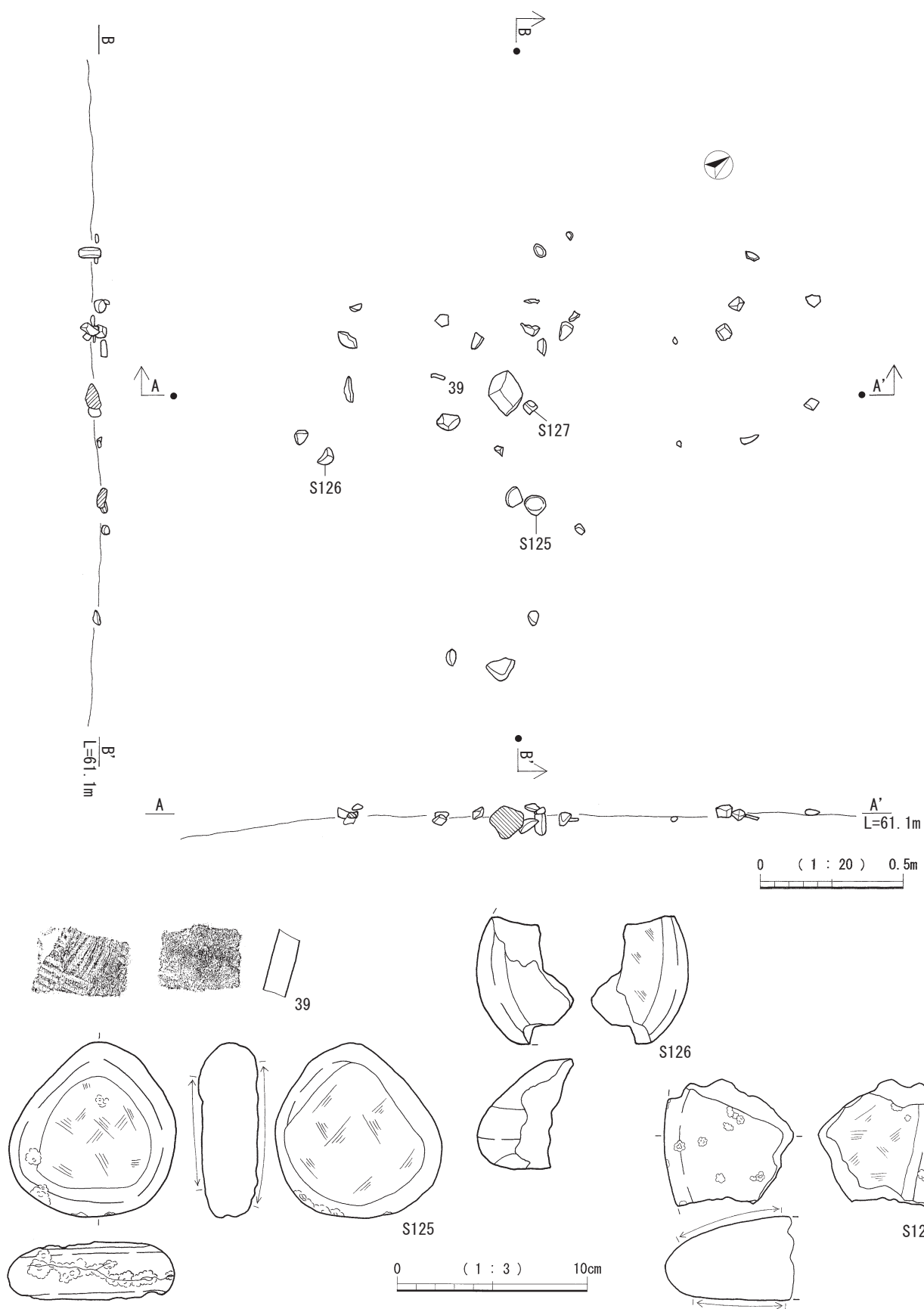
規模

構成礫数は10個で、1個平均の重さが237gであった。礫は、長軸0.39m、短軸0.25mの範囲にまとまっている。

出土遺物

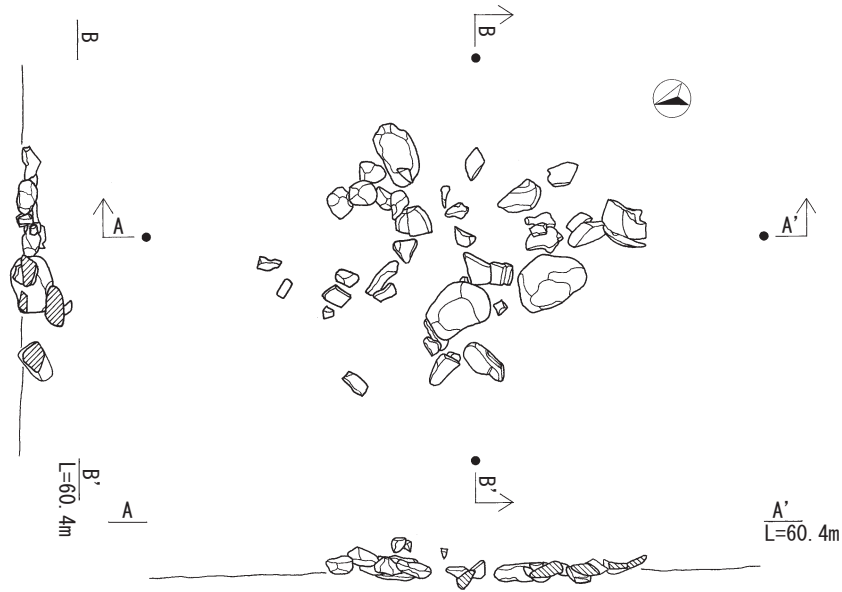
4点の石器が出土した。S121はホルンフェルス製の礫器である。裏面には剥離面を残し、下面と左側面に調整剥離が施される。先端部は敲打により潰れており、石斧の様に使用したものと推測できる。S122～S124は安山岩製である。S122は小型の磨石である。使用頻度はごく少ない。S123は小型の磨敲石であり、特に裏面がよく使用されている。S124は被熱破碎した磨敲石片である。裏面はよく使用されている。

SS13

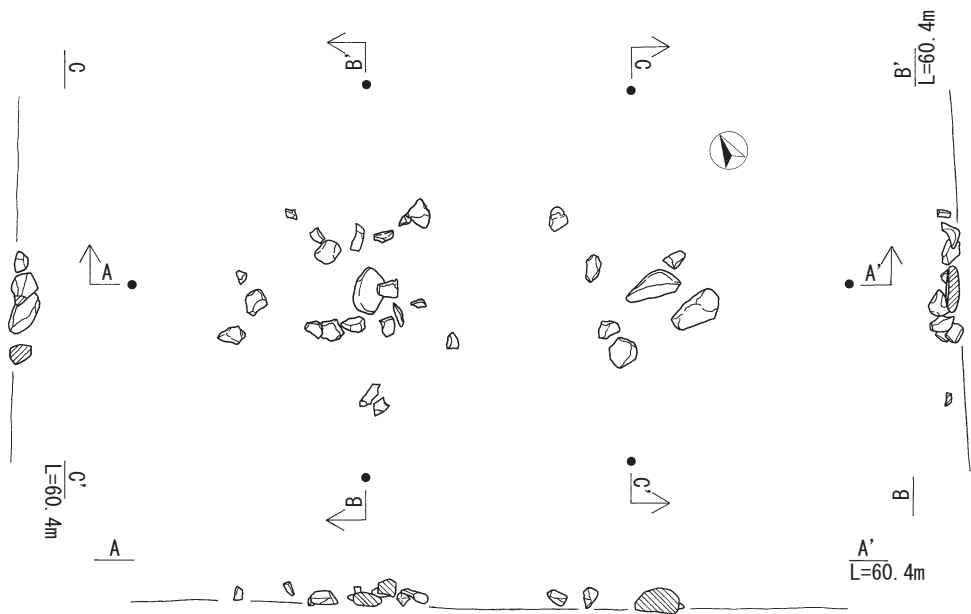


第96図 集石13号・出土遺物

SS14



SS15



0 (1 : 20) 0.5m

第97図 集石14号・集石15号

集石13号 (第96図)

分類：タイプ I

検出状況

SS13は、E・F-6区のⅦ層で検出された。焼土痕等は検出されなかった。掘り込みはなし。

規模

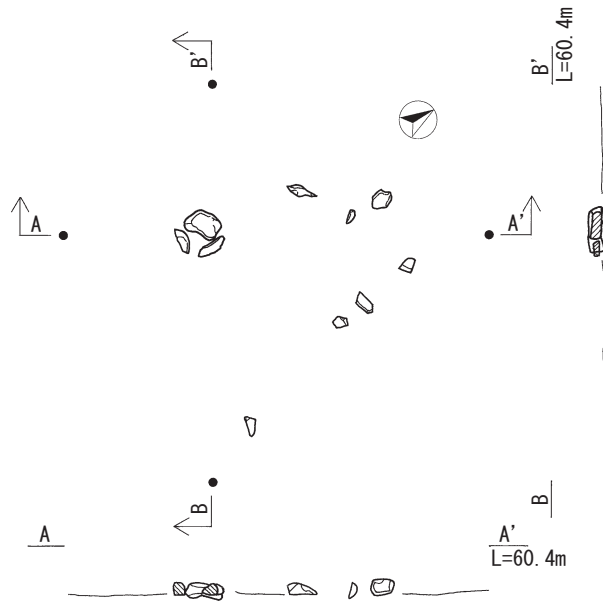
構成礫数は33個で、1個平均の重さが213gであった。

礫は、長軸1.83m、短軸1.57mの範囲にまとまっている。

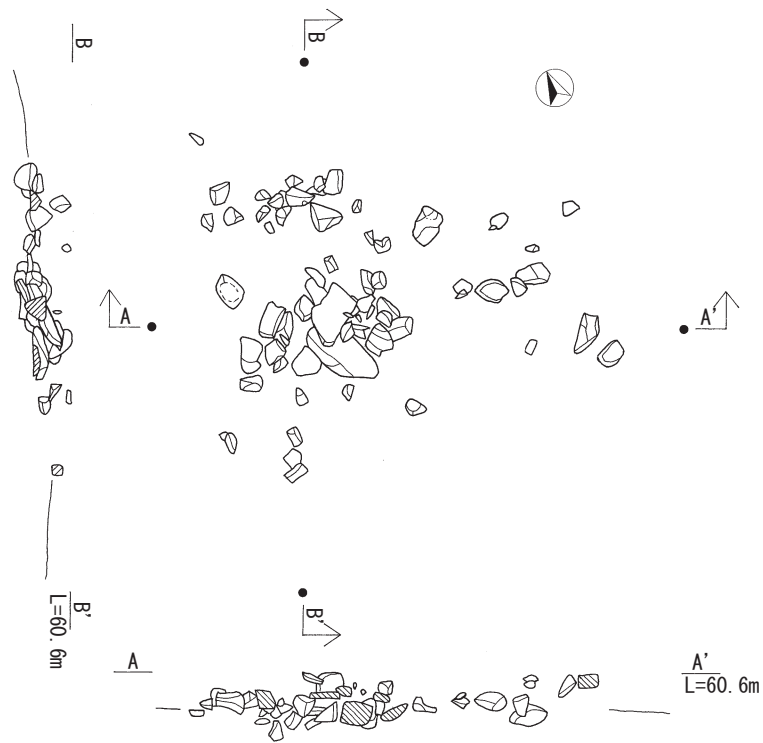
出土遺物

遺構内より土器1点、石器3点が出土した。39は、綾杉状の貝殻条痕文を施す、やや厚めの器壁を呈する胴部である。Ⅴ類に分類される。S125～S127は安山岩製である。S125・S126は多孔質の石材である。S125は磨敲石で歪な形状の平坦な礫を使用している。下面には深い

SS16



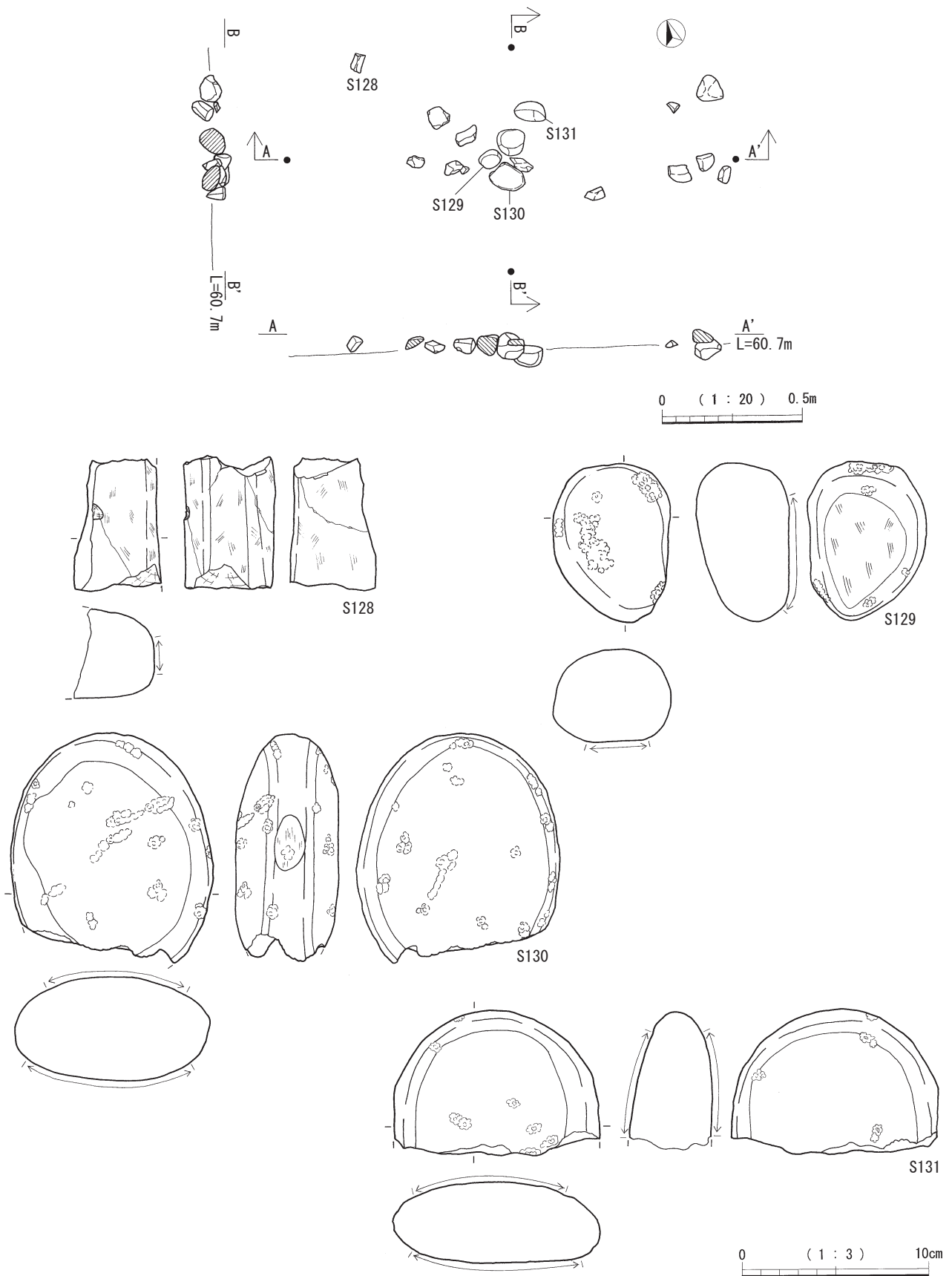
SS17



0 (1 : 20) 0.5m

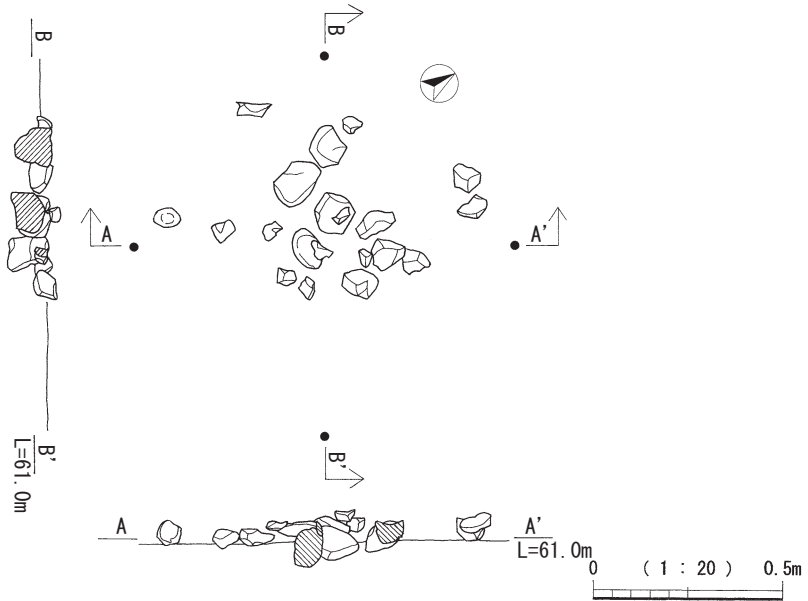
第98図 集石16号・集石17号

SS18



第99図 集石18号・出土遺物

SS19



第100図 集石19号

敲打痕が残る。被熱の痕跡は確認できない。S126・S127は被熱破碎しており、S126は磨石片、S127は磨敲石片である。

集石14号 (第97図)

分類：タイプII

検出状況

SS14は、C-7区のVII層で検出された。平坦面に被熱を受けた礫で構成される。幼児の頭大の礫(砂岩)を用いている特徴がある。他の礫は、被熱のためか割れが目立つ。焼土痕等は検出されなかった。掘り込みはなし。

規模

構成礫数は41個で、1個平均の重さが312gであった。礫は、長軸1.03m、短軸0.72mの範囲にまとまっている。

出土遺物

遺物は出土しなかった。

集石15号 (第97図)

分類：タイプI

検出状況

SS15は、C-7区のVII層で検出された。南東側へ緩やかに傾斜する所に集石があり、東側の散礫は、ばらけたものと思われる。ほとんどが被熱し破碎している。焼土痕等は検出されなかった。掘り込みはなし。南と北東にSS14・SS16が近接する。

規模

構成礫数は28個で、1個平均の重さが161gであった。礫は、長軸1.33m、短軸0.57mの範囲に広がっている。

出土遺物

遺物は出土しなかった。

集石16号 (第98図)

分類：タイプI

検出状況

SS16は、C-7区のVII層で検出された。ほぼ平坦面に散らばり、被熱を受けた小礫で構成されている。SS15の端から約75cmの所にあり、SS15がばらけた可能性もある。焼土痕等は検出されなかった。掘り込みはなし。

規模

構成礫数は10個で、1個平均の重さが81gであった。礫は、長軸0.69m、短軸0.65mの範囲に広がっている。

出土遺物

遺物は出土しなかった。

集石17号 (第98図)

分類：タイプII

検出状況

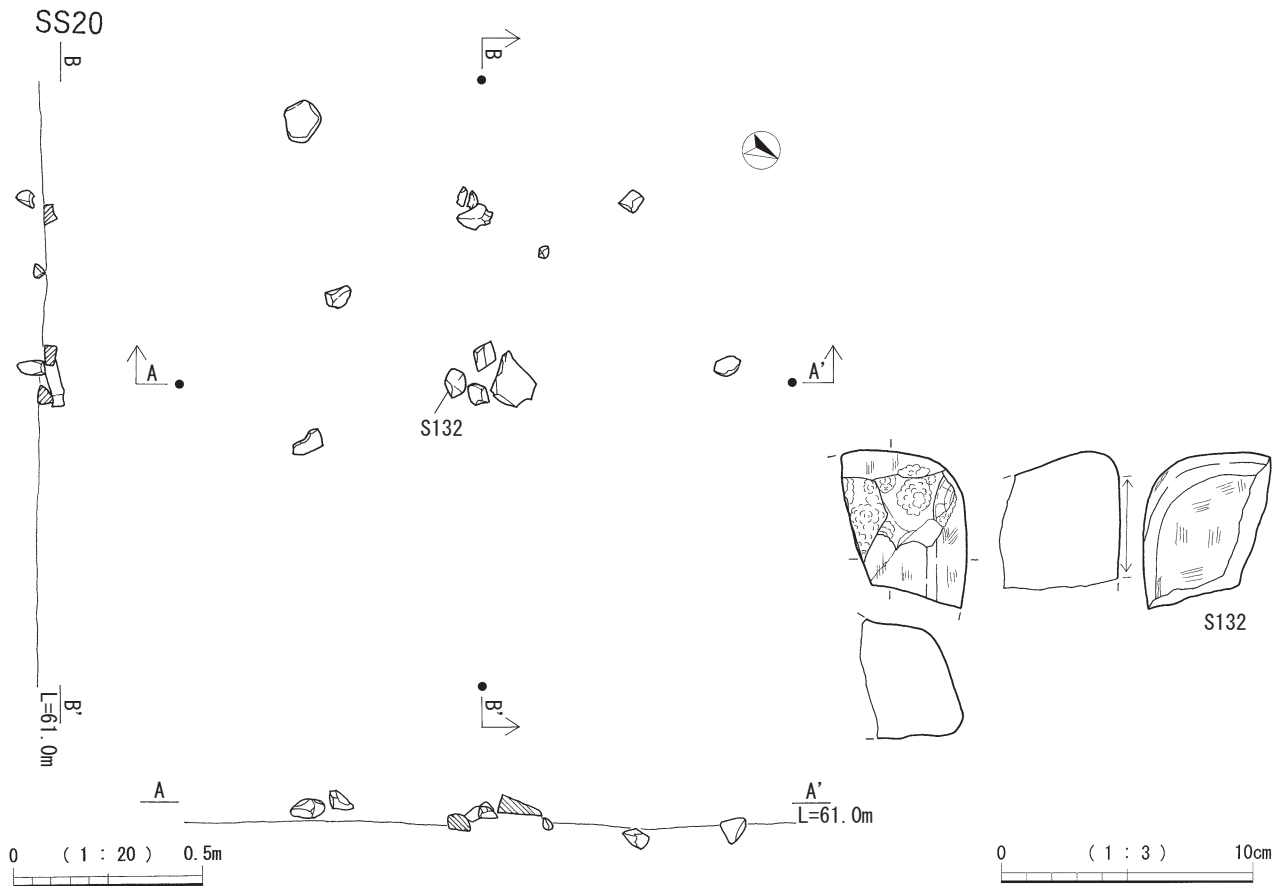
SS17は、C-8区のVIII層上面で検出された。中心部と思われる箇所に、約25cm大と約15cm大の大きな礫がある。大きな礫を囲むように拳大の礫が広がる。焼土痕等は検出されなかった。掘り込みはなし。

規模

構成礫数は67個で、1個平均の重さが149gであった。礫は、長軸1.16m、短軸0.95mの範囲に広がっている。

出土遺物

遺物は出土しなかった。



第101図 集石20号・出土遺物

集石18号 (第99図)

分類：タイプⅡ

検出状況

SS18は、C-8区のⅦ層で検出された。拳より大きめの礫を中心に、5cm大の礫が広がる。全部の石が被熱している。焼土痕等は検出されなかった。掘り込みはなし。

規模

構成礫数は17個で、1個平均の重さが314gであった。礫は、長軸1.16m、短軸0.45mの範囲に広がっている。

出土遺物

石器4点が出土した。S128は、礫の集中部から約20cm離れた位置で出土した。ホルンフェルス製の磨石である。被熱による赤化が確認できる。礫器を人為的に割って集石の構成礫として転用している可能性もある。S129～S131は安山岩製の磨敲石である。すべてに被熱の痕跡が確認できる。S131は人為的に半裁した可能性もある。

集石19号 (第100図)

分類：タイプⅡ

検出状況

SS19は、F-8区のⅦ層で検出された。拳大以上の大きめの礫が多く使われている。ほとんどが被熱している。隣接してSH26がある。焼土痕等は検出されなかった。掘り込みはなし。

規模

構成礫数は20個で、1個平均の重さが390gであった。礫は、長軸0.88m、短軸0.52mの範囲に広がっている。

出土遺物

遺物は出土しなかった。

集石20号 (第101図)

分類：タイプⅠ

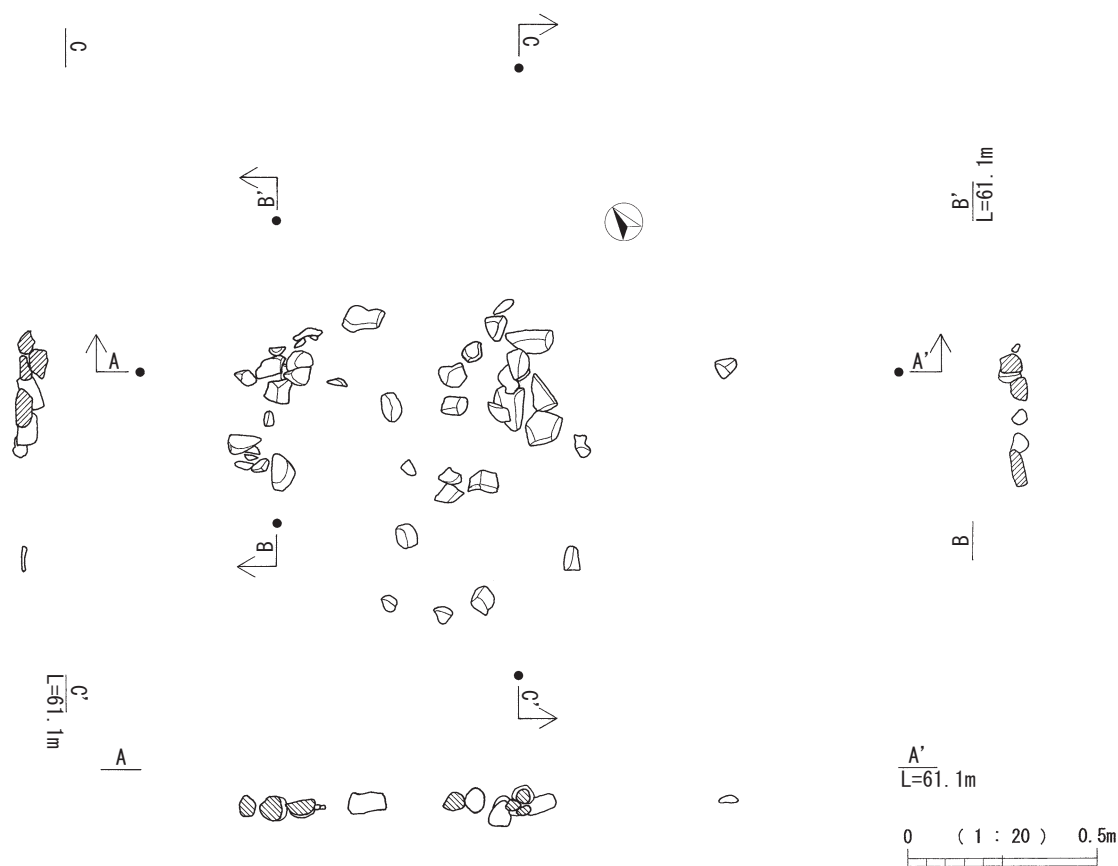
検出状況

SS20は、D-9区のⅦa層で検出された。角礫が多く、ほとんどが被熱している。焼土痕等は検出されなかった。掘り込みはなし。

規模

構成礫数は13個で、1個平均の重さが241gであった。礫は、長軸1.20m、短軸0.95mの範囲に広がっている。

SS21



第102図 集石21号

出土遺物

石器1点が出土した。S132は砂岩製の磨敲石片である。角の部分は敲打に使用されている。被熱により薄く赤化している。残存部が少なく全体形は不明ではあるが、石皿の破片である可能性もある。

集石21号 (第102図)

分類：タイプII

検出状況

SS21は、E-9区のVII層で検出された。拳大の礫を中心とした箇所と拳大のまとまり2ヶ所から成る。ほとんどの礫が被熱している。北東側約2mの所にSH25がある。焼土痕等は検出されなかった。掘り込みはなし。

規模

構成礫数は44個で、1個平均の重さが147gであった。礫は、長軸1.35m、短軸0.85mの範囲に広がっている。

出土遺物

遺物は出土しなかった。

集石22号 (第103図)

分類：タイプII

検出状況

SS22は、F-9区のVII層で検出された。拳大の礫が多く使われている。4割近くが被熱している。焼土痕等は検出されなかった。掘り込みはなし。SH26に隣接している。

規模

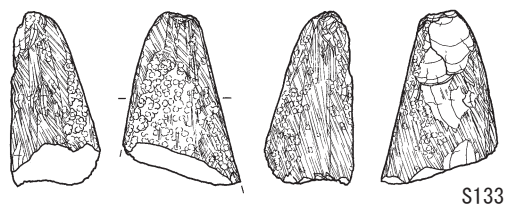
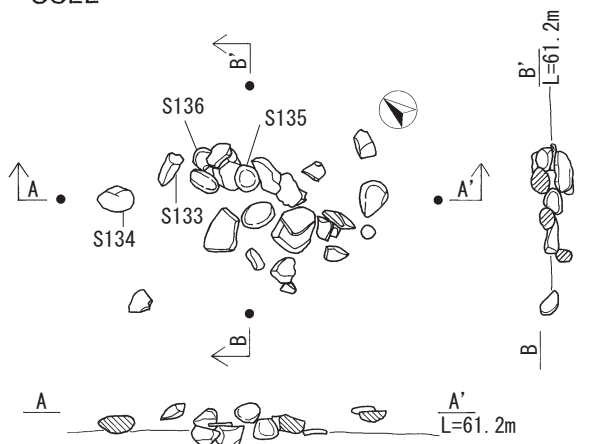
構成礫数は17個で、1個平均の重さが214gであった。礫は、長軸0.75m、短軸0.48mの範囲に広がっている。

出土遺物

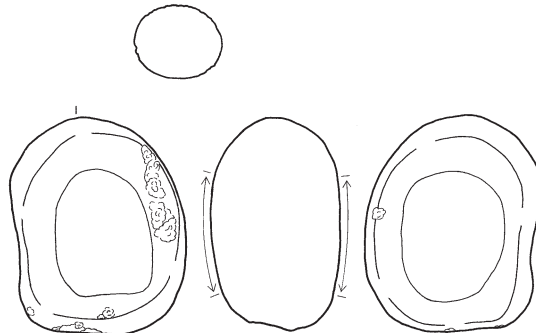
石器4点が出土した。S133はホルンフェルス製の磨製石斧の基部であり、厚みをもつ大型のタイプで、断面系に丸みがあるものである。本遺跡ではI-a類に分類している。敲打により形を整えた痕跡を残す。S134～S136は安山岩製の磨敲石である。S134は不定形な楕円状で、S135は球状で下面をよく敲打している。S136は人為的に半裁している可能性のあるもので、使用頻度は少ないものと考えられる。

すべて被熱の痕跡は確認できない。

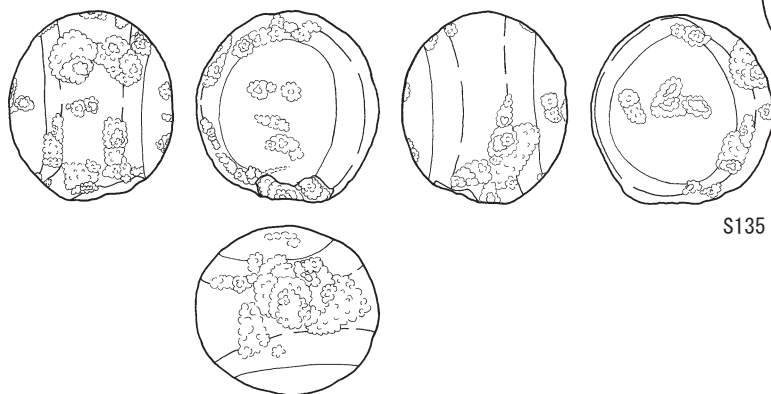
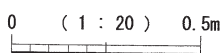
SS22



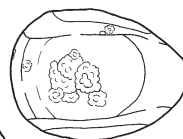
S133



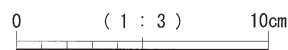
S134



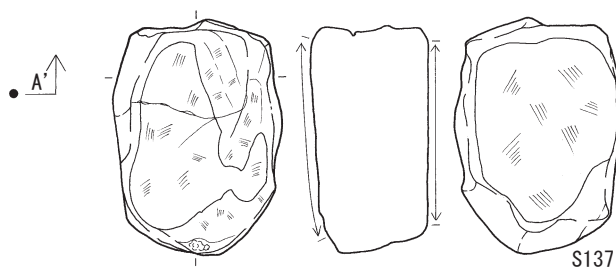
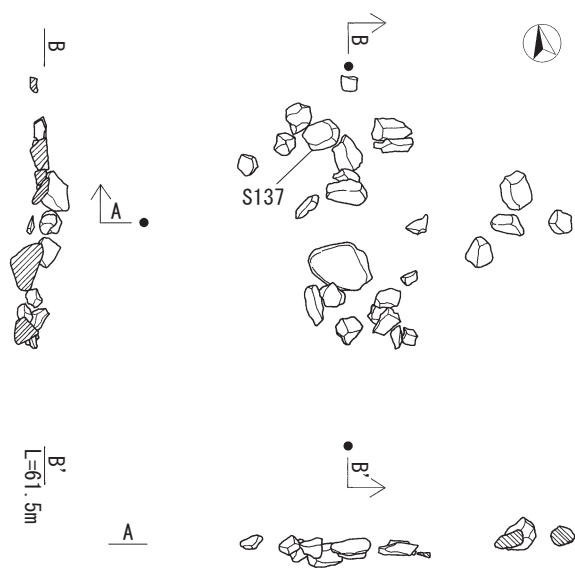
S135



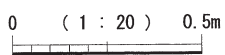
S136



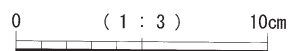
SS23



S137



A' L=61.5m

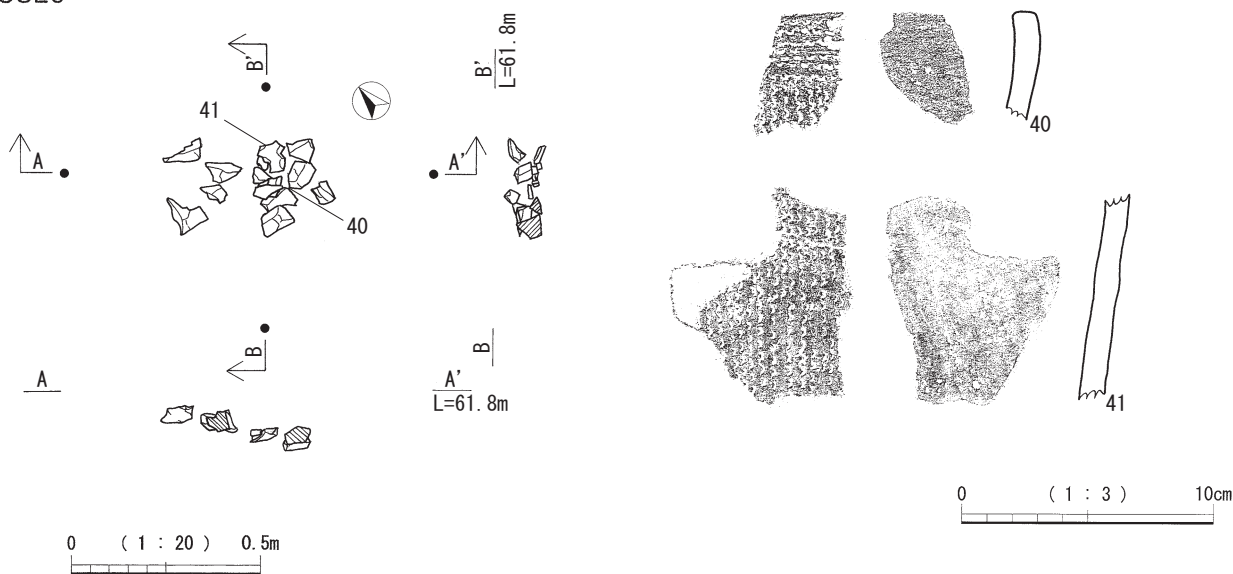


第103図 集石22号・出土遺物・集石23号・出土遺物

SS24



SS25



第104図 集石24号・集石25号・出土遺物

集石23号 (第103図)

分類: タイプII

検出状況

SS23は、D-11区のVIIb層で検出された。礫のまとまりが2箇所あるが、密集はしていない。焼土痕等は検出されなかった。掘り込みはなし。

規模

構成礫数は26個で、1個平均の重さが242gであった。

礫は、長軸0.89m、短軸0.72mの範囲に広がる。

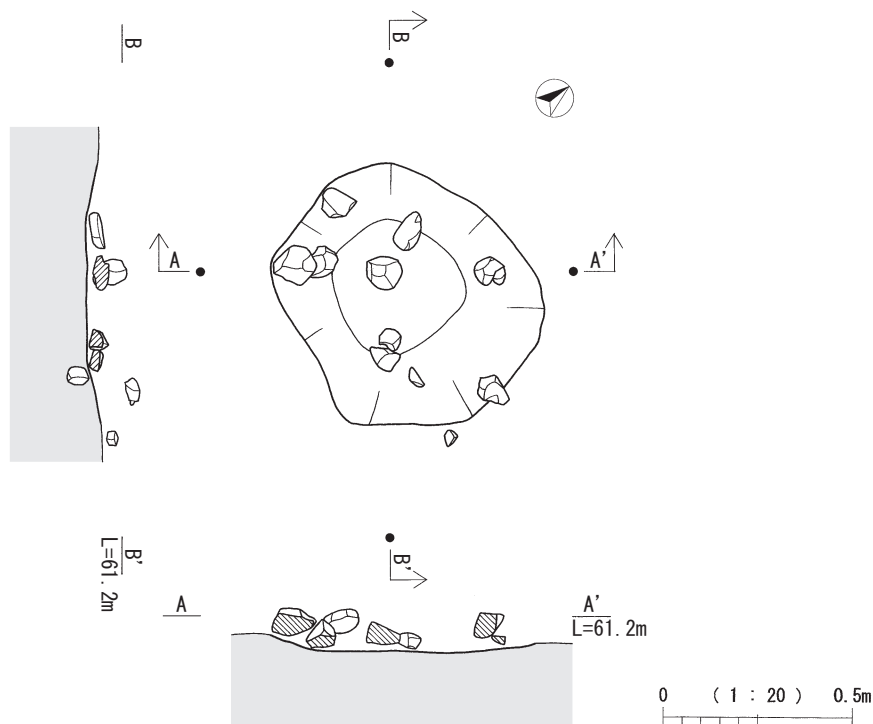
出土遺物

石器1点が出土した。S137は安山岩製で、正面・裏面に磨面を持つ石皿片であり風化が著しい。右側面は被熱により薄く変色する。

集石24号 (第104図)

分類: タイプI

SS26



第105図 集石26号

検出状況

SS24は、D-12区のⅦa層で検出された。中央部に礫はなく、環状に配置した様相が窺える。礫の重なりもほとんどなく、散石タイプとした。礫は被熱しているが、焼土痕等は検出されなかった。掘り込みはなし。北側のひとかたまりも一連の集石として図化した。

規模

構成礫数は27個で、1個平均の重さが202gであった。礫は、長軸1.39m、短軸0.94mの範囲に広がる。

出土遺物

遺物は出土しなかった。

集石25号 (第104図)

分類：タイプⅡ

検出状況

SS25は、E-13区のⅦa層上面で検出された。5cm大の角礫が集中している。被熱し赤みを帯びている。焼土痕等は検出されなかった。炭化物はごくわずかあるが、掘り込みはなし。

規模

構成礫数は9個で、1個平均の重さが199gであった。礫は、長軸0.40m、短軸0.25mの範囲に広がる。

出土遺物

遺構内より土器2点が出土した。40・41は同一個体と

思われる。口縁部は若干肥厚するとともにやや内湾する器形で、口縁部下には縦位の貝殻刺突文が密に施される。Ⅶb類に分類される。

集石26号 (第105図)

分類：タイプⅣ

検出状況

SS26は、B-14区のⅦb層掘り下げ中に発見された。礫は散石状態であるが、浅い掘り込みがある。全ての礫に被熱による赤変が明瞭に確認でき、礫も破碎している。周囲の土に炭化物、赤変の痕跡は確認できなかった。

規模

構成礫数は12個で、1個平均の重さが338gであった。礫は、長軸0.71m、短軸0.68mの範囲に広がる。

出土遺物

遺物は出土しなかった。

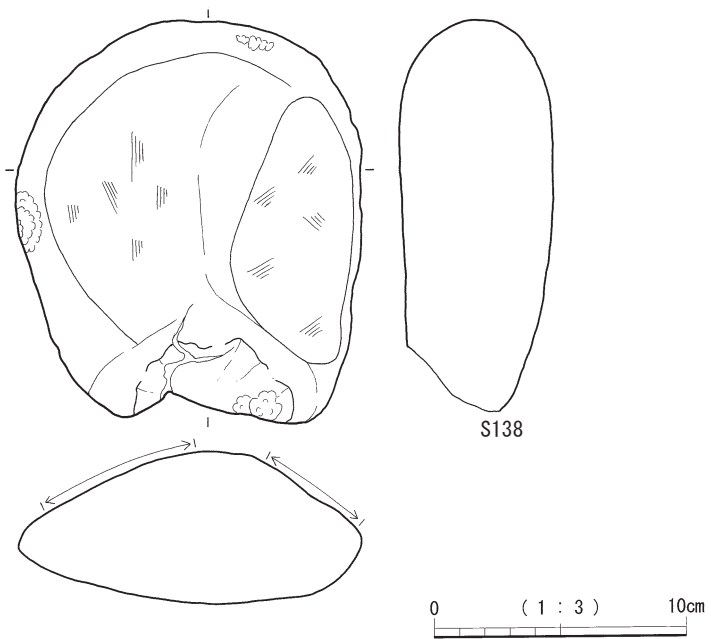
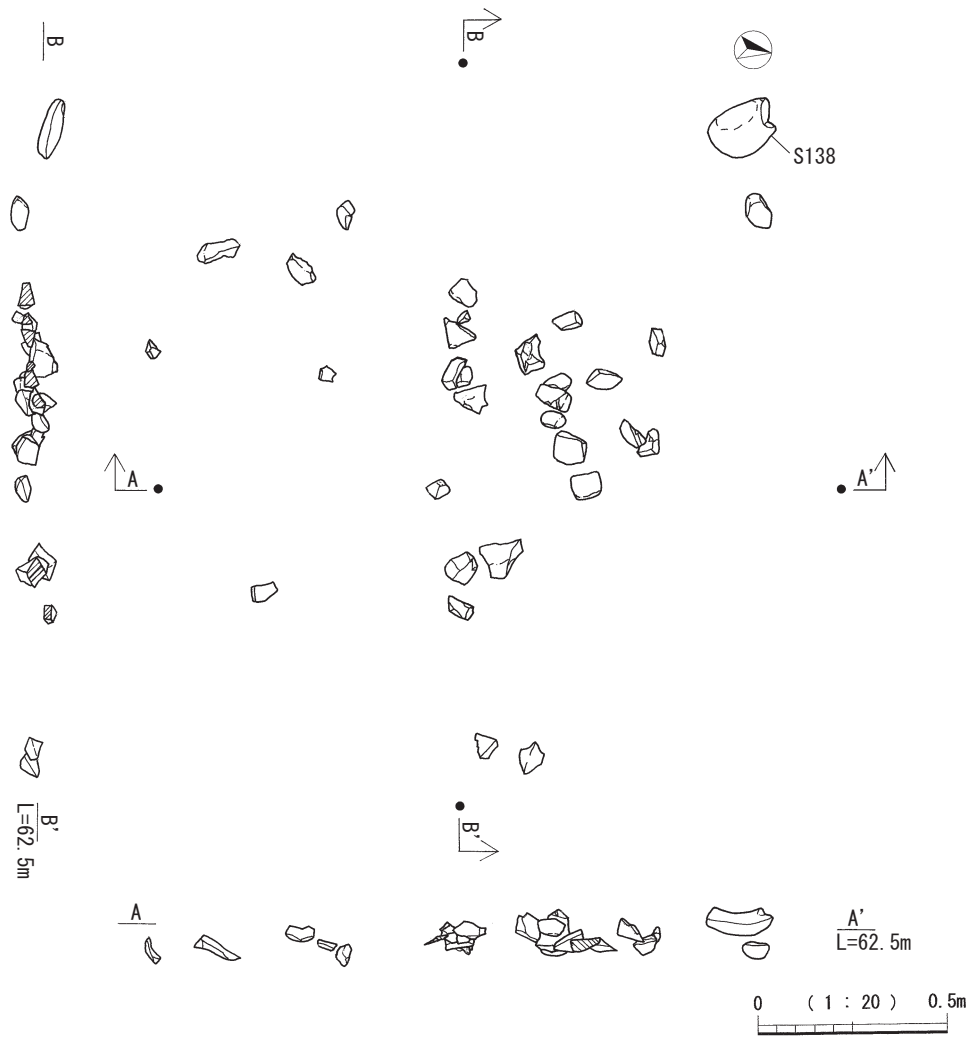
集石27号 (第106図)

分類：タイプⅠ

検出状況

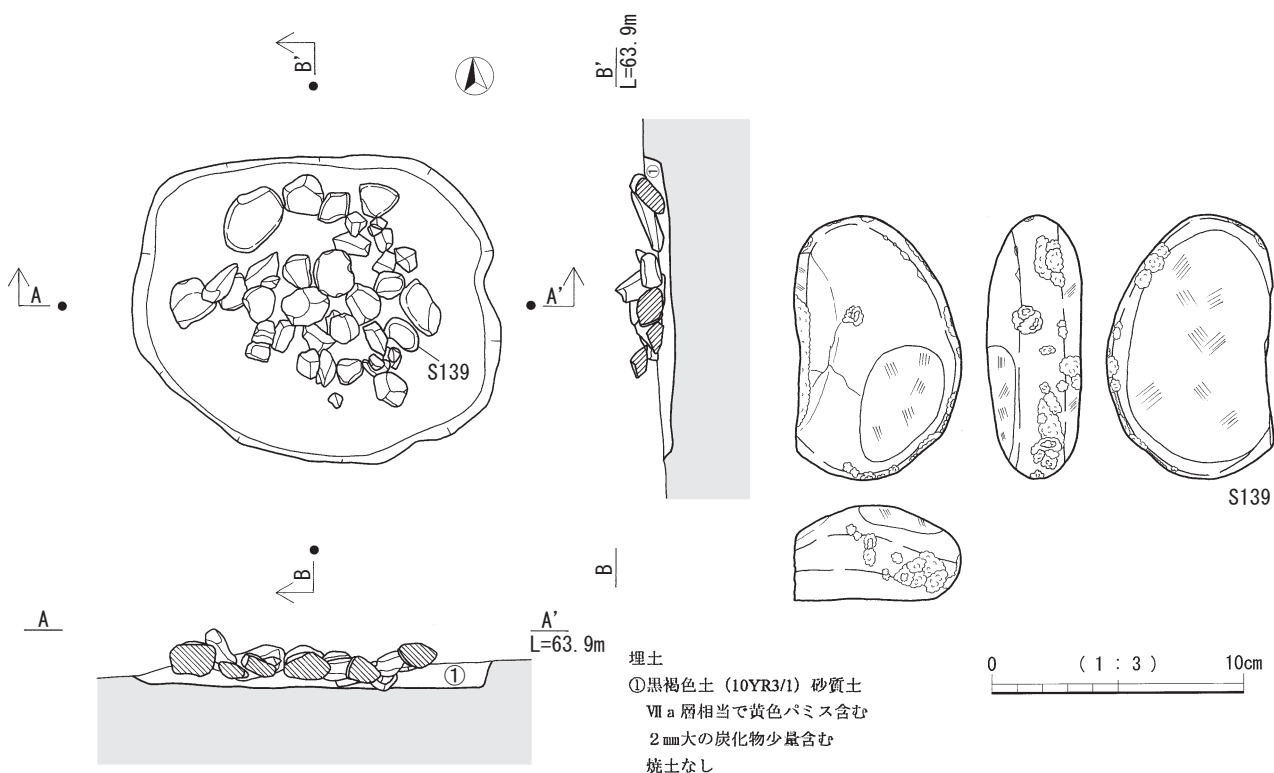
SS27は、E-15区のⅥ層掘り下げ後、Ⅶa層に入ったあたりで検出された。砂岩を中心に構成されており、ホルンフェルスを含めた堆積岩はすべて被熱し赤変している。焼土痕等は検出されなかった。掘り込みはなし。

SS27

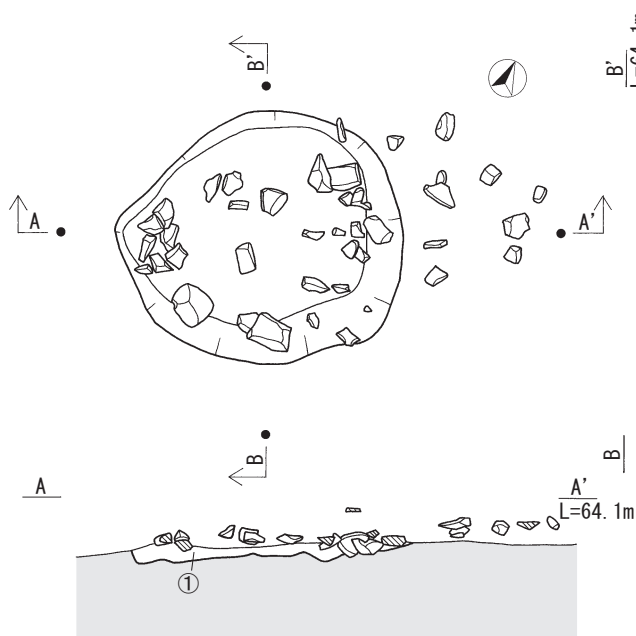


第106図 集石27号・出土遺物

SS28

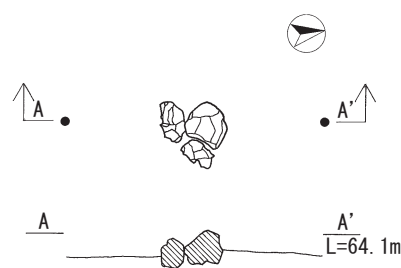


SS29



埋土
 ①黒褐色土 (10YR3/2)
 黄色バミスの硬質ブロック混ざる
 炭化物片微量混ざる

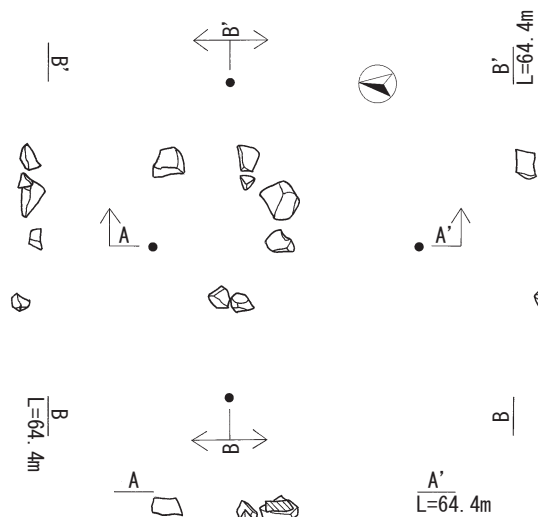
SS30



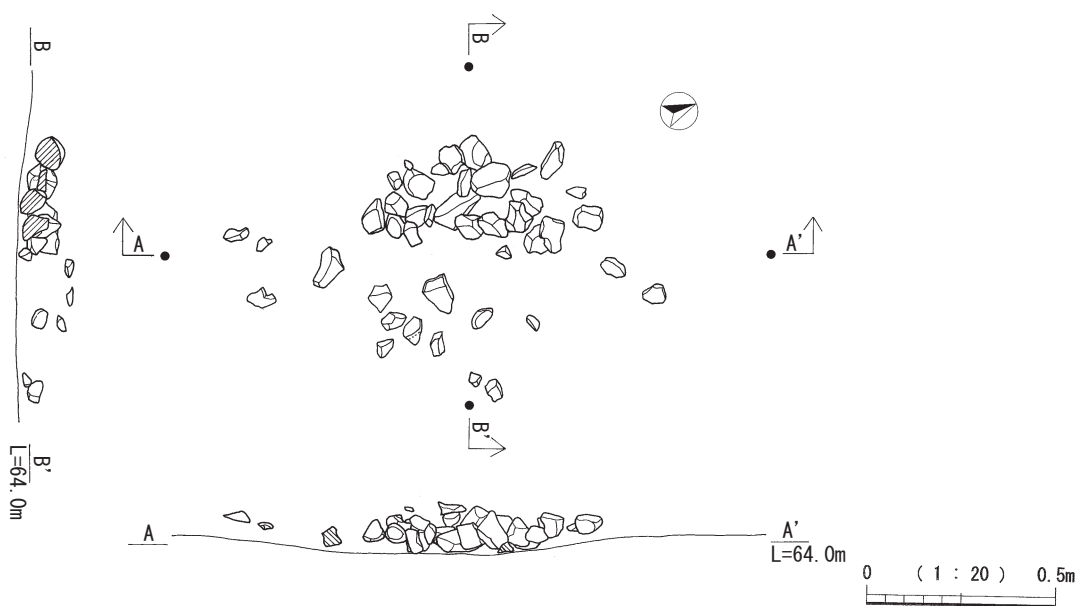
0 (1:20) 0.5m

第107図 集石28号・出土遺物・集石29号・集石30号

SS31



SS32



第108図 集石31号・集石32号

規模

構成礫数は30個で、1個平均の重さが251gであった。礫は、長軸1.79m、短軸1.66mの範囲に広がる。

出土遺物

石器1点が出土した。S138は凝灰岩製で、大型の磨敲石である。下面には割口にも敲打痕を確認できる。風化が著しく判然とはしないが、下面は打ち掻いている可能性もある。裏面は自然面である。

集石28号 (第107図)

分類：タイプⅢ

検出状況

SS28は、F-31区のⅦb層で検出された。拳大の礫で構成され、浅い掘り込みがある。

埋土は黒褐色の砂質土(Ⅶ層相当)で、P13含む2mm大の炭化物少量含む。焼土痕は検出されなかった。

規 模

構成礫数は41個で、1個平均の重さが373gであった。礫は、長軸0.72m、短軸0.62mの範囲に広がる。掘り込みの深さは約5cmである。

出土遺物

石器1点が出土した。S139は砂岩製の磨敲石で、不定型な楕円状の形状である。左側面の欠けは、敲打の繰り返しによる潰れである可能性が高い。正面・裏面・左側面は強く擦られている。薄く変色しており、被熱によるものと考えられる。

集石29号 (第107図)

分 類：タイプIV

検出状況

SS29は、F-31区のVIIb層で検出された。砂岩を多く使用している。浅い掘り込みはあるが、礫は集中していない。埋土は黒褐色の砂質土で、P13の硬質ブロック混じる炭化物片も微量に混じる。

規 模

構成礫数は39個で、1個平均の重さが123gであった。礫は、長軸1.09m、短軸0.63mの範囲に広がる。掘り込みの深さは約5cmである。

出土遺物

遺物は出土しなかった。

集石30号 (第107図)

分 類：タイプII

検出状況

SS30は、F-31区のVIIb層で検出された。10cm程度の礫3個から成り、掘り込みはない。一番大きな礫が安山岩で、他は破碎したホルンフェルスである。被熱を受けた痕跡は見られない。礫は3個であるが、集中している

ためタイプIIとした。

規 模

構成礫数は3個で、1個平均の重さが677gであった。礫は、長軸0.18m、短軸0.18mの範囲に広がる。

出土遺物

遺物は出土しなかった。

集石31号 (第108図)

分 類：タイプI

検出状況

SS31は、G-32区のVIIa層で検出された。環状に配されたように見える調査区外へ広がっている可能性もある。壁際の土層断面からは掘り込みがあったように見える。平面プランはP13の集まりから想定した。

規 模

構成礫数は7個で、1個平均の重さが248gであった。礫は、長軸0.44m、短軸0.39mの範囲に広がる。

出土遺物

遺物は出土しなかった。

集石32号 (第108図)

分 類：タイプII

検出状況

SS32は、F-36区のVIIa層で検出された。拳大の礫が集中し、浅い掘り込みがあるようにも見えるが、はっきりしない。この集石の40m周辺に遺構がなく、単独で存在している。北側の調査区外に遺構がある可能性もある。

規 模

構成礫数は43個で、1個平均の重さが177gであった。礫は、長軸1.18m、短軸0.70mの範囲に広がる。

出土遺物

遺物は出土しなかった。

第15表 集石 (VII層) 一覧表 (1)

挿図 番号	遺構名	検出区	検出層	タイプ	長軸 (m)	短軸 (m)	掘込	構成礫の内容数 (個)								一個あたり の重量(g)	備考	
								総数	安山岩	砂岩	頁岩	花崗岩	凝灰岩	ホルン フェルス	軽石			
86	SS1	C・D-3	VII	II	1.28	1.26	無	49	49	0	0	0	0	0	0	0	582	
87	SS2	G-3・4	VIII	I	1.00	0.52	無	25	2	0	15	0	8	0	0	0	476	
	SS3	C-4	VII	I	0.78	0.41	無	11	—	—	—	—	—	—	—	—	91	
88	SS4	C・D-4	VII	I	0.92	0.65	無	10	—	—	—	—	—	—	—	—	338	
89	SS5	E-4	VII	II	0.62	0.56	無	25	24	1	0	0	0	0	0	0	383	
90	SS6	F-3・4	VII	I	0.99	0.30	無	23	23	0	0	0	0	0	0	0	189	
	SS7	D-5	VII	I	0.82	0.40	無	13	6	1	1	0	1	4	0	0	213	
91	SS8	E-5	VIII	III	0.89	0.85	有	145	—	—	—	—	—	—	—	—	48	
	SS9	E-5	VII	II	1.29	0.93	無	56	51	4	0	0	0	0	1	0	56	
93	SS10	F-5	VII	II	0.22	0.20	無	6	6	0	0	0	0	0	0	0	311	
94	SS11	E-6	VII	I	0.87	0.58	無	13	13	0	0	0	0	0	0	0	417	
95	SS12	E-6	VII	II	0.39	0.25	無	10	9	0	0	1	0	0	0	0	237	
96	SS13	E・F-6	VII	I	1.83	1.57	無	33	—	—	—	—	—	—	—	—	213	
97	SS14	C-7	VII	II	1.03	0.72	無	41	35	6	0	0	0	0	0	0	312	
	SS15	C-7	VII	I	1.33	0.57	無	28	28	0	0	0	0	0	0	0	161	

第16表 集石（Ⅶ層）一覧表（2）

挿図番号	遺構名	検出区	検出層	タイプ	長軸(m)	短軸(m)	掘込	構成礫の内容数(個)								一個あたりの重量(g)	備考
								総数	安山岩	砂岩	頁岩	花崗岩	凝灰岩	ホルンフェルス	軽石		
98	SS16	C-7	Ⅶ	I	0.69	0.65	無	10	—	—	—	—	—	—	—	81	
	SS17	C-8	Ⅷ	I	1.16	0.95	無	67	—	—	—	—	—	—	—	149	
99	SS18	C-8	Ⅶ	I	1.16	0.45	無	17	16	0	0	0	0	1	0	314	
100	SS19	F-8	Ⅶ	Ⅱ	0.88	0.52	無	20	0	0	0	0	20	0	0	390	
101	SS20	D-9	Ⅶa	I	1.20	0.95	無	13	4	4	0	0	0	5	0	241	
102	SS21	E-9	Ⅶ	I	1.35	0.85	無	44	44	0	0	0	0	0	0	147	
103	SS22	F-9	Ⅶ	Ⅱ	0.75	0.48	無	17	13	0	1	2	0	1	0	214	
	SS23	D-11	Ⅶb	Ⅱ	0.89	0.72	無	26	16	1	5	0	1	3	0	242	
104	SS24	D-12	Ⅶa	I	1.39	0.94	無	27	4	21	0	0	2	0	0	202	
	SS25	E-13	Ⅶa	Ⅱ	0.40	0.25	無	9	4	4	0	0	0	1	0	199	
105	SS26	B-14	Ⅶb	Ⅳ	0.71	0.68	有	12	5	5	1	0	0	1	0	338	
106	SS27	E-15	Ⅶa	I	1.79	1.66	無	30	2	25	0	0	1	2	0	251	
107	SS28	F-31	Ⅶb	Ⅲ	0.72	0.62	有	41	6	15	10	0	10	0	0	373	
	SS29	F-31	Ⅶb	Ⅳ	1.09	0.63	有	39	0	36	0	0	3	0	0	123	
	SS30	F-31	Ⅶb	Ⅱ	0.18	0.18	無	3	1	0	0	0	0	2	0	677	
108	SS31	G-32	Ⅶa	I	0.44	0.39	無	7	3	0	3	0	1	0	0	248	
	SS32	F-36	Ⅶa	Ⅱ	1.18	0.70	無	43	29	6	8	0	0	0	0	177	

第17表 土器観察表（集石Ⅶ層出土）

挿図番号	掲載番号	器種	部位	類別	出土区	層位	文様・器面調整等		色調		胎土			焼成	取上番号	
							外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃石			他
96	39	深鉢	胴	V	E・F-6	SS13	貝殻条痕	ナデ	5YR5/6明赤褐	7.5YR4/2灰褐	○	△	△	良好		
104	40	深鉢	口縁	Ⅶb	E-13	SS25	貝殻刺突	ナデ	7.5YR3/2黒褐	7.5YR4/3褐	△	○	△	金雲母	良好	20983
	41	深鉢	胴	Ⅶb	E-13	SS25	貝殻刺突	ナデ	10YR4/3にぶい黄褐	10YR5/3にぶい黄褐	○	△	△	金雲母	良好	20586

第18表 石器観察表（集石Ⅶ層出土）

挿図番号	掲載番号	遺構	取上番号	出土区	層	器種	分類	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	石材	石材分類	備考
86	S110	SS1	SS1-17	C・D3	Ⅶ	磨敲石	-	125.0	89.0	83.0	700.00	凝灰岩	-	
	S111	SS1	SS1-20・21	C・D3	Ⅶ	石皿	-	141.0	81.0	85.0	871.50	凝灰岩	-	
	S112	SS1	SS1-18	C・D3	Ⅶ	磨敲石	-	132.0	115.0	72.0	1455.50	安山岩	安山岩B	
88	S113	SS4	SS4-4	C4	Ⅶ	磨敲石	-	90.0	67.0	58.0	464.10	安山岩	安山岩B	
	S114	SS4	SS4-2	C4	Ⅶ	磨敲石	-	110.0	86.0	64.0	790.50	安山岩	安山岩B	
	S115	SS4	SS4-1	C4	Ⅶ	磨敲石	-	124.0	97.0	50.0	681.00	安山岩	安山岩B	
	S116	SS4	SS4-9	C4	Ⅶ	磨敲石	-	44.0	69.0	61.0	200.00	安山岩	安山岩B	
89	S117	SS5	SS5-10	E6	Ⅶ	磨敲石	-	132.0	87.0	42.0	608.00	ホルンフェルス	-	
92	S118	SS9	SS8-46	E5	Ⅶ	二次加工・使用痕剥片	-	76.0	58.0	26.0	102.80	ホルンフェルス	-	磨石転用品
	S119	SS9	SS8-53	E5	Ⅶ	磨敲石	-	124.0	59.0	12.0	186.60	ホルンフェルス	-	異形
93	S120	SS10	SS6-6	F5	Ⅶ	二次加工・使用痕剥片	-	55.0	36.0	15.0	26.80	ホルンフェルス	-	
95	S121	SS12	SS12-1	E6	Ⅶ	礫器	-	76.0	57.0	42.0	203.40	ホルンフェルス	-	
	S122	SS12	SS12-2	E6	Ⅶ	磨石	-	76.0	61.0	49.0	174.70	安山岩	安山岩B	
	S123	SS12	SS12-8	E6	Ⅶ	磨敲石	-	68.0	52.0	49.0	207.70	安山岩	安山岩B	
	S124	SS12	SS12-4	E6	Ⅶ	磨敲石	-	94.0	51.0	59.0	268.00	安山岩	安山岩B	
96	S125	SS13	SS13-28	E・F6	Ⅶ	磨敲石	-	91.0	87.0	31.0	317.00	安山岩	安山岩B	
	S126	SS13	SS13-24	E・F6	Ⅶ	磨石	-	66.0	50.0	57.0	129.60	安山岩	安山岩B	
	S127	SS13	SS13-19	E・F6	Ⅶ	磨敲石	-	65.0	67.0	45.0	252.90	安山岩	安山岩B	
99	S128	SS18	SS18-4	C8	Ⅶ	磨石	-	71.0	45.0	47.0	230.60	ホルンフェルス	-	
	S129	SS18	SS18-7	C8	Ⅶ	磨敲石	-	84.0	62.0	49.0	292.00	安山岩	安山岩B	
	S130	SS18	SS18-8	C8	Ⅶ	磨敲石	-	121.0	108.0	55.0	893.50	安山岩	安山岩B	
	S131	SS18	SS18-15	C8	Ⅶ	磨敲石	-	75.0	110.0	43.0	512.50	安山岩	安山岩B	
101	S132	SS20	SS20-4	D9	Ⅶa	磨敲石	-	62.0	50.0	48.0	201.50	砂岩	-	
	S133	SS22	SS22-23	F9	Ⅶ	磨製石斧	I-a	68.5	46.5	35.5	118.60	ホルンフェルス	-	基部
	S134	SS22	SS22-24	F9	Ⅶ	磨敲石	-	85.0	70.0	52.0	419.50	安山岩	安山岩B	
	S135	SS22	SS22-18	F9	Ⅶ	磨敲石	-	75.0	71.0	65.0	45.60	安山岩	安山岩B	
	S136	SS22	SS22-22	F9	Ⅶ	磨敲石	-	45.0	52.0	30.0	99.90	安山岩	安山岩B	
106	S137	SS23	25115	D11	Ⅶb	石皿	-	93.0	67.0	47.0	512.00	安山岩	安山岩B	
106	S138	SS27	19750	E15	Ⅶa	磨敲石	-	152.0	135.0	59.0	1765.00	凝灰岩	-	
107	S139	SS28	105227	F31	Ⅶb	磨敲石	-	104.0	65.0	38.0	374.50	砂岩	-	

(5) 石器集積 (第109・110図)

磨敲石器等の石器が集まっている遺構を石器集積として取り扱った。被熱したような石器もあり、礫も混ざっているため集石として使用された可能性もあるが、ここでは石器集積とし掲載した。

石器集積は、調査区西端部の崖から内陸部に約70～80mの位置のⅦ層から、2基が検出された。このエリアでは、調査区の北側に竪穴建物跡や、土坑・集石などが集中して検出されている。石器集積1号は土坑が集中する位置で、石器集積2号は竪穴建物跡に囲まれた位置で、それぞれ検出された。

石器集積1号 (第109図)

F-7区Ⅶ層で検出した。西から東に向かって緩やかに傾斜する場所に位置する。周辺ではSK11・SK13な

どが検出されている。4個の磨敲石が密集して出土した。そのうち3点を図化した。

S140 は凝灰岩製の小型の棒状の磨敲石である。上面・下面ともによく使用されている。

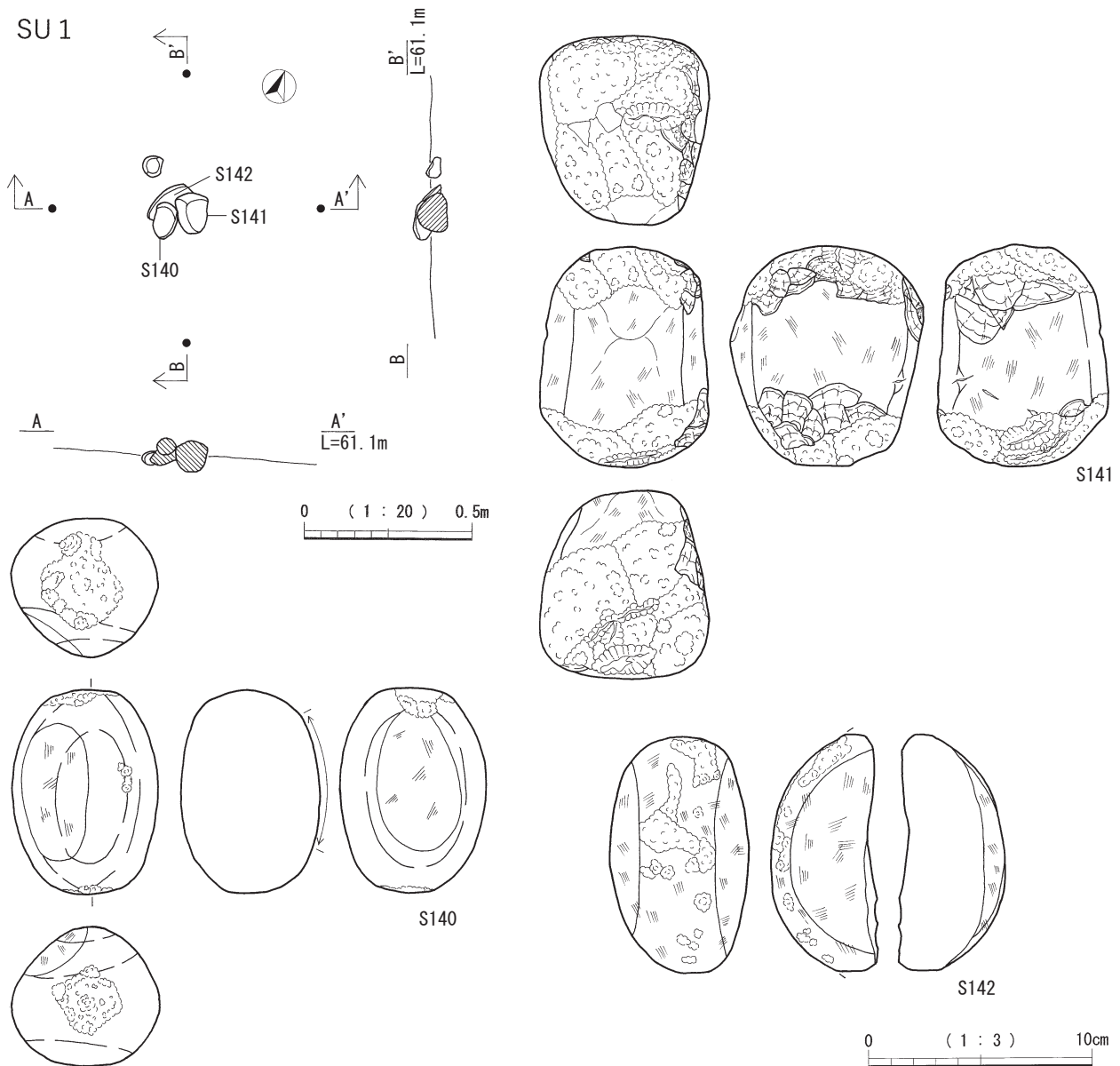
S141 はホルンフェルス製の敲石である。上面・下面とも打ち搔いて成形した後に、敲打具として頻用したものと推測できる。

S142 は砂岩製の磨敲石片である。本来は円形であったものと思われる。人為的に割っている可能性もある。

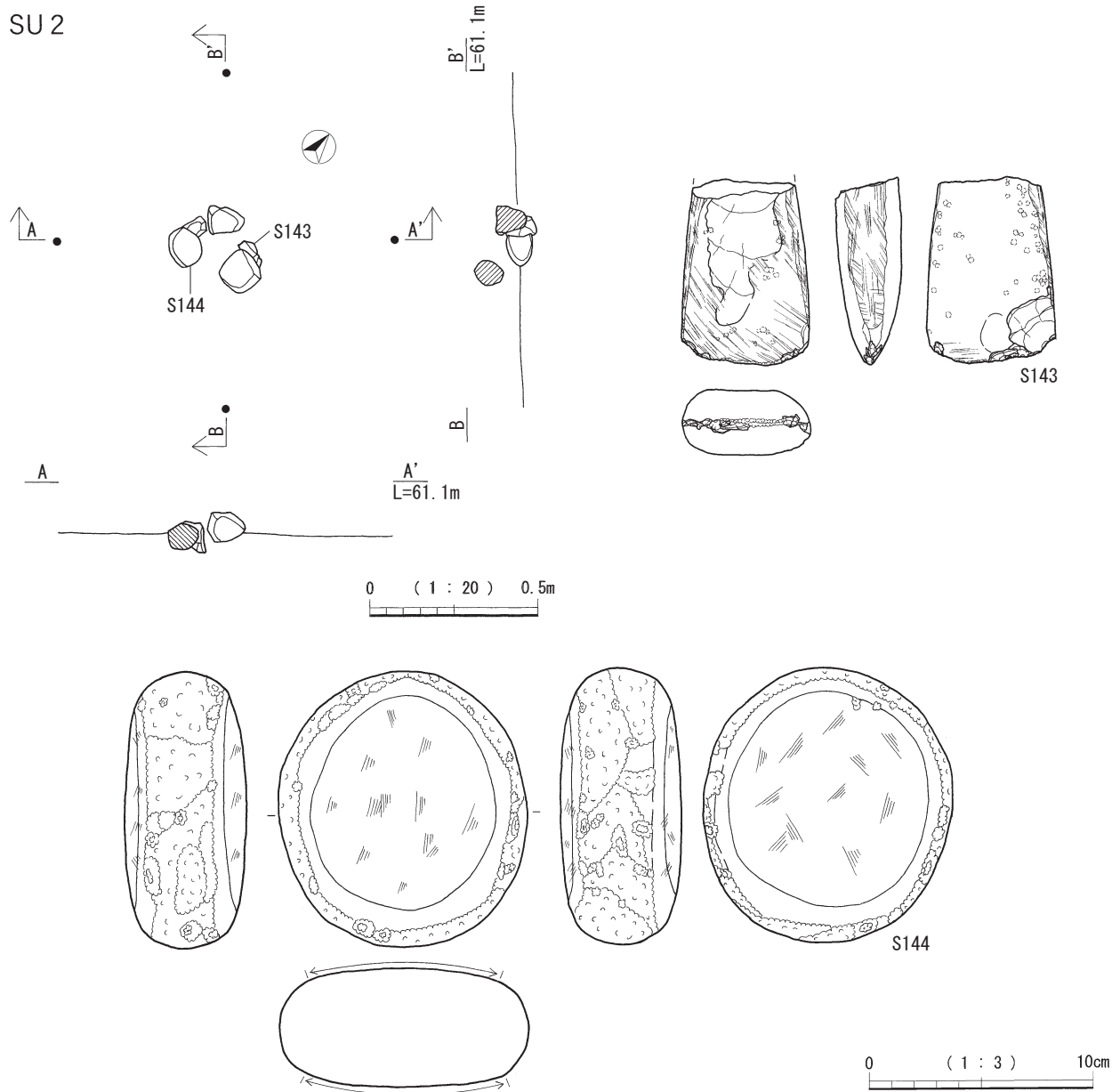
3点ともに被熱の痕跡はみられない。

石器集積2号 (第110図)

F-9区Ⅶ層で検出された。周辺にはSH21・22・25・26が検出されている。石器を含む礫5個が密集して出土した。周囲の礫の出土状況とは明らかに異なったことか



第109図 石器集積1号・出土遺物



第110図 石器集積2号・出土遺物

ら石器集積として掲載した。遺物は石斧が1点と磨敲石が2点であり、そのうち2点を図化した。

S143 はホルンフェルス製の磨製石斧（断面形が定角：

本遺跡ではI-b類として分類）の両刃の刃部である。

S144は砂岩製の石鯰形の形状の磨敲石である。

被熱による赤化が確認できる。薄く煤が付着する。

第19表 石器観察表（石器集積VII層出土）

挿図番号	掲載番号	遺構番号	取上番号	出土区	層	器種	分類	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	石材	石材分類	備考
109	S140	SU-1	IBS22-1	F8	VII	磨敲石	-	90.0	65.0	62.0	394.00	凝灰岩	-	-
	S141	SU-1	IBS22-2	F7	VII	敲石	-	97.5	75.0	86.5	974.00	ホルンフェルス	-	-
	S142	SU-1	IBS22-3	F7	VII	磨敲石	-	105.0	48.0	62.0	267.90	砂岩	-	-
110	S143	SU-2	IBS23-2	F10	-	磨製石斧	I-b	82.5	57.0	29.0	217.00	ホルンフェルス	-	-
	S144	SU-2	IBS23-5	F9	-	磨敲石	-	122.0	110.0	54.0	1103.00	砂岩	-	-

3 VII層の遺物

(1) 土器 (第111 ~ 143図)

小牧遺跡VII・VIII層出土の縄文早期土器は、VI類が最も多く、次いでIII類土器が多い。VIII層は薩摩火山灰層なので、VIII層出土の遺物は原位置を留めていない可能性が大である。VII層からは、同型式の土器が大量に出土するという傾向にはなく、出土量は少ないが、多くの型式の土器が出土した。

I類からIX類がVII層・VIII層出土の土器である。

I類土器 (第112図42 ~ 44)

I類土器は、平底の底部から口縁部に向かいやや外傾する深鉢形を基本とする。口唇端部には貝殻殻頂部による押圧文ないしヘラ状工具によるキザミを施す。胴部はナデ調整が施される土器である。

42は、口唇外面端部に貝殻殻頂部を押圧し、外面が高く、内面が低くなるように整形されている。断面は片刃石斧状の三角形を呈する。口縁部には貝殻刺突文を3条巡らせ、胴部は入念にナデで仕上げている。内面は縦位ないし斜位の貝殻条痕文がわずかに確認できる。

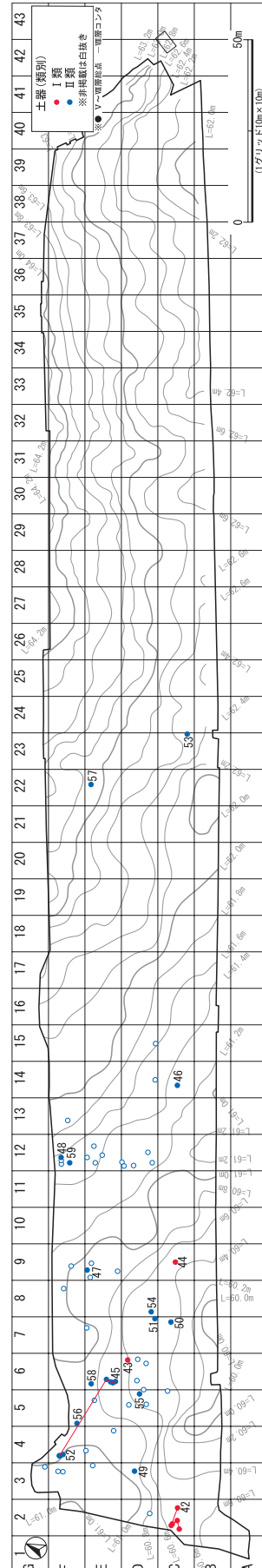
43はやや外傾する深鉢形の口縁部で、口唇外部にはヘラ状工具によるキザミを施す。口縁部には1条の沈線を施し、内外面ともに丁寧にナデ調整されている。器形及び器面調整からここに分類した。

44は42の底部と思われる。接地面は丁寧にナデで仕上げている。内面は剥落している。

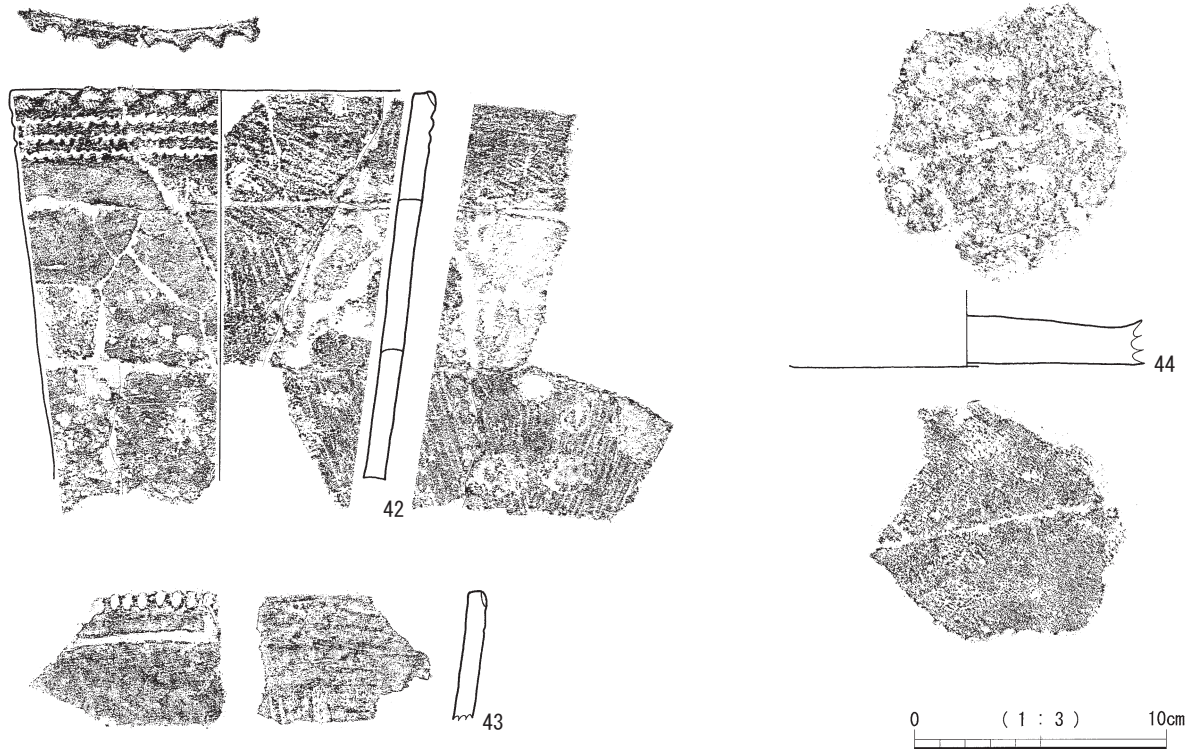
II類土器 (第113図45 ~ 59)

平底の底部から口縁部に向かい緩やかに外傾する深鉢形の器形で、外面の口縁部上端や、口縁部上端から口唇部にかけて貝殻やヘラ状工具を用いて刺突文を施す。その下位に底部付近まで斜位や横位の貝殻腹縁を用いた貝殻条痕の調整が施される。内面は貝殻条痕調整や、ヘラ状工具によるナデ調整などが施される。

45 ~ 52は口縁部である。45は、若干口縁部文様帯を肥厚させ、丸みを帯びた口唇部外端にヘラ状工具によるキザミを巡らせる。その下位に斜位の貝殻条痕調整が施されている。内面は貝殻条痕調整後ナデ調整が施されている。46は、口縁部上端に縦位の棒状工具による押圧文を巡らせる。その下位に横位の貝殻条痕調整が施される。内面はナデ調整が施されている。47も同様であるが、内面にヘラ状工具痕が認められる。48は、口唇部にキザミが施され、その下位に横位の貝殻条痕文が施されている。49は、口唇部外端にヘラ状工具によるキザミを施し、口唇部が断面三角形を呈する。その下位に横位の貝殻条痕文を施す。51は、口縁部付近を若干肥厚させている。口縁部外端には貝殻腹縁の押圧文が施され、その下位に横位の貝殻条痕文が巡る。52は、口唇部外端に貝殻によ



第111図 I・II類土器分布図



第112図 I類土器

るキザミを施し、下位に横位の貝殻条痕文を6条施す。その下位には、2条の横位貝殻刺突文が確認出来る。

53～57は胴部である。横位ないし斜位の貝殻条痕調整が施されている。

58と59は、底部である。58は底部からの立ち上がりに縦のキザミが施されている。

Ⅲ類土器（第116～122図）

Ⅲ類土器は、平底の底部から口縁部に向かいやや外傾する深鉢形や円筒形、レモン形を呈するものがある。口縁部下に楔形貼付突帯を施すものもある。胴部全面には貝殻刺突文を施す。

Ⅲa類土器（第116図60～70）

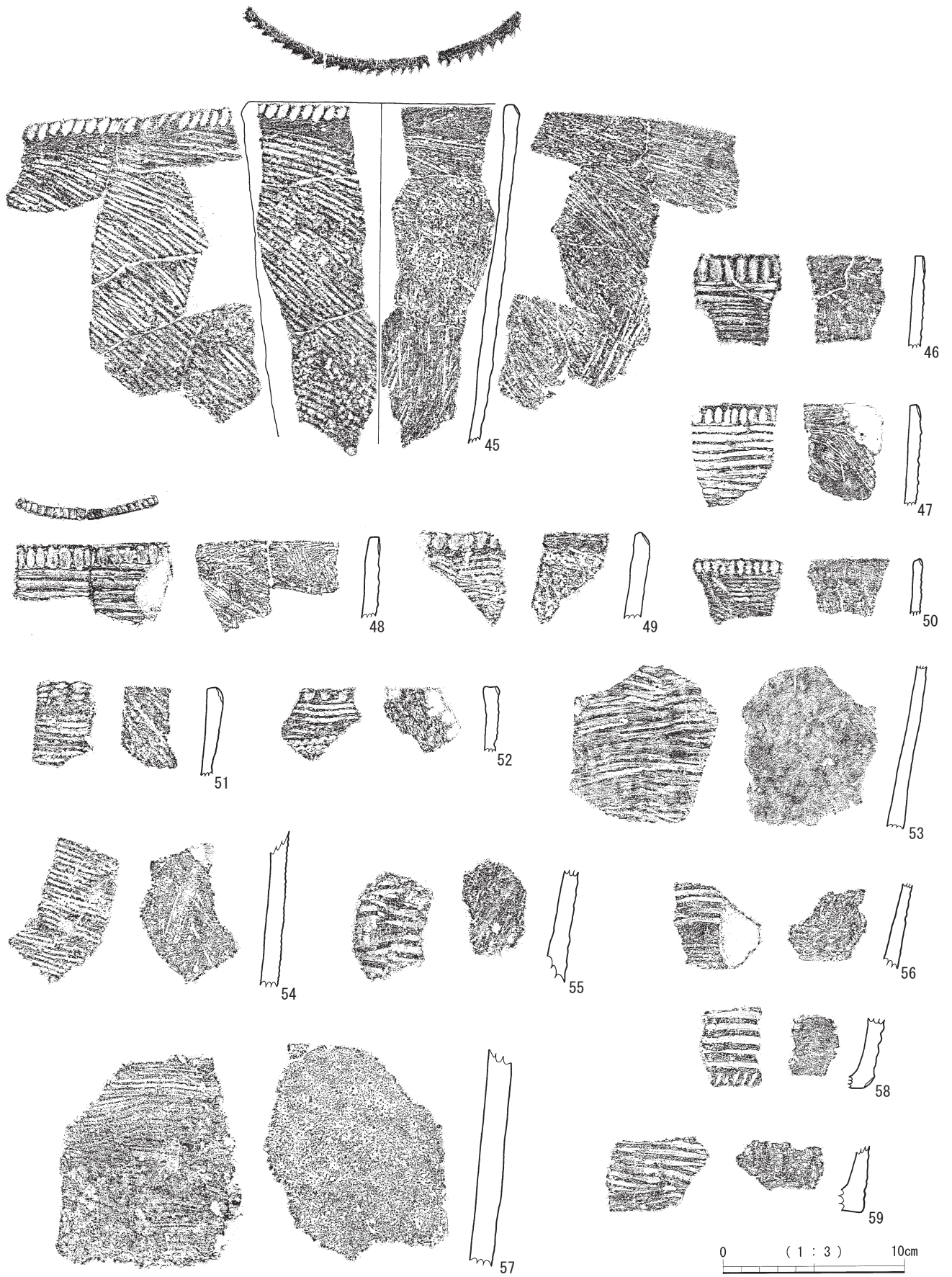
Ⅲa類土器は、二重施文を施す。横位の貝殻条痕文の上から縦位ないし斜位に貝殻刺突文を施し、胴部文様が

構成される。

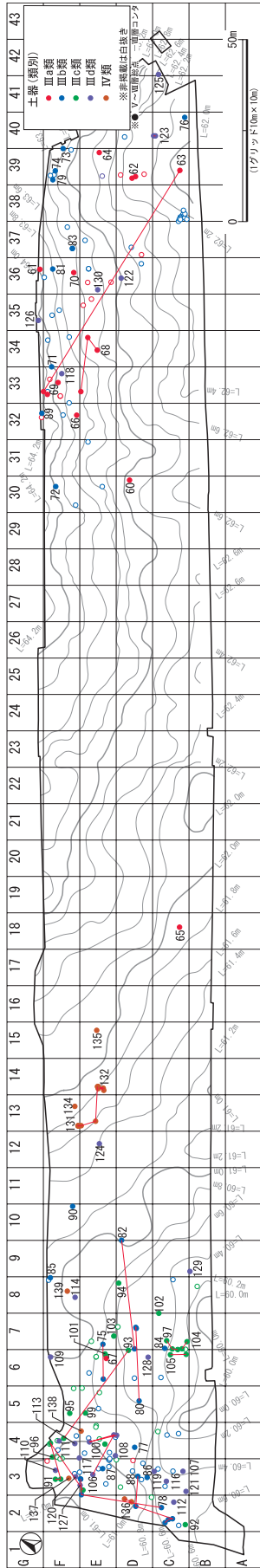
60は、口唇部にキザミを施し、口縁部に横位の貝殻刺突文を3条巡らす。その下位に楔形貼付突帯を施す。土器内面に赤色顔料を施したような痕跡が確認出来るが、塗布したものか、胎土自体の赤色物質かの区別は、分析の結果ははっきりしなかった。61～70は胴部である。61は、口縁部に近い胴部で、楔形貼付突帯を施す。斜位の貝殻条痕文の上から縦位の貝殻刺突文を行う。全体的に赤みがかっている。63は、横位の貝殻条痕文の上から縦位の貝殻刺突文を施す。60同様に赤色顔料のような痕跡が確認できる。64は他の土器に比べ器壁が厚く、横位の貝殻条痕文が鮮明である。68は斜位の貝殻条痕文がわずかに確認出来る。69・70は、縦位の貝殻刺突文を密に施すⅢb類と類似しているが、横位の貝殻条痕文がわずかに確認できるため、ここに掲載した。器壁が共に薄い土器である。

第20表 土器観察表（I類）

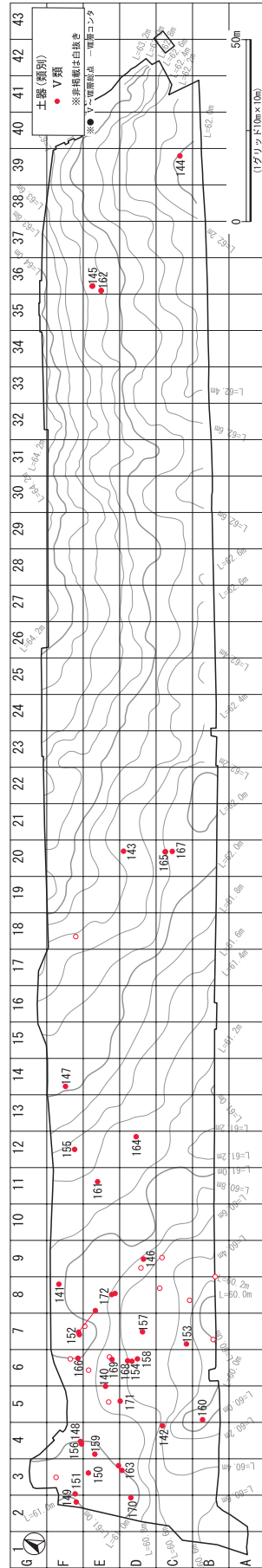
挿図番号	掲載番号	器種	部位	類別	出土区	層位	文様・器面調整等		色調		胎土				焼成	取上番号
							外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃石	他		
112	42	深鉢	口縁	I	C2	Ⅶ	貝殻刺突, ナデ	貝殻条痕	25Y7/3浅黄	25Y6/3にぶい黄	○	○	○	金雲母	良好	52234, 52405 52233, 52204 52404, 52201
	43	深鉢	口縁	I	D6	Ⅶ	キザミ, 沈線	ナデ	5YR6/6橙	10YR5/4にぶい黄褐	○	○		金雲母	良好	51930
	44	深鉢	底	I	C9	Ⅶ	ナデ	-	25Y7/3浅黄	25Y7/3浅黄	○	○	○		良好	53824



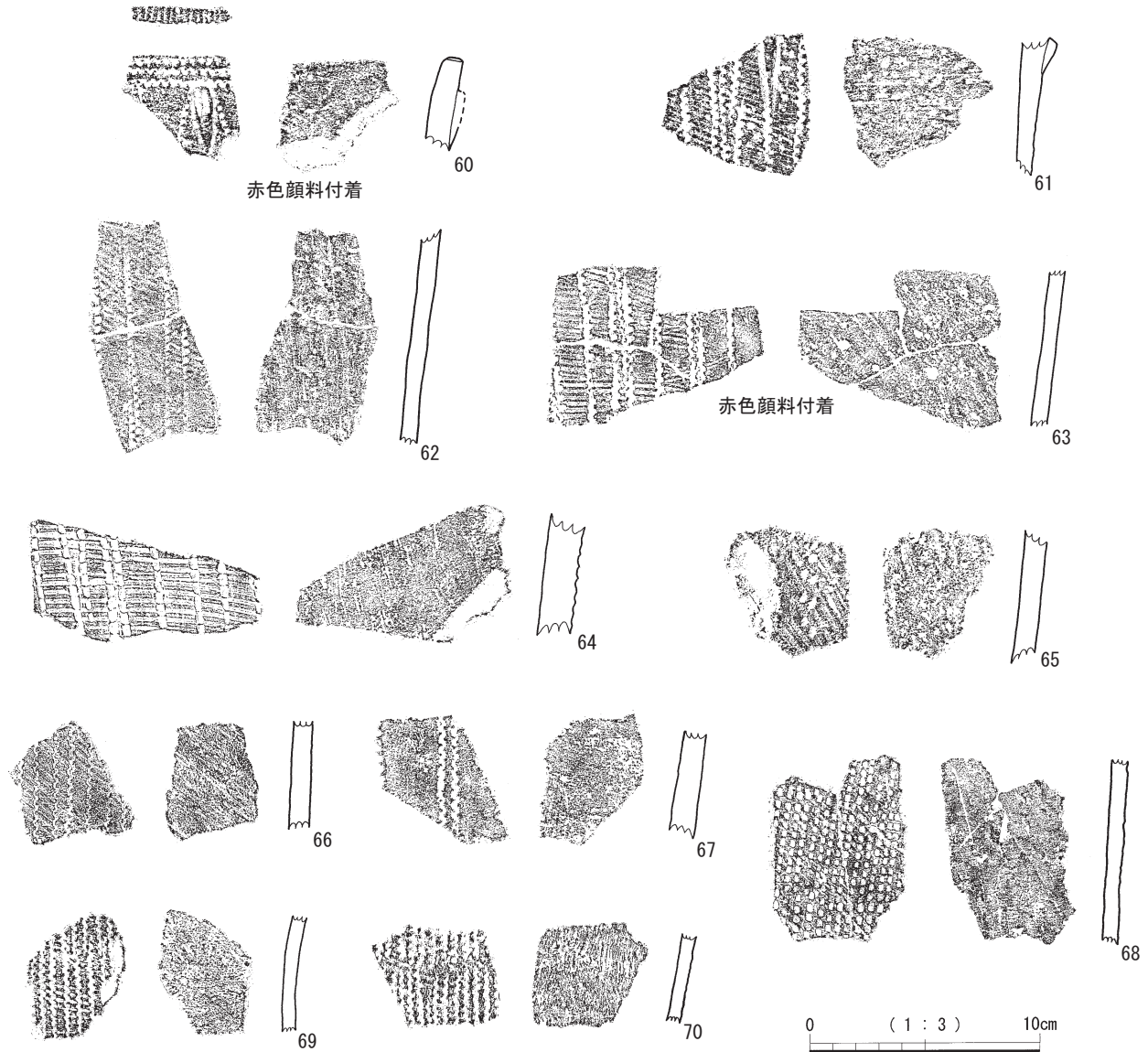
第113图 II類土器



第114図 Ⅲ・Ⅳ類土器分布図



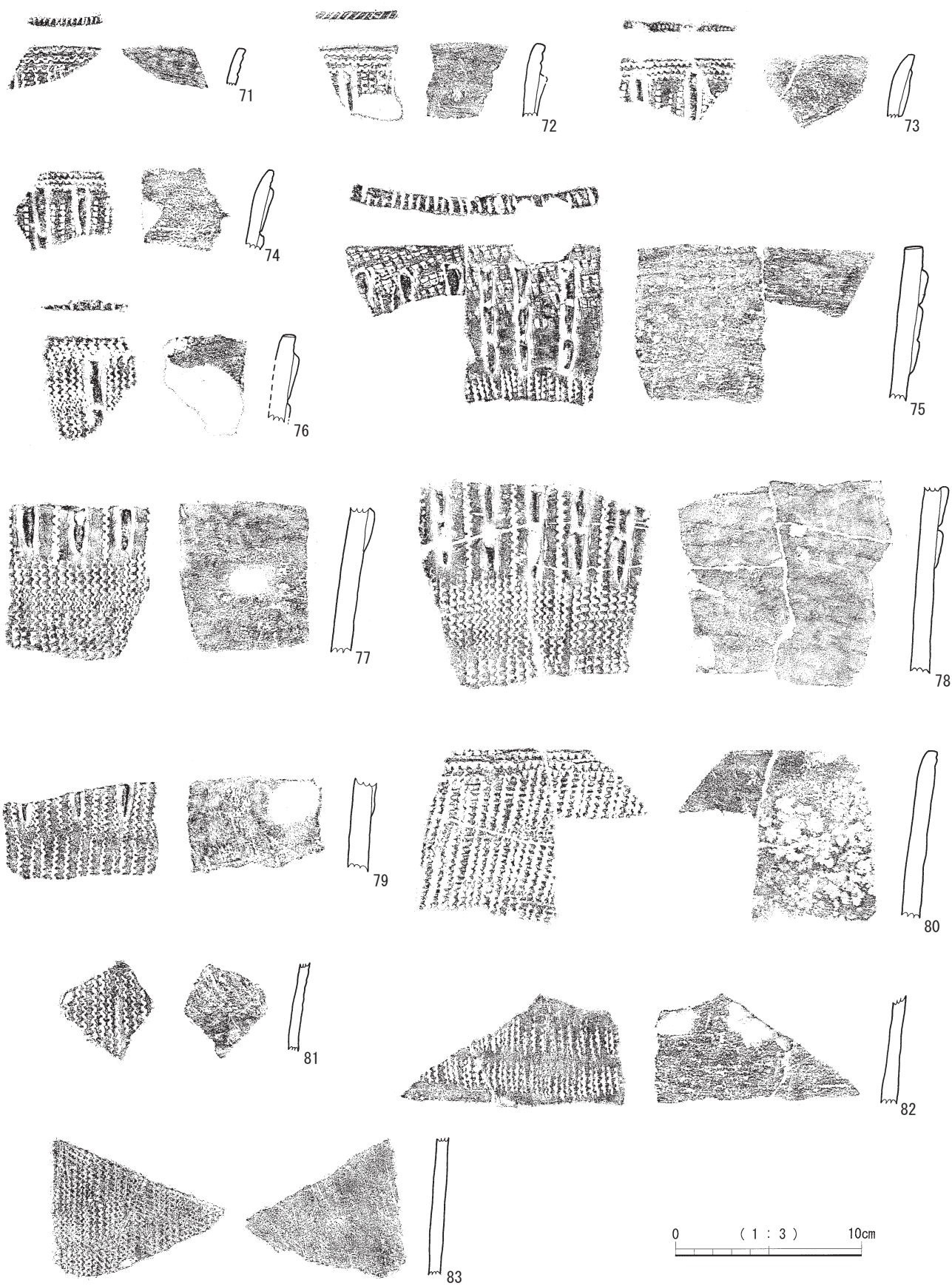
第115図 V類土器分布図



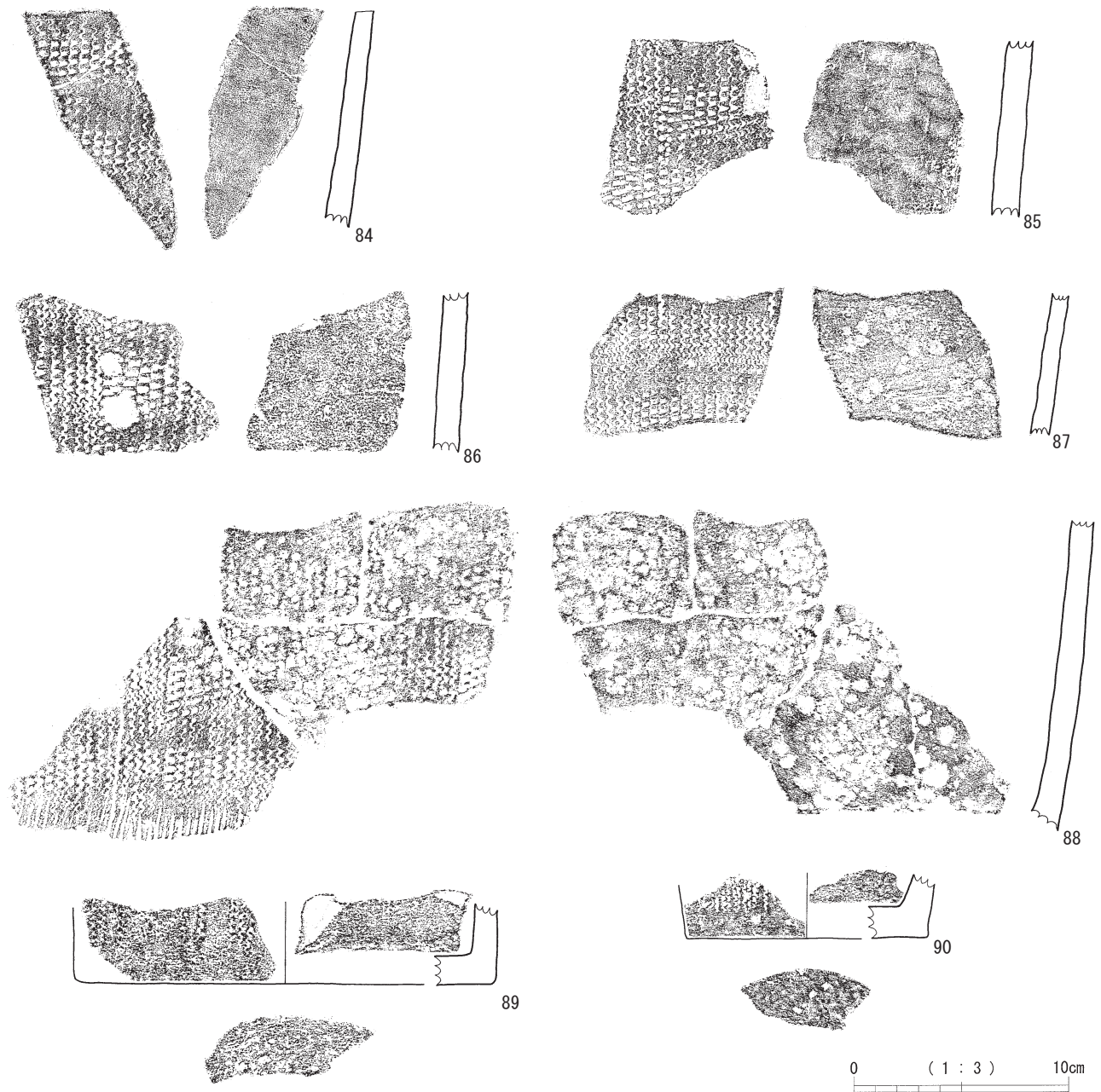
第116図 IIIa類土器

第21表 土器観察表 (II類)

挿図 番号	掲載 番号	器種	部位	類別	出土区	層	文様・器面調整等		色調		胎土			焼成	取上番号
							外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃石		
113	45	深鉢	口縁	II	F4 E6	VII	貝殻条痕, キザミ	貝殻条痕, ナデ	5YR6/6橙	10YR8/4浅黄橙	○	○	○	良好	53106, 52843, 52842 53220, 52880, 52305 52307
	46	深鉢	口縁	II	C14	VI	貝殻条痕, 押圧文	ナデ	7.5YR6/6橙	7.5YR7/4にぶい橙	○	△	○	良好	19287
	47	深鉢	口縁	II	E9	VI	貝殻条痕, 押圧文	ナデ	7.5YR6/6橙	7.5YR5/4にぶい褐	○	△	○	良好	48893
	48	深鉢	口縁	II	F12	IVa	貝殻条痕, キザミ	工具ナデ	7.5YR6/6橙	7.5YR6/6橙	○	△	○	良好	23914
	49	深鉢	口縁	II	D3	VI	貝殻条痕, キザミ	工具ナデ	10YR6/6明黄褐	10YR6/3にぶい黄橙	○	○		金雲母, 白粒	51538
	50	深鉢	口縁	II	C7	IVb	貝殻条痕, 押圧文	ナデ	5YR5/6明赤褐	7.5YR5/4にぶい褐	○	△	○	良好	48240
	51	深鉢	口縁	II	D7	VII	貝殻条痕, 押圧文	工具ナデ	7.5YR6/4にぶい橙	7.5YR5/4にぶい褐	○	△	◎	良好	53699
	52	深鉢	口縁	II	F4	VII	貝殻条痕, 貝殻刺突	ナデ	2.5YR8/2灰白	10YR7/4にぶい黄橙		△	○	良好	52850
	53	深鉢	胴	II	C23	VI	貝殻条痕	ナデ	7.5YR7/6橙	7.5YR6/6橙	○	△	○	良好	56456
	54	深鉢	胴	II	D8	VI	貝殻条痕	工具ナデ	5YR6/6橙	7.5YR4/4褐	○	△	○	良好	53704
	55	深鉢	胴	II	D5	VII	貝殻条痕	工具ナデ	7.5YR6/4にぶい橙	10YR7/4にぶい黄橙	◎			良好	52548
	56	深鉢	胴	II	F6	IVb	貝殻条痕	工具ナデ	10YR6/4にぶい黄橙	10YR5/3にぶい黄褐	△	○	○	金雲母, 白粒	45525
	57	深鉢	胴	II	E22	VI	貝殻条痕	ナデ	7.5YR6/6橙	10YR6/4にぶい黄橙	○	○	◎	良好	20055
58	深鉢	底	II	E6	IVb	貝殻条痕	ナデ	10YR5/3にぶい黄褐	10YR6/4にぶい黄橙	△			金雲母, 白粒	47493	
59	深鉢	底	II	F12	IVb	貝殻条痕	工具ナデ	10YR6/4にぶい黄橙	7.5YR6/6橙	○	○		良好	14299	



第117図 IIIb類土器 (1)



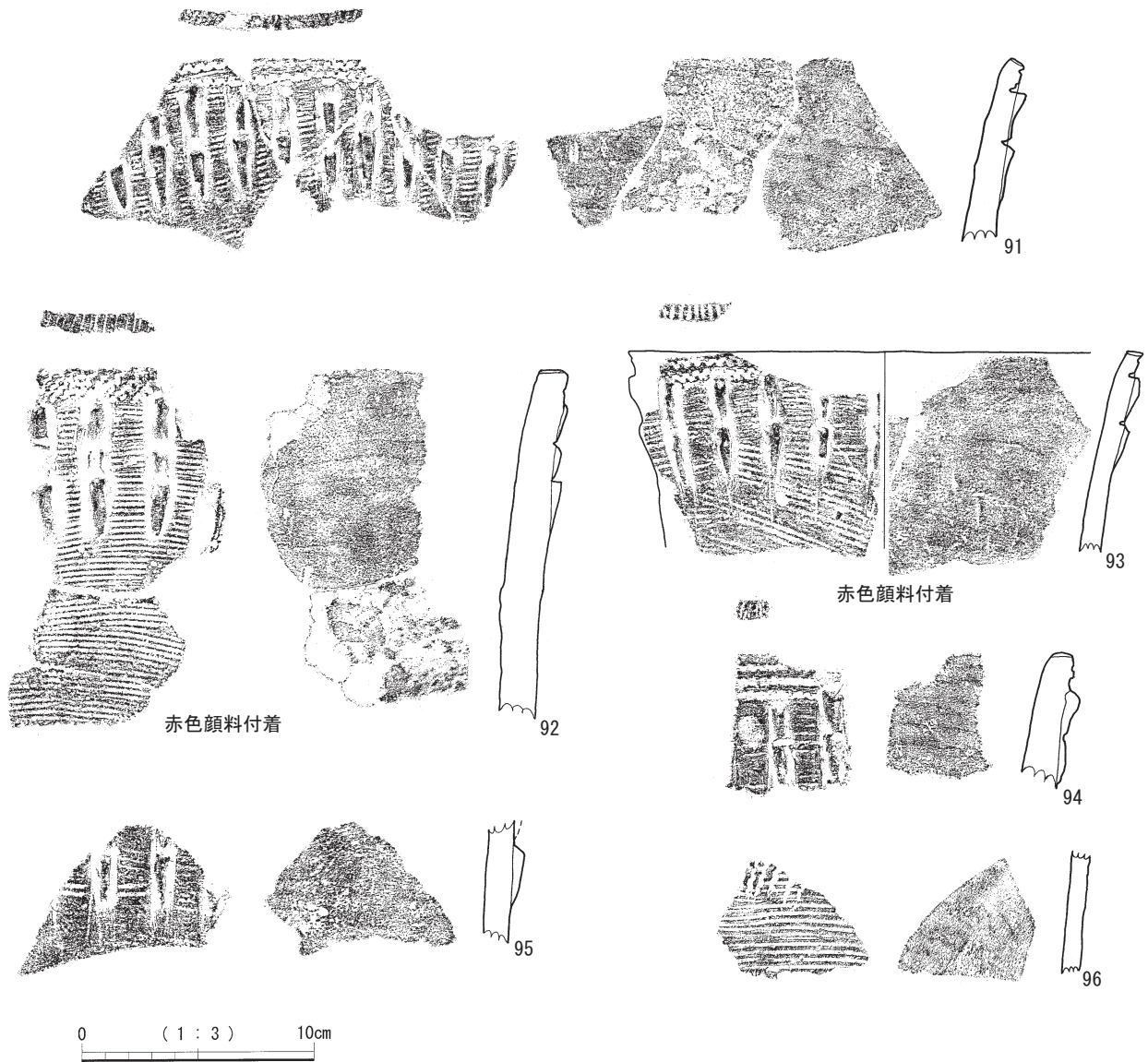
第118図 III b類土器 (2)

III b類土器 (第117・118図71～90)

III b類は、縦位の貝殻刺突文を全面に密に施す。口縁部に横位の貝殻刺突文を2ないし3条巡らし、その下位に縦位の貝殻刺突文を施す。

71～76は楔形貼付突帯を施す土器の口縁部である。71は口縁部で口唇部にキザミを施し、口縁部に横位の貝殻刺突文を3条巡らす。その下に縦位の貝殻刺突文を施す。楔形貼付突帯はかろうじて確認することができる。内面は丁寧なナデ仕上げがなされている。75はバケツ状の器形を呈し、平坦な口唇部にヘラ状工具によるキザミ

を施す。口縁部下に横位の貝殻刺突文を施した後、楔形貼付突帯を3列巡らしている。楔形貼付突帯は、稜を形成するため、ヘラ状工具により押し切って形を整えている。その下には縦位の貝殻刺突文を密に施す。77～79は楔形貼付突帯を施す口縁部付近の土器である。80は楔形貼付突帯を有しない土器である。口唇部は平坦面で、キザミを施さない。口縁部下には横位の貝殻刺突文を2条巡らせ、その下位に縦位の貝殻刺突文を密に施す。内面はナデ調整されているが、表面の剥落が著しい。81から88は胴部である。縦位の貝殻刺突文が密に施されてい



第119図 IIIc類土器 (1)

る。85はIV類土器に近いが、明確な横方向の押引文になっていないため、このグループに入れた。89・90は底部である。89は底部からほぼ垂直に立ち上がる。底部近くまで縦位の貝殻刺突文が確認出来る。90は、平底の底部で内外面ともに丁寧にナデ調整されている。胴部下位には、縦位の貝殻刺突文を密に施す。

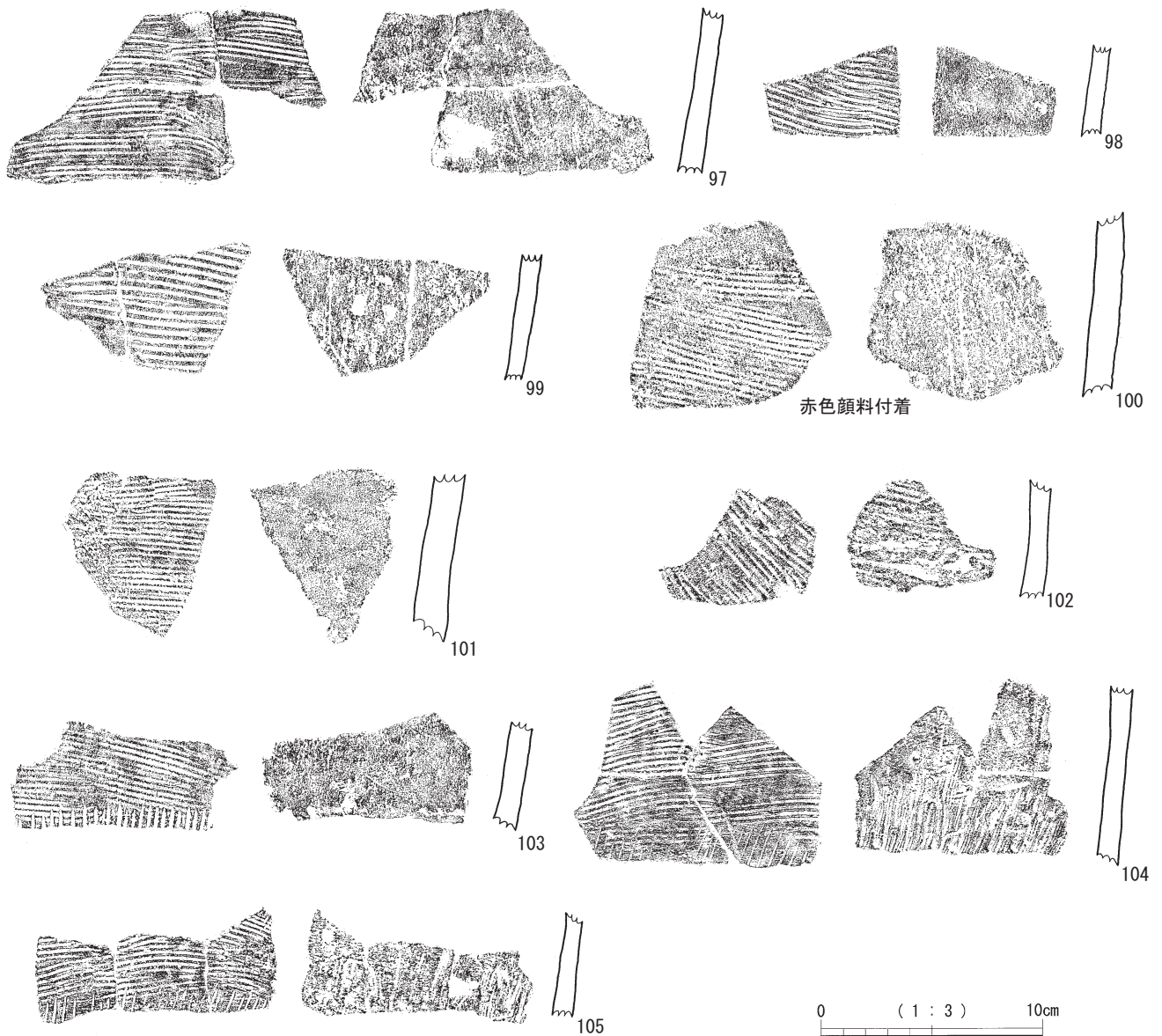
IIIc類土器 (第119・120図91～105)

IIIc類は、胴部に貝殻刺突文を施さない土器である。91～94は口縁部である。バケツ状の器形を成し、平坦な口唇部にはキザミを施す。口縁部には横位の貝殻刺突文を2ないし3条施し、その下位に横位の貝殻条痕文を施す。その上から厚みのある楔形貼付突帯を2列貼り付けている。内面は丁寧にナデ調整されている。92は、口縁部に斜位の貝殻刺突文を巡らし、その下位に横位の貝

殻条痕文を施している。横位の貝殻条痕文の上から棒状に近い楔形貼付突帯を3列貼り付けている。棒状楔形貼付突帯は、全体的に形や長さが不規則で作りが雑である。土器内外面にうっすらと赤色顔料を塗ったような痕跡が認められるが、60同様の分析結果である。

93は、やや外傾する器形で、平坦な口唇部にはキザミが施される。口縁部には、横位の貝殻刺突文が2条巡らされ、その下位に横位ないし斜位の貝殻条痕文が施される。口縁部下には、2列の楔形貼付突帯を貼り付けている。土器内面はナデ調整され、全体的に赤色顔料を施したように赤みがかっているが、60同様の分析結果である。95と96は口縁部に近い胴部で、95は楔形貼付突帯が施されている。96は、斜位の貝殻刺突文が施され、その下位に横位の貝殻条痕文がシャープに施されている。

97～102は胴部で、横位の貝殻条痕文がシャープに施



第120図 IIIc類土器 (2)

されている。100は、内外面に赤色顔料の施したような痕跡が確認できるが、60他土器と同様の分析結果である。

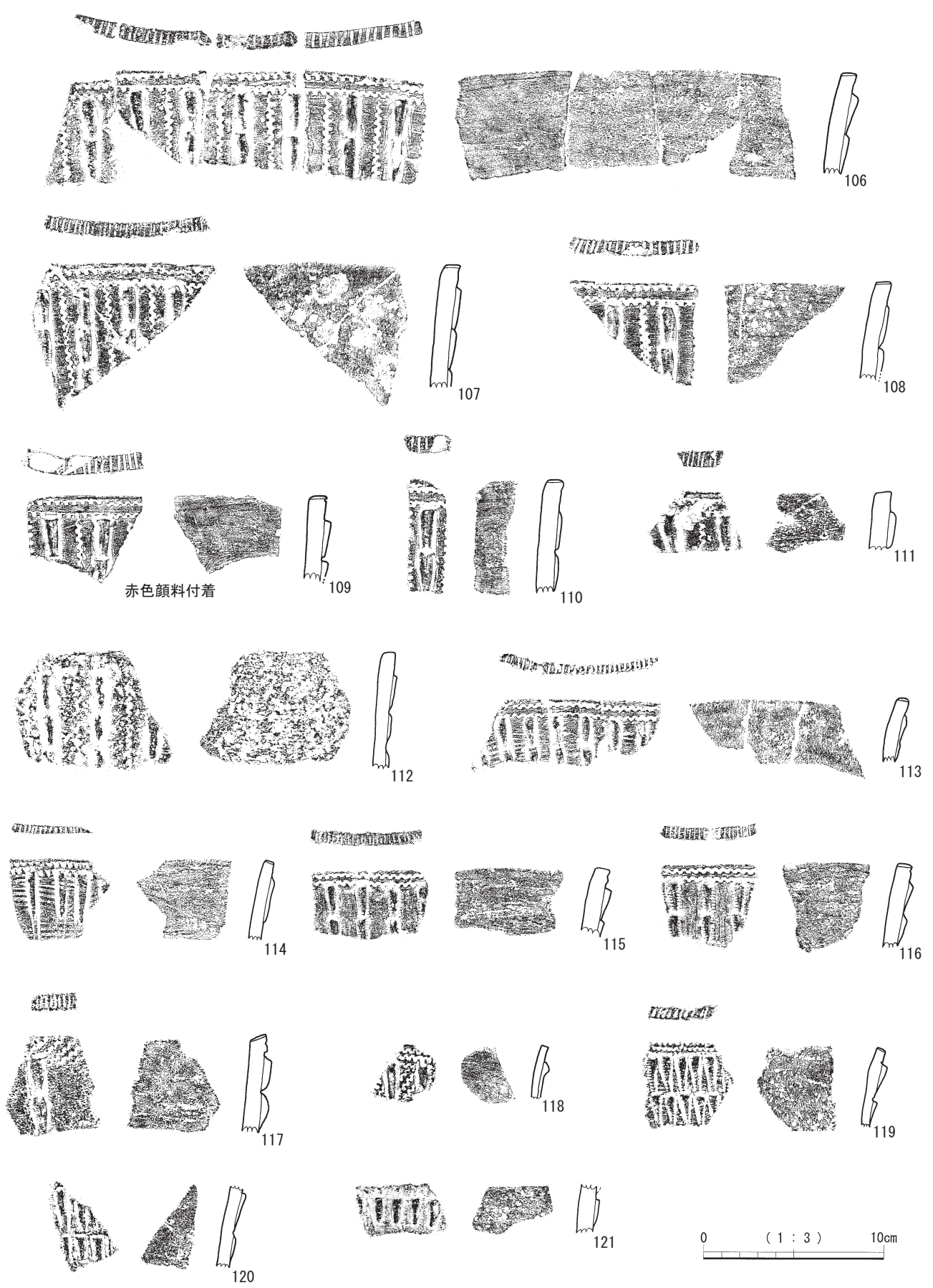
103～105は底部付近である。底部からの立ち上がり部分に、縦位ないし斜位の浅いきざみが施される。

III d類土器 (第121・122図106～130)

III d類は、胴部欠損のため分類できなかったものや底部を掲載した。

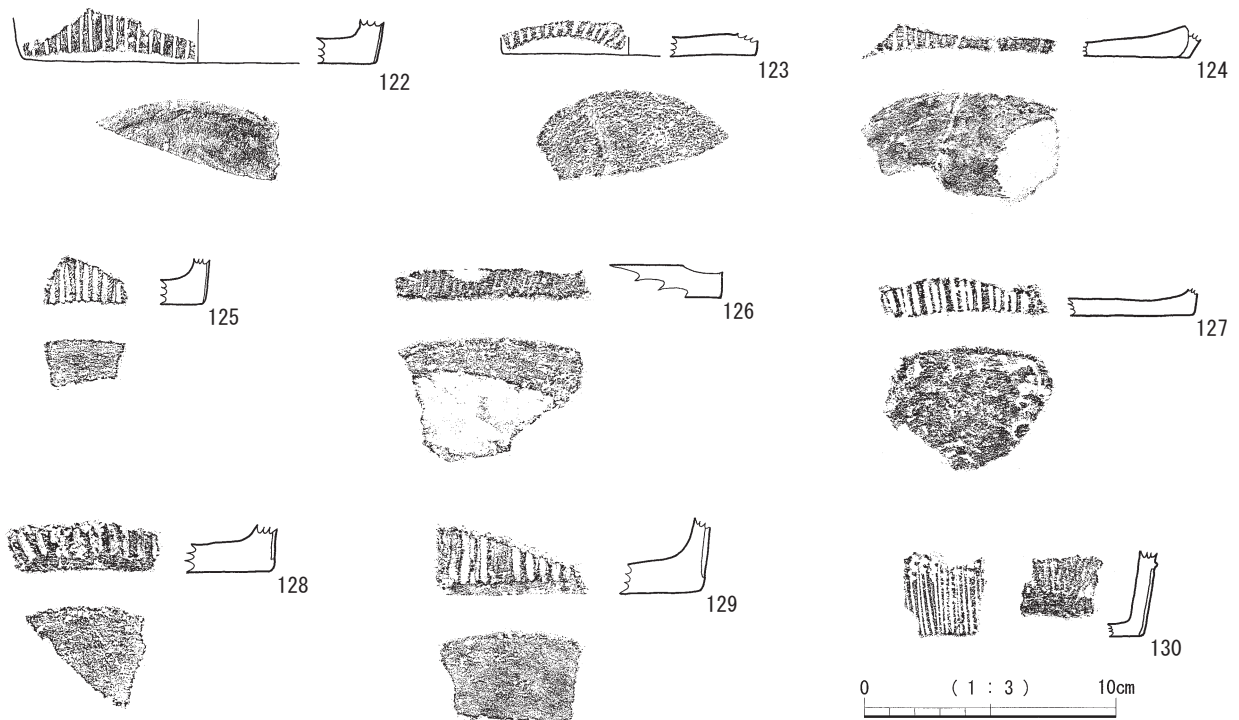
106～119は口縁部である。平坦な口唇部にキザミを施し、口縁部上端に横位の貝殻刺突文を2条程巡らせる。斜位の貝殻刺突文を施すものもある。その下位に楔形貼付突帯を等間隔で2ないし3列貼り付ける。

106は、楔形貼付突帯の間に縦位の貝殻刺突文を施す。109は、平坦な口唇部にキザミを施し、口縁部直下に2条の横位貝殻刺突文を巡らせる。その下位に楔形貼付突帯を2列貼り付けている。楔形貼付突帯間には、縦位の貝殻刺突文を1列施す。土器内面には、赤色顔料をうすく塗ったような痕跡が確認される。土器表面には煤が若干付着している。113と114は、施文形態がIII c類と似ている。口縁部直下の横位貝殻刺突文の下位に横位の貝殻条痕文を施し、その上から楔形貼付突帯を貼り付けている。III c類の可能性もあるが、胴部文様が不明のためここに掲載した。器壁は薄く、楔形貼付突帯は細くシャープである。



赤色顔料付着

第121図 Ⅲd類土器 (1)



第122図 III d類土器 (2)

115・116は口唇部にキザミを施し、口縁部には横位の貝殻刺突文を施す。その下位に楔形貼付突帯を施す。

117は口唇部が内傾し、ヘラ状工具によりキザミを施す。口縁部は斜位の貝殻刺突文を施し、その上から棒状に近い楔形貼付突帯を施す。外面は煤が全面に付着している。

118は、口唇部のキザミを施し、口縁部上端に横位の貝殻刺突文を2条巡らせる。その下位に斜位の貝殻刺突文を施した後から、楔形貼付突帯を貼り付けている。内面は丁寧にナデ調整されている。器壁は非常に薄い。

119は、口唇部にキザミを施し、口縁部上端に1条の貝殻刺突文を巡らせる。その下位にシャープな楔形貼付突帯を密に2列貼り付けている。内面はナデ調整されている。器壁はとても薄い。

120と121は口縁部に近い胴部小片である。2列の楔形

貼付突帯が確認できる。

122～130は底部である。平底の底部から立ち上がり部分に、ナデ調整を施した上から縦位の沈線文や細沈線文が施されている。

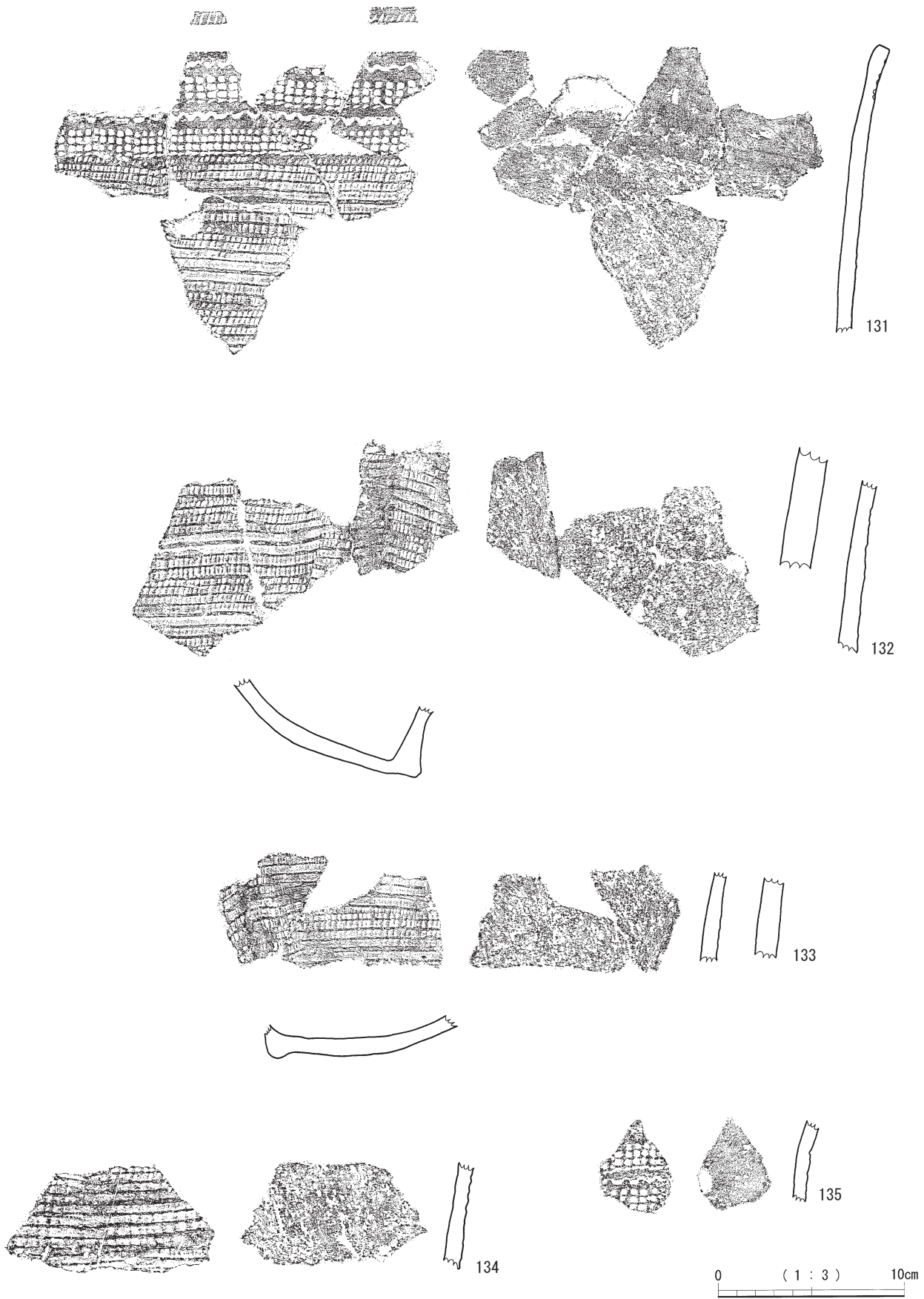
IV類土器 (第123・124図131～139)

IV類は、口縁部が緩やかに外反する円筒形の土器を基本とし、胴部に貝殻押引文を施す。レモン形を呈するものもある。

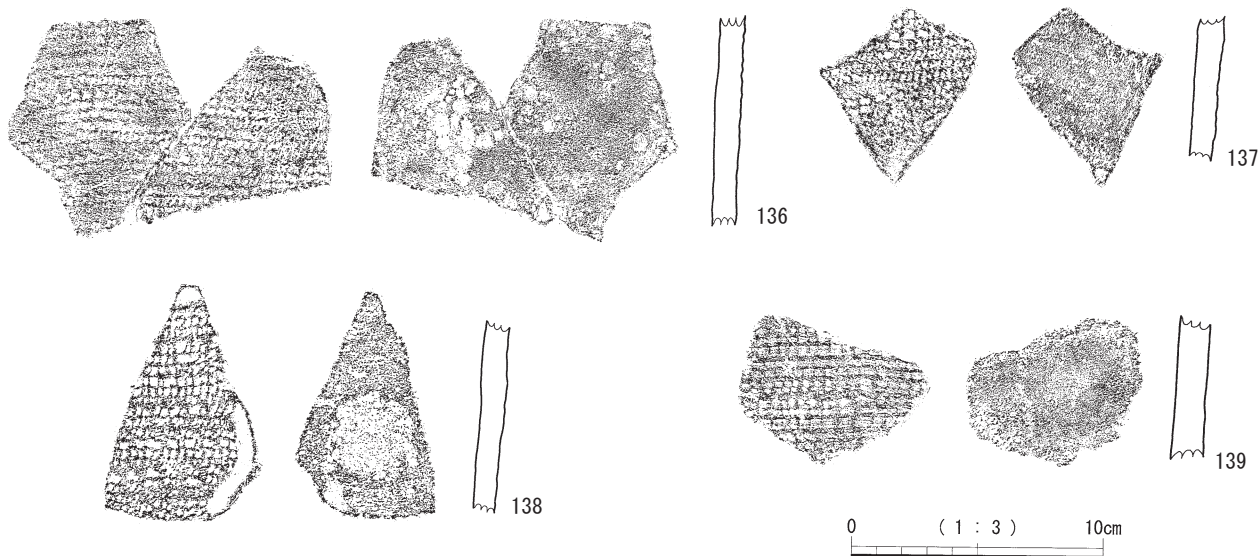
131～135は同一個体と思われる口縁部から胴部である。また、胴部の形態が屈曲部分から弧を描くように伸びていることから、レモン形を呈する土器と判断した。口縁部が外反し、直線的な胴部へと至る。口唇部は平坦で貝殻によるとと思われるキザミが施されている。口縁部は

第22表 土器観察表 (III a類)

挿図番号	掲載番号	器種	部位	類別	出土区	層	文様・器面調整等		色調		胎土				焼成	取上番号
							外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃石	他		
116	60	深鉢	口縁	III a	F38	VII a	貝殻条痕, 刺突, 楔	ナデ	7.5YR7/4にぶい橙	5YR6/6橙	○	○		黒雲母	良好	104906
	61	深鉢	胴	III a	G36	VII a	貝殻条痕, 刺突, 楔	ナデ	5YR6/6橙	5YR6/6橙	○	○	○		良好	102312
	62	深鉢	胴	III a	D39	VII a	貝殻条痕, 刺突	工具ナデ	7.5YR6/6橙	5YR6/6橙	◎	△	◎		良好	104870, 104871
	63	深鉢	胴	III a	F33 C39	IV a VII a	貝殻条痕, 刺突	工具ナデ	7.5YR6/6橙	10YR6/6明黄褐	○	○	○	黒雲母	良好	102014, 101993 102011
	64	深鉢	胴	III a	E39	VII a	貝殻条痕, 刺突	ナデ	7.5YR6/6橙	7.5YR6/6橙	◎	○	○		良好	104851
	65	深鉢	胴	III a	F12	IV b	貝殻条痕, 刺突	ナデ	10YR5/4にぶい黄褐	5YR5/6明赤褐	△	△		鉄鱗, 磁	良好	20276
	66	深鉢	胴	III a	F32	VII a	貝殻条痕, 刺突	工具ナデ	7.5YR6/6橙	7.5YR6/6橙	◎	△	◎		良好	105112
	67	深鉢	胴	III a	E6	VII	貝殻条痕, 刺突	ナデ	5YR5/6明赤褐	10YR5/4にぶい黄褐	◎	△	◎		良好	54955
	68	深鉢	胴	III a	E33 E34	VII a	貝殻条痕, 刺突	ナデ	5YR6/4にぶい橙	5YR6/4にぶい橙	◎	○	◎		良好	105121, 105003 104999
	69	深鉢	胴	III a	F33	VI	貝殻刺突文	ナデ	5YR6/6橙	7.5YR6/6橙	○	○	○		良好	105262
	70	深鉢	胴	III a	F36	VII a	貝殻刺突文	ナデ	7.5YR7/6橙	7.5YR7/6橙	○	○	○		良好	104923



第123図 IV類土器 (1)



第124図 IV類土器 (2)

縦位の貝殻刺突文を上下に挟むように横位の貝殻刺突文を施す。その下位には縦位の貝殻刺突文を巡らせる。胴部は、横方向の貝殻押引文である。胎土に小礫を多く含んでいるが、丁寧なナデが施されている。外面も施文の前に丁寧なナデが施されている。

136～139は、貝殻押引文を施す胴部である。136は煤の付着が確認される。

V類土器 (第125～127図140～127)

V類は、口縁部が外反または外傾する円筒形の土器を基本とする。口縁部は平縁または山形口縁もある。口縁部下には横位ないし斜位の貝殻刺突文を施し、胴部には綾杉状を基本とする貝殻条痕文を施す。

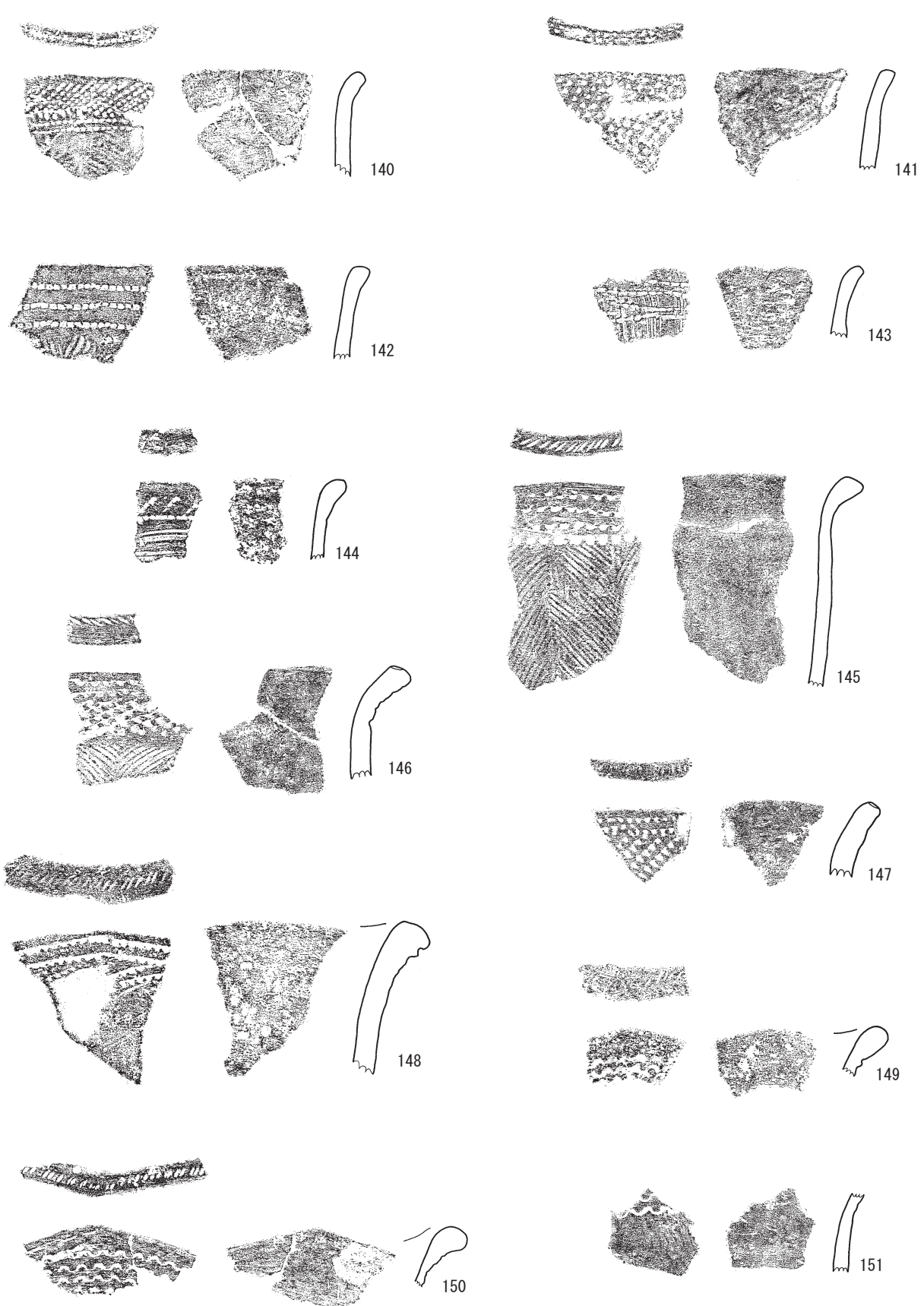
140～151は口縁部が外反する土器の口縁部と胴部である。140・141は口唇部に貝殻刺突文を施し、口縁部には斜位の貝殻刺突文を巡らせる。140はその下位に横位

第23表 土器観察表 (Ⅲb類)

挿図番号	掲載番号	器種	部位	類別	出土区	層	文様・器面調整等		色調		胎土				焼成	取上番号
							外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃石	他		
117	71	深鉢	口縁	Ⅲb	F34	VIIa	貝殻刺突、楔	ナデ	10YR5/2灰黄褐	10YR5/2灰黄褐	○	○	○		良好	102017
	72	深鉢	口縁	Ⅲb	F30	VIIa	貝殻刺突、楔	ナデ	10YR7/3にぶい黄褐	10YR6/4にぶい黄橙	◎	○	◎		良好	101584
	73	深鉢	口縁	Ⅲb	F39	VIIa	貝殻刺突、楔	ナデ	5YR6/6橙	5YR6/6橙	◎		○		良好	101951
	74	深鉢	口縁	Ⅲb	F39	VIIa	貝殻刺突、楔	ナデ	2.5YR5/6明赤褐	5YR5/6明赤褐	◎		○		良好	101950
	75	深鉢	口縁	Ⅲb	E6	VII	貝殻刺突、楔	ナデ	5YR5/6明赤褐	2.5YR5/8明赤褐	◎	△	○		良好	52878
	76	深鉢	口縁	Ⅲb	C40	VIIa	貝殻刺突、楔	ナデ	7.5YR6/6橙	7.5YR6/6橙	○		○		良好	104829
	77	深鉢	胴	Ⅲb	D4	VII	貝殻刺突、楔	ナデ	5YR5/6明赤褐	5YR5/6明赤褐	○		○		良好	52275
	78	深鉢	胴	Ⅲb	C2 E3	VII	貝殻刺突、楔	ナデ	5YR6/6橙	5YR6/6橙	○	○	◎		良好	50488, 52733 52745, 52746
	79	深鉢	胴	Ⅲb	F39	VIIa	貝殻刺突、楔	ナデ	5YR6/6橙	5YR6/6橙	○		○		良好	102308
	80	深鉢	口縁	Ⅲb	D5 D7	VII	貝殻刺突	ナデ	7.5YR5/6明赤褐	5YR5/6明赤褐	○		○		良好	52539, 52917 52918
	81	深鉢	胴	Ⅲb	F36	VIIa	貝殻刺突	ナデ	10YR5/3にぶい黄褐	10YR5/3にぶい黄褐	○	○	△	金雲母、白粒	良好	102313
	82	深鉢	胴	Ⅲb	D6 D7	VIIb	貝殻刺突	ナデ	10YR5/4にぶい黄褐	5YR5/6明赤褐	○		○		良好	49170, 53408
	83	深鉢	胴	Ⅲb	F37	VII	貝殻刺突	ナデ	5YR5/4にぶい赤	5YR5/4にぶい赤褐	◎	△	○		良好	104993, 104997
118	84	深鉢	胴	Ⅲb	C7	VII	貝殻刺突	ナデ	7.5YR6/6橙	5YR5/6明赤褐	○		○		良好	53636
	85	深鉢	胴	Ⅲb	F8	IVa	貝殻刺突	ナデ	2.5YR5/6明赤褐	5YR4/6赤褐	○		○		良好	23619
	86	深鉢	胴	Ⅲb	D4	VII	貝殻刺突	ナデ	7.5YR6/4にぶい橙	5YR5/6明赤褐	○	○	○		良好	52445
	87	深鉢	胴	Ⅲb	E3	VII	貝殻刺突	ナデ	5YR5/6明赤褐	5YR5/6明赤褐	○		○		良好	52684
	88	深鉢	胴	Ⅲb	D2 D3 C2	VII	貝殻刺突	ナデ	7.5YR6/6橙	2.5YR5/8明赤褐	○		○		良好	50505, 50507 50510, 52582 52589
	89	深鉢	底	Ⅲb	G32	VIIa	貝殻刺突	ナデ	5YR5/6明赤褐	5YR4/6赤褐	○		○		良好	102019
	90	深鉢	底	Ⅲb	F10	IVb	貝殻刺突	ナデ	7.5YR6/6橙	10YR6/4にぶい黄橙	○		○	白粒	良好	35014

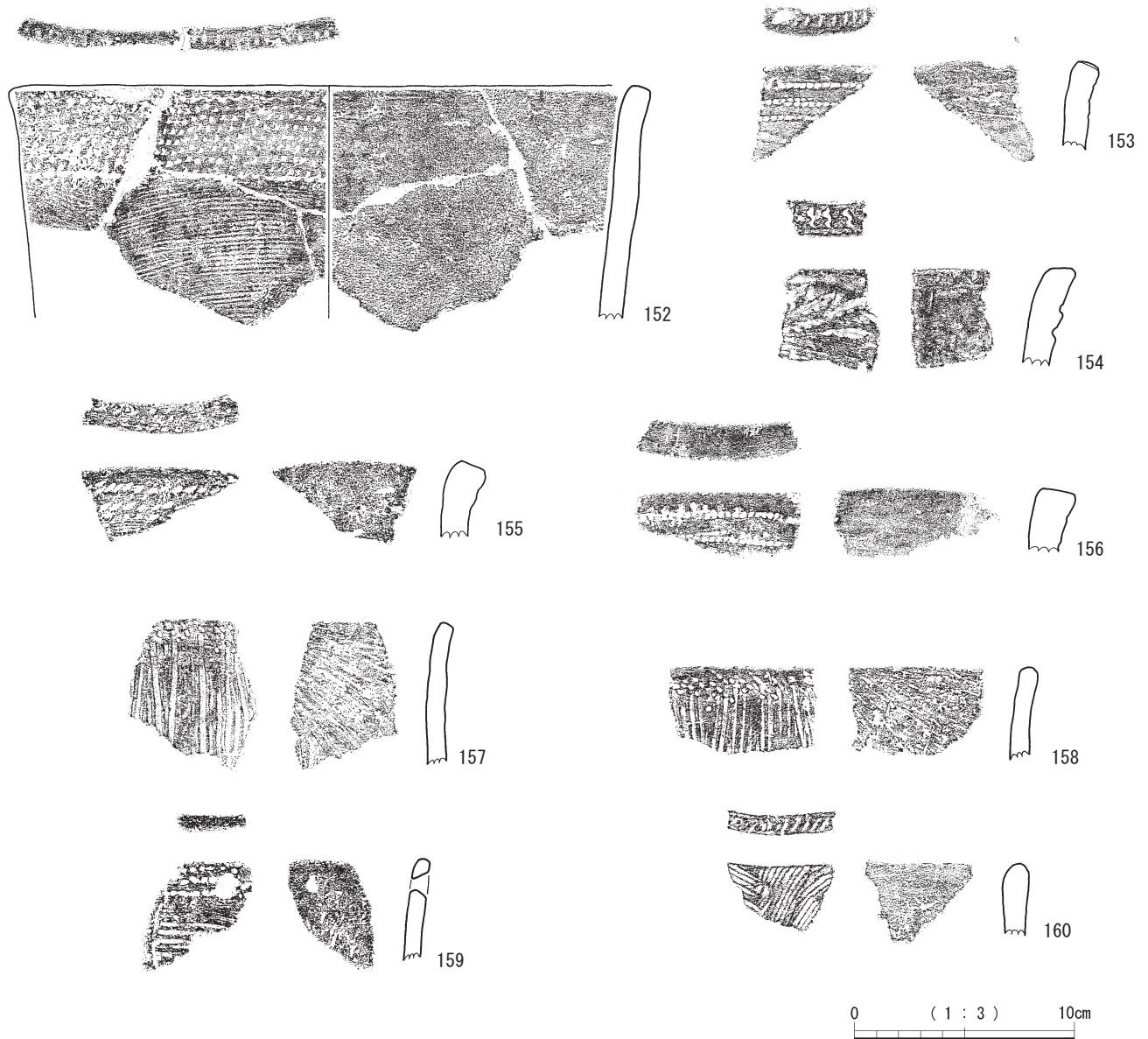
第24表 土器観察表 (Ⅲc～Ⅳ類)

挿図 番号	掲載 番号	器種	部位	類別	出土区	層	文様・器面調整等		色調		胎土				焼成	取上番号	
							外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃石	他			
119	91	深鉢	口縁	Ⅲc	E3 E4 F3	Ⅶ	貝殻条痕, 刺突, 楔	ナデ	25YR6/6橙	25YR5/8明赤褐	○	○	○	○	良好	52738, 51728 50271, 50278	
	92	深鉢	口縁	Ⅲc	C2,C4	Ⅶ	貝殻条痕, 刺突, 楔	ナデ	5YR4/8赤褐	5YR4/8赤褐	○	○	◎	黒雲母, 白粒	良好	52391, 91675	
	93	深鉢	口縁	Ⅲc	D6,F4	Ⅶ	貝殻条痕, 刺突, 楔	ナデ	10YR5/3にぶい黄褐	5YR4/8赤褐	○	○	○	黒雲母, 白粒	良好	52923, 50856	
	94	深鉢	口縁	Ⅲc	E4	Ⅶ	貝殻条痕, 刺突, 楔	ナデ	25YR5/8明赤褐	25YR5/6明赤褐	◎	○	○	○	良好	51260	
	95	深鉢	胴	Ⅲc	F5	Ⅶ	貝殻条痕, 楔	ナデ	7.5YR5/6明褐	7.5YR6/6橙	○	○	○	○	良好	49759	
	96	深鉢	胴	Ⅲc	F4	Ⅶ	貝殻条痕, 刺突	ナデ	7.5YR5/6明褐	5YR5/6明赤褐	○	○	○	○	良好	52837	
120	97	深鉢	胴	Ⅲc	C6 C7	Ⅶa Ⅶb	貝殻条痕	ナデ	5YR5/6明赤褐	5YR5/6明赤褐	○	○	○	○	良好	54157, 54156 53999	
	98	深鉢	胴	Ⅲc	C23	表土	貝殻条痕	ナデ	7.5YR6/6橙	5YR5/6明赤褐	○	△	○	○	良好	表土	
	99	深鉢	胴	Ⅲc	E5	Ⅶ	貝殻条痕	ナデ	5YR5/6明赤褐	7.5YR4/3褐	○	○	○	○	良好	51298	
	100	深鉢	胴	Ⅲc	E4	Ⅶ	貝殻条痕	ナデ	5YR5/6明赤褐	10YR7/4にぶい黄橙	○	○	○	白粒	良好	51262	
	101	深鉢	胴	Ⅲc	E6	Ⅶ	貝殻条痕	ナデ	5YR4/4にぶい赤褐	5YR4/4にぶい赤褐	○	○	○	○	良好	52949	
	102	深鉢	胴	Ⅲc	C7	Vb	貝殻条痕	貝殻条痕	5YR5/6明赤褐	5YR4/6赤褐	○	△	○	白粒	良好	48647	
	103	深鉢	胴	Ⅲc	E7	Ⅵ	貝殻条痕	ナデ	5YR4/8赤褐	5YR4/8赤褐	○	○	○	○	良好	49197	
	104	深鉢	胴	Ⅲc	C1.2 C6 C7	Ⅶ Ⅶb	貝殻条痕	ナデ	5YR4/6赤褐	5YR5/6明赤褐	○	○	○	○	良好	54283, 54320 SD36-1	
	105	深鉢	胴	Ⅲc	C6	Ⅶb	貝殻条痕	ナデ	5YR5/6明赤褐	5YR5/6明赤褐	△	○	○	○	良好	54154, 54281 54148	
121	106	深鉢	口縁	Ⅲd	D4 E3 E4	Ⅵ Ⅶa	貝殻刺突, 楔	ナデ	10YR5/4にぶい黄褐	5YR5/6明赤褐	◎	○	○	○	良好	52092, 52648 51279, 50151	
	107	深鉢	口縁	Ⅲd	C3	Ⅶ	貝殻刺突, 楔	ナデ	7.5YR6/6橙	5YR5/8明赤褐	○	○	○	○	良好	51999	
	108	深鉢	口縁	Ⅲd	E4	Ⅶ	貝殻刺突, 楔	ナデ	5YR6/6橙	5YR5/6明赤褐	○	○	○	○	良好	52335	
	109	深鉢	口縁	Ⅲd	F6	Ⅵ	貝殻刺突, 楔	ナデ	7.5YR6/6橙	5YR6/6橙	○	○	○	白粒	良好	47510	
	110	深鉢	口縁	Ⅲd	F3	Ⅵ	貝殻刺突, 楔	ナデ	7.5YR6/6橙	7.5YR6/6橙	○	○	○	○	良好	50258	
	111	深鉢	口縁	Ⅲd	F4	Ⅶ	貝殻刺突, 楔	ナデ	5YR6/6橙	5YR6/6橙	○	△	○	○	良好	51724	
	112	深鉢	口縁	Ⅲd	C2	Ⅵ	貝殻刺突, 楔	ナデ	7.5YR5/6明褐	5YR4/8赤褐	○	○	○	○	良好	52202	
	113	深鉢	口縁	Ⅲd	F4	Ⅵ	貝殻刺突, 楔	ナデ	7.5YR6/6橙	5YR4/8赤褐	◎	△	△	○	良好	50817	
	114	深鉢	口縁	Ⅲd	F8	Ⅳb	貝殻刺突, 楔	ナデ	7.5YR5/4にぶい黄褐	10YR5/4にぶい黄褐	○	○	○	○	良好	30806	
	115	深鉢	口縁	Ⅲd	C23	表土	貝殻刺突, 楔	ナデ	25YR5/8明赤褐	25YR5/6明赤褐	○	○	○	○	良好	表土	
	116	深鉢	口縁	Ⅲd	C3	Ⅶ	貝殻刺突, 楔	ナデ	25YR5/6明赤褐	25YR5/6明赤褐	○	○	○	○	良好	52257	
	117	深鉢	口縁	Ⅲd	F4	Ⅶ	貝殻刺突, 楔	ナデ	7.5YR6/4にぶい黄橙	7.5YR6/4にぶい黄橙	○	○	○	○	良好	51744	
	118	深鉢	口縁	Ⅲd	F33	Ⅵ	貝殻刺突, 楔	ナデ	5YR6/8橙	5YR6/6橙	○	○	○	○	良好	105264	
	119	深鉢	口縁	Ⅲd	C3	Ⅶ	貝殻刺突, 楔	ナデ	25YR5/6明赤褐	5YR5/4にぶい赤褐	○	○	○	金雲母	良好	52421	
	120	深鉢	胴	Ⅲd	F3	Ⅶ	ナデ, 楔	ナデ	10YR7/4にぶい黄橙	7.5YR6/4にぶい黄橙	○	○	○	○	良好	52770	
	121	深鉢	胴	Ⅲd	C3	Ⅶ	ナデ, 楔	ナデ	10YR7/4にぶい黄橙	10YR7/4にぶい黄橙	○	○	○	○	良好	51990	
	122	122	深鉢	底	Ⅲd	D36	Ⅶa	縦位沈線	ナデ	5YR5/6明赤褐	5YR5/6明赤褐	○	○	○	○	良好	104952
		123	深鉢	底	Ⅲd	C40	Ⅶa	縦位沈線	ナデ	7.5YR6/6橙	7.5YR7/6橙	○	○	○	○	良好	104831, 104832
		124	深鉢	底	Ⅲd	E12	Ⅵ	縦位沈線	ナデ	5YR5/6明赤褐	5YR5/6明赤褐	○	○	○	○	良好	25075
		125	深鉢	底	Ⅲd	C42	Ⅳa	縦位沈線	ナデ	7.5YR5/4にぶい黄褐	5YR6/6橙	○	○	○	○	良好	105132
126		深鉢	底	Ⅲd	G35	Ⅶa	縦位沈線	ナデ	10YR7/6明黄褐	7.5YR7/6橙	○	○	○	○	良好	102083	
127		深鉢	底	Ⅲd	E3	Ⅶ	縦位沈線	ナデ	7.5YR6/6橙	7.5YR6/6橙	○	○	○	○	赤粒	良好	52744
128		深鉢	底	Ⅲd	D6	Ⅶb	縦位沈線	ナデ	7.5YR5/3にぶい黄褐	5YR5/4にぶい赤褐	○	○	○	○	金雲母, 白粒, 赤粒	良好	54165
129		深鉢	底	Ⅲd	B8	Ⅶ	縦位沈線	ナデ	10YR5/3にぶい黄褐	5YR5/4にぶい赤褐	○	○	○	○	金雲母, 白粒, 赤粒	良好	53806
130		深鉢	底	Ⅲd	E36	Ⅶa	貝殻刺突, 条痕	ナデ	10YR8/4黄黄褐	10YR7/4にぶい黄橙	△	△	△	○	良好	105012	
123	131	深鉢	口縁	Ⅳ	E13 E14 F13	Ⅵ	貝殻刺突, 押引	ケズリ ナデ	10YR5/4にぶい黄褐	10YR5/4にぶい黄褐	△	△	△	○	金雲母, 白粒, 赤粒	良好	19587, 19591, 16031, 16032, 16039, 19658
	132	深鉢	胴	Ⅳ	E14	Ⅵ	押引	ナデ	10YR5/4にぶい黄褐	10YR5/4にぶい黄褐	△	△	△	○	金雲母, 白粒, 赤粒	良好	17225, 17227, 19659, 19662
	133	深鉢	胴	Ⅳ	9T	Ⅵ	押引	ケズリ	10YR5/4にぶい黄褐	10YR5/4にぶい黄褐	△	△	△	○	金雲母, 白粒, 赤粒	良好	9T8, 9T21
	134	深鉢	胴	Ⅳ	F13	Ⅵ	押引	ケズリ	10YR6/3にぶい黄橙	10YR4/4褐	△	△	○	○	白粒, 赤粒	良好	19583
	135	深鉢	胴	Ⅳ	E15	Ⅵ	貝殻刺突, 押引	ナデ	10YR6/2灰黄褐	10YR6/2灰黄褐	△	△	○	○	白粒	良好	17466
124	136	深鉢	胴	Ⅳ	D2	Ⅵ	押引	ナデ	10YR7/6明黄褐	5YR6/6橙	○	○	○	○	赤粒	良好	50639, 50597
	137	深鉢	胴	Ⅳ	F3	Ⅶ	押引	ナデ	10YR7/4にぶい黄橙	5YR5/6明赤褐	○	○	○	○	良好	53132	
	138	深鉢	胴	Ⅳ	E4	Ⅶ	押引	ナデ	10YR7/6明黄褐	5YR5/6明赤褐	○	○	○	○	良好	51603	
	139	深鉢	胴	Ⅳ	F8	Ⅳb	押引	ナデ	5YR6/8橙	10YR3/3暗褐	◎	○	○	○	白粒, 赤粒	良好	30769



0 (1 : 3) 10cm

第125図 V類土器 (1)



第126図 V類土器 (2)

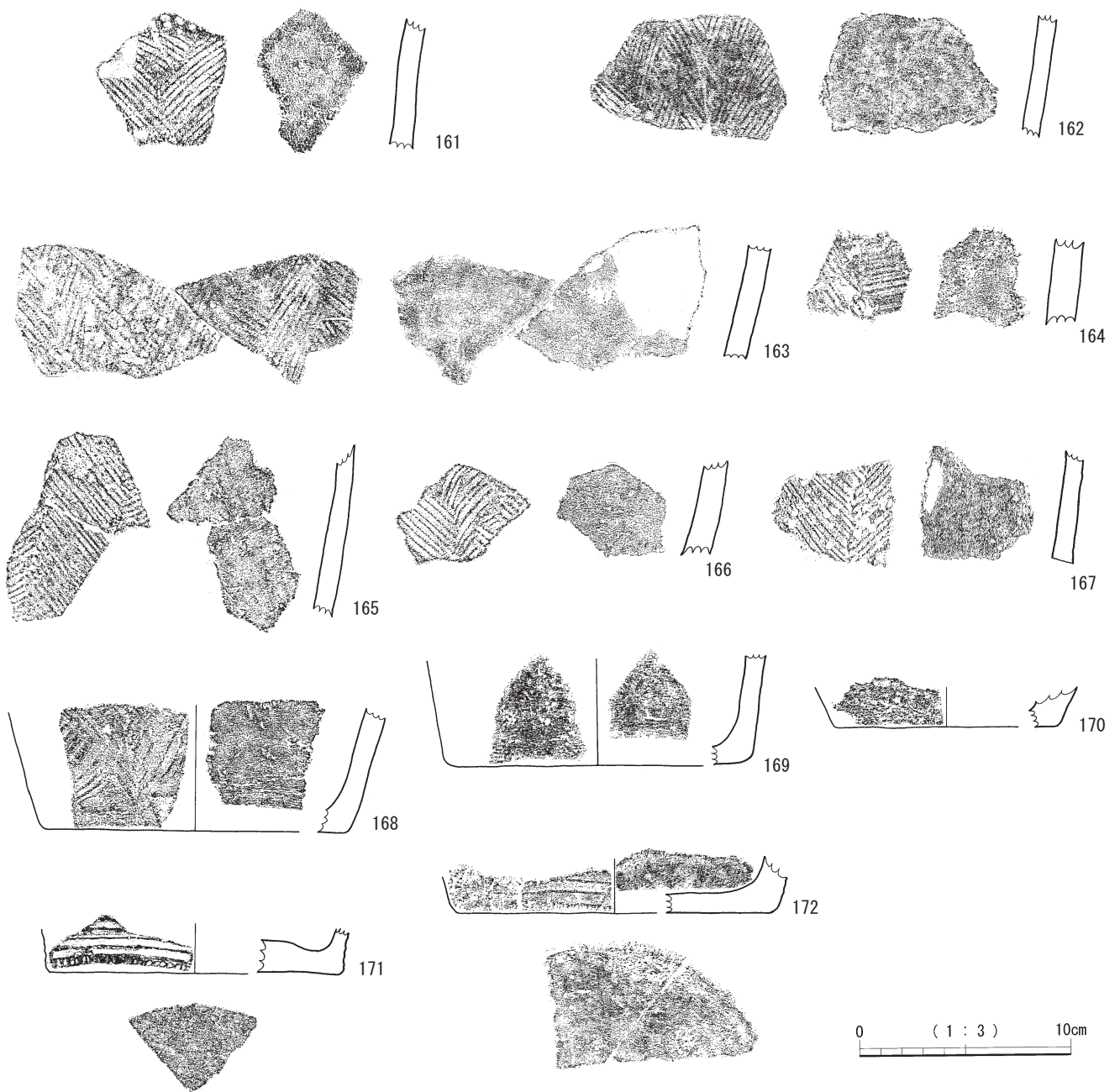
の貝殻刺突文を2条施す。胴部には綾杉状の貝殻条痕文を施す。142は、口唇部は舌状を呈し、口縁部には3条の貝殻刺突文を施す。胴部には綾杉状の貝殻条痕文が施される。内面は丁寧なナデが認められる。胎土に小礫を多く含む。143は、横位に近い斜位の貝殻刺突文を施す。その下位には横位の貝殻刺突文が巡るが、貝殻刺突文同士が丁寧に重なっていない。胴部には、縦位の貝殻条痕が施されるが、口縁部文様と斬り合っている。内面は丁寧なナデが認められる。144は、口縁部が外反し、口唇部は丸みをおびる。口縁部に短い斜位の貝殻刺突文を施し、その下位には横位の貝殻刺突文が巡る。胴部は、横位の貝殻条痕文である。内面は横位の丁寧なナデが施されている。145は、口縁がやや山形状を呈し、口唇部に

キザミを施す。口縁部には横位の貝殻刺突文を4条巡らせ、その下の胴部には綾杉状の貝殻条痕文を施す。内面は丁寧なナデが認められる。

146は、口縁部をやや肥厚させ、口唇部内端にキザミを施す。口縁部には横位の貝殻刺突文を2条巡らせ、その下位に斜位の貝殻刺突文を巡らせる。胴部には、綾杉状の貝殻条痕文を施す。内面は丁寧なナデが確認される。

148は、山形口縁を呈し、口縁部は肥厚する。丸みを帯びた口唇部にはキザミを施す。口縁部には横位の貝殻刺突文を山形に2条巡らせ、その下位に斜位の貝殻刺突文を施す。胴部はかろうじて斜位の貝殻条痕文が認められる。

149・150は共に山形口縁を呈する。149は口縁部には



第127図 V類土器 (3)

2条の貝殻刺突文を施す。151は150と同一個体と思われる胴部である。丁寧なナデ調整の後施文している。

152～160は、やや外傾する器形の口縁部である。

152は平口縁の口唇部にキザミを施し、口縁部には斜位の貝殻刺突文を挟むように上下に横位の貝殻刺突文を施す。胴部には、浅めの綾杉状貝殻条痕文を施す。内面は丁寧なナデが認められる。胎土に小礫を多く含む。153は、口唇部にキザミを施し、口縁部には横位の貝殻刺突文を施す。内面は丁寧な工具ナデが認められる。154は、口唇部に貝殻殻頂部押圧を巡らせる。口縁部に

は貝殻刺突文を深く施文している。内面は丁寧なナデが確認される。口縁部内外面に若干の煤が認められる。155は、やや外傾する器形で、口縁部は肥厚している。口唇部外端には、ヘラ状工具によるキザミが確認できる。口縁部は、ヘラ状工具による斜位の短沈線が3条巡らされる。156は、口縁部が肥厚し、口唇部は平坦にナデ調整されている。口縁部は横位の貝殻刺突文が2条巡る。内面は丁寧なナデが確認できる。157・158は、口唇外端まで貝殻刺突文を斜位に施し、その下位に縦位の貝殻条痕文を鮮明に施す。内面はケズリが行われている。159は、

口縁部に3条の貝殻刺突文を横位に巡らせ、その下位に横位の貝殻条痕文を施す。口縁部上部に両側より穿孔した補修孔が認められる。160は、丁寧にナデ調整された口唇部にキザミを施し、口唇部外端より緩杉状の貝殻条痕文を施す。内面は丁寧にナデが認められる。

161～167は緩杉状の貝殻条痕文を施す胴部である。

168～172は、V類の底部である。171は底部外端部にキザミを施し、胴部下位には幅約3mmの幅広沈線を4条施す。底部内面は、中心部へ向かい肥厚する。172は、底部外端部にキザミを施し、胴部下位には幅約4mmの幅広沈線を3条巡らせる。

VI類土器 (第129～137図)

VI類土器は、口縁部が緩やかに内湾または直行する器形で、口唇部にいくに従い器壁が厚くなるものがある。口縁部は平縁もあるが、山形を有するものもある。口唇部は平坦面を有する。

VIa類土器 (第129～131図173～228)

VIa類は、口縁部に横位の貝殻刺突文を施し、胴部には貝殻条痕による「Z」字状の貝殻刺突文を施す。口縁

部下に縦位または横位の瘤状突起が付くものもある。

173～199は口縁部である。173は、VI類土器の中で最も大きな破片資料である。口縁部で緩やかに内湾し、口唇部は丁寧にナデが認められる。口縁部には約10条位の貝殻刺突文を横位に施し、その下に「Z」字状に貝殻刺突文を密に行う。口縁部上端には貝殻刺突文を一部ナデ消した箇所が認められる。内面は丁寧にヘラナデが確認される。174は、口縁部で緩やかに内湾し、口唇部は丁寧にナデが認められる。口縁部文様帯には、区画するように縦位の貝殻刺突文を短めに施し、その間を埋めるように横位の貝殻刺突文を10条施す。一部は縦位の貝殻刺突文を切っている。その下位には斜位の貝殻刺突文を施す。内面は丁寧にナデが確認される。177は、緩やかに内湾し、口唇部は丁寧にナデが確認される。口縁部には短い瘤状突起が貼り付けられているが、1段目の突起は間隔が開いて貼り付けられる。2段目は等間隔に貼り付けている。その後口縁部上端より横位の貝殻刺突文を10条程度施すが、瘤状突起の上にも施文を行う。胴部には斜位の貝殻刺突文を施す。内面は丁寧にヘラナデが確認される。183は、口縁部に補修孔と思われる穿孔が施されているが、貫通していない。187は、口縁部がやや肥

第25表 土器観察表 (V類)

挿図 番号	掲載 番号	器種	部位	類別	出土区	層	文様・器面調整等		色調		胎土				焼成	取上番号
							外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃石	他		
125	140	深鉢	口縁	V	E5	VI	貝殻刺突, 条痕	ナデ	10YR6/4にぶい黄橙	7.5YR3/2黒褐	○	○	○		良好	52313
	141	深鉢	口縁	V	F2	VI	貝殻刺突	ナデ	7.5YR6/6橙	7.5YR4/3褐	○	○	○		良好	48951
	142	深鉢	口縁	V	C4	VI	貝殻刺突, 条痕	ナデ	2.5Y5/3黄褐	10YR5/3にぶい黄褐		○		金雲母, 白粒	良好	52026
	143	深鉢	口縁	V	D21	VI	貝殻刺突, 条痕	ナデ	10YR7/6明黄褐	10YR7/4にぶい黄橙	○	○	○		良好	19905
	144	深鉢	口縁	V	C39	VI	貝殻刺突, 条痕	ナデ	10YR5/3にぶい黄褐	10YR4/2灰黄褐	△	△		金雲母, 白粒	良好	104878
	145	深鉢	口縁	V	E36	VIa	貝殻刺突, 条痕	ナデ	5YR5/4にぶい赤褐	7.5YR5/4にぶい褐	○	○	△		良好	105009, 105010
	146	深鉢	口縁	V	D9	VI	貝殻刺突, 条痕	ナデ	7.5YR4/3褐	5YR4/4にぶい赤褐	○	○	○	白粒	良好	47777
	147	深鉢	口縁	V	F14	VI	貝殻刺突	ナデ	10YR7/6明黄褐	5YR6/6橙	○	○	○		良好	24920
	148	深鉢	口縁	V	F4	VI	貝殻刺突, 条痕	ナデ	7.5YR7/6橙	10YR6/4にぶい黄橙	○	○	○	白粒, 赤粒	良好	50818
	149	深鉢	口縁	V	F2	VI	貝殻刺突	ナデ	5YR6/6橙	5YR5/4にぶい赤褐	○	○	○		良好	50335
	150	深鉢	口縁	V	E3	VI	貝殻刺突	ナデ	5YR6/6橙	7.5YR7/6橙	○	○			良好	52654
	151	深鉢	胴	V	F3	VI	貝殻刺突	ナデ	7.5YR6/6橙	7.5YR5/4にぶい褐	○	○		白粒	良好	51800
	152	深鉢	口縁	V	F7, E8	IV ^b VI	貝殻刺突, 条痕	ナデ	10YR6/4にぶい黄橙	10YR6/4にぶい黄橙	△	○		金雲母, 白粒	良好	45133, 46827, 47410
	153	深鉢	口縁	V	C7	VI	貝殻刺突	ナデ	5YR5/6明赤褐	5YR5/6明赤褐	△	○	○	金雲母	良好	54255
	154	深鉢	口縁	V	D6	VI	貝殻刺突	ナデ	5YR4/3にぶい赤褐	10YR4/3にぶい黄褐	○	○	○	赤粒	良好	52874
155	深鉢	口縁	V	F12	VI	刺突(ハラ状工具)	ナデ	7.5YR7/6橙	10YR7/4にぶい黄橙	○	○	○	白粒	良好	20884	
156	深鉢	口縁	V	F4	VIa	貝殻刺突	ナデ	10YR6/4にぶい黄橙	10YR5/3にぶい黄褐	○	○	○		良好	51709	
157	深鉢	口縁	V	D7	VIb	貝殻刺突, 条痕	ケズリ	10YR5/3にぶい黄褐	10YR4/2灰黄褐	○	△	△	金雲母, 白粒	良好	54811	
158	深鉢	口縁	V	D6	VI	貝殻刺突, 条痕	ケズリ	10YR5/3にぶい黄褐	10YR4/2灰黄褐	○	○	△	金雲母, 白粒	良好	52886	
159	深鉢	口縁	V	E4	VI	貝殻刺突, 条痕	ナデ	10YR7/4にぶい黄橙	10YR7/4にぶい黄橙	△	△		金雲母	良好	51221	
160	深鉢	口縁	V	B5	IVb	貝殻条痕	ナデ	5YR6/6橙	10YR5/3にぶい黄褐	○		△		良好	45550	
161	深鉢	胴	V	E11	VI	貝殻条痕, 刺突	ナデ	10YR7/3にぶい黄橙	7.5YR5/4にぶい褐	○	○	○	白粒, 赤粒	良好	24896	
162	深鉢	胴	V	E36	VIa	貝殻条痕	ナデ	5YR6/6橙	7.5YR4/2灰褐	○	○	○		良好	105013, 105014	
163	深鉢	胴	V	C3, E3	VI	貝殻条痕	ナデ	2.5YR5/6明赤褐	7.5YR5/6明褐	○				良好	52673, 53186	
164	深鉢	胴	V	D12	VI	貝殻条痕	ナデ	7.5YR4/6褐	10YR4/3にぶい黄褐	○	○	○	白粒, 赤粒	良好	25087	
165	深鉢	胴	V	C20	VI	貝殻条痕	ナデ	5YR6/6橙	7.5YR6/4にぶい橙	○	○	○		良好	19894, 19895	
166	深鉢	胴	V	F6	VI	貝殻条痕	ナデ	5YR5/6明赤褐	5YR4/4にぶい赤褐	○	○	○		良好	50991	
167	深鉢	胴	V	C30	VI	貝殻条痕	ナデ	5YR5/6明赤褐	10YR4/2灰黄褐	○	○	○		良好	19893	
168	深鉢	底	V	D6	VI	貝殻条痕	ナデ	5YR5/6明赤褐	5YR5/4にぶい赤褐	○	○	○	赤粒	良好	51937	
169	深鉢	底	V	E6	VI	貝殻条痕	ナデ	7.5YR7/6橙	10YR8/6黄橙	○	○	○		良好	54761	
170	深鉢	底	V	D2	IVb	ナデ	-	10YR7/4にぶい黄橙	10YR6/4にぶい黄橙	△	○		金雲母, 白粒	良好	46909	
171	深鉢	底	V	D5	VI	貝殻条痕	ナデ	7.5YR7/6橙	5YR6/6橙	△	△		白粒, 赤粒	良好	52564	
172	深鉢	底	V	E8	IV ^b VI	貝殻条痕	ナデ	7.5YR7/6橙	10YR7/6明黄褐	○	○	○	白粒, 赤粒	良好	28476, 49071	

厚し、内湾する。口唇部は丁寧にナデ調整されている。口縁部には横位の貝殻刺突文を3条巡らせる。その下位に斜位の沈線が確認できる。口縁部の状況からここに分類した。188はやや内湾する口縁部で、瘤状の突起を持ち、この瘤状突起を境に方形状に器形が屈曲する。瘤状突起部分がやや高くなり、山形口縁状を呈する。文様は口縁部に横位の貝殻刺突文、胴部に「Z」字状の貝殻刺突文を施す。189・190は、188と同様、瘤状突起を持ち、この箇所器形が屈曲する。189の内面は丁寧にヘラナデされ、口縁部付近に植物の圧痕が確認された。191は、口縁部に横位の貝殻刺突文を施さず、斜位の貝殻刺突文とその下位に「Z」字状の貝殻刺突文を施す。195は、口縁部がやや肥厚し、若干波状口縁の様相を呈する。口唇部は平坦面を呈し、丁寧にナデ調整されている。口縁部には横位の貝殻刺突文を2条巡らせ、その下位に「Z」字状の貝殻刺突文を施す。内面は丁寧にナデ調整され、口縁部付近に堅果類等の果皮片の圧痕が確認できる。199は、口唇部が舌状を呈する。口縁部下に横位の瘤状突起を貼り付けた後、横位の貝殻刺突文を施す。

200～223は胴部である。201は、口縁部に近い胴部で、縦位の瘤状突起が確認できる。202～204は、横位の瘤状突起が貼り付けられている。瘤状突起の上から貝殻刺突文が施される。

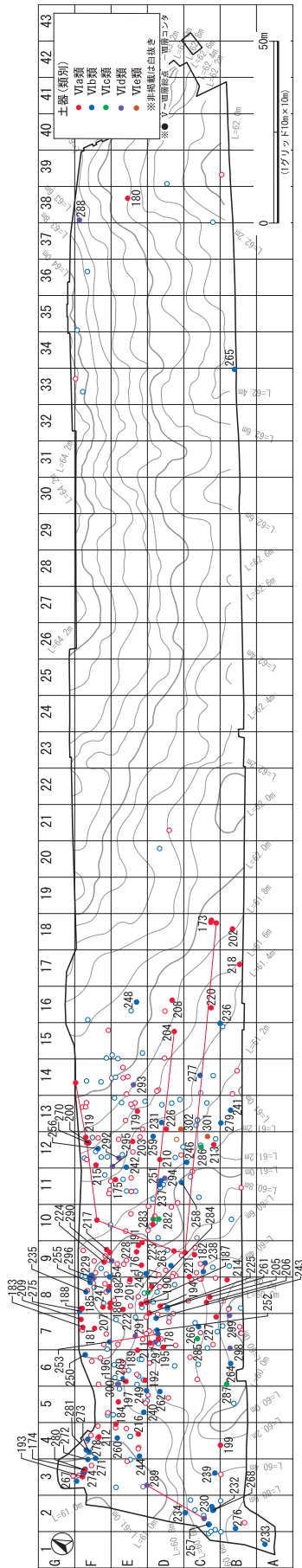
224～228は底部である。胴部下部まで貝殻刺突文を施す。

VIb類土器 (第132～134図229～281)

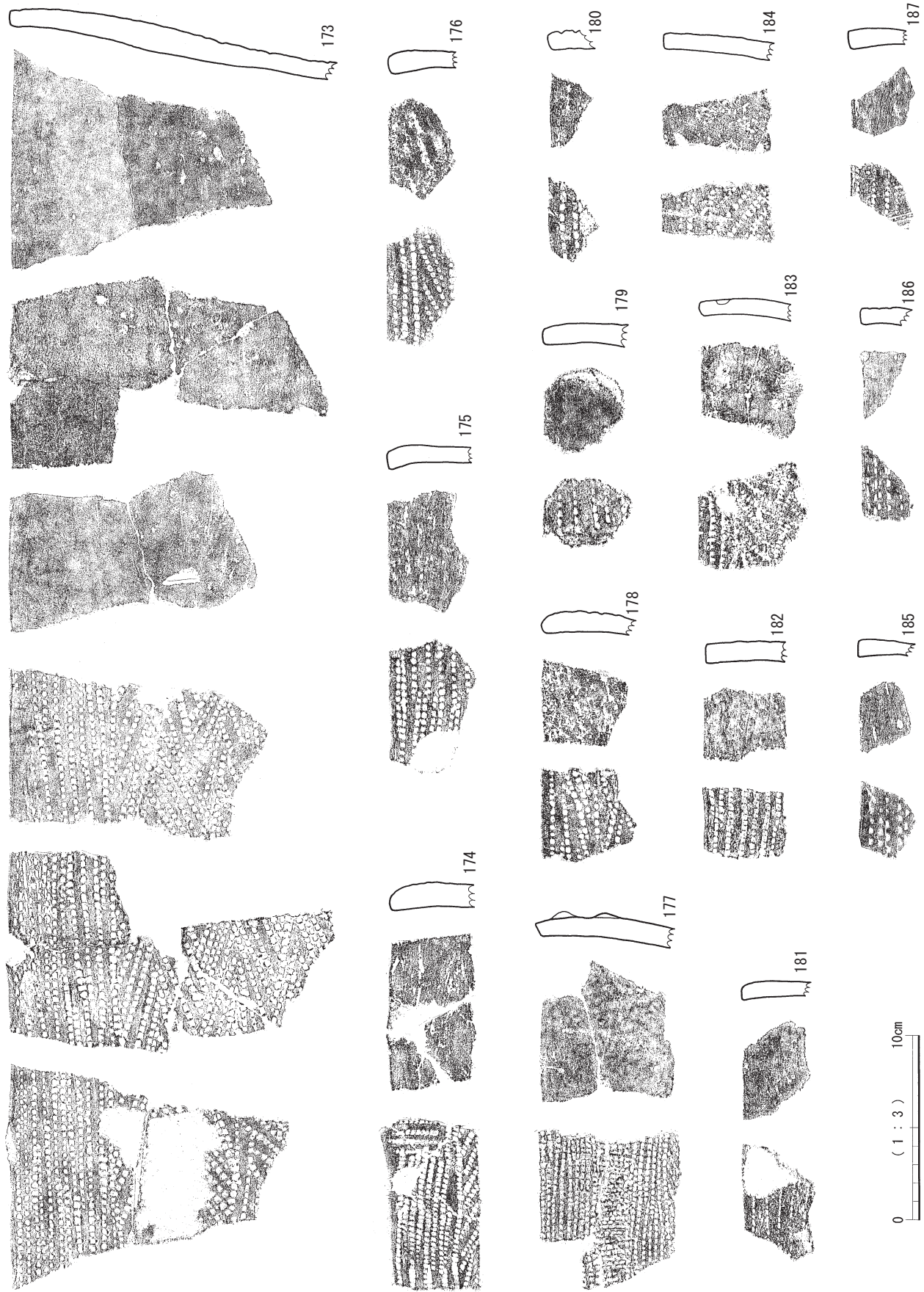
VIb類は、胴部の施文が縦位ないし「V」字状の貝殻刺突文を施す。

229～248は口縁部である。229は口縁部で内湾し、口唇部は平坦にナデ調整されている。口縁部は、横位の貝殻刺突文を3条施巡らせ、その下位に縦位の貝殻刺突文を密に施す。内面はナデが認められる。230は、胎土に金雲母が認められる。233は口縁部下に横位の瘤状突起を貼り付けている。238は、口唇部をナデで平坦に仕上げている。口縁部は斜位の貝殻刺突文を施し、それを上下に挟むように横位の貝殻刺突文を施す。胴部には縦位ないし斜位の貝殻刺突文を密に施す。内面は丁寧にナデ調整されている。239は、緩やかに外傾し、口縁部上位でやや内湾する波状口縁の土器である。口縁部には横位の貝殻刺突文を巡らせ、胴部には縦位ないし斜位の貝殻刺突文を施す。242は、内外面を丁寧にナデ調整し、口縁部には横位、胴部には鋸歯状に貝殻刺突文を施す。245は、内外面を丁寧にナデ調整し、口縁部に瘤状突起を貼り付けている。246は、口縁部の横位貝殻刺突文を斜位の刺突文が一部切っている。内外面ともに丁寧にナデ調整がされ、胎土には金雲母が確認できる。

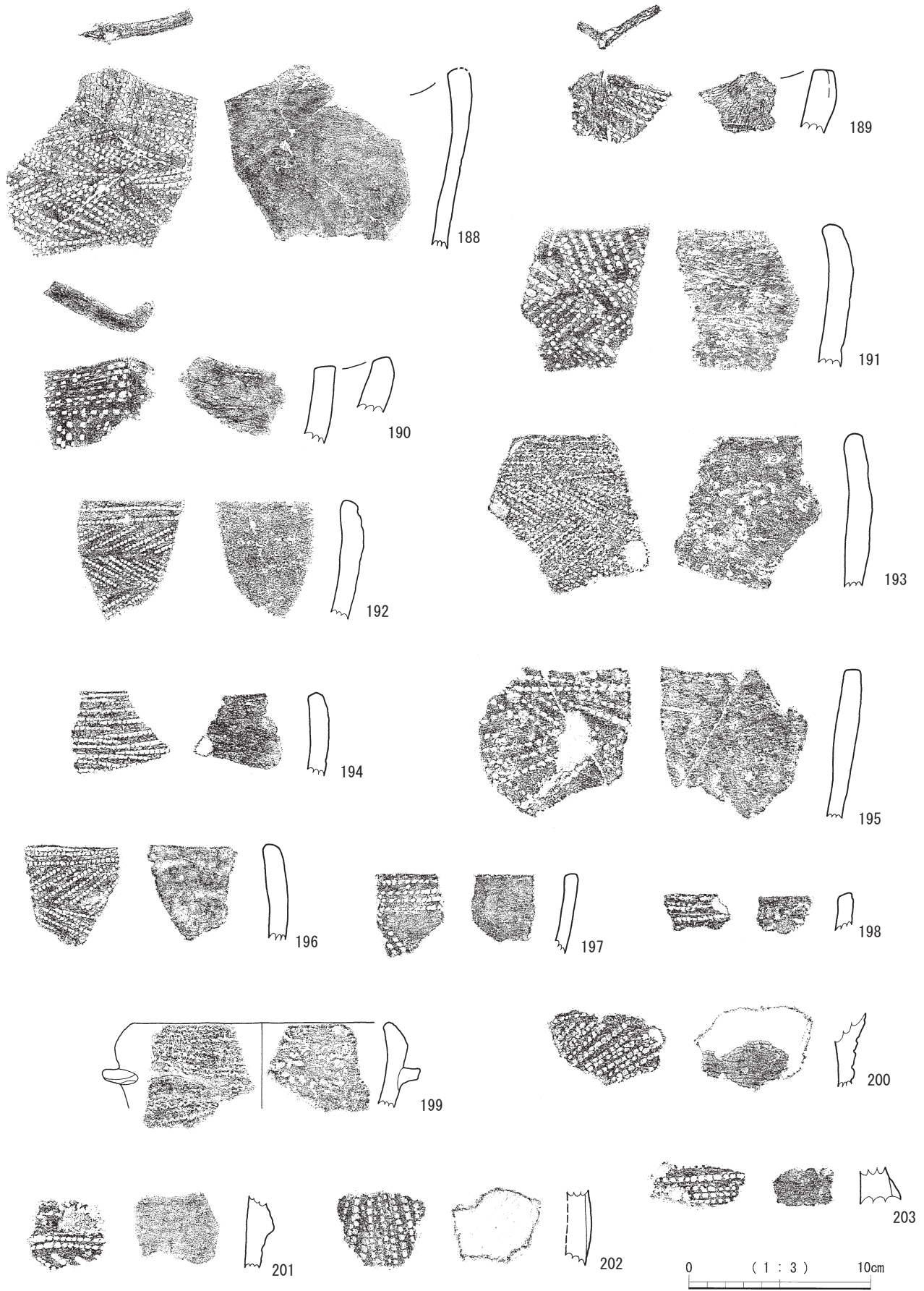
249～267は胴部である。249は、横位の貝殻刺突文の



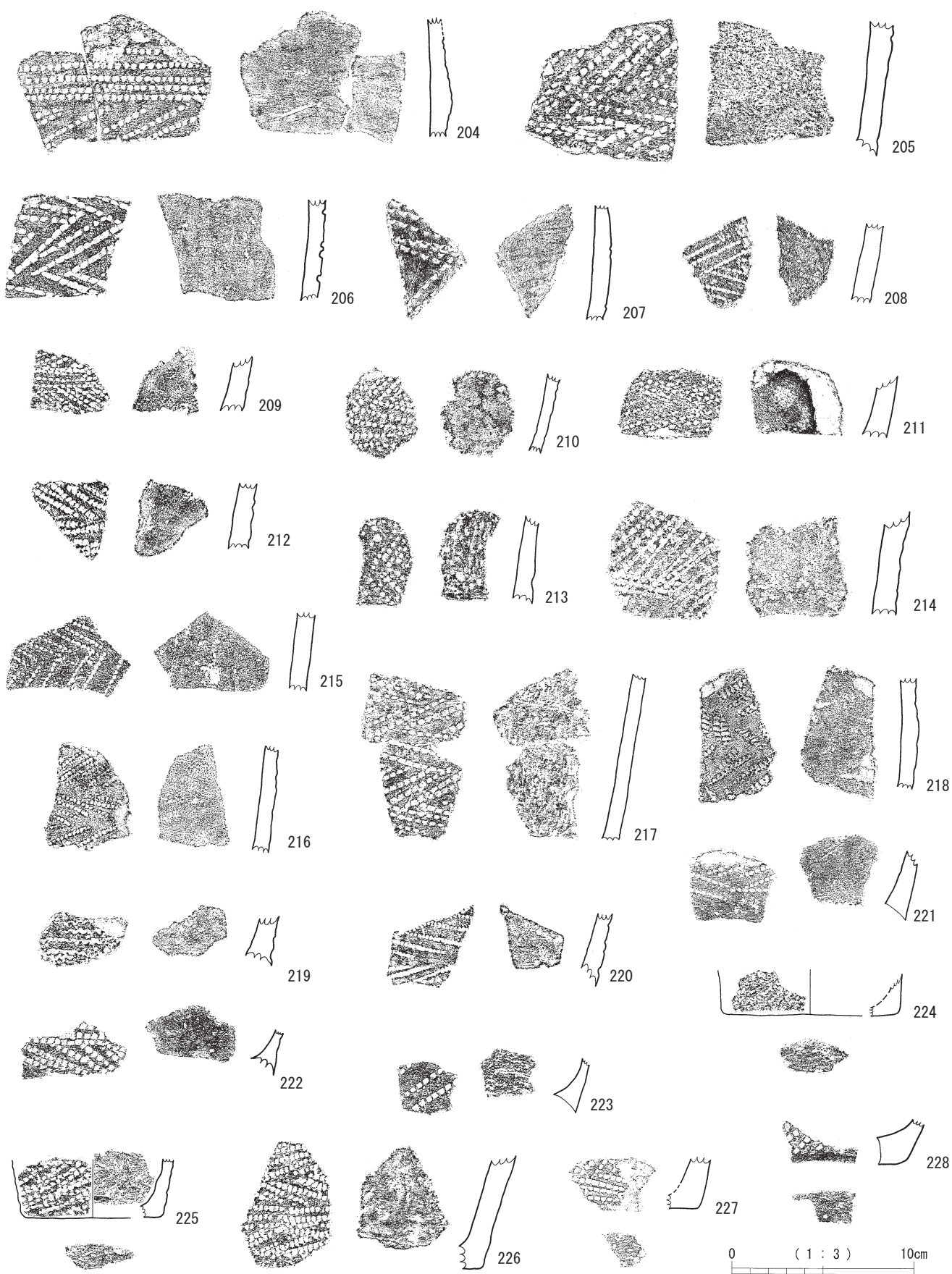
第128図 VI類土器分布図



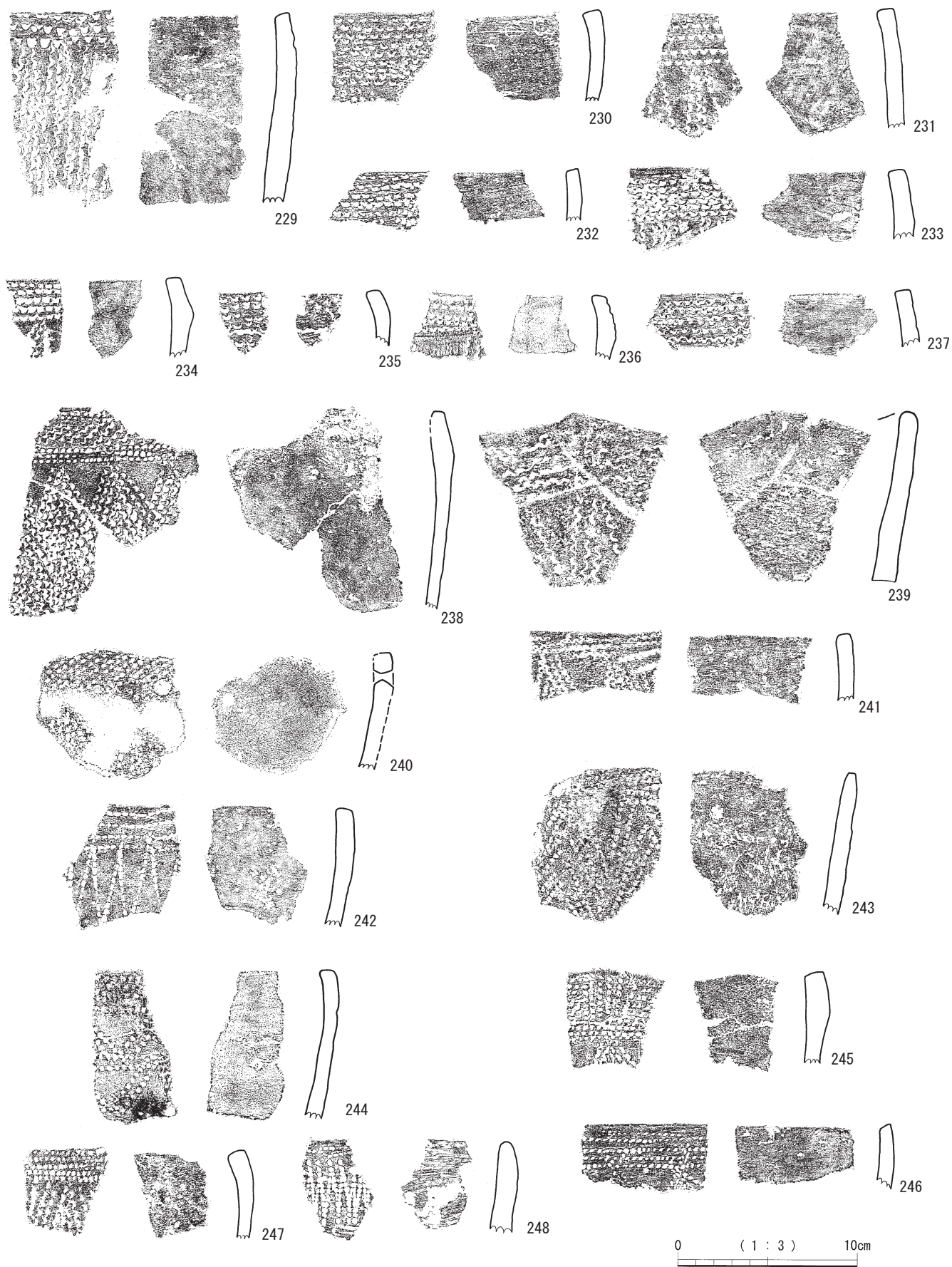
第129図 Ⅵa類土器 (1)



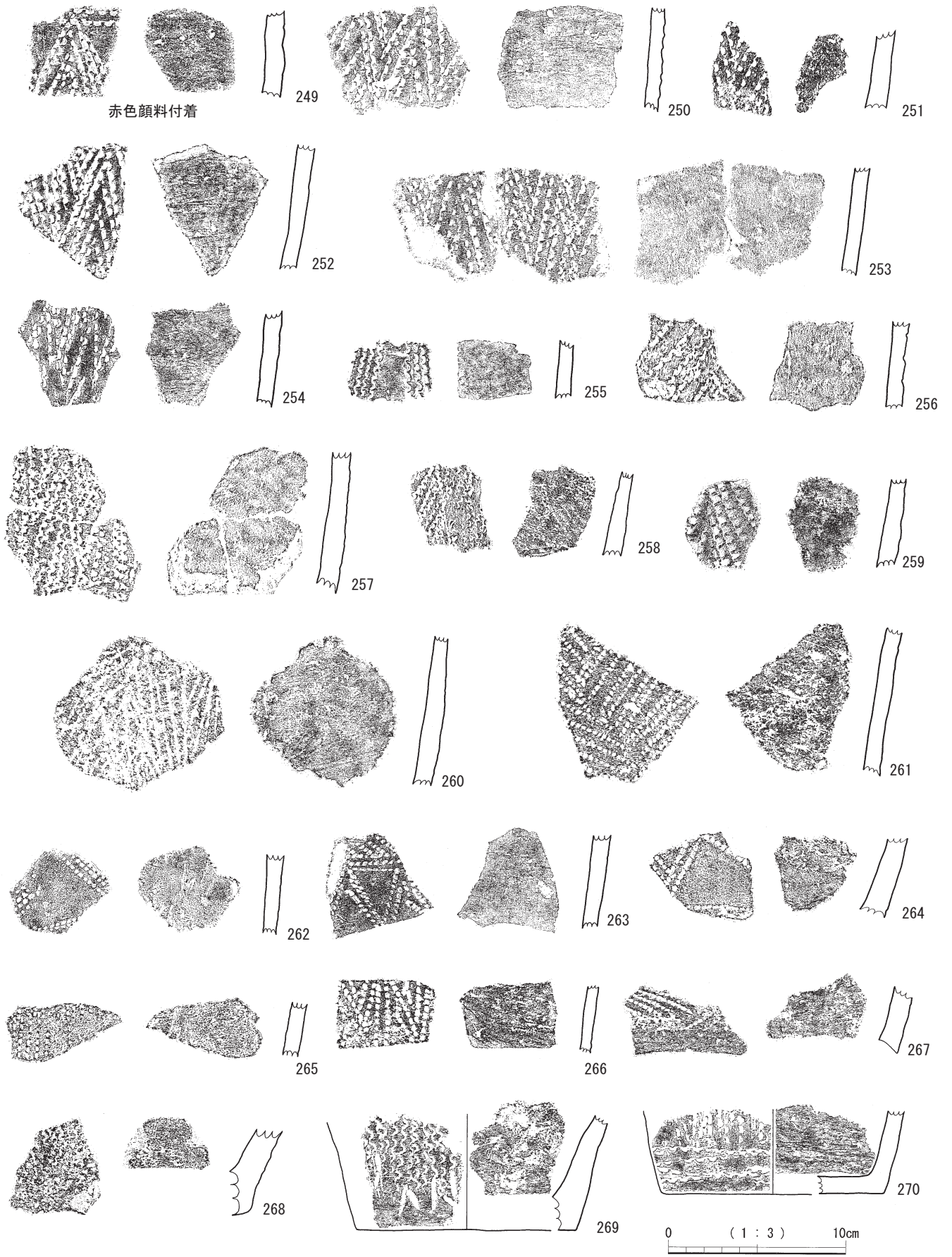
第130图 VIa類土器 (2)



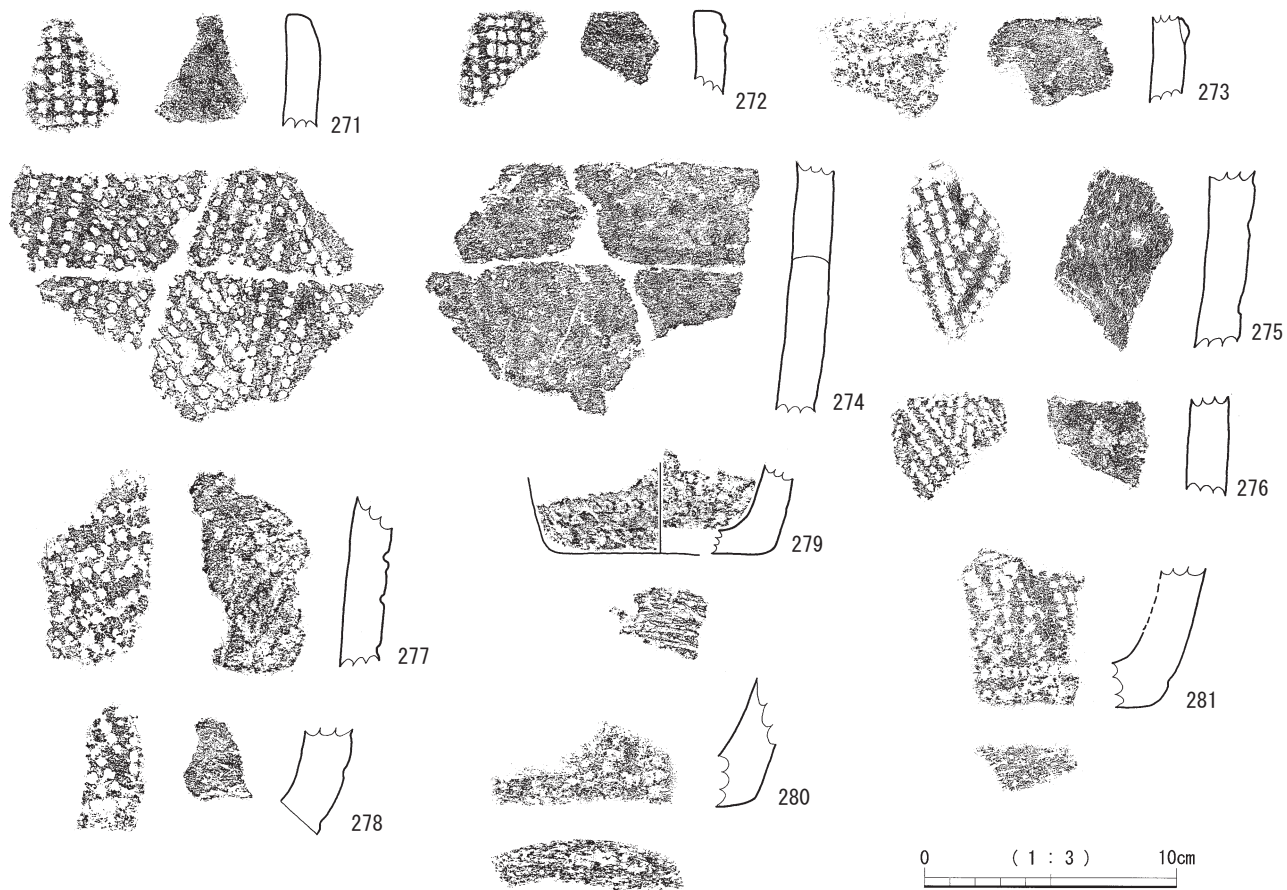
第131图 VIa類土器 (3)



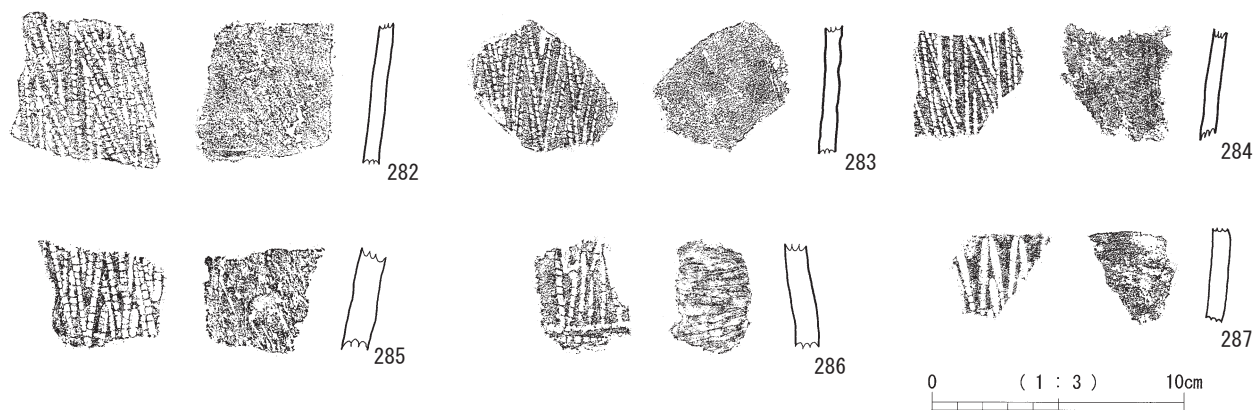
第132図 VIb類土器 (1)



第133図 VIb類土器 (2)



第134図 VIb類土器 (3)



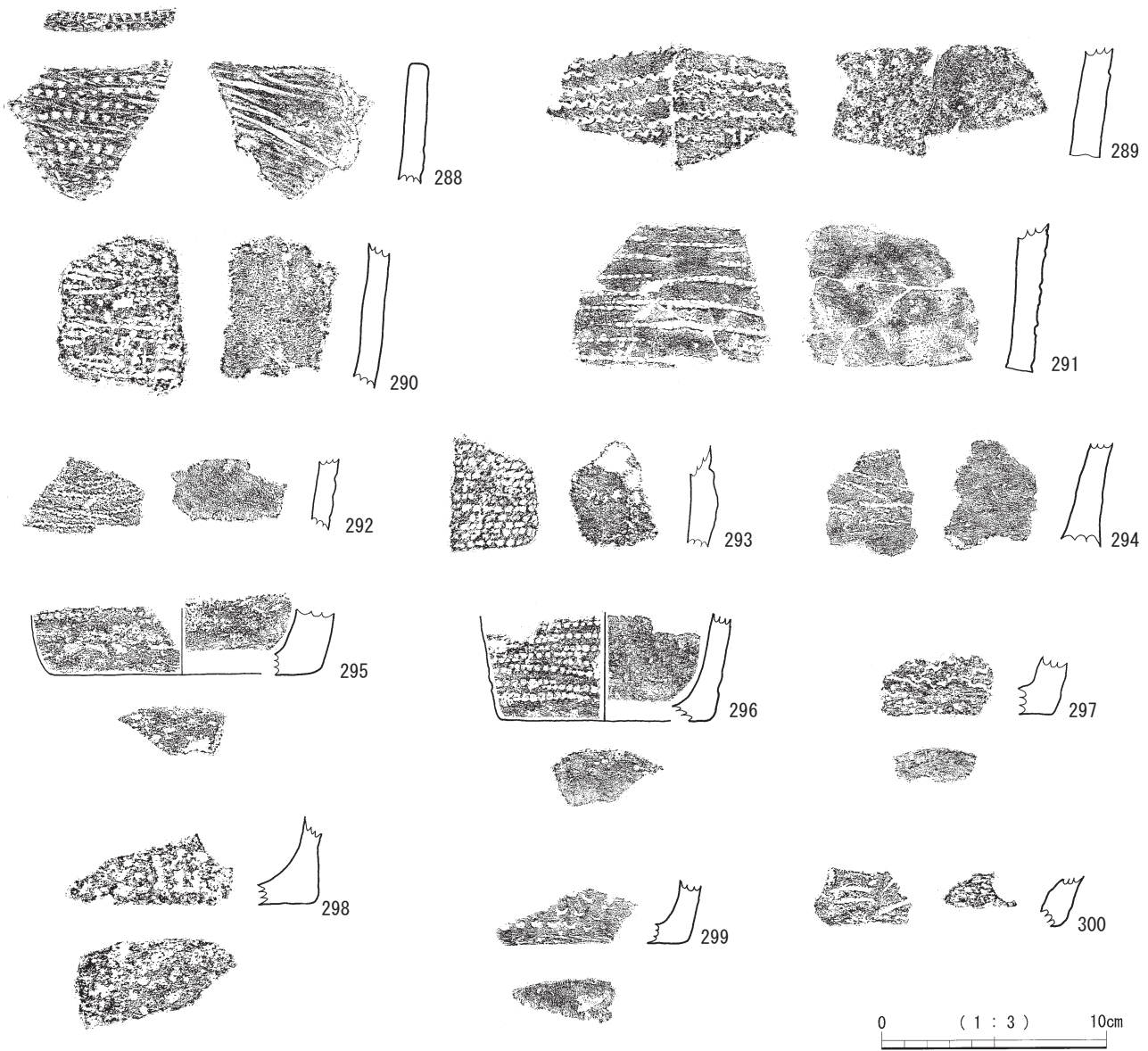
第135図 VIc類土器

下位に「V」字状の貝殻刺突文を施す。土器内面に、赤色顔料を施したような痕跡が認められるが、分析の結果はⅢ類土器と同様である。255は、左右の貝殻刺突文が異なる。2種類の貝殻で施文したものと思われる。260は、全面に貝殻刺突文を施す。267は底部付近の胴部である。

268～270は底部である。268は胴部下位にかろうじて貝殻刺突文が確認できる。269は、底部下位に不規則な沈線を施し、その上に縦位の貝殻刺突文が密に施される。胎土に金雲母が認められる。270は内外面ともに丁寧に

ヘラナデされ、外面底部付近には横位の貝殻刺突文を数条施し、その上部に縦位の貝殻刺突文を施す。接地面は薄く煤が全面に付着している。胎土に金雲母が確認される。

271～281はVIbの類に入るが、土器の厚みが1cm以上あるほどとして、赤みがかった重量感のある土器をまとめて掲載した。施文形態はVIb類と同様であるが、貝殻刺突文が大型である。同一個体と思われる資料である。



第136図 Vid類土器

Vic類土器 (第135図282 ~ 287)

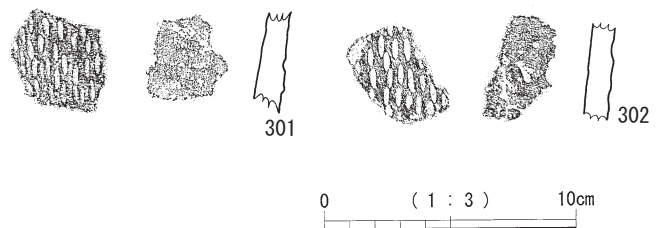
Vic類は、Vib類と施文形態は同じであるが、鋭角な「V」字状の貝殻刺突文をシャープに密に施す。282 ~ 287は同一個体と思われる。器壁も非常に薄い。

295 ~ 300は底部である。胴部下位まで横位ないし斜位の貝殻刺突文が施されている。300は、沈線が施されているが、蛤などの放射肋のない貝で、浅く刺突したように思われる。

Vid類土器 (第136図288 ~ 300)

Vid類は、横位ないし不規則な貝殻刺突文を施す土器で、Vla類・Vib類に比べ出土数が少ない。

288は、やや外傾する口縁部で、口唇部両端部にキザミが施される。胴部には整然としない横位貝殻刺突文が施される。290は、かろうじて横位の貝殻刺突文を密に施していることが確認できる。294は底部付近の胴部で、横位ないし斜位の短い貝殻刺突文を不規則に施している。



第137図 Vie類土器

VIe類土器 (第137図301・302)

VIe類は、胴部に貝殻刺突文ではなくヘラ状工具による短沈線を施す土器である。出土数は非常に少なく、全部で5点出土し内2点図化した。

301・302は同一個体と思われる胴部である。縦位に短い沈線を施している。内面は丁寧にナデ調整され、胎土に金雲母が確認できる。

VII類土器 (第139・140図)

VII類土器は、口縁部が直行ないし内湾する器形で、口唇部は平坦なものや内傾するものがある。文様は貝殻腹縁を引いて条線により短沈線様を呈するものや、櫛状工具により条線を施すものがある。条線文と斜位の貝殻刺突文が施される土器もここに分類した。また、瘤状突起を貼り付けたものもある。VI類土器と類似する点が多い土器である。

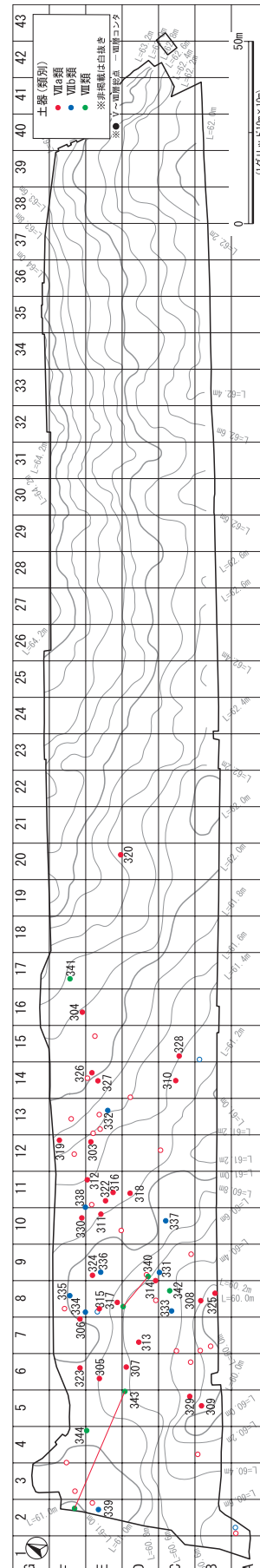
VIIa類土器 (第139図303～330)

VIIa類は、口縁部に横位の貝殻刺突文や沈線を数条巡らせ、胴部に鋸歯状の条線文を施す。流水文の土器もここに分類した。

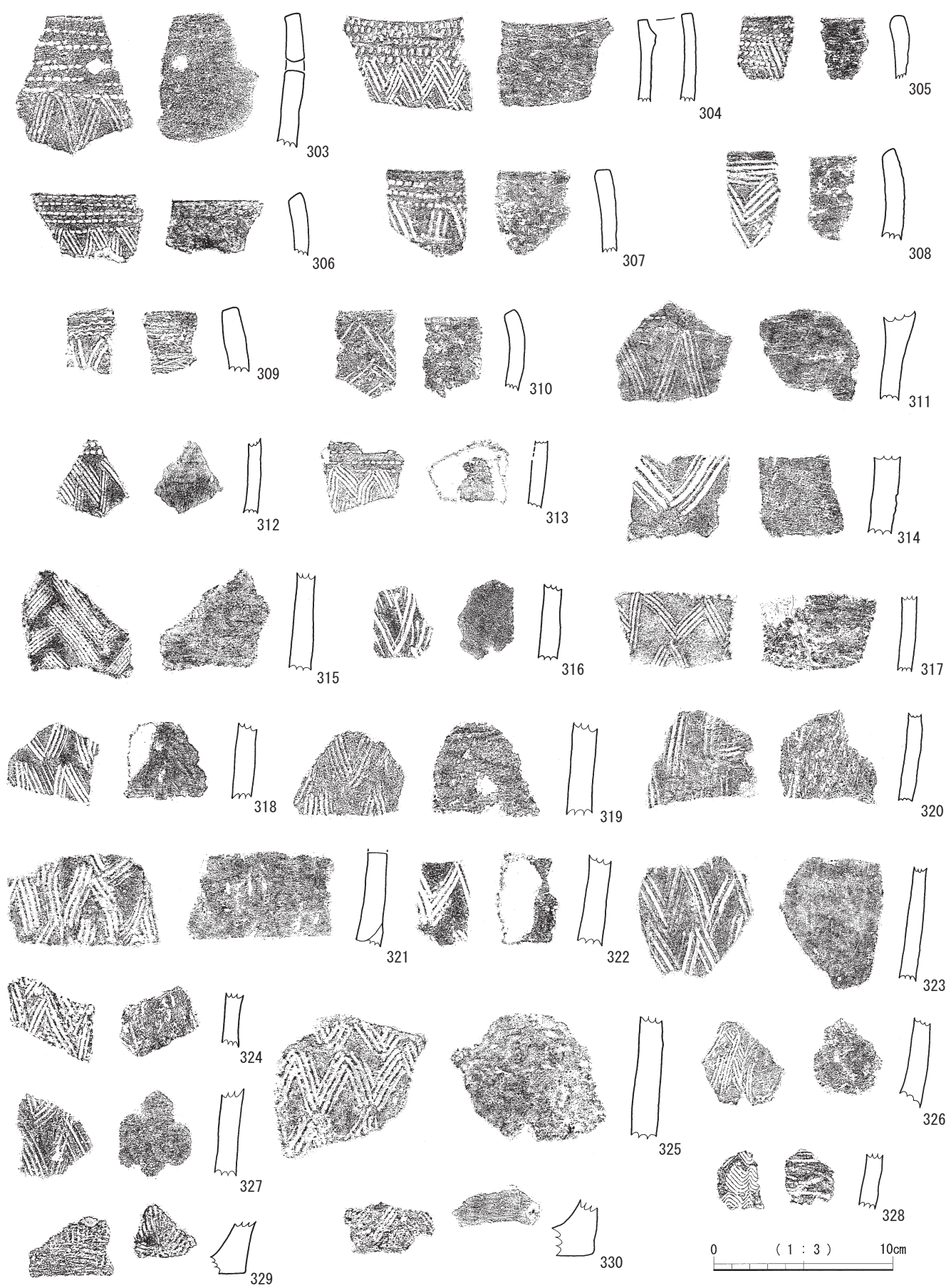
303～310は口縁部である。303は、緩やかに内湾し、口唇部は丁寧にナデ調整されている。口縁部には5条の横位貝殻刺突文が巡らされ、その下位に鋸歯状の条線文が施される。円形の補修孔が内外面より穿孔されている。内面は丁寧にナデ調整がなされている。304は、緩やかに内湾し、波状口縁を呈する。口唇部は丁寧にナデ調整がなされている。口縁部に横位の瘤状突起を貼り付け、その上から横位の貝殻刺突文を施す。その下位に鋸歯状の条線文が施される。内面は丁寧にナデ調整がなされている。305は、口縁部に横位の貝殻刺突文を7条程施す。その下位の胴部文様は、口縁部の横位貝殻刺突文を一部切るように施文されている。310は、口縁部で内湾し、口唇部が内傾する。口縁部にはヘラ状工具により横位の沈線を浅く巡らせる。その下位に櫛状工具により鋸歯状の沈線を施す。

311～328は胴部である。311は口縁部に近い胴部で、上部に瘤状突起が施され、その下位に鋸歯状の条線文を施す。胎土に金雲母が認められる。315は、4条を一単位とした短沈線を鋸歯状に施す。326は、沈線が不規則になり、鋸歯状の文様が崩れている。内面はナデ調整されている。328は、短い流水文が施されている。内面は丁寧にナデ調整される。流水文の土器はこれ1点のみである。

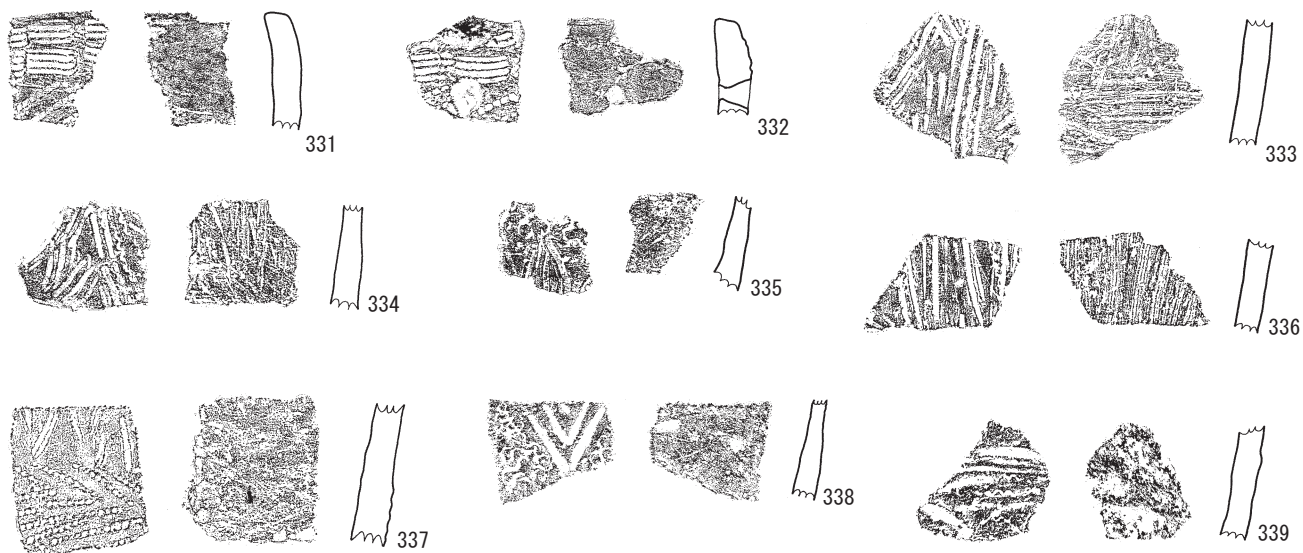
329・330は底部である。胴部下位まで条線が施されている。



第138図 VII・VII類土器分布図

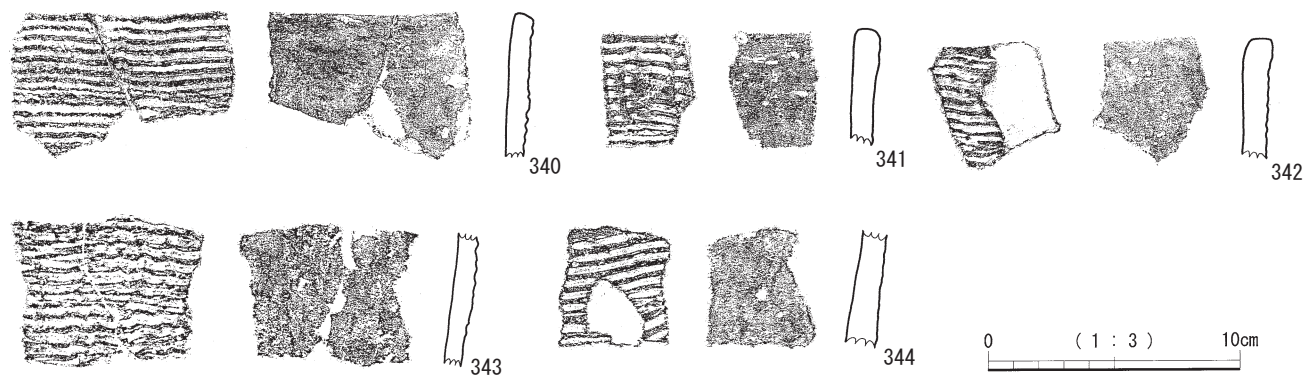


第139図 VIIa類土器



第140図 VIIb類土器

0 (1:3) 10cm



第141図 VIII類土器

0 (1:3) 10cm

VIIb類土器 (第140図331 ~ 339)

VIIb類は、胴部に短沈線様の条線文と貝殻刺突文を施す土器である。VI類の土器に良く似ている。

331・332は口縁部である。口縁部で内湾し、口縁部には短条線を2条施す。その下位に斜位の貝殻刺突文を施す。口唇部および内面は丁寧にナデ調整されている。332は、円形の補修孔が両面より穿孔されている。331・332は同一個体と思われる。

333 ~ 339は胴部である。鋸歯状ないし不規則な条線文と貝殻刺突文が施される。337の貝殻刺突文の施文方法は、VIa類と非常に良く似ている。VII類土器とVI類土器との関係が伺える。

VIII類土器 (第141図340 ~ 344)

VIII類土器は、本遺跡から底部は出土していないが、一般的に底部から口縁部にかけてほぼ直線的に立ち上がる円筒形の土器である。横位の貝殻条痕文を小波状に施文する。小片のため明確な単位等は不明だが、6条程度が1つの単位となって施文される土器である。色調が淡黄

色で、胎土に角閃石を含む。

340 ~ 342は口縁部である。340は、口唇部がやや丸みを帯び、わずかに外傾する。内面は丁寧にナデ調整されている。341は、口縁部が若干肥厚気味で、口唇部は丸みを帯びる。342は大部分が剥落している。口唇部は平坦である。

343・344は、口縁部下半から胴部上半にかけての資料である。横位または斜位の貝殻条痕文を小波状に施文する。内面は丁寧にナデが施されている。

IX類土器 (第143図)

IX類は、器面に押型文を施す土器である。

出土地点から、山形押型文土器と楕円押型文土器を区別することができた。山形押型文土器の出土地点はE-5・6区を中心としている。これに対して、楕円押型文土器は主にD-40区を中心に出土している。山形押型文土器とは300m以上離れている。どちらも出土量は多くない。

山形押型文土器、楕円押型文土器ともに底部が出土し

ていないため、全体の器形は不明である。

IXa類土器 (第143図345 ~ 354)

器形は緩やかに開き、口縁部は直口する平口縁の土器である。横位ないし斜位の山形押型文を緻密に施し、口唇部及び口縁付近の内側にも施文を施している。器面は丁寧にナデ調整され、胎土、焼成ともに良好な土器である。

345 ~ 348は、口縁部である。山形押型文を横位に施し、口唇及び口縁部内面にも同様に施文している。器形は平口縁で口縁部は直口する。内面は丁寧にナデ調整されている。

349 ~ 351は口縁部に近い胴部である。丁寧にナデ調整後、横位の山形押型文が内外面に施されている。

352 ~ 354は胴部である。丁寧にナデ調整後、山形押型文が施文されている。354は施文具を一回転して土器面から離す時押圧が弱まったのか、施文が明瞭でない部分が縦状に確認される。

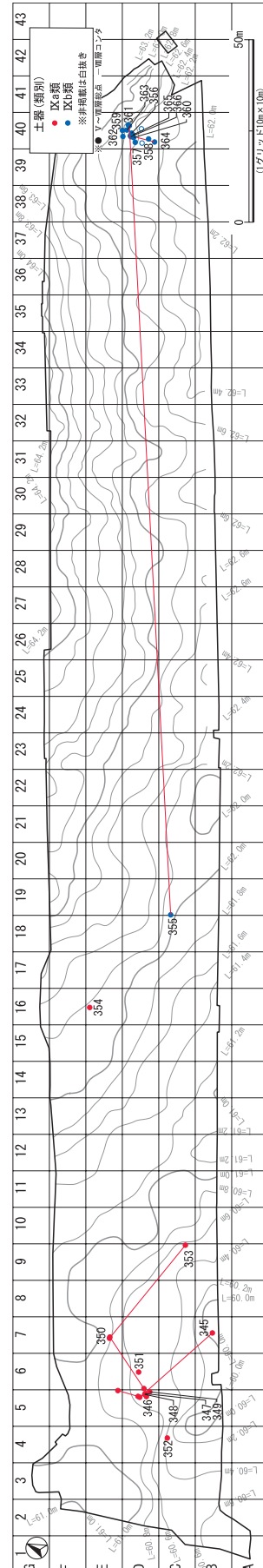
IXb類土器 (第143図355 ~ 366)

器形は緩やかに外傾し、口縁部は直口する。口唇部はナデ調整され一部山形押型文が残る。器内面は貝殻条痕文の調整痕が残る。胎土、焼成ともに良好な土器である。

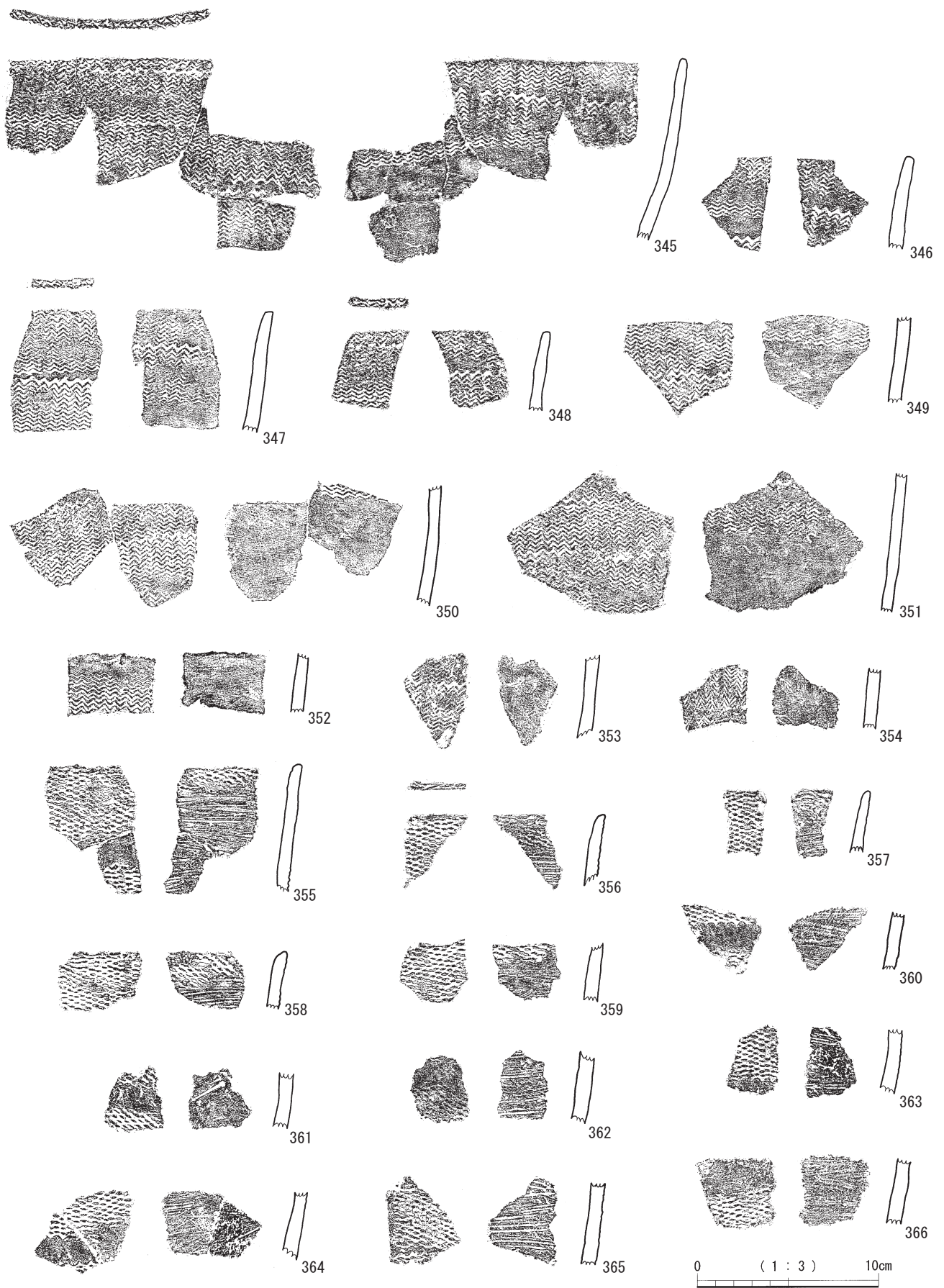
355 ~ 358は口縁部である。口縁部から胴部にかけて横位または斜位に全面的に楕円押型文を施す。口唇部及び口縁部付近の内面にも横位の楕円押型文を施す。内面の施文部下位は貝殻条痕により器面調整されている。

359 ~ 366は胴部である。359は、口縁部に近い胴部で、口縁部付近内面にも横位の楕円押型文を施している。

360 ~ 366は、横位ないし斜位に楕円押型文を施し、内面は貝殻条痕により器面調整されている。



第142図 IX類土器分布図



第143図 IXa類・IXb類土器

第26表 土器観察表 (VIa ~ VIIb類)

挿図 番号	掲載 番号	器種	部位	類別	出土区	層	文様・器面調整等		色調		胎土				焼成	取上番号
							外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃石	他		
129	173	深鉢	口縁	VIa	C9 C18 D9 F10 F12 F14	IVb VI VIIa VIIb	貝殻刺突	ナデ	25Y5/3黄褐色	10YR5/4にぶい黄褐色	○	○	○	金雲母, 白粒	良好	20593, 20594, 20595 34808, 48752, 54645 24205, 24928
	174	深鉢	口縁	VIa	F3	VII	貝殻刺突	ナデ	5YR6/6橙	5YR5/6明赤褐色	○	○	○		良好	52821, 53125
	175	深鉢	口縁	VIa	E11	VI	貝殻刺突	ナデ	25Y4/2暗灰黄	7.5YR4/4褐色	○	○		鉄粒, 磁粒	良好	24892
	176	深鉢	口縁	VIa	E9	IVb	貝殻刺突	ナデ	25Y4/2暗灰黄	10YR5/4にぶい黄褐色	○	○		金雲母, 白粒	良好	46653
	177	深鉢	口縁	VIa	D9	VI	貝殻刺突	ナデ	10YR5/3にぶい黄褐色	10YR4/2灰黄褐色	○	○	○	白粒	良好	49254
	178	深鉢	口縁	VIa	C8	VI	貝殻刺突	ナデ	10YR5/3にぶい黄褐色	10YR4/3にぶい黄褐色	○	○		金雲母, 白粒	良好	53568
	179	深鉢	口縁	VIa	E13	VI	貝殻刺突	ナデ	10YR5/3にぶい黄褐色	7.5YR4/6褐色	○	○		鉄粒, 磁粒	良好	19621
	180	深鉢	口縁	VIa	B39	VIIa	貝殻刺突	ナデ	7.5YR5/3にぶい黄褐色	7.5YR5/2灰褐色	○	○		金雲母, 白粒	良好	104913
	181	深鉢	口縁	VIa	E7	VI	貝殻刺突	ナデ	7.5YR6/4にぶい黄褐色	7.5YR3/3暗褐色	△	△		金雲母, 白粒	良好	47423
	182	深鉢	口縁	VIa	C9	VI	貝殻刺突	ナデ	5YR2/1黒褐色	5YR4/6赤褐色	○	○	○	鉄粒, 磁粒	良好	48747
	183	深鉢	口縁	VIa	F7	VIIb	貝殻刺突	ナデ	10YR6/3にぶい黄褐色	10YR6/3にぶい黄褐色	○	○		金雲母, 白粒	良好	53259
	184	深鉢	口縁	VIa	E4	VII	貝殻刺突	ナデ	10YR6/4にぶい黄褐色	25Y5/2暗灰黄	○	○		金雲母, 白粒	良好	51282
	185	深鉢	口縁	VIa	F8	VI	貝殻刺突	ナデ	10YR5/3にぶい黄褐色	10YR5/3にぶい黄褐色	△	△		金雲母, 白粒	良好	46538
186	深鉢	口縁	VIa	F8	VI	貝殻刺突	ナデ	10YR5/3にぶい黄褐色	10YR5/3にぶい黄褐色	○	○	○	金雲母, 白粒	良好	49010	
187	深鉢	口縁	VIa	E8	IVb	貝殻刺突	ナデ	10YR7/4にぶい黄褐色	10YR6/4にぶい黄褐色	○				良好	31005	
130	188	深鉢	口縁	VIa	F8	VI	貝殻刺突	ナデ	7.5YR5/4にぶい黄褐色	10YR4/2灰黄褐色	○	○		金雲母, 白粒	良好	44152, 48833, 49035
	189	深鉢	口縁	VIa	E6	IVb	貝殻刺突	工具ナデ	10YR1/3黒褐色	7.5YR2/1赤黒	△	△			良好	30870
	190	深鉢	口縁	VIa	E8	IVa	貝殻刺突	ナデ	10YR6/4にぶい黄褐色	10YR5/3にぶい黄褐色	△		△	白粒, 磁粒	良好	22011
	191	深鉢	口縁	VIa	E9	VI	貝殻刺突	ナデ	7.5YR7/6褐色	10YR5/3にぶい黄褐色	○	○	○	白粒, 磁粒	良好	48861
	192	深鉢	口縁	VIa	E6	VII	貝殻刺突	ナデ	5YR5/6明赤褐色	7.5YR6/6褐色	○	○	○	白粒	良好	51332
	193	深鉢	口縁	VIa	F3	VI	貝殻刺突	ナデ	10YR6/4にぶい黄褐色	10YR6/4にぶい黄褐色	○	○		金雲母, 白粒	良好	50255
	194	深鉢	口縁	VIa	D8	VI	貝殻刺突	ナデ	7.5YR5/4にぶい黄褐色	7.5YR5/4にぶい黄褐色	○	○		鉄粒, 磁粒	良好	48575
	195	深鉢	口縁	VIa	D7	VII	貝殻刺突	ナデ	10YR6/3にぶい黄褐色	10YR6/3にぶい黄褐色	○	○	○		良好	52890, 52921
	196	深鉢	口縁	VIa	E6	VII	貝殻刺突	ナデ	7.5YR4/3褐色	5YR5/4にぶい赤褐色	○	○	○		良好	51495
	197	深鉢	口縁	VIa	E5	VII	貝殻刺突	ナデ	10YR6/4にぶい黄褐色	10YR6/4にぶい黄褐色	○	△		金雲母, 白粒	良好	51313
	198	深鉢	口縁	VIa	F3	VI	貝殻刺突	ナデ	10YR4/2灰黄褐色	10YR5/3にぶい黄褐色	○	○		金雲母, 白粒	良好	43004
	199	深鉢	口縁	VIa	D9	VI	貝殻刺突	ナデ	10YR6/4にぶい黄褐色	10YR6/4にぶい黄褐色	○	○	○		良好	43387
	200	深鉢	胴	VIa	F12	VII	貝殻刺突	ナデ	10YR5/3にぶい黄褐色	7.5YR4/3褐色	△	△		金雲母	良好	24207
201	深鉢	胴	VIa	E8	IVb	貝殻刺突	ナデ	10YR6/3にぶい黄褐色	10YR5/4にぶい黄褐色	○	○		金雲母, 白粒	良好	28461	
202	深鉢	胴	VIa	B18	VI	貝殻刺突	—	10YR6/4にぶい黄褐色	10YR6/4にぶい黄褐色	○	○		金雲母	良好	20637	
203	深鉢	胴	VIa	E12	VI	貝殻刺突	ナデ	7.5YR7/3にぶい黄褐色	7.5YR6/4にぶい黄褐色	○	○		金雲母, 白粒	良好	19557	
131	204	深鉢	胴	VIa	D15 D10	IVb VIIa	貝殻刺突	ナデ	10YR4/2灰黄褐色	10YR5/3にぶい黄褐色	○	○		金雲母	良好	21051, 27862
	205	深鉢	胴	VIa	C8	VI	貝殻刺突	ナデ	7.5YR5/4にぶい黄褐色	10YR5/3にぶい黄褐色	○	○		金雲母, 白粒	良好	54208
	206	深鉢	胴	VIa	C8	VII	貝殻刺突	ナデ	7.5YR5/3にぶい黄褐色	7.5YR5/4にぶい黄褐色	○	○		鉄粒, 磁粒	良好	53750
	207	深鉢	胴	VIa	F8	IVb	貝殻刺突	ナデ	10YR6/4にぶい黄褐色	10YR5/3にぶい黄褐色	△	○		金雲母, 白粒	良好	30789
	208	深鉢	胴	VIIb	D16	IVb	貝殻刺突	ナデ	10YR6/4にぶい黄褐色	7.5YR6/6褐色	○			金雲母	良好	7042
	209	深鉢	胴	VIa	F7	VI	貝殻刺突	ナデ	10YR6/4にぶい黄褐色	25Y5/2暗灰黄	○	○		金雲母	良好	47418
	210	深鉢	胴	VIa	D12	IVb	貝殻刺突	ナデ	10YR5/4にぶい黄褐色	10YR4/2灰黄褐色	○	○		金雲母, 白粒	良好	22268
	211	深鉢	胴	VIa	D6	VI	貝殻刺突	ナデ	7.5YR6/4にぶい黄褐色	7.5YR5/4にぶい黄褐色	○	○		金雲母, 白粒	良好	49174
	212	深鉢	胴	VIa	F4	VII	貝殻刺突	ナデ	5YR4/3にぶい赤褐色	10YR3/2黒褐色	○	○	○	赤粒	良好	50861
	213	深鉢	胴	VIa	C12	VI	貝殻刺突	ナデ	5YR6/6橙	10YR5/3にぶい黄褐色	○	○	○	赤粒	良好	24506
	214	深鉢	胴	VIa	B8	VII	貝殻刺突	ナデ	7.5YR5/4にぶい黄褐色	7.5YR6/6褐色	○	○		金雲母, 白粒	良好	53802
	215	深鉢	胴	VIa	F12	IVa	貝殻刺突	ナデ	10YR6/4にぶい黄褐色	10YR4/2灰黄褐色	○	○		金雲母, 白粒	良好	6006
	216	深鉢	胴	VIa	E4	VII	貝殻刺突	ナデ	5YR4/3にぶい赤褐色	5YR6/6褐色	○	○	○		良好	52094
	217	深鉢	胴	VIa	F9	VIIb	貝殻刺突	ナデ	7.5YR5/4にぶい黄褐色	10YR3/3暗褐色	○		○	白粒	良好	54559, 54561
	218	深鉢	胴	VIa	B17 E4	IVb VII	貝殻刺突	ナデ	25Y6/3にぶい黄褐色	10YR6/4にぶい黄褐色	○	○		白粒, 赤粒	良好	9519, 52094
	219	深鉢	胴	VIa	F12	VIIb	貝殻刺突	ナデ	7.5YR6/6橙	10YR4/2灰黄褐色	○	○		金雲母, 白粒	良好	24211
	220	深鉢	胴	VIa	C16	IVb	貝殻刺突	ナデ	7.5YR7/6褐色	10YR7/4にぶい黄褐色	○	○		赤粒	良好	8481
	221	深鉢	胴	VIa	C9	Va	貝殻刺突	ナデ	10YR5/4にぶい黄褐色	10YR3/2黒褐色	○	○		金雲母, 白粒	良好	48331
222	深鉢	胴	VIa	E8	VI	貝殻刺突	ナデ	7.5YR5/4にぶい黄褐色	10YR3/2黒褐色	○	○		金雲母, 白粒	良好	49063	
223	深鉢	胴	VIa	E9	IVb	貝殻刺突	ナデ	10YR5/3にぶい黄褐色	10YR5/3にぶい黄褐色	△	△		金雲母, 白粒	良好	34862	
224	深鉢	底	VIa	F9	VIIb	貝殻刺突	—	7.5YR4/2灰黄褐色	5YR5/4にぶい赤褐色	○	○		金雲母, 白粒	良好	54565	
225	深鉢	底	VIa	D8	IVb	貝殻刺突	ナデ	5YR6/6橙	10YR3/2暗褐色	△	△		金雲母, 白粒	良好	31003	
226	深鉢	底	VIa	D13	VI	貝殻刺突	ナデ	7.5YR5/4にぶい黄褐色	10YR4/2灰黄褐色	△	△		鉄粒, 磁粒	良好	25088	
227	深鉢	底	VIa	C7	IVa	貝殻刺突	ナデ	5YR5/6明赤褐色	7.5YR5/4にぶい黄褐色	○	○		金雲母, 白粒	良好	21743	
228	深鉢	底	VIa	E9	IVb	貝殻刺突	ナデ	10YR5/3にぶい黄褐色	7.5YR5/4にぶい黄褐色	△	△		金雲母	良好	34874	
132	229	深鉢	口縁	VIIb	F8 F9	IVb	貝殻刺突	ナデ	10YR5/3にぶい黄褐色	5YR5/4にぶい赤褐色	△	△		鉄粒, 磁粒	良好	26106, 28425
	230	深鉢	口縁	VIIb	C2	VII	貝殻刺突	ナデ	10YR6/4にぶい黄褐色	10YR4/2灰黄褐色	△	△		金雲母, 白粒	良好	52204
	231	深鉢	口縁	VIIb	D13	VI	貝殻刺突	ナデ	25Y6/3にぶい黄褐色	10YR6/4にぶい黄褐色	○	○		白粒	良好	25098
	232	深鉢	口縁	VIIb	C2	VII	貝殻刺突	ナデ	10YR7/4にぶい黄褐色	10YR7/4にぶい黄褐色	○			金雲母	良好	52207
	233	深鉢	口縁	VIIb	A1	VI	貝殻刺突	ナデ	10YR5/3にぶい黄褐色	5YR4/4にぶい赤褐色	△	△		金雲母, 白粒	良好	53155
	234	深鉢	口縁	VIIb	C2	VI	貝殻刺突	ナデ	5YR5/4にぶい赤褐色	5YR4/4にぶい赤褐色	△	△		金雲母, 白粒	良好	50491

第27表 土器観察表 (VIb ~ VIc類)

挿図 番号	掲載 番号	器種	部位	類別	出土区	層	文様・器面調整等		色調		胎土				焼成	取上番号	
							外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃石	他			
132	235	深鉢	口縁	VIb	F8	IVa	貝殻刺突	ナデ	10YR5/4にぶい黄褐色	10YR5/3にぶい黄褐色	△	△		金雲母、赤粒	良好	23594	
	236	深鉢	口縁	VIb	C15	VI	貝殻刺突	ナデ	7.5YR5/4にぶい褐色	5YR5/6明赤褐色	○	○	○	金雲母、白粒	良好	19263	
	237	深鉢	口縁	VIb	D11	IVb	貝殻刺突	ナデ	10YR4/2灰黄褐色	10YR3/2黒褐色	○	○			良好	23341	
	238	深鉢	口縁	VIb	C9	VII	貝殻刺突	ナデ	10YR5/4にぶい黄褐色	7.5YR4/3褐色	○	○	○	白粒	良好	53821, 53973	
	239	深鉢	口縁	VIb	C3	VII	貝殻刺突	ナデ	2.5YR5/6明赤褐色	5YR6/2灰褐色	◎		○		良好	51997	
	240	深鉢	口縁	VIb	D11	VI	貝殻刺突	ナデ	2.5Y4/4オリーブ褐色	10YR5/4にぶい黄褐色	△			金雲母、赤粒	良好	46349	
	241	深鉢	口縁	VIb	B13	VI	貝殻刺突	ナデ	7.5YR7/6橙	10YR5/3にぶい黄褐色	○	○			良好	19350	
	242	深鉢	口縁	VIb	E12	VIIa	貝殻刺突	ナデ	5YR6/6橙	7.5YR5/3にぶい褐色	○	○	○		良好	25080	
	243	深鉢	口縁	VIb	D7	VII	貝殻刺突	ナデ	7.5YR4/6褐色	5YR4/6赤褐色	○		○	金雲母、白粒	良好	52920	
	244	深鉢	口縁	VIb	E4	VII	貝殻刺突	ナデ	10YR4/2灰黄褐色	10YR4/3にぶい黄褐色	△			金雲母	良好	52341	
	245	深鉢	口縁	VIb	E9	IVb	貝殻刺突	ナデ	7.5YR6/4にぶい褐色	5YR4/3にぶい赤褐色	○	○		白粒、赤粒	良好	34877	
	246	深鉢	口縁	VIb	C12	VI	貝殻刺突	ナデ	10YR6/4にぶい黄褐色	10YR6/4にぶい黄褐色	○	○		金雲母、白粒	良好	25136	
	247	深鉢	口縁	VIb	F8	IVb	貝殻刺突	ナデ	10YR5/3にぶい黄褐色	10YR5/3にぶい黄褐色	○	○		金雲母、白粒	良好	43001	
	248	深鉢	口縁	VIb	E16	VI	貝殻刺突	ナデ	5YR5/4にぶい赤褐色	5YR4/3にぶい赤褐色	○		○		良好	19692	
	249	深鉢	胴	VIb	E5	VII	貝殻刺突	ナデ	10YR6/3にぶい黄褐色	10YR6/4にぶい黄褐色	○	○		金雲母、白粒	良好	51335	
	250	深鉢	胴	VIb	F6	VI	貝殻刺突	ナデ	10YR6/3にぶい黄褐色	10YR6/4にぶい黄褐色	○	○	○	金雲母、白粒	良好	45145	
	251	深鉢	胴	VIb	D11	VI	貝殻刺突	ナデ	10YR5/3にぶい黄褐色	10YR4/2灰黄褐色	△	△		白粒、赤粒	良好	25194	
	252	深鉢	胴	VIb	D7	VI	貝殻刺突	ナデ	2.5Y6/2灰黄	10YR5/4にぶい黄褐色	○	○		金雲母、白粒	良好	49181	
133	253	深鉢	胴	VIb	D7 F7	IVb VI	貝殻刺突	ナデ	10YR6/3にぶい黄褐色	10YR6/4にぶい黄褐色	○	○		金雲母、白粒	良好	36670, 45138	
	254	深鉢	胴	VIb	F9	VI	貝殻刺突	ナデ	10YR5/4にぶい黄褐色	5YR5/6明赤褐色	○	○	○	白粒	良好	48926	
	255	深鉢	胴	VIb	F8	VI	貝殻刺突	ナデ	7.5YR5/4にぶい褐色	10YR5/3にぶい黄褐色	△	△		金雲母、白粒	良好	48948	
	256	深鉢	胴	VIb	F12	VI	貝殻刺突	ナデ	5YR6/6橙	10YR3/3暗褐色	○		○		良好	20877	
	257	深鉢	胴	VIb	C2	VII	貝殻刺突	ナデ	10YR6/4にぶい黄褐色	10YR6/4にぶい黄褐色	△	△		金雲母、白粒	良好	52398	
	258	深鉢	胴	VIb	C13	VI	貝殻刺突	ナデ	5YR6/6橙	10YR6/4にぶい黄褐色	○	○	○		良好	24833	
	259	深鉢	胴	VIb	D12	VI	貝殻刺突	ナデ	7.5YR5/4にぶい褐色	2.5Y4/2暗灰黄	△	△	△	白粒、赤粒	良好	25243	
	260	深鉢	胴	VIb	E4	VII	貝殻刺突	ナデ	5YR5/6明赤褐色	10YR5/4にぶい黄褐色	○	○	○	金雲母、白粒	良好	52485	
	261	深鉢	胴	VIb	D8	VI	貝殻刺突	ナデ	7.5YR5/4にぶい褐色	7.5YR4/3褐色	△	△	△	金雲母、白粒	良好	45205	
	262	深鉢	胴	VIb	D5	VII	貝殻刺突	ナデ	5YR6/6橙	2.5Y5/2暗灰黄	○	○		金雲母、白粒	良好	51667	
	263	深鉢	胴	VIb	D9	VIIb	貝殻刺突	ナデ	10YR6/4にぶい黄褐色	10YR5/3にぶい黄褐色	△	△		金雲母、白粒	良好	54807	
	264	深鉢	胴	VIb	B6	IVa	貝殻刺突	ナデ	10YR5/3にぶい黄褐色	10YR5/3にぶい黄褐色	△	△		金雲母、白粒	良好	23363	
	265	深鉢	胴	VIb	E33	VIIa	貝殻刺突	ナデ	7.5YR6/6橙	5YR6/6橙	○	○	○		良好	104912	
	266	深鉢	胴	VIb	C7	VII	貝殻刺突	ナデ	10YR5/3にぶい黄褐色	2.5Y5/3黄褐色	○			金雲母、白粒	良好	53651	
	267	深鉢	胴	VIb	F3	VII	貝殻刺突	ナデ	7.5YR6/6橙	7.5YR7/6橙	○	○		金雲母、白粒	良好	53117	
	268	深鉢	底	VIb	C2	VI	貝殻刺突	ナデ	7.5YR6/6橙	10YR4/2灰黄褐色	△	△		金雲母、白粒	良好	50527	
	269	深鉢	底	VIb	E6	VI	貝殻刺突、沈線	ナデ	7.5YR5/4にぶい褐色	7.5YR4/3褐色	△	△		金雲母、白粒	良好	52132	
	270	深鉢	底	VIb	F12	VIIa	貝殻刺突	ナデ	10YR6/4にぶい黄褐色	2.5Y5/2暗灰黄	○	○		金雲母、白粒	良好	24208	
	134	271	深鉢	口縁	VIb	F4	VII	貝殻刺突	ナデ	2.5YR5/6明赤褐色	7.5YR6/6橙	○	○	○		良好	53111
		272	深鉢	口縁	VIb	F3	VII	貝殻刺突	ナデ	10YR5/6黄褐色	7.5YR6/6橙	○	△	○		良好	52811
		273	深鉢	胴	VIb	F4	VII	貝殻刺突	ナデ	7.5YR5/4にぶい褐色	7.5YR5/6明褐色	○	○	○		良好	51733
		274	深鉢	胴	VIb	F3	VII	貝殻刺突	ナデ	2.5YR4/4にぶい赤褐色	2.5YR4/6赤褐色	○	△			良好	52820, 53822 53124, 53200
275		深鉢	胴	VIb	F8	IVa	貝殻刺突	ナデ	5YR4/8赤褐色	10YR5/4にぶい黄褐色	◎	○	○		良好	24127	
276		深鉢	胴	VIb	D2	VI	貝殻刺突	ナデ	10YR6/4にぶい黄褐色	7.5YR4/3褐色	○			金雲母	良好	49424	
277		深鉢	胴	VIb	C14	VI	貝殻刺突	ナデ	2.5YR5/6明赤褐色	7.5YR4/6褐色	○	○	○		良好	19293	
278		深鉢	底	VIb	F4	VII	貝殻刺突	ナデ	2.5YR4/6赤褐色	10YR3/1黒褐色	○	○	○		良好	50854	
279		深鉢	底	VIb	B13	VI	貝殻刺突	ナデ	5YR4/8赤褐色	5YR4/8赤褐色	○	○			良好	19385	
280		深鉢	底	VIb	F3	VIIa	貝殻刺突	ナデ	2.5YR5/8明赤褐色	2.5YR2/2極暗赤褐色	◎				良好	53125	
135	281	深鉢	底	VIb	F4	VII	貝殻刺突	ナデ	5YR5/6明赤褐色	7.5YR4/6褐色	○	○			良好	51732	
	282	深鉢	胴	VIc	D10	IVb	貝殻刺突	ナデ	10YR5/3にぶい黄褐色	10YR4/2灰黄褐色	△	△		金雲母、白粒、赤粒	良好	28123	
	283	深鉢	胴	VIc	D10	IVa	貝殻刺突	ナデ	7.5YR5/4にぶい褐色	10YR3/2黒褐色	○	○		金雲母、白粒	良好	23069	
	284	深鉢	胴	VIc	D8	IVb	貝殻刺突	ナデ	7.5YR4/3褐色	10YR3/2黒褐色	△	△		金雲母、白粒	良好	28478	
	285	深鉢	胴	VIc	C7	VI	貝殻刺突	ナデ	7.5YR5/4にぶい褐色	10YR4/2灰黄褐色	○	○	○	金雲母	良好	54244	
	286	深鉢	胴	VIc	C12	VI	貝殻刺突	ナデ	5YR5/6明赤褐色	5YR3/3暗赤褐色	△	△		金雲母、白粒	良好	24779	
136	287	深鉢	胴	VIc	B6	IVb	貝殻刺突	ナデ	7.5YR4/3褐色	7.5YR4/2灰褐色	○	○		白粒	良好	38115	
	288	深鉢	口縁	VIc	F38	IVb	貝殻刺突	条痕	10YR7/4にぶい黄褐色	10YR7/4にぶい黄褐色	○	○	○	金雲母	良好	101576	
	289	深鉢	胴	VIc	C2・3	VI VII	貝殻刺突	ナデ	2.5YR5/6明赤褐色	10YR7/3にぶい黄褐色	○	○		金雲母、白粒	良好	52623, 50511	
	290	深鉢	胴	VIc	E9	VIIb	貝殻刺突	ナデ	7.5YR6/6橙	10YR5/2灰黄褐色	○	○	○	金雲母、白粒	良好	53270	
	291	深鉢	胴	VIc	E7	VII	貝殻刺突	ナデ	7.5YR5/4にぶい褐色	2.5Y5/3黄褐色	○	○	△	金雲母、白粒	良好	51431	
	292	深鉢	胴	VIc	E12	IVb	貝殻刺突	ナデ	5YR5/6明赤褐色	10YR5/3にぶい黄褐色	○	○	○	金雲母、白粒	良好	18314	
	293	深鉢	胴	VIc	E14	VI	貝殻刺突	ナデ	5YR5/6明赤褐色	5YR4/4にぶい赤褐色	○	○	○	金雲母、白粒	良好	17226	
	294	深鉢	胴	VIc	D11	VI	貝殻刺突	条痕	10YR6/3にぶい黄褐色	2.5Y4/2暗灰黄	△	△		金雲母、白粒、赤粒	良好	25199	
	295	深鉢	底	VIc	E12	VIIa	貝殻刺突	ナデ	10YR5/3にぶい黄褐色	10YR4/3にぶい黄褐色	△	△		金雲母、白粒	良好	25081	
	296	深鉢	底	VIc	F8	IVb	貝殻刺突	ナデ	5YR5/6明赤褐色	10YR4/2灰黄褐色	○	○	○	金雲母、白粒	良好	47388	
	297	深鉢	底	VIc	D7	VIIb	貝殻刺突	ナデ	5YR5/6明赤褐色	5YR3/3暗赤褐色	△	△		金雲母、白粒、赤粒	良好	53448	
	298	深鉢	底	VIc	B7	VIIb	貝殻刺突	ナデ	10YR6/3にぶい黄褐色	10YR6/3にぶい黄褐色	○	○		金雲母、白粒	良好	54169	
299	深鉢	底	VIc	B7	VIIb	貝殻刺突	ナデ	5YR6/6橙	7.5YR4/3褐色	○	○	△	金雲母、白粒	良好	54299		
300	深鉢	底	VIc	E6	IVb	条痕	ナデ	10YR4/6褐色	10YR5/3にぶい黄褐色	○	○	○	白粒	良好	47495		

第28表 土器観察表 (VIe ~ IXb類)

挿図 番号	掲載 番号	器種	部位	類別	出土区	層	文様・器面調整等		色調		胎土				焼成	取上番号
							外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃石	他		
137	301	深鉢	胴	VIe	C12	VI	短沈線	ナデ	5YR5/6明赤褐	5YR5/6明赤褐	△	△		金雲母, 白粒	良好	24851
	302	深鉢	胴	VIe	D13	VI	短沈線	ナデ	5YR5/6明赤褐	5YR5/6明赤褐	△	△		金雲母, 白粒	良好	24615
	303	深鉢	口縁	VIIa	E14	VI	貝殻刺突, 条線	ナデ	10YR6/4い黄褐色	10YR5/4い黄褐色	△	△		金雲母, 白粒	良好	19571
	304	深鉢	口縁	VIIa	F16	IVa	貝殻刺突, 条線	ナデ	10YR6/3い黄褐色	10YR4/3い黄褐色	△	△	○	金雲母	良好	17402
	305	深鉢	口縁	VIIa	E6	VII	貝殻刺突, 条線	ナデ	10YR5/3い黄褐色	10YR6/4い黄褐色	○	○	○		良好	51488
	306	深鉢	口縁	VIIa	F7	VI	貝殻刺突, 条線	ナデ	5YR4/4い赤褐色	5YR4/4い赤褐色	△	△	○	金雲母, 白粒	良好	45110
	307	深鉢	口縁	VIIa	D6	VII	貝殻刺突, 条線	ナデ	10YR5/2灰黄褐色	10YR4/2灰黄褐色	○	○		金雲母, 白粒	良好	52875
	308	深鉢	口縁	VIIa	B8	IVa	条線	ナデ	10YR5/3い黄褐色	5YR5/6明赤褐	△	△	△	金雲母, 白粒	良好	54328
	309	深鉢	口縁	VIIa	B5	IVb	貝殻刺突, 条線	ナデ	10YR6/4い黄褐色	10YR7/6明黄褐色	○	○	○		良好	45575
	310	深鉢	口縁	VIIa	C14	VI	沈線	ナデ	7.5YR3/1黒褐色	7.5YR5/4い黄褐色	○	○	○	白粒	良好	19294
	311	深鉢	胴	VIIa	E10	VIIb	貝殻刺突, 条線	ナデ	10YR4/2灰黄褐色	5YR5/6明赤褐	△	△		金雲母, 白粒	良好	53333
	312	深鉢	胴	VIIa	E11	IVa	貝殻刺突, 条線	ナデ	7.5YR4/2灰褐色	10YR3/2黒褐色	△	△		金雲母	良好	5472
	313	深鉢	胴	VIIa	D7	VIIb	貝殻刺突, 条線	ナデ	10YR4/2灰黄褐色	5YR2/3暗赤褐色	○	△		金雲母, 白粒	良好	53457
	314	深鉢	胴	VIIa	D9	VII	条線	ナデ	7.5YR5/4い黄褐色	10YR4/2灰黄褐色	△	○		金雲母, 白粒	良好	53968
	315	深鉢	胴	VIIa	E8	VI	短沈線	ナデ	5YR6/6褐色	5YR5/6明赤褐	○	○			良好	46537
	316	深鉢	胴	VIIa	E11	IVa	条線	ナデ	7.5YR6/6褐色	10YR4/2灰黄褐色	○	○	○	白粒	良好	5468
	317	深鉢	胴	VIIa	E8	VI	条線	ナデ	10YR5/3い黄褐色	10YR5/4い黄褐色	△	○		金雲母, 白粒	良好	53549
	318	深鉢	胴	VIIa	D11	VI	条線	ナデ	10YR6/4い黄褐色	10YR3/1黒褐色	△	△		金雲母, 白粒	良好	25041
	319	深鉢	胴	VIIa	F12	IVa	条線	ナデ	7.5YR5/3い黄褐色	7.5YR4/2灰褐色	△	○		金雲母, 白粒	良好	23965
	320	深鉢	胴	VIIa	E20	VIIb	条線	ナデ	7.5YR6/6褐色	2.5Y5/3黄褐色	○	○	○		良好	20272
	321	深鉢	胴	VIIa	-	VI	条線	ナデ	10YR6/4い黄褐色	7.5YR5/4い黄褐色	△	○		金雲母, 白粒	良好	4T埋土
	322	深鉢	胴	VIIa	E11	IVa	条線	ナデ	7.5YR6/4い黄褐色	10YR4/3い黄褐色	△	○		金雲母, 白粒	良好	5454
	323	深鉢	胴	VIIa	F6	VII	条線	ナデ	10YR4/2灰黄褐色	10YR3/2黒褐色	○	○		金雲母, 白粒	良好	49659
	324	深鉢	胴	VIIa	E9	VI	条線	ナデ	5YR5/6明赤褐	5YR5/6明赤褐	○	○		金雲母, 白粒	良好	48908
	325	深鉢	胴	VIIa	B8	VIIb	条線	ナデ	10YR5/3い黄褐色	7.5YR5/4い黄褐色	○	○		金雲母, 白粒	良好	55017
	326	深鉢	胴	VIIa	E14	VI	条線	ナデ	10YR6/4い黄褐色	10YR4/2灰黄褐色	○	○			良好	17203
	327	深鉢	胴	VIIa	E14	VI	条線	ナデ	7.5YR5/4い黄褐色	10YR5/2灰黄褐色	○	○		金雲母, 白粒	良好	17212
	328	深鉢	胴	VIIa	C15	IVb	条線・流水文	ナデ	5YR4/4い赤褐色	7.5YR4/3褐色	△	○		金雲母, 白粒	良好	14156
	329	深鉢	底	VIIa	C5	IVb	条線	ナデ	5YR6/6褐色	10YR6/4い黄褐色	△	○		金雲母, 白粒	良好	32903
	330	深鉢	底	VIIa	F10	VIIb	条線	ナデ	7.5YR6/6褐色	5YR5/6明赤褐	○	○			良好	54591
	140	331	深鉢	口縁	VIIb	C9	VII	貝殻刺突, 条線	ナデ	10YR4/2灰黄褐色	10YR3/2黒褐色	△	○		金雲母, 白粒	良好
332		深鉢	口縁	VIIb	E13	VI	貝殻刺突, 条線	ナデ	10YR5/3い黄褐色	10YR5/3い黄褐色	○	○		金雲母, 白粒	良好	17237
333		深鉢	口縁	VIIb	C8	VII	貝殻刺突, 条線	工具ナデ	7.5YR6/4い黄褐色	7.5YR6/4い黄褐色	○	○		白粒, 赤粒	良好	53757
334		深鉢	胴	VIIb	F8	IVb	貝殻刺突, 条線	ケズリ	10YR6/4い黄褐色	10YR4/2灰黄褐色	○	○	○		良好	31016
335		深鉢	胴	VIIb	F8	IVa	貝殻刺突, 条線	ナデ	7.5YR5/4い黄褐色	7.5YR4/3褐色	○	○		金雲母, 白粒	良好	24119
336		深鉢	胴	VIIb	E9	IVb	貝殻刺突, 条線	工具ナデ	5YR6/6褐色	5YR6/4い黄褐色	○	○			良好	46654
337		深鉢	胴	VIIb	C10	VII	貝殻刺突, 条線	ナデ	5YR5/6明赤褐	7.5YR5/6明褐色	○	○			良好	53857
338		深鉢	胴	VIIb	F11	IVa	貝殻刺突, 条線	ナデ	10YR5/3い黄褐色	10YR5/3い黄褐色	○	○	○		良好	44046
339	深鉢	胴	VIIb	E2	IVb	貝殻刺突, 条線	ナデ	2.5YR4/4い赤褐色	5YR4/6赤褐色	○	○		金雲母, 白粒	良好	42923	
141	340	深鉢	口縁	VIII	D9 D8	IVb VIIb	貝殻条痕	ナデ	10YR7/4い黄褐色	10YR7/4い黄褐色	△	△	○		良好	47751, 53979
	341	深鉢	口縁	VIII	F17	VI	貝殻条痕	ナデ	10YR7/4い黄褐色	10YR7/4い黄褐色	○	△	◎		良好	17399
	342	深鉢	口縁	VIII	C8	VII	貝殻条痕	ナデ	10YR8/3黄褐色	10YR8/3黄褐色	○	△	◎		良好	54879
	343	深鉢	胴	VIII	B3	VII	貝殻条痕	ナデ	10YR7/4い黄褐色	10YR7/4い黄褐色	○	△	◎		良好	51366, 52164
	344	深鉢	口縁	VIII	E4	VII	貝殻条痕	ナデ	10YR7/4い黄褐色	10YR7/4い黄褐色	○	△	◎		良好	51283
143	345	深鉢	口縁	IXa	E5 B7 D5	VII	押型	押型, ナデ	10YR6/2灰黄褐色	10YR6/2灰黄褐色	△	△		黒雲母	良好	51895, 52331 52550, 54843
	346	深鉢	口縁	IXa	D5	VII	押型, ナデ	押型	10YR5/2灰黄褐色	10YR6/3い黄褐色	△	△		黒雲母	良好	52032
	347	深鉢	口縁	IXa	D5	VII	押型	押型, ナデ	10YR5/2灰黄褐色	10YR6/3い黄褐色	△	△		黒雲母	良好	52546
	348	深鉢	口縁	IXa	D5	VII	押型, ナデ	押型	10YR5/2灰黄褐色	10YR6/3い黄褐色	△	△		黒雲母	良好	52545
	349	深鉢	胴	IXa	D5	VII	押型	押型, ナデ	10YR5/2灰黄褐色	10YR6/3い黄褐色	△	△		黒雲母	良好	51192
	350	深鉢	胴	IXa	E7	VII	押型	ナデ	10YR5/2灰黄褐色	10YR6/3い黄褐色	○	△		黒雲母	良好	49495
	351	深鉢	胴	IXa	D6	VII	押型	押型, ナデ	10YR5/2灰黄褐色	10YR6/3い黄褐色	△	△		黒雲母	良好	52867
	352	深鉢	胴	IXa	C4	VII	押型, ナデ	ナデ	10YR5/2灰黄褐色	10YR6/3い黄褐色	△	△		黒雲母	良好	52025
	353	深鉢	胴	IXa	E7	VII	押型	ナデ	10YR5/2灰黄褐色	10YR6/3い黄褐色	△	△		黒雲母	良好	49500
	354	深鉢	胴	IXa	E16	VI	押型	ナデ	5YR5/6明赤褐色	5YR5/4い赤褐色	△	△		黒雲母	良好	17405
	355	深鉢	口縁	IXb	D40	VIIa	押型, ヘラナデ	押型, ヘラナデ	2.5YR5/6明赤褐色	2.5YR5/6明赤褐色	△	○		黒雲母	良好	104838, 104916
	356	深鉢	口縁	IXb	D40	VIIa	押型	条痕, 押型	10R4/3赤褐色	10R4/3赤褐色	△	△		黒雲母	良好	104840
	357	深鉢	口縁	IXb	D40	VIIa	押型	条痕, ナデ	10R5/6赤褐色	10R5/6赤褐色	△	△		黒雲母	良好	104844
	358	深鉢	口縁	IXb	D40	VIIa	押型	条痕, 押型	10R4/6赤褐色	10R5/3赤褐色	△	△		黒雲母	良好	104834
	359	深鉢	胴	IXb	D40	VIIa	押型	押型, ヘラナデ	10R4/4赤褐色	10R5/6赤褐色	△	△		黒雲母	良好	104914
	360	深鉢	胴	IXb	D40	VIIa	押型, ナデ	ヘラナデ	2.5YR5/6明赤褐色	2.5YR4/4い赤褐色	△	△		黒雲母	良好	104843
	361	深鉢	胴	IXb	D40	VIIa	押型, ナデ	ナデ	10R5/4赤褐色	10R5/4赤褐色	△	△		黒雲母	良好	104839
	362	深鉢	胴	IXb	D40	VIIa	押型, ナデ	条痕	10R5/4赤褐色	10R5/4赤褐色	△	△		黒雲母	良好	104847
	363	深鉢	胴	IXb	D40	VIIa	押型, ナデ	条痕	10R4/3赤褐色	10R5/4赤褐色	△	△		黒雲母	良好	104913
	364	深鉢	胴	IXb	D40	VIIa	押型, ナデ	ナデ	10R5/6赤褐色	10R5/4赤褐色	△	△		黒雲母	良好	104833, 104841
	365	深鉢	胴	IXb	D40	VI	押型	条痕	10R5/6赤褐色	10R4/2灰赤褐色	△	○		黒雲母	良好	104816
	366	深鉢	胴	IXb	D40	VI	押型, ナデ	条痕, ナデ	10R4/4赤褐色	10R5/4赤褐色	△	△		黒雲母	良好	104815

(2) 石器

縄文時代早期石器の概要

縄文時代早期の包含層出土の石器については、器種により層位的な出土状況の違いと形態差がみられることから、Ⅶ層、Ⅵ層に分けて掲載している。相対的に出土数の少なかったⅤ層及びⅧ層の出土石器は、縄文時代早期の土器の出土状況から判断して同時期の遺物として、それぞれⅦ層とⅥ層に含めて掲載している。

石器や剥片は調査区西端部の崖近くから14区付近で集中的に出土しており、本遺跡の縄文時代早期の堅穴建物跡や土坑・集石等の遺構の分布の状況とほぼ重なる。このほかのエリアでは点在的に出土している。遺物の中での石器の取り上げ点数は1,438点で、このうち334点を掲載している。

本遺跡では、安山岩C類と頁岩B類の2種類の石材の剥片が多数出土している。これに使用される頁岩B類には岩石中の鉄分がわずかに錆のように付着している。最大長約10cm程度の掌に納まる大きさのものが殆どである。その中から微細な調整剥離が施されていたり、縁辺に使用による明瞭な擦れが確認できるものを選別して掲載している。総じて使用の痕跡は軽微で、用途も不明だが今後の考証が必要である。Ⅶ層掲載遺物S189・S190とⅥ層掲載遺物S324～S330・S333がこれに該当する。

石斧の分類について

掲載した遺物の中で、石斧をⅠ～Ⅳ類に分類した。Ⅰ類はさらにa, b類に細分した。この分類はⅦ層・Ⅵ層出土石斧に共通して用いている。

Ⅰ類：磨製石斧のうち基部に厚みのあるもの。小型のものも数点みられるが、大型のものが多く出土している。刃部のみ残存するものや、欠損後に磨敲石として転用されているものも推定可能なものはここに分類した。

Ⅰ-a類：断面が楕円形であり頭部の細いもの。いわゆる乳棒状磨製石斧。表面に製作時の敲打痕を残し、両刃である。

Ⅰ-b類：両側縁が研磨され、断面が隅丸長方形であるもの。いわゆる定角式磨製石斧。刃部は基本的に丸みのある両刃である。

Ⅱ類：磨製石斧のうち基部の厚みが薄いもの。Ⅰ類と比較すると小型のものが多く出土している。製作方法としては、両面研磨のものと、片面研磨で裏面に剥離面をそのまま残すものとがみられ、形態も短冊形のものと、バチ形のものが見られる。

Ⅲ類：片面を研磨した石斧であり、裏面は剥離面を残し、打製で仕上げている。形態もバチ形のものと同様のものがみられる。基本的に片刃である。

Ⅳ類：打製石斧。小型のものが多く、欠損品が殆どである。一部に抉りのあるものもみられる。

石材の分類について

本遺跡出土の石器に使用される石材については、肉眼観察により、以下のように分類した。

第29表 小牧遺跡石材分類表

石材	分類	特徴
黒曜石	A類	黒色～鉛色の基質で、1～2mm大の淡い灰色のガラス質の粒子、白色粒子を中心とした不純物を非常に多く含む。光沢があり、透光性はやや高い。三船。
	B類	黒色の基質でわずかに不純物を含む。光沢はにぶく、透光性は低いかほぼない。上牛鼻、平古場。
	C類	鉛色の基質で、白色粒子や角閃石などの不純物をわずかに含む。A類・B類に比べ、光沢と透明感があり、透光性は高い。桑ノ木津留、日東、腰岳。
	D類	青みがかったグレーの基質で不純物は少ない。光沢はにぶく、透光性はほぼない。針尾などの西北九州系。
	E類	薄いグレーの基質で不純物は少ない。光沢は鈍く、透光性は低い。姫島。
頁岩	A類	粒子が細かく、珪質化しておりにおい光沢がある。基質は灰色とオリブ褐色のものがみられる。珪質頁岩。
	B類	粒子が細かく、均質である。不純物が少ない。鉄分が付着しているものも多数確認できる。本遺跡ではこの素材の剥片が多く出土しており、一部に加工・使用の痕跡がみられるが使用法は不明である。粘板岩質のものもみられる。
	C類	節理が発達したものの。旧石器時代に使用される。
安山岩	A類	不純物をわずかに含み、基質はざらついた質感を呈し、黒灰色～明灰色を呈するもの。
	B類	石英・長石を主体とした砂粒状の班晶の混入が肉眼で確認できる。多孔質のものと同様のものがみられる。本遺跡では礫石器類に使用される。
	C類	A・B類と比較すると淡い灰色の色調である。本遺跡ではこの素材の剥片が多く出土しており、一部に加工・使用の痕跡がみられるが使用法は不明である。輝石安山岩。
砂岩		粒子が細かく不純物が少ないものと、礫混じりのものとが見られ、比較的軟質である。本遺跡では、砥石・礫石器類に使用される。
凝灰岩		クリーム色・ピンク色を呈するものが多い。異質岩片を含む粒子の大きいものもみられる。軟質である。
ホルンフェルス		粒子が比較的細かく、やや緻密である。硬質。橙色の微粒を含むものと、節理が発達したものとが見られる。泥岩～砂岩質のもの。
花崗岩		石英・長石・雲母の細粒結晶の集合体。国見山系のもの（結晶が大きく金雲母を多量に含む）と高隈山系のもの（結晶が小さく黒雲母を含む）とが見られる。本遺跡では礫石器類に使用される。
蛇紋岩		緑がかった黒色を呈し、非常に硬質。本遺跡では主に磨製石斧として用いられる。
軽石		
チャート		油脂光沢に富む。灰・緑・白・茶・黒・赤など色調は違いが一括した。剥片石器として使用される。
玉髓		基質が珪質分に富み、白色・灰色・黄褐色・赤色のマーブル状の色調を呈するもの。剥片石器として使用される。
鉄石英		玉髓のなかで、鮮やかな赤色を呈するもの。剥片石器として使用される。
石英		乳白色を呈するもの。円礫化したものが多いが、硬質なためわずかに角が残る。本報告では水晶化した透明なものも含む。

Ⅶ層出土石器（第145～156図S145～S250）

Ⅶ層からは、総数724点の石器が出土した。その石材や各器種の点数はP188第32表に示している。器種ごとの点数は、石鏃22点（未製品3点を含む）、小型で精製のスクレイパー3点、大型で粗製のスクレイパー4点、石錐1点、楔形石器4点、二次加工や使用痕跡のある剥片16点（うち黒曜石・チャート製の小型のもの9点、頁岩B類・安山岩C類製の大型のもの7点）、磨製石斧27点、打製石斧6点、礫器56点、石錘9点、磨敲系石器170点、砥石4点、石核（残核を含む）6点、軽石加工品2点、異形石器1点、球状耳飾1点である。

S145～S164は石鏃である。S145～S150は平基もしくは挟りが浅いタイプである。側縁部はやや外湾する。S145は黒曜石C類製の平基の小型三角形鏃である。基部は左右非対称である。S146はチャート製で基部は左右非対称であり、挟りのごく浅い二等辺三角形鏃である。S147は安山岩A類製で平基で大型の二等辺三角形鏃である。S148～S150は浅い挟りの二等辺三角形鏃である。S148は黒曜石C類製で右脚部を欠損する。側辺部は直線的で脚端部は丸みを帯びる。S149は黒曜石A類製で左脚部と右脚端部を欠損する。側縁部は外湾する。S150は頁岩A類製の縦長の形態で、脚端部は先細り側辺部は直線的である。

S151～S154は山形の挟りをもつタイプである。S151・S152は安山岩A類製で形態は正三角形である。S151は脚端部は先細り側縁部はわずかに外湾する。S152は深いU字状の挟りを持ち脚端部は丸い。先端部を欠損する。S153・S154は脚端部が尖り側縁部は大きく外湾する。二等辺三角形の形態である。表裏に大きな剥離面を残す。S153は安山岩A類製で左脚部を欠損し、S154は赤色のチャート製で右脚部を欠損する。S155～S161はU字状の挟りを持つタイプである。S155～S158は脚端部に丸みを持ち側辺部が直線的なものである。S155は黒曜石B類製である。S156は石英製で両脚を欠損する。S157は灰色のチャート製でやや大型である。右脚部を欠損する。S158は鉄石英製で左脚部と先端部を欠損する。やや内湾気味に開いた脚部で縦長の形態である。脚端部は丸い。S159～S161は縦長のプロポーシオンで挟りが深く、脚端部は平坦に成形される。S159は灰色のチャート製で側辺部は直線的である。S160は頁岩A類製で脚端部は先細り、わずかに平坦な面を作る。側縁部は内湾気味で細身の印象である。左脚部を欠損する。S161は黒色のチャート製で、完形の大型品である。側縁部は直線的である。S162・S163は黒曜石C類製の未製品とみられる。S164はシルト質頁岩製で挟りはごく浅く先端部が極端に先細る形態である。風化が著しく剥離の状況の図化が難しかった。

S165は頁岩A類製の緻密な造りの小型のスクレイ

パーである。横長の剥片を素材とし、下縁に刃部を形成する。S166は黒曜石C類製で縦長の剥片の形状をそのまま活かし、端部にわずかな調整剥離を加えることで石錐に加工したものである。錐部の断面は三角形状で先端部を欠損する。S167は頁岩A類製の縦型のスクレイパーである。両側面に刃部を形成し、先端部は先細る。

S168～S171は楔形石器である。S168は緑色のチャート製で、右側辺には裏表両面から剥離調整を行っている。S169は頁岩A類製、S170は黒曜石C類製、S171は玉髓製である。

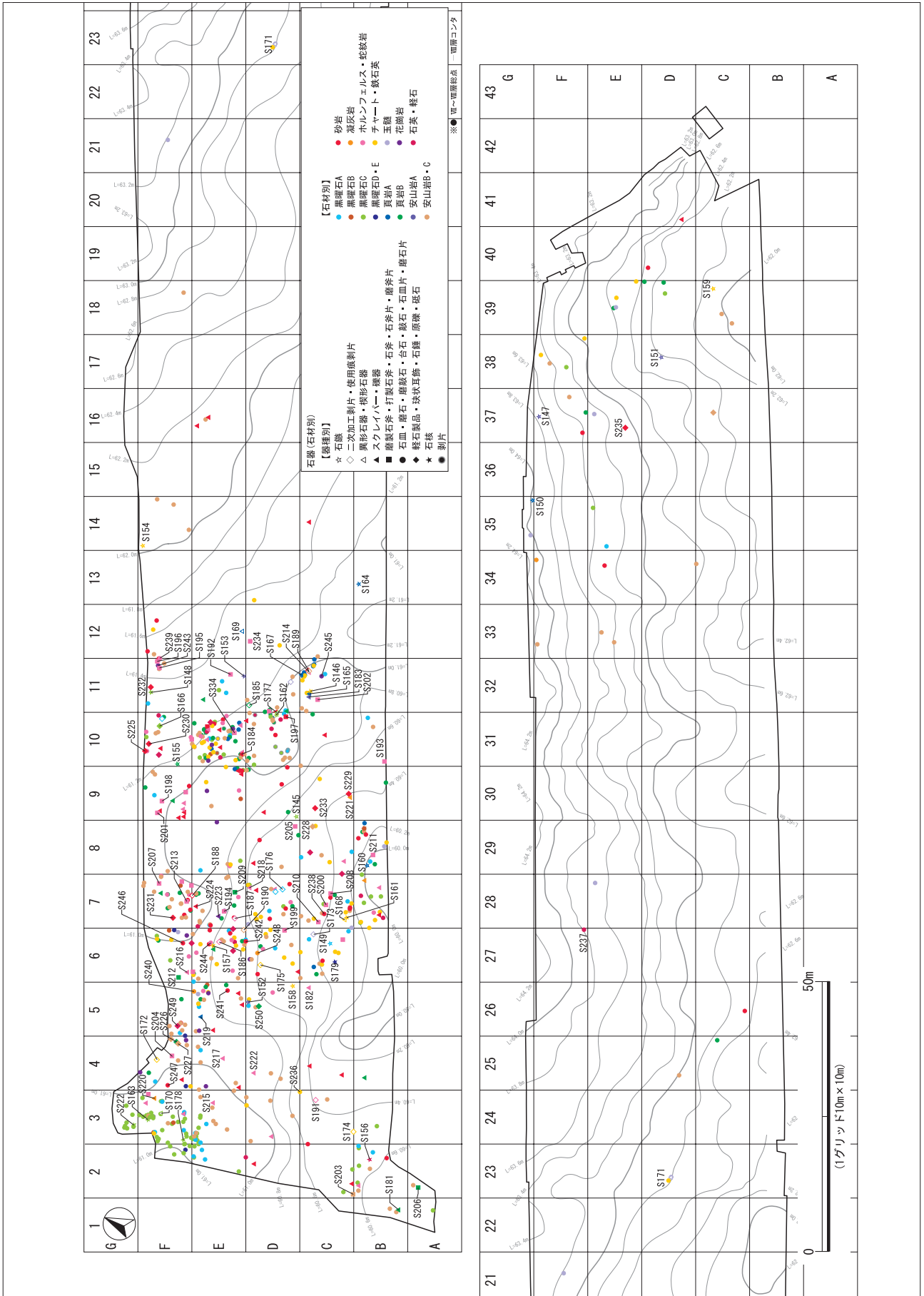
S172～S176は緻密な石材製の小型の剥片を素材とする二次加工や使用痕のある剥片である。S172・S173は主に側辺に二次加工・使用痕を持つ剥片である。S172は灰色のチャート製で、側面に微細な剥離を施し、断面形は大きな凹みを有する。右側面は鋭い角を成しわずかに擦れており、ノッチドスクレイパーのような用途で使用された可能性もある。S173は玉髓製の剥片の側面に加工を施したものである。S174～S176は主に下縁に二次加工を施したものである。S174は灰色のチャート製の剥片を使用している。S175は灰色のチャート製で下縁に表裏からの調整剥離が施される。上部は欠損している。S176は黒曜石A類製で主に下辺に表裏からの調整剥離が施され、小型ではあるが、スクレイパーのように水平に揃った刃部を形成している。

S177は黒曜石C類製の半円状の異形石器である。非常に繊細な剥離を繰り返すことにより成形される。右側面中央部が軽く挟れる。

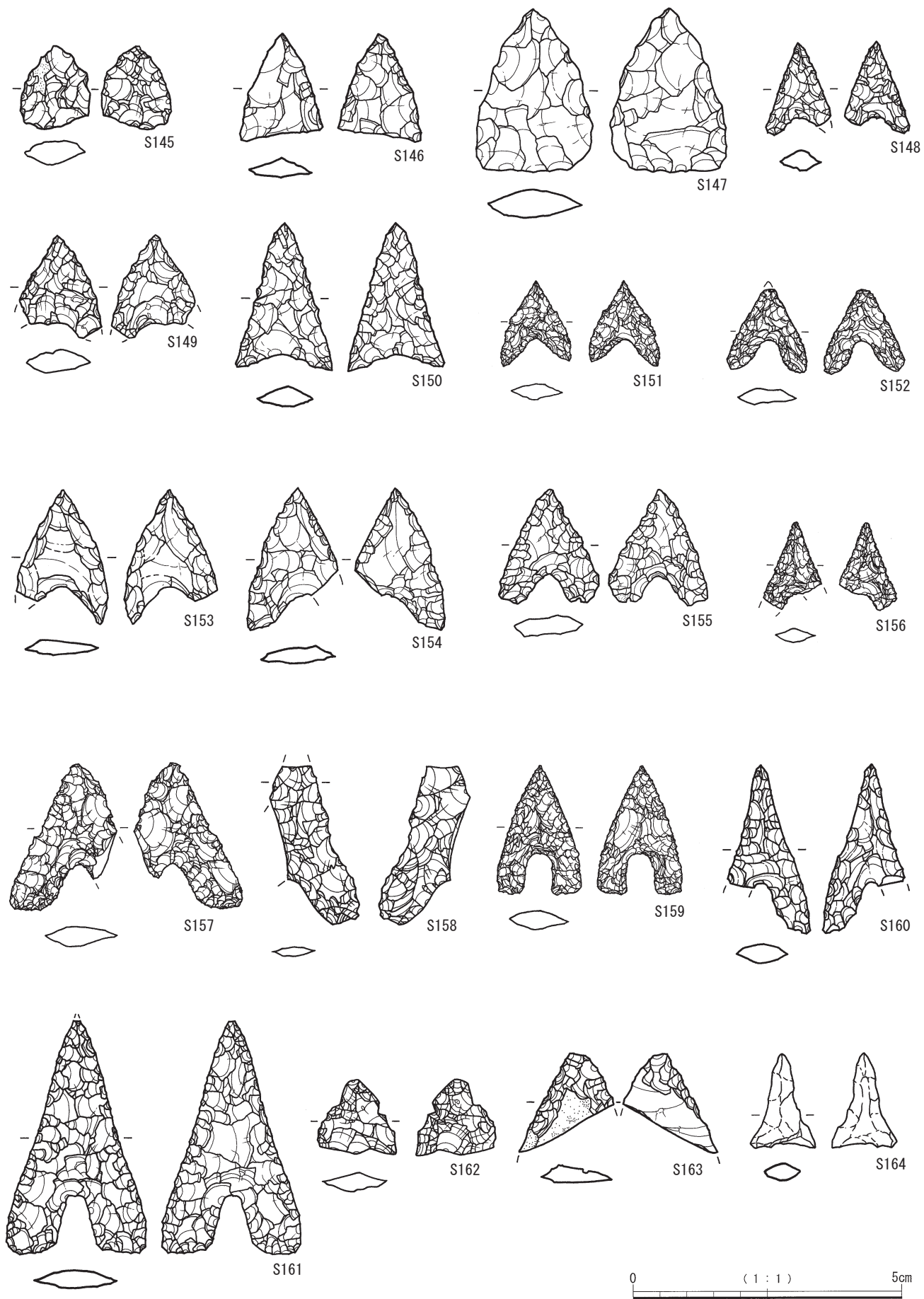
S178～S180は石核である。S178は黒曜石C類製で打面はほぼ水平である。S179は黒曜石E類製でもとは裏面の左方向からの剥離が作業面であったが打面再生により正面側に縦方向の剥離を施したあと正面側を作業面としたものと推察される。S180は黒曜石C類製で打面転移を繰り返しながら剥片を剥離している。

S181～S184は粗製のスクレイパー類である。S181は頁岩B類製で鉄分が付着する。横長の剥片を縦に使用し、両側面に刃部を形成している。左側面の刃部の調整はより丁寧であり、こちら側を機能部として製作・使用した可能性がある。S182はホルンフェルス製で正方形の形状である。素材の剥離の方向性と幅や厚みがS181と類似する。下面は階段状に剥離しており、楔として転用された可能性もある。S183は安山岩A類製で円形状を呈するものである。右側面と下面に刃部を形成し、敲打痕も残る。正面には強い擦痕が確認できる。S184は硬質砂岩製で、横形の剥片を使用しており、下辺の刃部はよく使用されている。断面は三角形状である。

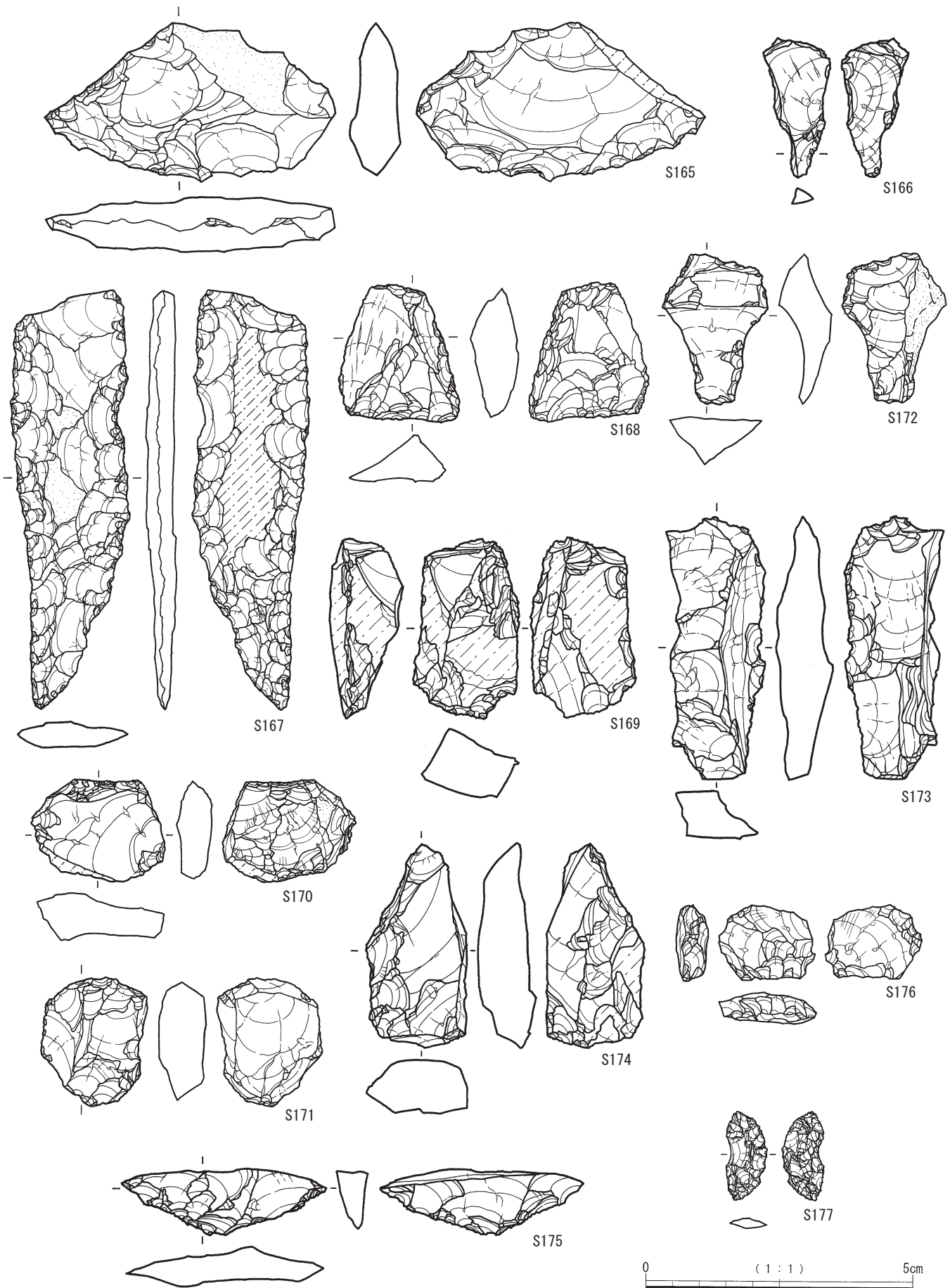
S185～S191は二次加工・使用痕のある剥片のうち粗製の大型品である。S185は頁岩B類製で、S186はホルンフェルス製である。S185は主に下面を、S186は主に



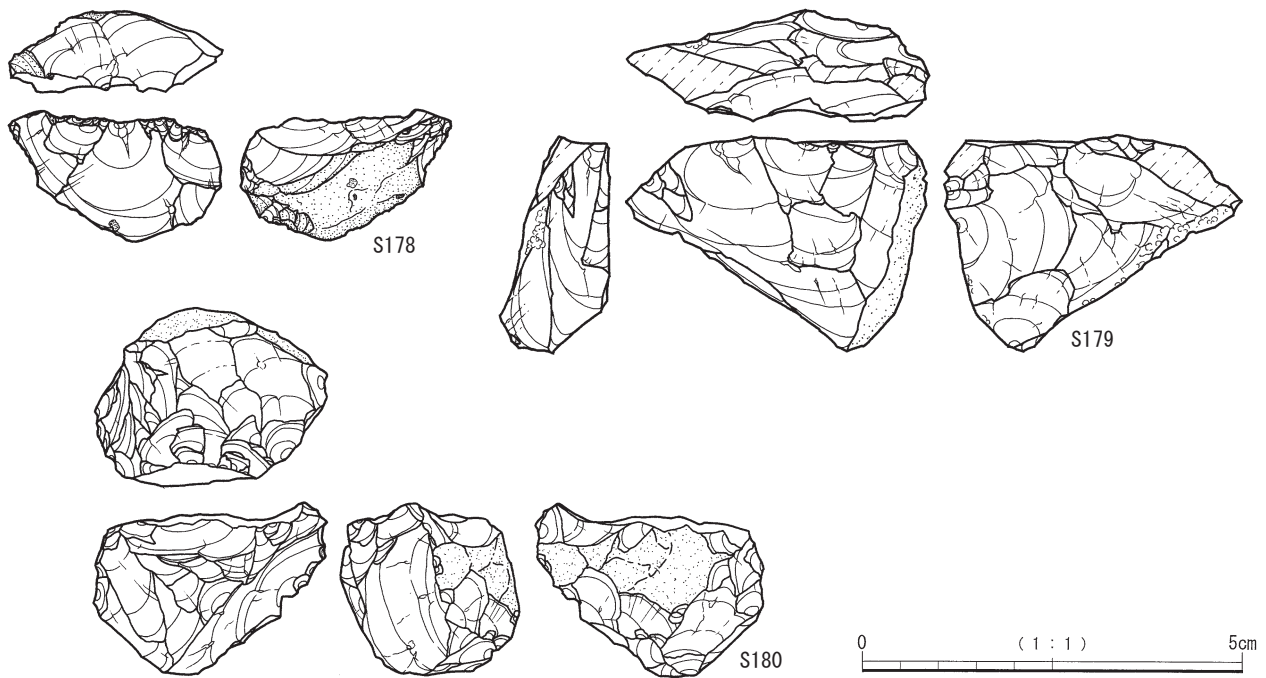
第144図 四層石器出土状況図



第145图 VII层出土石器(1)



第146图 VII層出土石器 (2)



第147図 VII層出土石器(3)

左側面に二次加工を施している。両方ともに上部が山形を呈するが意図的なものであるかは不明である。S187はホルンフェルス製で上縁・下縁には背面側からの調整剥離が施される。S188は砂岩製で扇型の板状の剥片で、下縁に連続した調整剥離を施す。S189・S190は安山岩C類製でともに被熱する。S189は縦長の剥片を使用しており、右側面に正面側からの調整剥離が施される。S190は丸みのある剥片で、意図的なものかは不明だが、被熱による破碎の可能性が裏面に残る。縁辺には使用による微細な剥離や擦れが確認できる。S191はホルンフェルス製で、裏面は自然面である。剥離面の縁辺に連続的な調整剥離を施す。

S192～S202はI類の磨製石斧である。S192～S194は完形品で、S192・S193はI-a類、S194はI-b類に分類した。S192には使用による欠損はみられず両刃の刃部が欠けずに残存する。敲打による整形の跡は研磨により磨り消され、わずかに残すのみである。S193はホルンフェルス製で刃部は敲击潰れ、敲打具としても使用している。大型である。S194はホルンフェルス製で小型である。刃部の薄さはII類とも共通するが、角張った断面形からI-b類とした。S195はホルンフェルス製で、S196は蛇紋岩製のI-b類の基部である。基部端部はともに平たく成形されている。S197～S200は刃部である。S197は硬質の砂岩製、S198～S200はホルンフェルス製である。形態的にはS197・S198はI-a類で、S199・S200は側面を研磨により面取りし、やや片刃気味のI-b類である。S200の上辺は欠損後に再加工が施されている。S201・S202はホルンフェルス製のI-b類の基部

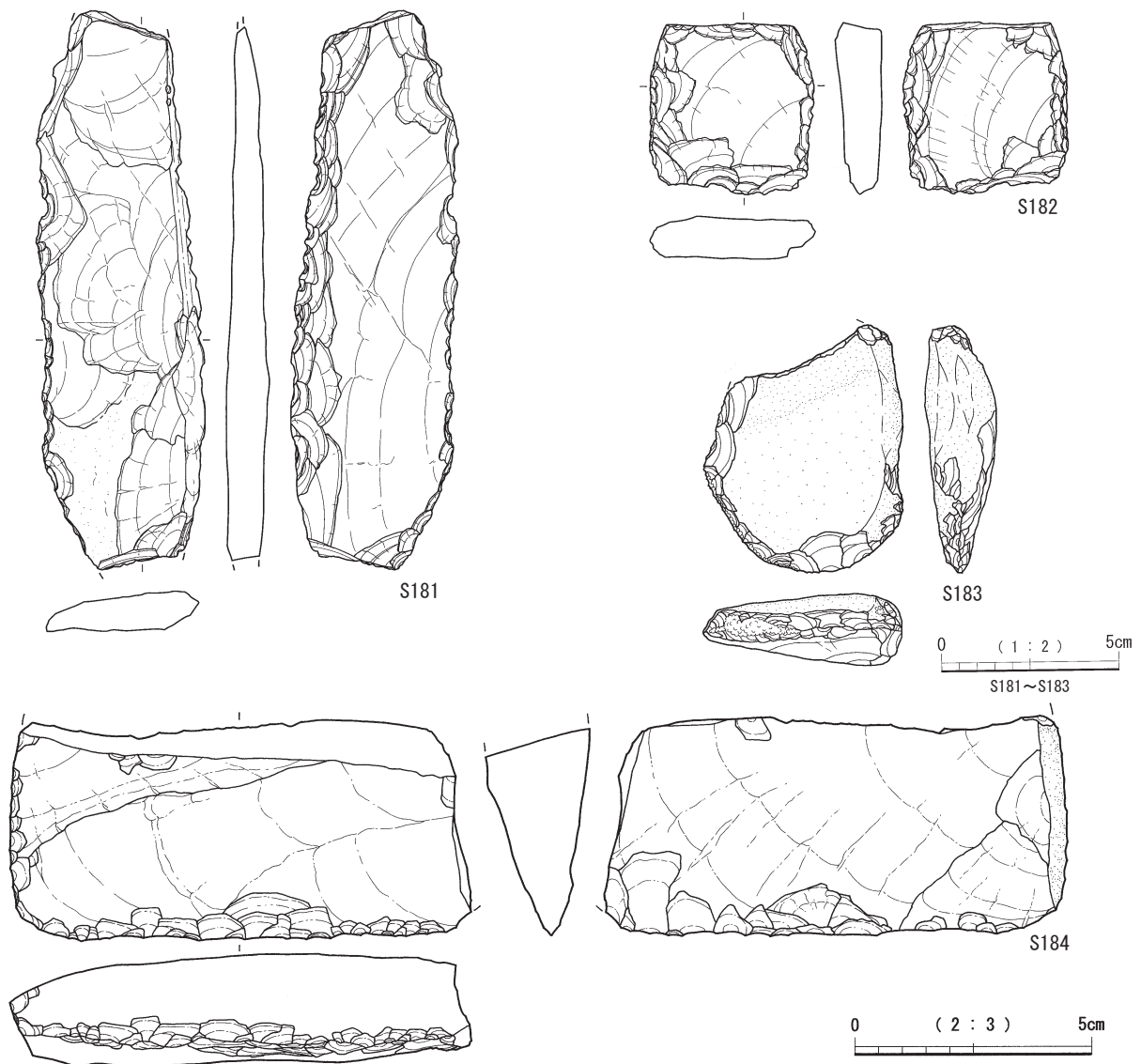
を磨敲石に転用したものである。

S203～S209はII類に分類した磨製石斧で、小型のものが多い。S203は短冊型の完形品で先端部に向かってややすぼまる形態である。刃部の擦痕は斜方向に入り使用に依るものと考えられる。S204はホルンフェルス製の両頭のもので基部中心付近に最大幅を持つ楕円状の形態である。刃部にはS203と同様の擦痕が確認できる。S205～S208は刃部である。短冊形の形態のものであると推測できる。S205はホルンフェルス製で、S206は頁岩B類製で偏平な断面形である。S207・S208はホルンフェルス製で断面形は中央部がわずかに盛り上がる。これらの刃部片には製作時についてと思われる擦痕のほか垂直方向の擦痕が付き、使用痕であると考えられる。S209は頁岩B類製の基部である。端部は丸みを持って成形され断面形は三角形状である正面は丁寧に研磨されるが裏面には剥離痕をそのまま残す。

S210はホルンフェルス製の磨製石斧の刃部で形態的特徴からIII類に分類する。刃部に垂直方向の使用痕跡が確認できる。

S211～S213はIV類の打製石斧である。S211はホルンフェルス製の刃部である。S212は頁岩B類製で欠損部の上面を二次的に加工していると思われる。S213はホルンフェルス製で下縁と左側面には細やかな剥離調整が施されるが、そのほかの部分には主要剥離面を残す。製作途中で廃棄した未製品である可能性が高い。

S214～S224は礫器である。S214～S217は縦長の形状のものである。すべてホルンフェルス製である。S215・S216の刃部は両面からの打撃で、S217の刃部は



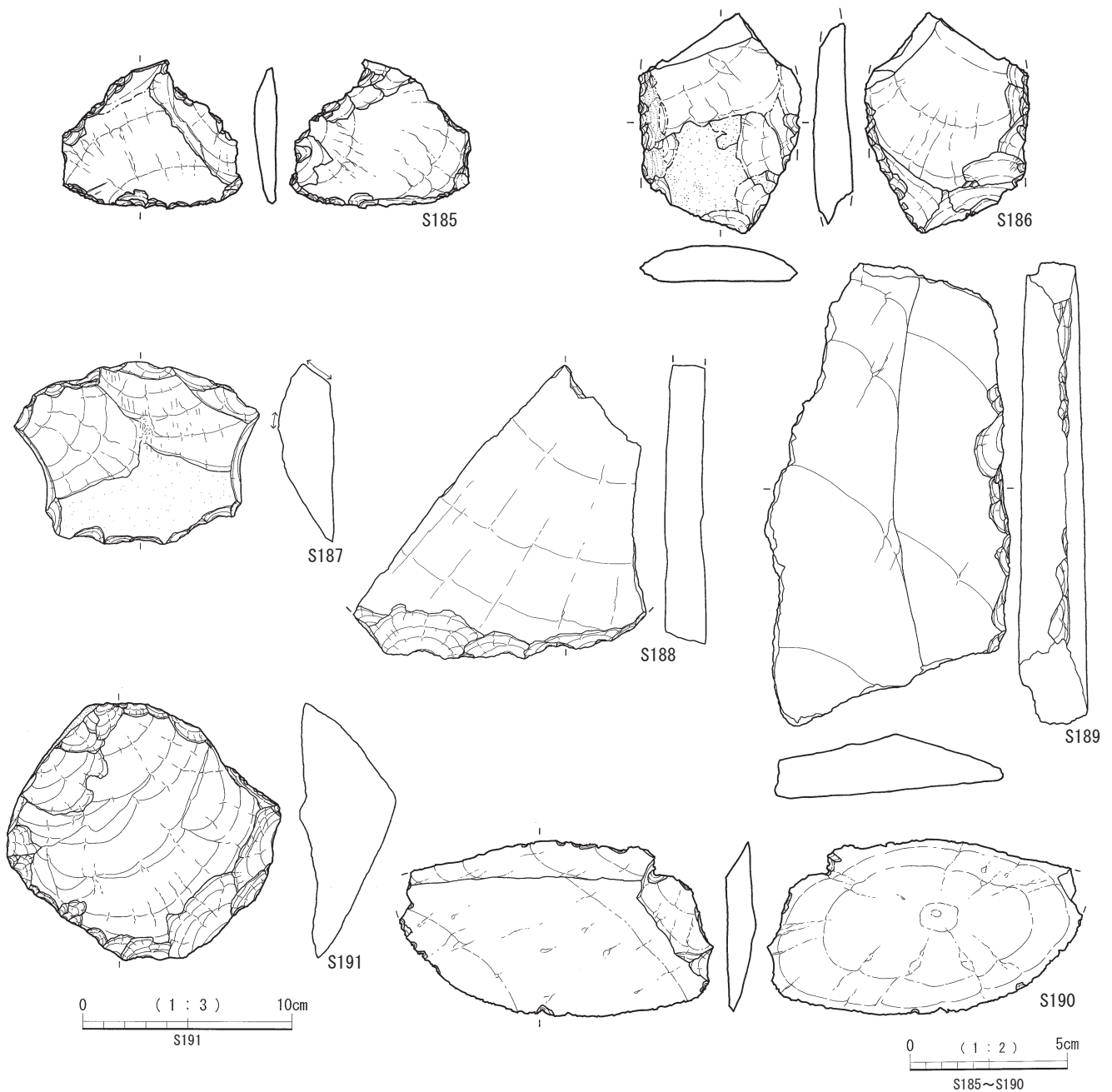
第148図 VII層出土石器 (4)

片面からの打撃で形成される。S214は棒状の原礫の端部を打ち搔いて尖らせたものである。剥離痕が少ないことから使用頻度のごく少ないか、柔らかいものを対象として使用された可能性が窺える。S215・S216は石斧のような使用方法であった可能性もある。S218は剥片を採った後の残核が礫器として再加工された可能性もある。また上面・下面に対峙する剥離やの階段状の剥離がみられることから、大型の楔として使用された可能性もある。

S219は頁岩A類製で下面には片面からの打撃により刃部が形成される。さらに上縁には両側からの剥離による刃部の形成が施される。S220は凝灰岩製で、扁平な亜円礫を使用している。S221は凝灰岩製で、両面からの打撃により刃部を形成する。両側面には対極に挟りを作っており、石錘としても使用したか、装着のための造

作である可能性もある。S222はホルンフェルス製で横長の形状である。打ち割った礫の形状を活かし、両側から細やかな調整剥離を施し刃部を形成する。S219～S222は持ち手部分から刃部までの長さが短く搔器のような使用方法が想定できる。S223は高隈山系とみられる花崗岩製で、下面に両面からの打撃で刃部を形成し、持ち手に向かってすぼまる形状である。持ち手は平坦に加工している。S224は砂岩製で丸い形状である。円礫を素材とし、上縁・右側縁・下縁に刃部を形成している。S223・S224は敲打具としても使用している。

S225～S233は石錘である。S226は頁岩B類製で、S227・S228は多孔質の安山岩B類製で、そのほかは砂岩製である。S225は楕円形の扁平礫の長軸の両極を打ち搔いて製作している。S226～S228は短軸の両極を打



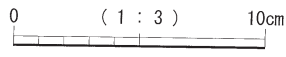
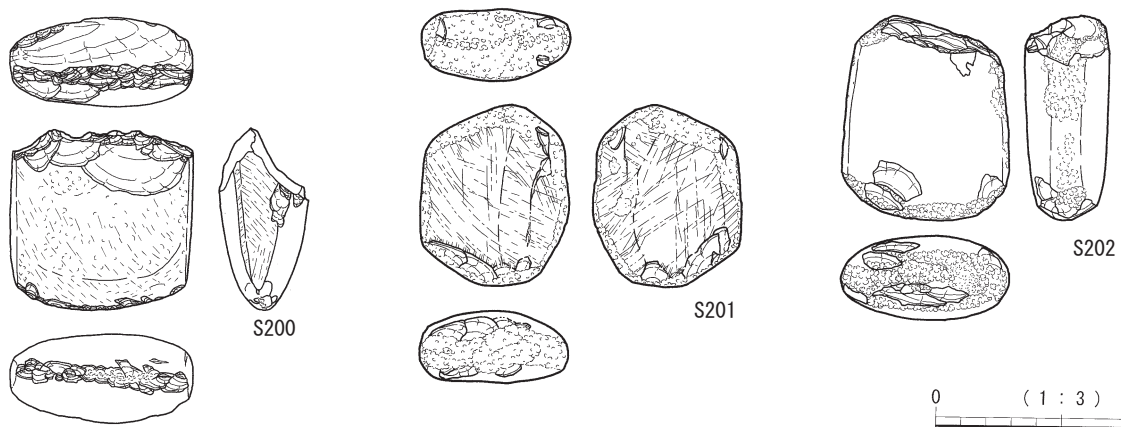
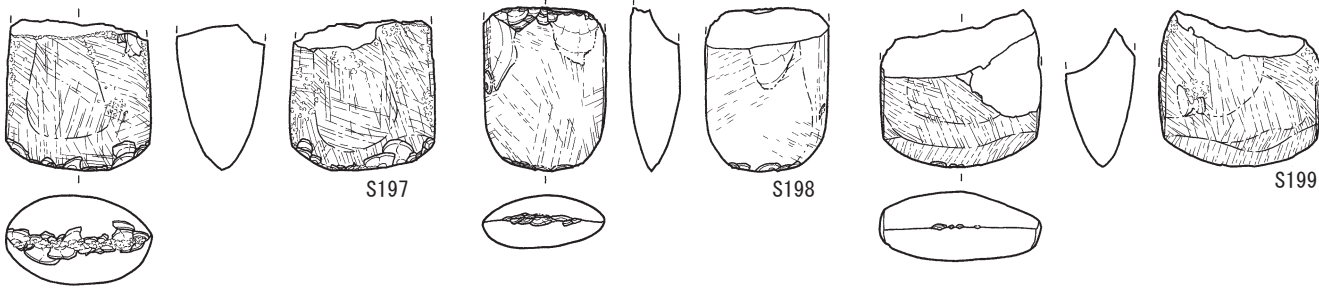
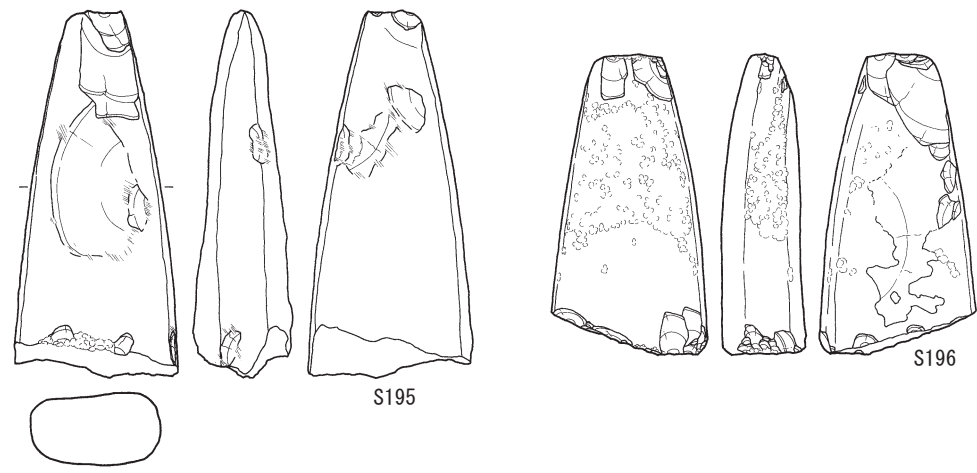
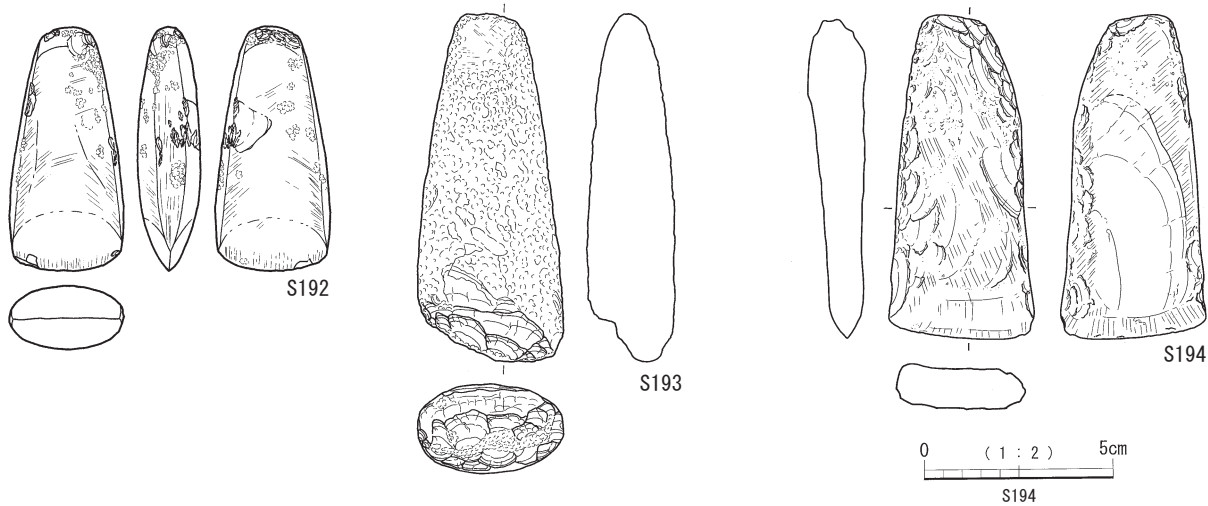
第149図 VII層出土石器 (5)

ち搔いて製作している。S229～S233は不定形な形状の礫の長軸を打ち欠いて製作している。S230は上縁・下縁を平坦に成形した後に打ち搔いて製作している。S231は、ハート型の自然礫の形状を利用して製作したものであり、下面端部は敲打にも使用される。S232・S233は扁平な礫を使用しており下半部が残存する。

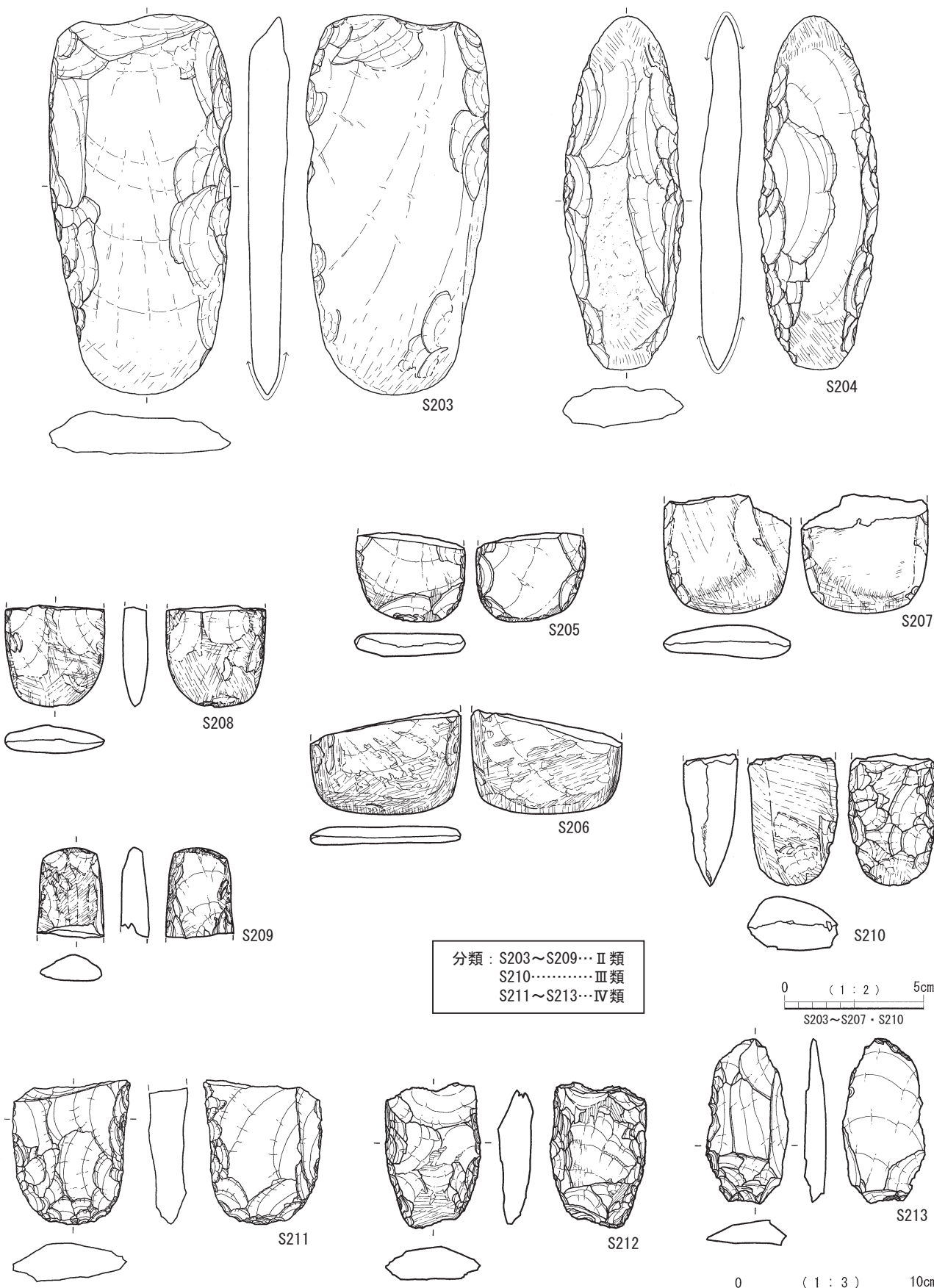
S234は磨製の石製品で、S235は砥石である。S234はホルンフェルス製の棒状の形態の小型品で、上面・下面は欠損している。原寸大で掲載している。両側面を擦って横断面は、右側面側が先細る三角形形状である。左側面には8個の浅い溝が確認できる。用途は不明である。

S235は、緻密で混入物の少ない砂岩を素材とし、その剥片の正面を砥面として使用している。扁平な板状の形態である。左側面と下面には二次加工を施す。右側面を欠損する。

S236～S245は磨敲石類である。S236～S239は縦長のプロポジションで、主に敲石として使用されたものである。S236は緑色のチャート製で、三角形形状である。上面や下面の角の部分敲打に使用している。S237は石英製、S238は砂岩製であり、これらには磨面も確認できるが敲石としての使用が主であったと考えられる。S239はホルンフェルス製で左側面や下面を中心とした



第150图 VII层出土石器(6)

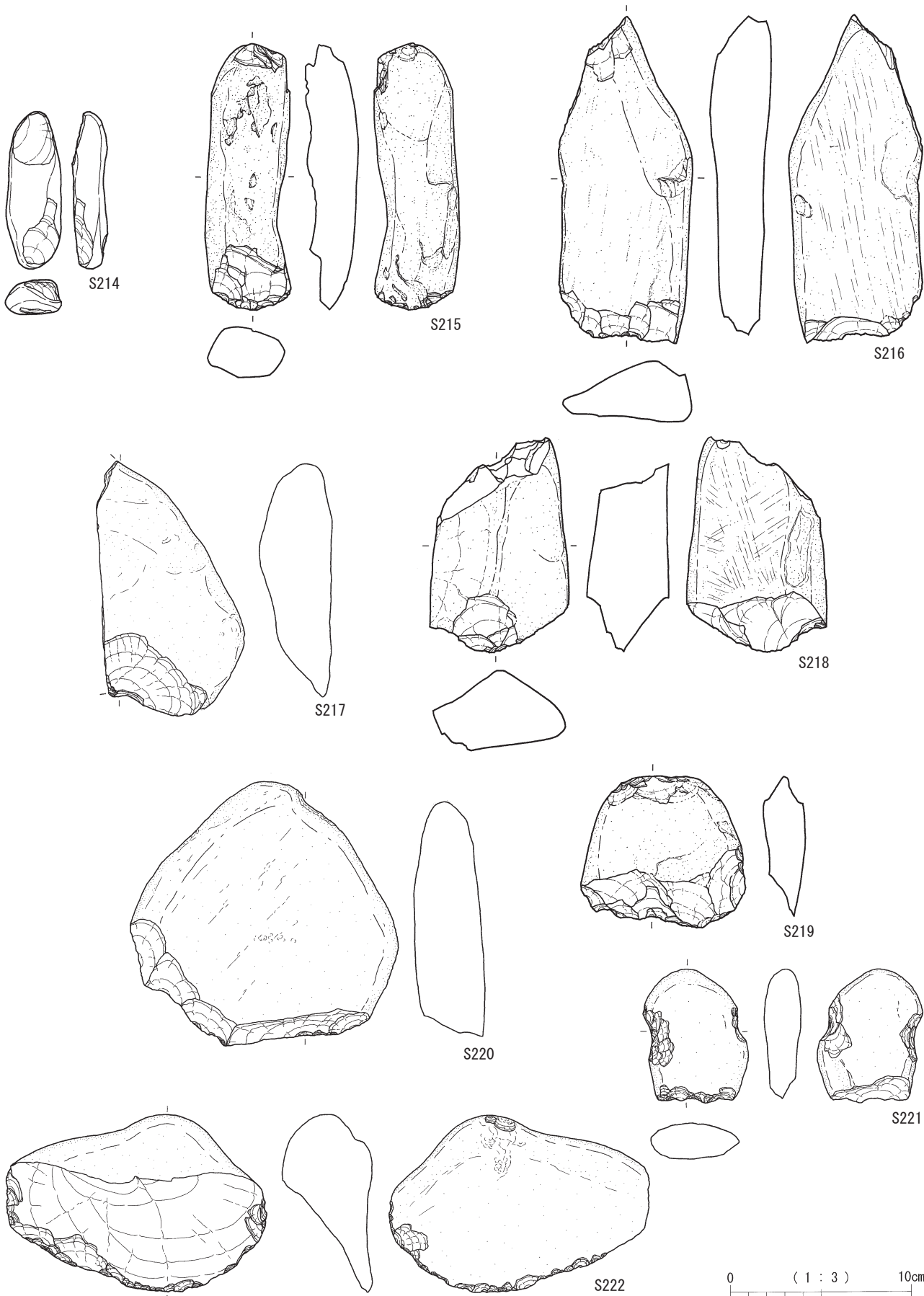


分類：S203~S209…Ⅱ類
 S210……………Ⅲ類
 S211~S213…Ⅳ類

0 (1:2) 5cm
 S203~S207・S210

0 (1:3) 10cm
 S208・S209・S211~S213

第151図 VII層出土石器(7)



第152図 VII層出土石器(8)



第153図 VII層出土石器 (9)

数ヶ所に剥離痕がみられる。使用の頻度は低いと思われるものの石器などの硬い素材を対象物とした可能性が高い。S240は凝灰岩製で、上面・下面を強く磨っており方形に成形されている。下面を一部欠損する。S241～S245は扁平な円形・楕円形状で、側面のほぼ全周に敲打痕や磨面がみられるものである。正面・背面の磨面は稜を形成する。S241・S242は砂岩製で、S243・S245は国見山系の花崗岩製である。S244はホルンフェルス製である。S241は、縦長のプロポーションで、平面形は四隅がわずかに角張る。S242～S245は円形のものである。S243は下面を欠損しており、割口を敲打に再使用している。

S246～S248は台石である。S246は礫混じりの砂岩製であり、板状の自然礫の形態をうまく利用して使用している。角の部分は敲打にも使用されている。S247は緻密で不純物の少ない砂岩製で表裏ともによく使用されており磨面は明瞭に凹む。下面には打ち搔きにより搔き出し口が作られている。S246と同様に角となる部分には敲打痕がみられる。S248は凝灰岩製で、正面・背面ともによく使用されているが裏面に平坦な磨面が形成される。上面には敲打痕と擦痕が確認でき、平らな面を持つ。下面は敲打に使用される。若干の赤化がみられるため被熱の可能性もある。3点ともに軽量の小型品であるために持ち運びに適したものであったことが窺える。

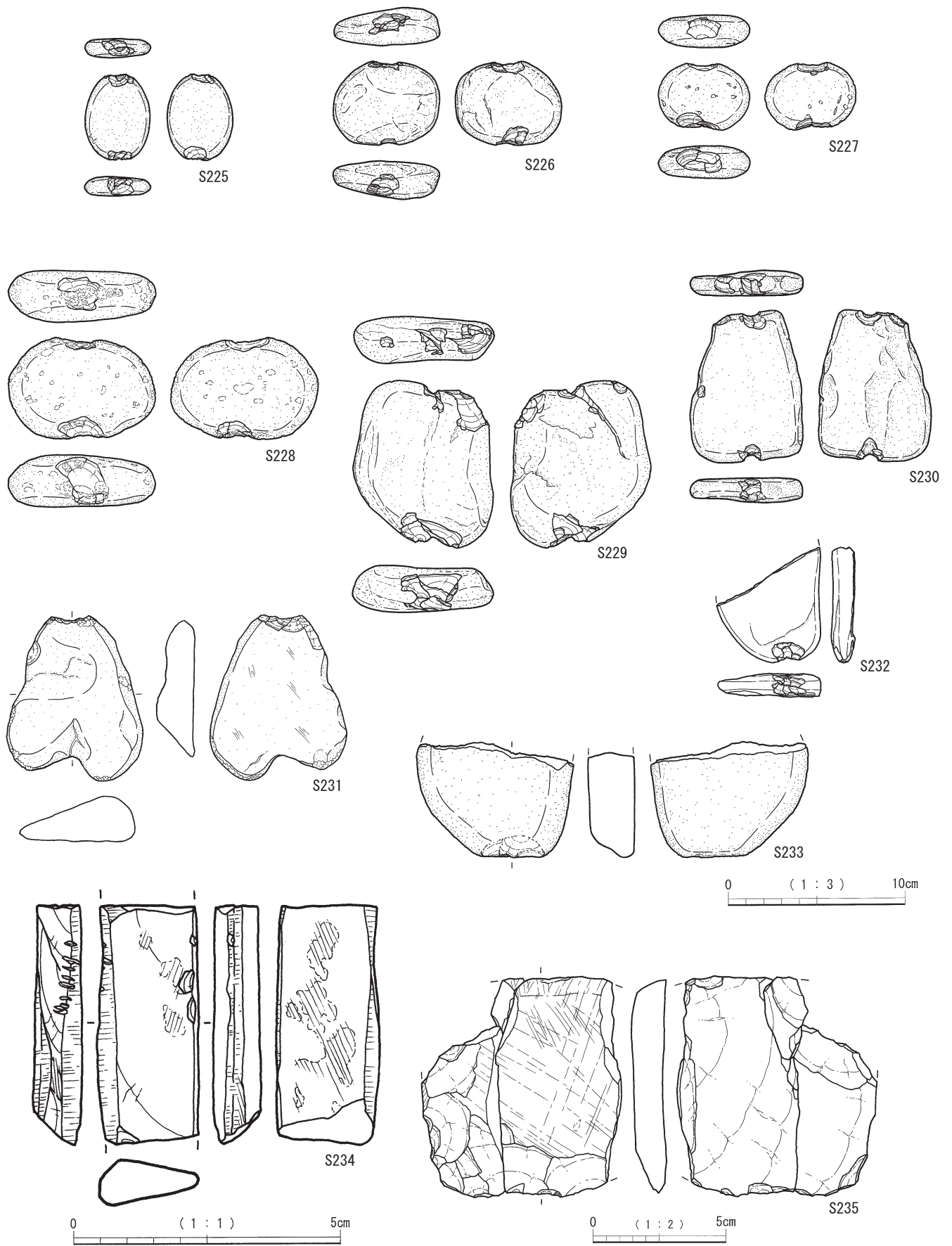
S249は軽石製品である。正面の形状は歪ではあるが逆三角形である。中央部に浅い溝を2条形成する。下面からみると中央部が盛り上がる。側面は断面形が先細るように両側から面取りが施される。舟形の加工品である可能性もある。

S250は黒く緻密な頁岩B類製の塊状耳飾片である。縦に長く角張った形状のもので、中央部付近で折れが生じている。断面形は偏平に整えられる。塊の内側には3つ

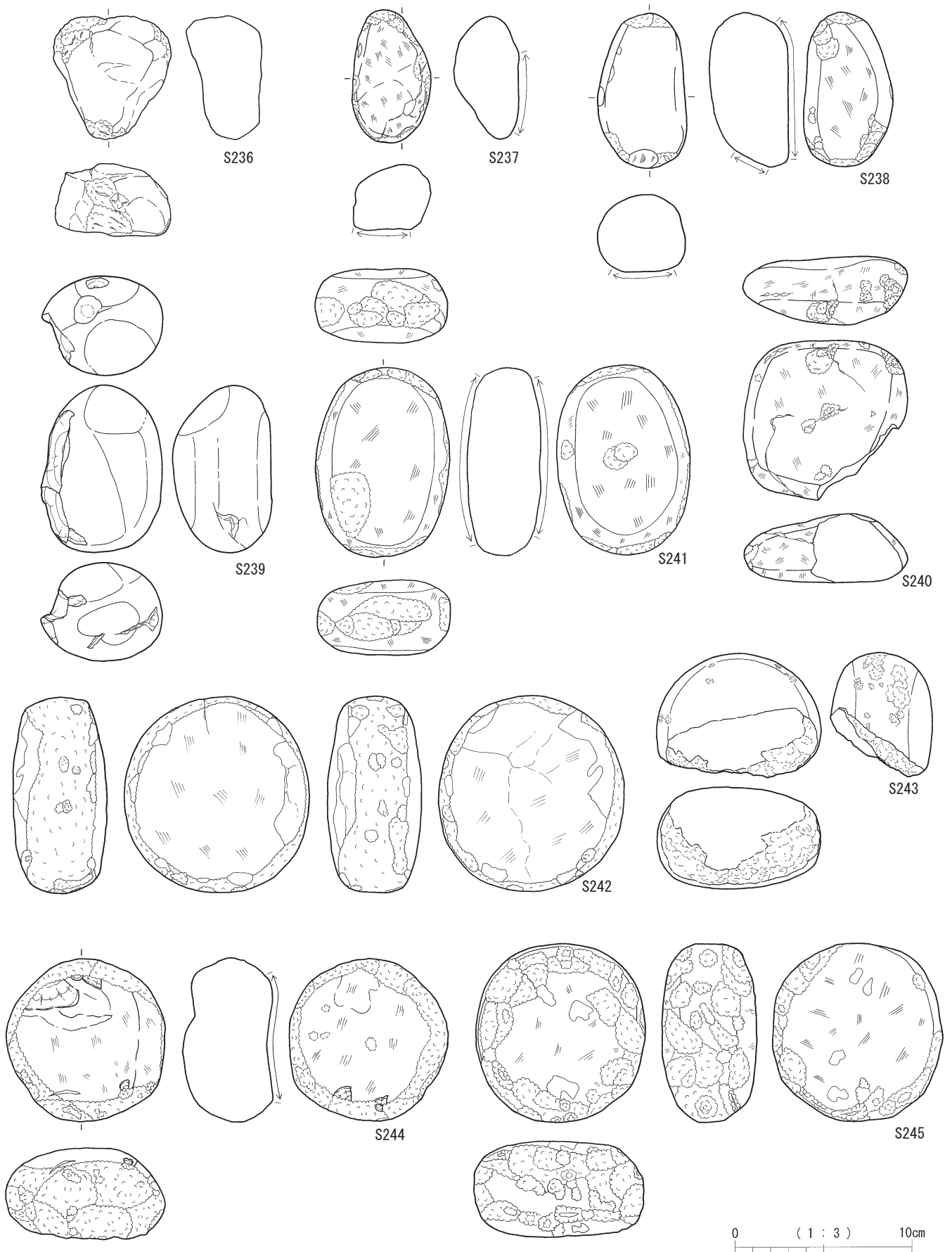
の穿孔が縦位に均等に施される。長軸のちょうど中心の孔が最も大きく孔径約3mmである。その上下の孔は孔径2mm程とやや小さい。穿孔は表裏の両側から施されている。



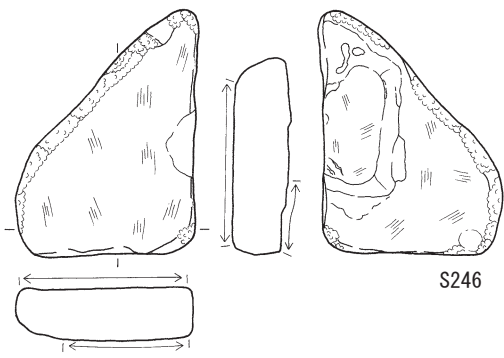
写真3 No.S194出土状況



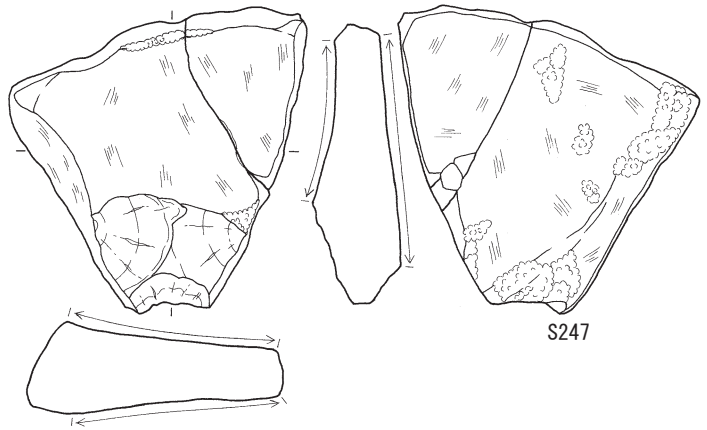
第154图 VII层出土石器 (10)



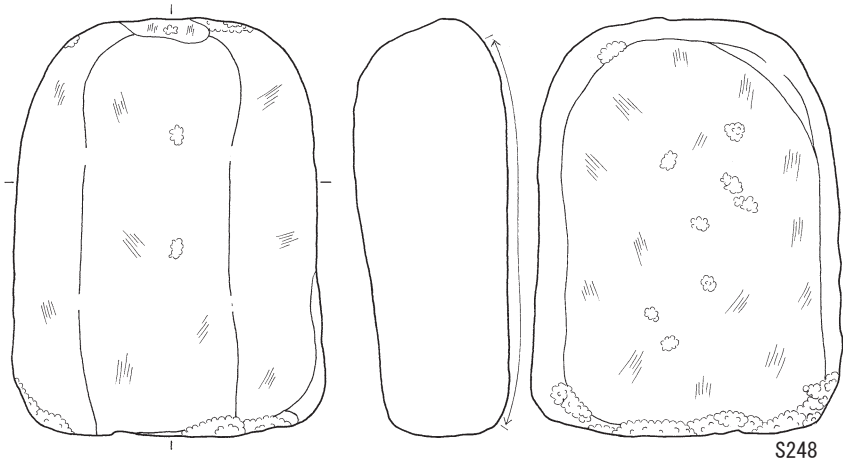
第155图 VII层出土石器 (11)



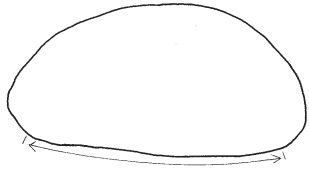
S246



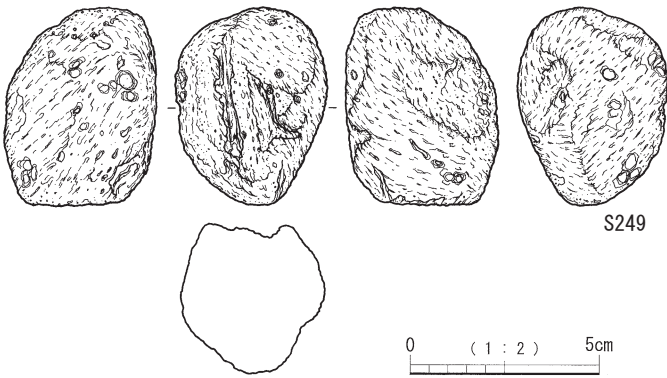
S247



S248

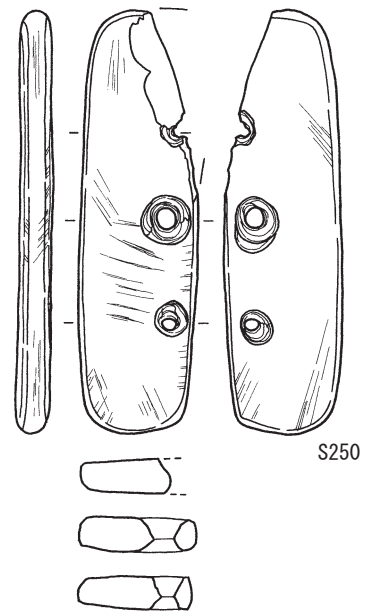


0 (1 : 3) 10cm



S249

0 (1 : 2) 5cm



S250

0 (1 : 1) 5cm

第156图 VII層出土石器 (12)

第30表 石器観察表 (Ⅶ層出土) (1)

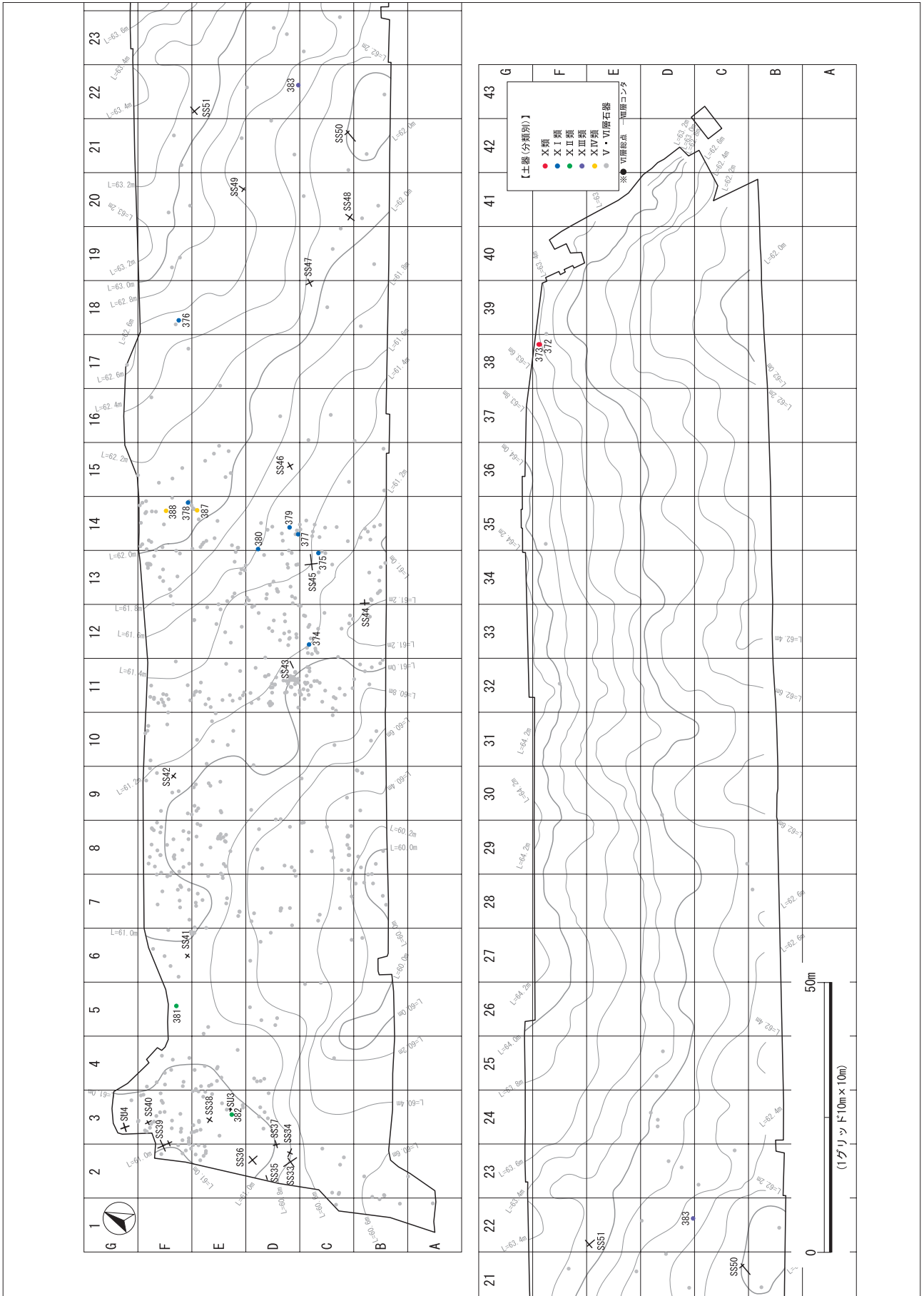
挿図 番号	掲載 番号	取上 番号	出土区	層	器種	分類	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	石材	石材 分類	備考
145	S145	53975	D9	Ⅶa	石鏃	-	15.00	13.00	4.50	0.80	黒曜石	黒曜石C	
	S146	25382	C11	Ⅶb	石鏃	-	19.60	15.20	3.50	0.92	チャート	-	
	S147	102311	F37	Ⅶa	石鏃	-	30.30	21.70	5.80	3.68	安山岩	安山岩A	
	S148	24559	F11	Ⅶa	石鏃	-	16.70	11.80	4.00	0.43	黒曜石	黒曜石C	欠損品
	S149	54143	C6	Ⅶb	石鏃	-	19.00	15.00	4.50	1.00	黒曜石	黒曜石A	欠損品
	S150	102082	G35	Ⅶa	石鏃	-	26.90	17.90	4.00	1.30	頁岩	頁岩A	
	S151	104899	D38	Ⅶa	石鏃	-	16.00	13.50	3.00	0.34	安山岩	安山岩A	
	S152	51647	D5	Ⅶa	石鏃	-	16.00	15.00	3.10	0.42	安山岩	安山岩A	欠損品
	S153	25131	E11	Ⅶb	石鏃	-	24.80	17.20	3.00	0.89	安山岩	安山岩A	欠損品
	S154	24957	F14	Ⅶa	石鏃	-	26.00	16.90	3.50	1.05	チャート	-	欠損品
	S155	54432	F10	Ⅶa	石鏃	-	21.00	18.50	4.50	1.20	黒曜石	黒曜石B	
	S156	51984	B2	Ⅶa	石鏃	-	16.50	11.00	3.00	0.35	石英	-	欠損品
	S157	51462	E6	Ⅶa	石鏃	-	27.50	20.00	3.00	1.46	チャート	-	欠損品
	S158	51188	D5	Ⅶa	石鏃	-	29.00	16.50	1.50	1.25	鉄石英	-	欠損品
	S159	104877	C39	Ⅶa	石鏃	-	24.50	16.00	3.50	0.91	チャート	-	
	S160	54860	B8	Ⅶa	石鏃	-	31.00	15.50	4.00	1.10	頁岩	頁岩A	欠損品
	S161	54256	C7	Ⅶa	石鏃	-	43.20	25.80	4.00	3.30	チャート	-	
S162	53878	D10	Ⅶa	石鏃	-	14.00	15.00	3.50	0.59	黒曜石	黒曜石C	未製品	
S163	53192	F3	Ⅶa	石鏃	-	18.50	17.00	3.00	0.70	黒曜石	黒曜石C	欠損品	
S164	22284	B13	Ⅶb	石鏃	-	17.50	12.00	3.30	0.26	頁岩	頁岩A		
146	S165	25365	C11	Ⅶb	スクレイパー	-	29.50	54.00	10.00	15.45	頁岩	頁岩A	
	S166	54643	F10	Ⅶb	石鏃	-	26.00	19.90	6.40	1.40	黒曜石	黒曜石C	
	S167	25257	C11	Ⅶa	スクレイパー	-	78.00	22.00	5.80	8.37	頁岩	頁岩A	
	S168	54313	C7	Ⅶb	楔形石器	-	26.10	22.00	9.00	4.70	チャート	-	
	S169	25269	E12	Ⅶb	楔形石器	-	33.60	19.40	13.70	8.23	頁岩	頁岩A	
	S170	53191	F3	Ⅶa	楔形石器	-	19.30	25.10	8.70	4.00	黒曜石	黒曜石C	
	S171	56421	D23	Ⅶa	楔形石器	-	24.00	19.40	9.20	4.30	玉髓	-	
	S172	51693	F4	Ⅶa	二次加工・使用痕剥片	-	28.00	19.50	10.00	3.20	チャート	-	
	S173	51085	C6	Ⅶa	二次加工・使用痕剥片	-	49.10	17.80	10.40	8.60	玉髓	-	
	S174	51973	B3	Ⅶa	二次加工・使用痕剥片	-	38.00	18.80	10.00	8.50	チャート	-	
	S175	51950	D6	Ⅶa	二次加工・使用痕剥片	-	12.40	38.10	7.80	2.60	チャート	-	
S176	53693	D7	Ⅶa	二次加工・使用痕剥片	-	14.00	18.00	6.00	1.60	黒曜石	黒曜石A		
S177	53879	D10	Ⅶa	異形石器	-	16.50	7.50	2.00	0.25	黒曜石	黒曜石C		
147	S178	52761	F3	Ⅶa	石核	-	17.50	28.00	10.50	3.55	黒曜石	黒曜石C	
	S179	51095	C6	Ⅶa	石核	-	28.20	39.80	14.00	11.30	黒曜石	黒曜石E	
	S180	53578	G3	Ⅶa	石核	-	22.50	30.20	23.40	18.80	黒曜石	黒曜石C	
148	S181	53162	B1	Ⅶa	スクレイパー	-	158.00	47.50	11.20	100.05	頁岩	頁岩B	
	S182	51173	C5	Ⅶa	スクレイパー	-	48.50	46.10	12.00	47.54	ホルンフェルス	-	
	S183	25364	C11	Ⅶb	スクレイパー	-	69.50	55.80	20.10	86.70	安山岩	安山岩A	
	S184	54404	E10	Ⅶb	スクレイパー	-	46.00	97.00	24.00	133.10	砂岩	-	
149	S185	25043	D11	Ⅶa	二次加工・使用痕剥片	-	41.80	57.00	8.00	20.10	頁岩	頁岩B	
	S186	52943	E6	Ⅶa	二次加工・使用痕剥片	-	69.50	51.70	12.00	50.86	ホルンフェルス	-	
	S187	53229	E7	Ⅶa	二次加工・使用痕剥片	-	58.00	78.00	17.70	79.68	ホルンフェルス	-	
	S188	53234	E7	Ⅶa	二次加工・使用痕剥片	-	93.20	93.00	12.50	136.40	砂岩	-	
	S189	25369	C11	Ⅶb	二次加工・使用痕剥片	-	146.70	78.00	21.90	251.78	安山岩	安山岩C	
	S190	53482	E6	Ⅶa	二次加工・使用痕剥片	-	56.00	10.00	9.50	51.60	安山岩	安山岩C	
	S191	52013	C3	Ⅶa	二次加工・使用痕剥片	-	130.00	121.70	46.00	633.00	ホルンフェルス	-	
150	S192	23175	E11	Ⅶa	磨製石斧	I-a	96.00	44.80	24.90	153.03	ホルンフェルス	-	
	S193	54930	B10	Ⅶa	磨製石斧	I-a	137.70	57.20	35.00	380.50	ホルンフェルス	-	
	S194	52975	E7	Ⅶa	磨製石斧	I-b	86.20	38.20	12.20	67.10	ホルンフェルス	-	
	S195	23937	F11	Ⅶa	磨製石斧	I-b	145.00	65.00	40.00	452.82	ホルンフェルス	-	
	S196	23949	F11	Ⅶa	磨製石斧	I-b	118.50	61.50	33.20	354.40	蛇紋岩	-	
	S197	53886	D10	Ⅶa	磨製石斧	I-a	58.90	57.20	35.10	165.70	砂岩	-	
	S198	54123	F9	Ⅶa	磨製石斧	I-a	64.00	48.00	20.30	85.30	ホルンフェルス	-	
	S199	51207	D6	Ⅶa	磨製石斧	I-b	61.10	63.40	27.00	110.20	ホルンフェルス	-	
	S200	54816	C7	Ⅶa	磨製石斧	I-b	71.20	72.20	34.70	241.00	ホルンフェルス	-	
	S201	54429	F9	Ⅶb	磨製石斧	I-b	71.00	58.20	27.80	180.20	ホルンフェルス	-	風化 縁刃つぶれ
	S202	25381	C11	Ⅶa	磨製石斧	I-b	80.20	66.00	33.40	293.05	ホルンフェルス	-	
151	S203	52386	C2	Ⅶa	磨製石斧	II	137.00	65.90	15.00	197.20	安山岩	安山岩B	
	S204	51699	F4	Ⅶa	磨製石斧	II	128.00	41.60	14.70	104.09	ホルンフェルス	-	両頭タイプ
	S205	53716	D8	Ⅶa	磨製石斧	II	31.00	39.20	8.00	13.90	ホルンフェルス	-	
	S206	53157	A2	Ⅶa	磨製石斧	II	37.20	54.00	6.40	19.20	頁岩	頁岩B	
	S207	53037	F7	Ⅶa	磨製石斧	II	42.70	45.60	12.00	30.30	ホルンフェルス	-	
	S208	53655	C7	Ⅶa	磨製石斧	II	54.20	53.00	15.10	56.50	ホルンフェルス	-	
	S209	49482	E7	Ⅶa	磨製石斧	II	47.90	35.90	15.20	35.50	頁岩	頁岩B	
	S210	53634	C7	Ⅶa	磨製石斧	III	47.10	32.40	19.00	34.70	ホルンフェルス	-	
	S211	54326	B8	Ⅶa	打製石斧	IV	78.00	63.00	20.00	123.30	ホルンフェルス	-	刃部
	S212	53215	F6	Ⅶa	打製石斧	IV	77.30	50.50	20.00	88.40	頁岩	頁岩B	
	S213	53050	F7	Ⅶa	打製石斧	IV	88.00	43.80	13.00	51.50	ホルンフェルス	-	

第31表 石器観察表 (Ⅶ層出土) (2)

挿図 番号	掲載 番号	取上 番号	出土区	層	器種	分類	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	石材	石材 分類	備考
152	S214	25368	C11	Ⅶb	礫器	-	85.70	30.10	19.20	66.50	ホルンフェルス	-	
	S215	52366	E3	Ⅶa	礫器	-	145.60	46.00	29.30	266.60	ホルンフェルス	-	
	S216	54578	F6	Ⅶb	礫器	-	178.70	73.20	36.00	604.00	ホルンフェルス	-	
	S217	52101	E4	Ⅶa	礫器	-	139.00	81.00	39.00	472.50	ホルンフェルス	-	
	S218	52914	D7	Ⅶa	礫器	-	117.10	76.30	46.50	464.50	ホルンフェルス	-	
	S219	52139	E5	Ⅶa	礫器	-	82.30	90.00	26.00	234.00	頁岩	頁岩A	
	S220	49527	F3	Ⅶa	礫器	-	146.50	145.00	38.50	983.00	凝灰岩	-	
	S221	53817	C9	Ⅶa	礫器	-	73.30	57.30	20.00	107.20	凝灰岩	-	挟入石器の可能性
S222	50178	D4	Ⅶa	礫器	-	96.50	142.00	49.00	606.50	ホルンフェルス	-		
153	S223	52971	E7	Ⅶa	礫器	-	117.30	72.40	38.20	400.10	花崗岩	-	高隈山系
	S224	49565	E7	Ⅶa	礫器	-	92.70	74.00	34.20	295.00	砂岩	-	
154	S225	54598	F10	Ⅶb	石錘	-	47.20	36.30	10.10	25.40	砂岩	-	
	S226	51672	F4	Ⅶa	石錘	-	46.50	59.00	21.00	76.70	頁岩	頁岩B	
	S227	51674	F4	Ⅶa	石錘	-	37.80	50.60	18.20	43.90	安山岩	安山岩B	
	S228	53772	C8	Ⅶa	石錘	-	56.80	82.00	28.80	189.20	安山岩	安山岩B	
	S229	53816	C9	Ⅶa	石錘	-	94.30	78.60	35.50	222.40	砂岩	-	
	S230	54782	F10	Ⅶa	石錘	-	84.40	62.50	13.00	112.50	砂岩	-	
	S231	53526	F7	Ⅶb	石錘	-	93.00	76.00	25.00	188.50	砂岩	-	
	S232	24204	F11	Ⅶb	石錘	-	58.00	64.80	13.10	55.53	砂岩	-	
	S233	53826	C9	Ⅶa	石錘	-	63.00	87.40	25.50	235.00	砂岩	-	
	S234	25271	D12	Ⅶb	磨製石器	-	44.80	18.90	9.20	12.27	ホルンフェルス	-	
S235	104939	E37	Ⅶa	砥石	-	82.50	75.00	14.00	103.50	砂岩	-		
155	S236	52428	C3	Ⅶa	敲石	-	69.00	65.00	41.00	240.00	チャート	-	
	S237	56395	F27	Ⅶa	敲石	-	75.00	43.50	37.00	157.10	石英	-	
	S238	54003	C7	Ⅶa	敲石	-	87.00	50.00	45.00	286.50	砂岩	-	
	S239	23953	F12	Ⅶa	敲石	-	93.90	67.20	55.20	477.31	ホルンフェルス	-	
	S240	49682	E5	Ⅶa	磨敲石	-	90.00	92.00	38.00	444.50	凝灰岩	-	
	S241	52522	E5	Ⅶa	磨敲石	-	106.00	75.00	42.00	527.50	砂岩	-	
	S242	49096	E6	Ⅶa	磨敲石	-	110.00	104.00	53.00	941.00	砂岩	-	
	S243	23941	F11	Ⅶa	磨敲石	-	69.00	91.80	56.80	434.89	花崗岩	-	国見山系
	S244	52130	E6	Ⅶa	磨敲石	-	92.00	89.00	51.00	616.50	ホルンフェルス	-	
	S245	25378	C11	Ⅶa	磨敲石	-	100.00	95.00	53.00	826.50	花崗岩	-	国見山系
156	S246	49655	F6	Ⅶa	台石	-	96.00	73.00	22.00	269.80	砂岩	-	
	S247	52854	F4	Ⅶa	台石	-	137.00	117.00	37.00	469.50	砂岩	-	
	S248	51934	D6	Ⅶa	台石	-	164.00	124.00	60.00	1596.00	凝灰岩	-	
	S249	49756	F5	Ⅶa	軽石製品	-	52.50	40.00	40.50	19.06	軽石	-	舟形の可能性
	S250	51961	D5	Ⅶa	球状耳飾	-	56.00	16.00	5.00	5.80	頁岩	頁岩B	

第32表 石器組成表 (Ⅶ層)

	黒曜石A類	黒曜石B類	黒曜石C類	黒曜石D類	黒曜石E類	チャート	玉 髓	頁岩A類	頁岩B類	頁岩C類	安山岩A類	安山岩B類	安山岩C類	ホルンフェルス	蛇紋岩	砂岩	凝灰岩	花崗岩	鉄石英	石英	軽石	計
打製石鏃 (未製品含む)	1	1	5			6		3			4								1	1		22
磨製石鏃																						0
石匙																						0
石錘			2																			2
楔形石器			1			1	1	1														4
二次加工・使用痕剥片 (精製)	3					3	2		1													9
二次加工・使用痕剥片 (粗製)													2	5								7
スクレイパー (精製)								2	1													3
スクレイパー (粗製)											1											4
磨製石斧 (小片含む)									3			1										29
打製石斧									1					4								5
礫器									1					20		31	3	1				56
石錘									1			3				7						11
砥石											1		1			2						4
石核 (残核含む)		1	3		1	1																6
磨石・敲石・磨敲石・台石・石皿						1					100		12			32	6	15		4		170
剥片	46	8	91	4		64	12	15	54				49	16		14	1			8		382
球状耳飾									1													1
異形石器			1																			1
軽石加工品																					2	2
原礫																				6		6
計	50	10	103	4	1	76	15	21	63	0	5	105	51	81	1	90	10	16	1	19	2	724



第157図 VI層遺構配置図及び土器出土状況図

4 VI層の遺構

VI層はアカホヤ火山灰層直下の層で、集石19基と石器集積2基が出土した。これらの遺構はX～Ⅲ類土器に関係する遺構と考えられる。

(1) 集石 (第159～182図)

VI層検出の集石は19基検出された。VI層集石もVII層検出の集石と同様に下記のようにタイプ別に分類した。掲載番号はVII層からの通し番号を記している。

総礫数：個々の集石を構成している石器を含めた礫の総数。

長 軸：集石を構成する礫の端から端までの最大幅のこと。または、掘り込み部の端から端までの長さ。

短 軸：長軸に対して直角に交わり、集石を構成する礫や掘り込み部の端から端までの最大幅のこと。

また、集石を掘り込みの有無、散密の状況で下記のように分類した。

タイプⅠ：構成礫の明確な集中部及び掘り込み部のないもの。(散石状態)

タイプⅡ：構成礫の明確な集中部があり、掘り込み部のないもの。

タイプⅢ：構成礫の明確な集中部があり、掘り込み部を伴うもの。

タイプⅣ：構成礫の明確な集中部は無いが、掘り込み部が若干確認できるもの。

表1 タイプ別基数

タイプ	基数
I	8
II	6
III	5
IV	0

集石33号 (第159図)

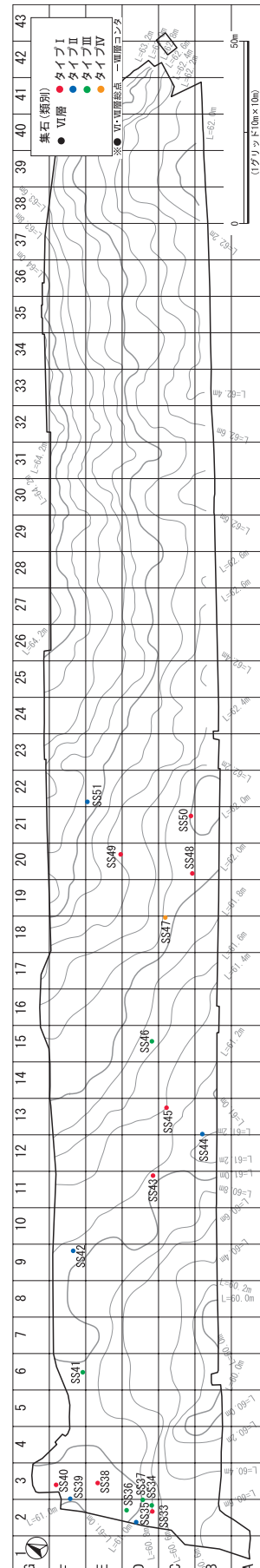
分類：タイプⅠ

検出状況

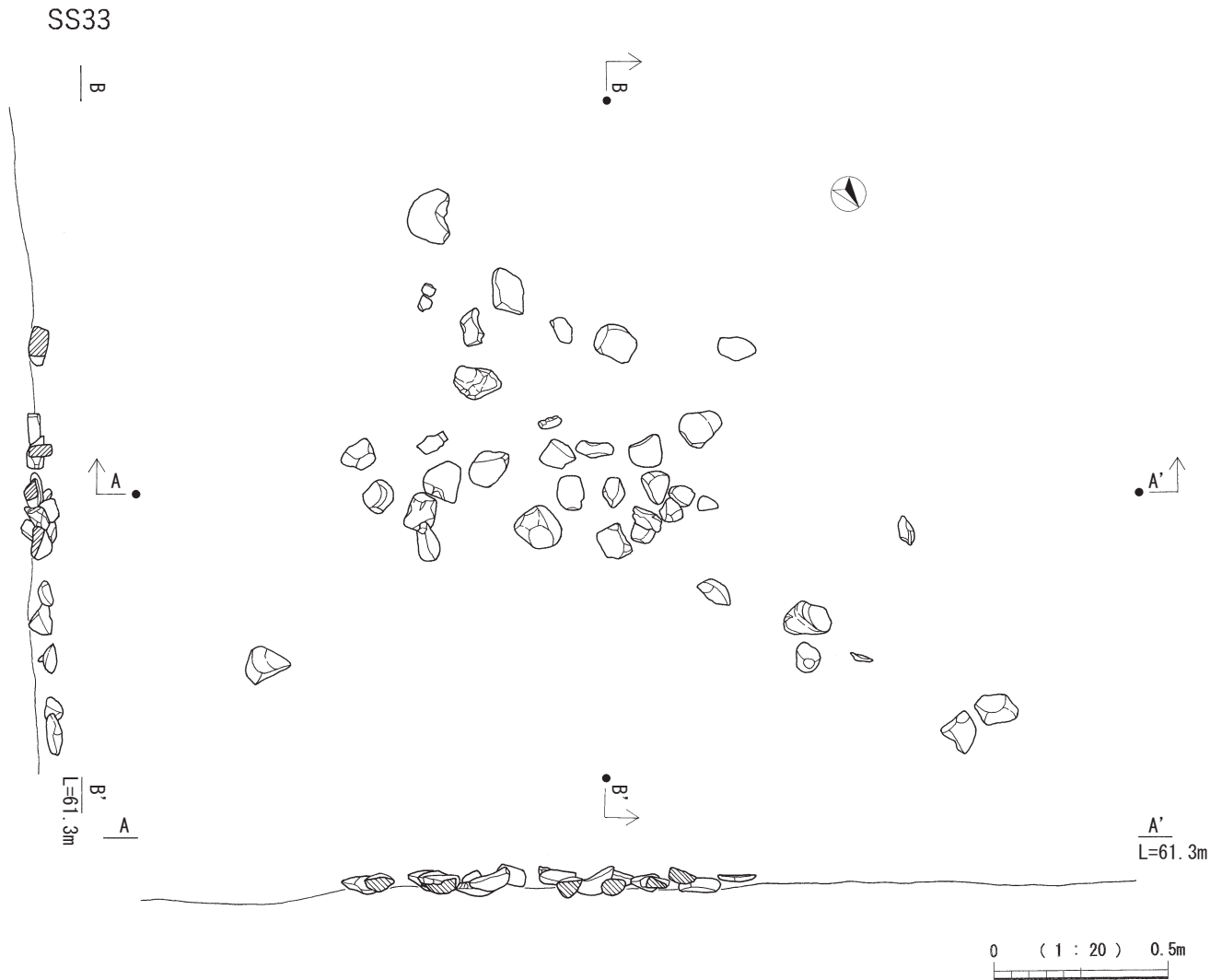
SS33は、D-2区のVI層で検出された。掘り込みはなく、散在している状況である。炭化物や被熱痕は確認できなかった。

規模

構成礫数は39個で、1個平均の重さが367gである。10cmを超える大きな礫が多い。礫は、長軸2.23m、短軸1.62mの範囲に広がる。



第158図 VI層集石分布図



第159図 集石33号

出土遺物

遺物は出土しなかった。

集石34号 (第160図)

分類: タイプⅢ

検出状況

SS34は、D-2区のⅥ層で検出された。円礫が集中し、浅い掘り込みがある。被熱による破碎礫はなかった。ホルンフェルスが多い。炭化物は確認できず。

規模

構成礫数は83個で、1個平均の重さが144gであった。拳大の礫が多い。礫は、長軸1.20m、短軸0.73mの範囲に広がる。掘り込みの深さは13cmである。

出土遺物

石器3点出土した。S251・S253は小型の磨敲石である。S251は砂岩製の歪な楕円形であり、被熱による赤化が

確認できる。S252は多孔質の安山岩製で、僅かに敲打痕も残るが主に磨石として使用されたと考えられる。S253は円形であり、特に下面はよく磨られている。

集石35号 (第161図)

分類: タイプⅡ

検出状況

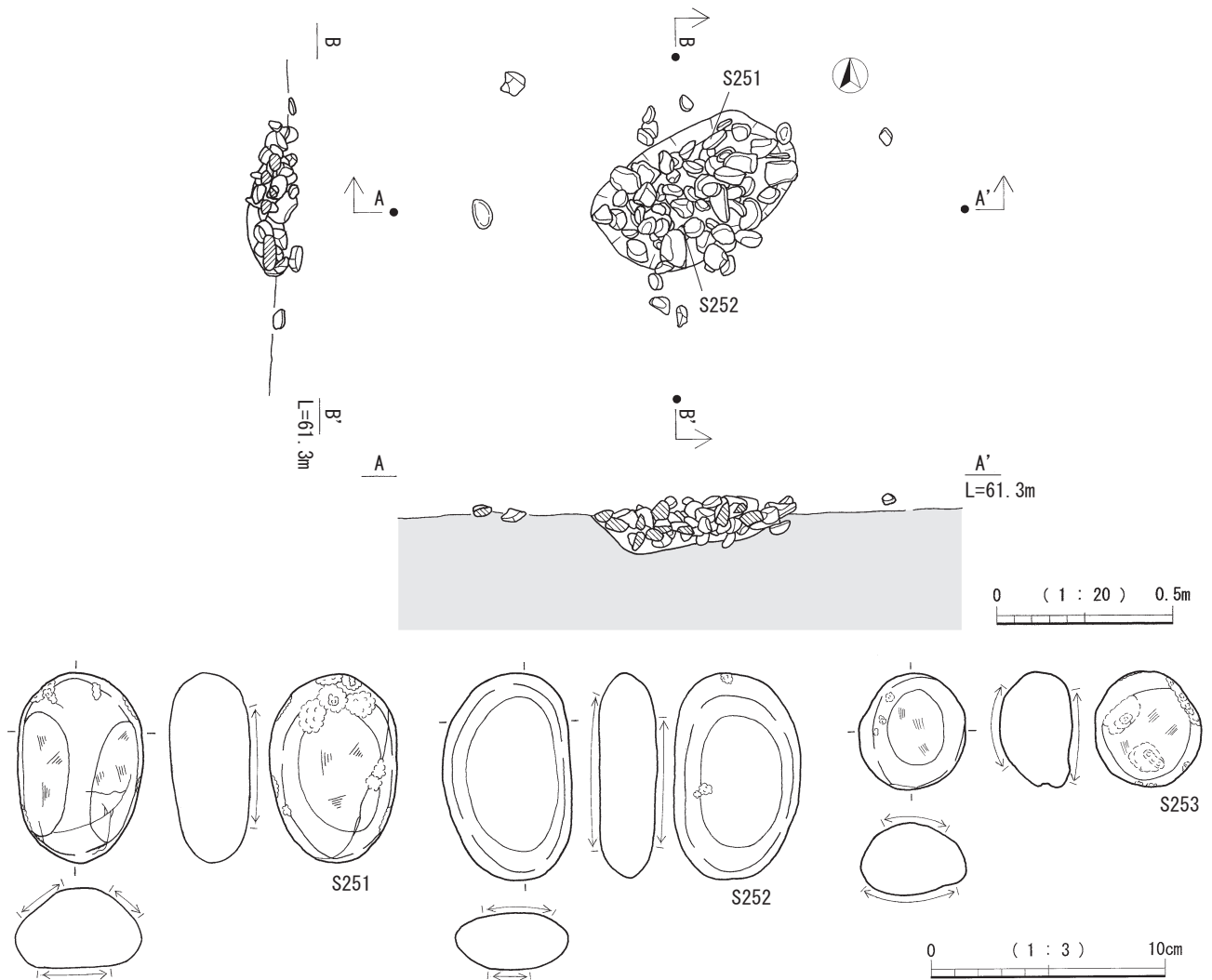
SS35は、D-2区のⅥ層で検出された。まとまりがあるが、掘り込みはなく、焼土や炭化物は確認できなかった。

規模

構成礫数は14個で、1個平均の重さが175gであった。10cm大の角礫が多い。礫は、長軸0.43m、短軸0.38mの範囲に広がる。

出土遺物

石器1点出土した。S254は構成礫の中央部で検出されている砂岩製の磨敲石である。正面の割口には敲打痕が



第160図 集石34号・出土遺物

確認できる。表面・裏面ともに明瞭な磨面を形成しており平たい形状であることから大型の石皿片を構成礫として転用している可能性も考えられる。赤化の範囲が断面にも及ぶことから破碎後に熱を受けていることが推測できる。

集石36号 (第162・163図)

分類：タイプⅢ

検出状況

SS36は、D-2区のVI層で検出された。掘り込みのある本体部分の西側に、礫を取り除いたようなまとまりがある。周辺にも円礫が散らばる。集石の下には黒褐色土の埋土があり、炭化物の小片が混ざる。長期に渡り使用された可能性もある。

規模

構成礫数は71個で、1個平均の重さが246gであった。礫は、長軸1.70m、短軸1.56mの範囲に広がる。掘り込

みの深さは13cmである。

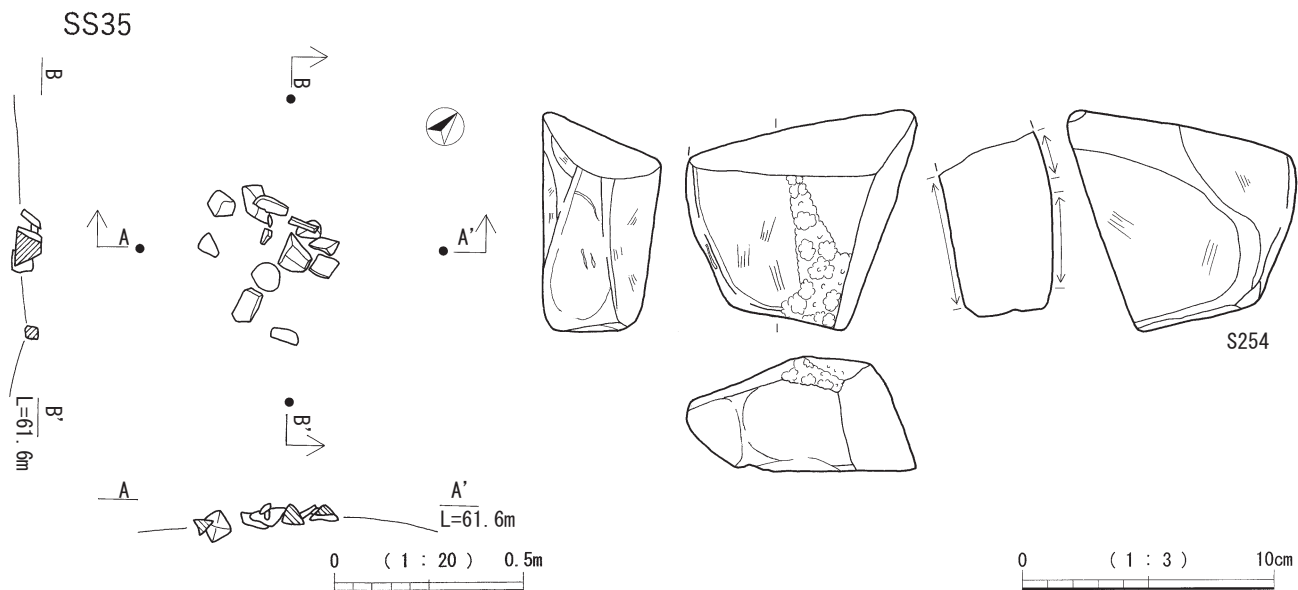
出土遺物

土器1点と石器2点が出土した。367は、平坦な口唇部に密なキザミ目を施し、口縁直下には2条の貝殻刺突文が施される。下位に楔形貼付突帯が密に貼り付けられ、貼付突帯の両側から貝殻腹縁部の押圧によりシャープに仕上げている。

S255・S256は掘り込みの外の西側で出土している磨敲石である。S255は多孔質の安山岩製で使用の頻度は少なかったと考えられる。上面は欠損しており割れ口も敲打に使用している。S256は凝灰岩製で、正面・裏面・側面には敲打痕が多く残る。風化が著しいため磨面の有無は判然としない。台石として使用していた可能性も考えられる。

集石37号 (第164図)

分類：タイプⅢ



第161図 集石35号・出土遺物

検出状況

SS37は、D-2・3区のVI層で検出された。礫が集中し、浅い掘り込みがある。礫の大半は被熱している。焼土や炭化物は確認できなかった。

規模

構成礫数は70個で、1個平均の重さが333gであった。安山岩がほとんどであるが、軽石も1点含まれる。礫は、長軸1.26m、短軸1.07mの範囲に広がる。掘り込みの深さは11cmである。

出土遺物

遺物は出土しなかった。

集石38号 (第165図)

分類：タイプ I

検出状況

SS38は、E-3区のVI層で検出された。散石状態で掘り込みはない。礫の大半は被熱を受けており、礫の色調は全体的に赤く、部分によっては、煤がついている。花崗岩の礫は、側面に煤が付き、被熱のせい非常に多い。掘り込みはなし。

規模

構成礫数は7個で、1個平均の重さが459gであった。礫は、長軸0.56m、短軸0.49mの範囲に広がる。

出土遺物

石器2点が出土した。S257は花崗岩製（国見山系）の磨敲石である。正面・側面は被熱による風化が著しく、裏面には明瞭な磨面が確認できる。正面・裏面に敲打痕がみられることから磨敲石と判断した。S258は軟質の軽石製品で、左側面を面取り、全体を研磨して珠形に整

形加工した遺物である。中央部には穿孔が施される。被熱の痕跡は確認できない。

集石39号 (第166・167図)

分類：タイプ II

検出状況

SS39は、F-2・3区のVI層で検出された。やや集中したエリアと散石状態の部分から成り、余り離れていないことから、ここでは一つの遺構として扱った。どちらも掘り込みは検出されなかった。散石状態の部分は、地形がゆるやかに下がる西側へばらけたものと思われる。被熱した礫が多く、炭化物は検出されなかった。

規模

構成礫数は69個で、1個平均の重さが150gであった。礫は、長軸2.57m、短軸2.05mの範囲に広がる。

出土遺物

石器3点が出土した。S259・S260は安山岩製の被熱破碎した磨敲石片である。S260は多孔質な石材であり、礫の集中部から離れた位置で出土している。S261は凝灰岩製の磨敲石である。礫の集中部から少し離れた位置で出土した。使用頻度は少ないものと推測できる。

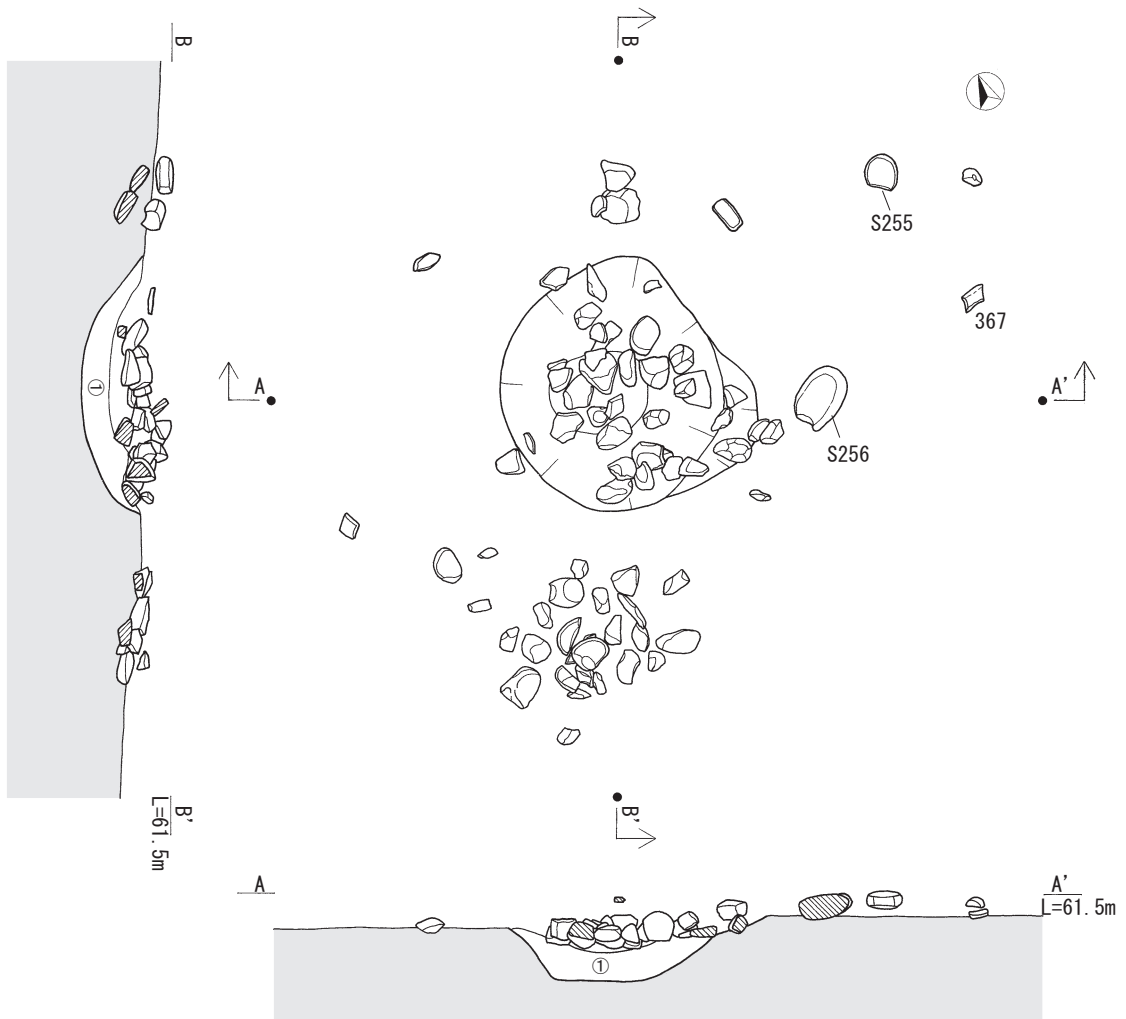
集石40号 (第168図)

分類：タイプ I

検出状況

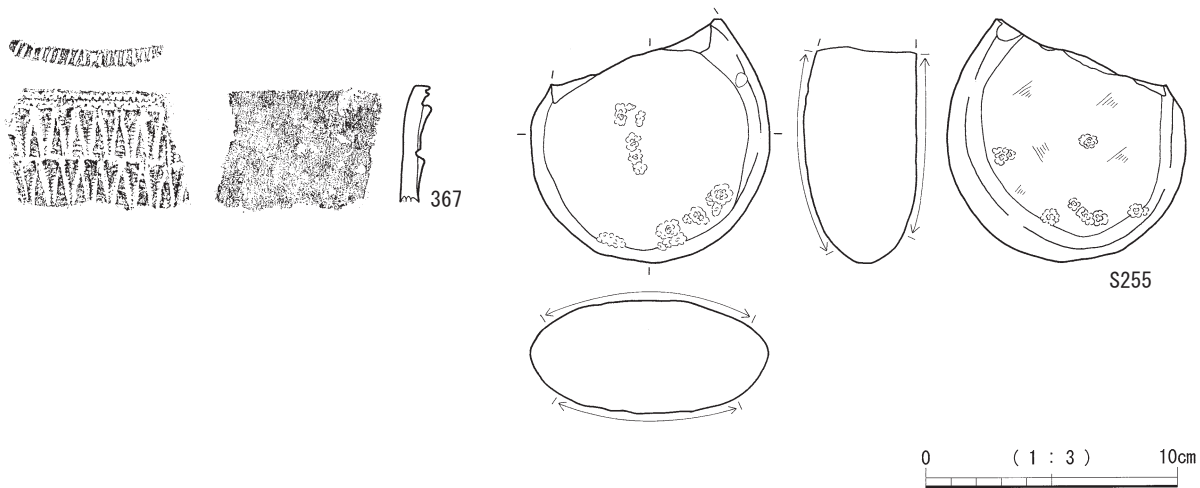
SS40は、F-3区のVI層で検出された。散石状態で掘り込みはない。焼土や炭化物は確認できなかった。安山岩がほとんどである。

SS36

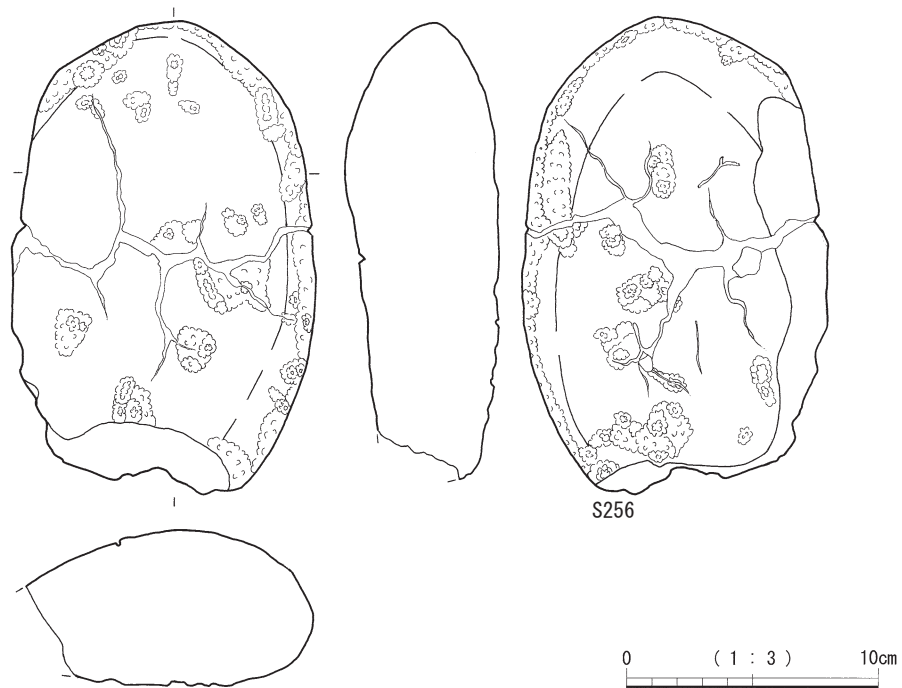


埋土
 ①黒褐色土
 炭化物の小片少量混ざる

0 (1 : 20) 0.5m

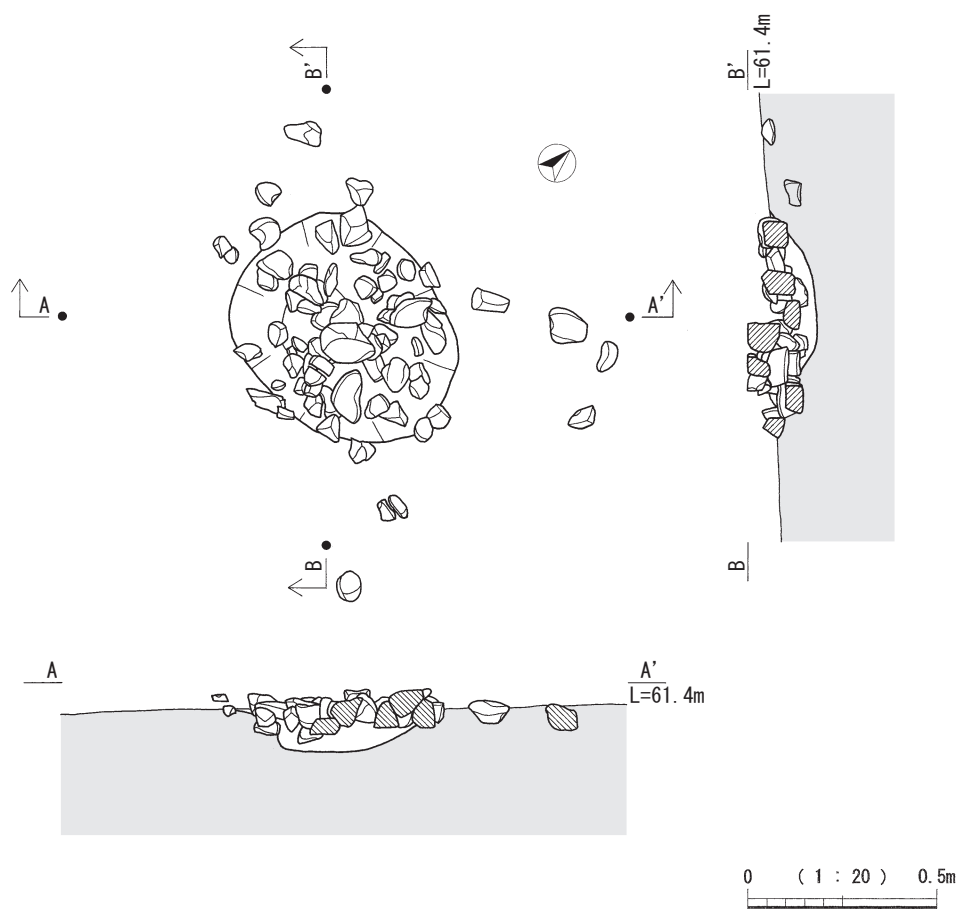


第162図 集石36号・出土遺物 (1)



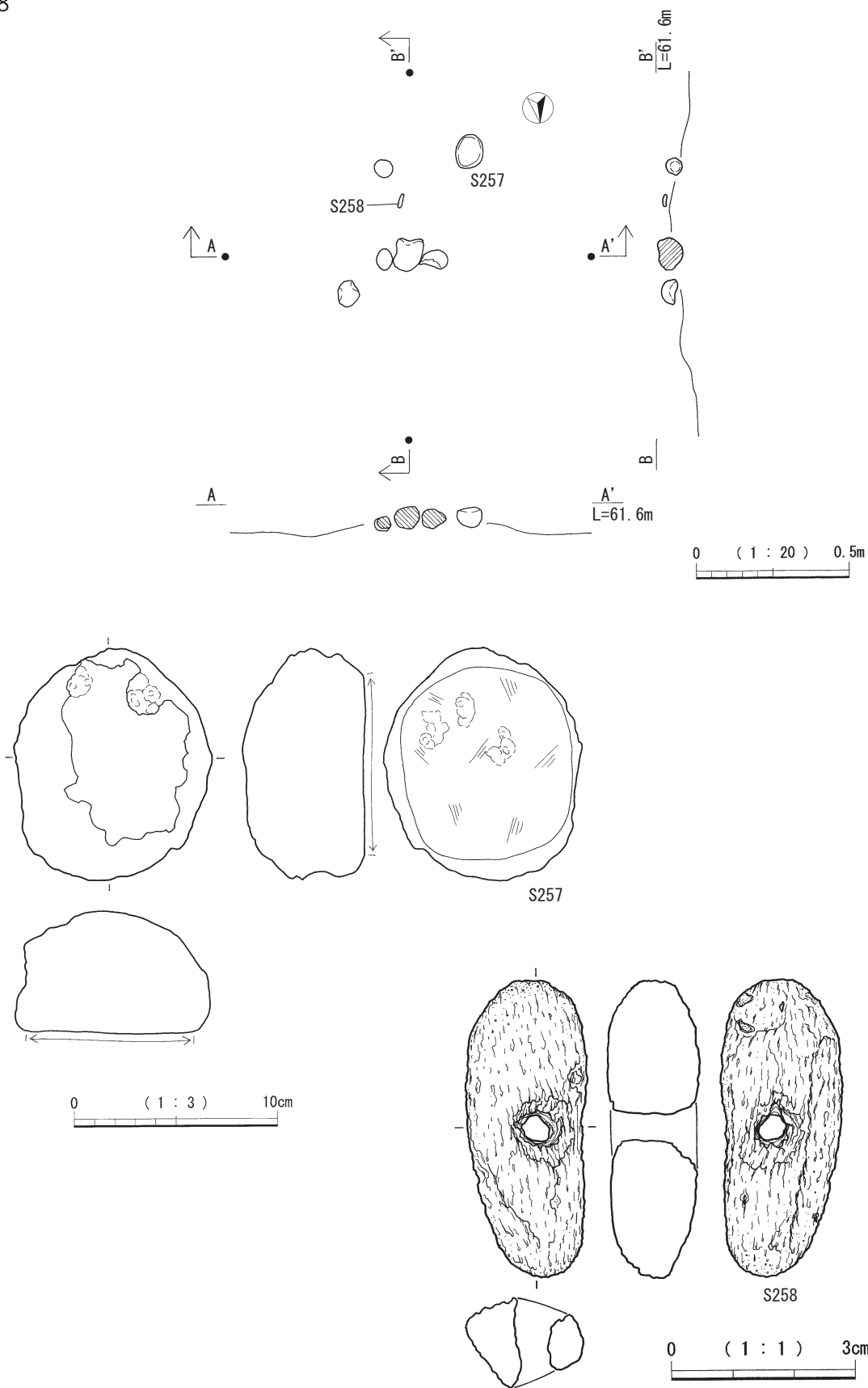
第163図 集石36号出土遺物 (2)

SS37



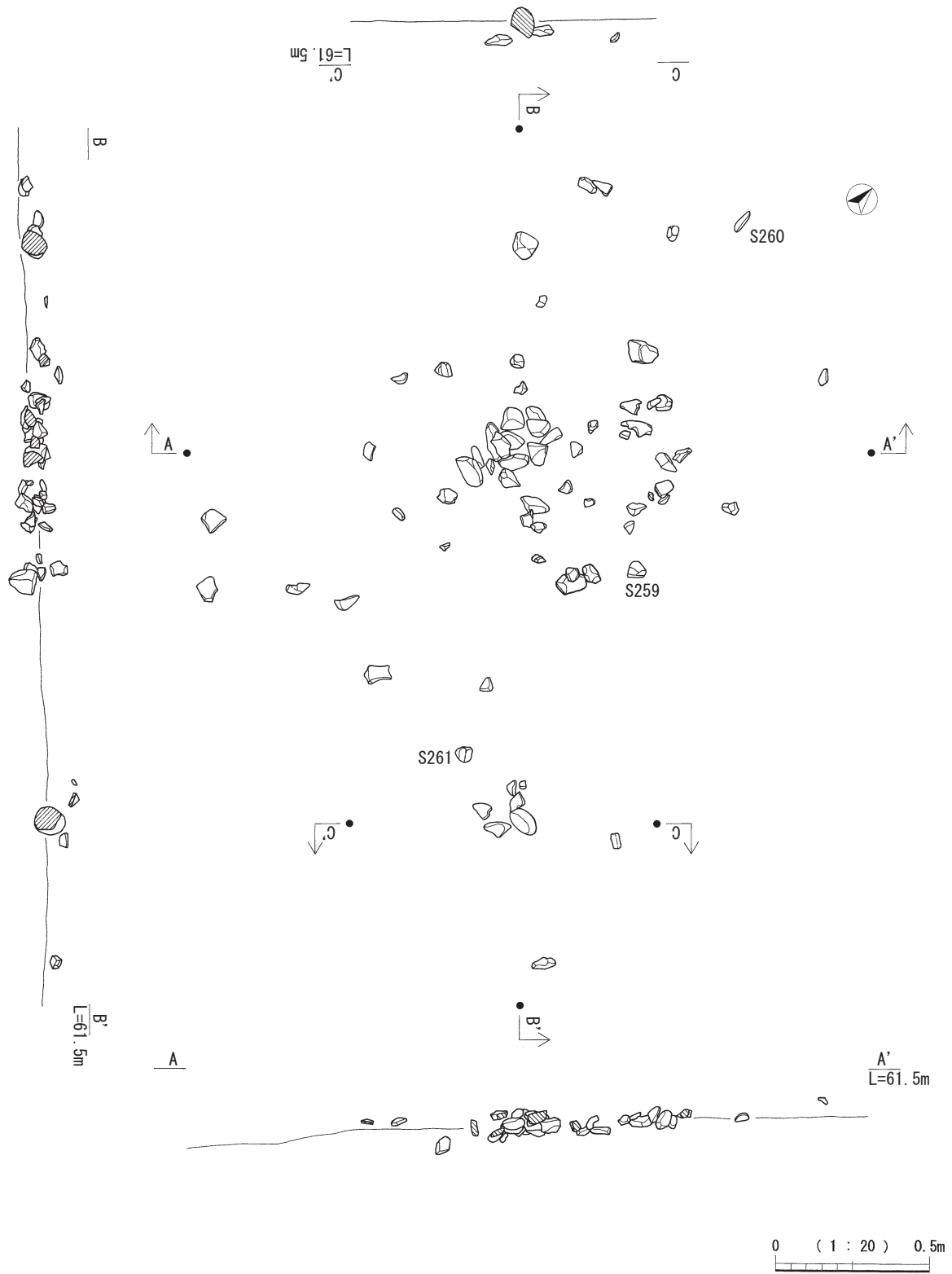
第164図 集石37号

SS38

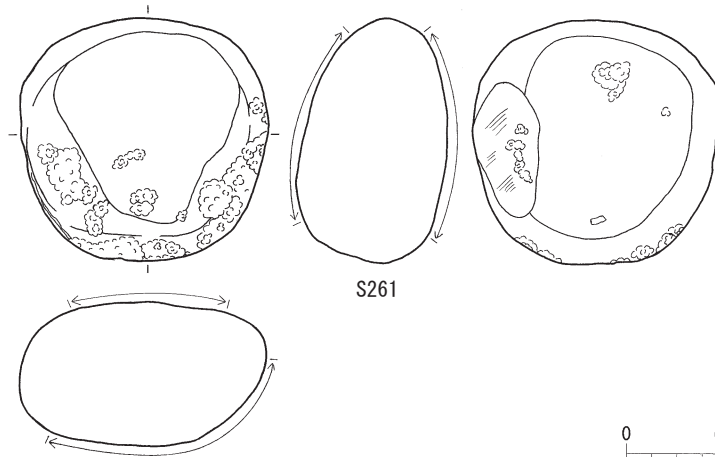


第165図 集石38号・出土遺物

SS39



第166図 集石39号



0 (1 : 3) 10cm

第167图 集石39号出土遺物

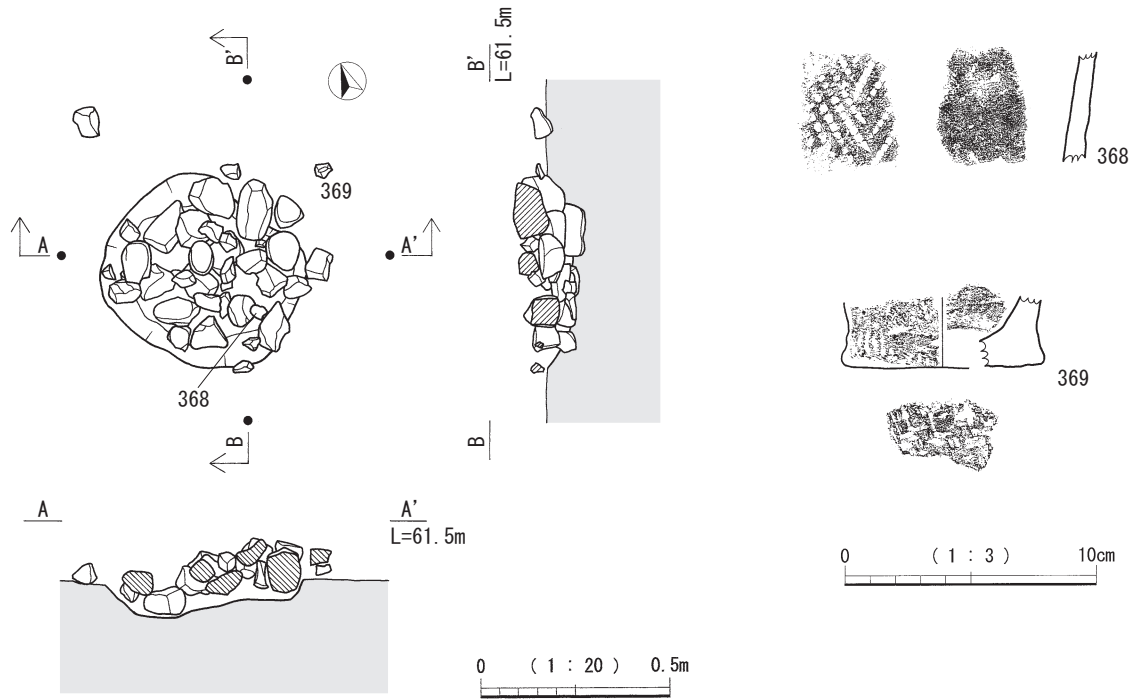
SS40



0 (1 : 20) 0.5m

第168图 集石40号

SS41



第169図 集石41号・出土遺物

規 模

構成礫数は13個で、1個平均の重さが286gであった。礫は、長軸0.88m、短軸0.71mの範囲に広がる。

出土遺物

遺物は出土しなかった。

集石41号 (第169図)

分 類：タイプⅢ

検出状況

SS41は、F-6区のIVb層で検出された。南西に下る緩斜面に、10～15cm程度の火成岩転礫、10cm程度の堆積岩転礫及びこれらの破碎礫で構成される。浅い掘り込みを伴い、礫は被熱を受けている。焼土痕等は検出されなかった。

規 模

礫は、長軸0.70m、短軸0.70mの範囲に広がる。構成礫数は37個で、1個平均の重さが593gであった。掘り込みの深さは10cmである。

出土遺物

遺構内より土器2点が出土した。368は、貝殻刺突文を「V」字状に施す。VIb類に分類される。369は底部で、胴部下位に縦位の貝殻条痕文が確認できる。接地面にも条痕がわずかに確認できる。

集石42号 (第170・171図)

分 類：タイプⅡ

検出状況

SS42は、F-9区のVI層で検出された。拳大の円礫で構成されている。礫の重なりはないが、集中している。焼土痕等は検出されなかった。掘り込みはなし。

規 模

構成礫数は16個で、1個平均の重さが648gであった。礫は、長軸0.67m、短軸0.53mの範囲に広がる。

出土遺物

石器5点が出土した。S262～S266は楕円状の磨敲石であり、S266は被熱破碎している。S263は凝灰岩製で、そのほかは安山岩製である。そのなかでもS266は多孔質な石材である。使用頻度は高いと推測できる。完形品の形状・大きさは揃っており、図化した5点はすべて弱く熱を受けている可能性がある。S265には薄く煤が付着する。

集石43号 (第172図)

分 類：タイプⅠ

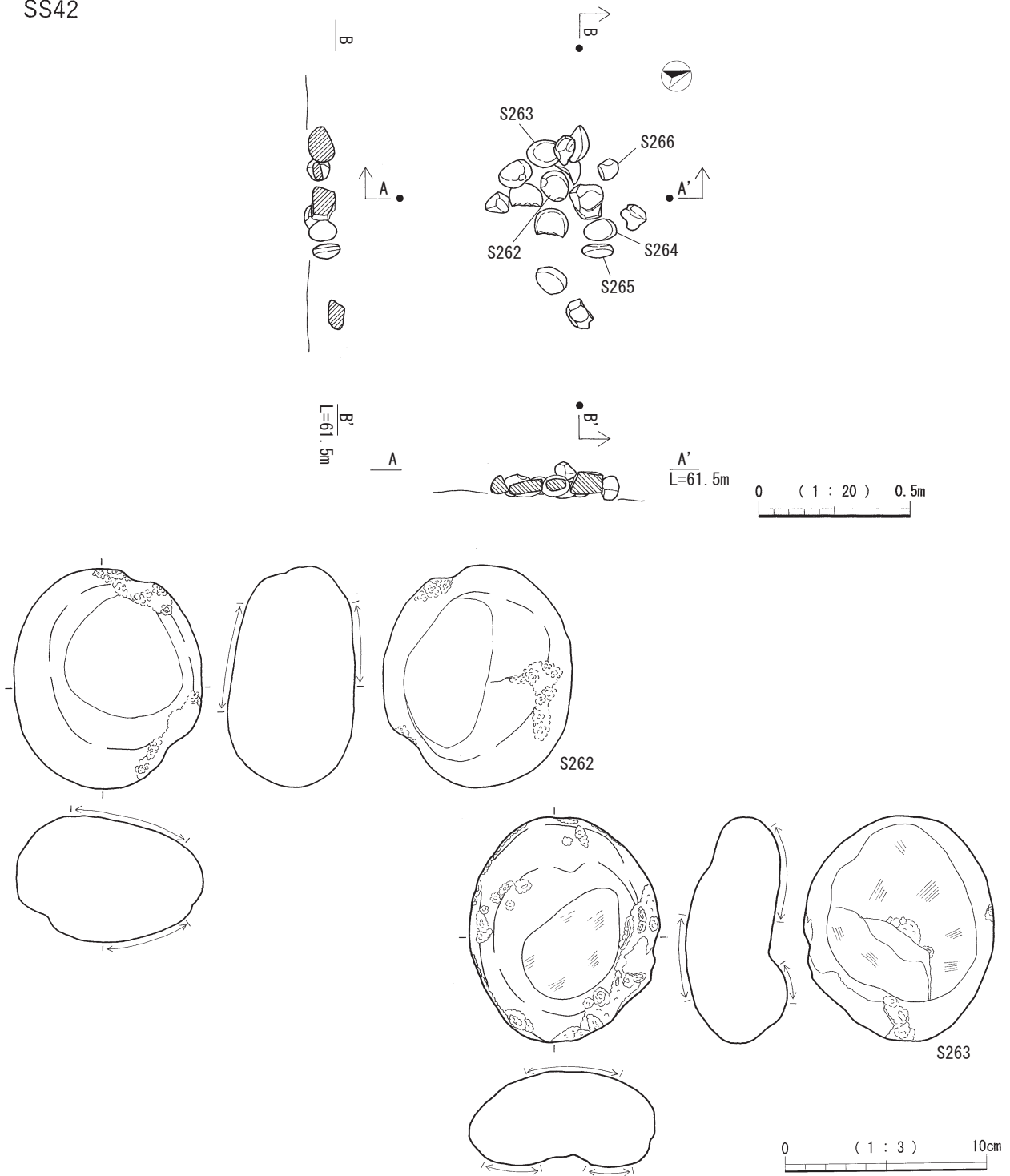
検出状況

SS43は、D-11区のVI層で検出された。拳大の礫で構成され、被熱している。焼土痕等は検出されなかった。掘り込みはなし。

規 模

構成礫数は8個で、1個平均の重さが196gであった。

SS42



第170図 集石42号・出土遺物(1)

礫は、長軸0.49m、短軸0.25mの範囲に広がる。

出土遺物

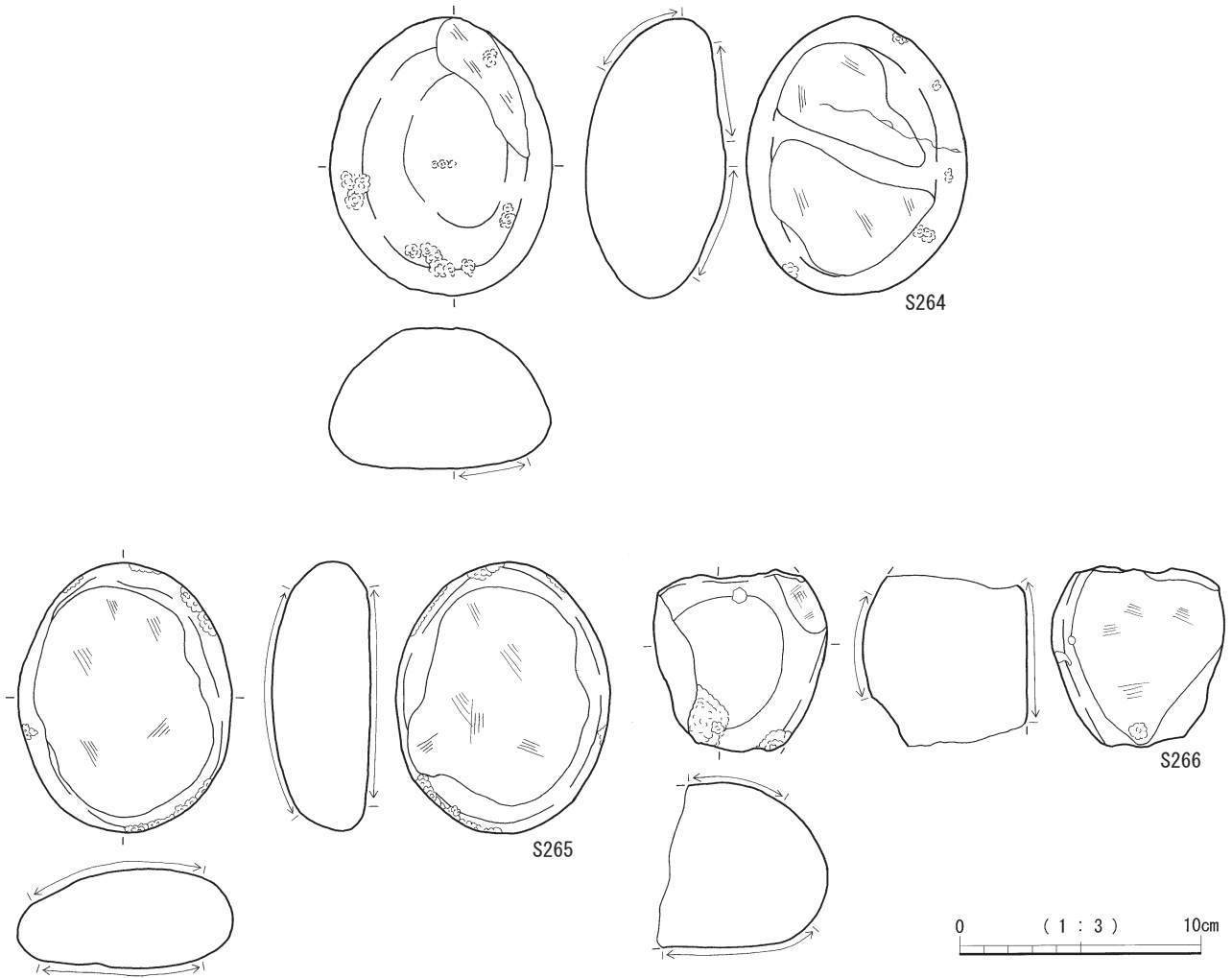
石器1点が出土した。S267は凝灰岩製で歪な楕円状の磨敲石である。やや小ぶりのタイプである。礫の集中部で出土している。よく使用されており、被熱による赤化・

ヒビ割れが確認できる。

集石44号(第172図)

分類:タイプII

検出状況



第171図 集石42号出土遺物(2)

SS44は、B-12・13区のVI層で検出された。破碎礫で構成され、やや集中しているが、掘り込みは確認できなかった。礫は被熱しているが、焼土痕等は検出されなかった。

規模

構成礫数は29個で、1個平均の重さが193gである。礫は、長軸1.20m、短軸0.56mの範囲にやや集中する。

出土遺物

石器1点が出土した。S268はホルンフェルス製の剥片で、礫の集中部から僅かに離れた位置で出土した。右側面は繰り返し敲打したことにより多くの剥離が生じ、左側面には使用痕が確認できる。被熱の痕跡はない。

集石45号(第173・174図)

分類：タイプI

検出状況

SS45は、C-13区のVI層で検出された。大きな礫を使

用し、まとまりがあったものがばらけた感じである。礫は被熱しているが、焼土痕等は検出されなかった。掘り込みはなし。

規模

構成礫数は38個で、1個平均の重さが423gであった。礫は、長軸2.75m、短軸2.40mの範囲に広がる。

出土遺物

石器1点が出土した。S269は安山岩製で、楕円状の磨敲石である。正面の中央部には凹みを有する。被熱による赤化が確認できる。

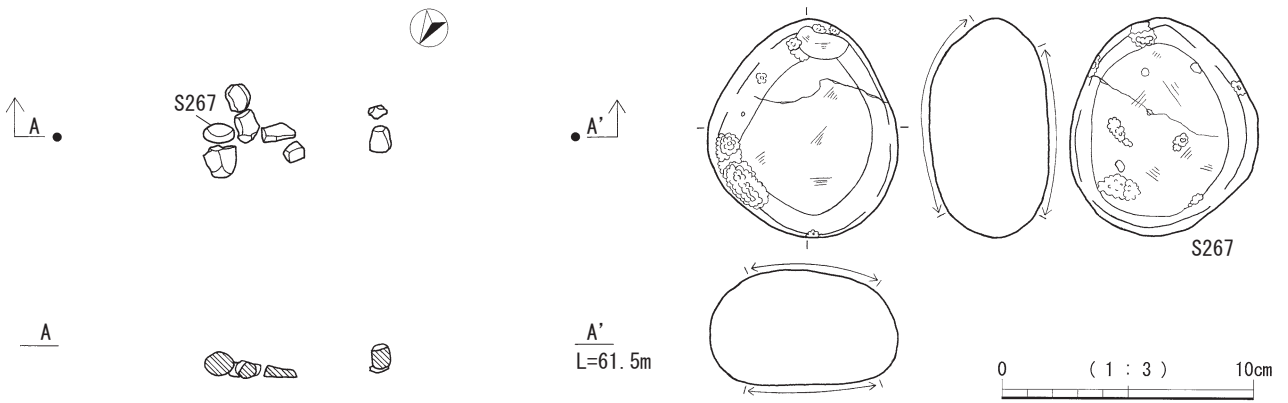
集石46号(第175～177図)

分類：タイプIII

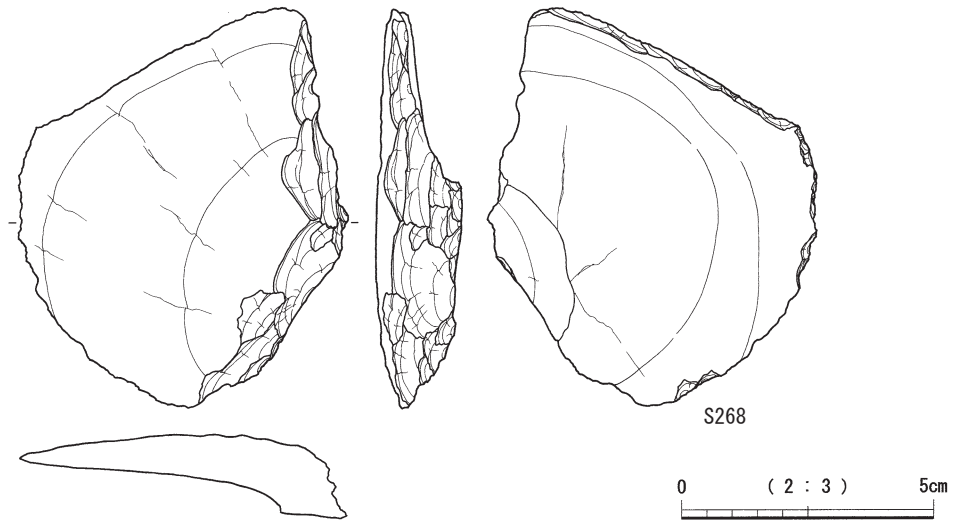
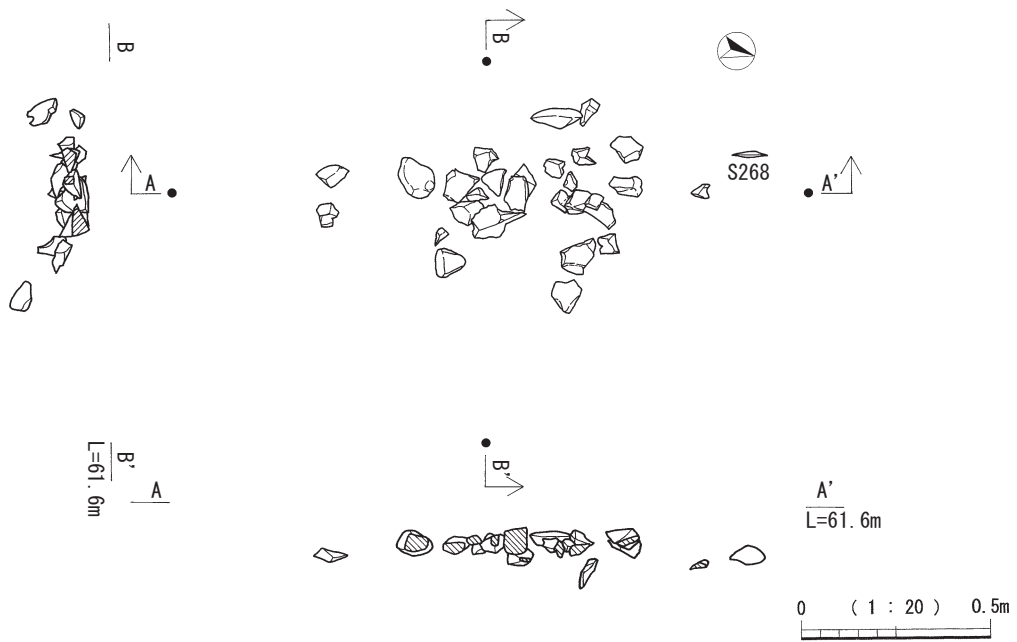
検出状況

SS46は、D-15区のVI層で検出された。90cm×70cmの長方形に円礫が多く配されたように見える。被熱痕跡のある礫もあるが、多くは被熱なし。方形の形状は他の集

SS43

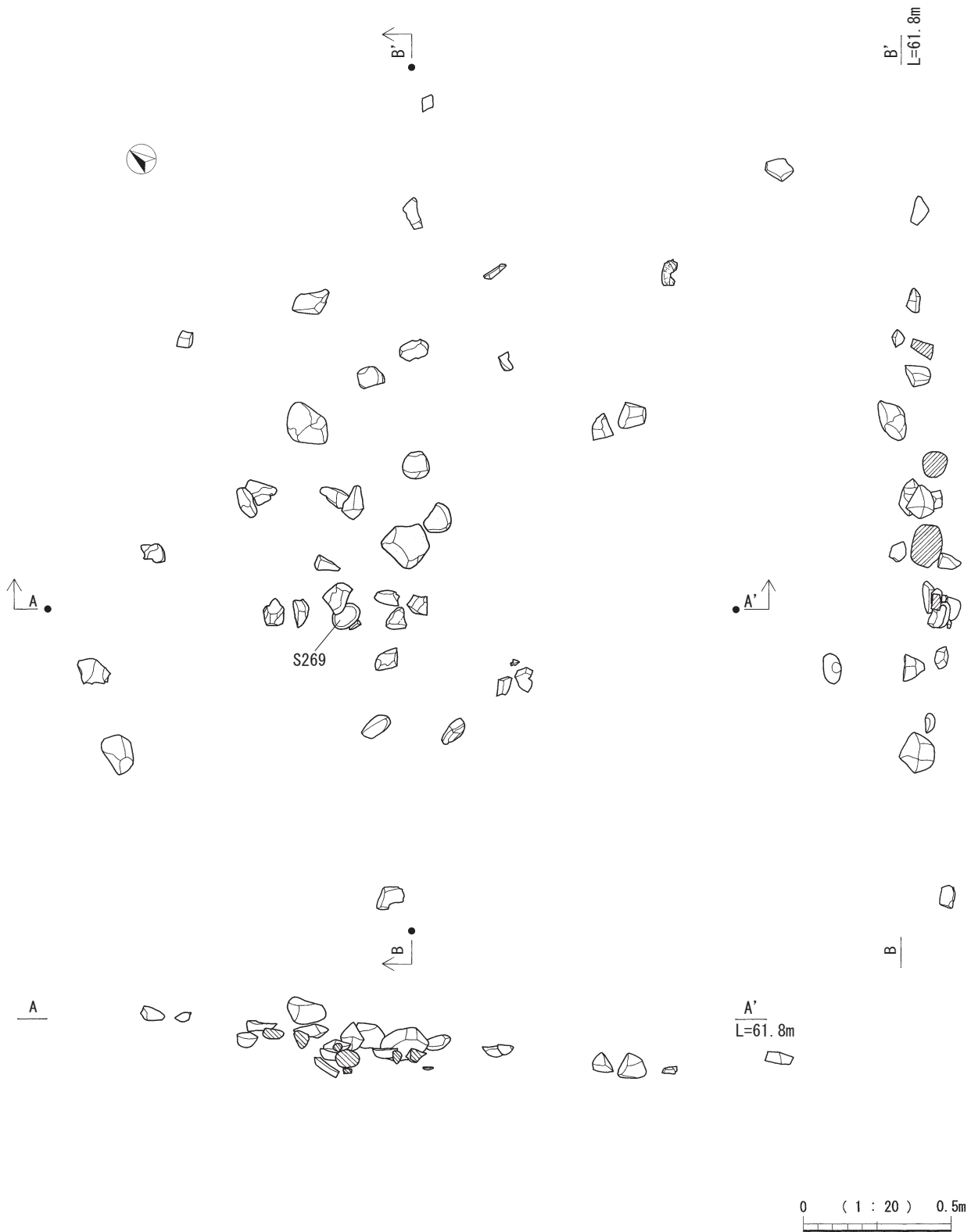


SS44

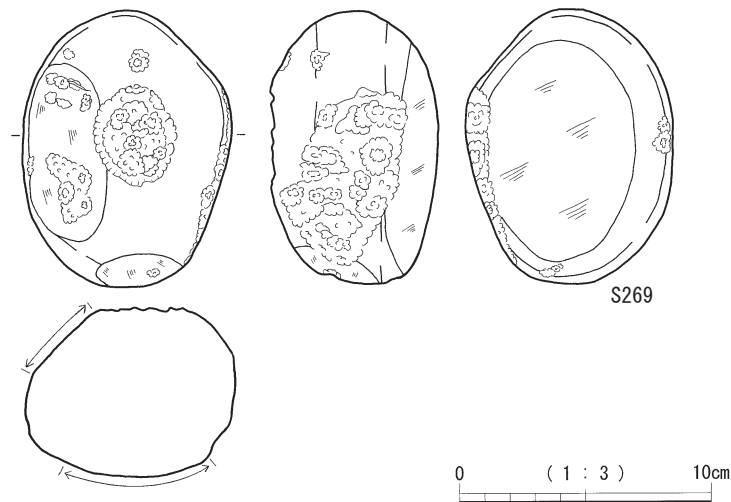


第172図 集石43号・出土遺物・集石44号・出土遺物

SS45



第173图 集石45号



第174図 集石45号出土遺物

石と比べ特徴的であり、小牧遺跡ではこの集石のみである。礫も意図的に配置したような様子が推察され、拳大の磨敲石が8個も使用されている。また、S270とS276を結ぶラインが冬至の日の入りと同じ方向を向く。浅い掘り込みがあるが、焼土痕や炭化物は検出されなかった。

規模

構成礫数は51個で、1個平均の重さが755gであった。礫は、長軸0.99m、短軸0.97mの範囲に広がる。掘り込みの深さは約6cmである。

出土遺物

石器8点が出土した。S270～S277は磨敲石で、S270・S271・S274・S277は安山岩製で、S272・S273・S275・S276は凝灰岩製である。S276は四角形状で、そのほかは楕円状である。S272・S276は特によく敲打に使用されている。S270～S272・S275・S276には被熱によると思われる赤化が確認できる。S277は被熱破砕していると推測できる。

遺構の周辺には炭化物や被熱の痕跡はみられない。集石として使用された礫・石器の転用品なども構成礫として使用した可能性もある。

集石47号 (第178図)

分類：タイプIV

検出状況

SS47は、C-18区のVI層掘り下げ中に検出された。拳大かそれより大きめの円礫を配置したように構成されて

いる。明瞭な掘り込み及び炭化物は確認できなかった。

規模

構成礫数は5個で、1個平均の重さが3309gであった。礫は、長軸0.33m、短軸0.32mの範囲に広がる。

出土遺物

遺物は出土しなかった。

集石48号 (第178図)

分類：タイプI

検出状況

SS48は、C-20区のVI層で検出された。2点を除き同程度の堆積岩が散在している。焼土痕等は検出されなかった。掘り込みはなし。

規模

礫は、長軸1.58m、短軸0.85mの範囲に広がる。構成礫数は12個で、1個平均の重さが188gであった。

出土遺物

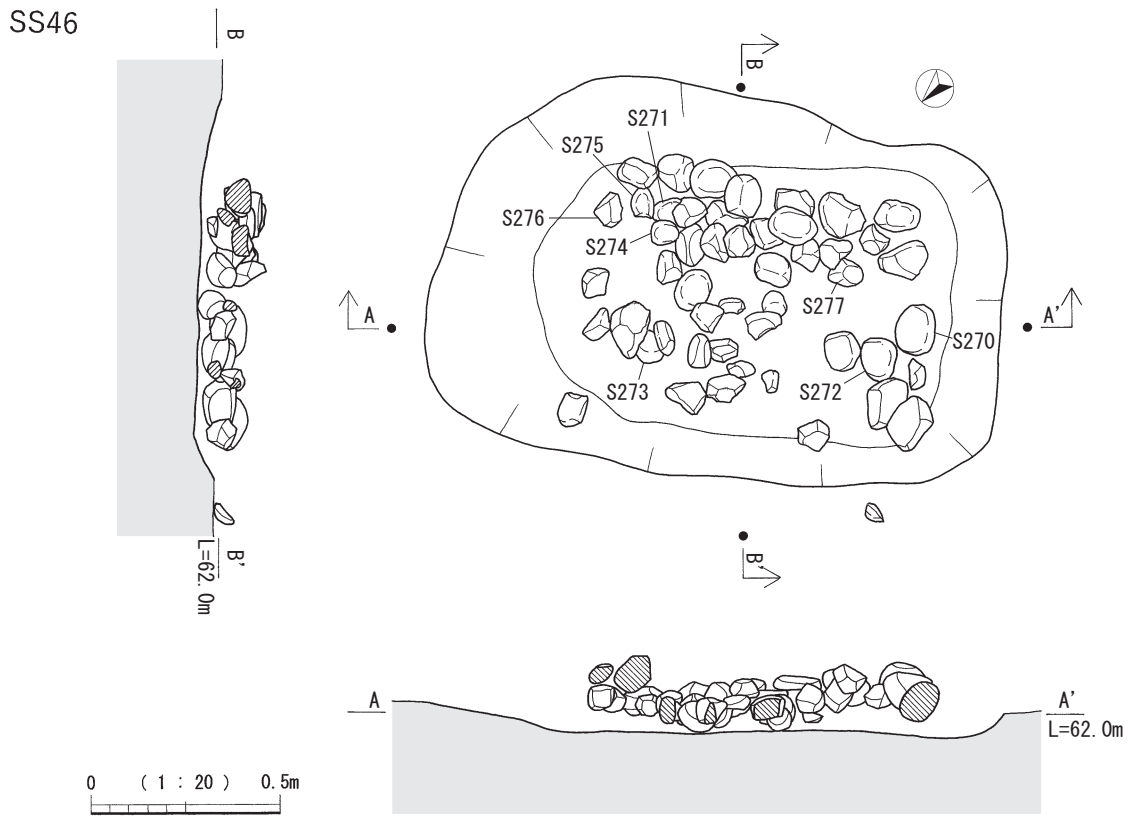
遺物は出土しなかった。

集石49号 (第179・180図)

分類：タイプI

検出状況

SS49は、E-20区のVI層掘り下げ中に検出された。礫は、全て被熱痕跡が有るが、炭化物や焼土痕は検出されなかった。軽石S281も劣化している。ややまとまりがある箇所から20cm程度の軽石も出土した。掘り込み



第175図 集石46号



写真4 集石46号北側から

はなし。

規模

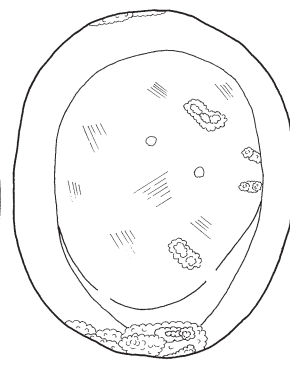
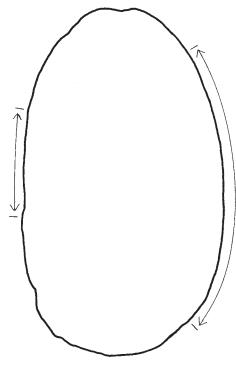
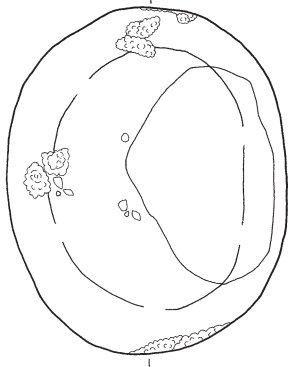
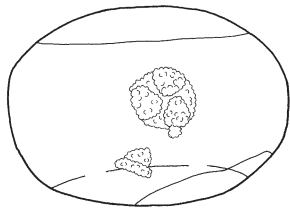
構成礫数は10個で、1個平均の重さが409gであった。礫は、長軸1.07m、短軸0.71mの範囲に広がる。

出土遺物

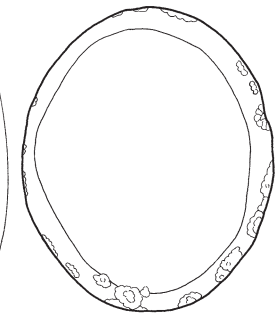
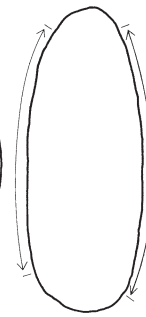
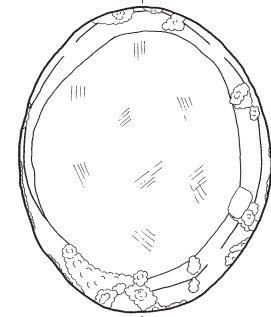
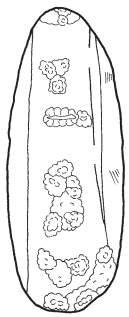
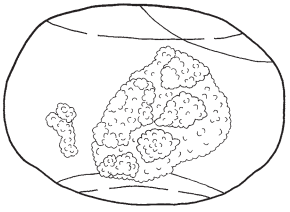
土器3点と石器4点が出土した。土器3点の内2点は胴部小片のため図化しなかった。370は、貝殻刺突文を「Z」字状に施す。器壁はやや厚めである。VIa類に分類される。

S278～S280は安山岩製の磨敲石である。S278・S279は多孔質の石材を使用している。S278は、裏面を特に強く擦っており、平たく成形している可能性も考えられる。S279の正面・側面の敲打は深い。S281は軽石製品である。構成礫の中心で出土しており、面取りを施すことにより成形している。用途は不明である。

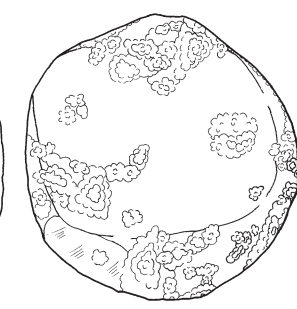
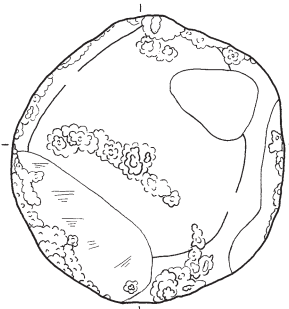
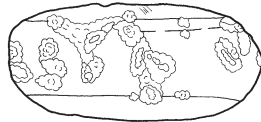
すべてに被熱の痕跡が確認できる。



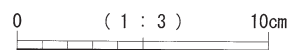
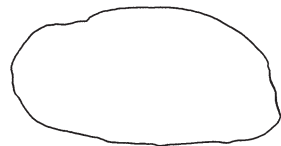
S270



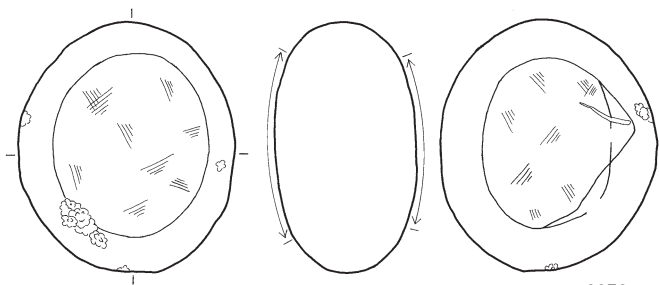
S271



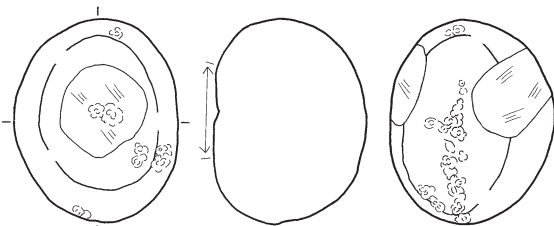
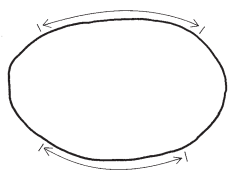
S272



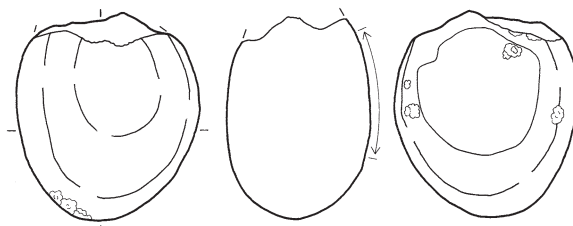
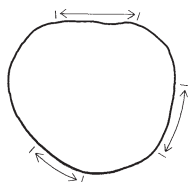
第176図 集石46号出土遺物(1)



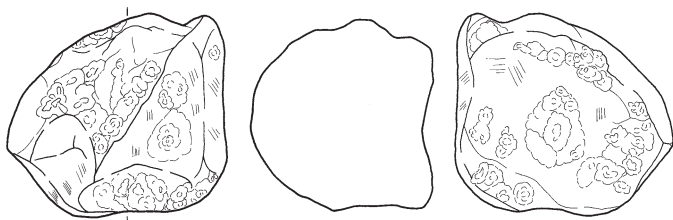
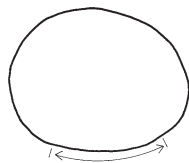
S273



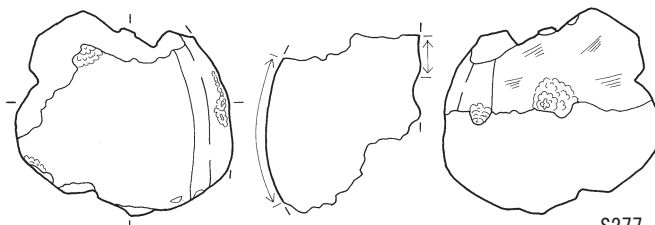
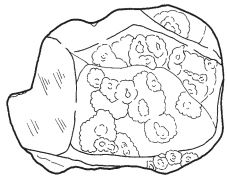
S274



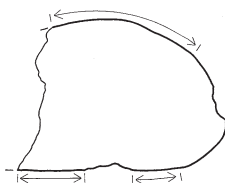
S275



S276



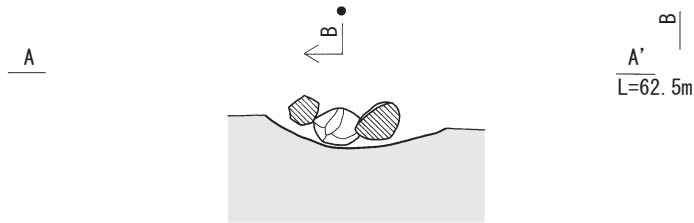
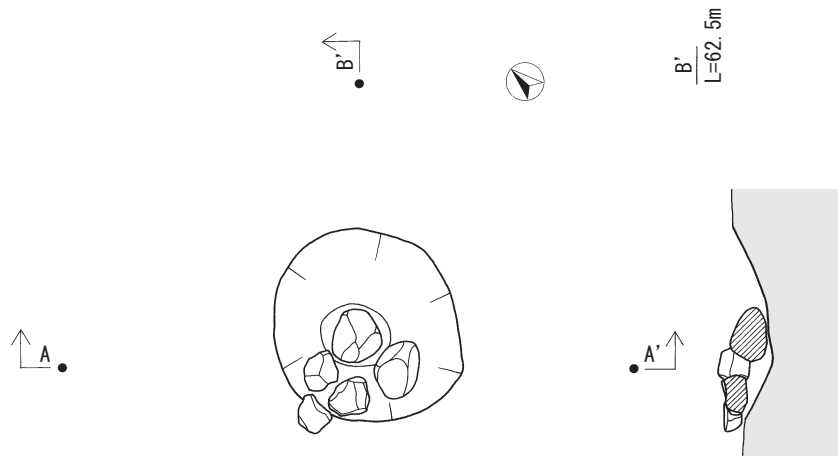
S277



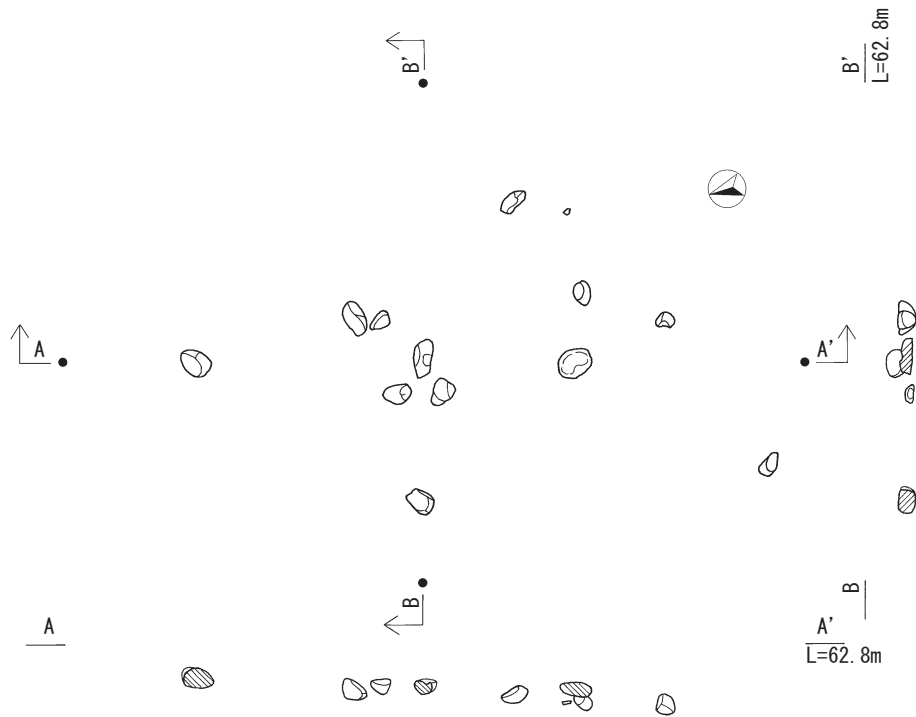
0 (1 : 3) 10cm

第177図 集石46号出土遺物 (2)

SS47



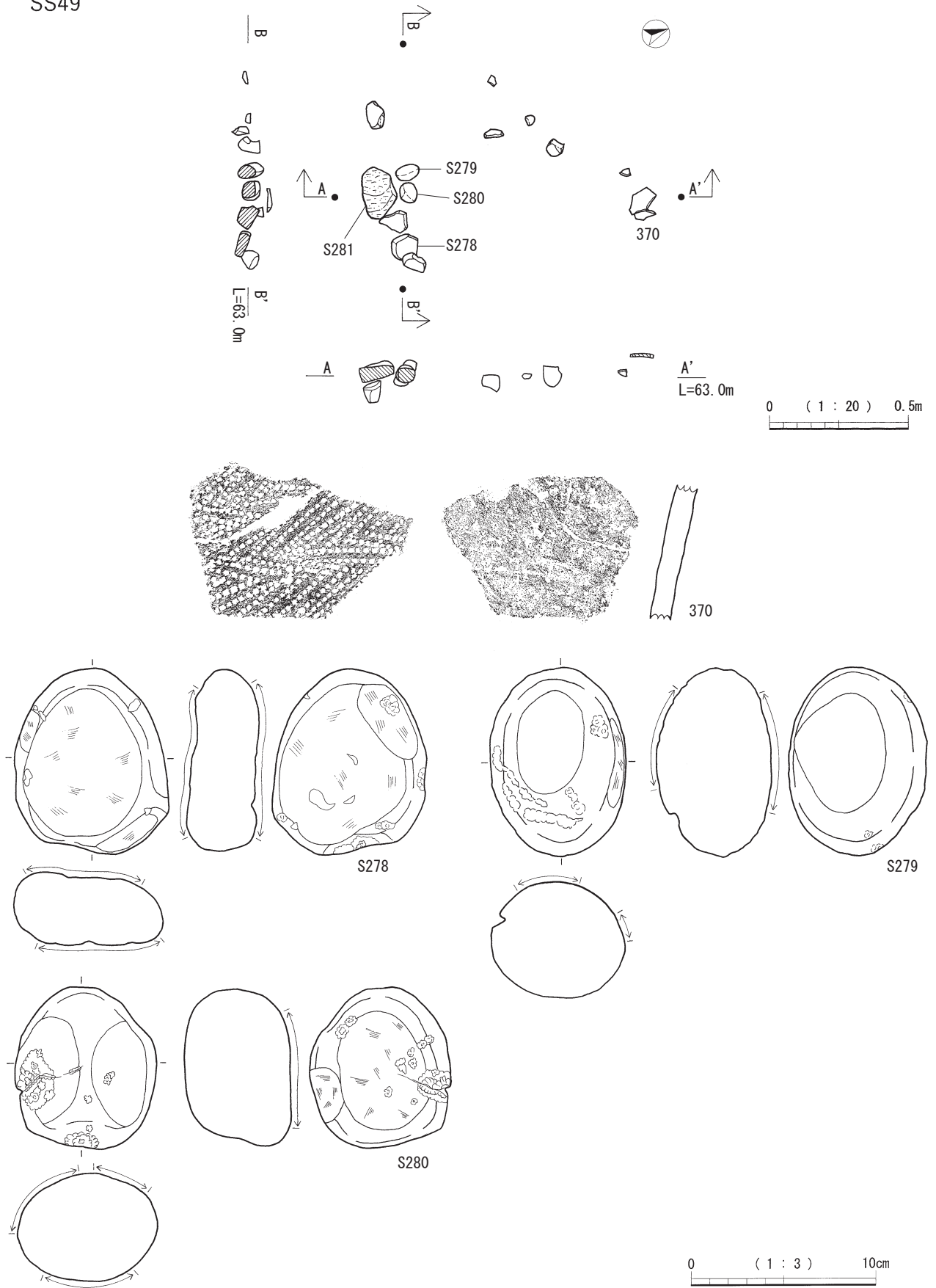
SS48



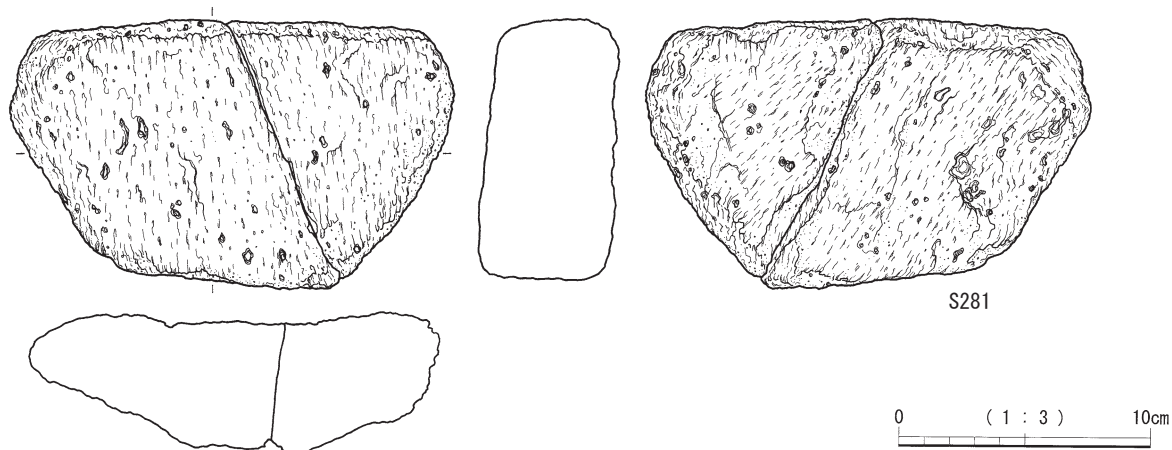
0 (1 : 20) 0.5m

第178図 集石47号・集石48号

SS49



第179図 集石49号・出土遺物(1)



第180図 集石49号出土遺物(2)

集石50号(第181図)

分類:タイプI

検出状況

SS50は、C-21区のVI層下位で検出された。拳大の磨
 敲石の転用と思われるまとまった部分と、南西方向へ流
 れたような散石部分とから成る。礫はほとんど被熱して
 いるが、一帯の土に被熱によると思われる赤変のような
 変異は認められなかった。

ややまとまりがある部分で、若干の炭化物は確認され
 たが、範囲を特定できる程ではなかった。掘り込みはな
 し。

規模

構成礫数は12個で、1個平均の重さが440gであった。
 礫は、長軸2.14m、短軸0.59mの範囲に広がる。

出土遺物

石器3点が出土した。S282・S283は安山岩製の楕円
 形の磨敲石である。被熱による赤化が顕著であり薄く煤
 が付着する。2点ともよく使用されており、S282の正
 面には敲打の繰り返しによる凹みが形成されている。

S284は石皿の破片である。断面にも赤化がみられ、破
 砕後も強く被熱しているものと推測できる。S283は集
 石の北側の礫の集中部から、そのほかの2点は南側に離
 れた位置で出土している。

集石51号(第182図)

分類:タイプII

検出状況

SS51は、E・F-22区V層(アカホヤ)直下のVI層で
 検出された。中央がわずかに凹むような構造だが、明確
 な掘り込みは確認できなかった。礫は、中央の空白部を
 囲むように環状に配置されたように見られ、ほぼ全てよ
 く被熱し、破碎赤変している。

規模

構成礫数は100個で、1個平均の重さが119gであった。
 礫は、長軸1.73m、短軸1.68mの範囲に広がる。

出土遺物

遺物は出土しなかった。

第33表 土器観察表(集石VI層出土)

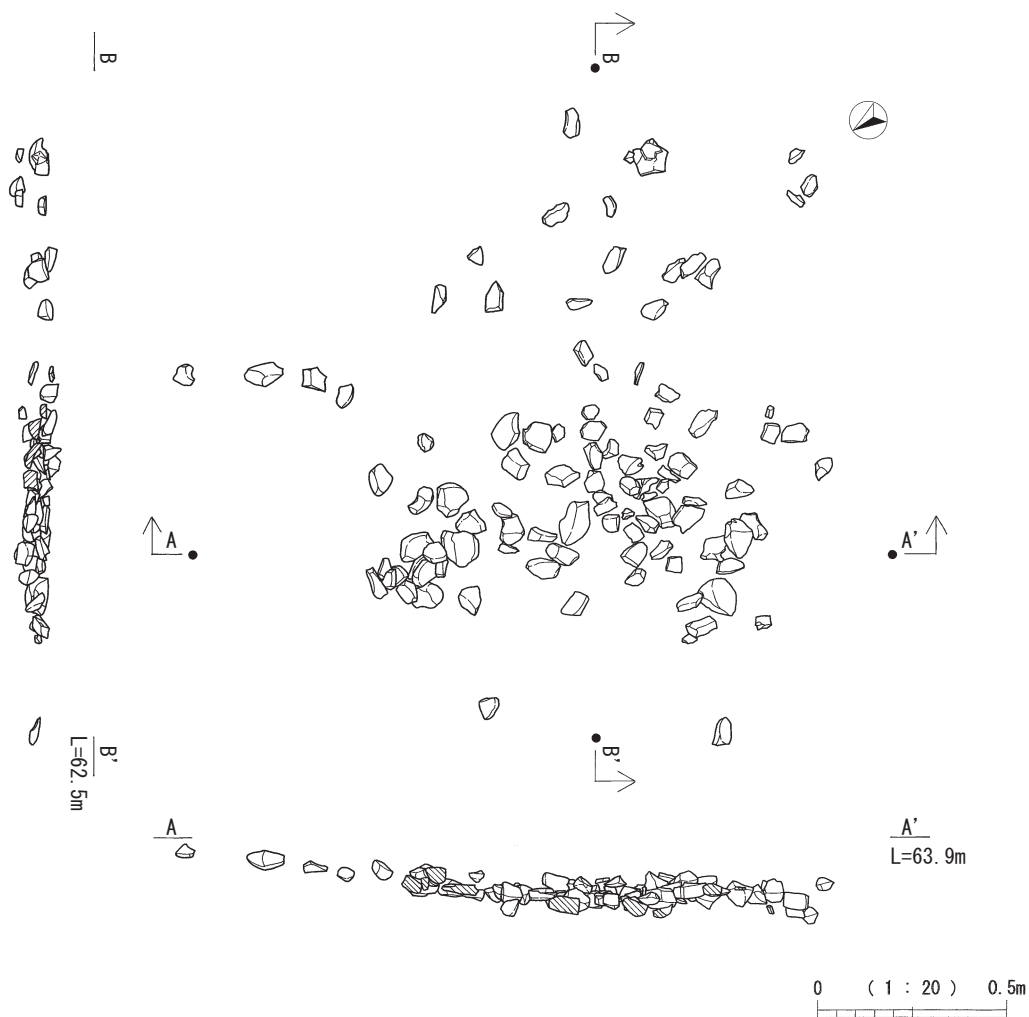
挿図 番号	掲載 番号	器種	部位	類別	出土区	遺構名	文様・器面調整等		色調				焼成	取上番号		
							外面	内面	外面	内面	石英	長石			燧石	他
162	367	深鉢	口縁	III d	D-2	SS36	貝殻刺突 キザミ・模貼付	ナデ	7.5YR6/4にぶい橙	10YR6/3にぶい黄橙	○	○		金雲母	良好	
169	368	深鉢	胴	VI b	F-6	SS41	貝殻刺突	ナデ	10YR5/4にぶい黄褐	10YR4/2灰黄褐	○	△	△	金雲母	良好	
	369	深鉢	底	XV	F-6	SS41	貝殻条痕	ナデ	7.5YR5/4にぶい褐	7.5YR5/4にぶい褐	○	○	○	金雲母	良好	
179	370	深鉢	胴	VI a	E-20	SS49	貝殻刺突	ナデ	2.5Y5/3黄褐	10YR6/4にぶい黄橙	○	○	○	金雲母	良好	20042 20043

SS50



第181图 集石50号・出土遺物

SS51



第182図 集石51号

第34表 集石 (VI層) 一覧表

挿図 番号	遺構名	検出区	検出層	タイプ	長軸 (m)	短軸 (m)	掘込	構成礫の内容数 (個)								一個あたり の重量(g)	備考
								総数	安山岩	砂岩	頁岩	花崗岩	凝灰岩	ホルン フェルス	軽石		
159	SS33	D-2	VI	I	2.23	1.62	無	39	—	—	—	—	—	—	—	367	
160	SS34	D-2	VI	III	1.20	0.73	有	83	—	—	—	—	—	—	—	144	
161	SS35	D-2	VI	II	0.43	0.38	無	14	12	2	0	0	0	0	0	175	
162	SS36	D-2	VI	III	1.70	1.56	有	71	—	—	—	—	—	—	—	246	
164	SS37	D-2・3	VI	III	1.26	1.07	有	70	68	1	0	0	0	0	1	333	
165	SS38	E-3	VI	I	0.56	0.49	無	7	5	0	0	1	0	0	1	459	
166	SS39	F-2・3	VI	II	2.57	2.05	無	69	—	—	—	—	—	—	—	150	
168	SS40	F-3	VI	I	0.88	0.71	無	13	12	1	0	0	0	0	0	286	
169	SS41	F-6	VI	III	0.70	0.70	有	37	14	4	0	0	7	12	0	593	
170	SS42	F-9	VI	II	0.67	0.53	無	16	13	0	0	0	3	0	0	648	
172	SS43	D-11	VI	I	0.49	0.25	無	8	5	1	0	0	1	0	0	196	
	SS44	B-12・13	VI	II	1.20	0.56	無	29	0	23	0	0	3	3	0	193	
173	SS45	C-13	VI	I	2.75	2.40	無	38	15	5	1	0	7	10	0	423	
175	SS46	D-15	VI	III	0.99	0.70	有	51	26	15	0	0	10	0	0	755	
178	SS47	C-18	VI	IV	0.33	0.32	無	5	2	2	0	0	1	0	0	3309	
	SS48	C-20	VI	I	1.58	0.85	無	12	1	3	6	0	1	1	0	188	
179	SS49	E-20	VI	I	1.07	0.71	無	10	6	2	0	0	0	1	1	409	
181	SS50	C-21	VI	I	2.14	0.59	無	12	7	5	0	0	0	0	0	440	
182	SS51	E・F-22	VI	II	1.73	1.68	無	100	15	63	18	1	3	0	0	119	

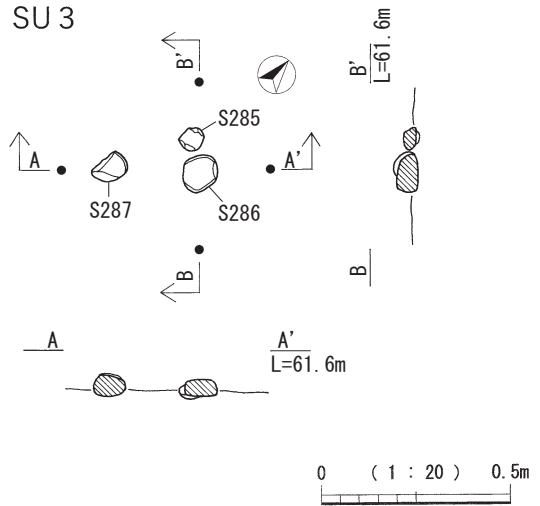
第35表 石器観察表 (集石VI層出土)

挿図 番号	掲載 番号	遺構 番号	取上番号	出土区	層	器種	分類	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	石材	石材 分類	備考
160	S251	SS34	SS102-66	D2	VI	磨敲石	-	80.0	53.0	34.0	188.10	砂岩	-	
	S252	SS34	SS102-21	D2	VI	磨石	-	87.0	54.0	24.0	160.00	安山岩	安山岩B	
	S253	SS34	SS102-42	D2	VI	磨敲石	-	50.0	45.0	31.0	96.20	凝灰岩	-	
161	S254	SS35	SS112-10	D2	VI	磨敲石	-	87.0	91.0	47.0	392.50	砂岩	-	
162	S255	SS36	SS100-62	D2	VI	磨敲石	-	96.0	94.0	45.0	473.50	安山岩	安山岩B	
163	S256	SS36	SS100-60	D2	VI	磨敲石	-	185.0	120.0	61.0	1410.00	凝灰岩	-	
165	S257	SS38	SS99-6	E3	VI	磨敲石	-	113.0	96.0	60.0	869.00	花崗岩	-	国見山系
	S258	SS38	SS99-4	E3	VI	軽石製品	-	48.5	20.0	15.0	3.24	軽石	-	珠形
167	S259	SS39	SS97-20	F2・3	VI	磨敲石	-	66.0	61.0	49.0	248.10	安山岩	安山岩B	
	S260	SS39	SS97-49	F2・3	VI	磨敲石	-	77.0	35.0	29.0	74.00	安山岩	安山岩B	
	S261	SS39	SS98-5	F2・3	VI	磨敲石	-	96.0	97.0	59.0	721.50	凝灰岩	-	
170	S262	SS42	44921	F9	VI	磨敲石	-	109.0	93.0	63.0	864.50	安山岩	安山岩B	
	S263	SS42	44922	F9	VI	磨敲石	-	111.0	94.0	51.0	594.50	凝灰岩	-	
171	S264	SS42	44920	F9	VI	磨敲石	-	114.0	91.0	57.0	791.00	安山岩	安山岩B	
	S265	SS42	44919	F9	VI	磨敲石	-	110.0	88.0	41.0	582.00	安山岩	安山岩B	
	S266	SS42	44923	F9	VI	磨敲石	-	75.0	71.0	68.0	532.50	安山岩	安山岩B	
172	S267	SS43	24994	D11	VI	磨敲石	-	86.0	70.5	46.0	321.00	凝灰岩	-	
	S268	SS44	22246	B13	VI	二次加工・使用痕剥片	-	79.0	65.5	17.0	54.60	ホルンフェルス	-	
174	S269	SS45	20294	C13	VI	磨敲石	-	109.0	82.0	66.0	818.00	安山岩	安山岩B	
176	S270	SS46	SS25-6	D15	VI	磨敲石	-	137.0	111.0	80.0	1696.00	安山岩	安山岩B	
	S271	SS46	SS25-34	D15	VI	磨敲石	-	120.0	100.0	46.0	792.80	安山岩	安山岩B	
	S272	SS46	SS25-7	D15	VI	磨敲石	-	112.0	107.0	54.0	885.50	凝灰岩	-	
177	S273	SS46	SS25-16	D15	VI	磨敲石	-	98.0	84.0	56.0	687.00	凝灰岩	-	
	S274	SS46	SS25-29	D15	VI	磨敲石	-	80.0	65.0	60.0	420.50	安山岩	安山岩B	
	S275	SS46	SS25-32	D15	VI	磨敲石	-	82.0	71.0	57.0	421.50	凝灰岩	-	
	S276	SS46	SS25-30	D15	VI	磨敲石	-	81.0	85.0	68.0	584.00	凝灰岩	-	
	S277	SS46	SS25-45	D15	VI	磨敲石	-	81.0	86.0	59.0	410.00	安山岩	安山岩B	
179	S278	SS49	20036	E20	VI	磨敲石	-	100.0	82.0	37.0	469.00	安山岩	安山岩B	
	S279	SS49	20039	E20	VI	磨敲石	-	101.0	72.0	62.0	542.00	安山岩	安山岩B	
	S280	SS49	20038	E20	VI	磨敲石	-	87.0	71.0	57.0	543.50	安山岩	安山岩B	
180	S281	SS49	20037	E20	VI	軽石製品	-	106.5	176.0	56.0	241.00	軽石	-	
181	S282	SS50	20051	C21	VI	磨敲石	-	121.0	80.0	44.0	588.50	安山岩	安山岩B	
	S283	SS50	20048	C21	VI	磨敲石	-	99.0	75.0	55.0	532.50	安山岩	安山岩B	
	S284	SS50	20049	C21	VI	石皿	-	78.0	68.0	45.0	261.00	砂岩	-	

(2) 石器集積 (第183 ~ 185図)

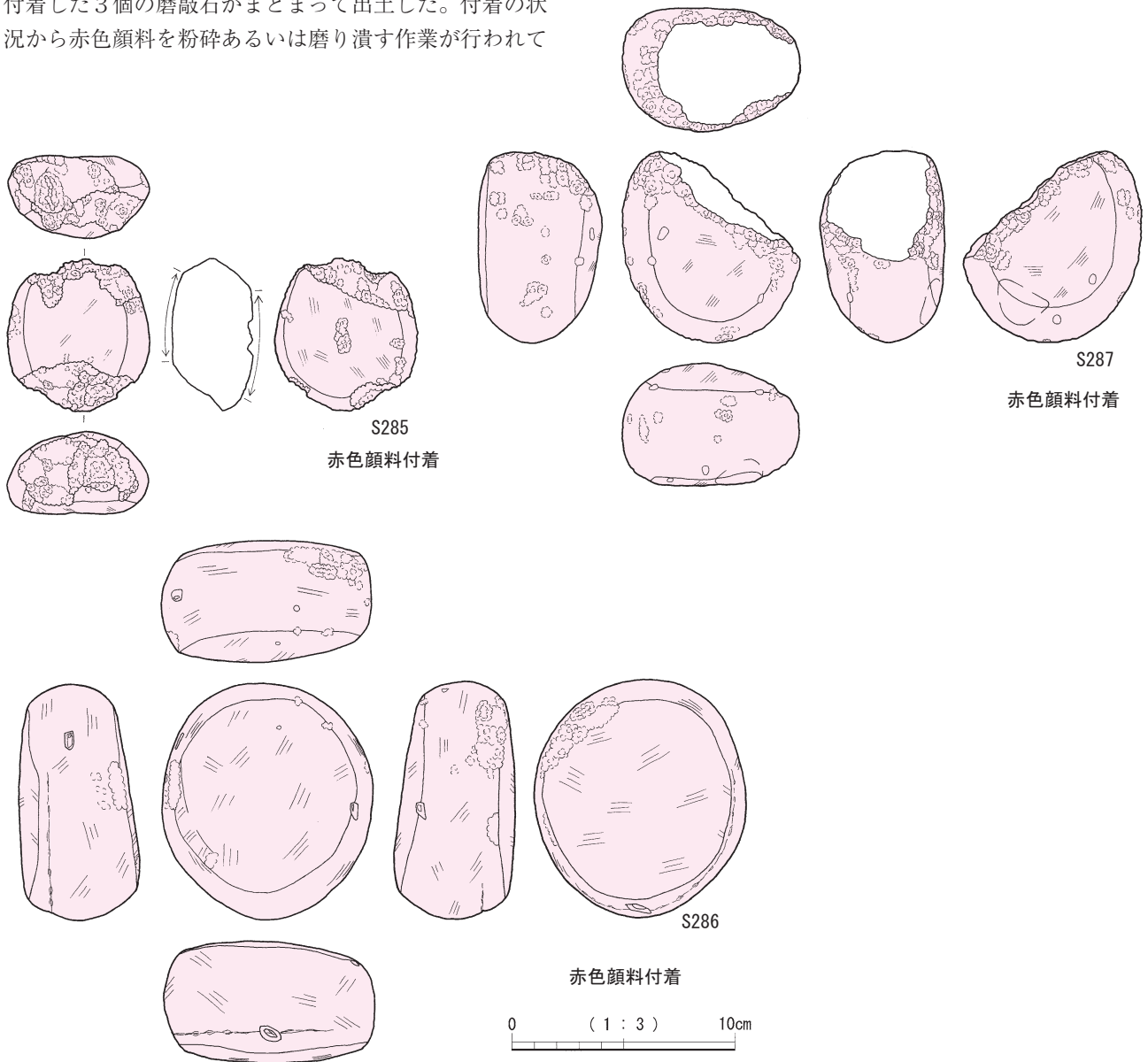
磨敲石器等の石器が集まっている遺構を、Ⅶ層同様に石器集積として取り扱った。

石器集積は、調査区西北部のⅥ層から、2基検出されている。西端の崖際に近く、周囲では集石が多数検出されており、生活の痕跡が色濃いエリアである。それらの構成礫には非常によく使用されているものが多く、当時としては希少であったと思われる国見山系の花崗岩を素材としたものや、赤色顔料が付着したものなど特殊性の高いものが出土している。



石器集積3号 (第183図)

調査区西端のE-3区Ⅵ層上面の、微高地の頂部近くで検出した。周囲はほぼ平坦な地形である。赤色顔料が付着した3個の磨敲石がまとめて出土した。付着の状況から赤色顔料を粉砕あるいは磨り潰す作業が行われて



第183図 石器集積3号・出土遺物

いた場所が近かった可能性が考えられる。

S285～S287は安山岩製の磨敲石であり、S285・S287は多孔質な石材である。

S285は小型で、上面・下面はともによく使用されており、赤色顔料が付着する。裏面は強く磨られる。

S286は石罅型の形状で、全面的によく磨られている。赤色顔料の付着は側面部分に多く確認できる。下面・左側面・右側面の3ヶ所に穿孔している可能性がある。

S287は上面が欠損している。敲打の繰り返しによるものと考えられる。所々に赤色顔料の付着が確認できる。

遺物とその周辺に被熱の痕跡は見られない。

石器集積4号(第184・185図)

調査区西端のG-3区VI層で検出した。ほぼ平坦な場所に位置する。周辺では集石40号が検出されている。約100×75cmの範囲に6個の磨石・敲石と4個の礫が集中

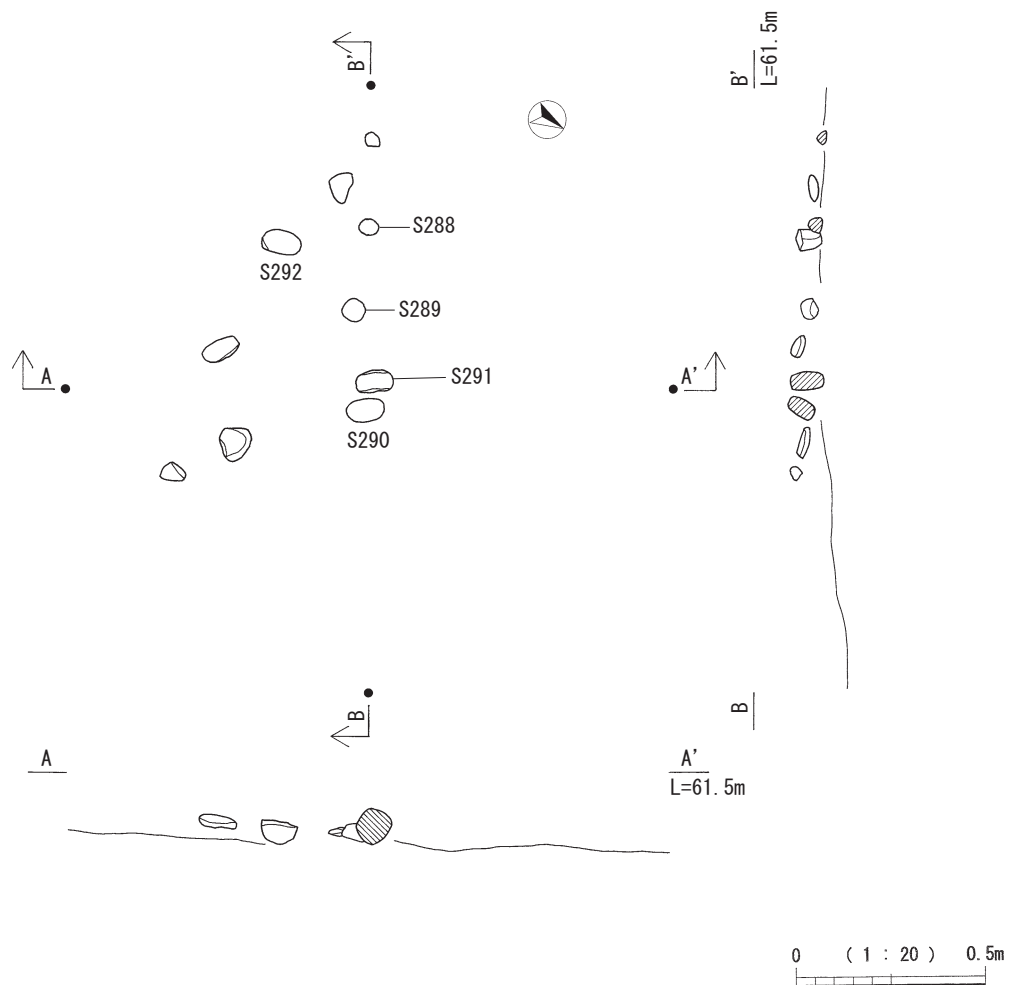
して出土しており、そのうち5点を図化した。

S288～S290は安山岩製である。S288は小型の磨石である。磨面は部分的に強いが使用頻度は少ないものと考えられる。S289は円形の磨敲石であったものが最大径の部分で割れた後、割れ口をハンマー様に使用しているものである。割れ口には煤が付着している。S290は楕円形の磨敲石であり、特に裏面を強く磨って使用している。

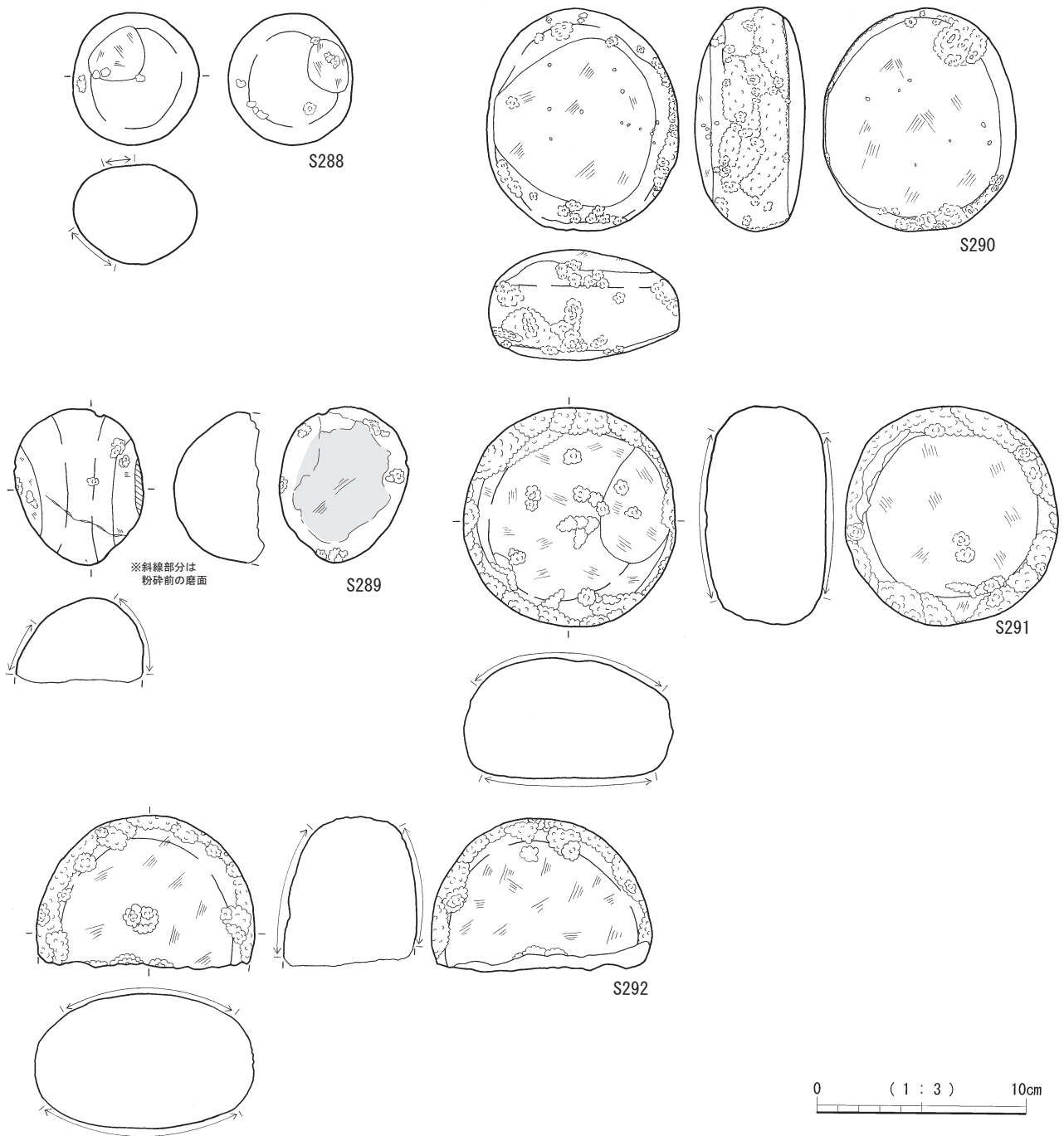
S291・S292は国見山系の花崗岩製の磨敲石である。共に石罅形の形状で、側面を一周敲打し正面・裏面を強く磨っている。S292は約半分が残存し、割れ口の縁の部分に敲打痕が確認できることから割れた後もさらに敲打具として使用した状況が伺える。人為的に半裁している可能性もある。

S289・S290にのみ若干の被熱の痕跡が確認できる。

SU 4



第184図 石器集積4号



第185図 石器集積4号出土遺物

第36表 石器観察表 (石器集積VI層出土)

挿図 番号	掲載 番号	遺構名	取上 番号	出土区	層	器種	分類	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	石材	石材 分類	備考
183	S285	SU3	IBS18-3	E3	VI	磨敲石	-	67.0	63.0	36.0	188.10	安山岩	安山岩B	赤色顔料付着
	S286	SU3	IBS18-2	E3	VI	磨敲石	-	105.0	94.0	54.0	829.50	安山岩	安山岩B	赤色顔料付着
	S287	SU3	IBS18-1	E3	VI	磨敲石	-	85.0	79.0	55.0	417.00	安山岩	安山岩B	赤色顔料付着
185	S288	SU4	IBS17-3	G3	VI	磨石	-	63.0	59.0	47.0	245.00	安山岩	安山岩B	
	S289	SU4	IBS17-2	G3	VI	磨敲石	-	75.0	60.0	42.0	231.20	安山岩	安山岩B	
	S290	SU4	IBS17-8	G3	VI	磨敲石	-	105.0	90.0	52.0	784.30	安山岩	安山岩B	
	S291	SU4	IBS17-1	G3	VI	磨敲石	-	104.0	100.0	58.0	922.00	花崗岩	-	国見山系
	S292	SU4	IBS17-5	G3	VI	磨敲石	-	73.0	105.0	63.0	720.50	花崗岩	-	国見山系

5 VI層の遺物

(1) 土器 (第186～189図)

小牧遺跡VI層出土の縄文早期土器は、アカホヤ火山灰層の下より出土する。遺構と同様、出土数が非常に少ない。

VII層土器との重複をさけるため、土器については分類を通し番号で行った。X類からXIII類までがVI層出土の土器である。出土層の異なる土器片もあるが、同一個体がVI層から出土していること、また土器形式からVI層に掲載した。

XI類はVII層からVI層までの分類できなかった土器の底部を掲載した。

X類土器 (第187図371～373)

X類土器は、口縁部が大きく外反し、頸部でくびれ、胴部は「く」字状に屈曲する。ネガティブな押型文を施す土器である。

371は、口縁部で、大きく開いた口縁部から胴部にかけて、方形の文様を施文する。施文が浅いため、文様のはっきりとしない。口縁部内面も同様の施文を行う。器壁は薄く、色調はにぶい黄橙色である。焼成は良好である。口縁部から胴部にかけてのくびれ部分に、煤が認められる。VII層で出土しているが、372と373と同一個体と推測し、ここで掲載した。

XI類土器 (第187図374～380)

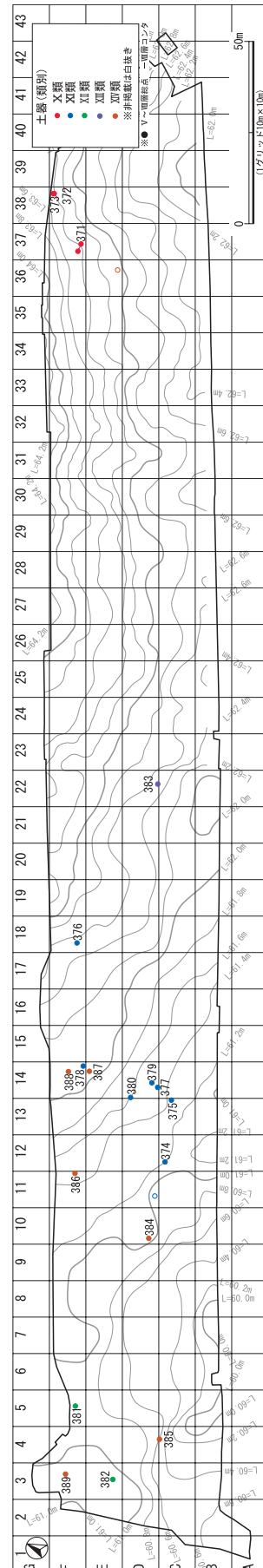
XI類は、口縁部が「く」字状に開きながら外反し、4ヶ所のピークを持つ山形口縁を呈する。胴部はやや膨らみを持つ。口唇部は舌状を呈し、キザミを施す。口縁部を肥厚させ、沈線文と連点文を組み合わせる。胴部は結節縄文が特徴である。

374～380は口縁部と胴部である。374は波状口縁で、口縁部に粘土を貼り付けて肥厚させ、口縁部には斜位の沈線を施す。口縁部下端には、短沈線を施す。胎土に金雲母が認められる。375は、肥厚させて口縁部に弧状の沈線を施し、その下位に連点文を巡らせる。376・377は肥厚した口縁部片である。口縁部には沈線が施され、その端部にはキザミが施されている。胎土に金雲母が確認される。378・379は胴部片で、沈線文を挟むように連点文が施される。胎土に金雲母が確認される。380は胴部片で、結節縄文が施されている。

XII類土器 (第187図381・382)

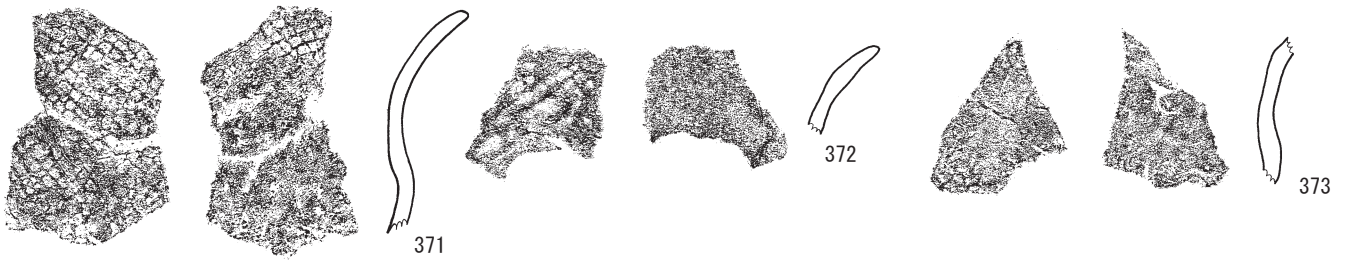
XII類土器は、緩やかに開く胴部を持つ。本遺跡では出土していないが、口縁部はラップ状に開く特徴がある。底部は上げ底気味になるのが一般的である。XII類土器は、2点のみ出土した。

381・382は胴部片で、381は沈線区画の中に捺糸文を

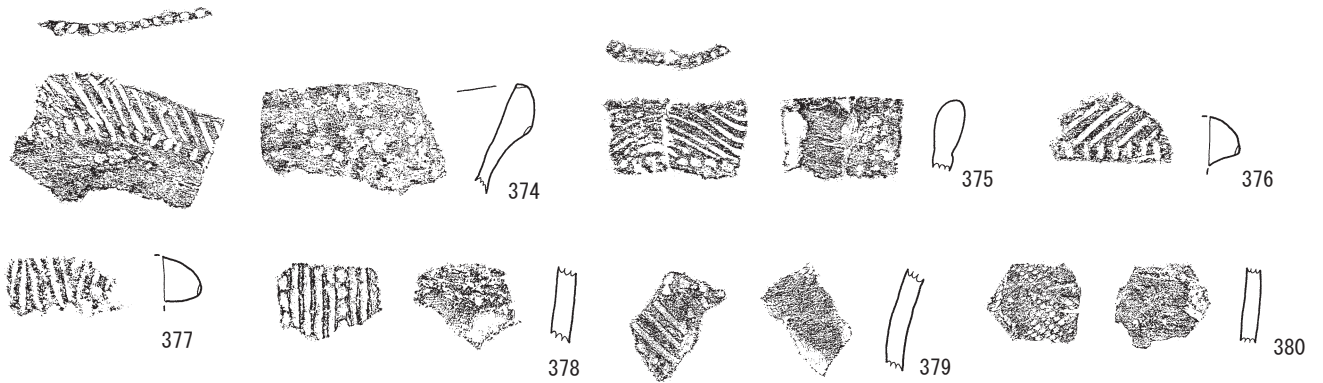


第186図 X～XII類土器分布図

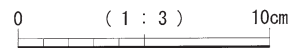
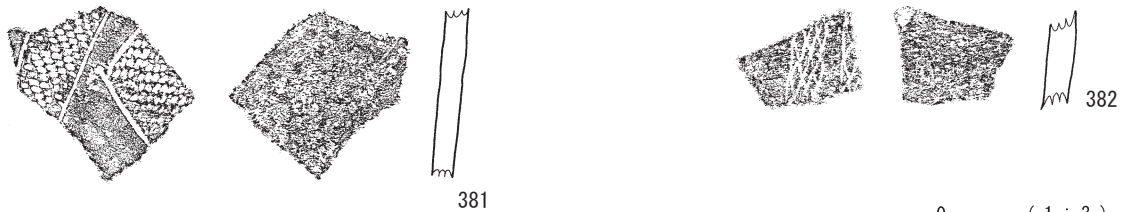
X類



XI類



XII類



第187図 X～XII類土器

施す。382は、編目撚糸文を施す。

XIII類土器 (第188図383)

383は、口縁部は直行するが、胴部でやや膨らみ、小さな平底の底部へ曲線的に至る土器である。D-22区より完形品で1点だけ出土した。轟式土器との類似性も推測されるが、アカホヤ火山灰層の下層から出土しているため、早期の土器として掲載した。

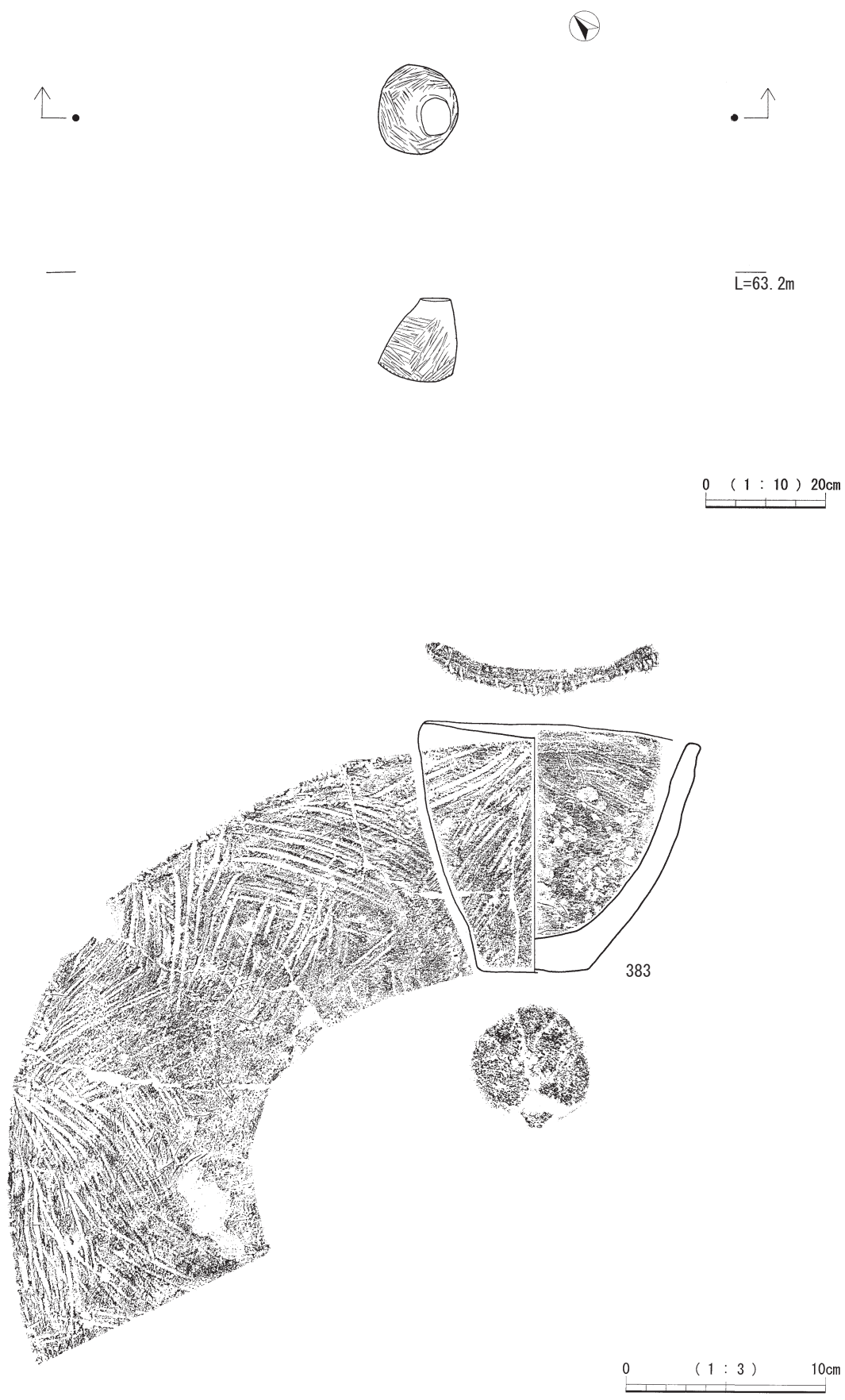
平坦な口唇端部にはキザミを施す。わずかに波状口縁を呈すると思われるが、やや不明瞭であり、また、3つの波頂部を有する可能性もある。文様は、口縁部から胴部にかけて斜位の貝殻条痕文を施し、これらの組み合わせ

せは綾杉状を呈するが、条痕は2本1組程度であり、V類土器とは異なる。内面は丁寧なナデが施される。内面には黒色を呈する痘痕状の剥落が認められ、土器使用時の痕跡である可能性も考えられる。

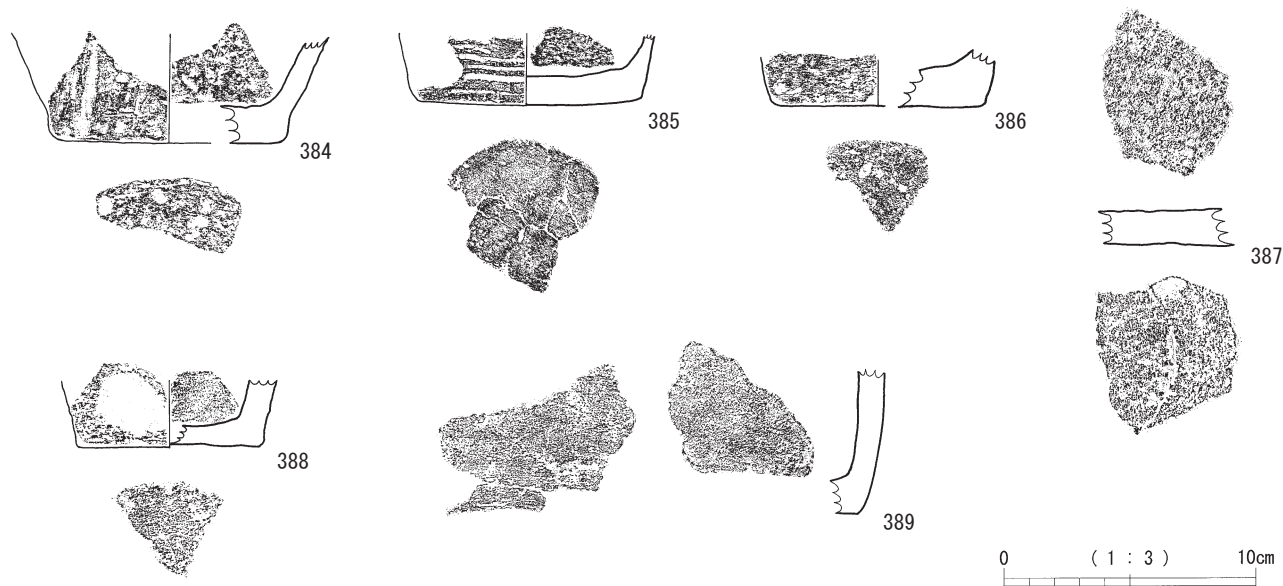
XIV類土器 (第189図384～389)

XIV類は、VIII・VII層～VI層出土の分類不明な底部を一括して掲載した。

384は、平底の底部で、外傾しながら立ち上がる。胴部下位にはヘラ状工具による条痕が確認できる。386は平底の底部で、圧痕が確認される。



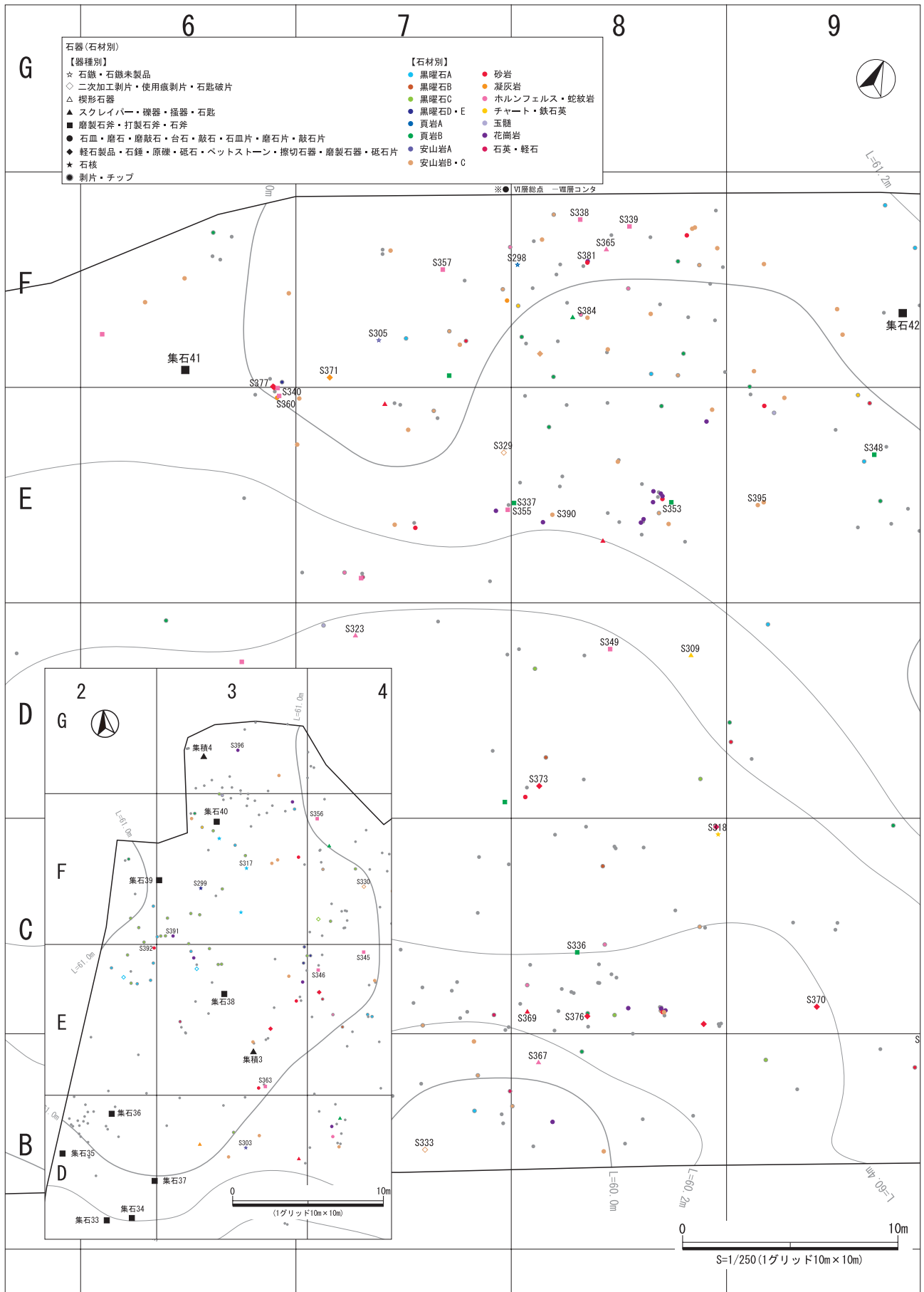
第188図 Ⅲ類土器



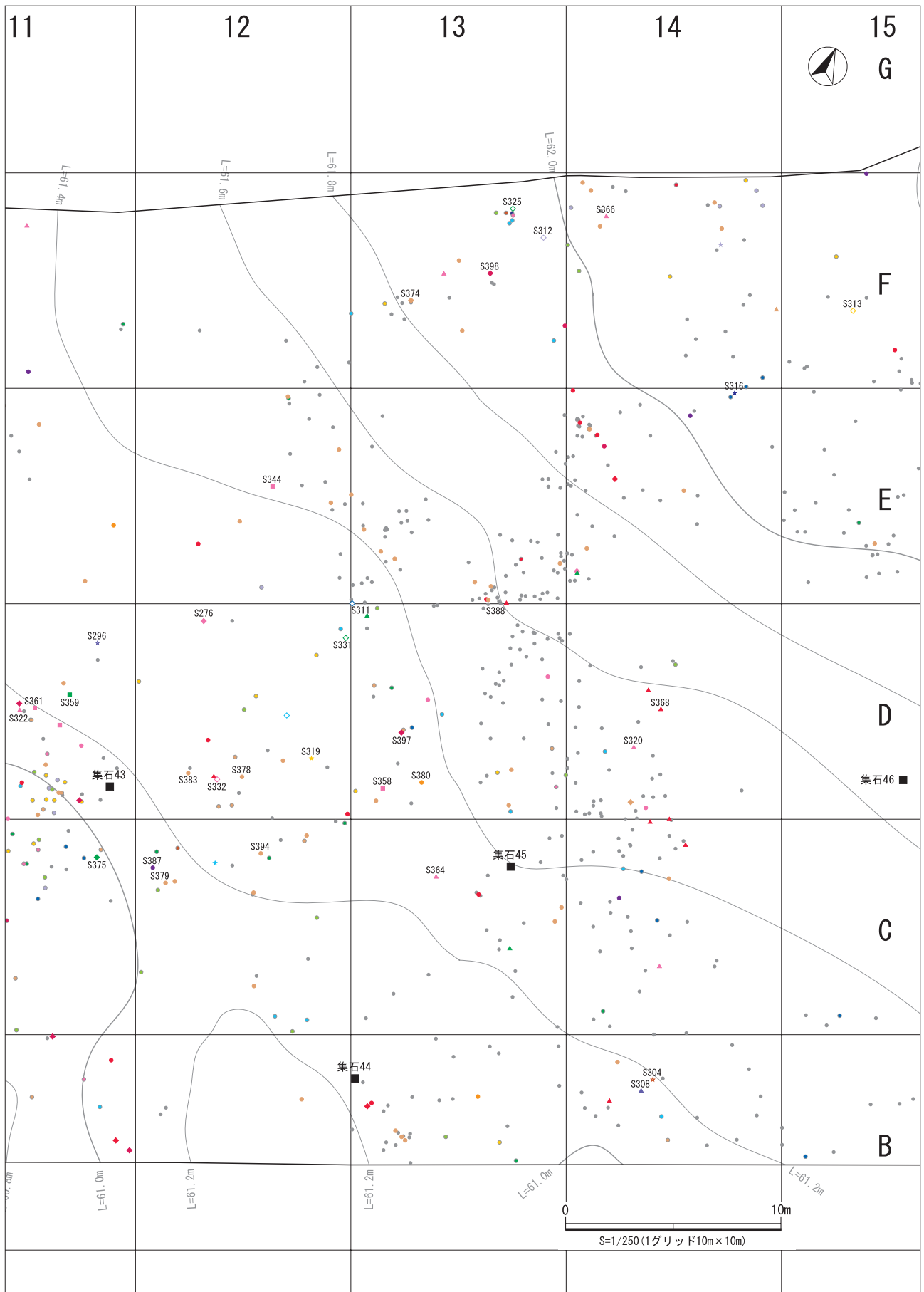
第189図 XIV類土器

第37表 土器観察表 (X~XIV類)

挿図 番号	掲載 番号	器種	部位	類別	出土区	層	文様・器面調整等		色調		胎土				焼成	取上番号
							外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃石	他		
187	371	深鉢	口縁	X	F37	VIIa	ナデ, 方形押型	ナデ	10YR7/3にぶい黄橙	10YR5/1褐灰	○	○	○	金雲母	良好	104935, 104932
	372	深鉢	口縁	X	F38	VI	ナデ	ナデ	10YR7/3にぶい黄橙	10YR6/3にぶい黄橙	○	○			良好	101944
	373	深鉢	胴	X	F38	VI	ナデ	ナデ	10YR6/3にぶい黄橙	10YR7/3にぶい黄橙	○	○	○		良好	101943
	374	深鉢	口縁	XI	C12	VI	沈線, ナデ	ナデ	5YR5/4にぶい赤褐色	5YR6/4にぶい橙色		△		金雲母, 白粒	良好	25140
	375	深鉢	口縁	XI	C13	VI Wa	沈線, 連点文	ナデ	5YR5/4にぶい赤褐色	5YR6/4にぶい橙色	△	△		金雲母, 白粒	良好	16214, 20087
	376	深鉢	口縁	XI	F18	VI	沈線	ナデ	25YR6/6橙色	25YR6/6橙色	△			金雲母, 白粒	良好	17392
	377	深鉢	口縁	XI	D14	VI	沈線	ナデ	25YR6/6橙色	25YR6/6橙色	△	△		金雲母, 白粒	良好	16709
	378	深鉢	胴	XI	F14	VI	沈線, 連点文	ナデ	10YR5/4にぶい黄褐	7.5YR5/2灰褐	△	△		金雲母, 白粒	良好	16248
	379	深鉢	胴	XI	D14	VI	沈線, 連点文	ナデ	10YR5/4にぶい黄褐	5YR5/6明赤褐		△		金雲母	良好	16728
	380	深鉢	口縁	XI	D14	VI	ナデ, 結節縄文	ナデ	25YR5/4にぶい赤褐色	25YR5/4にぶい赤褐色	△			金雲母	良好	16692
	381	深鉢	胴	XII	F5	IVb	沈線, 撚糸	ナデ	5YR5/4にぶい赤褐	5YR5/4にぶい赤褐	◎		○		良好	45772
382	深鉢	胴	XII	E3	VII	ナデ, 撚糸	ナデ	10R6/4にぶい赤褐色	7.5YR6/4にぶい橙色	○	△			良好	52659	
188	383	深鉢	完形	XIII	D22	VI	貝殻条痕	ナデ	7.5YR7/4にぶい橙色	7.5YR7/3にぶい橙色	△	△		白粒	良好	19800
189	384	深鉢	底	XIV	D10	VIII	工具ナデ	ナデ	10YR7/4にぶい黄橙	10YR7/4にぶい黄橙	○	△			良好	54993
	385	深鉢	底	XIV	C4	VII	条痕	ナデ	10YR6/3にぶい黄橙	10YR6/4にぶい黄橙	△			金雲母	良好	51577
	386	深鉢	底	XIV	F11	VII	ナデ	ナデ	10YR6/4にぶい黄橙	10YR6/4にぶい黄橙	○		○	黒雲母, 白粒	良好	14298
	387	深鉢	底	XIV	E14	VI	ナデ	ナデ	7.5YR5/4にぶい褐	7.5YR6/6橙	○	○		金雲母, 白粒	良好	17202
	388	深鉢	底	XIV	F14	VI	条痕	ナデ	10YR7/6明黄褐	7.5YR7/6橙	△	○		白粒	良好	24963
	389	深鉢	底	XIV	F3	VII	ナデ	ナデ	7.5YR5/4にぶい褐	10YR5/3にぶい黄褐	△	△		金雲母, 白粒	良好	53099



第190図 VI層石器出土状況図(1)



第191図 VI層石器出土状況図(2)

(2) VI層出土石器(第193～205図 S293～S398)

VI層からは、総数714点出土しており、石材および器種分類はP239第40表に示している。器種ごとの出土点数は、石鏃18点(未製品1点を含む)、小型で精製のスクレイパー1点、大型で粗製のスクレイパー4点、石匙2点、楔形石器1点、二次加工や使用痕跡のある剥片21点(うち黒曜石・チャート製などの小型のもの11点、頁岩B類・安山岩C類製などの大型のもの10点)、磨製石斧18点、打製石斧22点、礫器35点、石錘8点、磨敲系石器269点、砥石11点、擦切石器1点、石核(残核を含む)8点、軽石加工品4点である。

S293からS306は石鏃である。S293～S298は平基か挟りが浅いタイプである。S293は黒曜石C類製の浅い挟りの正三角形鏃である。S294は黒曜石C類製の平基の正三角形鏃で先端部を欠損する。S295は頁岩B類製のごく浅い挟りの二等辺三角形鏃である。S293～S295の側辺部は直線的である。S296は安山岩A類製の挟りの浅い二等辺三角形鏃で、側縁部が外湾し、先端部を欠損する。S297・S298は挟りがやや深く側辺部が直線的である。S297は黒曜石C類製の二等辺三角形鏃で、S298は頁岩A類製の石鏃であり、右脚部と先端部を欠損している。

S299・S300は浅い挟りをもつ長形の石鏃である。S299は黒曜石E類製で正面・背面に剥離面を残し、厚みがある。側縁部はやや外湾する。先端部の一部には調整剥離を施さない。形状は整っているが未製品である可能性もある。S300は玉髓製で側縁部は大きく外湾し先端部は鋭く尖る。最大径を同部下位に持つもので、「大久保型石鏃」または「帖地型石鏃」と呼称されているのである(1997.渡邊, 1999.永野, 2004.相美)。

S301・S302は山形に挟りが入る石鏃で、側辺部は直線的である。外形は正三角形である。S301は安山岩A類製で基部は丸い。S302は黒曜石B類製で左脚部を欠損する。基部は先細りながら外側に大きく開く。

S303・S304は長形で挟りは深い。ハの字状に開いた脚で、脚端部は矩形で斜行する。S303は安山岩A類製で先端部を欠損する。S304は黒曜石B類製で右脚部を欠損する。大型である。

S305・S306は欠損により基部形態は不明である。S305は安山岩A類製で、大型で縦長の形態であることが想定できる。S306は頁岩A類製で長身の磨製石鏃であり、先端部も欠損する。

S307・S308は石匙である。S307は灰色のチャート製で縦型のものである。剥片の打点近くに挟りを入れてつまみ部をつくり、右側面には刃部を形成する。先端部は両面からの調整剥離により尖る。S308は安山岩A類製で横長の剥片の上部に浅い挟りを入れることで幅広のつまみ部を形成し、下縁に刃部を形成する。

S309～S315は二次加工や使用痕のある剥片で緻密な素材を使用した小型の石器である。

S309～S313は主に下縁に二次加工が施されるものである。S309は赤色のチャート製で下面に刃部を形成する。搔器の可能性はある。先端部は細やかな調整剥離により尖り、石鏃の未製品の可能性もある。S310は針尾産の特徴を持つ黒曜石D類製で、剥片の上面・下面に階段状の剥離がみられるものである。楔形石器として使用された可能性があるがその使用頻度は少ない。正面には自然面を残す。S311は頁岩A類製で左側面を欠損しており、上縁・下縁の表裏に緻密な加工が施される。左側を欠損する。下縁は刃部を形成しており石匙の破片である可能性も考えられる。S312は玉髓製で下面・右側面に細やかな調整剥離が施される。左側を欠損する。断面形態から下面に刃部を形成して削器として使用した可能性が推測できる。S313は緑色のチャート製で、下面に微細な調整剥離が施される。

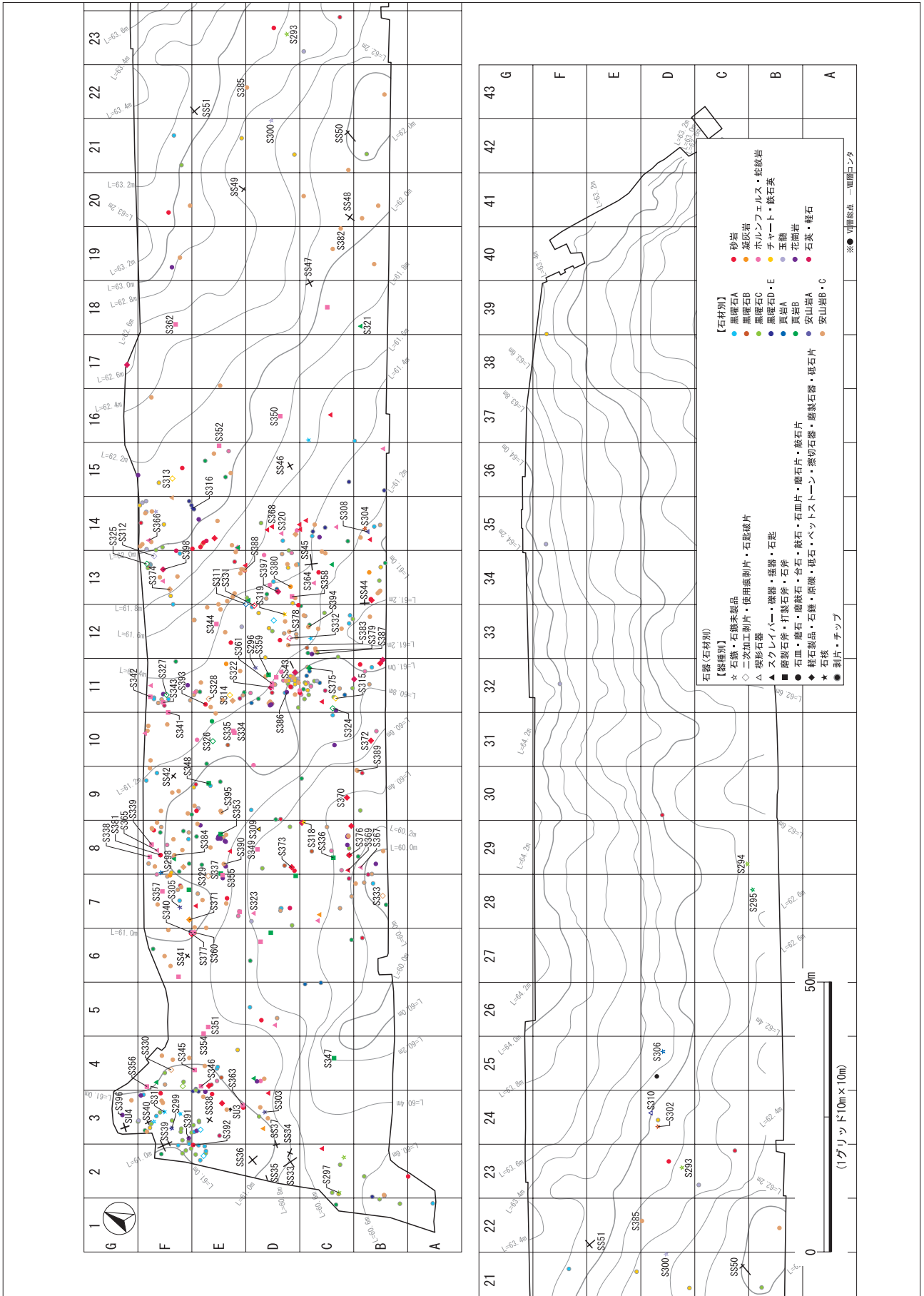
S314・S315は灰色のチャート製で主に側面に加工が施されるものである。S314は左側辺が微細な剥離痕と共に大きく挟れている。S315は左側辺に調整剥離が施される。

S316～S319は残核と考えられる。S316・S317は打面転移を繰り返し行っている。S316は黒曜石E類製で、S317は黒曜石A類製である。S318・S319は横方向の剥離の後に縦方向に連続して剥離を施しており、打面が水平に揃う。S318の正面と右側面には微細な剥離が連続して施されており、二次加工の痕跡がみられる。共にチャート製で、S318は緑色、S319は灰色である。

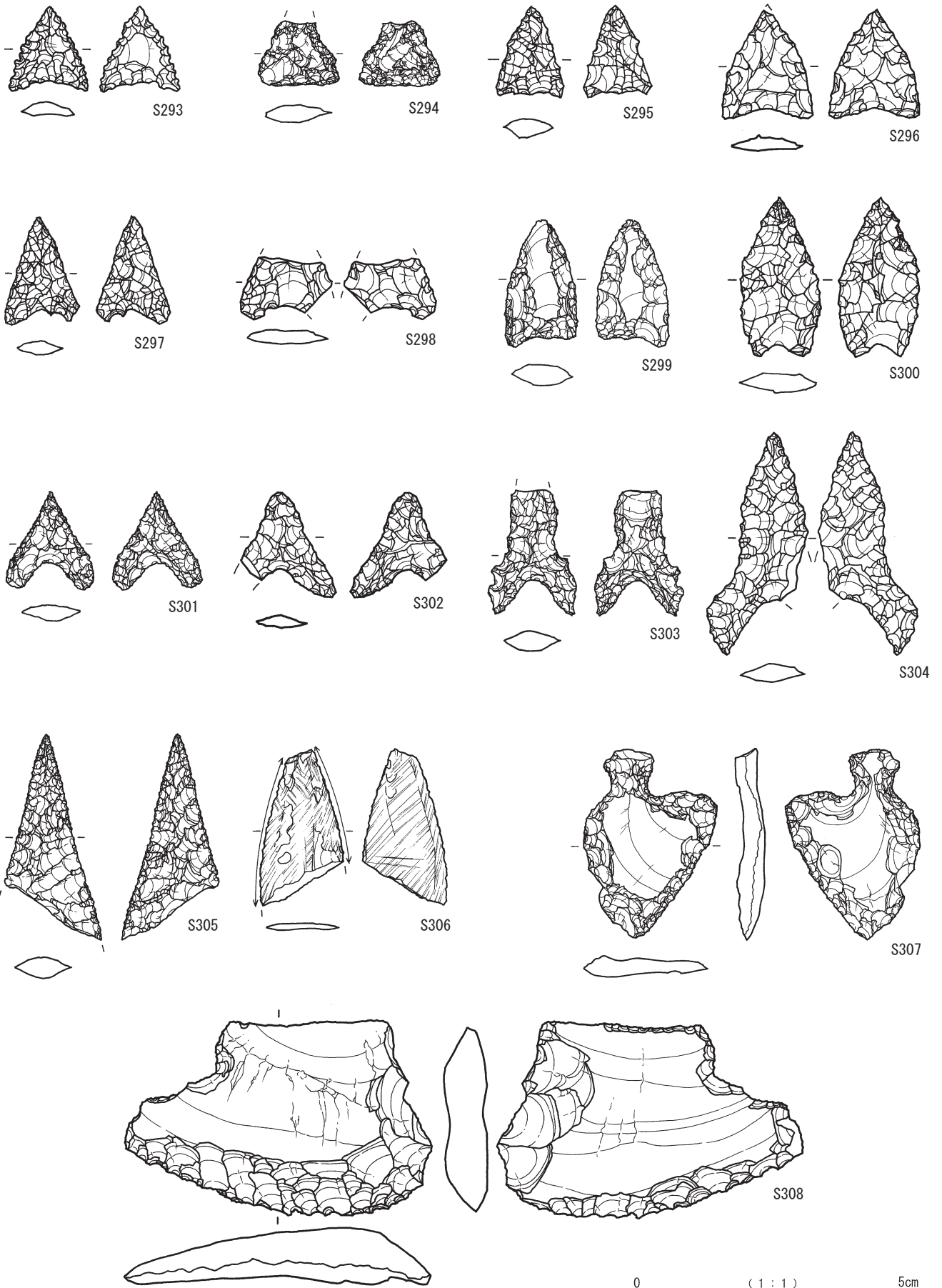
S320～S323は粗製のスクレイパーであり、横長の剥片の主に下縁に明瞭な刃部を形成している。S321は頁岩B類製で、ほかの3点はホルンフェルス製である。S320とS321は上辺にも二次加工が加えられている。

S324～S333は二次加工・使用痕のある剥片のうち粗製の大型品である。S324～S327は頁岩B類製で、鉄分が付着した素材を使用している。S328～S330、S333は安山岩C類製である。S326・S329・S333にはノZZ状の挟れがあり、縦長の形状のS328の両側辺には摩耗が生じている。S333は下面に二次加工が施されている。S331は砂岩製、S332はホルンフェルス製でありともに母岩から薄く剥ぎ取った自然面を残す剥片の下辺を使用したものである。スクレイパーや礫器と素材は共通するが、計画的な剥離による刃部の形成がみられないことから使用痕のある剥片とした。

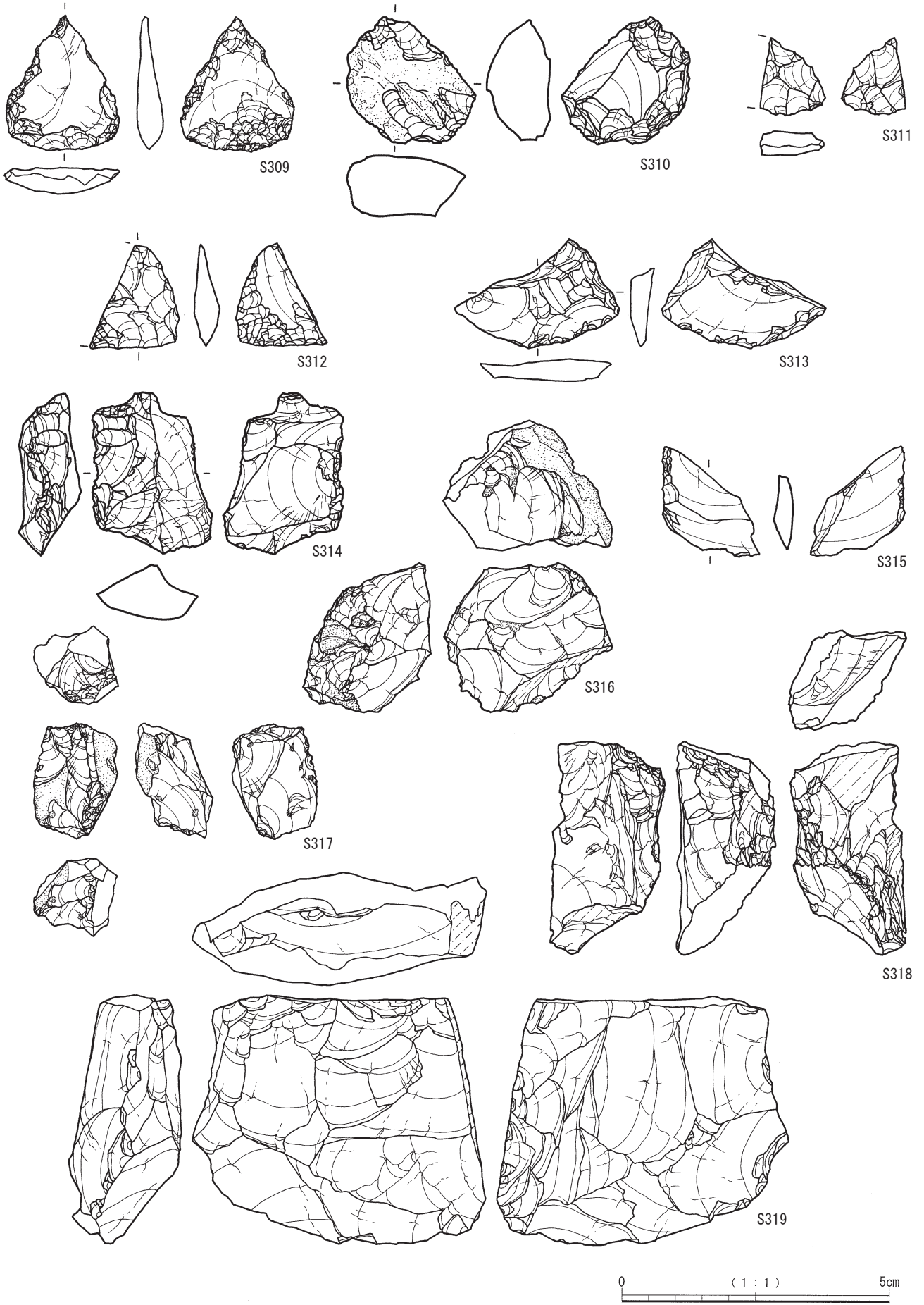
S334～S338はI-a類の磨製石斧である。S334・S335は蛇紋岩製で同一個体である。基部と刃部をそれぞれに敲打具として再利用している。欠損部を丁寧に打ち搔いて再成形している。E-10区のVI・VII層に分かれて出土しているが上層のVI層帰属として掲載した。



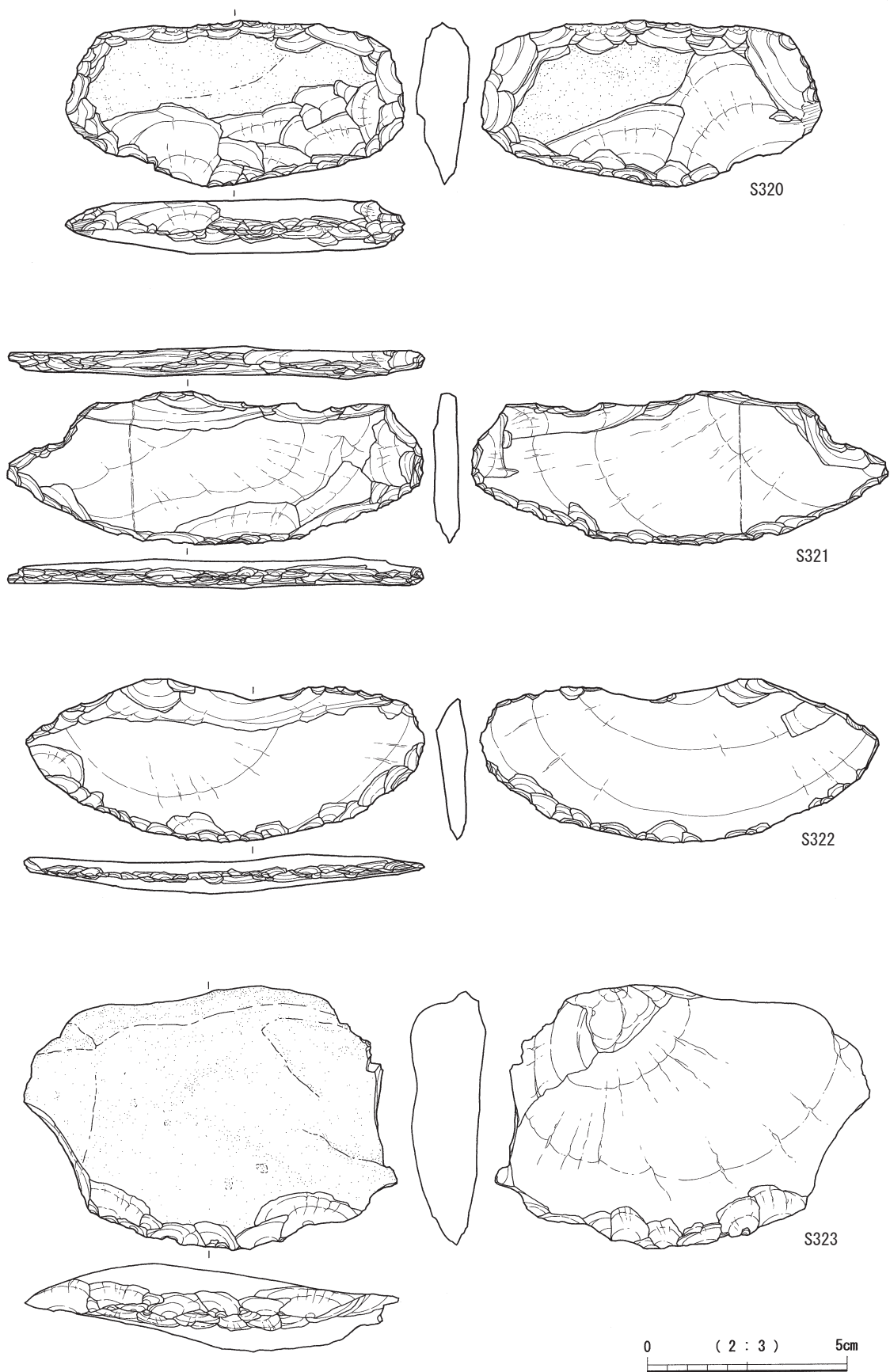
第192図 VII層石器出土状況図



第193图 VI层出土石器(1)



第194图 VI層出土石器(2)



第195图 VI层出土石器(3)